

---

# GS和樹極楽大作戦!!

凄い腹筋の蛇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GS和樹極楽大作戦！！

### 【Nコード】

N2981T

### 【作者名】

凄い腹筋の蛇

### 【あらすじ】

神魔の戦いに巻き込まれ、多くを失い、命を落とした横島。そんな彼が最高指導者たちによって送られた先は、過去の世界だった。しかし、そこは彼の知っている世界とは少し違っているようだ。テンプレ的な逆行系オリ主化横島と、原作に準じた横島が共存する再構成ものです。私なりのアレンジを加えた奇妙なGS世界を作って行きたいと思います。いろいろ矛盾点があると思いますが、それを許容出来る方だけお読み下さい。

9月17日、本作を完結しました。応援して下さいた方、ありがとうございました。続編はいつか、別枠で書いて行けたらいいかな、と思っています。

## 序章 はじまりのはなし

巻き上がる砂塵の中、男は一人佇んでいた。身体には無数の傷と、乾いてこびりついた血。喜怒哀楽を忘れた瞳には、何も映っていない。

そこには、小さい村があった。

男の家族がいた。

幸せな生活があった。

しかし今ではその名残すらない。

『横つち、もうええやろ。もう、充分殺したやろ。』

『もはや、貴方を殺そうとする過激派勢力は居ません。もう、休んでいいんですよ。』

男の頭上に、複数の翼を生やした神が現れ声をかけてくる。振り返ると、神族と魔族の二大勢力を束ねる二柱の神々の姿。

『…いないんすよ、みんな…。どこ、行ったんだろう…。』

『横つち…。』

『皆、向こうで待ってますよ。貴方も、一緒に行きましょう。』

その言葉を聞いて、男は胸に手を当てる。鼓動はとうに止まっていた。

「そっか。じゃあ、行かなきゃな。けど、どうしよう。足、動かね

えよ。」

黒く変色した足は所々肉が削ぎ落とされていて、見るに耐えない。

『しゃあないな、ほな肩かそか。』

『では、こちらは私が。』

二人に担がれ、男はゆっくりと地上を離れる。その光景を遠くから見守る人々。神族、魔族、妖怪、人間…全ての人々が厳粛に見送る。アシユタロス事変をきっかけに引き起こされた神魔の内乱を食い止めた英雄。その魂が、救われるように祈っていた。

「なあ、俺、今度は静かに暮らしてえよ。皆と、ルシ…オラ、と…」

朦朧とした意識の中、呟く。

『勿論や。皆、一緒やで。心配する事あらへん。』

『今度こそ、幸せになりましょう。』

その言葉を聞いて、男は少し口元を曲げると満足そうに目蓋を閉じた。

空が眩いばかりの光を放つ。男はゆっくりとその光に包まれ、そして、この世界から消えて行った。

男の名は、横島忠夫。魔族に恋をし、神に愛され、妖を守り、人に裏切られた英雄である。

## 序

【横島？】

何故、生きているのだろうか。

目を覚ましてから、まず最初に抱いた疑問だった。 真っ暗な部屋、天井はやけに広く無機質だ。

ここ、何処だ？

二つ目の疑問。 起き上がると、身体に不快感。 酷い寝汗だ。 だるい。 風邪だろうか。 ベッドを降りる。 空気が冷たい。 見渡すと、自分の寝ていたベッドと同じものが幾つもある。

病院か。

霊安室？まさか。 あの戦いで死んだのなら肉片一つ残っていないハズだ。

そこで、初めて自分の身体を見た。

「は？」 思わず出る声。

人の身体だった。 魔族であるルシオラと融合して魔族化してからは、皮膚は紫に近い色をしていたハズだ。 しかし今の身体は間違いなく元の肌色。 角もない。 龍神である小竜姫をその身に取り込んでからは生えていたハズなのだが、今は痕跡すらない。 第一…

「俺、こんなに小さかったか？」

視点が低い。自分は今、どうなっているのか。そう思って視線を横にずらす。そこには大きな窓ガラスがあり…

「え…ルシオラ？いや…小竜姫？」

どこかで見たような、そうでないような顔が映っていた。

カツツ、カツツ、

不意に、部屋の外から靴音が。見回りの看護婦のようだ。ガラツと音が鳴り、人影が現れる。

「あら、起きてたの？」

「寝汗が気持ち悪くて。すみません。」

緊張して答えると、看護婦は柔らかく微笑みながら「着替えを持って来るわ。」と言って出て行った。

さて、現状確認。

どうやらここは病院らしい。パッと見た限り四人部屋だが自分以外に患者はいないようだ。そして身体。顔はどう見てもあの二人の面影がある。身体は間違いなく男。もし女だったら発狂しているだろう。

「あっ！」慌てて確認。

ブウウウンツツ

サイキックソーサー、霊波刀、文珠をスムーズに展開する。良かった、霊力には変わりはないようだ。早速文珠を使って体力を回復する。

『癒』

文珠は淡く光る。光は身体を包み込み、染み込むように消えて行く。途端に、身体のだるさが消えた。

ガラッ

「おまたせ、着替え持ってきたわよ。着替えたら、また寝なさいね。夜中の3時なんだから。」

「ありがとうございます。」

「布団、大丈夫？」

「はい、濡れたのは寝間着だけっぽいです。」

「そっか。じゃあ、お休みなさい。」

そう言って、看護婦は出て行った。

ふう、と溜め息をつく。

どうやら自分はまた妙な事に巻き込まれたようだ。とりあえずは安全らしいので、眠れるうちに眠ってしまおう。

ベッドに入って、目蓋を閉じる。



不思議なくらいすぐに睡魔がやってきた。

『ハイ横うち。』

「また陽気な登場だな、オイ。』

夢の中、見慣れたお偉いさんが現れる。

『どや、気に入ってくれたか？あんさんの新しい人生のスタートや。』

「はあ？」首を傾げる。

『まあいきなり言われても分からんやろな。ええか、ここは過去の世界や。横うちには別の人物として人生やり直してもらおうか思ってるん。』

「過去…。」

『ちょうどあんさんが中学三年くらいの頃やな。その身体も、同じくらいや。』

「あ、そうだ身体！なんでこんな外見なんだ？」

『それがなあ…。』言葉を濁す。『自分、人以外の因子が多過ぎんねや。ルシオラって娘の魔族因子、小竜姫の神族と竜の因子…メドーサも混じっとるからな。でもって皆女やろ。そんな魂を逆行させ

て再構成してみい。そらそうなるで。』

もう一度窓ガラスを見る。確かに、そうなるだろうな、と納得した。男であるだけ、儲けものかもしれない。

『ちなみに靈気をメインに出しとるだけやで、男なんは。神気、魔力、どちらかをメインに持ってきたら女になってまうから気いつけえや。』

「失敗してるじゃねえか！」叫ぶ。こんな事されて喜ぶのは勘九郎くらいだろう。「いや、ちよつと待て。別の人物になったって事はこの世界の俺は？」

『勿論おるで。ただ、この世界があつちと同じ展開になるかは分からんけどな。ここの横っちも魔人になるかも分からんし、ただの人で終わるかもしらん。けど横っちが気にする事ないやろ。自分の好きに生きてええ。自分のやりたいようにやって、今度こそ幸せになり。なんか困った事あつたらサポートするし。』

「……そう言われてもなあ。」気持ちは嬉しいのだが、こんな形で幸せになれるのだろうか。自分はもう横島忠夫ではないのだ。

『そろそろ朝やな。その身体の事なら起きたら情報頭に入れといたるから安心し。ほな、達者でな。』

「あ、コラ待たんかい！もうちよつとやりようなかつたんかい！」

『ばいびー』

最悪な気分で、朝を迎えた。

## 第一話 キツネのはなし

芦原和樹（あしはらかずき）、それがこの世界での横島の名前である。

両親は無く、孤児院で育った。10歳の頃、芦原公平（あしはらこうへい）という男に引き取られ、養子となる。公平は天矢神社という小さな神社の神主である。妻を病で亡くしてからは、男手一つで和樹を育ててきた。

和樹は大人しい性格で、手のかからない子供だった。しかし14歳の春に肺炎で入院して、回復してからは人が変わったかのように元気になった。奇妙な力に目覚めたのもこの頃で、霊を視認し抜く事が出来るようになっていた。

また、和樹によって清められた御守りや破魔矢は清浄な霊気を内包し、実際に霊能的な効果をもたらした。実は『浄』の文珠で清めただけなのだが。

和樹は平凡な毎日を、幸せに送っていた。父、公平は塾の講師をしている。霊能力も持っており、様々な面で和樹の理解者となっていた。だった二人だけだが、寂しくはなかった。

そんな、なんでもない幸せな日々。

和樹は、一匹のキツネと出会う。

運命の歯車が、動き始めていた。

ザツザツと竹箒を走らせる。玉砂利の上の落ち葉を器用に掃くと、和樹は少し伸びびをする。

「掃いても掃いても無くならんなあ。」

商店街の小さい神社なのだが、裏手にすぐ山があり、境内も様々な木々に覆われている。今は杉や楓の葉が多く落ちる時期だ。

ふと、視線を感じて参道の脇の藪に目を向ける。近所の猫や狸の視線とは違う、奇妙な存在感を感じた。

「キツネ？」

そこには、一匹の子狐がいた。藪の間から、顔だけちょこんと出してこちらを見つめている。

「おはよう。」試しに挨拶を試みると…。

「コン！」と返事をして、藪の向こうへ去って行った。

珍しい事もあるもんだ、と和樹は思う。キツネだけでも珍しいのに、あれはあやかしの類だ。ウチには稲荷社なんて無いのにな。そう呟きつつ、なんとなく今日は良い事あるかも、なんて思ったりもした。

「いや、本当だって。キツネキツネ。コンって鳴いたもん。」

「コン、てのが嘘臭いだろう。」

その日の夕食、父の公平と鍋をつつきながら、自然と話題はキツネの話となっていた。

「しかしお前の言う事が本当なら」

缶ビールをあまりながら公平が言う。

「近くの農家の人たちが心配だな。今年は猿の被害も出たし、神経過敏になっているからな。」

「大丈夫じゃねえかな。あれ、妖怪っぽかったし。」

「ブツ！」ビールを嘔き出す。

「汚ねえな！」

「いや、妖怪って！怪異の類なのか！」

公平は優秀な霊能者である。だからこそ、事の重大さを理解していた。化けたり騙したりする技術を持った怪異が、人里近くに出るのはマズい。

「悪いやつじゃないっばいけど。」そう言って和樹はキツネの姿を思い出す。

タマモに、よく似ていた。が、微妙に靈気が違ったような気がし

た。それに、タマモが復活するのは大分先のハズだ。近いが別の存在なのかもしれない。

「まあ、何かあったらお前に任せる。俺は明日から塾の方と新年祭の準備で忙しいからな。」

「投げやりだ！」

「お前の方がこの手の事に強いんだから仕方ないだろう。適材適所というやつだよ。」悪びれもせず、白菜を口に運ぶ。実際、厄払いの祈祷の際に処理しきれない悪霊の類は、和樹の霊波刀で始末する事もある。

「まあ、良いけど。そのかわり、お年玉奮発してよ。」

「ハハハ、期待しとけ。裏切るのは得意だ。」

くだらない会話。これが、この親子の日常なのだ。

次の日も、キツネは現れた。

その日は月曜日で学校があったのだが、夕方に境内を掃除していたら、いつの間にか傍にいた。

「やあ、元気そうだな。」

「コンー！」

ふわふわと尻尾を揺らしながら、こちらを見上げる。キツネは警戒心が強い生き物のハズなのだが、このキツネからはそんな気配が微塵も感じられない。やはり、妖怪なのだろう。

「腹、減ってないか？油揚げ買っておいだから、食べるに来るか？」

「キューン」「OK、という事だろう。竹箒を片づけ、社務所に戻る。キツネはトットトト、と小走りについて来た。

冷蔵庫からタッパーに入れた油揚げを取り出し、レンジで少し温めてから、行儀よく玄関で待っていたキツネの前に差し出す。

キツネは、キラキラと瞳を輝かせながら、和樹を見上げた。

「どうぞ、召し上がれ。」

「コン！」勢い良く、かぶりつく。

それにしても、なんて行儀のいいキツネだろう。タマモと初めてあった時を思い出して、和樹は苦笑いを浮かべる。あの時は傷ついて警戒していたから仕方ないのだが、こうまでリアクションが違うと考えてしまうのだ。やはり、この子はタマモじゃないんだな、と。

はぐはぐと美味しそうに頬張るキツネを見ながら、和樹は少し懐かしいような寂しいような気持ちになった。

かつて横島だった頃。保護した妖怪や魔族達と過ごした穏やかな日々。ずっと続くと信じていた幸せな時間を思い出して、少し瞳を滲ませる。



「キユウン…」「気づくと心配そうにこちらを見上げるキツネ。

「ああ、気にしなくていいよ。…ほら、お食べ。」

「コン…」

うながされ、食事に戻る。何だか、食事よりこちらの心配を優先するキツネに、ジンと来た。ええ子や…和樹は呟く。

しばらくキツネと過ごしていると、すっかり日も落ちて辺りは薄暗くなっていた。

「ん？帰るのか？」

「コン…」少し名残惜しそうに返事をする。

「そっか。気をつけてな。」

「コン！」

キツネはお社の裏の山へと駆け出す。途中、こちらを振り返って、高く飛び跳ね空中で一回転する。和樹が大きく手を振ると、満足そうに木々の間に消えて行った。

また、会えるといいな。

和樹はそう思いながら、社務所へと戻って行った。

それから一週間。キツネは社務所の受付窓のカウンターの下で毎日と樹の帰りを待ち続けた。大雨の日もあったのだが、キツネは同じ場所で待ち続ける。和樹はその姿を見る度に何だか泣きそうになるのだ。

日曜日、和樹はキツネに聞いてみた。

「お前、どこに住んでんだ？」

正直、聞くのは怖かった。もし聞いてしまったら、会えなくなるのでは…。何故かそう思ったのだ。

キツネは少し考える素振りをして…。

「コン！」と鳴いた。

小走りに、裏山へ向かう。途中、振り返ってこちらを待った。

「連れてってくれるんか？」

「コン！」

どうやら案内してくれるらしい。和樹も走ってついて行く。木々の間を縫うように抜け、枯れ葉を踏み散らかして後を追った。そして、見えない壁を抜ける感触…

結界か。

張り巡らされた結界。見失わないように必死でキツネの後を追う。

そして…

たどり着く。

注連縄の張られた巨大な岩。

その傍にキツネは佇んでいた。

「殺生石…。」

かつて、その巨大な妖力で日本中を恐怖に陥れた大妖、白面金毛九尾の狐。霊能者、妖怪が協力して戦い、日本各地で死闘を繰り広げ、少しずつ妖気を切り離し封印していった。その封印の礎とされたのが、岩石である。封印後も妖気を発し周囲の生き物を殺していた事から殺生石と呼ばれた。

「やっぱり、お前は九尾の狐だったんだな。」

「キュウン…。」すまなさそうにうなだれるキツネ。退治されるのを、覚悟しているのだろう、静かに目を閉じる。

しかし、和樹の取った行動はキツネの予想を外れていた。

「こんな所で一人で、寂しかっただろ。もう大丈夫だぞ。」

和樹の身体が神気をまとう。そこにあるのは、金色の女神の姿。竜神族に連なる武の女神に瓜二つであった。

「今、解き放つてみせますからね。」

手に握られた刀が輝く。かつて過激派神魔族を退けた霊刀、十握

剣(とつかのつるぎ)。

『ウアアアアアアア!』

その声に、木々が震える。振るわれる剣。膨大な神気が殺生石を砕く。

キツネは、呆然とその光景に見入っていた。強大な力が、自分を縛り付けていた封印を呆気なく破壊してゆく。信じられなかった。

ゴゴゴゴゴゴ……

音を立て崩れる殺生石。

それとともに放たれる禍々しい気を、和樹は『浄』の文珠で清める。こうしてキツネは清浄なまま礎から切り離された。

「一緒に来るか？」

和樹は元の姿に戻るとキツネに声をかける。キツネは……

「コーン!」

とても嬉しそうに鳴くのだった。

「で、今に至る、と。」

和樹の説明を聞きながら、公平は唾然としていた。殺生石の存在は知っていたが、たどり着ける者は居ないと思っていた。それほどまでに強力な結界だったのだ。また、件の狐がそこに封じ込まれていた狐だとは思わなかったし、息子がそれを解放して連れ帰るだなんて予想もしていなかった。

「お前の無茶振りにも慣れてきたと思つてたんだがなあ。」  
今日は好物のロールキャベツなのだが、味がしない。

「駄目かな、飼っちゃ…。」

「キュウ…。」

こんな態度でこられたら、OKせざるを得ないだろう。

「お前がちゃんと責任持つて面倒みるつて言うのなら構わんさ。ただ、あまり目立つことするなよ。妖怪というだけで狙ってくる奴もいるだろうし。」

「分かつてる。」それは、和樹が一番分かつてることだ。

横島として生きていた頃、ルシオラを失つてからは妖怪達の保護をライフワークとしていた。小さな村をつくり、保護区として国に認定させた。だが、うまくは行かなかつた。

妖怪を売買する連中、実験材料として密猟する連中…。魔族よりも神族よりも、残酷な事をするのは人間だった。GSにも非道な奴らが多く、そんな連中の片棒を担ぐ者が後を絶たなかつた。

保護区は、恰好の狩り場となった。横島を嫌うデタント反対の過激派魔族、一部神族が協力して横島を孤立させ、その隙に人間たちによる妖怪狩りが行われた……。忌まわしい事件。それをきっかけに横島は魔人となった。何よりシヨックだったのが、その狩りを行った連中に六道と繋がりのある人間や、知人の姿があった事だった。

和樹は、膝の上に乗せたキツネを優しく撫でながら言った。

「絶対に俺が守る。約束する。」

「なら、もう何も言わんさ。」「満足そうにビールを飲みほす。」「ただ、一つだけで訂正させてくれ。」「

「なんだよ?」

「俺たち、で守るんだ。家族だろう?なあ、キツネ君。」「

「コン!」

「親父…ありがとう。」「  
和樹は泣きそうになった。この人なら分かってくれると思っていたが、不安だったのだ。

「ところで、和樹。」「

「え?」

「いつまでもキツネ君じゃマズいだろ。名前はどつするんだ?」

忘れていた。

「ああ、そつだよな…お前はどんな名前がいい？」

「コン！」キツネは、テーブルの上の新聞をそのふわふわした前足で叩く。写真が掲載されているが…

「マイケルジャクソン？」

「ポウ！」ズリズリと後ずさる。ムーンウォーク？

「却下。」

「却下だな。」

「クウーン」

残念そつだ。嫌だろう、キツネにマイケルとか。というかポウつて。

「この子は九尾なんだろう？なら女の子の名前がいいよな。」公平が言う。確かにそうなのだが、和樹はタマモという名をつけるつもりは無かった。その名前は、彼女だけのものだからだ。

「飯綱とかどうかな。」

「イヅナか。霊格下がったんじゃないか？」確かにこれではただの狐憑きだ。

「コン！コン！」しかし、キツネは嬉しそうにクルクル走り回る。どうやら本人は嬉しそうだ。

「カナちゃんとか可愛い名前の方が良くないか？」

「何処のキャバクラだよ。こっちの方が九尾だってバレにくいだろ。」

じゃあ、イツナでいいか？」

「コン！」

イツナは元気よく返事をする、また和樹の膝の上に乗った。

こうして、和樹には新しい家族が出来た。今度こそ、守ってみせる。…和樹はイツナを撫でながら強く誓うのだった。



## 第二話 お守りのはなし

朝8時。

ガラガラと社務所のシャッターを開ける。ついでお守り、破魔矢などの授与品をカウンターに並べる。

日曜日や学校のない日は、こうして1日が始まるのだ。最近はこの、イヅナ用の湯たんぽの用意が加わっている。もう年末、寒くなっているので、暖房は欠かせない。社務所にはストーブが常備されているが、窓は極力開けているので手元やカイロは欠かせないのだ。

和樹の仕事は他にもある。裏で授与品の清め。ダンボールから出したお守りを並べ、『浄』の文珠で一気に清める。本来なら祝詞を唱え幣串を振るうのだが、和樹は神主ではない為、自分のやり方でやるしかない。

受付にいた時は、硯を出して習字の練習をしている。御朱印、というのをご存知だろうか。要はスタンプリレーの要領で各地の寺や神社の印を集めて行くのだが、社名は筆で書かなくてはいけない。公平は自分の居ない時の為に書き置きを用意しているのだが、熱心な参拝者は直に筆で書いてくれと頼むのだ。仕方なく、和樹が書いている。一筆300円をとるので、値段に見あった字を書けるように猛練習していた。

さて、和樹の霊能力レベルが人界一なのは説明の必要もないだろう。そんな和樹が清めたお守りである。自然と、絶大な効果を持つ物となっていた。

清浄な靈氣を宿したお守りは、持つ者の願いに寄ってその力の方向性が変わる。交通安全や学業成就、家内安全などは方向性こそバラバラだが内包する靈氣は一緒。清浄な靈氣は心を清く保つ。車の運転には周囲に気配りできる心持ちになり、学業では邪念に負けず集中できるようになる。清く正しい生活は自ずと家内安全に繋がる、という具合に。

そして何より、悪靈を寄せ付けない。和樹が清めたお守りを買っているのは神社近くの民家や商店街の人たちぐらいだが、その効果が評判を呼び、町内ほぼ全ての家でお守り・お札が普及しているのだ。つまり、清められた靈氣が町を覆っている。

和樹の靈氣による結界が作り上げられているのだ。

よって、この地域では靈的なトラブルが少なく、GSにとっては商売あがったりな場所となっている。そしてもう一つ、GS業界にとって嫌な事がある。それが、お守りの値段。普通のお守りなら問題ないのだが、ここのお守りは効きすぎる。悪靈に投げつけると、十萬円の破魔札並みの効果を發揮してしまうのだ。五百円のお守りが。

その日、和樹が参拝者の中に彼の姿を見つけたのも、必然であったのだろう。言ってみれば、商売敵なのだから。

「坊主、ここにあるお守り全部買うアル。」やけに大きなサングラスをかけた怪しい小男は、開口一番そう言い放った。

「だ、団体様向けですか？」そっいいながら和樹は嫌な汗をかいていた。

（なんで厄珍がここに来るんだよ！）

霊能グッズではGS業界一を誇る厄珍堂。その社長が厄珍である。商売の為なら何でもする危険人物で、横島だった頃は新商品の実験台にされたり嫌な思い出が多い。世話になったこともあるのだが、それは美神令子の元にいたからである。元々が華僑グループの出身、仲間意識が強く他人には冷たい。商売敵ならなおさらだ。

「何だつていいアル。金なら一括で払えるだけの分は用意してきたアルネ。」

「申し訳ありません、うちでは団体様でのご参拝を除き個人様に多数のお守りの授与はしておりません。特に…」 和樹の表情が変わる。

「転売目的の方には神罰を持ってお断りしております。」

「な…」 絶句する厄珍。正体だけでなく目的まで見破られているとは思わなかったのだろう。加えて、神罰である。脅迫までしてくるとは読めなかった。

「何者ネ、坊主。」

厄珍は気を取り直して聞いた。ここで追撃して圧倒しないと何をされるか分からない。そう判断した和樹は神気を身にまとい、また女神の姿になった。体内の小竜姫の因子が共鳴する。

『口を慎め人間！我が依り代に仇成すならば神族を敵にまわすと心得よ！』

ブオオオオツ、と金色の神気が身中から湧きあがる。そのあまりの凄まじさに厄珍は吹き飛ばされた。

『さあ、どうする。我が剣の露になりたいのであれば、かかってくるが良い。』

「滅相もないアル！神族に逆らうなんて絶対にしないアルから許して欲しいアル〜！」

さすがに厄珍も相手が悪いと思ったのか、すぐに降参した。こういう判断の速さは、大したものだ。そして…。

「商売繁盛の熊手を買うので勘弁して欲しいアル。」

ちやつかり自分の分だけは確保する所も流石といえよう。

厄珍が去ってから、和樹は今後どのように身をふれば良いか悩んだ。GS業界とは接点を持ちたくなかったのだ。しかし、今日は派手にやってしまった。

考えた末に、まず和樹は境内だけでも安全地帯を作る事にする。悪意や敵意に反応して排除する結界だ。これは非常に高度な技術を要するもので、展開すれば霊能者にはすぐ察知される。高度な技術を持っている事を見せびらかしているのも同然だからだ。しかし既に厄珍という情報屋も同然の男に知られてしまった。GS業界には遅かれ早かれ知られるだろう。

境内の四隅に、沈め物をする。沈め物とは土地を清める際に使われる物で、大体は境内の清められた石を焼き物の皿二枚で包み、麻紐で十字に縛ったものだ。その表面に東西南北を墨で書き、祝詞で清める。

和樹の場合、石の代わりに文珠を入れる。それも水晶を基礎として霊力を込めた水晶文珠という物で、半永久的に使える優れものだ。四つの水晶文珠はその一つ一つが二文字入れられる双文珠タイプで、『破邪』『神聖』『加護』『清浄』の文字が入れている。無論、和樹がありつたけの霊力を込めて作った。これ以上の物を作れる者は神族の菅原道真公か竜神王クラスの神々くらいだろう。

「イツナ、この珠、触っても平気か？」

「コン！」

使う文字がイツナに悪影響を与えないか確認してから、沈め物を完成させる。妖怪まで排除したら意味が無いからだ。

四つの沈め物をそれぞれ境内の角に埋めると、和樹は再度神気を纏い社殿に上がる。結界を起動させる文言を唱えると、霊刀十握剣を顕現させ、溢れ出す神気をかき混ぜるように演舞を行った。何故かその傍らでイツナもクルクルと踊る。

舞いの最後で剣を高く掲げ力を解放すると、剣から放たれた神気が放射状に境内に広がって行く。これで、結界は完成した。

「身体は大丈夫ですか？」

「コン！コン！」やたらとテンションが高いのは、自分も参加したのが楽しかったからかもしれない。

「アナタも頑張りましたからね。それでは戻って昼食にしましょう。」

」

「コーン！」

一跳ねして、イツナは社務所へと駆けて行った。それを見ながら変身を解く和樹。自分の心が小竜姫に引っ張られているのを感じながら、これで魔力をメインにしたらどうなるんだろう、と少し微妙な顔をした。

その日の夕方、公平は帰ってくると同時に台所に駆け込んで来た。

「今度は何をしたんだ！？神様でも降りてらっしゃったのか！」

「ああ、結界張っただけ。」

その言葉を聞いて公平はその場に倒れ込む。よほどショックだったのか、目が点になっていた。イツナが心配そうに駆け寄る。

「あ…あのなあ、詳しく説明してくれるか？」

「ん、分かった。丁度夕飯できたから、食べながら話すよ。」

そして和樹は今日の出来事を話した。勿論、女神化したのは内緒だ。厄珍に目を付けられたので霊気を開放して脅したのは怒られたものの、その前までの対応は間違ってたと言ったと褒めた。

「まあその厄珍という男の言い分も間違っではない。金出せば買えるというのが資本主義のルールだからな。限定指定しても、どうせバイト雇って買いに来ると思うが。」おでんのちくわを頬張り

ながら公平が言う。

「分かつてはいたんだけど、純粹に参拝しに来てくれた人の分が無くなるのは嫌だったんだ。」

「ああ、お前は正しいよ。ただ、攻撃的すぎたな。敵を作らない、というのを守る事に繋がるんだ。」

「うん、ごめんなさい。」和樹は頭を下げた。魔人化した時の事件だって、もつと賢く振る舞えば防げたかもしれないのだ。あの頃の自分を思い出して、和樹は反省していた。

「しかし…凄い結界だな。悪意に反応するとは便利な代物だ。」

ビールを飲みながら周りを見渡す。霊能者として優秀だからこそ、この結界の凄さが分かるのだ。

「勝手にやって悪いとは思ってたんだけど、イツナや親父を守りたくて…。」

「ん？別に怒ってはいないさ。ビックリはしたけどな。でも考えてみる、これで賽銭泥棒や空き巣も排除出来るだろう。素晴らしいじゃないか！」

そう言えばそうだ。

「間違えたと思ったたら次から気を付ければいい。変な奴に目を付けられたら俺に相談しろ。もう少し親父を頼りなさい。」笑いながらハンペンにかじり付いた。

イツナは餅巾着と格闘している。

和樹は新しく割り箸を出してイヅナの餅巾着を分解してあげながら、もつと周りに相談しなくちゃな、と反省していた。

そんなある日の事。

学校から帰ってきていつもの様に社務所を開け、境内の掃除をしていると…

「ゲツ…！？」

思わず声を漏らす和樹。

そこには、学ランに身を包みながら何故かバンダナを頭に巻いた不振な男…

横島忠夫の姿があった。

「あの〜、すみません、お守り買いに来たんすけど…」  
目が合う。途端、横島の目がギラついた。

「生まれた時から愛してましたー！」

「俺は男じゃボケー！」

パキッ！ドサツ……

「お、男…こんなに可愛いのに男って……」

「可愛い言うな、気色悪い……」

まさか自分に襲われるとは思わなかったので、和樹は結構本気で



殴ったのだが横島はすぐに復活する。和樹は、本当にコイツは人間かと疑う。

「で？お守り買ったって？」

「あ、ああ。今年受験だし、ここのお守りは効くって評判だから。そう言えば、受験では苦労したなあ、などと和樹は思い出していた。深夜のエロ番組の誘惑に負けて試験は滅茶苦茶だった。確かマークシート式のテストで鉛筆転がしまくって合格した覚えがある……和樹は我ながら霊能力の素質を変な所で発揮したと感慨にふける……と、そこでちょっとした悪戯を思いついた。ここで、思いつきり霊力を込めた学業成就のお守りを渡したらどうなるだろう。

「ちょっと待ってな。今、用意する。」

社務所の中に入り、護身用にストックしていた水晶双珠に『集中』と入れて、学業成就のお守り袋に入れる。

「ほい、五百円ね。」

「サンキユ。…ん？なんかデカくないか、これ。」

「ああ、これ限定品で見本とはちょっと違うんだ。効き目はバツチりだから心配しないで。」

「そか。そう言えばアンタ、中学か？同い年っぽいけど受験は？」

何故同い年と分かるのか。

「俺も三年。高校は推薦で二条高校受けるつもりだけど。」

「げ、滅茶苦茶頭いいじゃねえか！」

この頃の横島は高校受験生の中でも最低レベル。だからこそ両親はナルニア行きの話があつた時に息子を連れて行くこととしたのだ。ナルニアのような環境の厳しい所で鍛え上げるつもりだった。しかし何の間違いか普通レベルの高校に合格してしまった為に、それを諦めたのだ。

「まだ受かるか分からないよ。」

「推薦ももらえるだけでエリートじゃねえか！この偏差値ブルジョアめ！！」

なんですかそれは

「君も受けてみたら良いだろ。そのお守りがあれば今から猛勉強すれば充分間に合うよ。」

「ははは、ムチャ言いやがる。」そう言いながらも横島はスッキリした顔になっていた。

「正直諦めてたけど何かやる気になった。もし同級生になったら宜しくな！有り得ねーけど！」

「楽しみにしてるよ。」そう答えると、横島は軽く手を振って境内を去って行った。

…初めて自分を、他人として見た。

意外とイケてんじゃないか。なんでモテなかったんだ？バンダナ

がいけなかったんか？

そう考えている時点で、やはり和樹は横島なのだ。横島は初めからモテていた。ただ、セクハラする道化としての印象しか持てない人にモテなかったただけなのだ。少しでも横島の優しさに触れた者であれば、誰もが魅了される。後に芸能界で活躍する幼なじみ、銀一でも横島には勝てなかったのだ。

そんな事も露知らず。和樹は今日の出来事を振り返って考えこんでいた。

「もし本当に受かったらどうすんだ？歴史変わったちまうたる。」

県下最高レベルの高校に受かったら、まともな生活費が貰えるだろう。という事は、美神さん所でバイトしなくなるんじゃないか。

…まあ、いいか。

和樹は考えるのをやめた。なるようになるさ。今は自分の事で精一杯なのだ。第一、悪い事はしていない。

しかし、間違いなくこの一件が、運命を大きく動かす事になる。その影響が現れるのは、まだ少し先の話ではあるのだが。

### 第三話 悪い人のはなし

大晦日、元旦と忙しい日々を何とか乗り切った一月中旬。和樹はイツナと社務所で留守番をしていた。

正月を過ぎ、父、公平は新年の挨拶周りや氏子総会、塾の方でも冬季集中講座を受け持ち、鬼のような忙しさに追われている。

和樹はそんな父に申し訳ないと思いつつも、のんびりと過ごしていた。

「イツナは暖かいなあ…。」

「キュウ〜ン。」

膝の上で丸まっているイツナが答える。ああ、可愛い。撫でまくってやるコンチクショー！

「キュウウウ〜ン。」

そんな風にじやれていると、不意に結界がざわめいた。

「！」一気に緊張が走る。イツナも気配を察知して身を固めた。

受付に来たのは、意外にも人の良さそうな中年の男だった。

「すみません、厄払いをお願いしたいのですが…。」

男は疲れきった顔をしていた。

「申し訳ありません、宮司は所要で出ておりました、本日は祈禱に上がれないんです。ご予約いただいてから後日、となってしまっ

ですが、いかが致しましょう。」

そこまで言って異常に気づいた。男の背中に黒い影が乗って……いや、生えている。結界に反応して苦しんでいるが、離れようとはしない。普通の悪霊ではないようだ。

男は宮司不在と聞いて落胆したようで、「では、改めて連絡させて貰います」と言っただけで去ろうとする。

「あつ、待ってください。背中に背負ってるモノを取り除くくらいは僕にでも出来ますから！」

「え？」驚いて振り返る。

「それ、取り除いて欲しくていらっしやっただんですよね？お話、聞かせてもらえませんか？」

男はそれを聞いた途端、泣き崩れてその場に座り込んでしまった。なんとか落ち着いてもらって社務所の中に案内する。今日はもう参拝客の相手は出来ないな、と社務所のシャッターを閉めた。

「この悪霊に取り憑かれたのは一年ほど前です。」

男はゆっくりと語り出した。

男の名前は島田正昭といい、養鶏場をやっているという。それなりに繁盛していたが、ある日突然背中に瘤が出来てからは状況は一変した。

瘤は大きくなり、人面が出来た。夜な夜な島田の身体を操っては

鶏を喰らう。怖がって従業員も次々と辞めていき、規模も縮小していった。

そんな困り果てた島田のもとに一人のGSが現れる。そのGSは背中の悪霊を取り除く代わりに大金を要求してきた。ギリギリ払える金額だった為、島田は除霊してもらおう事にする。除霊は成功し、島田は安心して仕事に復帰した。

しかし、その三ヶ月後。また背中に瘤が出来る。島田は件のGSに助けを求めた。ちゃんと除霊出来てないじゃないか、と苦情も言った。しかし…

「間違いなくちゃんと被った。

また取り憑かれたのはアンタの落ち度だろう。土地が悪いんじゃないか？土地の浄化までやるなら、倍は払ってもらわないとな。」GSは笑って答えたという。

もはや何も信じられなくなって途方に暮れていた所に、この神社の噂を聞いたという。

「ふむ。とりあえずその背中の悪霊は使役されているみたいですね。」

話を聞きながら霊視していた和樹が言う。これだけの霊圧に苦しみながらも離れようとしないのは、何かの命令を受けているか契約に縛られているか、だ。この島田という人に自ら悪魔と契約するなんて発想は無いだろうから、自然と前者となる。だとすると…

「とりあえず被いますね。」そう言って和樹は瘤に手を当てて念を

込める。「目を閉じていて下さい。」

バシユウウウウ!

悪霊は悲鳴を上げる事も出来ず霧散した。

「え、終わりですか?」

「はい、終わりです。でも応急処置ですから。原因が分からない以上何が起こるか分からないので、また何かあったらお越し下さい。」

「あの、御代は…」

「僕、神主じゃないからお金は貰えません。厄払いの正式な代金も五千円からですから、気軽に来て下さい。」

「そ、そうなんですか。ありがとうございました。」

まるで狐につままれたかのようにポカンとしながら、島田は帰って行った。とうの狐のイヅナは、瘤を抜った後は安心してストーブの前で寝転んでいる。

その日の夕方、今度は別の男が訪れる。結界は激しく警告を発した。見ると、全身汗まみれの男がヨロヨロと歩いてくる。

「厄払いをしてくれ。」

「その前に病院へ行った方がよろしいのでは?」

「うるさい！早くしろ！金なら持ってきた！」高圧的だ。

「しかし宮司は今、留守なので…」

「お前、厄払いしていただろ！何で俺じゃ駄目なんだ！」ふむ、あの瘤を通して見ていたな。コイツが使役していた主のようだ。そして、件のGSなんだろう。悪霊や悪魔と契約をしてターゲットに取り憑かせ金をむしり取る…。こういった連中を取り締まるオカルトGメンはまだ発足していないのか？

「いいでしょう。厄払いですね。」

「ああ、頼むぜ…」下卑た笑みを浮かべる男。ああ、いいだろう。地獄を見せてやる…。和樹はそう決心した。

「では、こちらへ…」男を本殿へと案内する。実は、これだけでもこの男は苦しいのだ。何せこの本殿、和樹が舞を踊った場所である。

ひときわ濃い神気に包まれているのだ。

「い、いや、ここまでで良い。」

「ですが、本殿に上がらない事には…」

「ここまでで良いって言ってるだろう！」

耐えきれずに使い魔を放つ男。やはり、苦し紛れに攻撃してきたか。和樹はあらかじめ用意していた文珠を発動させた。

『反』『逆』



男から放たれた使い魔は、そのまま男の身体に食らいつく。

「…ああ？…何やってんだ、お前ら……。」

ガジツ、ガジツ、と牙をたてる黒い塊。

「ギヤアアアアア！」

叫ぶ男。使い魔は傷口から侵入して、男の体内で暴れまくる。

「もう、何遊んでるんですか。お被いするんでしょう？ペットはどこかに繋いで来て下さいよ。」

「アアアアアア！痛い痛い痛い痛い！助けて助けて助けて助け……」

完全に乗っ取られたらしく、男の動きが止まる。パキツ、ボキツ、と音を立てて身体が変形し、ありえない方向に腕や足が曲がって行った。恐らくあの使い魔だけではなかっただろう。体内に隠し持っていた使い魔たちが、一斉に反逆したのかもしれない。しかし今更そんな事はどうでもいいのだ。

あまりに本殿に近い場所での悪魔化。神気に押しつぶされるのは自明の理と言える。男の中の使い魔たちは結界の機能によって浄化され、ただの人間だけが残った。

『治』の文珠で傷を治す。そしてもう一つ……

『忘』

ここでの記憶を消した。

この話は、本来ならここで終わる予定だった。島田にはその後さしたるトラブルも起きなかったし、悪魔使いの男がまたやってくる事もなかった。父も相変わらず忙しいし、世は並べて事も無し、と行きたかったのだが。

なかなか上手くないかない。

その女性が現れたのは悪魔使いが来た次の日の事である。相変わらずイツナと遊んでいると、結界が僅かに揺らいだのだ。この反応は、敵意は無いが警戒している者に対する反応。つまり、結界を知覚できる霊能者の可能性が高い。やれやれ面倒くさい、と和樹は窓口へと向かい、やって来る人影を見た。

来る、とは思っていた。

が、何もこんなに早く来なくても。

六道家当主、六道冥菜の姿がそこにあった。

「初めまして、六道冥菜です。」

「初めまして、天矢神社の芦原和樹と申します。本日はどのようなご用件で？」

「あのね、貴方とお話がたくて来たんだけど良いかしら？」

どうやら、境内の外に十名ほど武装した人間が居るようだ。殺気に敏感なイツナは既に社務所の奥に隠れている。いい判断だ、後で稲荷寿司を作ってあげよう。

「結構ですよ。生憎宮司は所要で出ておりますが、僕のような若輩者で宜しかったらいくらでも。」

「あら、若いのにしっかりしてるのね。」

冥菜を社務所へと案内する。護衛をつけないのは自信があるわけではなく、付けられないのだろう。結界を張って良かった。

居間に通し、熱い番茶を入れる。冥菜はさすがに緊張しているのか、表情は少し固かった。

「それで、話というのは？」

「あのね、ここの結界がとても強かったから気になって来てみたのよ。」

まずはここから来たか。

「ええ、この結界は特別性らしいですね。神族の方が張ったらしいですが、よく分かりません。」

「神族？神様がいらっしやるの？」

とぼけたババアだ、と和樹は心の中で呟く。厄珍からも聞いてるだろうに。

「はい。どうも僕の身体を依り代に使ってるみたいです。何のためにそんな事やってるのかはサツパリですが、おかげで賽銭泥棒は来なくなりました。」

「そうなの。キツネさんを引き取ったのもその関係かしら。」

「よくご存知ですね。キツネに関しては僕が餌付けしてから居着いたんですが、神族の方は存じ上げていたみたいです。」

厄珍ルートで情報が漏れていたというより、前々からマークされていたようだ。そう言えばタマモの時は政府が真っ先に動いていたとなると外の連中は六道の護衛でないなら政府関係者の可能性もある。

「あのね、今日来たのはそのキツネさんの件もあるの。貴方はそのキツネさんの正体は知ってる？」

「ええ。でも殺生石を破壊してキツネを解放したのは神族ですからね。危険は無いと思ってウチで飼ってます。」

そう言うと冥菜は困った素振りをみせる。

「あのね、妖怪の類の保護は、届け出が要るのよ？GSの監視下じゃないと保護出来ないの。」

「何故、GSじゃないと駄目なんですか？」和樹は、即座に疑問を投げかける。「神社の中には、一般に妖怪とされる存在を祭神として祀っている社も沢山あります。ですが、顕現した際にGSの監視下に置かなければならないとは聞いていません。」

「それは…。」言いよどむ。

「GSに権限が認められているというのも理解出来ません。使い魔をけしかけ高額の除霊料をとる人間もいると聞きます。それに…。」

和樹の目に、暗い色が宿る。

「貴女は、南部グループという連中を知ってますか？」

「名前だけなら、知ってるけど…。」

「妖怪を実験材料にしたりしているらしいです。六道グループでしたら傘下企業の岩死水建設さんが付き合いがあるようですが。」

いつの間にか、和樹は殺気立っていた。前の世界の事を思い出したのだ。冥菜は表情にこそ出していないが恐怖していた。尋常でない殺気。およそ中学生にできる表情ではない。

「…すみません。どうも僕は感情的になりやすくて。ですが、GSという存在が安全であると断言できるほど僕はお人好しでは無いです。貴女が言うように社会的な手続きをとってGSの人に預けるのが筋なんでしょうが、あの子が殺されるかもしれないと思うとどうしても踏ん切りがつかないんです。」

沈黙が訪れる。冥菜は、相手を計りかねていた。六道グループを調べている時点でこの少年は危険だ。南部グループの事までは冥菜は把握できていない。強い不信感をぶつけてきたかと思えば一歩引いて情に訴える話術も、奇妙な説得力があった。

そこまで考えた所で、和樹の背後から可愛らしいキツネが姿を現した。

「あ、イツナ、出てきちゃったのか。」

イツナ？飯綱と言ったのか、この少年は。

「この子が件のキツネです。危険かどうかは、貴女が判断してみてください。」

イツナが、トットトト、と冥菜に近づくと。

「まあ、可愛いわねえ。抱いてもいいかしら？」

イツナは和樹の顔を見てから、冥菜の胸元に飛び乗った。

イツナを抱いて、冥菜は自分が極度の緊張状態にある事を知る。腕の中のイツナの温もりが、緊張をほぐして冥菜に冷静さを取り戻させていた。

神族に類する存在と関わっているのはこの神社の結界を見ただけで分かった。そもそもが神社なのだ。そして、この少年や神族がこのキツネを守るうとしているのも確かなのだらう。ならば敵に回すのはマズい。政府を敵に回すよりも。

「この子は、イツナちゃんね？」

冥菜はイツナの頭を撫でながら言った。

「はい、イツナです。」

「なら、危険じゃないわ。だって、ただの飯綱なんですもの。」

「コン！」イツナが肯定する。

「だから、表の人たちにもそう伝えておくわ。」

「ありがとうございます。」

この反応で、冥菜は和樹が外の人間を把握している事をかくにんした。この少年の霊視能力はかなりのレベルに達している。

「でもね、やっぱり今の法律ではGSの保護は必要になっちゃうのね。」

「どうすればいいでしょうか。」

「芦原君が、GSの資格を持てば問題ないわよ。」

結局、そうなるのだ。

「GS試験については、僕も調べたんです。ですが、僕には推薦状を書いてもらえる人が居ません。師匠もいないし。」

「それなら心配ないわよ。推薦状なら私が書くし、師匠なら一流どころの名前を貸してもらえるわ。」

もしかしなくても唐巢神父だろう。宗教的に面倒な事にならないだろうか…。

「あの、それと…僕はこの子みたいな妖怪を保護する為だけに資格を取ろうとしています。社会正義の為とか、そう言った動機は持ってません。だから幽霊退治とかしませんけど、それでもいいんでしょうか。」

「それも心配ないわ。GS免許を持つてるからと言って除霊活動しなきゃいけない訳じゃないもの。」

「分かりました。」

和樹は腹を括った。

「それでは、GS試験の件、宜しくお願いします。」

「ええ、後で資料を送っておくわね。」

こうして、和樹はGS試験を受ける事になった。帰りしな、和樹は冥菜に女神の姿を見せる。

『冥菜、と言いましたね。』

「貴女は…神族様？」

『南部グループの件、早めに対処しておく事です。出せる膿みは早めに出しておきなさい。』

「は、はい、承知しましたわ。」

『ふむ。我が依り代の事、宜しく頼みましたよ。』

冥菜は、先ほどまでの緊張と今の神気にあてられ、フラフラになりながらその場を後にした。

「…俺も悪人だよな、神様のふりして騙してんだから。」



「コン！」いつの間にかそばに来ていたイツナが、やけに強く同意した。

「という事で、GS試験を受ける事になりました。」

「ブフ　　ッ！」

公平は茶を吹いた。

今日は久しぶりに夕飯前に帰ってきたのに、寛ぐ間もなくこれである。

「あのお、ウチは単立の神社で俺も元々神主の家系じゃないからいいがな、普通の神社の神主がGS免許なぞ取ったら業界から締め出されるんだぞ？」

「分かってるよ。よその神社で働くつもりなんてないし、問題ないでしょ。」

「確かにそうなんだが…」言葉を濁す。

「勝手なのは分かってるよ。ごめん。親父にも神主の知り合いがいて、そういう付き合いに悪影響出るかもしれないっていうのは俺にも分かる。だから、もし反対ならやめるよ。六道の婆さんに断り入

れて、イツナと一緒にここを出るよ。」

「馬鹿野郎！」

和樹ね頭に拳が飛び、ゴツツ、と鈍い音を立てる。

「お前は何故俺が反対すると思うんだ！家族を守るのは俺の仕事だ。イツナだって家族だ。見捨てるわけ無かるう。」

「親父……」

「出て行くなんて言うな、馬鹿！俺はただ、お前が神社業界に身を置くなら、神社本庁指定の資格を取らせただけだ。あれがないと、肩身の狭い思いをするからな。神社業界とGS業界は折り合いが悪いから、そっちを先に取ると最悪神職資格試験を受けられなくなるから、その事を考えてただけだ。」

「そうだったのか。悪い、早とちりしてた。」

公平は、今だけでなく和樹の将来の事も考えていたのだ。

「神社業界にも人外の保護を申請する場所はあるし、そっちの方がよっぽど信頼できるんだが……。しかし六道の当主が直々にやってきたんだ。形だけでもGS試験を受けた方が波風立たんわな。」

そう言って煙草に火をつける公平。和樹は、目の前の父親の底知れなさに今更ながらに驚いていた。

六道家の名前を聞いて、大して驚かない。脅迫まがいの交渉で様々な業界で幅を利かせる六道は、今や裏日本における一大勢力にまでなっているのだ。そんな六道の名を聞いて動揺しないのは、家族を守るという責任感だけから来るものなのだろうか。

「とりあえず、お前は今は高校受験に集中しとけ。油断さえしなきゃ大丈夫だろうが、こういう事に気をとられてばかりいると受かるもんも受からんぞ。」

「うん。」素直に頷いて、和樹は夕食の準備をしに台所へと向かった。

渋い顔で、公平は煙草をふかす。その身体に重なる形で、うつつらと何かのシルエットが現れた。

『しかし横つちは相変わらず心配性やなあ。そんな心配せんでも手は打ってあるんやけど…。まあ今は放つとこか。』

その口調と声は、先ほどまでとは全く違っていた。

## 第四話 死神のはなし

これは、三月のGS試験を間近に控えた二月中旬の頃の事。

無事受験を合格し、ホツと一息ついていた和樹は、その日も境内の掃除をしていた。マスク、耳当て、帽子、ぶかぶかのダウンジャケットに身を包んだ姿はだいぶ滑稽なのだが、寒いことから仕方がない。

元気に走り回るイヅナにしても犬用の上着を着ている。これは完全に和樹の趣味なのだが、イヅナもまんざらでもないらしく喜んでいる。

「なんでそんなに元気なの、君は。」

「コンコンコン！」テンション上がりっぱなしなイヅナに苦笑いする和樹。最終的に寒くなって家に帰りたいがるのは決まってイヅナの方なのだが、それはそれで可愛いと思ってしまう和樹はきつと重症なのだ。

「ああ、ちょっといいかな。」

不意に後ろから声をかけられて、和樹は驚く。油断していたとは言え、気配すら感じられないとは。イヅナも驚いている。

そこには、天然パーマの優しそうなおじさんが立っていた。

「か、唐巢神父？」

「おや、私の事を知っているという事は、君が芦原和樹君で間違いないのかな？」

少し意外な顔をする神父。

「ええ。こんな格好じゃ誰か分かんないっすよね。立ち話も何なんです務所の方へお越し頂けますか。」

「あ、ああ。」唐巢神父が困惑したのは、和樹を最初女性かと思っただ事なのだが、知らぬが仏である。

この季節、社務所はいつも暖房をつけているが客間には偶々暖房をつけていなかった。和樹はすぐに社務所のシャッターを閉めて、そこを客間がわりとした。どうせGS試験の話。あまり他人に聞かせられる話題でもないのだ。

「悪いね、突然押しかけてしまって。」

「いえ、気にしないで下さい。この時期、参拝に来る人は殆どいないので、暇なんです。」

これは本当だ。

「今日は、GS試験前に君の霊力を見に来たんだよ。一応、師匠として名前を貸すからには確かめておきたくてね。」

「はい。本来ならこちらからお伺いすべき所なのに、ご足労頂いて申し訳ありません。」

唐巢神父は、礼儀正しい受け答えに驚いていた。さすが神主の息子だ、と関心する。

「冥菜さんからある程度は聞いているんだが、君は強い霊媒体質で神族の依り代になっているらしいね。ただ、GS試験では己の身一つで戦うから…」

「僕自身の強さを示せばいいんですね？」

「まだるっこしいのが嫌な和樹は、霊力を少し解放する。その量は200マイト程。人間の限界レベルである。そして…」

「武器としては、収束した霊気で行こうかと思っています。」

右手にサイキックソーサーを展開する。本来は盾だが、投げれば武器にもなる。拳に乗せて相手の体内に叩きつければ、チャクラを破壊して再起不能にも出来る万能にして恐ろしい武器だ。

「冥菜さんが無条件で推薦するわけだ…」

呆気にとられて言う。

「君はそれだけの力を持っていながら、社会正義の為の活動はしないのだね。」

「ええ。自分の周りの人を守るだけです。」

迷いなく言う姿に、神父は表情を曇らせる。これだけ強い力を持ちながら、勿体無い、と。しかし、欲を満たす為に力を振り回さないだけでも素晴らしい事だ。心は間違いなく強いのだろう。

ピンポン

ふと、呼び鈴が鳴る。

「あれ、シャッター閉めてるのに。」

「気にしないで、出てくれたまえ。私の用事は終わったも同然だから。」

「では、失礼します。」

ガラガラとシャッターを開けるとそこには、影のある弱々しい雰  
囲気のおばさんがいた。

「お待たせしました。どうかありませんか？」

言いながら、霊視する。また厄介事だ。神父も気づいているよう  
だ。

「あの、相談にのって欲しい事がありました…。」

「結構ですよ。どうぞ中にお入り下さい。」  
社務所に案内する。

「私も同席して構わないかな。」

「勿論。」居てくれたら心強いのは確かだ。

そのおばさんの話では、入院してる娘の枕元に、鎌を持った髑髏  
が現れるというのだ。娘にはその姿が見えるのか分からないが、自  
分の死を覚悟しているような振る舞いをするようになった。元々心  
臓に欠陥があり、手術の成功率は低いらしいが、手術を受ける前に

生きる事を諦めてほしくはない。その髑髏を追っ払ってほしい、という依頼だった。

「それは…」神父は言葉を失う。

「聞く限りは、死神ですね。追っ払うべき存在ではないです。」

「そんな、娘は死ぬしかないんですか！」絶望に表情を歪める。和樹にも、気持ちは痛いくらいに分かるのだが。

「お母さん、死神は忌むべき存在ではないんです。」

答えたのは神父だ。

「死神は死後、魂が迷わないように天界へと誘う案内人です。本来、善行した者や理不尽な形で死んでしまった者をまた輪廻の輪に乗せる為に現れると言います。お嬢さんの事は気の毒ですが、迎えが来るだけでも本来は幸せな事なのですよ。」

「そんな事を言われても…。私は娘に、生きてほしい。ただ、それだけなんです。」

涙がこぼれる。親なのだから、それは当然だろう。もし、死神であるなら唐巢神父の立場としては追っ払うなんて出来ない。この母を説得するしか選択肢はない。

「神父、今から悪魔が囁きますが、どうか耳を塞いでいて下さい。」

「え？」神父は怪訝そうな表情でこちらを見た。

「お母さん。本当に死神なら、追っ払うと二度と死神は娘さんの前に現れません。それは、死後幽霊として地に縛られ、ゆくゆくはG



Sに退治される事を意味します。死してなお、苦しむ事になるでしょう。」

「それは…。」  
「困惑するおばさん。」

「それでも娘さんに生きてほしい、と願うなら。悲しい運命を背負わせるかもしれない、その覚悟があつてなお娘さんに生きてほしいと願うのであれば…」

「芦原君、君は…!」

「死神を追い払ってみせましょう。」

神父は思いもよらない発言に耳を疑う。人の身で神に逆らう、と言っているのだ。それは、許される事ではない。自分は教会から破門された身ではあるが、神の教えに背いた事はないと自負している。しかし、目の前の少年は…

「お願いします。」

おばさんが頭を下げる。

「娘を、どうかお願いします。」

「とりあえず病院へ行きましょう。実際死神かどうか分かりませんから。」

和樹は、そう言っておばさんの手を引いて席を立つ。神父も、それに続いた。こうなつては、無関係では済まさないのだ。

「行ってくるよ。」

「コン！」

「それまで台所に避難していたイツナが、見送った。」

その病院は、近所の総合病院だった。

病室に入る前に、中を覗く。ベッドは一つ。個室をあてがわれているという事はVIPだろうか。いや、大きな手術を前に移動させられたのだろうか。和樹はそう思いを巡らせながら、ベッドに寝ている女性を見た。

「あの、起こした方がいいんでしょうか。」

寝かせておきたいようだ。

「いえ、術で寝かせたままにしておきましょう。見て気持ちいいものじゃないでしょう、髑髏なんて。」

ぞんざいな言い方に神父は顔をしかめた。自分の弟子とするのは断った方が良かったかもしれない、と考えていた。

寝ている女性のベッドの四隅に札を張る。その時、寝顔を見た和樹は思い出していた。おキ又ちゃんそっくりな女性。名前はユリ子と言ったか。前の世界ではおキ又ちゃんの説得で死神に帰ってもらった。今回はどうするか…。傍らで目を閉じているおばさんを見ながら、何とかしてやらないとな、と和樹は気合いを入れる。

簡易結界を張ると、バチツと青白い火花が散って、部屋の明かりが消える。まだ昼間だが曇り空のせいかわ暗く、辺りも不自然な静寂包まれた。

『どついつつもりだ、人間。』

浮かび上がる影。大鎌に髑髏の顔、黒い外套を纏う姿は間違いなく死神だった。

「芦原君、これは…！」

そう言う神父を片手で制して、和樹は口を開く。

「この娘から手をひいてほしい。」

『断る。』

即答だ。

『この娘の死は確定されている。神の下した判断に間違いはない。』

「へえ…」

和樹の表情が変わる。

「つまり神様のやる事は絶対で、神の名の下に行われる行為は全て正しいのか。」

『人間の分際で何をほざく？』

次の瞬間、和樹の身体が金色の神気を発する。そこに現れる女神の姿。

（小竜姫様！？）

神父は目を疑う。その姿は、かつて自分が師事していた小竜姫の

姿によく似ていた。黒髪で角が長い事を除けば瓜二つ、もしかしたら小竜姫と縁のある神なのかもしれない、と神父は思った。

『人間でないなら、どうですか？』

『な……。』

言葉につまる死神。それは、神父や娘の母も同様だ。

『私がこの娘を救うと言ったらどうするのか、と聞いている！』

言葉に怒りの言霊を乗せて死神にぶつける。

『あなたは自分のやっている事に疑問を持たないのですか！神にとつて都合の良い人物を選び、まだ生きるかもしれない人間を殺して無理矢理輪廻の輪に戻す。ゆくゆくは神にとつて都合の良い魂だけになる…これではただの選民主義者によるジェノサイドではないか！！』

前の世界では、死神が離れた後、手術は成功しユリ子は生き延びる。それを知っているが故に、和樹には死神のやっている事が許せないのだ。神の都合で、なんの罪もない人間を殺す。それが、かつてのGSによる妖怪の虐殺に重なった。

『神族である貴女が、同じ神のやる事を否定するのですか…』

神格の違いを悟った死神が、口調を変える。それがまた、癩にさわった。

『あなたに信念はありますか？ただ命令に従うだけならロボットと同じ、それこそ人間以下です。そんな者の言う事に耳を傾けるほど私も暇ではありませんからね。』

スラツと霊刀を抜く。

『あなたが娘を殺すと言うなら、私があなたを殺してあげましょう。』

『ぐっ……………』

死神がたじろぐ。和樹の発した神気は上級神族レベルに達する勢いなのだ。格が違いすぎる。

『わ、分かりました。この娘の魂を狩るのはやめにします。』

『うむ。あなたはこれを機に自分を見つめ直すと良いでしょう。何を信じ、何を疑うか。神族と言えど一枚岩ではないのです。自分の意志で動く事を覚えなさい。』

『承知しました…。』

そう言っつて、死神は去る。

和樹も、神気を解いて元の姿に戻った。やれやれ、今回も神気振りかざして脅迫だ。それも、今回は小竜姫の因子に引つ張られ過ぎていた。いつそ本当に神族になってやるうかと、和樹はボヤク。

「終わりましたよ。」

和樹がそう言っつと、初めておばさんは笑顔を見せた。

「ありがとうございます……………娘を助けてくれて、本当に……………」  
感極まっつてあふれ出す涙。神父はそれを見て、複雑だった。

先ほどの会話。それは自分にも当てはまる。疑う事を拒否し、盲目的に信じる事で自分は神の加護を得て、除霊の力とする。しかし、その姿勢を貫くならば今回の件ではこの娘を救えなかつただろう。

「さて、帰りましょうか。」

三人は病室を出て、薄暗い廊下を歩く。死神との一件で人払いの結界も展開したせいか、まわりに人の気配はない。

「どうします？送って行きましょうか？」

和樹がそう言つと、おばさんはゆっくり首を振った。

「そうですね。では、ここです。」

病院の入り口の前で、和樹と神父はおばさんと別れた。

……その頃病室では、去ったハズの死神と、うつむくユリ子の姿があった。

『すまんが、お前を連れては行けなくなった。』

「はい、聞いてました。」

悲しそうに呟く。

「私、生きてても仕方ないのに……。」

『そう言つな。母親もお前の事を心配していた。』

「はい。」

『母を許してやれ。間違いなく、お前の事を愛していたぞ。』

死神はそう言って、窓の外へと壁をすり抜けた。

「行っちゃうんですか？」

『ああ、これでも業績一位の忙しい身でね。早速仕事が入ったよう  
だ。』

少し冗談めかして言うと、ユリ子は微笑んだ。

「今まで、ありがとうございました。お元気で。」

『フツ、お前もな。』

黒い外套をひるがえして、死神は空に溶けて行った。

「あれで、良かったのかい。」

帰り道、神父が言った。

「どっちの事ですか？」

「あの母親の事だよ。君か私が送ってあげるべきだったのではない  
かと思ってるね。」

「ねえ、神父。あの人は何故死神に連れて行って貰えなかったか分  
かりますか？あんなに娘さん思いの良い人なのに。」

そう言うと、神父は困った顔をする。

「残した娘さんが心配で断ったからかな。」

「まさか。そんな理由なら問答無用で連れて行かれていますよ。……  
多分、彼女は自殺したんです。」

「そうか、それなら……。」

自殺は、宗教によつては大きな罪とされる。ユリ子を傷つけた事  
で、死神のリストから外れたのではないか。そう、和樹は推測した。

「でもまあ、大丈夫でしょう。」

「何故だい？」

「実は結界張る時、あの娘にかけたのは眠りじゃなくて金縛りだっ  
たんです。」

ニヤツと笑う。

「きつと、あの場にお母さんが居た事に気づいてましたよ。お母さ  
んの事、多少は許せたんじゃないかな。もしそうなら、きつと上手  
くいきますよ。」

「君は……」



神父はもう完全に目の前の少年に敗北していた。ここまで考えて動いていたとは思わなかったのだ。彼は攻撃的で不遜なフリをして、実は皆が一番幸せになる方法を考えている。

「やはり、君はGSになるべきだな。喜んで名前を貸すよ。」

「ありがとうございます。」

そう言って笑顔で振り返った顔は、先ほどと違って少年らしいものであった。

深夜。

ユリ子が病室の窓から空を眺めていると、扉を開ける音が響いた。

「あら、起きてたのね。」

看護師が言う。その姿は、和樹がこの世界で初めて会った看護師だった。

「なんだか眠れないんです。」

「そう。でも明日は手術なんだから夜更かしはダメよ?」

「はい...」

そう言つて、また目を窓の外に向ける。すると、大きな満月の中に黒いシルエットを見つけた。

あれは…死神さん？

大きな鎌を背負つた髑髏の男が、誰かを抱えて飛んでゆく。

お母さん？

あれは、お母さんだ。

私を置いていった、お母さん。けど、ずっと見守っていてくれた、お母さん。

会いたかつたけど会えなくて。もうすぐ会いにいけると思っていたら、涙を流して私に生きていてほしいと願ってくれた、お母さん。

死神さんに連れられて行くお母さんは、笑顔だったような気がした。

笑顔だったら、いいな。

お母さんには、笑顔でいて欲しかったから。私のせいで、つらい思いをさせちゃったから。

お母さん、さようなら。

いままで、ありがとう。

『やっと寝てくれましたね。』  
看護婦の口から、安堵の言葉。

『しかし横島さん…いや、和樹さんはお人好しというか何て言うか。サツちゃんには怒られるでしょうけど本格的に神族にスカウトしましょうかね。』

楽しそうに笑う看護婦。

『とりあえずあの死神には何かご褒美でもあげましょうか。』

そう言っつて病室を後にする姿は、看護婦なのにやけに神々しいオラに包まれているのであった。

## 第五話 GS試験のはなし

寒さは峠を越したものの、まだまだ寒い三月中旬。中学を卒業して、普通の学生なら気軽な春休みを過ごしている時期。和樹は公平と共にGS試験の会場に訪れていた。

「しかし多いな。人ゴミで酔いそうだ。」  
ウンザリして和樹が言う。

「高給取りの印象が世間的に強いからな。」  
面白くなさそうに公平も呟く。公平はその霊能力で除霊を行う事があるが、通常の祈祷料で受ける為、一部のGSから嫌われている。公平もGSに良い印象を持っていない。

「うわっ、二次の実技試験って相手殺しても事故として扱われるってパンフに書いてあるけど法律的に大丈夫なんかよ。」

「大丈夫なわけあるかい。前に民事裁判起こされてたハズだぞ。何故か報道されなかったけどな。」

ははは、と力なく笑う和樹。無論一度経験済みなので知ってはいたが、いろいろヤバい業界なのを実感する。

会場に、アナウンスが流れる。

『これより一次試験を行います。試験を受ける方は指定の会場へ入って下さい。』

「じゃあ、行ってくるわ。」

「適当にな。」

緊張感の無い二人は、確実に浮いていた。

昼休み。電光掲示板に自分の番号を見つけた和樹は、食堂で一人、昼食をとった。公平は急用でここにはいない。イツナは社務所で留守番。隙を持って余っていた。

「しかしなんかジロジロ見られているような。」

周囲の視線が気になる。敵意、恐れ、およそ好意的なものではない。これはひとえに和樹の自業自得である。一次試験は筆記と霊波測定。霊波では加減して、一番霊波の高い者のやや下の値を出したのだが、それがいけなかった。

そこにいた一番出力のあった男も、桁外れの力を持っていたのだ。離れ過ぎて見えなかったものの、100マイルを軽く超えていた。二次試験で決勝に勝ち進むなら、必ず当たるだろう。

周囲の畏怖の視線は、その男同様和樹にも向けられていた。

「面倒くせえなあ。」

言いながら、カバンから神通棍を取り出す。試合に向けて武器のチェックをしながら、昨日の出来事を思い出していた。

「オッサン、中古でいいから神通棍安く売ってくれないか。」

「いきなり来て何いうか。」

厄珍堂のカウンター。和樹は店の主人と話していた。

「今度GS試験を受けるんだが、俺がここの神通棍を使えば良い宣伝になるだろ。この間驚かせたお詫びだよ。」

「むむ…」

眉をひそめる。

「それだけじゃないネ。何が狙いアルか？」

「鋭いな。」

和樹は笑う。

「俺、これから破魔札売ろつかと思ってんだよ。」

「じよ、冗談じゃないアル！そつちで安く売られたら相場は崩壊するネ！」

焦る厄珍。

「分かってる。だから、あんまり派手にやらないさ。俺個人でやるから沢山作れないしな。」

これは嘘だ。

「しかし、商売敵には違いないネ。」

「だから、敵対はしないよ。それどころか、協力しようと言ってるんだ。」

「むっ、どういう事ネ？」

目がキラリと輝き出した。こちら辺もさすが商売人。儲け話の匂いには敏感だ。

「俺は、元手を殆どかけずに破魔札を作れる。ペースは遅いが、強力なやつも作れる。それをオッサンの所に安値で売って……」

「こっちで相場の値段で売るわけネ。」

厄珍の目はもう¥マークに変わっている。

「これが、サンプル品だ。このレベルになると三日はかかる。」そう言っって一枚の破魔札を渡す。実際は三時間で作った。

「これは…店頭価格で百万は下らないネ。三日で一枚ならいいペーサルよ。一月十枚で七百万なら契約するヨ。」

「五百でいい。その代わりに、神通棍、頼むわ。」

「任せるアル。先行投資の意味を兼ねて新品を提供するヨ。」

こうして、和樹は厄珍を味方につける事に成功したのだ。

「しかしこりゃ本当にいい品だな。」

靈力の通りが非常に良く、また、手に馴染む。実は靈波刀で戦うと相手に深手を与えてしまうから、中古で靈力の通りが悪い神通棍を使って威力を抑えようとしたのだ。

「まあ、いいか。」　そう言ってパチンと神通棍をたたみ、カバンへしまおうとすると。

「いい神通棍を使ってるね。」  
すぐ傍で、男の声が聞こえた。

「ん？ああ、これは…」  
振り返って固まる。何故？何故、この男がここにいる？

「久しぶりだな、横島君。」

銀髪をなびかせた長身の優男。かつて世界を震撼させた魔王、アシタロスがそこにいた。

「お前…」

もう、パニックである。わけが分からない。

「困惑していると言う事は、何の説明も受けていないのか。」  
呆れたような顔をして、アシタロスは言った。

「君同様に、世界を渡ったんだよ。あの二人の依頼だね。」  
アシタロスは、かつて神界と魔界のバランスを崩した罰として魂の牢獄に入れられた。そこで全ての平行世界で永遠の悪役として



世界を敵に回し続ける宿命を負うのだが、横島たちによって倒された後、神魔の最高指導者らによって許され、牢獄より解放されたのだ。

「こちらの世界で、人間界の住人として新しい人生を歩む事になっただよ。芦 優太郎。それが私の新しい名前だ。」

「またその名前なのかよ。」  
「やっとな軽口を叩く。」

「GS試験を所得する理由は、恐らく君と同じだ。私にも人外の存在で守りたい人がいる。」

「まさか…ルシオラたちか？」  
和樹の胸が高鳴った。

「いや、まだ彼女らは生まれていない。…会いたいか？」

「それは…」  
会いたくないと言えば嘘になる。けれど、分かっているのだ。こちらで新しく生まれるルシオラは、自分の為に命を投げ出したあのルシオラとは、違う存在。

「正直、会いたいよ。顔が見たいと何度も思った。けど、会えても別人だろ。なら、余計つらい。」  
泣きそうな顔になる。

「そうか…」言葉につまる。

横島が自分を倒した後の人生は、二柱の神に聞いている。まるで

自分の人生をなぞるかのように裏切りと絶望、悲しみに飲まれ、世界を敵に回して戦った。下手な慰めは苦痛にしかならない。これ以上悲しい思いをさせるのは自分も辛いのだ。

「強く願う事だ。」

それでも、言葉にした。

「世界を渡るなんて無茶を成功させているのだ。諦めなければ、いつか会えるだろう。」

「ははは、あんに言われると、説得力あるな。」

笑う。まさか、かつての敵に慰められるとは思わなかった。

「でも、ルシオラたちじゃないなら誰の為なんだ？」

「うむ、実は妖魔の保護に加えておかしな老人を拾ってしまったね。」

「老人？介護なんてするのか、魔王が。」

「いや、それがドクターカオスという男でね。」

「はあ！？」

「またもや固まる。どんな組み合わせだ。」

「彼の研究費が馬鹿にならんだ。なのでGSになってある程度稼がないとならなくてね。今更出ていけというのも気がひけるのだよ。」

「追い出さない所が凄い。この男はかなりのお人好しなようだ。」

「と、とりあえず安心したよ。アンタがまた敵にまわるなんて想像するのも嫌だからな。」

「それは私もだ。君との戦いは真剣にやってるハズがいつの間にか化かし合いになってるからな。」

「どの道決勝で会っただろうから、今度はまともに勝負しようか。」

和樹が言うと、アシユタロスは…

「期待しないでおくよ。」と笑った。

昼の休憩を挟み、いよいよ二次試験。

ラプラスのダイスによって振り分けられたトーナメント表の名前欄を見る。和樹とアシユタロス…優太郎の名前は見事に端と端に分かれていた。

「にしても、見たこと無い名前ばかりだな。」

前の世界ではメドーサの配下の三人の他にドクターカオス、ピート、タイガー、くのいちの氷雅など印象に残る連中が多かった。が、今回は地味だ。初戦に至っては学生じゃないか。出身は六道女学院。舐められたものだ。

Aブロック。和樹の試合が初戦となる。

会場に入ると観客席には人ばかり。一般客の他に、多くのGSや警察関係の人間が入っている。GSは自分の事務所へスカウトする為に。警察はオカルト犯罪が起きた時に協力を仰ぐ他、この中から犯罪者が出るかもしれないという事で特徴的な能力者をチェックしに来ている。

『芦原和樹 対 柏木由香、試合開始!』

審判の音が、場内に響いた。

「さあ、かかって来なさい!」

栗毛のお姉さまが叫ぶ。ああ、六女のノリだ。懐かしい。まるで実践的でない、試合の為の戦い方しか出来ない六女の生徒は、GSになっても続かない事が多い。お嬢様育ちばかりで、実戦の厳しさを知ると容易にリタイヤする者ばかりなのだ。

「じゃあ、行くよ。」軽く、霊波を飛ばす。すると...

キイイーン!

着弾する手前で、はじかれる。

「どうですか! 私に霊気の攻撃は効きませんよ!」

まるで勝利を確信したかのような笑みを浮かべる。いやいや、掴んで投げたらお終いじゃないですかアナタ。和樹は失笑した。

「ふうん。じゃあ、これならどうしますか。」

そう簡単には終わらせないぞ。和樹はやや強めの霊気を放つと、着弾する直前に相手の身体を結界で包み込んだ。

「ふん、無駄ですわ！」

勝ち誇ったように言つと、先ほどと同じようにはじく。が…

キーン、キーン、キーン！

靈気の弾は結界の中から出れずに、跳ね返り続ける。

「な、なんですよ、これは!?!」

「早く消さないと、段々大きくなるよん。」

キーン、キイーン、キイーン！

「ちよ、ちよつと、なによこれ！」

徐々に大きくなる靈気の弾に怯え始める。どうも、反射技能に特化しているだけのようだ。

「靈気はじくだけしか能の無い奴がGSとか笑わせんなよ。実際の悪霊は物質を操ってぶつけてきたり、取り憑いたりするのに。」

「知らないわよそんな事！」

言いながら、恐怖で集中力が切れてくる。

「い、いやあああああ！」

ドガアアアアアーン！

結界の中で爆発が起こり、煙が巻き上がる。しばらくして煙が晴れてくると、倒れているお姉さまの姿が。

『勝者、芦原和樹！』あっけなく、勝ってしまった。

「あー、神通棍使ってねえや。」  
気づいたものの、後の祭りである。

『まさに一方的な試合でしたね、厄珍さん！』

『結界を展開する速さが尋常じゃなかったアルね。まあ相手も弱かったし小僧の実力はまだまだ分からないネ。』

解説に呼ばれていた厄珍も、神通棍を女を叩くのに使われても良い宣伝にならないと思ったのか、文句は言わなかった。

その試合を見ていた優太郎は、眉をひそめていた。

「はて、女性には優しいと聞いていたのだが。それに目つきがやけにギラついていたな。魔族因子に引きずられているのか？」

優太郎は知らない。魔人化して以降、横島は人間嫌いになっている。また、女性の因子を多く取り込んだせいで性欲もかなり減退しているのだ。もはや、かつての横島の人格ではなくなっている。異性に対しても容赦ないのだ。

優太郎は、そんな和樹を心配そうに見つめていた。

第一回戦から半刻後。GS資格所得が決まる第二回戦が始まった。

『芦原和樹 対 金堂大智、試合開始!』

「へへへ、その可愛い顔を滅茶苦茶にしてやるぜ!」

「じゃあ俺はお前の滅茶苦茶な顔を八チャメチャにしてやる。」

神通棍に霊力を通す。厄珍のテンションが上がった!

『あの神通棍はウチのアルね!厄珍堂をよろしくアル!』

『この試合は厄珍堂の提供でお送りしております。』

嘘つけ、六道メインだろ。

ゴアアアアア!

金堂とかいう男が霊力を発する。80マイルほどだろうか。なかなか大きい力だ。

「俺は負けん!GS資格をとり、妖魔ハンターとして名をあげるのだ!」

よし、死刑決定。

馬鹿な事をほざいて体当たりをかましてきた男をひらりとかわす。すぐさま後ろをとり、和樹は神通棍を構えた。

「天誅!」

ブスッ

肛門に一撃。そして…

ズガアアアアン！

「靈気を爆発させた。」

『勝者、芦原和樹！』

会場が笑いと悲鳴に沸く。

『厄珍さん、これは…』

『お通じが良くなる神通棍をよろしく！』

ガクツと実況の男がこける。

『しかし、えげつないアルよ。あの攻撃、最後に相手の体内で靈気を爆発させたアル。付近のチャクラはスタボロね。しばらく日常生活も困難になるよ。』

厄珍は、その容赦の無さに震え上がった。

この試合をVIP席で見ていた唐巢神父と六道冥菜は、集音マイクで拾った会話を聞いていた。

「妖魔ハンター…そんなものを目指す者がこんな所にもいるのか…。」

「ええ、先日貴方に潰してもらった南部グループや岩死水建設の地下施設も、そういった人たちの活動場所なのよ。」

「和樹君が怒るわけだ。」



先日の作戦を思い出して、神父も陰鬱になる。多くの実験体。殺さなくてはならなかった、自我を持たぬ妖魔たち。生きる価値もないような人間を警察に引き渡し、何の罪も無い妖魔たちを処理せざるを得なかった未熟な自分を呪った。助けられたのは、一部の自我を持った者だけであった。

「そうね、目つきが異常だったもの。」

冥菜も思い出していた。和樹の目は、あの時と同じだった。自分が妖狐を引き取りに交渉へ行った時の、あの殺気。あれはもう見たくなかった。

「彼は、優しいですが、危ういですね。」

二人には、それだけが気がかりだった。

準々決勝、準決勝と、和樹は危なげなく勝ち進んだ。幸い、普通の相手だったため神通根も普通に使って勝つ事が出来た。厄珍もここぞとばかり宣伝し、一応約束の宣伝効果はクリア出来たであろう。和樹もホツとしていた。そして…。

『決勝、芦原和樹 対 芦優太郎！』

「やっぱりアンタだよな。因縁の対決、ってやつか。」

「同じ相手に負けるつもりは無いからね。今度は勝たせてもらおう。」

「やってみる。」

「ああ、行くよ。」

『試合…開始!!』

ガキイイイン!

同時に放った攻撃が、纏った霊気を目映い光にかえて会場を照らす。

二つの神通棍が、強烈な霊気を纏った霊波刀になっていた。神通棍は霊力を過剰に供給すると霊気が漏れだし鞭のような形状に変化するが、二人は漏れた霊気を収束させ剣の形に固定させているのだ。

ガインツ、ガインツ、ギインソン!

およそ霊波刀と言えないような音を立てて、両者の神通棍がぶつかり合う。

拮抗していたかに見えた剣戟は、徐々に和樹が優勢になってゆく。和樹の攻撃は手数が多く、重い。それは体内で練られた霊力の質の高さによる。

一方、優太郎の方は霊力の総出力において和樹に勝る。しかしスピードで劣勢に立たされていた。

「ウオオアアア！」

和樹の渾身の一撃が放たれ、優太郎の神通棍をはじく。体制が崩れ隙が出来ると思われたが…

「ハッ！」 ドガッ

その体制から強烈な蹴りを放ち、和樹を吹っ飛ばした。

「ゲハッ……効いたあ……」

「神通棍だけに気をとられていては、すぐ終わってしまっぞ。」

そう言つて、左手から靈気の弾を放つ。威力は低いが、大きく、目くらましに使つたのだ。

「甘い！」

自分を気弾に偽装して距離を縮めるつもりだ。そう判断して構える。が、直感で違つと判断して背後に神通棍を振るつ。

キイイーン！

そこには、影の中から伸びた優太郎の神通棍。気弾ではなく、影に潜り込んで和樹の背後を取つていたので。丁度、照明に照らされ優太郎の影が和樹の方へ伸びていたから出来た芸当だった。

「よく分かつたな！」 すぐさま影から飛び出し距離をとる優太郎。

ズガァン！

先ほどの気弾を背中に受ける。威力は弱かったが、それなりにダ

メージを受けた。

「チクシヨウ！」

逃がさない、とばかりに跳躍する和樹。右手に神通棍、左手に霊波刀を出して二刀流とする。繰り出される攻撃は激しさを増し、優太郎をとらえる。

それは、まるでミキサーのように残酷なまでに速く視認出来ない。そして、その一つ一つが重いのだ。

「くおおおおっ！」

優太郎の腕が悲鳴を上げる。しかし、次の瞬間、信じられない光景が。

ギイイイイン！

優太郎の手放した霊気を纏った神通棍が、プロペラのように回転して盾となったのだ。

「なら、こうするまで！」

和樹はすぐさま回転の中心へ突きを放つ。そして。

ガアアアアン！

「うわあああっ！」

吹き飛んだのは和樹。優太郎の神通棍が爆発したのだ。

「神通棍は失ったが、有効打にはなったな。」

優太郎はそう言って、霊波刀を作り出す。

「くっ…クソッ！」

まさか武器を機雷のように使うとは思わなかった和樹は焦っていた。思った以上にダメージを受けていたのだ。

「さあ、今度はこちらからだ！」

優太郎の霊波刀から、小さいが無数の霊気の弾が和樹に放たれる。それはさながらマシンガン。和樹はたまらず神通棍を捨て、両手にサイキックソーサーを展開して弾をはじく。

カンカンカンカンッ

「く、くあああっ！」

衝撃が腕を痺れさせる。

「その技の弱点は、面での攻撃に急には対応出来ない事だ。」

いつの間にか接近していた優太郎は、そう言って霊波刀を真横に構えて念を込めた。途端、巨大な霊気の壁が和樹に放たれる。これは、小さなシールドでは防げない。

ズガアアアアン！

吹き飛ばされる和樹。しかし同時に…

しゅるるるるっ

「なっ、何！？」

優太郎の足に、先ほど和樹が投げた神通棍が鞭状にまとわりつき。

ドガアアアーン！

爆発した。

「ぐっ、…そうか、靈波を繋げていたのか。」

和樹の足から細く伸びた靈波の糸が、神通棍に繋がっていたのだ。優太郎が靈気弾で攻撃したために、弾幕で足元が死角になっていた所をついたのだ。

「あなたの技、真似させてもらったぜ。さすがにこれは効いただろ。」

起きながら、ニヤリと笑う。しかし…

「もう、終わったよ。」優太郎も笑う。

「は？」

『場外！勝者、芦優太郎！』

「なにいいいいい！？」

気づくと、和樹は場外に立っていた。

「最初からこれを狙っていたのだが。しかし思わぬダメージを貰ったな。」

ガクリと崩れ落ちる和樹同様、足を負傷した優太郎も、片膝をついた。そして…

二人の周りには既に倒れているスタッフの面々。

『…言葉になりません。死屍累々ですね。』

『打ち合う度に結界が破壊されるとか何処の怪獣大決戦ね…。会場の結界要員、みなご苦労様アル。観客に怪我人が出なかつたのは奇跡ね。』

『厄珍堂の神通棍は凄い威力でしたね！』

『む、無理ね、それはさすがに！使ってた二人が化け物だっただけアル。……それにしても、芦優太郎も凄い男アル。あっちにも神通棍売っておいて正解だったよ。決勝を盛り上げた厄珍堂の神通棍をよろしくアル！』

商魂逞しい厄珍であった。

前代未聞の激戦の末、負けた和樹。与えられた有効打は一回だけ、内容でも圧倒されて負けてしまった。GS資格は所得出来たものの、情けなさで泣きそうな表情をしていた。

表彰式では勿論優太郎が主席合格者として表彰されたが、和樹も優秀合格者として表彰された。審査員特別賞も受賞され、GS正免許所得とCランクからのキャリアスタートを許された。これは、主席合格者と同じ待遇である。和樹は辞退しようとしたが、優太郎の強い勧めで結局これを受けた。会場の他の合格者も、これに不満を言う者はいなかった。次元が違い過ぎたのだ。

「また、会おう。」

言葉少なに会場を後にする優太郎。和樹は何も言えないまま、その背中を見送った。

「はあ……」

ため息をつく。

「やあ、何をそんなに暗い顔をしているんだい。」

そんな和樹の背中に優しい声がかかる。

「唐巢神父…六道さんも。」

「お疲れ様〜。凄かったわよ〜、和樹君〜。」

「そんな事ないです。僕、調子に乗ってしまいましたね。上には上がいるんだって、思い知りました。」

うなだれる和樹を見て二人は苦笑いする。少なくとも、そのレベルに至っている人間は世界でも君たち二人だけだろう、と。しかし結果的に良かったのかもしれない。慢心して心が歪む心配は、もう無いだろう。

「芦優太郎か。とんでもない強さだったね。今まで聞いた事もなかったよ。」

「そうね〜、あんなに強いなら何処かで名前を聞きそうなものだけ



と。」

「なんか、ドクターカオスの関係者らしいですよ。」

そう言うと二人は固まる。無理もない、和樹からしたら危ない物をつくるボケた爺さんでしかないが、業界におけるカオスは生きた伝説なのだ。

「それなら、あれだけ強くても不思議ではないね。いやはや、とんでもない試験だよ、今回は。」

「間違いなく伝説に残るわね。」

いや、次回の方が波乱万丈じゃないか、と心の中で呟く。

「ところで、和樹君はGSになったんだけど、お仕事はしないの？」

「学生ですからね。破魔札を作る話を厄珍さんとしてるくらいです。小遣い稼ぎくらいですけど。」

「ん……。」

なにやら考えてる様子。また何か面倒な事に巻き込まれそうな予感だ。

「あのね、緊急事態の時なんか協力してもらうのは大丈夫かしら？ 勿論、報酬は出すわ。」

やはり、か。社会正義の為には動かない、と言った事を気にしているようだ。

「個人の利益の為に利用されるのはゴメンですけど…そうですね。気分よく出来そうな仕事ならお手伝いしますよ。友達に自慢して話せるような、カッコいい仕事なら。」

曖昧な、卑怯な言い方だ。

「そう。なら、その時はお願いね。」

今回はこの辺で許してくれたようだ、と和樹は胸をなで下ろす。聞いていた神父は、子供とは思えない言葉の選び方に感心していた。子供である事を利用して、汚い仕事は受けない、と予防線を引いたのだ。

一方の冥菜はホツとしていた。彼が妖怪狩りをしていた連中の情報を伝えてくれたおかげで、六道の不安要素を排除する事が出来た。そんな彼と、少なくとも絶縁されるような事にはなっていない。これだけ強力な力を持った人間を敵に回したくはないのだ。

「じゃあ、今日付けでイツナちゃんの引き受け人を貴方に登録し直しておくわね。」

「ありがとうございます。」

頭を下げると、冥菜は…

「これからも宜しくね。」

不吉な事葉を残して去って行った。

「これからもっすか。」

「まあ、我慢出来なかったら相談にのるよ。愚痴を聞くくらいしか出来そうにないが……」

神父もちよつと疲れたように言った。

神社に戻る頃には夜になっていた。

社務所に隣接する家の玄関を開けると、待ちかねていたイツナが飛びついてきた。

「コ〜ン！」

「うおっ、待たせちゃったか。ゴメンな。」

抱き止めて、頭を優しく撫でる。

「キュ〜ン」

ああ、癒やされる。落ち込んでいた気持ちが、軽くなってゆく。

「おっ、戻ったか。」

急に重くなった。

「ただいま。何とか資格は取ったよ。二位だったけど。」

「凄いじゃないか！大人も混じってたんだろ。大したもんだ！」

「いや、別に…ん？」

居間に入って、気づいた。テーブルの上に、でかいケーキがある。隣には、小さいケーキ。どちらにも、合格おめでとうの文字が。

「ああ、これな。どうせ合格するだろうからお祝いのケーキを買ってきた。こっちはイツナ用。知ってるか？ペット用のケーキってあるんだぞ。探すの手間取ったけどな！」

「じゃあ、急用って…。」

「塾の教え子にケーキ屋の情報教えて貰ったりしてたんだ。で、なんとか夜に間に合わせたんだ。」

不覚だった。もう、駄目だった。

涙が、どんどん溢れてくる。

「お、俺…。」

「なんだよ泣き虫だなあ。さ、座れ！今日は俺の秘剣、合格おめでとうでこのケーキを滅多切りにしてやる！」

「コン！？」

「やめる馬鹿親父！」

こうして、激動の一日の夜は、騒々しくも穏やかにふけて行くの  
だった。

## 第六話 横島のはなし

入会式の日の、朝。

和樹は新しい制服に身を包み、鏡を見て身だしなみをチェックする。華奢な身体からは、着ているというより着られているという印象を受ける。

「チクショー、せつかく憧れのブレザーを着れたってのに……。」

前の世界では学ランだった。近所の二条高校のようなエリート高校の制服に嫉妬したものだ。しかしいざ、憧れの紺のブレザーを着られる身分になっても、この身体である。ままならないものだ。

和樹の魂は、大部分が女性の因子で出来ている。その魂に引きずられているのか骨格は完全に女性で、どんなに鍛えても体格は変わらない。人より神魔に近い存在だから仕方ないのだが、このように学校など集団生活の場で目立つので困っていた。

「またからかわれるんだろっとなあ。」憂鬱だ。

今日は早朝から父が用事で出ているので、和樹はイヅナと一緒に食事を取った。

「じゃあ、行ってくる。留守番頼むな。」

「コン！」

玄関で声をかける和樹。尻尾をピンと立て、イヅナは見送った。

神社から商店街に出て、北へ向かう。20分ほど道なりに歩くと、

左手に大きな坂が見えてくる。そこをまた10分ほど上るとたどり着くのが、和樹の通う事になる二条高校である。自転車通学の認められないギリギリの距離にあるのが、なんとも悩ましい。

校門には、入学式の立て看板。自分と同じようにキョロキョロする新入生たち。皆賢そうな顔してるなあ、と前の世界と比較して思う。

正面玄関前の掲示板に張り出されたクラス分け表を見る。自分の名前を探していると、1・Cと括られた枠の中に自分の名前を見つけた。

「良かった、あった。」

ん？声が被ったぞ？そう思って横を見ると…

「「あつ！」「」

そこには、見慣れた顔の少年。

横島忠夫がいた。

「いやー、こんな事ってあるんだなあ！」

一緒にクラスへと向かいながら、横島が言う。似合わないブレザー。バンドナはしていなかった。

「本当だよ。まさか本当に合格するなんて思わなかった。」

「ひでえな！あの時の言葉でやる気になったつてのに。」

「それで奮起する君が凄いわ。」

呆れて言つと、横島はポリポリと鼻の頭を搔いた。

「しかし掲示板見て名前あってホツとしたよ。あそこで実は落ちてましたと言われたら暴れてたな。」

「まさか。」

言いながら、同じ発想をしていた自分が嫌になる和樹。進歩がない。

指定された教室に入ると、黒板に席順が書かれていた。五十音順だ。和樹は一番廊下側の前から三番目。横島は窓側の一番後ろだ。

「いいなあ、窓側。」

「そつちは昼飯ダツシユに有利じゃねえか。」

笑いあつてから、それぞれの席につく。

机にカバンを置いて席についてから、和樹は物思いにふけていた。お守りには、本人の実力以上の力を発揮させる事なんて出来ない。横島が合格したなはあくまで実力だ。水晶文珠の力にしても、『集中』である。前の世界では厄珍が絶対合格の呪符を売って逮捕されたが、そういつた呪いの域の技術じゃないと、実力以上の学校には受からない。



俺って、やれば出来る奴だったんだな。和樹は今更ながらに自分のポテンシャルの高さに驚いていた。

教室に、続々と生徒が入ってくる。

(やっぱり綺麗な娘が多いわ。偏差値と外見で比例するんか?)

和樹はそう思いながらぼんやりと見渡す。本人は気づいていないようだ、一番目をひいているのが自分であるという事に。

「はい、席についてー。」

担任らしいおばさんが入ってきた。

同時に、チャイムが鳴った。

入学式は、何事もなく終了した。

渡された教科書類が多くて、持って帰るのが大変なくらいしか印象に残らない、そんな入学式だった。

どちらかと言うと、帰りの方が衝撃的だった。

ホームルームが終わり、号令がかけられた後。横島の席に振り向いた時。それまで気づかなかったが、見知った顔がもう一つあったのだ。

おキヌちゃんそっくりな女の子。

ユリ子である。

手術したばかりじゃないのか？リハビリは？…いろんな疑問が浮かんだが、元気そうなので安心した。

ユリ子は横島の隣の席だった。視界に横島と一緒に入ると、どうしても前の世界を思い出してしまう。

懐かしくて、切なくなつた。

「おう、帰ろうぜ。」

近づいて来た横島に気づかないくらいに、呆けていた。

「あ、ああ。」

返事をして席を立つ。

彼女とは別に親しくならなくても良いだろう。自分は横島じゃない。人当たりが悪くても構わないハズだ。

帰り道。和樹と横島はお互いの家の場所や近況を話し合っていた。

横島は、やはり一人暮らしをしていた。家は距離的に神社と学校の間くらいの安いアパート。仕送りは普通に貰ってるらしいが、二輪の免許が欲しいからバイトを探しているらしい。

「どっかに割の良いバイトねえかなあ。」

和樹は一瞬、自分の所に呼ぼうかとも考えたが、やめた。札の売り上げが入れば難なく雇えるのだが、そこまで関わるのもどうかと

思ったのだ。

「うまい話に釣られていつの間にかマグロ漁船とかやめろよ?」

「どんなビックリ展開だよ! コンビニとか考えてんだけどな。あんまり学校の方、おろそかに出来んし...。」

うーん、と考え込み...

「バイトは夏休みとか、まとまった休みの時にした方がいいな。」

至極まっとうな結論に達した。

「ははは、氣い抜いたらすぐ留年しそうだしね、君。」

「ほっとけ!」

帰り道の途中で横島は「あ、俺こっちだから。じゃあな。」と、手を振って道を別れた。

「ああ、じゃあね。」見送って、和樹は今後の対応を考えていた。

神魔の最高指導者たちは、自分の好きにしていると言っていた。世界の事は、こっちの横島が何とかする、というニュアンスの事も言っていた。つまり、ここの横島がGSになるのを阻害したりするのは、マズいのではないか。

「いらん事言ったかな。」  
後の祭りである。

「ま、いいか。最悪俺が戦えばいいし。」

そこまで考えて気づいた。

一体、誰と戦うんだ？

アシユタロスは転生した。この世界には彼の後釜がいるのだろうか。神魔のバランスは崩壊してないのか？

頭がこんがらがった所で、神社に着いた。

まあいいや、それもあいつらが何とかするんだろう。和樹は考えるのをやめた。

「コン！」イツナの声。

「あ！また玄関の前まで出てたのか！寒いだろうに、ほら、中に入ろう！」

すぐにイツナを抱き上げて、家に入る。イツナの毛は冷たい。いくら妖怪だからって、これは冷えすぎだ。

「頼むから、中に入って待っていてくれよう。迎えてくれるのは嬉しいけど、それでお前につらい思いをさせたくはないんだ。」

「クウウ〜ン……」

すまなさそうに耳を垂れるイツナ。

「ああ、怒ってるわけじゃないんだ。嬉しかった！…ただいま、イツナ。待っていてくれてありがとうな。」

「コン！」

嬉しそうだ。和樹は、これじゃ寄り道なんて出来ないなと思いつながら、腕の中のイツナを撫でるのだった。

「で、どうだった？」

夕食時、自然と話題は入学式の事となる。

「どつて…普通だよ。校長の話聞いて、教科書貰って、おしまい。」

「つまらんなあ。何かこう、サプライズとか無かったんか。芸能人がクラスにいた、とか先生が妖怪だった、とか。」

「ねえよ。特に後者は絶対ねえから。」

「イツナだったらできそうだなあ、賢いから。」

「コン？」

「最高じゃないですか！！」

「変わり身早いな鼻血ふけ和樹。」

苦笑いする公平。

「とりあえず無事高校生活始まって良かった。俺の方はもう少ししたら塾の方やめるから、神社の方に時間使えるようになるからな。」

「ふうん、そっか……って、やめる!？」

「ああ、お前がガツポリ稼いでくれるからな。俺も神主に専念するよ。言っただろ?」

「ああ、あれ、本気だったんだ。」

和樹が破魔札を売る事に決めた時、公平は経理事務の仕事を一手に引き受けてくれた。和樹にも商売上の知識はある程度あるが、学校との両立は面倒だ。公平のバックアップは非常にありがたかった。

「来月以降は神主業メインで動けるようになる予定だ。ただ、よその神社の手伝いに行く事もあるから、その時は今まで通りお前が留守番してくれ。」

「了解。」

真面目な口振りだが、和樹は知っている。昨日、物置から釣り道具を引っ張り出していた事を。

しかし、当面の金銭的な心配はなくなったし、留守中のイツナの事も公平に任せられる、

和樹は、心配事がなくなってホッとしていた。

それから数日たったある日の事。

いつものように学校から直で家に帰ってきた和樹は、イツナを抱えながら居間に置いてあつた書き置きを眺めていた。

『氏子さん達つれて神宮参拝に行つてきます。明後日には帰るのでそれまで留守番宜しく。』

「あー、今日からだつたか。」

年に一度、近所の氏子さん達をつれて伊勢参りをするのが、二二の決まり事なのだ。

つまり、今日と明日はイツナと和樹、二人だけの夕食ということになる。

「よし、お揚げ祭りだ！一緒に買いに行くぞ！」

「コーンー!!」

はじけたテンションのままに家を出る。

イツナと二人で買い物するのは慣れている。大きなスーパーなどは一緒に入れないが、通りに面した八百屋や個人経営の店などはイツナを快く受け入れてくれる上、オマケしてくれたりする。

この日も、イツナは和樹のパーカーのフード部分に入って和樹の肩に両手を乗せる。いつものスタイル。散歩の時はいつもこの格好なのだ。

「おや、イツナちゃんのお散歩かい？」

「ええ、買い物ついでに。」

よく朝にお参りに来るおばあちゃんとすれ違い、挨拶する。こちら辺に住んでいる人とは大抵顔見知りだ。

最初に豆腐屋で油揚げと揚げ出し豆腐を買う。ここのお店は「手切り」「手揚げ」は勿論、「赤種」という煎って絞った菜種油を使った立派なものだ。大きく厚みがあつて、濃厚な味。油揚げもやや厚め。この近所では非常に評判のいい店である。

「お揚げ、一枚サービスといたぜ。」

いつもは無愛想な、いかついリーゼントの兄さんがイツナにニカッと笑いかける。

「キューーン」

喜ぶイツナ。もうこの店の名物となつた光景である。

「ありがとうございます。」

「おう、またな。」

片手をあげて挨拶。最高にカッコいい。これでホモじゃなかったらモテてただろうに。ちなみに和樹は女性的すぎて興味の対象外らしい。

豆腐屋を後にしてからは、魚屋と八百屋に寄つた。買い物を終える頃にはすっかり日も落ちて、辺りは暗くなっていた。



「ん？」

神社に戻って来た所で、空気震えるような感じがした。

「気のせいだな。それより飯だ。」

なかった事にする。今優先すべきはイツナとのディナーである。

今日はツミレ鍋と揚げ豆腐、ブリの照り焼き。イツナはお揚げと、最近お気に入りのアサリの缶詰め、野菜たっぷりなのいなり寿司である。

「いただきます。」

「コンコンコン。」

二人で向かいあつての夕食。至福の時間。この為に生きてきたと言っても過言ではない。

イツナが夢中でお揚げを食べる姿を眺めながら、悦にひたる。何度か窓ガラスがビリビリ震えたものの、花火だろう、と無視。

「...さて。」

食事を終え、ゆっくりお茶を飲んで一息ついてから、和樹はつぶやく。

「いい加減、行った方がいいかな。」

「コン。」

そりゃそうだろ、みたいなニユアンスで答えるイツナ。さすがに  
霊波まで感じとったら確認くらいした方がいいか。

「じゃあ、行ってくるよ。心配しないで。」

「コン！」

ああ寒い、行きたくないなと思ってしまっが、イツナの平和の為  
和樹は少し厚手のジャケットに身を包み外に出た。

4月。まだ夜は冷える。和樹は嫌々霊気の発生地点を探す。方向  
は南の……空？

双文珠で空に『飛翔』し、意識を研ぎ澄ます。そして、その存在  
に気づいた。

はやすぎないか？

それは、かつて自分が二度殺した宿敵、メドーサの霊気。そのメ  
ドーサの放った霊気弾の衝撃が、先ほどから空気を震わせていたの  
だ。かなり長い事戦っている。

「一体、誰と戦ってたんだよ。」

和樹はうんざりしながら現場へ向かう。自分が初めてメドーサと  
出会ったのは天竜童子が人間界へやってきた時だ。デジャヴーラン  
ドに行きたいと妙神山を抜け出した所をメドーサに狙われた。しか  
し、あれはこんな時期に起きる出来事ではなかったはずだが…。

気配を殺しながら町外れの廃工場のある一角へ行くと、そこには  
上空で戦うメドーサと、小竜姫の姿。そして、道路には…。

「あのバカ、何やってんだ！」

天竜童子を守って壁になっているイームとヤームの竜人コンビ、そして横島の姿があった。

「ははは、弱いねえ小竜姫！腕が鈍ってんじゃないかい！」

「くっ……まだです！まだ負けません！」

メドーサは小竜姫との剣戟の合間に天竜童子へ向けて霊気弾を放つ。それを、横島がサイキックソーサーではじく。イームとヤームはメドーサの放ったであろう化け物と戦っていた。

「あいつもうサイキックソーサー使えるのかよ！」

何よりそこに驚く和樹。あれは竜気を帯びたバンダナのアドバイスがあつて作り出せたものなのに。

「ひ、卑怯ですよ！正々堂々と戦いなさい！」叫ぶ小竜姫。

見ると、小竜姫は天竜童子を守るように戦っている。しかし、メドーサはトリッキーな動きで小竜姫を誘い出し、隙をついて天竜童子に向けて霊気弾を放つ。

「ハッ！甘ったれた事は死んでから言いな！」

また、霊気弾を放つ。今度は多い！

あ、ヤバい。あれはさすがに今の横島には捌ききれないだろう。

だが、次の瞬間。

「いい加減にしゃがれ無駄チチばばああああ！」

叫び声とともに、横島の前に巨大な壁が現れる。

…なんだ、あれは？

おかしいぞ、あんなモノ作った事ないぞ？和樹は困惑した。

靈気の壁はメドーサの放った弾をはじいて行く。そのたび、パリ  
ン、パリンと音を立てて何かの破片が飛び散る。六角形の破片が散  
らばり、淡い光を放ちながら空気へ還っていった。

あのバカ、無茶苦茶だ！

カラクリが分かった和樹はゾツとしながら言った。

あれはサイキックソーサー。広範囲に展開したソーサーの集合体  
だ。本来収束させて作るソーサーを幾つも作るなんて、自殺行為も  
いい所だ。燃費が悪い所か体内の靈力が枯渇して死んでしまう。

今の横島には出来ない芸当。しかし、それを可能にする物を、和  
樹は渡している。

水晶文珠である。

『集中』力の増した横島は、体内の靈力をチャクラを回すか何かし

て瞬時に増幅させ、膨大な量のソーサーを作りだしていた。しかし…

パライインッ！

ズガアアン！

吹っ飛ぶ横島。

「横島ああああ！」

干渉しないようにと考えていた和樹も、思わず叫んで飛び出した。

「オラオラオラオララー！！！」

和樹は無数のソーサーをメドーサに放つ。

ズドドドドドドドドッ！

「うああああ！？…な、何事だい！？」

あまりの量に避けきれず被弾するメドーサ。

そして、隙をついて横島のもとに駆け寄る。横島は生きていた。が、今にも死にそうなくらい息が弱い。先ほどの一撃以外にも被弾していたらしく身体中に傷を負っていた。出血が酷い。

「おい、お前竜神族だろう！ヒーリングは出来ないのか！？」

「な、なんだお前は！余は…！」

「出来るか出来ないか、どっちだ！」

怒鳴ると、天竜童子はビビって答える。

「こ、子供だからまだ出来んだ！」

和樹は焦る。こうなったら、文珠を使うか……。神族には見せたくなかったのだが。

その時、息すらまともに来ないハズの横島が口を開いた。

「わりい……ちと、無理……っばいわ……約束……。」

「よ、横島！死ぬな、お前は余の家臣なのだ！勝手に死ぬなど許さん！」

両手を横島にかざす天竜童子。竜気を集中するが……何も起こらない。

横島は、虚ろな目で横に立つ和樹を見る。

「和……樹……か……。こいつ、連れて……逃げ……。」

そこまで言っつて、言葉が途切れた。

「横島……？」

「くっ……！」

和樹は、空中でやりあっているメドーサに振り返り睨みつけた。

「ハハハハハ！死んだかい、その人間！」

『うあああああああああ！』

突如、背後で叫び声が。天竜童子から、凄まじい竜気が発せられる。両手から夥しい量のヒーリングの波動。どうやら覚醒したよう

だ。竜神の特技の一つだが、ここまでの波動は普通出せない。正統な竜神王の血筋だからこそ、だろう。

横島の顔に赤みがさし、息を吹き返す。和樹はホツとした。まさかこんなに深刻な状況だとは思わなかったから焦っていたのだが、一安心である。全く、あの神共め、結局俺が手を貸さないと駄目だったじゃないか。この世界の俺が死ぬ所だった。和樹はここに居ない神族たちに八つ当たりした。

「よくやった。後は俺に任せな。」

天竜童子に声をかけると、和樹は周囲の小物の怪物に霊気弾を放ち消滅させて空を睨む。

「少し痛い目みてもらうぞ」

文珠の力で空を飛んだ。

その頃、メドーサは混乱していた。

見知らぬ人間の放った強烈な霊気弾もそうだが、天竜童子の放った竜気には驚かされた。半端な量ではない。そして、先ほどまで圧倒的に優勢だったのに、今は全く逆転している。こうまで状況が変わると思わなかった。

やっと竜神族に復讐出来るチャンスだったのに、こうなってはもはや天竜童子を討つのは不可能だ。

なら、どうやって逃げるか。小竜姫はもうスタミナ切れで口々に戦えない。せめてコイツだけでも殺して行こうか…

そう思っただけで行動に出ようとしたら、視界に思わぬ影が入り込んできた。

「お前、人間かい!？」

それは、空を翔る和樹の姿。霊波刀を片手に、異常なスピードで迫ってきた。そして。

ガキンッ

手にしていた二又矛の柄が、霊波刀で切り落とされた。

「はああああ!？」

魔界でもトップクラスの硬度を誇る材質で作られた柄が、いとも簡単に。

「次はその腕だ。」

ザシユッ

「チィッ!」飛び散る鮮血にメドーサの顔色が初めて青ざめる。武器は折れ、片腕をやられた。得物が使えないのでは、絶対に勝てない。それに、こいつの強さは異常だ。



メドーサは、体内の靈気を集中させると加速状態に入った。

超加速。これは元々韋駄天という神族が得意とする技である。本来であれば攻撃の際の奥の手であるが、今回は逃げる事にしか使えない。

「待ちなさい！」

そして小竜姫も超加速に入る。勿論和樹も使えるが、やめておいだ。スタミナ切れの小竜姫がメドーサに追いつけるはずはない。だからと言ってここに残られても面倒だ。どうせ彼女の事だから根掘り葉掘り聞いてきて神界に報告したりするだろう。さっさと消えてもらって、彼女が居ないうちに家に帰りたいのだ。

和樹は飛び去った二人をしり目に天竜童子のもとに向かった。

「もう落ち着いたか？」

「う、うむ。そなたには無様な所を見せたな。」

「いや、立派だった。こいつを救ったんだからな。」

「いまだ寝ている横島を見ながら言った。」

「そなた、只者ではないな。何者だ？」

「ただの通りすがりだよ。待たせているヤツがいるから、もう行くわ。」

「あ、待て、何か礼を…。」

「いって。礼はコイツにやってくれ。」  
そう言って和樹は文珠に念を込める。

『転』『移』

音もなく、和樹はその場から消えた。

「今のは何じゃ？…一体あやつは？」

残された天竜童子は、呆然としていた。

「ただいまでござる。」

「コン！？」

現れたのはいつもイツナが待っているカウンター脇。案の定寒いのに外で待っているイツナ。さすがに夜は中にいると思ったのだが、念のためこっちに転移して来て正解だったようだ。

「今日は忍者の真似をしてみました。」

「コンコン！」

びっくりしたが、和樹の姿を見てテンションが上がる。

「中入ろうね。今日は一緒にお風呂の刑です。」

「コン！」

別にイヅナは風呂嫌いではないので刑でも何でもない。

和樹は冷えたイヅナを抱きながら、無事に帰ってこれた事にホッとしていた。メドーサ相手に後れをとる事はないが、久しぶりに殺し合いの場にいたのだ。やはり、家に帰ってくるとささくれかけた心が癒やされる。そして、生き延びて良かったと思うのだ。

イヅナと一緒に風呂に入り、身体を洗い合い、いつものように一緒に寝た。かけがえのない幸せな日常。こんどこそ失わない。守ってみせる。

和樹は腕の中で寝息を立てるイヅナを優しく撫でながら、心に誓うのであった。

## 第七話 猿のはなし

メドーサとの戦いのあった翌日、学校へ行くと横島は休みだった。天竜童子のヒーリングで回復したはずだが、やはり完全に治りきつてはいないようだ。水晶文珠の力を借りたとはいえ、全身の霊力をほぼ使いきって臨死体験までかましたら、そりゃ休むというものだ。和樹は、昨日の事を追求されなくて済み、ホッとしていた。

学校生活は、思っていたほど前の学校と変わりはなかった。教わる内容はどの学校も同じだし、進行スピードもそんなに差はない。

ただ、生徒の質は違う。

前の学校は乗りが良く、妖怪の愛子がすぐ馴染むくらいフレンドリーな奴らが多かった。が、ここではそこまで人懐っこいやつはいない。適度に距離感を保っている。∴そう和樹は感じているのだ。

現実には、少し違う。

勉強に熱を入れ周りが目に入らない者、人付き合いが苦手な者がたまたまクラスの多数を占めていただけだ。また、和樹自身が人を寄せ付けないオーラを出している為、話しかけてくても出来ないというのもある。

加えて、教師連中からも和樹は距離を置かれている。GS免許を持っている事は教師たちも知っているので、いろいろと聞きたい事はあった。が、GS協会、主に六道家からの圧力で和樹のGSでの活動に干渉すると言われているのだ。六道が怖い教師連中が距離をおくのは、自然の成り行きであった。

それとは逆に、横島は友達を多く作っていた。自分が頭悪い事をアピール、自虐ネタで周囲を笑わせ敵を作らないようにしていた。馬鹿にされても平気な顔で、逆にヨイシヨイして勉強を教えてもらう。彼なりの処世術はこの世界でも健在だった。

また、この世界の横島は何故かセクハラの頻度が少ない。よって女性陣から嫌われていないのだ。むしろ、好意的なのかもしれない。難攻不落の和樹とも気軽に話せる横島は、それだけで一目置かれていた。

(今日は皆、なんだか寂しそうだな。)

周囲を見まわして、和樹はそんな印象を持った。

その日の帰り。神社に戻って来ると、いつもイツナが待っている。社務所前に奇妙な格好の大男二人の姿があった。

「イツナ!？」

見ると、イツナが困ったふうにキョロキョロしている!

「うおおおおお!!」

両手に小手型の装甲、ハンズオブグローリーを展開して二人に突進する!

ズガアアン!ズガアアン!

「「うおあつ!?!」」

連続アツパーカットで二人は真上に吹っ飛んだ。その間に素早くイツナを抱き上げ離れる。ズシャアツと音をたて地面に這いつくばる二人。

「いきなり酷いぞ……」「何もしとらんのに……」

時代錯誤の飛脚スタイルの大男たち。よく見ると、妙神山の鬼門たちだ。

「何だお前ら。うちのイツナに何してやがる!」

この世界では初対面なので、知らないフリをする。

「そ、その狐にはお前の居場所を聞いていたのだ。」

「我らは、斉天大聖様の命でお前を探していただけだ!」

そう言いながら起き上がり、身体の砂埃を払う。

「ああ、昨日の件か。何だ?恩を仇で返しに来たか?」

「何故そうなる!?!…おそらく褒美を下さるおつもりだろう。だから、お呼びなのだ。」

「頼むから招聘に応じてくれんか。こつちも別に騒ぎを起こしに来たわけではないのだ。」

だんだん、可哀想になってきた。

「仕方ないな。イツナ、留守番頼む。遅くなるかもしれないから、お腹すいたら冷蔵庫から好きなもの出して食べていいから。」

「コンコン！」

イヅナは妖怪だ。冷蔵庫を開け閉めしたり、水洗トイレも使えるので賤いらずなのだ食事くらいなら、自分で容易してしまう。

「ふむ、では行こうか。」

そう言つて、鬼門の一人がカゴの御簾を上げる。おいおい、まさか妙神山まで行くのか？和樹がそう思いながらカゴに乗ると、二人はむにゃむにゃと呪文を唱え…

「ムン！」

空間に歪みを作ると、カゴもろとも飛び込んだ。

視界のもやが晴れると、そこは懐かしい妙神山であった。標高の高い山であるにも関わらず、肌寒さを感じさせないのは神界に限りなく近いからである。

「亜空間をつなげたのか。」

カゴから出て辺りを見渡す。すると、修行場の手前に見知った人影を見つけた。

「和樹？」

向こうもこちらを見つけたようだ。

「横島：何やってんだお前。」

呆れてつぶやく。横には小竜姫、そしてヒヤクメがいた。

「芦原和樹さんですね。斉天大聖様がお待ちです。申し訳ありませんが、すぐに謁見の間へ来てもらえますか？」

「ええ、いいですよ。」

さっさと終わらせるに限る。言われるがままに、小竜姫の後ろについていった。

建物の中に入り、広い廊下を和樹、横島、小竜姫、ヒヤクメの四人で歩く。ヒヤクメはこちらが気になるらしく、何度か心眼を使って和樹の心を覗こうとしたが、和樹は護身用に持ち歩いている水晶文珠に『遮断』と入れて防ぐ。口には出さないが、ヒヤクメは何故心が読めないのか分からず混乱していた。

「しかし、やっぱりあれは和樹だったんだな。」

「ウチの近所でドンパチやらかしてたから様子見に行っただけだよ。」

そっけなく、面倒くさそうに話す。実際面倒くさかったのだ。

「ま、まあそう言うなよ。助けてくれてありがとうな。」

「ただの気まぐれだって。感謝の気持ちは受け取っておくけど。今度ジュース奢ってよ。」



「わかった、青汁な。」

いらんわ。

そんな会話をしていたら、小竜姫が口を開いた。

「つきました。失礼の無いよう、お願いします。」

大きな扉が、物々しい音を立てて開く。

前の世界では一度も見た事のない部屋。磨き上げられた大理石の間の中央の座に鎮座するのは、斉天大聖孫悟空。巨大な大猿の姿だ。あの老人の姿ではない…おそらく正式な場ではこの姿なのだろう。その隣には天竜童子。緊張した面もちをしていた。

「急に呼び出して済まなかったの。」

斉天大聖は威厳に満ちた声で話し始める。

「先日のメドーサによる襲撃は、本来神界の者だけで処理すべき問題じゃった。そなたらを巻き込んでしまった事を、まずは詫びたい。済まなかった。そして、天竜童子を守ってくれた礼も言おう。ありがとう。」

頭を下げる斉天大聖に、横島が慌てる。和樹は、複雑そうにそれを見た。

「それで、二人には神界を代表して何か礼をしたいんじゃないが…まず横島忠夫。お主は何を望む。大抵の事は叶えてやれるじゃろう。」

「え、おおお俺っすか！？いや、いいっすよ礼なんて！さっきの言葉だけで俺は…」

このやり取りを聞いて、和樹は釈然としない気持ちになった。前の世界では、天竜童子のくれた小判が褒美だったが、結局全て美神さんに没収された。今回はどうだ。がつつかずに謙虚でいれば、もっと得出来たじゃないか。和樹は、自分より遥かに上手くやっているもう一人の自分に、嫉妬していた。

和樹が嫉妬まじりの視線を向けていると、それまで困っていた横島が恐る恐る口を開いた。

「あのー、その天竜童子殿下と遊びに行くって約束したんですけど、それが褒美って事じゃマズいですか？」

「よ、横島！」天竜童子の顔が輝く。…これは本当に横島か？

『ふむ、欲が無いのう…ならば、天竜の同行を認めよう。護衛には小竜姫をつけようかの。』

「あ、ありがとうございます。」

和樹は横島に近づいて、耳打ちする。

（おい、お前なに猫被ってんだよ。）

（俺だって時と場合は選ぶわ！今は無事に帰りたい！）

（なんだ、ビビってただけか。）

（それに小竜姫様も同行するから、これもデートみたいなもんだろ！女の子と遊びに行く事には変わらん！）

(……………)

横島は横島だった。

『では、次に芦原和樹。』

「はい？」

こっちはリラックスしたものだ。気の抜けた返事に、小竜姫が少し顔をしかめる。

『実質的にメドーサを撃退したのはお主らしいのう。お主にも褒美をやりたいんじゃないか？何かあるか？』

「うーん、これと言って欲しい物が無いんだよな。困ったなあ…。」

この発言に、皆が驚く。横島の発言が遠慮や優しさからくるものであるのが皆が理解していたが、和樹は違う。遠慮なしに考えて、無いと言ったのだ。

「実際、近所で騒いでいる連中を注意しに行っただけですからね。強いて言えば、もううちの近所で騒がないでくれればそれでいいというか…。」

『む、むづ。それは済まなかった。それとは別に、何かないか？』

それはそう来るだろう。褒美が部下の躰とかおかし過ぎる。

「えっと…じゃあ一つ。俺は妖怪を保護してます。今後、人間界で困ってる妖怪や魔族がいたら同じように保護したいのですが、場合によってはその神様と敵対しちゃうと思っんですよ。」

そう言っつて小竜姫を見る。向こうは、信じられないといった表情でこちらを見ていた。

『むっ、それは超法規的な自治権を認めよ、という事か？』

「いえ、そこまでは望みません。根っからの罪人であれば引き渡します。ただ、それが保護すべき存在ならば。俺が家族として迎え入れた存在を彼女が傷つけようとするならば。」

挑発的に目をギラつかせる。

「実力で排除するでしょう。その事を覚えておいて頂きたい。それだけですよ。」

場に緊張が走る。

事によれば小竜姫であろうと排除する。それは神界を敵に回す事も恐れないと公言…いや、もう挑発に近い。小竜姫は怒りに顔を真っ赤にし、横島とヒヤクメは青ざめる。そして斉天大聖は…

『はっはっはっはっは！なるほど、お主らしいわい！！』

愉快に笑う。そして、その姿を大猿から老人の姿に変化させる。和樹には見慣れた姿。その額には…小さなキズがついていた。

「！」

驚く和樹。あのキズは、前の世界で自分が付けたキズだ。初めて老師に有効打を与えることが出来た、その時のキズ。記念に残して置いてやるう、と老師は治さずにいた。そのキズがあるという事は…。

『お主の事は既に神魔の最高指導者から聞いておる。よかるう、お主には今後迷惑をかけんように配慮しよう。これでよいか？』

「は、はい、結構です。」

答える和樹の音が、少し震えた。自分の知ってる、あの老師が目の前にいる。会いたかった。会って謝りたい事がたくさんあった。

『和樹。少し二人で話せるか？』

「分かりました。」

…じゃあな、横島。デートだっけ？頑張れよ！」

「あ、おい！」

後ろで何やら言っているが気にしないで、老師の後について行く。小竜姫は混乱しているだろうな。和樹は心の中で少し反省していた。さっきはちょっと意地悪だったかな、と思ったのだ。

老師について行くと、見慣れた部屋に出る。そこは、かつて自分が修行をした部屋。意識を加速させ、時の流れを遅くする特殊な部屋だ。

『懐かしいじゃろう、和樹。…いや、横島よ。』

「ええ、老師。」

答える声には様々な感情が混じる。

「ご存知だったんですね。」

『うむ。お主の事はずっと見ておったよ。最後まで。』  
最後。その言葉が重い。

「結局、老師の言った通りでした。憎しみの向こうには何も無くて…守るべき者も守れずに終わりました。」

『馬鹿者が。本当に大馬鹿者じゃ、お主は。』

老師の声も震えていた。

自分が一番可愛がった弟子である。かつての自分のように破天荒な戦い方で、実力が上の者とも戦った勇氣と悪知恵を持つ男。自分と同じように、単身で神、魔に挑み、そして敗れた不肖の弟子。

「小竜姫との事…すみませんでした。」  
頭を下げる。ずっと謝りたかった。

『その事は神界の問題じゃ。お主のせいではないわい。』

老師の言葉に、少し救われたような気になる和樹。が、そう思っ  
てしまう自分にまた自己嫌悪する。

魔人化した横島を止める為に立ちはだかった小竜姫。神界に属する彼女にとつて、上からの命令は絶対だ。横島の気持ちを理解し、悲しみを共有していながら、敵対するしかなかった。結果、横島に敗れ吸収される事を選んだ。横島と一つとなる事で、神界のしからみから解き放たれたのだ。

『何も恨んではおらん。ただ、己の不甲斐なさが悔しいのよ。お主や小竜姫にあんな思いをさせて、のうのうと神界に引きこもっておった己が、な。』

老師は事件の直前に神界に呼び出され、仕事に忙殺されていた。思えば、これも策略の一つだったのだろう。

「いえ、老師は悪くないです。俺の至らなさのせいですから。」

『…もう分かったと思うが、孤立してしまうとどんなに強くても負けてしまう事もある。このワシでもそうだ。身をもって知ったお主にはいまさらかも知れんが…。』

「分かってます、この世界の小竜姫の事ですね？」

和樹が言つと、老師は頷いた。

『あの小竜姫はまだ未熟じゃ。不甲斐なく見えるかもしれんが、あまりキツク言つてやらんで欲しいんじゃ。なるべくなら、こちらでも友好的な関係を築いて欲しいもんじゃが。』

「ええ、自分でも言い過ぎたかも、と思いました。ただ、ここ的小竜姫はどうも好きになれなくて…。」

ここの小竜姫はまだ頭が固い頃の小龙姫。神界の命令に疑問を抱かないでどこか人間や魔族を見下した、神族らしい神族なのだ。

『今後この妙神山を利用する事もあるだろうし、あまりつついて険悪になっても困るじやろう。』

「ええ、わかりました。」

和樹はそう言ったものの、仲良くする気はなかった。それは横島としての気持ちよりも、同化した小龙姫の意識がそうさせていた。

和樹の中にはルシオラと小龙姫がいる。完全に同化している為、心は三人の性格が混ざりあっていた。そして、その小龙姫の心がこの世界の小龙姫を嫌っていた。

あれが、本当に私なのだろうか。私は、あんなに弱かっただろうか。和樹の実力も計れないくらい未熟だっただろうか、と。

『ふむ、不満が溜まっておるようだの。久しぶりにスカツとするか？』

「いっすね。」

両者が距離をとって対峙する。やはりここは武神同士。もやもやしたら戦って発散するのだ。



外の時間にして10分後。修行場からボロボロの衣服で出てきた和樹は、外で待っていた三人を見て驚いた。

「お前ら何してんだ？」

「お前こそ何してんだよ！ボロボロじゃねえか！」心配そうな横島。

『いや、ちと加減を忘れてしまつてな。』罰の悪そうな老師。

先ほどの戦い。最初は普通に戦っていたが、勝てそうもないと判断した和樹は、文珠で老師の如意棒を『柔』らかくしたのだ。それどころか、床を『滑』らせ壁を『粘』つかせた。しまいに鼻面に『臭』文珠を炸裂させたところで老師がキレたのだ。

「あんたの本気はシャレにならないから止めて欲しかったよ。」

苦笑いする和樹の言葉に、小竜姫は言葉をなくす。

言いたい事が沢山あった。

自分を舐めきつた態度。斉天大聖老師に対する不遜な振る舞い、何故最高指導者の名前が出るのか。魔族を保護するとはどういうつもりなのか。そして何より…一体何者なのか。

しかし、先ほどの言葉で悟る。

この男は自分より強い。斉天大聖老師を本気にさせた。それがどういう意味を持つかは、一番弟子の自分が誰よりも良く知っている。そしてそれ程の強者が人間界に居る事を神魔の最高指導者が知っていて、好きなようにさせている…。

これは、もしかしたら自分などには触れる事の出来ないレベルの話なのではないか。最高指導者の関わる、そんな話の中心に居るのがこの男なのではないか。そう思ったら、声をかけられなくなった。

ヒヤクメに至っては先ほどの自分の所業を悔やんでいた。勝手に心を覗こうとして、ブロックされたのだ。偉い神と繋がっているなら重い罰を受けるのでは、と。

「老師、俺は帰りを待ってるやつが居るんで帰ります。」

『そうか、気をつけて帰るのじゃぞ。またいつでも来るといい。』

「え、帰るのか？」

横島が不安そうに言う。

「なんだ、お前帰らな……ああ、明日、ここから一緒に出発すんのか。」

「お前も一緒に居てくれると心強いんだが……。」

「嫌だよ。俺は神社で留守番しなきゃならんもの。まあ、頑張つてエスコートしてこいよ。じゃあね〜。」

手にした文珠を発動させて転移する。

その場にいた老師以外の者が啞然としながらそれを見送った。

「待たせたな！」

社務所の屋根の上でポーズを決め、颯爽と登場！

「コーン！」

「とっつー！」

ジャンプして空中で無駄に回転し着地！すかさずイツナを抱きあげる。

「正義なんてどこ吹く風！イツナの使者、和樹マン参上！……ただいまイツナ〜いい子にしてたか〜？」

「キュ〜ン」撫でまくる和樹。もはやただの馬鹿である。

「む！冷えてるじゃないか！これはもうランデブるしかあるまい。」

「コ……コン？」意味が分からないイツナ。

「ごめん、自分でもよく分からない。とにかく中に入ろう。」

素に戻った和樹を見てホツとするイツナ。このように、和樹の暴走はイツナでもついていけない時がある。

結局先日と同じように一緒に風呂に入り、少し遅めの食事をして、その日は終わった。横島は今何をしているだろうか。布団に入ってイツナを撫でながら和樹は考えていた。

自分の力を知られてしまった。小竜姫とも会ってしまった。老師と会えたのは嬉しかったが、これ以上あまり迷惑をかけたくない。やはり、神族とは距離を置いた方がいいだろう。これから自分はどう振る舞っていけばいいのか…。

ぐるぐると考えを巡らせていても何も良い考えは生まれて来なかった。仕方なく目蓋を閉じる。イツナの寢息に耳元をくすぐられながら、和樹はゆっくりと意識を沈めていった。

#### 【横島忠夫】

ええ、もう質問責めですよコンチクショー！

和樹め逃げやがって、俺だって早く帰りたいってのにこの人たちが家に一旦帰してくれと言っても聞いてくれないんだよ！

「あの和樹という人は何者なんですか！？」

知らないっスよ小竜姫様、まさかクラスメートがあんなスーパーマンだったなんて夢にも思わないっての。

「あれだけの霊力を持ちながら無名とかありえないのねー。」

そうですねかそりゃ良かった早く帰りたいんですが。

「何か予定でも？」

「ふふふー、私は知ってるのねー。」

ああチクシヨー覗きやがったなスケベ！

「スケベは横島さんなのねー。」

俺のバッグからいつの間にかパクったのか知らんが、ヒヤクメの手には昨日買ったエッチなビデオが！

「横島さん……」

しよーがないでしょー！こちとら健全な男子なんやから興味くらい持つわー！

今更言えねーよなあ、あの時バッグに入れてたこれを守る為に必死になったらあの霊波の円盤作れたなんて。天竜童子？誰ですかそれ？

「この娘、和樹君に似てるのねー。」

あああ、触れてはならん所に！

「横島さん……（赤面）」

何照れてんの！？違うよ、そういうんじゃないんよ！？

だいたいアイツが女顔なのが悪いんや！最初見た時勘違いして抱きついて可愛いなーやーらかいなー、なんて思ったら男だったなんて人生で一番驚いたわ！それからエロい妄想かます度にアイツの顔

がチラついて…

「それって恋、なのねー。」

おぞましい事言つなや！

それ以来考えるの怖くて必死に勉強に打ち込んでたら一流高校に合格しちまったよコンチクショー！

「な、なんとというか凄い理由ですね。」

「BとLの織りなす奇跡なのねー。」

やめろと言つに変態神族！

「でも、これは…女性同士しか写っていませんが。」

ああ、神様がAVのジャケット見入つてるとかそれだけでご飯三杯…

ゲフン、ゲフン！

いや小竜姫様、恥ずかしいんで返してくれませんか！

「きつと、和樹君が他の男の人に触れられるのを見たくないのねー。」

ああもういい加減にしてくれ！

和樹、助けに来てくれえええええ！



## 第八話 蛇のはなし

それは斉天大聖老師との再会の次の日。日曜日であり横島が天竜童子と遊びに行く日、和樹は裏山に奇妙な気配を感じてそこへ向かっていた。

イツナは念のため社務所で留守番。  
ことによると戦闘になるかもしれない…直感でそう感じた。

結界の有効範囲を超えて山の奥に入る。以前イツナの封印を解いた場所よりさらに奥。そこは既に別の山に至っていた。

「初めて見るなあ。廃病院…かな。」

そこには、酷く廃れた病院があった。気配は間違いなくここからしていた。

和樹は遠くから霊視する。気配は一つ。やけに弱っている。

油断はしないが、和樹は大胆に正面玄関から中に入る。その人物はこちらの気配に気づいているが、動かずに体制を整えて待ち構えている。逃げる事も困難な状態なのかもしれない。

二階、和樹が霊波刀を構えながらナースステーションだった大きな部屋に入ると、勢いよく飛び出してきた何かの攻撃。

ズバッ

「ぎゃあああああ…！」



悲鳴をあげたのは…  
メドーサだった。

「お前か。何やってんだよこんな所で。」

「クツ…不意打ちも効かないか。」

悔しそうな表情。見ると、この間斬りつけた腕以外にも無数の傷。剣というより獣の爪痕のような物が多い。同族にやられたのだろうか。今つけた傷は肩。もう戦うのは無理だろう。

「大人しくすれば命まではとらないけど。」

「ふざけるな人間風情が！死ね！」

最後の力を振り絞って跳躍するメドーサ。仕方ない。

ザシユツ

和樹の斬撃をまともに受け、身体を切り裂かれる。そこに和樹は文珠をかざす。

『霊』『基』『崩』『壊』

四つの文珠が光を放つと、メドーサの身体が霧のように拡散してゆく。神、魔の存在は基本的に霊体イコール肉体である。それを拡散させる事は死を意味する。

「ふ…ふふふ、これ、が…あたしの……最期…。」  
涙のような物を流して、メドーサは霧散した。

『収集』

そこに新たに双型の水晶文珠を使い、霊基を残さず集める。

『封印』

文字を変えてメドーサの霊基…つまりは魂を封じて、和樹は廃病院を後にした。

神社に戻って来た和樹は、社務所には寄らず直接本殿に上がる。これから起こる事をイツナに見せると、多分驚いて怖がるだろうからだ。もっとも、既にイツナは気づいていてこっそり物陰から覗いているのだが。

和樹は先ほどの水晶文珠をポケットから取り出すと、しばらくジッと見つめ…

パクッ

(コン!?)

飲み込んだ。

文字を『封印』から『構成』に変える。身体の中でメドーサの魂が再構成される。そこに、前の世界で倒されたメドーサの因子が結

びついた。

和樹は前の世界の月での戦いで一度メドーサを取り込み、アシユタロス戦でも『滅』文珠で拡散させた際にその因子を吸い込んでいた。その因子が、この世界に結びついていったのだ。人格に影響するほどの量ではなかったが、これで和樹の記憶を共有する事になる。

「おええええつ」

(コーーン!?)

口の中から飛び出した一匹の白蛇。

ボトツと重い音を立てて床に落ちると、瞬く間に人型へと姿を変えた。

「あ、あんたは…。」

困惑しながら和樹を見る女性。それは紛れもなくメドーサであったが、外見はかなり変わっていた。

艶やかで落ち着いた淡い紫の長髪。透き通るような白い肌。ケバケバしいメイクも消え、神々しささえ感じられる佇まいの女神が、そこにいた。

「へえ、本当はそんなに綺麗だったんだな。」

「え？」自分の変化に気づくメドーサ。

「あ、あたし神族に戻ってる？」

「普通に再構成しただけなんだが。俺の中の小竜姫の仕業かもな。」

でもこれでお前をメドーサだと分かるやつも少なくなっただる。生きやすくなるんじゃないか？もう、自由な身だ。」

既にメドーサは和樹の記憶を持っているので、和樹が本気で自分を助けようとしているのは理解している。ただ、どう言っているのか分からない。

いきなり流れこんだ記憶。それは報われなかった男の絶望と悲しみに満ちていたが、ほんの少しだが、輝いている記憶があった。魔族や妖怪たちと過ごしていた時間。それは誰も傷つかない、優しい記憶であった。メドーサ自身も夢見たユートピア。もしかしたらこの男は、自分の事を理解してくれるのではないか、と期待してしまっただ。離れたくないのだ。

「あたしを自由にするのかい？」

「ああ。お前はもう指名手配の魔族じゃないし。これ以上何か企むなら倒すけど、そこまで馬鹿じゃないだろ？」

それはそうだ。自分を魔族へと追いやった神族への復讐心と、元神族というだけで差別する魔族連中への敵対心だけで今まで生きてきた。もう誰にも追われる事がなくなるのなら…。それに、前の世界でもコイツに二回も倒されている。勝てる気がしない。

「でもあたしに居場所なんてないよ。メドーサだとバレたらまた追われるさ。」

「仕方ないなあ…。じゃあお前、ここの神様しろよ。」

「はああ？」「さすがに驚く。」

「ここ、祭神居ないからちようどいいよ。社をもてば神格も上がるし、もつと力をつけられる。簡単に倒される事もなくなるだろ。」  
実際、商店街の有志によって建てられた経緯のある、この町の人間の為の神社だ。神社本庁クソ食らえ的スタンスの社でもある。決まりなんてあつてないようなものだ。

「いや、だってあたし魔族だったんだよ？」

「今は綺麗な女神様だ。問題ないだろ？」

メドーサは赤面する。ここまでストレートに、なおかつ当たり前のように綺麗だと言われた事などなかった。

「いいのかい？迷惑かけるよ？」

「俺が誘ったんだ。俺が責任とるさ。」

その、そっけなくも温かい言葉に胸が熱くなる。堪えきれない涙が、頬を伝っていった。

この男は、本当に守ろうとするだろう。神界、魔界、人間界を全て敵に回した男なのだ。

やっと、自分の居場所を見つけたような気がした。

「分かったよ。じゃあ、あたしに新しい名前をくれないか。もうメドーサとは呼ばれたくないんだ。」

「え？ああそうか。考えてなかったな。どうしよう。」

和樹はしばらく考えて…

「紫の花…そうだな、藤姫とかどうだ？なんか戦国時代とかに出てきそうな名前だけど。」

「藤、か。いいね。あの花は好きだよ。じゃあ、あたしは藤姫だね。よろしく、和樹。」

「ああ、よろしくな、藤姫。」

互いに少し照れながら握手をかわす。

こうして、和樹のもとに新しい家族が加わった。

和樹は藤姫と二人で社務所に戻ってくると、いつもの場所で待っているイツナを紹介した。

「妖狐…記憶の中にあるタマモとは違うみたいだね。」

「ああ。裏山に封印されていた九尾の別の欠片みたいだ。仲良くやってくれ。」

「コン！」

「ふふふ、宜しく頼むよ。」

藤姫はそう言ってイツナの頭を撫でた。

「さて、そろそろ帰ってくると思うけど、ここには俺とイツナ以外

にもう一人住人がいる。俺の親父だ。」

「挨拶しなきゃね。同居を認めてくれたらいいけど…」

「心配ないよ。きっと大丈夫だ。それと、一緒に帰ってくる氏子さんたちにも顔見せして欲しいんだ。ここの商店街の役員さんが多いから、挨拶してくれると助かる。」

「ああ、言う通りにするよ。」

藤姫は快く承諾した。それにしても、しっかりしてるものだ、と藤姫は思う。いくら二度目の人生だとは言え、大人過ぎる。

「戻ってきたな。」

神社の参道の方からマイクロバスが入ってきた。駐車スペースに落ち着くと、中から氏子の人たちがゾロゾロと降りてくる。

「まあ、挨拶するだけだから気軽にな。」

「あ、ああ。」

緊張した表情の藤姫の手を引いて、和樹は父のもとへ向かった。

さて、結論から言おう。

挨拶だけではすまなかった。

「今日から神様住むよ。」

のん気な和樹の発言に腰を抜かす公平をよそに、氏子たちのテンションはヒートアップした。何せこの神社は神社本庁に迎合せず自分たちで作り上げた神社だ。だから、今までよその神社から祭神の御霊を勧請してもらおうとしても本庁から圧力がかかり許可を得られなかった。仕方なく名も無き神を祭ったのだ。そこに、本物の神様が降臨して駐留してくれるという。神族が駐留する神社など、この世界には数えるほどしかない。テンション上がるのも当たり前なのだ。

「藤姫と申します。宜しくお願いします。」

「……べっぴんさんやー!」「」「」

横島がお前ら、という勢い。

氏子たちは即座に商店街の店という店に連絡をとり、酒と料理を注文しまくる。こうして、神社を会場とした大宴会が開催される事となった。

「ど、どうなってるんだい!？」

「いや、予想してなかった。」

「コン……。」

三人が呆然とする。公平は今や現場責任者。会場設置の準備に大



忙しであった。

はるばる伊勢まで行ってきたというのに、氏子たちのパワーは底知れなかった。深夜まで続いた宴会は役員たちの飲む酒が無くなった所でお開きとなった。最初は皆、藤姫に酒を注ぎに行っていたが、途中からは藤姫がお酌をしに回るといふ不思議な事になっていた。藤姫は自分を歓迎してくれるという雰囲気を知って、上機嫌であった。

深夜をまわる頃には、役員全員が帰宅した。公平は酔いつぶれた人を運ぶタクシーの手配などで疲れきっていた。さすがの藤姫もくたくたのようだ。和樹は明日学校があるので公平が先に寝かせた。無論、イツナも一緒である。

「お疲れ様。すまないね、疲れて帰ってきた所に宴会なんてさせてしまつて。」

宴会場となった斎館で、辺りに散らばるゴミを片付けながら、藤姫が言う。

「いや、平気だよ。あの連中と付き合ってたら宴会だらけだから慣れたもんさ。」

公平は苦笑いしながら答える。

「あんだ…人間じゃないね？」

藤姫は抱いていた疑問を口に出した。

初めて見たときから、違和感を感じていた。パツと見の靈波が、不自然に小さい。なのに、漏れ出す靈気が異様に濃いのだ。

『さすがやな。一目で分かるとは思わんかった。』

「!？」藤姫の顔が強張る。

公平の身体に重なるように、一柱の神の姿が現れる。それは魔界に住む者なら知らぬ者はいない、最高指導者…

サタンの姿であった。

「な、何故貴方がこんな所に!？」

『そんなん、和樹がおるからに決まっとるやん。自分、横っちの記憶持っとるやろ?』

「そ、それはそうだけど…」

困惑するなという方が無理だろう。

『罪滅ぼしも兼ねて、アイツの力になっとるだけや、自分も一緒やる?ここに住むならいらん氣遣いせんでええよ。』

「あたしは…ここに居ていいのかい?」

『あんだだけ歓迎してもらって何言つとんねん。和樹がええ言つとる上に氏子まで歓迎しとる。それに…藤の花の名前もらったやろ?その花言葉知っとるか?』

「花言葉……あっ！」

藤の花言葉。それは、『アナタを歓迎します』

『ここにおける資格としては、それ以上のもんはないやろ。』

「あ、ありがとう……嬉しいよ……。」

和樹が守ると約束して、人間たちも歓迎し、さらに魔界のトップまで黙認してくれる。

本当に、自分はもう平和に生きて行けるのだ。

『まあ、自分もこれからは神として頑張り。なんかあったらワイが相談のるし。なんせここの神主やからな。』

「まったく、なんて神社だい。」

祭神は元魔族、神主はサタン、手伝う息子は魔人で飼ってるキツネは妖怪なのだ。

藤姫は苦笑いしながらも、どこか楽しそうにつぶやいた。

## 第九話 竜のはなし

朝、である。

実は高校一年の分際でたらふく酒を飲んでいた和樹。当たり前のように二日酔いで気分は最悪だった。

「頭痛い…。」

学校なんて行きたくない、と思ってしまっが理由が理由だけに本当に休んだら公平に蹴り飛ばされるだろう。

「自業自得だよ。はやく起きな。」

「ん？」なにやら頭の上から声が。よく見ると目の前に何やら大きなふわふわが。

「なっ、藤姫！なんで俺の布団で寝てんだよ！」

「クツクツク、本当に気づいてなかったのかい？自分から顔を埋めて幸せそうにしてたのに。」

悪戯が成功して、してやったりといった表情で藤姫が言う。寝てる間の自分に嫉妬している和樹の頬にキスをすると、布団を勢い良くひっぺ返した。

「起きな！朝食ならあたしが作ったよ。あんたはさっさと着替える！」

「わ、分かったよ。」

時間を見ると、いつもよりだいぶ遅い。今から朝食を作っていた

ら間に合わなかっただろう。自分のかわりに食事を作って、遅くまで寝かせてくれた藤姫に感謝した。

布団の中ではイヅナがまだ寝ていた。

「これだけ隣で声出して起きないとか、随分神経図太いねえ。」

「悪意には敏感なんだけど、俺のそばだと安心しきってこうなるんだ。起こしたかったらこうするんだよ。」

イヅナの耳に口をつけ、ゆっくり息を吹き付ける。

「むふ〜」

「コン!?!」覚醒。

「……………」

ちよつと溺愛ぶりが行き過ぎてるような気がするものの、言ったら怒られそうだから言えない藤姫だった。

朝食はオーソドックスな洋食。トーストとハムエッグ、サラダと牛乳である。イヅナにも玉子焼きとコンビーフを用意しているあたり気がきく。というかそのコンビーフは公平のつまみである。

「料理できたんだな。美味しいよ。」

「これくらい、何てことないさ。人間界に潜伏してた期間長いから、自然と覚えたよ。」

褒められて満更でもない様子の藤姫。

実際、アジトとしていた場所では普通に料理していた。あまり外食していると目立つし、監視カメラに姿を残すと活動範囲からアジトを特定される恐れがあったからだ。

「あー、美味しかった！ご馳走さまー！」

「お粗末さま。イツナはゆっくり食べな。」

普段食べないコンビニーフをしみじみ味わってるイツナに声をかけると、和樹を見送りに玄関まで付いていく。なんというか、まるで母親のようだ。

「じゃあ、いつてくるよ。」

気恥ずかしさに顔を少し赤らめる和樹に、藤姫は幸せそうな笑顔で…

「いつてらっしやい。」と応えるのだった。

学校はいつもと変わらず。横島はこちらを意識しているもの、話しかけづらいのか近づいて来ない。まあいいや、と和樹はそのままにしておいた。

和樹は基本的に他人に冷たい。余計な事に巻き込まれたくない事と、人間嫌いが原因だ。だが、元々この学校には自分以外皆ライバル、という価値観の人間が少なくない。だから、和樹の態度自体は別段珍しいものではないのだ。

学校は、ある意味気楽である。安全で、干渉してくる者も少ない。勉強自体は前の世界で机妖怪の愛子やピート、タイガー達と散々やった。卒業の為に必死だった。だから大抵の内容を覚えており、あまり勉強しなくても上位の成績はとれる。

この日、和樹は文庫本を読みながら屋上のベンチで昼食をとっていた。コンビニで買った弁当である。大して美味くはないが、期間限定の弁当。時代逆行の恩恵はこんな所にもあった。昔食べていた物をもう一度食べられるのだ。美神さんの所にいた時はこの弁当がご馳走だったなあ、と思い出して少し泣けた。

味よりも思い出を噛み締めていると、ふいに、屋上の扉が開いた。和樹はとっさに給水塔の影に隠れそちらを見る。

「ここにも居ないか」  
横島だった。

「どっした？」  
ベンチに戻って声をかける。

「うわぁ！」  
跳ね上がった。分かりやすいリアクションだ。

「いや、お前を探してたんだけど…ちょっと話したいんだ。いいか？」

「ああ。」そう言つと、横島が横に座る。

「あのさ、お前、何者なんだ？」

いきなりだな。もつと言葉選べ。

「お前がどんな答えを求めてるのか知らないけど、人間だよ。で、神社の息子。」

「べらぼうに強いよな。」

「お前だつて普通じゃないだろ。」

笑いながら言つ。既に霊能力に目覚めているコイツに言われたくなかつた。

「これ、なあ。」

手にソーサーを出して、横島が言つ。というか、そんなに簡単に出来るのかよ。ちよつとおかしくないか。

「それだけ力があつたらお前も普通じゃないよ。俺が霊能に目覚めた時なんてそこまでスムーズに力を出せなかつた。お前は俺以上になる可能性がある。」

和樹は正直に言つた。自分はもつと苦労していたのだ。今の横島は底が知れない。

「それで、なんだけどき。俺、この力をコントロールできた方が良



いらしいんだよな。あの神様が言うには、霊力があるだけで使えな  
いと悪霊に狙われるんだとさ。」

「ああ…そうだね。」

なんか話がおかしな方向に。

「お前が教えてくれないか？俺、こういう事に詳しい知り合いって  
お前しかいないんだよ。」

そりゃそうだよな。

「それなら、現役GSに師事した方がいいよ、俺、人に何か教え  
るの苦手なんだ。」

「そうか…」

残念そうだ。少し冷たかったかな。

「お前、まだあのお守り持ってるか？持ってたらちよつと見せてく  
れるか。」

「ああ、いつもポケットに入れてる。」

そう言ってお守り袋を胸ポケットから取り出す。それを受けとる  
と、和樹は中から水晶文珠を取り出した。

あれ、ぜんぜん霊力減ってないぞ。受験と霊波の壁で使い切った  
と思っただが…

そこまで考えて、気づいた。ああ、天竜童子の竜気か。ヒーリン

グの波動を吸収したんだ。これならまだまだ補充しなくて大丈夫だ。

「お前、この中身見た？」

「いいや？お守りなんてわざわざ開けて見ないだろ。」

やはりか。これはちゃんと教えておいた方がいいな。和樹はそう判断して、中身を横島の前に出した。

「これは俺が作った水晶文珠というアイテムだな。実は結構貴重な物だ。」

「え？5000円で売ってたろ？」

「ありやお前に持たせる口実さ。一応、受験の為にだけど。この珠、『集中』って書いてあるだろ。念を込めると集中力が増すんだ。靈力を込めたら何度も使える便利なアイテムなんだよ。」

「な、なんだよ。それ初めから教えてくれたら受験はもっと楽だったのか？」

「いや、実力以上の事は出来ないから同じだったと思うけどな。…で、今からこれの効果を変える。」

水晶文珠を握りしめ、念を込める。文字は『集中』から『防壁』に変わった。

「これで、大抵の攻撃に対して自動的に防壁を張れるようになった。しばらくこれでやり過ごしてくれ。靈力込めたら何度も使えるから、日頃から力を込める練習をしてみるといい。」

「あ、ありがとう。」

やはり、なんだかんだ言っても和樹も横島が心配なのだ。

「でも俺が出来るのはこれくらいだからさ。お前はお前でちゃんと師匠を探した方がいいよ。GSの助手のバイトとか、さ。」

ここで横島をGSに関わらせれば、歴史通りになるのだろうか。とりあえず助手を薦めてみたが、どうなることやら。

横島は難しい顔をして唸っていたが、昼休みの終わるチャイムを聞いて「まあ、広告とか見てみるわ。」と言って教室へ向かった。

すまない、横島。

こちら辺で広告載せるGSなんて数えるほどだし、そのうち一つは凶悪な守銭奴の事務所だ。まあこの俺は煩惱魔人じゃないし…大丈夫だよな？

学校から帰ると、修羅場が待っていた。

なにこれ。

小竜姫と藤姫が対峙してる。

イツナが怯えて藤姫の後ろに隠れていた。

「何してんだよ。」

「和樹さん！」

小竜姫がこちらを見て大声をあげる。

「先日の言葉の意味が分かりました。メドーサを匿うつつもりだったんですね！」

あ、そう繋がっちゃったんだ。なんでそうなるかな。

「言ってるだろ、和樹は何も悪くないんだよ！」

藤姫が言うが、聞く耳をもたないようだ。

仕方ない、じゃあ約束通り排除しますか。

「とにかく出て行ってくれないか。ここは俺のテリトリーでアンタはお呼びじゃない。」

「魔族に組する者の意見は聞きません。貴方は老師の信頼を裏切ったのです。」

和樹には小竜姫の思考回路がどうなっているのか理解出来なかった。何がどうなって、その結論に達するのか。

「ふーん、じゃあこれならどうだ？」

和樹は神社の境内に人払いをかけてから、身体の内から魔力を放

出させる。肌の色が薄い紫を帯び、サンバイザーのような物が現れ、身体の一部を黒色の硬質な鎧が纏う。それは和樹…いや、横島が愛した女性に良く似た姿。

「…！……魔族！」

小竜姫の目に怒りが宿る。

「なるほど、罪人を匿うのは同族だからですか。なら貴方も同罪です。神妙になさい！」

和樹は思う。

やはりこいつは小竜姫じゃないわ。

ここまで理不尽な言い分を押し付けるような人じゃなかったよ。もしかしたら、元々こんな奴だったのかな？前の世界では暴走して修行場壊滅させたりポカミス多くて、金銭的なフォローをした美神さんに頭が上がらない所とかもあった。こんな尊大な態度とる所なんか見た事なかったのにな…

和樹は、歴史の変化が人格にまで影響を与えとは思わなかった。

「藤姫、イツナ、下がってなさい。ちょっと痛い目みてもらうから。」

「フツ…この神社は神気に満ちています。私の能力に制約は無くなくなってますよ。そんな私に魔族の貴方が勝てると思っっているのですか？」

その結界を張ったのは和樹なのだが。

それにしても、今のコイツは本当に典型的な俺の嫌いな神族だな、と和樹は心の中でつぶやいた。タマモを殺し、グーラーを殺し、俺から全てを奪いとった奴らと同じ目をしていた。

「生きて帰れルと思ウナヨ？」

和樹に、変化が訪れる。

トラウマになっていた出来事を思い出して、感情が抑えられなくなったのだ。みるみるうちに、和樹の目が闇に染まる。

イツナが、藤姫の腕の中で震えた。藤姫も同様に恐怖したが、すっかりとイツナを抱える。ああ、これが魔人。あの横島の、絶望した姿なのだ。

…姿は既にルシオラの姿ではない。全身に浮き出た魔術刻印のような模様、紫に変色した腕は竜の鱗に覆われてゆく。爪はするどく伸び、鋼を思わせる光沢を放っていた。

「ウオオアアアアアア！」

一匹の獰猛な獣のように、和樹は小竜姫に向かって跳躍する。剣で迎撃しようとする小竜姫も、余りの速さに反応できない。

カアアアン！

和樹の攻撃対象は小竜姫ではなく、その剣。ありったけの魔力…というより怨念を込めた手刀を剣に叩きこんだ。

「!?!」

困惑する小竜姫。そこへ、さらに執拗に手刀を叩き込む。

カァン、カァァン、ガキィン！

激しさを増す攻撃。小竜姫は手刀だけで神剣と打ち合う和樹を恐れ始めた。

そして。

魔力に犯され変色する神剣。

「なっ！？これは、呪詛！！」

和樹の攻撃は神に対する呪い。怒り、悲しみ、絶望に彩られた禍々しい呪詛が、神剣を染め上げてゆく。

「あ、ああ、うわあああ！」

たまらず飛び退く小竜姫。和樹は追わない。

「さっきまでノ勢いはどうした？魔族には負けなインドロっ？」

「き、貴様！」

和樹の言葉に殺気を宿す。しかし、その小竜姫に変化が現れた。

「ガッ……これは！？」

結界が作動し、小竜姫に負荷をかける。

「何故！？私は神族なのに！」

「そりゃ、魔剣持って殺気立ってたら結界も敵だト思ウダロウよ。」  
和樹はケタケタと笑う。

「ソノまま怒りに身を任せタラどうなるかな？」

その言葉に青ざめる。

神族が、神域に拒絶されるような負の感情に支配されて力を振りかざす先にあるのは…

墮天。

この魔族は、私を墮天させようとしているのか！？

「サあ、続けヨウカ。」

和樹の目が見開かれる。すると、足下の影の中から一本の歪な刀が現れた。それはまるで、叩かれすぎてボロボロになったような形。歪んだ刀身の表面には黒ずんだ血のようなものが付着し、周囲に邪気を撒き散らしていた。

「キュウウウウン！キュウウウウン！」

イズナが恐怖に耐えきれずに藤姫の腕の中で暴れ出した。

「も、もっいいいだろ和樹！頼むからやめておくれ！」

それを何とか宥めながら、藤姫は叫んだ。その声が届いたのか、



和樹の目から狂気の色が消える。それまで発せられていた邪気も止まっていた。

「お前ら…。」

我に返って周囲を見渡すと、固まって動けないのは小竜姫だけではなく、藤姫とイツナまで震えていた。

「仕方ない…。」

和樹は魔力を収めると、文珠に『浄』と入れる。発動させると、先ほどまでの邪気が消え、小竜姫の神剣も元の姿に戻った。和樹は刀を影に戻すと、姿を最初の魔族の女性に変える。

「…で、どうするの？まだやり合うつもり？」

「私は…魔族に屈したりはしません！」

引き際も分からないとは。これが本当に小竜姫なのか。いや、そうなのだろうな。かつてメドーサに『エリート』と皮肉を言われていたのを思い出す。

「なら、神族なら屈するのかな？」

ゴアアアアアアア！

和樹の身体から、今度は神気が溢れ出す。それも、凄まじい量だ。その勢いに小竜姫の身体が後ずさる。

「あ、貴女は…私!？」

その姿は小竜姫と瓜二つ。違うのは髪の色が黒い事と、細身の長剣を持っている事くらいである。

『さあ、かかって来なさい！その甘ったれた根性を叩き直してあげましょう！』

構えも、全く同じだ。

藤姫は、落ち着きを取り戻したイツナを撫でながらその姿に見入っていた。

あの小竜姫が、前の世界ではあそこまで強くなるのか、と。構え一つ取ってみても、同じ構えのハズなのにまるで隙が無い。自分の社を持ち、和樹の中の自分の因子を取り込んで強くなった今の自分でも、相手にならないだろう。勝てる気がしない。

それはこの世界の小竜姫も同様だった。自分と同じ姿をしているからこそ、力の差を実感していた。あれは、確実に私だ。どういう理由か分からないが、私と同じ存在……。小竜姫は覚悟を決めた。あれが私なら、絶対に逃げられない。敵前逃亡する自分を絶対に許さないだろう。

「行きます！」

神剣を構え、斬りかかった。

キイイイインッ！

和樹は霊刀十握剣でそれを受ける。

儀式用の刀であるが、この剣を媒体に結界を張ると、その結界の

中でのみこの刀は最強の刀となる。実は小竜姫の持つ神剣はかなり  
霊格の高い剣で、並みの剣で打ち合うと負けてしまうのだ。よって、  
和樹の選択肢は魔力で染め上げて神気で壊すか、この十握剣で戦う  
しかなかった。絶対的な強さを見せつけてはいるものの、やりよう  
によっては今の小竜姫にも和樹相手に善戦する事は可能なのだ。し  
かし悲しいかな今の小竜姫にそこまでの知恵はなかった。

戦いは一方的だった。

小竜姫の攻撃は全てはじかれ、時折強烈な一撃を受け神剣ことは  
じき飛ばされる。しかし和樹は深追いせず、小竜姫の攻撃を待つ。  
構えだけは解かず、戦いをやめさせない。

小竜姫の疲労はピークに達する。そこに、和樹の一撃。

ガキインツ！

根性で受け止める。そこへ更に、追撃。

ボワアアア！

和樹の口から炎が放たれた！

「キヤアアアア！」

直撃を受け、燃えながら地面を転がり回る小竜姫。そこに藤姫が  
急いで駆け寄り、急いで炎を消しヒーリングをかけた。

「や、やりすぎだよ！」

『庇うのですか？この者は貴女を殺そうとしたのですよ。』

「和樹は殺そうとしたあたしを庇ってくれたらろう！」 藤姫が必死で両手を広げ、背後の小竜姫を守る。

「メ、メドーサ……」

回復し、何とか我に返った小竜姫は藤姫を見て呆気にとられる。これが、あのメドーサなのだろうか。それに、自分を回復させたヒーリング。あれは魔族には出来ない芸当だ。

『小竜姫、貴女は彼女をまだ拘束する気ですか？』

「……私は、職務を全うせねばなりません。メドーサは過去に犯罪を犯しました。その事実は変わらない。しかし……。」  
チラツと藤姫を見る。

「人違いだったようです。私には、彼女があゝの悪人には見えません。だから、きつと違うのでしょうか。」

「小竜姫……。」

「私を、許してくれますか？」

そう尋ねる小竜姫に藤姫は優しく微笑む。

「怒ってなんかないよ。許すも何もないさ。」

『……仕方ありませんね。貴女がそう言ってるのに続けたら、私が悪人になってしまいます。』

神気を身体の奥に収めると、和樹は元の姿に戻った。それを見て  
やっと小竜姫の身体が緊張から解放されて…。

ドサツ

気を失う。

「アンタ、ホントにやりすぎだよ！」

「コン！コン！」

二人に怒られ、和樹はバツが悪そうに頭をかく。二人を助ける為  
にやったのに…そんな事を考えながら、和樹は小竜姫を背負って社  
務所へと向かった。

【小竜姫】

「ハツ！？」

気づくと私は布団に寝かされていました。額には、濡れタオル。

「起きたかい？」

枕元にはキツネを抱いた女性が座っていました。

「メドーサ…いや、藤姫と言いましたね。私は一体どうしたんでし  
ょう。」

「よっぽど疲れてたんだろっね。気を失ってたのさ。今は夕方の六時前だから、一時間位だね。」

そんなに時間がたっていたとは思わなかった私は、かなり慌てました。自分は妙神山の管理を任されています。老師やヒヤクメの食事係も担当しているので、この時間にここに居てはマズいのです。そう告げると、藤姫は笑って言いました。

「大丈夫、和樹がちゃんと連絡してたよ。鬼門だったかい？あの鬼たちにね。」

それなら安心です。ヒヤクメと私は先日、人間界のパトロールを任命されましたから、彼女も人間界で適当に食料を調達している事でしょう。

「あの…和樹さんは？」

「ああ、もうすぐ帰ってくるよ。」

ガラガラ、と戸を開ける音。

「ただいまー。」これは和樹さんの声だ。

「ただいまなのねー。」え？幻聴？

『ふーむ、中々の収穫であった。』

いえ、悪夢でした。

飛び起きます。ええ、起きますとも。

「な、何やってるんですか、老師ー!？」

『おお、起きよったか。』

何呑気に挨拶してるんですか老師は!しかも大きな紙袋にどっさりゲーム詰め込んで!

「修行場はどうしたんですか!まさか誰もいないんですか!？」

『わしの分身をいくらか置いてきたから大丈夫じゃよ。天竜もおるしな。』

何言ってるんですか、老師。あなたの分身は確かにお強いですが、ウキキとしか言わないじゃないですか。そんな猿に囲まれる殿下の気持ちも考えてください。

「まあまあ、小竜姫はこれでも読んで心を落ち着けるのねー。」

えー、何々。上司と上手く付き合うコツ?ヒヤクメ、貴女何が言いたいんですか?あ、これ、貴女自身の為に買ったんですか?もしそうならそんなに私って面倒な上司なんですか?

「あの…。とりあえず居間に行かないか?」

和樹さんが困ってました。そうですね、勝手にひとの家で騒いでしまっただけじゃありません。なんとか落ち着きを取り戻し、和樹さんの後についていきます。ああ、また呆れられてしまったでしょうが私って、本当に格好悪い所ばかり見せてしまってるんですね。

【小竜姫視点終了】

居間にはおかしな光景が広がっていた。斉天大聖老師、ヒヤクメ、小竜姫、藤姫、イツナが寛いでいる。和樹も人ではないから、文字通りここは人外魔境…というより神域だろうか。神族の溜まり場になっっていた。

『さて、和樹よ。頃合いだと思うんじゃないか。そろそろ小竜姫やヒヤクメにも教えてやったらどうじゃ。』

老師が真面目な顔で言った。おいしい。それでゲームソフトの説明書を開いていなかったら完璧だった。

隣では上目づかいで小竜姫がすまなさそうに見つめてくる。ヒヤクメに至ってはらんらんとした遠慮のない視線を向けてきていた。

「そうですね。今後の事もありますし…。では、これから言う事は他言無用にお願いします。」

そして、語り出す。

一人の男の怒りと悲しみに満ちた人生を。



全て話し終わる頃には、皆の表情は一樣に辛い物になっていた。それはそうだ、明るい話ではないのだから。

「だから、俺はここで静かに暮らせたならそれでいいんだよ。いろいろ疲れたから、さ。」

「はい……。貴方の中の私も、おそらくそう願っていると思います。」

小竜姫は涙を流している。どうにも止められないらしい。

『和樹よ、こちらにはアシユタロスはおらんが、その後釜となる魔神は存在してある。お主の、よく知つとる奴じゃ。恐怖公……といったか。』

「え？誰っすか？」

「恐怖公は、メフィストなのねー。」

！ 和樹の表情が強張る。

「ああ、あたしも知ってるよ。」  
藤姫も肯定する。

「確か恋人を殺されて絶望した際に、取り込んでいたエネルギー結晶体が身体に適応したんだ。そのままアシユタロスを殺して魔界の一大勢力を作り上げたらしいね。和樹の世界では人間に転生したみたいだけど、こっちでは恐怖で魔族を支配する魔王を気取ってるって話さ。」

なんて事だ。動機がまるで前の世界の自分である。合わせ鏡のよくな世界。和樹はやり場のない怒りに身を震わせる。運命はどこま

で意地が悪いのだろう。

「キユウン…」

気づくとイツナが、うつむく和樹の頬に懸命な前足を伸ばし、撫でていた。

「ごめんイツナ。もう大丈夫だ。」

気を取り直す。ここで自分が混乱してはダメだ。

「なら、メフィストの動向次第ではまた戦いに巻き込まれるわけだな。」

「その可能性は高いのねー。メフィストはデタント反対派最大勢力を率いてるらしいのね。もし本格的に動きだしたら…」

『そこはこの世界の者でなんとかする。お主は身のまわりだけ守っておれば良い。』

老師はそう言うが、和樹は気が気ではない。メフィストの、あの純真無垢な表情が思い出される。あれが、憎しみで歪む…かつて自分が殺めた美神さんの表情が脳裏に蘇る。辛かった。

「和樹、アンタだけじゃないよ。あたし達がいる。」

藤姫はそう言って和樹の手を握る。不安が和らいだ。

「私も微力ながら協力します。」

小竜姫も力強く宣言する。先ほどまでの頼りなさは消えていた。

「みんな、ありがとう。とりあえず、一人で何でも背負う事は控えるよ。何かあったら、相談する。」

和樹がそう言うのと、老師はホツとした顔をして頷いた。この言葉が、聞きたかったのだ。

「…和樹、説明してくれるか？」

不意に聞こえてきた声。振り返ると、クーラーボックスを抱えた公平が立ち尽くしていた。

「簡単に言うと…これからお食事会？」

「神様だらけでか!？」

目をやると、台所では小竜姫と藤姫がエプロンをつけて料理の真っ最中。老師は買ってきたゲームしてるしヒヤクメはファッション雑誌に夢中だ。これを見て神様と思える公平も凄い、と和樹は思う。イツナは積まれた座布団に挟まって遊んでいた。

「親父もこんな遅くまで何やってたんだよ。朝からいなかっただろ。」

「ああ、釣りだよ。知り合いに船出してもらってな。」  
ドスン、とクーラーボックスを2つ置く。手にはビニール袋もあった。

「大漁すぎてなかなか帰ってこれなくてな。これ、夕食に出そうか？これだけ人数いたら丁度いいだろ。」

ボックスの中には黒鯛や鱸、平目、赤魚等がひしめきあっていた。

「藤姫は魚捌ける？」

「ああ、大丈夫だよ。」

藤姫が自信満々に言う。

「でも量あるからね。和樹も手伝ってくれるかい？」

「もちろん。」

腕まくりをして和樹が笑う。台所は今や三人体制である。公平は賑やかになった台所を見渡して苦笑いする。やはり和樹は横うちだ。どんなに他人と距離を置こうと、人が集まってくる。主に、人外ではあるが。

『もう、心配なかつ。アヤツは前を向いとるよ。』

『ああ、安心や。あんなに笑顔見せとんの久しぶりやなあ。』

二人の会話を聞いてて冷や汗をかく者が一人。

（た、たすけてなのねー！）

心眼のせいで公平の正体を知ったヒヤクメが震えていた。



## 第十話 美神のはなし

四月も下旬、新学期の慌ただしさも落ち着いて来た頃の話。

和樹は予定通り厄珍堂に破魔札を納入した。作業は藤姫が手伝ってくれたが、納入に付き添ってくれた時は驚いた。なんと、藤姫は厄珍と知り合いだったのだ。

「今だから言うけど、人間界での活動資金つくる為に魔界のアイテム横流ししてたんだよね。」

厄珍も金の為なら何だつてするんだなあ、と実感した一件である。メドーサ時代の主な罪が窃盗と密輸がメインだったというから、厄珍と繋がるのは自然な流れなのかもしれない。

ちなみに破魔札は社務所に隣接する齋館という建物に箱詰めして保管してある。既に百枚は作り置きしているが、そのせいで思わぬ問題が起きた。

当初、齋館に寝泊まりするつもりだった藤姫だが、夜電気を消すと札を入れた箱が神気で発光するので眩しくて眠れなくなったのだ。「これじゃ寝れないよ。」と仕方なく和樹の隣の部屋を使っている。朝に和樹の布団に潜り込む悪戯をする割には、男性の部屋の近くになるのを恥ずかしがるのが、和樹には理解出来なかった。

厄珍堂から帰って来て、藤姫が竹箒で境内を掃除し和樹が社務所の受付に入っていた時の事。和樹は参道を歩いてくる人影を見て心臓が止まるかと思った。

亜麻色の髪をなびかせた一人の女性。美神令子らしき人物である。

和樹にとって、おそらく人生で一番大きな存在だった人。メフィストが生きているなら転生しないんじゃないのかよ！…と思いつつその姿を見る。

あれ？

違和感があった。

服装が、地味。というか美神さんがジャンパー？化粧もしてないぞ。

「すみません…芦原和樹さんという方を探してるんですが、貴方ですか？」

何、この低姿勢。というか暗い。

「ええ、僕がそうですが、貴女は？」

そう言うと、途端にホツとした表情になる。

「良かった、一人でたどり着けたあ…。」

何、この弱々しさ。守ってあげなきゃオーラ。

「私、美神ひのめと言います。貴方と同じ、GSなんですよ。」

「美神…ひのめ、さん？」

あれ、なんか変だぞ。ひのめって、あのひのめちゃんか？美神さ

んの妹の…。

「無名だから知らないと思うけど、これでもGSランクDなんですよ。」

「すみません、僕資格だけ持つてるペーパーなんすよ。だから業界の事分らないんです。」

Dランク。和樹の一つ下だ。前の世界では美神さんはSランクだった。実力もそうだが、コマースヤリズム、話題性でGS業界全体のイメージアップに貢献して、なおかつ人類を救った英雄だとされていたから。初めてあった頃にはAランクには至っていたはずなのだが。

「唐巢神父の言った通りだなあ。和樹君は妖怪の保護の為にGS資格をとったんですよ。」

「ええ、そうですが…、唐巢神父の紹介でお越しになったんですか？」

話が進まないのでこちらから用件を聞く。

「あ、ごめんなさい！あの、横島君に場所教えてもらったの。知ってます？横島君。この間雇った子なんだけど。」

アイツか。やっぱりアイツか。

「あの…セクハラされませんでした？」

「え？あの…事務所の階段から転げ落ちた時に助けて貰ったんです。その時霊感にピンときてスカウトしたんだけど…抱き止められた際



にオツパイつかまれたり……。」

あ、あの野郎！やっぱり変わってない！！

「セクハラの相談でお越しになったんですね？それならまず警察に行きましよう！泣き寝入りは絶対ダメです！」

「う、うわあ、違うのそうじゃないの、厄珍さんにも薦められたんだけど、破魔札を売って欲しくてここに来たの！」

ありや、厄珍まで？和樹は意外な展開に驚いて、詳しく話を聞く事にした。正直、あのタカビーな美神さんなら追い返していたが、ひのめちゃんなら仕方ない。なんせ、前の世界で世話していた子だ。

「じゃあ、中へどうぞ。」

「ありがとう。」

ああ、新鮮だ。生真面目そうな雰囲気的美神さん。よく見たらあの美神さんより胸デカいし、そりゃアイツも助手になりたがるよな。チクシヨウ、アイツ俺よりだいぶ恵まれてないか！？

和樹は心の中で嫉妬した。

社務所に通して話を聞くと、和樹は何だか悲しくなった。なんとこの世界の美神さんは、対人恐怖症で外に出れなかったらしい。友

人の助けもあつて最近治つてきて、GSの仕事を請けられるようになったという。ここに来た目的は、手頃な値段の破魔札を買う為らしい。

「厄珍さんの所は高いのしか無いんです。私はまだランク低いから、そんなに道具にお金をかけられません。それで厄珍さんに相談したら和樹君が自分で破魔札を作っているって……」

「なるほど、手頃な値段の破魔札を作つて欲しいと。」

「あ、ちゃんと払いますからね！知り合いの紹介だからって無理に安くしないでいいから！」

ああもう、謙虚な美神さんとか反則だろ……。和樹はクラクラとしてきた。

「その前に。貴女は無闇に妖怪を殺したりしませんか？もしそういう人なら僕は協力出来ません。」

「はい、勿論です。私は、出来れば戦いたくないの。」

…なんだか、仕事したくないという風に聞こえるのは気のせいだろうか。

「では、まずこれをあげます。全然使つてないやつなんで。」

そう言つて渡したのは、GS試験で使つた神通棍。アイテム作りの練習で、あの時破損した神通棍を修復していたのだ。

「わっ、わっ、これ高い奴でしょう！？1000万円くらいするんじゃない……」

タダでしたが。元は200万円位の物を貰って、自分で改造しただけです。

「僕は自分で霊波刀作れるし、必要ないんですよ。実際、物干し竿に改造するつもりだったくらいです。そんな物で失礼ですが、使えたら使ってやって下さい。貴女に使ってもらった方がソイツも喜ぶでしょうし。」

「も、物干し竿!?!」まん丸い目をして驚いている。

「あと、破魔札ですが。うちのお守りは厄珍さんが言うには十万円破魔札に相当する効果があるそうです。五百円だからお試しに幾つか買って行きますか?」

「五百円が十万円相当...。」

あ、フラフラになってる。あの美神さんなら飛びついて儲け話に持っていく所なのに。「和樹君が神様に見えて来ました。」

「神様なら外で掃き掃除してますが。」

なんて神社だ、と自分でも思う。

そんな話をしていたら、社務所の引き戸を開けてイツナが入って来た。

「あ、キツネさん。この子だったんだね。」

「コン?」イツナは声の主の方を見ると...「コン!?!」驚いていた。和樹も驚く。知り合い?」

「うちのイツナと知り合いだったのですか？」

「はい。前、商店街で迷ってたら助けてくれたんです。…一緒に豆腐屋さん行ったよねー。」

「コン！」イツナよ、何気にタカってるんじゃない。和樹は少し面白くなかった。でも、これでこの美神さんが安全である事が証明された。妖怪のイツナを見逃したのだ。

「じゃあ、そのお礼も兼ねてこれをあげます。誰にも言わないで下さいよ？」

そう言っただけなのは、双型の水晶文珠。

美神さんは不思議そうにそれを見た後、固まる。

「これ…文珠？」

今までで一番驚いていた。当たり前だ。文珠を作れる人間は横島か和樹だけ。見る事すら出来ないと言われた奇跡なのだ。

「いえ、これは文珠の発展形で水晶文珠と言います。水晶を基礎に作り上げた文珠で、霊力を込める度に何度も使える便利なアイテムですよ。」

「これも和樹君が？」

「ええ、これを作れるのは神魔含め僕しか居ません。だから、なるべく秘密にして下さいね。」

そう言うってから、水晶文珠に霊力を込める。

『収集』

記憶の中のひのめちゃんと同じ存在なら、彼女の能力は念動発火…パイロキネシス。霊力を炎に変える能力を持っている。故に、消耗が激しいハズだ。この水晶文珠は、普段から身体から漏れ出す霊気を集めてストックして貯める力を持つ。つまり、大気中に霊気があるなら補給し続ける事ができる。

「文字を変えなくなったら、いつでも来て下さい。」

「あの、私こんなに貰ったら罰当たるんじゃないですか？」あまりの大盤振る舞いに怖くなったようだ。

「ここ神社ですもん。その人間が良いと言ってるのに罰なんて当たらないですよ。」

「うう…感動で前が見えない……。」「キューン…。」

いつの間にか抱っこされてるイヅナまで感動していた。あれ、なんで？

「じゃあ、お守りも買って行きます。何かから何までありがとございます、和樹君。いつかちゃんとお礼するから覚えていて下さいね。」

涙を拭って美神さんは大事そうに神通棍と水晶文珠をバッグに入れた。あ、そのバッグは近所のスーパーの1000円均一コーナー

のバッグじゃないか。少しは身のまわりの物に気を使えよ、と和樹は嘆いた。あの美神さんとはえらい違いだ。

結局、美神さんは普通のお守りを三つ、交通安全と家内安全のお守りを一つずつ買って行った。その際、「お母さんにも買って行かないきゃ。」と言っていたが、この世界の美神美智恵は娘の傍にいるのだろうか。

帰りしな、和樹は美神に声をかける。

「そういえば、横島の事ですが。あまりセクハラ酷いようなら僕に言うてください。シメときますから。」

そう言うと、美神はニコニコ笑って言った。

「大丈夫です。責任とってもらいますから。」

ん？責任？

「契約書に書いておいたんです。今後、私にエッチな事したら責任とって結婚する事って。」

え？ええっ！？結婚！？

「私の靈感にピンときたんです。彼は、きっと私の運命の人だって前世で、強い縁があったんだって……。」

あれ、メフィスト、転生してないよね？それに、なんで夢見る少女みたいに目を輝かせてるんでしょうか？

「彼と私は、前世でアトランティス大陸と共に沈んでしまったんで

す、きつと！今世で巡り会えたのは、運命だと思っんです！」

うわー…

ごめん横島、全然羨ましくなかった…

まあ、お幸せに……。

社務所を後にしてから、美神さんは外にいる藤姫に挨拶をして何やら話をしていた。帰ってきた藤姫が、「なんだい、あの電波系は！？記憶と全然違うじゃないか！」…と驚いていたのが印象的だった。良かった、この驚きを共有出来る人がいた。

しかし今日の美神さんとの出会いで、和樹は少し肩の荷が下りたような気がした。変な形ではあるが、これで横島にGSの師匠をつける事ができた。ここの美神さんは頼りないけど、その分横島が強いから差し引きゼロだろう。しばらくは安心である。

「しかし…この世界はどうなってるんだろうな。」

ドツと疲れながら、和樹はボヤクのだった。

それから数日したある日の夕食時。

「ちょっとこのGWに知り合いの神社に顔出そうと思ってるんだが、皆で一緒に行くか？長野の山の方なんだが。」

何気なく公平が切り出したので、和樹も軽く答える。

「いいね。家族旅行なんて行ってなかったもんね。」

「で、どこに行くんだい？」藤姫が聞くと、公平はニコニコして言った。

「氷室神社って所だ。」

「「「ブフーーーーーッ！！」「」」

一斉に噴き出す。事情を知らないハズのイツナでさえ噴き出すこのコンビネーション。

「き、汚いな！どうしたんだ！」台拭きで顔を拭く公平。それもどうかと。

「い、いや、何でもない。」

「ああ、気にしないでくれ。……良いじゃないか。山奥だろう？温泉とかありそうだねえ。」

藤姫の白々しい演技で何とか誤魔化する。

「確かに温泉は沢山あるぞ。人骨温泉とかいう不気味な名前の温泉とか有名らしいからな。泊まるのは神社の方だが、そっちにも温泉湧いてるから心配するな。」



「ははは、そりゃ良かった。」

うん、災いの火種は確実に神社の方にあるんだけどね。和樹と藤姫の心がシンクロする。

「じゃあ、皆でGWは温泉と洒落込もうか！」

一人テンションの高い公平を、和樹たちは暗澹たる思いで見守るのだった。

「どつするんだい？」

「どつするも何も…。」

食事を終え、二人は和樹の部屋で会議を開いていた。

「神気を感じたら死津喪比女は反応するだろうから、確実に一騒動起きるだろうな。」

「これって横島たちが解決する問題なんだよねえ？あいつらに任せてしまいたいけど…」

藤姫の言い分はもつともだ。この戦いで美神さんとおキヌちゃん、横島の絆が深まるのだ。機会を奪ってしまうのは気がひける。

「でもな、おキヌちゃんが美神さんたちと会わずに復活できたら、今度こそGSと関わりのない普通の生活が出来ると思つと…」。

和樹の頭によぎる、前の世界で起きた悲劇。

「でも、この世界の美神にはおキヌがいた方がいいんじゃないかい？」

…確かにこの美神さんは良い人だからおキヌちゃんを悪いようにはしないだろう。

「とりあえず死津喪比女は放っておくとマズいから倒してしまおう。それからの事はその時考えようよ。」

その時……戸の向こうでイズナと公平が怖がっていた。

『…いつら物騒すぎるやろ。殺しの相談しよる…。』

「コン……。」「

夜が、更けていった。



## 第十一話 氷室の巫女のはなし（上）

入会式から1ヶ月、普通の学生にとっては待ちにまったGWがやってきた。クラスの大半は塾の短期集中講座を受けるらしい。一年から何をムキになってるんだ、と思うのは和樹や横島くらいで、この学校の生徒は他の人間に差をつける為に必死なのだ。勿論和樹は和樹でやる事があるので別に遊んでる訳ではない。さし当たって今やるべき事は…

「このままずっと真っ直ぐ行って、T字路を左折ね。」

助手席のナビ係である。

GW、初日の朝早くから和樹たちは車で長野県南部にある氷室神社へ向けて出発していた。例え待っているのが厄介事でも、初めての家族での遠出である。なんだかんだで藤姫もイツナも喜んでいた。

少し古いカロラーの後部座席でのんびり景色を楽しむ藤姫。イツナは和樹や藤姫の膝の上を歩き来して、地図を一緒に見たり甘えたりにしていた。途中で寄ったコンビニでトイレ休憩やおやつを買う。そんな、なんでもない普通のドライブがやけに楽しかった。それは公平と和樹が今まで寂しさを貯め続けていたからかもしれない。

和樹を孤児院から引き取って間もなく、公平は妻を事故で亡くした。深い悲しみにとらわれたが和樹の存在が心の支えとなった。サタンが介入したのはその頃で、無理やり操り生きさせた時期もあったが、和樹と暮らすうちに介入せずとも普通に生きられるくらいに立ち直っていった。現在の公平はサタンを受け入れ、合意の上で融合している。

そんな公平も、心に隠していた孤独感や家族というものへの憧れは強かった。今こうして一家で旅行しているのが、信じられないくらい幸せだったのだ。

「結構町中で湯気見るようになったなあ。」

「後三十分くらいで着くんじゃないかな。」

車はうねる温泉街の細道を抜け、山道に入る。交通量が極端に減り、地元の人しか知らないような舗装されていない道が続く。

「ここに住んでる人は大変だねえ。あたしなら迷わず飛んでるよ。」

それができりゃあ苦労はしない。でも、ぼやく気持ちも分かる。さすがに疲れてきたのだ。イヅナは後部座席で横になっている。これは疲れたというより飽きたのだろう。

片側崖、という危ない道を登り続け、その神社に着いたのは夕方。地図の縮尺だけ見ればもっと早く着くかと思っていたのだが、走ってみないと分からないものだ。

神社は山の中腹にあった。駐車場は広く、自分たち以外の車は2台。ここの神社のものだろう。その駐車場からすぐ、長い石階段が続いていた。

「登るってかい。」藤姫がうんざりする。

「ははは、もうちょっとの我慢だよ。」

公平はなんでも無いように言う。

「イツナは肩に乗るんだよ。」

和樹がイツナを持ち上げる。藤姫はそれが少し羨ましかった。まあいいか、そう思つて階段を見上げ…

「ん？和樹、なんかおかしくないかい？」違和感に気づいた。

「え…本当だ。結界が張られてる。親父、ここつて普段からこんな結界張つてんの？なんかセンサーみたいなヤツだけど。」

公平の顔が険しい。

「いや、ここの宮司は俺の先輩だが、結界を張れるような靈力なんてない普通の人だよ。」

「「！！！」

瞬間、藤姫が飛翔する。和樹もイツナを公平に渡すと文珠を使って空に舞った。

「お、おい！」「コン！？」

「悪い、先に行く！嫌な予感がするんだ、イツナを頼む！」

困惑する公平に告げると、急いで藤姫の後を追った。

【横島忠夫】

ひのめ所長の所にお世話になつてから一週間、もう毎日が目の保養で幸せな日々を送っている。何がって？あのチチに決まつてる！最高じゃないか！しかし下手に触るうものなら所長がニコニコしながら婚姻届を突きつけてくるから怖くて手が出せない！いや、だつて嬉々として乙女の妄想語るんだぞ？ムー大陸を浮上させる為の呪文やらUFO呼ぶ為の踊りの話してくるんだぞ？さすがの俺も躊躇するよ。あー、どうなんだろ、これ。和樹とマンツーマンも悶々としそつだが、これはこれで苦しくないか。

そんな生活を送っていた俺だが、ここに来てビッグイベント襲来！GWに所長と二人きりで旅行へ行く事になったのだ！イヤッホオウウイ！まあ仕事なんですけどね。けどほら、ひなびた温泉宿で男女二人きりとかシチュエーション的に最高じゃないですか。これなら、所長もいつもの不思議ちゃんモードも解けてひとりのオンナになるつてもんですよ。普通にすれば文句なしで最高の美人だからね。これで勢いに任せてあんなことやこんなことを……ハイ、甘かったつス。そうは問屋が卸さないばかりか素通りしていきましたよチクシヨウ！

一体何なんだよあの幽霊の娘っ子は！いきなり人を突き飛ばして「私の為に死んで下さい！」とか昼メロか！火サスカ！「寂しかったから」って、そんな理由で殺される俺はもつと寂しいわ！所長も所長で親切に相談に乗るし、くつろぐヒマなんて無し！「俺も相談に乗ってもらつていいツスカ」とかキモいオッサンの霊まで出てきてもう現場はカオスな事に！結局そのオッサンが山の神になって、地脈に縛られてた娘っ子を解放して成仏！めでたしめでたし……で終

わらなかつたんだよなあ。

地脈から切り離された娘っ子改め、おキ又ちゃんが突然消え、小さな地震が連発するわ遭難して行方不明だったオツサンの死体や他の自殺者の遺体が襲ってくるわけで、こりゃ何か起きてると付近を調べたら…あつたんだよなあ、氷漬けにされたおキ又ちゃんの遺体が。オツサンの死体？ああ、燃やしましたが何か？

そこに居合わせた地元の子に案内してもらって近くの神社に行ったら、ひんやりおキ又ちゃんBOXを管理してる神主と会ってまた仕事の話ですよ。いやあの所長、当初の用事は済んだんだし、もう宿に入っても良いのでは！……え、ここに泊めてくれるみたいだから好意に甘える？UFOのよくでるポイントを教えてください？ジーザス！俺の計画が空飛ぶ灰皿に負けた！またベントラーツスか！パンチラー、パンチラー！！

そんな話をしていたらいきなり庭に化け物が沢山現れやがった！ほーら、所長。見事にまた面倒事に巻き込まれましたね？所長の好きなUMAですよ。一応植物なんすかね、頭に葉っぱ生えてて良いチチしてて良いケツしてて……ああん、これなんて桃源郷？オツパイいっぱい夢いっぱい、おしべとめしべがゴツツンコですよ！

「俺が相手だ、化け物共よ！」

ええ、もう一瞬でぶっ飛ばされましたよ。飛んだ先は所長の胸でしたよ。痛い痛い痛い飛んでった先でふんわりでしたよ。もう何を言ってるのか分かんない状態で頭を上げたら…

所長が、泣いていた。



泣いて、化け物達に両手突き出して、凄まじい量の炎を放射していた。

ここに来る少し前に、所長のお母さんに言われてたんだよな。所長を暴走させるなって。所長は高校生の頃に、通ってた学校の先生に襲われて力を暴走させた事があるらしい。その時のショックのせいで心を病んでしまったとかで…。参ったな、俺は何て事をしてしまったんだ。あれだけ娘を頼むと言われたのに…。

俺を受け止めたまま、炎を放つ所長。霊力を消耗して、身体から力が抜けてゆく。瞳孔が開いてきて…。このままじゃ所長は！

そう思った瞬間、俺の中で何かがはじけた。

【横島視点終了】

「な、なんだい、これは!？」

おびただしい数の植物妖怪が、炎に包まれている。それはいい、死津喪比女の事は知っている。驚いたのは、その中央の男から発せられる霊力の波動。強烈な、守護結界。これは、天竜童子を守ったあの壁と同じ波動だ。

「とりあえず、今は雑魚の殲滅が先だ！」

和樹の言葉に我にかえる藤姫。

「ああ、分かった！」

そう答え、手に霊刀を顕現させる。小竜姫からもらった竜神の秘宝の一つ、『赤月』。その流麗な曲線を描く刀身からは、静かに炎が揺らめいている。

二人の舞踏が始まった。

次々に切り取られて行く死津喪比女の花たち。和樹は切り捨てられた株の切断面に『枯』の文珠を放つのを忘れない。これで、地下にある球根まで攻撃するのだ。

花たちの数は減って行つたが、まだ二十ほど動ける者がいた。それらは、死にかけている美神にターゲットを絞る。

「い、いかん！」神主がさげぶ。一斉に襲いかかる花たち。横島の展開した結界に張り付き、どんどん浸食してゆく。そこへ…

「ま・た・ん・かーいー!!」

ドガッ パキッ ゴスッ ボカッ

階段を駆け上がってきた男の、叫び声と共に放たれる拳の雨に吹き飛ばされる花たち。

ぜー、ぜー、ぜー…

「ひ、氷室先輩、ご無沙汰して、ました…」

「あ、芦原君か？」

膝に手をつき、肩で息をする。イツナは公平の背中から降りると、急いで横島のそばに駆け寄った。

美神のバッグに鼻を突っ込み、ごそごそと探る。そこから精霊石を取り出すと、イツナは倒れている美神の胸元で精霊石の力を解放した。

ピカツと光が放たれる。石から溢れでた霊力が美神の首からぶら下がっている御守り袋に吸収されてゆく。『収集』の水晶文珠に吸い込まれていったのだ。同時に、全身に霊力が戻っていき…

「あ、あれ、横島君？」

「所長！！」

美神が目を覚ましたのだった。

「やるね、あの子！」

「ああ、正直ビックリだ。」

二人はイツナの素早い判断に驚いていた。頭の良い妖狐だとは思っていたが、ここまで知恵が働くとは思わなかったのだ。もしかしたら、タマモのように前世での記憶をいくらか思い出しているのかもしれない。

『ぐ、ぐああ、よくも邪魔してくれよったなあ！』

花が叫ぶ。

「寄ってたかって子供をいたぶるのはどうかと思うな。」

公平が横島と美神を背に、花たちと対峙する。和樹と藤姫も、すぐに傍に駆け寄った。

「親父格好良すぎるぞ。」

「そつだよ、惚れちまう所だったよ。」

「大人をからかうんじゃない。」

苦笑いしながらも、その目は花たちから逸らさない。

『ちつ…ひとまず退散するが覚えておくが良いぞえ、わらわはお前らを終始監視出来るのじゃ。』

そう言つて、死津喪比女の花たちは地中に戻って行った。

「ふう…。」ため息をつく和樹。今回は少ししくじった。物量作戦で来られたらさすがに防ぎきれない。

「助かったよ、芦原君。とんでもない時に呼びつけてしまって済まなかった。」

先ほどの神主が言う。

「いやー、この歳で階段駆け上がるのはキツかったけどいい運動になりましたよ！分散実習以来ですなあ！」

明るく笑い飛ばす公平。

「まあ先輩のお呼びなら何時でも駆けつけますよ！」

さっきの今で、もうこれである。和樹は公平の底知れなさに驚いていたが…

（ああ、なるほど。）

公平の手を見て納得。公平の手には、破魔札が巻きつけてあった。だから、あの拳が死津喪比女に効いたのだ。

「メドーサ!？」

「あ、藤姫様！助けてくれてありがとうございます。」「

頭を下げる美神と、縮こまる横島。対照的なリアクションだ。

「あー、横島。こないだはすまなかったね。もう改心して神族に戻ったから、怖がらなくていいよ。」「

そう言つと、横島は困った顔で和樹を見る。

「ああ、俺ん家の同居人だよ。味方。小竜姫も知ってるから。」「

「そうだったのか。」「

ホッとして、へたり込んだ。霊力が空になったのだろう。

「和樹君も来てたんですね。もしかして、今回の件に関わっていた

「んですか？」

「いや…」言葉を濁す。

「あたしたちは旅行に来ただけなんだけどねえ。」

「ははは、まあいいじゃないか。いい運動になったろう？」

公平の呑気な笑い声に力が抜ける二人。しかし氷室と呼ばれた神主は固い表情をして言った。

「いや、多分関係していたと思います。今日芦原君を呼んだのは見てもらいたいものがあつたからです。」

そう言った後、中で説明しましょう、と和樹たちを家へと案内する氷室宮司。皆、言われるままに後に続いた。

氷室神社は社自体は大きくはないが、社務所と居住スペースが大きい田舎に多いタイプの神社である。大きいから金持ち、という訳ではなく、単に兼業で農家をやっていた時代の名残だったりするのだ。現にこの神社の倉庫にはコンバインや鍬、鍬などがある。地鎮祭などでは本物の鍬、鍬、鎌を使っている。

その大きな家の十六畳もある居間に皆が集まって、説明を聞いている。その内容は、一巻の絵巻に描かれた妖怪のものであった。

「最近の地震や周囲の様子の変わり方がおかしかったので、相談に

乗ってもらおうと思ってたんですよ。芦原君はこの手の話に詳しくかつたし、神様の知り合いも出来たと聞いていたのでね。」

宮司の話によると、空模様や山の動物たちが慌ただしく移動するのを見て、ただ事ではないと感じたらしい。それはそれで、なかなか凄いい感覚をしていると思う。しかし…：なんとかいうか、結局公平は和樹たちを巻き込むつもりだったのだ。和樹はジト目で公平を見る。あ、目をそらした。

「死津喪比女。大妖だよ。300年前の地霊の変化さ。」

藤姫の説明が始まる。無論和樹の記憶の情報だ。

「この絵巻に描かれた人身御供つてのがアンタたちの出会った幽霊だね。」

「おキ又ちゃん…」

「そんなにヤバい奴だったのか…：所長、本気でやつつけるんスか？仕事じゃないんだから、そんなにムキにならなくても…」

横島が恐る恐る進言する。その言葉を聞いて、宮司の娘である早苗はムツとした表情を浮かべた。東京モンは薄情だ、とても思ったのだろうか。

「ああ、横島たちは充分やったよ。後は俺たちに任せたらいい。」和樹が言う。

実際、横島たちはよくやっていた。あの分身たちは前の世界でも美神さんが必死に道具を使いこなして一体倒すのがやっとだった。それを、十体以上倒したのだ。小竜姫の修行を受けていない状態で

「でも、おキ又ちゃんの願いを叶えてあげたいの。私、あの子とお友達になるって約束したから。死津喪比女がいたら、ここに縛られ続けるんでしょう?」

ひのめが言う。その目には、強い意志が宿っていて、説得出来そうにない。

「しょ、所長。そこまでする必要は…。」

「うん、分かってる。横島君は、何もしなくていいから。これは、私のワガママなの。」

横島の顔が落胆の表情を浮かべた。

当たり前だ。命がけで守ったのに、自らまた危険に飛び込もうとするのだから。

「大丈夫だよ、あたしが付いてるんだ、怪我はさせないさ。」

藤姫が声をかける。それを見て、少し表情が緩む横島。

「具体的には、地中にある球根を地上に引きずり出して燃やす。多分勝手に出てくると思うけどね。奴らの根に枯葉剤代わりの文珠を仕込んでやったから、身体が腐食していつてるハズ。」

「燃やすのはあたしだね。」藤姫が腰の霊刀を撫でてニヤリとする。そういう所は未だに魔族っぽい。

「いざとなったら暇してる神族呼べばいいしね。戦力的には充分足りてるから安心していいよ。」



笑う和樹に、宮司は唾然とした。江戸時代の退魔師でも封じるしかなかった妖怪を、二人で滅すると言うのだ。駄目なら神様を追加で呼ぶ、とも。スケールの大きさが違う。

「とりあえず、飯にするだよ。難しい話はそれくらいにしてける。」  
早苗の言葉に我にかえった宮司は、苦笑いしながら皆を食堂へと案内した。

ガツガツガツガツ。食べ盛りの和樹と横島の食べっぷりに呆れながら、早苗はお代わりをよそう。お茶碗を渡す時、和樹の顔をチラッと見やると、和樹はニコニコと笑みを返した。

いつの間に、こんなに男の子になったんだろう。

前にあっただのは二年くらい前。無口で大人しく、弱々しい印象だった。後に霊能に目覚めたと聞いた時は、気の毒にしか思わなかった。自分も霊媒体質で、神社から離れるのが怖い。パスで三十分くらいの高校までが、ギリギリ通える距離だったりする。霊能なんて、無いに限るのだ。

けど、その弱い男の子が逞しくなっていた。それどころか、大人たちを退けてGS試験に合格した。自分たちをピンチから救ってくれた。そして今度はあの妖怪を倒すという。

「ん？俺の顔に何かついてる？」

「な、何もついてないだよ！」

そりゃ大変だ、のっぺらぼうかと和樹が笑う。ああ、こんな顔するんだ。笑顔がまぶしい。……駄目だ駄目だ、自分には山田先輩がいるのに！

早苗が一人で悶えている横では、ひのめが美味しそうにニラせんべいを食べている。見た目は幸せそうだ。しかし、心の中は複雑だった。

何故、横島君はあんな無茶をしたのだろう。

私を守る為？そんなに頼りなかったのかな。でもあれはちよつと違うような。自分の力を示したかった？もしかしたら、まだ荷物もちしかさせてなかったからかな。男の子だから、カッコつけたかったのかなあ。でも、あんな危ない事して欲しくないよ……。

それに、私の能力見られちゃったよね。嫌われたかな、やっぱり。怖いもんね、これ。それに私のワガママで彼をここに留まらせてしまったし……。結局、また私は周りを危険な目に合わせてるよ。今までみたいに、彼も離れて行っちゃうのかな、私から。それは……悲しいよ……。

### 【横島忠夫】

まー、早苗さんたらあんなに態度変わっちゃって、そんなに和樹

が良いですかそうですね、美形はいいですなあ何かとお得で！そんな嫉妬もそこそこに、俺の目はメドーサモとい藤姫様に釘づけですよ素晴らしい！なんなのあのおっぱい。今日はええ出会いばかりで一年で一番運のいい日かも知らんね。もう記念日にしてもいいね。乳の日。国民的休日でもいい。あ、今日って元々休日か。

しかし所長も頑固ですよ。確かにオキ又ちゃんはいいい子かもしらん。けどさあ、命落としかけてまで…って思いません？多分、ここが本職とバイトの境界線なんだろうなあ。

そんな事を考えながら、食後にあてがわれた部屋で悶々としてた所。所長からお呼びがかかりました。え、何？命救ってくれたお礼にチュウしてくれんの？…なんて考えてたら、お小言でした。ぐすん。いや、廊下でお小言って地味に辛いんですが。寒くて。

「なんであんな無茶したの？」との事。  
いや、正直に言うのはマズい！一度くらい女に囲まれながらキヤーキヤー言われてもみくちやにされたかったからとか！酒池肉林的シチュエーションを一瞬だけでも味わいたかったとか！だから適当に、「カッコいい所見せたかったんすよ」とか言ってみただが…それがまずかったのかなあ。

所長が腕を振り上げて。

俺の頬を叩こうとして、水晶文珠にはじかれた。

「これが無かったら、横島君は死んでたんだよ？」所長が、泣いていた。

俺…また泣かせちゃったのか。

「格好良くなくていいよ…生きてて欲しいよう…。」ポロポロ泣いている。ああ、これは俺が悪いんだ。今日の俺、本当にカッコ悪い。所長が、ゆっくりと俺に抱きついてきた。俺も、胸に顔をつけて泣く所長の頭を撫でる。

「居なくならないで欲しいよう…」

「ええ、すみませんでした。俺、馬鹿でした。だから、泣き止んで下さい。」

「しらないよう…うう、うわあああん！」

無茶してるのは所長も一緒でしょう…なんて言えないわな、この状況で。

女って卑怯だよ。泣かれたら、心入れ替えざるを得ないだろ？思っちゃうもの、もう馬鹿な真似して所長を悲しませないようにしようって。

廊下に面した大きな窓から外を見上げると、大きな月が出ていた。

何に誓ったらいいか分からんから、あの月にも誓うか。

もう所長を泣かせたりしないって。

一人ぼっちにしない…って。

【横島視点終了】

廊下で二人が抱き合っているのを、物陰からこっそり見守る影があった。

表情は暗くて分からないが、その目元には月明かりを受けて光るものがあった。

…自分には、言いたくても言えなかった言葉。それを口に出れた彼女に自分を重ねて…泣いた。あの子は道を踏み外さない。きっと、大丈夫だ。

月を見上げる少年の、力強い瞳に頼もしさを感じ…影は静かにその場を後にした。

夜中。和樹はグッスリと眠るイヅナを起こさぬよう、部屋を抜け出す。あの宮司は親父と酒を飲んでいる。まったく、俺がなんとかするからって緊張感がないなあ。そんな事をぼやきながら、足音を立てないように玄関に向かう。

「散歩か？」

！ 背後から声がかかり、ビクツとする。振り返ると、そこにいたのは横島だった。

「お前…何で？」

「眠れなくて…さ。」

月を背負った横島は、鋭い目つきで和樹を見ていた。

「まさか、お前……」

「ちょっと、頼みたい事がある。」

そう言ってポケットから取り出したのは、和樹があげた水晶文珠。

「俺にも、これの文字を変える方法教えてくれないか？これを使いこなせば、地中を透視したり本体見つけてレポート出来るんだろ。」

「あ、あぶねえな、それなら俺がやるよ。実際今からやろうとしてたし。」

和樹はひるむ。コイツ、どうしちゃったんだ？食事前の及び腰はなんだったんだ？

「俺も…力になりたいんだ。」

焦ってるのだろうか。

和樹は仕方なく、横島から水晶文珠を受け取るとありったけの霊力を入れてから、水晶に組み込んだロックを外す。他人に悪用されないように掛けてあったのだが、今のコイツなら大丈夫だろう。

「漢字を思い描き、やりたい事を強くイメージすれば文字を変えられる。」

「あ、ありがとう!」

「それで、お前にこれからやってもらいたい事がある。これから俺たちが山で戦闘かますから、その際におキ又ちゃんを探し出してくれ。で、そこで彼女を守って欲しい。出来るか？」

「ああ、分かった！絶対成功させてみせる！」

作戦を任されて、気合いを入れる横島。なんとか、部屋に戻ってくれた。

「まったく、いきなり男の顔しちゃって、あの子一体どうしたんだい？」

屋根の上から、会話を聞いていた藤姫が楽しそうに和樹に問いかけた。

「さあ？そういう年頃なんじゃない？」自分でいいながら、苦笑いする。同い年なんだよな、一応。

「戦力に数えるのかい？」

「ああ、結構強いよ、アイツ。」

「分かってるよ。あたしを倒した、あの横島の目だったね、あれは。」

本当に、この世界は面白い。

和樹は、不思議な高揚感を感じながら、ある言葉を思い出していた。

『ここに居ていいのは、戦士のみ！』

あの言葉で戦う覚悟を決めたあの頃の俺も、あんな目をしていたのかな。ふと、和樹はそう思った。



## 第十二話 氷室の巫女のはなし(下)

【????】

わたしが生きていた頃の話です。

そこはとても貧しい村で。けど優しい人ばかりの、とても素敵な所でした。

都から導師様が来て、妖怪を倒す為の人身御供を探していると言った時。この村を治めている城主様の一人娘、女華姫様が選ばれた際に、私は代わりに人身御供に名乗りました。そしたら、私なんかの為に、村のみんなが妖怪に立ち向かってくれたんです。孤児で、身寄りの無かった私のような娘でも、村の仲間として守ってくれようとしたんです。

私は、嬉しくって、申し訳なくって。だから、皆を守る為に、死を受け入れました。妖怪は無事封印され、村には平穏が訪れました。

月日がすぎて誰も私の事など覚えていなくなった頃。私は何故か意識を取り戻していました。一人、ただ山の中で、誰にも知られる事なく空を見上げる日々が続きます。時折山で遊ぶ子供達を眺めるのが、私のちよっとした楽しみでした。

やがて時代の流れと共に村が遠くに移り、人が少なくなると、私は気づかないようにしていた気持ちに気づいてしまいます。

寂しい、という気持ちに。

独りにしないで…置いていかないで…

いつしか、そんな気持ちに心が埋め尽くされて行きました。それは、とても辛くて…いつそ壊れてしまいたくなるくらいなのに、心は狂ってくれません。泣き叫んで、わめき散らしても、時間がたつというものの私に戻ってしまっんです。

それは檻の無い牢獄でした。

記憶は薄れ、覚えているのは、昔謡った子守唄だけ。頑張って昔を思い出しながら、謡う日々が続きます。そんなある日、私は仲の良さそうな二人の男女に出会いました。

二人は、なんと私の存在に気づいて声をかけてくれました。それは何百何千という空を眺め続けて初めての出来事。夢に描いて、諦めて、でもまた懲りずに描いていた奇跡でした。

「どうしたんですか？私で良かったら相談にのりますよ。」

溢れ出た気持ちと言葉は、きつと、私が謡う初めての唄。何かが変わる、そんな予感がしました。

【?????視点終了】

和樹の文珠が、光を放つ。

神社からだいぶ離れた山中の洞窟、そこに死津喪比女の球根は居た。根は腐れ、腐臭を放っている。

「こりゃ放っておいても勝手にしんでたかな。」

「いや、油断は出来ないよ。あたしが始末する！」

突撃する藤姫。赤月が炎を纏う。

『なめるんじゃないぞえ！』球根の表面に付いた目から、強烈な霊波が放たれる。しかし、既に相手の技を熟知している二人には通用しない。

「その裏の芽が弱点だったね。」

藤姫は意識を集中させ、加速状態に入る。

『超加速』

緩やかになる時の流れの中、藤姫が素早く背後に回り…

ズバツ

巨大な目の裏にある弱点を斬りつけた。

「ギョエエエエエ！」

断末魔の悲鳴を上げる。しかし、和樹も藤姫も油断してはいない。

弱すぎる。という事は…

「株分けしたな。」和樹が言うと、死津喪比女は崩れ落ちながらも、

笑みを浮かべる。

『貴様らの計画は、筒抜けよ…。言ったであろう、監視しておると…。ふふふ、戦力を分断したぞえ。今から戻って、間に合うかえ…？』

「無理だねえ。」

呑気に言う藤姫。

「じゃあ、和樹。そっちは頼むよ。」

「ああ、任せとけ。」

和樹の姿が消え…

『複製』の双文珠が地面に転がり、霧散していった。

『おのれええええええ！』

最後に怨念のこもった叫び声をあげて、一つ目の球根が朽ち果てた。

それは、一種の賭けだった。

栄養の足りない死津喪比女は、絶対におキ又ちゃん存在を探り当てて、排除しようとする。おキ又ちゃんは地脈から栄養を取らせない為の堰なのだ。だから、こちらが先に見つけ出して守る必要があった。

横島におキ又ちゃんを見つけ出す事は可能か。和樹は可能だと判断して全てを任せている。場所じたいは前の世界で一度見つけ出してるので、何かあってもすぐ対処できるようにはしてあるが。では、和樹は今、どこで何をしているか。

地中に『浸透』し、株分けされた球根の数を確認していたのだ。今回、自分の複製体から得られた情報を見て、株分けした数は一つではないとみていた。あれは、弱すぎた。そして確認していたのは二つ。そのうち一つはおキ又ちゃん狙いで、もう一つは別の地脈めがけて地中を突き進んでいる。今の死津喪比女が逆転を狙うなら、確かに上手い方法かもしれない。

和樹は既に心理戦を仕掛けていた。神社の方に、自分がいると思わせていたのだ。実は神社の地下に、おキ又ちゃんは居る。うまくいけば、そちらの攻略は成功率が低いとして、他の地脈狙いの株に霊力を集中するだろう。そちらを和樹が始末する予定だった。しかし、あまりに早く横島を地下に配置しては向こうも感づいて計画を変更してしまう。タイミングが難しい作戦だった。

一方その頃、横島は水晶文珠を使っておキ又ちゃんの居場所を探していた。しかし、なかなか見つからない。

「イメージ、イメージ……よく考えたら今日会ったばかりだからなあ。イメージと言っても……。」

なかなか見つからず、焦りはじめる。横島は、何とか心を静めながら、頭の中を整理し始めた。

（落ち着け、まずおキ又ちゃんは巫女さんだ。巫女さんと言えば和服だ。ん？…和服とかつて下に何も履かないよな。おキ又ちゃんの時代なんて今でいう下着なんて無かったんじゃないか？もし、そうなら、おキ又ちゃんってば白衣と袴の下は……）

「すっぽんぽおおおおん！！」

横島の体内に、強烈な霊気の渦が現れた。それは水晶文珠の力をフルに発揮させる。そしてもう一つ横島にとって幸運な事が。今のおキ又ちゃんは地脈の礎に戻されているが、その身体は生まれたままの姿に戻っている。つまり、イメージと完璧に一致しているのだ。

横島の脳裏に、あられもないおキ又ちゃんの姿が映し出された。場所も今ならハッキリとわかる。

「うはっ、ヤバい！これはじつくり……いやいや、違っただる俺！今は転移するのが先だ！えーと……ありゃ？ここの地下じゃねーか。」

灯台下暗し。和樹のやつ、気づかなかったのか？横島は少しいい気になった。

「よっしゃ待ってるおキ又ちゃん！今この横島忠夫があなたの下着になりに行きます！（意味不明）」

そう言って、文珠の文字を『転移』に変化させ、発動させる。横島の身体を霊気が包み込み……

ギョッ

あれ、所長？いつからそこに？

「れつつらゴー！」

なんで腕掴んでんスカね。

しかし今更気づいた所で時すでにお寿司、いや遅し！

二人の身体が光に包まれ、その場から消え去った。

### 【美神ひのめ】

にゅふふふふふ。

横島君は気づいてないみたいだけど、私の部屋は横島君の隣だったりします。これならほら、夜中に宇宙人が来て連れ去ろうとしても助けられるもの。チュパカブラとかスカイフィッシュでも、私と彼の間を引き裂く事なんて出来ないんだから！

…嘘です。ごめんなさい、そばに居ただけなんです。もうこういうの止めた方がいいよね。痛い子だよ。嫌われないようにしないと…。今日だけ！ゴメン、横島君！

横島君は私の力を知っても怖がらなくて…それ所か、一緒に居るよって言ってくれた。そんな事言ってくれたの、エミさんや冥ちゃんくらいだったから、嬉しくて…。男の人では初めてかも。うわあ、

考えてたら恥ずかしくなつて来ちゃった！こんな時は羊の数でも数えて……うは、生け贄たくさん！！

あれ？横島君、出て行っちゃった。おトイレかな。仕方ないなあ、寝る前にちゃんと行っておかないと、お化けでるよ。あれ、違った？神様だっけ？

うーん、遅い。なんだか寂しくなってきた。でも、我慢しないと。……あ、戻ってきた。良かった、もし勝手に出てって戦ったりしたら今度こそ怒ってやるんだから！…嘘ですゴメン。怒れるわけないよ…。

でも…なんですぐ寝ないのかな。何でそんなに靈力出してるのかな。寝る前に隠れて修行？横島君、カッコいい！

ちょっとだけ、ちょっとだけゴメン、横島君！私は部屋を隔てる襖をそつと開けて、横島君を覗き見た。凜々しい横顔、何かに集中しているのか固く目蓋を閉じていて…

映画俳優みたい…なんか凄い、胸がキュンとして…

あれ、手に持つてるのはなんだろ。…文珠？あ、和樹君から貰ったのかな。えーと、字は…『探索』？何を探してるんだろ。その時、彼の口から謎の言葉が飛び出した。

「すっぽんぽおおん！！」

よ、よ、よ、横島君！？

もう私はパニックだよ！でも大丈夫、私、いい心療内科知ってる



から！一緒に病んで滅入っちゃおう！あれ、全然大丈夫じゃない！？

そこまで考えて、さすがに私もピンと来ましたよ。最後の言葉はきつと、おキ又ちゃんを見つけてビックリしちゃったんだよ。彼が今探すとしたら死津喪比女がおキ又ちゃんしか居ないもの。おキ又ちゃん、楔に戻って服を再現できなくなったんだね。もう、横島君ってそれくらいでドキマギするなんて結構ウブなんだなあ、可愛いゾ？

「よっしゃ待つてるおキ又ちゃん！今この横島忠夫があなたの下着になりに行きます！」

うおおおおい！？

【美神ひのめ視点終了】

ドサツという音と共に、二人の姿が現れるそこは、神社の地下にある石部屋。その中央に同じく石で出来た球体があり、そこから一人の女性の霊体が浮かび上がっていた。

「おキ又ちゃん！」

美神が声を上げる。横島は美神を起こしてあげると、一緒におキ又に近づいた。

「まったく、探したんだぞ？勝手に消えやがって。」

「横島さん、美神さん…その、なんて言っていないか…。」

「いいよ、おキ又ちゃん。事情があつたのは分かつたから。こつちも、ゴメンね。勝手に地脈から切り離しちゃった。」

「いえ、私、嬉しかったです。やっと声をかけてくれた人だったから。」

聞いていて、横島も気づいた。所長はおキ又ちゃんに自分を重ねていたのかもしれない、と。だからムキになって助けたがったのだらう。

「あのね、おキ又ちゃん……」

そう美神が声をかけようとした時。

ゴゴゴゴゴゴゴ……

「いけない、横島さん、美神さん、逃げて！」

おキ又が叫ぶ。

『ふはははは！ やつと見つけたぞえ！』

部屋の一角が崩れ、砕けた石の向こうの土壁から死津喪比女が現れた。

「くっ、和樹、しくじつたのか！？」

横島が、サイキックソーサーを展開して戦闘態勢に入る。

『お？ その程度の霊力で刃向かうのかえ？ 冗談にしても面白くない』

のう。』

余裕の表情を浮かべる死津喪比女に、横顔は唇を噛む。悔しいが、自分の攻撃は確かに奴には通用しない。

「私が…！」

そう言っつて美神が前に出ようとすると、思わぬ方向から大きな物音が聞こえて来た。

ドガッ！

部屋の扉が、蹴破られる。

「神通棍忘れない事！何の為に渡したと思っつてんの！」

そこに居たのは、神通棍を手にした………早苗だった。

「いい？私が時間を稼ぐ。その間に、貴女は靈力を貯めて炎を放ちなさい！残念だけど、この身体じゃ靈力足りなくて決定打は与えられないの！」

「え？あ、ハイ！」

そのやり取りで理解する。早苗は、霊媒体質らしい。そして、自分に神通棍を与えてくれた人物は一人。凄い方法を思いつくものだと感心する。

「あいつ、和樹か！？」横島も気づいたようだ。

早苗は、神通棍を巧みに使いこなし攻撃を繰り返し、尚且つ靈波を放出し続けて美神の水晶文珠の補充を行う。美神も必死に身体へ靈波を巡らせるが、まだ炎を放つには足りない。

横島は、手にした水晶文珠を見る。この靈力を全部使えば…文字を『放出』に変えて美神に向ける。しかし、文珠はうまく発動しなかった。

「くそっ、なんでだよ!？」

横島は気が動転していて気づかない。イメージしているのは『授与』もしくは『譲渡』であるのに対し、攻撃属性のある『放出』では発動しないのだ。水晶文珠は制作者…和樹の感覚をもとに動作する。他人に悪用されない為の仕組みが、今回裏目に出ていた。

「ちっ、だったらこうだ!」

横島が変化させた文字は、『増幅』。そして、身体の奥から靈気を練り上げる。

ゴアアアアアア!

『ぬ?何する気ぞ…』

「アンタの相手はこっち!」

早苗の神通棍が鞭のようにしなる。球根から伸びた根を、素早く刈り取って行く。

『弱いくせにちよこまかとおおお！』

「実戦経験足りてないんじゃない？」

笑いながら、軽やかに飛び回り攻撃を繰り返す。それは舞うようなステップワーク。死津喪比女は完全に翻弄されていた。美神は、その光景に目を奪われている。

「ゴメン、所長！これしか思いつかなかった！」

え？

美神がその声に気づくと、霊気を身に纏った横島が、すぐ傍に来ていた。

あれ、近すぎない？

あれ、あれれ？

しっかりと自分を抱きしめてくる腕。そして…

重なる、唇。

！！！！

その瞬間、膨大な靈気が横島の身体から、美神の体内に流れ込んでゆく。それは凄まじい勢いで身体中を満たし、持っていた美神の水晶文珠さえ満タンにしてみせた。和樹の作り出した水晶文珠を、『増幅』しただけの横島の靈気で。

横島は、未だ戦い続ける早苗の背中を見つめながら…

「いつか、追いついてやるからな。」

…そうつぶやき、意識を手放した。

「そろそろ限界！準備はいい？」

「はい、大丈夫です！」

素早くバックステップで早苗が美神に近づく。すれ違いざまに神通棍を美神に渡す。美神はそれを受け取ると、身体から紅蓮の炎を発しながら構えた。

「このGS美神ひのめが、極楽へ逝かせてあげるわ！！」

神社から離れた地中で、死津喪比女は怒りの声を上げた。

まさか、あんな雑魚にやられるとは！神族の女や、和樹とかいう男相手ならまだ分かる。しかし、あんな力のコントロールさえままたならない小娘に自分の球根がやられるとは思わなかった。

だが、まあいい。

死津喪比女は、近くに新しい地脈の気配を感じていた。このレベルなら、まだ立て直せる。今度こそ、あいつらを始末できる！はやく、はやく辿り着かなければ！

……来た、奴だ！

どういう理屈か知らないが、奴は地中を移動している。本当に人間か！？

しかし、いまさら遅い！

今、地脈に到着したわ、このノロマが！

和樹は残り200メートルという所で追跡を止め、地表へ出た。

死津喪比女が、目的地に到着したのだ。

案の定、前方の地面が急速に盛り上がり、巨大な人型の妖怪が現

れた。

『ふははははははは！良い気分だぞえ！力が、湧き出るようじゃ  
』！』

「そりゃ、良かったね。」

和樹は、なんでもなさそうに言う。

『ふふふふふ、下手な強がりも滑稽よのう。本当は怖くて仕方ない  
のである？』

「いや？なんかそこまで上手く引っかかってくれと申し訳ない  
いうか。」

やっと、死津喪比女は自分の変化に気づく。思ったほど、パワー  
アップしていない。こんなに、ハイテンションなのに。楽しくて、  
しょうがないのに。

「地脈に見えたかもしれないけど…それ、ただの水道管よ？」

『ふはははは！嘘つくでない！こんなに靈気を貯めた水道管がある  
ものか！』

「うん、だから靈気を通したの。文珠で。」

和樹が、地中から文珠を呼び出す。

ポコツという音をたてて出てきた文珠には、大きくこう刻まれて  
いた。



『陽気』

『貴様あああああ！』

「ごめんねー！」  
ズドドドドドドド！

和樹の両手から凄まじい量の靈気弾。そしてそれを目眩ましに使い、死津喪比女の背後に回り込み……………

ズバッ

『ギヤアアアアアアアアアハハハハハハハハハ！』

愉快的笑い声を上げながら、死津喪比女は燃え尽きて行った。

「いや…あの、本当にゴメン。」

いくら自分の実力を錯覚させる為とはいえ、さすがにこんな最期は無いよな、と和樹も反省していた。

崩壊した地下室では、公平と宮司が一人の導師の思念体と話し合っていた。おキ又は浮遊靈に戻っており、心配そうに、眠っている

早苗の傍にいる。美神は、意識を取り戻したものの立ち上がれない横島に膝枕をしてあげていた。

「つまり、反魂術を施しておいた、と。あの氷漬けの遺体には楔以外にも意味があったのですか。」

「楔には霊体だけでも足りるからな。あの身体にもう一度霊力を流し込み、おキヌの魂を同化すれば、生き返るだろう。」

簡単に言ってくれる、と横島は思う。さつき自分で実践して、一人を満たすだけでも大変だったのだ。そんな術式を発動させるだけの霊力など…

「あ、この地脈使えばいいのか。所長、あのオッサンに頼めば可能じゃないツスカ？」

「あ、忘れてた！横島君頭いいね。」

横島は力なく苦笑いする。この人は、他人を利用するなんて発想は無いんだろうな、と思ったのだ。

「えっと、山の神様聞こえますかー！」美神が呼びかけると…。

「ムツハー！よっこしつまさーん！！」

「キモい！？」

凄い勢いで床からひげ面のむさ苦しい男が現れた。…横島の股の間から。

『話は聞いていたツス！美神さんが俺の事を忘れてた事も含めて！』

「ごめんなさい…」

「いいから話進めろよ。」

冷たく言い放つ横島に怯えながらも、山の神は導師のもとへ向かう。

『俺が地脈の力をあの氷結結界に流し込めばいいんすね？』

『う、うむ。あれには自動的に術が発動するようになってるからな。おキヌ、辛い思いをさせて済まなかった。これでお前も生き返るぞ。』

導師の言葉に、おキヌが少し困った表情になる。

「でも、私の記憶はどうなるんでしょう。お世話になった皆さん達の事を忘れてしまうのは…」

「いいんだよ、おキヌちゃん。」美神が言葉を遮った。「楽しかったもん。生き返ったら、またいつか遊ぼうね。記憶なんてまた新しく作ればいいんだよ。」

「そうそう、俺もほら、今回こんな役得あつたし。」

横島が美神の太ももに頼ずりする。美神は仕方ないなあ、なんて言っつて横島の頭を撫でていた。

「分かりました。」クスツと笑って、おキヌは山の神に頭を下げる。「私の為に、力を貸してくれてありがとうございます。」

『なんの、おキヌちゃんは今まで俺の愛する山を守ってくれたじゃないか。今度は俺が、力を貸す番ツスよ!』

ニカツと笑うと、山の神は力を解放する。

『大地の霊脈よ、山の神の名において命ずる!氷室の氷結結界の靈力を満たせ!』

同時に、おキヌの霊体が転移して行く。

「美神さん、横島さん、また会いましょう!また会って、一緒に…」

「うん、約束!一緒に遊ぼうね!」

「大人の遊びを、教えてやるさ。」

パソコン、と殴られる横島。何気に導師が突っ込んでいた。

「ええ、きつとですよ!」

そう言っつて、おキヌは消えた。え、なんで俺睨まれてるの?キョトンとする横島。

『では、私も消える。氷室宮司、おキヌを頼む。』

「承知しました。」

『横島さん、また遊びに来るツスよ!とおきのハイキングコース紹介するツス!』

「遭難した奴のオススメなんか怖すぎるわ!」

そんな会話を残して、導師と山の神も消えていった。

「和樹、こっちは終わった。後は頼む。」

公平は携帯電話でそう告げる。その表情は、何故かまだ厳しいものであった。

洞窟の中。

氷漬けのおキヌが眠っている。

その周りを、無数の死体が囲んでいた。それは今まで遭難し、行方知れずになっていた死体たち。

和樹は、横島たちの話を聞いて、一つだけ引っかかっていた。

「ワンダーホーゲルの死体に襲われた?」

今では山の神である男の死体に襲われたと言っていた。それが本当なら、植物系の妖魔特有の戦い方を仕掛けてくる可能性がある。

種を植え付け、操るというものだ。

案の定、種を植え付けられた死体は最後の戦いを仕掛けてきた。

目的は、おキヌに供給される霊力。もはや、近場にある餌はそれしか無い。

そこに、藤姫と和樹、イツナが居た。

「統制が取れてるね。」

「ああ、この中のどれかの身体に、死津喪比女の霊核が埋め込まれているハズだ。」

二人が、動き出す。藤姫は先陣切って赤月を振るい、和樹は炎を吐き周囲を焼き払う。

イツナは、おキヌの前で全体を見渡している。そして、一体だけ他と違う動きをする死体を見つけ出した。その胸元には、淡く光る霊核。

「クアアアアアア！」

途端、雄叫びを上げ走り出すイツナ。襲いかかる死体達を紙一重でかわし、ターゲットめがけ牙をむく。

ガッ！

『ギヤアアアアア！』

ポツカリと穴の開いた胸元を見つめ絶望の悲鳴をあげる死体。その様子をイツナは一瞥し、くわえた物を…

ガリッ　　噛み砕いた。

『……………！』

それまで動いていた死体たちが一斉に動きを止め…

バフッ

灰になっていった。

「イツナ、アンタ本当に凄いな。」

藤姫も、その手際の良さに感心していた。

「帰ったら、またお揚げ祭りだな。」

「キューン」

やっといつもの愛くるしいイツナに戻る。和樹はホッとした。なんだか、こちらに来てからのイツナは思いつめたような顔をする事が多い気がしたのだ。

文珠で場を清める。これは、藤姫の提案だった。生き返って初めて見る景色が遺灰だらけなんて嫌だろう、という配慮だ。

氷の柱が、光を放つ。おキヌが、生き返る。和樹は、前の世界と同じように、手に霊波刀を構え。

柱に突き立てた。

「まったく、とんだ旅行だったよ」

和樹が、助手席でぼやく。

「まあまあ、温泉は楽しめたし良いじゃないか。」

公平がなだめる。それを苦笑いしながら見守る藤姫と、我関せずと景色を楽しむイツナ。

帰りの車の中で、和樹はナビをしながらおキ又の事を思い出していた。

復活したおキ又はやはり記憶を失っていた。が、心配はしなくても良さそうだった。穏やかで呑気な性格は持って生まれたものらしく、保護する氷室家とも上手くやって行けそうだった。今は日常生活を送る練習をしている段階だが、そのうち学校にも通えるだろう。

和樹はおキ又に、護身用に水晶文珠を渡していた。『防壁』であり、前の世界では悪霊に狙われていたが、これで身を守る事が出来る。これなら、わざわざ美神さんに相談しに上京してくる事もなくなるだろう。

和樹は、おキ又にGS業界と極力関わって欲しくなかった。

前の世界では横島の苦しみを理解せず、ルシオラを居なかったかのように振る舞い、横島の独立には最後まで反対していた。事務所



に残ったおキ又は結果的に美神についていけず田舎に帰るが、貴重なネクロマンサーとしての能力を業界が手放すわけは無く、様々な脅迫や圧力によっておキ又は業界に引き戻されてしまう。そして、不安定なまま仕事をして…

最悪な結果を伝え聞いている為に、今度こそおキ又ははここで静かに暮らして欲しかった。

「和樹、もっと気楽にしな。」藤姫が、考えこむ和樹に声をかける。  
「暗い顔にしても何もならないよ。」

「まいったな、そんなに顔に出た？」

「コン！」イツナも肯定する。

「お前が何を心配してるか知らんが、今は忘れて旅行を楽しめよ。ナビ、頼むぞ？」

「この先を、上です。」

「おい！」

いつもの、しょうもない会話に戻る。

ああ、これでいいんだ。

和樹は穏やかな表情で、地図に目を落としたのだった。

その頃、横島たちは…

「うふふふふ。もう、そばに人がいても平気だよ！こんなに賑やかなお店入っても、汗かかないもん！」

「所長、苦勞したんスねえ…」

二人で、土産物屋で買い物をしていた。

あの後、正式に付き合う事にした二人。帰りは恋人同士、のんびり寄り道をしながら帰る事にしたのだった。実は今回の仕事は温泉旅館に出る男の幽霊の退治だったのだが、それがあの山の神になった男だった。話し合いで解決、出費ゼロ。死津喪戦では精霊石を一つ消費したが、和樹が「イツナの判断で消費したから」と代わりに破魔札をたくさんくれたのだ。

書類上は精霊石分の差額で赤字だが、実質は黒字。なんせ、横島が「そのしわくちやの奴、練習用にくれないか？」と公平が拳に巻いていた破魔札までゲットしていたのだ。セコいが、しっかりしている。

そんなワケで、金銭的に大きなプラスを得た二人は、ちょっと贅沢な旅を楽しむ事にしたのだった。とは言っても…。

「こんなちっちゃいお菓子十個で二千円って高くない？」

「土産物ってみんなそんな物ツスよ。コンビニのご当地物の方が安くて質の良いものあったりしますからね。」

世間知らずの女と、妙に金銭感覚のしっかりしている男。気楽に

贅沢の出来るコンビニではない。お店の人に嫌な顔されてもどこ吹く風。じっくり吟味して、選りすぐりの土産物を買った頃には既に二時間近く経過していた。

「郵送って便利なんだねえ…。」

「金あるって、ホンマ楽やなあ…。」

旅行というには身軽な格好の二人は、幸せそうに腕を組み、商店街を歩いて行った。

「以上が、死津喪比女退治の顛末なのねー。」

「ヒヤクメ、私が必死で戦ってた時に、貴女は覗きをしていたんですか!？」

妙神山に、小竜姫の雷が落ちる。

老師と天竜童子は修行場に避難していた。

「ひーん、だって留守番ばかりじゃ暇なのねー!」

「私がブラドー島に吸血鬼退治行ってる時に、貴女は…」小竜姫の

怒りは収まらない。

この数日、小竜姫は唐巢神父と共にイタリアのブラドール島へ出向いていた。吸血鬼のブラドール伯爵の討伐である。ブラドール討伐を依頼された唐巢は、最初和樹に協力を求めに神社へ行ったが、留守だった。そこへ、最近人間界のパトロールを任されるようになった小竜姫が、パトロールと称して神社に遊びに来て…という流れである。

「しかし…温泉かあ、いいなあ。私にも声をかけて欲しかったです…。」

「そ、そこじゃないのね、反応すべき所は…。」珍しく突っ込みに回るヒヤクメ。

「そ、そうですね。」  
我にかえる。

「横島さんにお祝いの品でも送りましょうか！これで彼も煩惱に振り回されず、真人間になれる事でしょう！」

「そこでもないのねー！第一恋人居ない暦イコール実年齢500歳の小竜姫に祝ってもらっても…ハッ！」

「ヒヤクメエ…」

ゆらりと揺らめく小竜姫。目が光り、口元が歪んだ。

「ぶ・つ・ば・つ・Death！」

「きゃあああああ！？」

妙神山は今日も平和だった。

### 第十三話 オカルトGメンのはなし

GWも残すは二日。

社務所では藤姫に抱っこされたイツナが気持ち良さそうに寝ている。

昨日は揚げ豆腐だった。今朝は、刻んだ油揚げの入った味噌汁じゃあお昼は何だろう？暖かい日差しを受けて、夢が幸せ色に彩られて行く。

閉じた目が優しい曲線を描く。それを眺めながら、藤姫は社務所に入って良かったと心の底から思っていた。

最初、社務所に入るのは和樹になっていた。が、外の掃除に飽きた藤姫が言葉巧みに誘導し、入れ替わったのだ。

「ほら、授与品の受け渡しとかすると嫌でも会話しなきゃならないだろう？学校の連中とかと話したくないなら、あたしが変わってあげるよ。」

苦笑いしながら、了承する和樹。バレバレだった。

「まったく、どうしたんだい？フワフワじゃないか。」

藤姫も、いい具合に壊れている。

優しく撫でてみると、結界が少し揺らいだ。一体誰だ、無粋な奴は。そう思い視線を上げると、参道を歩く二人の姿。あれは…唐菓

神父だ。隣にいるのは吸血鬼と人間のハーフ、ピート。この世界では初対面である。

仕方なく対応しようとすると、丁度外で掃き掃除をしていた和樹が二人に話しかけた。ナイスだよ和樹、あんた空気読めてるね。そう思っただ目線を戻すと、イツナは既に起きていて、外の三人を見ていた。

「おや、起きちゃったかい。よく気づいたねえ。」

「コン！」少し得意気。でも口元が濡れていた。ヨダレだ。藤姫がティッシュで優しく拭いてやると、甘えた声をあげた。

この子は、賢いうえに異常に対してやけに敏感だ。今まで苦労してきたんだろう。藤姫は、イツナと自分を重ねて少し泣けた。安全だと分かっているにも、反射的に警戒してしまう。

もういいんだよ、安心していいんだよ。そう思いながら、イツナを撫でる藤姫。イツナは安心したのか、また目蓋を閉じて膝の上で丸くなった。

「へえ、イタリアからわざわざ...。」

「ええ、神父の下でGSの勉強をしながら、学校へ通おうと思っ  
ています。」

ピートはにこやかに語る。こいつは変わらないな。人の良さそう

な好青年そのままだ。

「彼はオカルトGメン志望でね。資格に高卒以上とあったから、そのために高校高校に通う事になったんだ。」

この神父は身元引受人、という事か。相変わらず人がいい。いくら破門されているとは言え神父が吸血鬼を。同業者から変な目で見られないだろうか。和樹は自分の事を棚に上げてそう考えていた。

「オカルトGメンですか。日本にもあつたんですね。」

「ああ、まだ小規模だから人手不足で大変らしい。ピート君なら大きな戦力になるだろうね。」神父が太鼓判を押す。

和樹は憂鬱になる。オカルトGメン。なら、西条もいるんじゃないか。せつかく幸せを満喫している横島たちにちよっかい出さなければいいが…。

「ねえ、ピート君。なんでオカルトGメンに入ろうと思ったの？」

「人助け…ですね。唐巢神父みたいな、立派なGSになって人助けをして社会に認められて…吸血鬼の社会的立場を、向上できたらいいなって。」

ああ、コイツは故郷の連中の為にやっているのか。そういえば、前の世界でもそんな事言ってたな。あ、神父照れてる。良かったね、神父。

「神父、彼をここに連れて来たのは僕が何を言うか分かった上で…期待しての事ですね？」



「ははは。分かるかい、やっぱり。」頭をポリポリ掻く。抜けるよ？  
何の事か分からないピートはキョトンとしていた。

二人を社務所へ案内する。受付には藤姫がいたが、挨拶しようとする口元到人差し指。ああ、イツナが寝ているのか。

客間に二人を通し、熱いお茶を用意して、席にすわる。

「さっきの女性は、初めて見るね。」

「ええ、神族の藤姫です。小竜姫の知り合いで、ウチの神社の祭神として迎えました。」

驚くピートと神父。当然のリアクションだ。

「で、さっき藤姫の膝で寝ていたのが、妖狐のイツナ。二人とも、俺の家族です。幸せに暮らしてますよ。」

ピートは感動していた。迫害され続けた一族の出だけに、人の身で他種族を家族と言いつける和樹の姿が眩しかった。

「ピート君に話したいのは、イツナの事です。」

和樹はゆっくりと語り出した。

イツナは、この神社の裏山に封印されていた妖怪です。最初は声をかけただけで逃げちゃったけど、少しずつ距離を縮めて今の関係になりました。

イツナの封印を解いてすぐ、六道家の当主の冥菜さんって人がウチを訪ねて来ました。ピート君は知らないと思うけど、日本でGSになるなら覚えておいた方がいいよ。有名だから。

その当主から、妖怪を保護するならGS免許を取った方がいいと助言を受けました。僕は最初、自分を利用する為に接触しに来たのかな、と思ったんですけど、違っていました。その時霊視してみたら、境内の外に複数の人間の殺気を感じたんです。彼らに穏便に帰ってもらうには、その提案に乗るしかありませんでした。冥菜さんは、大きなトラブルが起きないようにしてくれました。

お二人とも気付いてらっしゃるでしょう、ここの結界。悪意や敵意を察知すると警告を発したり、排除したりするんです。外の人間は、交渉を優先するために外に出ざるを得なかった。妖怪に理解ある冥菜さんとは違う理屈で動く…妖怪を排除すべきと考える政府関係者の寄越した人間でした。

勿論、それがGメンである証拠なんてありません。ただ、国の方針で派遣された人間であるのは確かでしょう。ピート君に知って欲しいのは、オカルトGメンという組織にはそうした方針に沿わなくてはいけない時があるという事です。Gメンがウチのイツナを殺しても、それが国の命令なら罪に問われない。酷いけど、これが現実です。

ピート君は故郷の同胞の為に頑張ると言っていたよね。とても尊

い志しだと思う。ただ、ピート君がオカルトGメンで活躍する事がどんな影響を与えるかは分からないよ。ピート君自身が危険視されるかもしれないし、オカルトGメンでの活動が君の目的に本当に直結するか、懐疑的にならざるを得ないんです。

僕も、色々悩みながらやってるよ。君も、すぐに結論を出すんじゃないで、神父の下で色々見て悩んだり迷ったりした方がいいと思う。

…そんな所かな。

神父、こんな所でどうでしょう？

唐巢神父は戸惑いながらも頷いた。正直言って、和樹がここまで深く考えているとは思わなかったのだ。彼の狙いは、人と妖が共存できるという事をピートに見せたかっただけだったりする。

そして当のピートは和樹の言葉に考えさせられていた。オカルトGメンを選んだ理由は、単に自分の力を活かして人助けができるから。唐巢神父のように人々に貢献すれば、同胞の地位の向上の助けになると思っていたのだ。

「そうですね…。よく考えてみます。もしかしたら、もっと僕に合ったやり方があるかもしれませんし。」

「まいったな。僕も視野を狭めていたようだ。」

「や、やめて下さいよ！僕だって全然考えまとまってなくて、途中から何言ってるのか分かんなくなってたのに。…それに、これはあくまで僕の考えだから…」

困った顔をする和樹。

唐巢神父が彼に会わせたがっていた理由が、今のピートには理解できた。彼は人と妖のハーフである自分の身を案じてくれていた。人よりも、人外の立場に理解を示していた。こんな人間もいるのかと驚いていた。…会えて、良かった。きっと今日は、僕の長い人生の中でも大きな意味を持つ一日となっただろう。ピートはそう確信していた。

その隣で、唐巢は少し前の事件を思い出していた。

先月の頭に請け負った仕事。オカルトGメンとの合同作戦。妖魔を実験材料にしていた南部グループの研究所の壊滅、その際垣間見た悪魔のごとき所業。同じ人間とは思えない非道な連中は人権を約束され司法によって裁かれる。…が、改造され自我を失った妖魔は被害者として扱われない。あの作戦ではオカルトGメンの人間も多く参加していたが、皆、抵抗なく妖魔を殺していた。中には、楽しんでいるとしか思えない者もいた。作戦終了後、黙祷を捧げる自分をおかしなものを見る目で眺めている者もいた。それが、自分には信じられなかった。

ピート君には、あんな人間のようになってほしくはない。しかしこの気持ちをどう説明してよいか、自分には分からなかった。和樹の言葉を聞いた時に溜飲が下がった気がしたのは、きっと彼の言葉も自分と同じような経験をしたうえで出てきたものだったからだろう。そんな気がした。

自分が言葉に出来なかった気持ちを代弁してもらった唐巢は、心が軽くなったような気がしたのだった。

二人が社務所を出る時。

社務所の受付の方へ振り返ると、イツナが窓枠の傍で身を乗り出してこちらを見送っていた。二本足で立って、窓に両前足をつけた状態だ。

「コン！」しつぽを大きく振る。

二人は笑いながら大きく手を振って応えた。

「ねえ神父。僕にはまだ先の事は分かりませんが、一つだけ言える事があります。あの子を殺すような事は、絶対しないと誓いますよ。」

「うん、今はそれで充分だよ。」

唐巢神父も満足そうに頷いた。

【横島忠夫】

今は事務所でバイト中なんだが…

えーと、どうなってんだ、こりゃ？

目の前には、所長の母親の美智恵さん。そして俺の腕には、所長がしがみついている。

「ママには渡さないんだから！」

「違う違う、横島君の卒業後の話をしてるの！良かったらウチに就職しないかって言ってるだけでしょ！」

人生のモテ期、それはきつと今。

いやー、遺伝って凄いわ何この爆乳。ちょっとした事件ですよ。事件は会議室でオフィスラブ、現場でおきて破りの恋ですよ。もう意味なんてありません。

「でも私の助手だもん。彼氏だもん。旦那さまだもん！」

すんごい飛び越えた！ホップ、ステップ、離陸！みたいな。

「高校生つかまえて何言ってるの！結婚ならあと三年待ちなさい、反対しないから！」

あ、反対しないんすか。

「私、Gメンには行かないよ？横島君も行かないよね？」

というかGメンで何なんすか？話について行けないんで説明して

もらえませんか？

「オカルトGメンはね、霊能犯罪専門の国際警察みたいなものよ。私が日本支部の責任者してるの。まだ出来たばかりでね、人手不足なのよ。」

ほうほう。でも何で俺なんスかね。俺そんなに霊能力凄くないッスよ？

「えー、横島君凄いよう。ブワーって膨らんでドカーンってなったよ？」

なんだろう、俺。なんか不思議な生き物になってませんか。

「貴方の事は調査してあるの。娘の彼氏だしね。」

怖いなあ。職権乱用じゃないのかなあ。

「あー、本当だ。報告書に凄い沢山書いてあるよ。えっと…うわ、えっちだよう！」

何書いてんスかね！すっごい気になる！というか最初の項目からえっちとか！

「えーと、横島君。若いからってほどほどにしないと駄目よ？とりあえず霊力は霊視スコープで測定したら基準を超えてるし、ウチの子と付き合っついていられる忍耐力もあるし。適性はあると思うわよ。」

後半だけ聞くと保父さんの適性みたいに…というかほどほどって何！？

「あのね、横島君が行きたいなら、止めないよ。けど、行ってほしくないよ……。」

「まあ高校卒業までまだまだ長いし、ゆっくり考えてね。あくまで選択肢の一つだから。…それより、ひのめ?」

「なに?」

「アナタ、いつになったら能力コントロール出来るの!? これ以上周りに迷惑かけるんじゃないやありません!!!!!!」

雷が落ちた。ええ、特大の。

「う…反省してます。」

「反省だけなら猿でも出来ます。そこから学習するぶん猿の方がマシよ? 猿山で修行してみる?」

いや、あの、それは言い過ぎじゃないでしょうかお義母さん…。

「お義母さんキターーーー!」

「言質とったーーーー!!」



なんだこの親子！というかボイスレコーダーとか！何仕込んでるのよ何時の間に！？

「と、とりあえず今のアナタはオカルトGメンにも入れない実力で。もし横島君がオカルトGメンを選んだら滅多に会えなくなるわよ？嫌なら、彼の卒業までに何とかなさい！」

「は、はい…頑張ります…。」

ああ、そういう事ね。俺をダシに使って娘を鍛えよう。ついでに俺もスカウトしよう。いい性格してるツスね。

「もう、怒っちゃ駄目よ？」そうやって俺の腕にお義母さんのオッパイが、オッパイが！

「む！駄目だよ誘惑しちゃ！」とかなんとか言ってるこっちの腕にも所長のふわふわが、ふわふわが！

「これからも、ひのめの事よろしくね、横島君。」

「不束者ですが、よろしくだよ、横島君！」

なんかおかしかつたけど気にしない！

よっしゃ、任せなさい！

この横島忠夫が、責任持って所長を一人前にして見せようじゃないですか！

【横島視点終了】

ちなみにその頃、遠く離れたイギリスでは一人の男が荒れていた。

西条である。

「何故自分が日本のGメンのメンバーに選ばなかったんだ！」

何本目になるのか、空いた酒瓶が床に転がり落ちた。店のマスターは渋い顔をするが、逆らうと怖いので何も言えない。

「ひのめちゃん……」

西条が思い出しているのは、自分に懐いていた少女の姿。日本に帰れば会えるはずだったのに。

勿論、これは美智恵の仕業である。自分の娘に相応しいかどうか、美智恵は前もってリストアップした人間を調べ上げている。西条は、その女癖の悪さと頭の固さ、そして性格の悪さ……内面にいい所無しと判断されて日本に帰されなかったのだ。全ては娘の為に。美智恵の無茶ぶりはこの世界でも健在であった。

「仕方ない、しばらくはこっちの日系人で我慢するか。」

西条は知らない。自分が、浮気調査の対象としてマークされている事を。

椅子の下に、盗聴器が仕掛けられているという事を。

今の発言が、何日か後には職場の女性の大半に知れ渡ってしまうという事を…。

## 第十四話 青い春のはなし

それは、GW明けから丁度一週間たったある日の事。昼休み、食堂で和樹は横島の惚気話をうんざりした表情で聞いていた。

「しかし、まだ手え出してなかったんだな。お前の事だからあの帰りにホテルに連れ込んだかと思っただけど。」

「アホか！あの所長がそこまで大人なわけないだろ！」

横島は忘れている。あの所長はもうすぐ二十歳、自分らより年上なのだ。付き合い始めてから電波な発言は少なくなったが、かわりにべったり甘えるようになり、言動が幼稚になって来ていた。余計手が出しにくくなっているのだ。

「で？帰りのデートは楽しかったか？お土産で笹団子とか送られて来たから焦ったんだぞ？どこ行ってたんだよ。」

「あー、新幹線乗り間違えたり色々あつてな。」

今話しているのは死津喪比女と戦った後の事だ。

横島達は現場までレンタカーでやって来たのだが、乗り捨て可能だったので帰りは新幹線で帰った。途中、観光しながら帰る予定だったが新幹線を間違え反対方向へ。その後も珍道中を繰り広げ、親切な黒服のお兄さん達に助けられてやっと東京に帰ってこれたらしい。

確実に美智恵の部下じゃないか。

そんな事を考えていたら、不意に校内放送が耳に飛び込んできた。

『1-C、芦原和樹。1-C、芦原和樹。至急、校長室まで来るように。』

校長室？

「なあ和樹、何やったたら校長室に呼ばれるんだよ？」

「ちっ、あの野郎、裏切ったな！？」

「え、え！？どういっ…」

急いで食堂を後にする。

しかし、本当に何の用なんだか。和樹は首をひねりながら校長室へと向かった。

「入りなさい。」

失礼します、と言って戸を開けると、ウチの校長の隣に見知った顔があった。いや、この世界では始めてだ。

前の学校の校長であった。

「本来ならこういう事を頼むのは禁止されてるんだが、緊急事態なんだ、助けてくれ！」

前校長は開口一番そう言って、和樹に泣きついた。とにかく落ち着くように言って、和樹は話を聞く体勢に入る。

その校長の話では、転入生のピートが机に飲み込まれてしまったという。妖怪の仕業と思ってGSに助けを求めたら、そのGSも飲み込まれてしまったらしい。

「もし自分に何かあったら君に助けを求めるように、とそのGSに言われていたのだよ。君がこうした依頼を受けないのは聞いているのだが、特例で受けってくれんかね…。」

「そのGSって、もしかして…。」

「ああ、唐巢神父だよ。」

「何やってるんですか、神父！というか転入してすぐトラブルとか凄いなピート！」

「分かりました、受けましょう。今回だけにして下さいね。」

和樹が承諾すると、前校長はホツとしたような顔をする。

「ありがとう。」

これは、こっちの校長だ。

「出席の方はちゃんと免除しておく。よろしく頼むよ。」 和樹は、なんとなく面白くなかった。なんだ、ただ働きかよ。しかしこれで何かしら謝礼を受け取ると、これからも厄介事を持ってきそうなの

で我慢した。

校長室を出ると、やはり横島が心配そうに待っていた。

「ああ、大丈夫。ちよつとこれから早引きするけど。」

「裏切り者って何なんだ？戦うのか？」

「ん？ありゃ冗談だよ。ちよつとGSとして仕事頼まれただけ。心配すんな。」

そういうと、横島は少し怒った表情をする。ありゃ、冗談通じなかった？悪い事したかな、と和樹は反省した。

「手伝おうか？」

「いいよ、お前はちゃんと授業受けとけ。」

昼休みの終わる、予鈴が鳴る。

澁々教室へ戻る横島を見送ってから、和樹は学校を後にするのだった。

さて。

懐かしい元母校の馴染みの教室に入ると、案の定教室の真ん中に

は古い机が一つ。生徒達は皆、距離を置いて周りを囲んでいる。

「この机が、ウチの生徒を飲み込んだんです。」

校長が説明する。ああ、分かっている。こっちも一度飲み込まれて  
いるんでね。

「じゃあ、中に入って引きずり出します。とりあえず皆は別の教室  
とかで待機してもらえますか。」

教師たちに促され、渋々移動する生徒たち。授業サボれると思っ  
てずっと野次馬に徹するつもりだったんだろ？そうはさせるかって。

机は：愛子は、ただこちらを待ち構える。

また会えた、という感慨もあった。が、同時に和樹は愛子の姿に  
複雑な思いを抱いていた。

お前はそんなに人が好きなのか？

そんなに皆と一緒に学校をやっていたいのか？そんなに寂しかっ  
たのか？

人間ってそんなにいいものか？

人間不信の根強い和樹には愛子の気持ちが出来出来なかった。

「いいぜ。相手、してやるよ。」とにかく今はピートたちの救出を  
優先しよう。感傷は後だ。



進んで机の前まで来る和樹に警戒しながらも、机は大きく口を開ける。

和樹は抵抗せずに飲まれて行った。

そこは、誰も居ない教室。

ただ、そこかしこに歪みがある。おそらく、動揺しているのだろう。和樹はまず、神父たちの居場所を探す事にした。

誰も居ない廊下を歩く。前の世界ではすぐに迎えが来たが、今回は警戒しているせいか来ないようだ。やれやれ、面倒だ。和樹はため息をつき、歩いて行く。

ある程度歩いていると、何やら大きな声。先生の声のようだ。ん？先生？その教室の入り口手前で聞き耳を立ててみると…

「主はいつも見ていらっしやるのです！」

ガラツ 「アホかー!!」

唐巢神父が、神の教えを説いていた。

この空間は洗脳結界のようなものが張られている。だから仕方ないとはいえ…アンタ本当にS級GSか？

「和樹さん！」ピートが気付いて声をあげる。それに反応して、他の生徒も和樹の方を見た。

「おお、新入りか！」

「歓迎のホームルームをしなくちゃ！」

騒ぐ生徒たちを無視して、和樹は神父に詰め寄った。

「神父…ミッシヨン系なのか、この妖怪の腹ん中は！？そもそも高校で宗教学とか！」

「す、すまない、ちょっと先生に懂れてたり…」

胸倉を掴まれ、正気に戻る唐巢神父。

「ちょ、ちょっと、暴力はいけないわ！」

そこへ、古いデザインのセーラー服の女子高生が駆け寄ってきた。

愛子だ。

………つて、

「拉致監禁女に言われたくないわー！」

「いきなりバレてるー！？」

どろどろどろ、と崩れ落ちるギャラリー。

なんかノリいいな、君ら。

「き、君が本体だったのか！」唐巢神父が驚く。ピートも目を丸くしていた。

「確かに一番古株と聞いていたけど…。」目の細い男子生徒が言う。

「それ聞きゃGSなら分かるでしょ。この学校の創始者で、一人じや学校出来ないから皆を取り込みまくったんだし。」

「あ…。」神父が固まる。

それを黙って聞いていた愛子が、瞳に涙をためる。

「どうして邪魔をするの！私の、私の学校を壊さないでよ！」

和樹は冷たい目を愛子に向ける。

「私は…私はただ皆とずっと一緒に居たかっただけなの！一緒に授業を受けて、一緒に青春を生きてみたかったの！」

「ふーん、で？お前、これからどうする？正気に戻ったGS二人を相手にする気か？悪いが俺は容赦しないぜ？」

視線に殺気をのせる。愛子はそれなりに年月を経た妖怪だ。和樹の実力は、察知出来た。普通に戦ったら瞬殺される。だからといってこの人間を人質にするような真似はしたくない。なら、大人しく降伏するしかないだろう。

「帰すわ。皆を、元の時代に…」

こぼれる涙を拭いながら、愛子は周囲の生徒たちへ頭を下げた。

「今までごめんなさい…私の我が儘で、みんなを閉じ込めて…許してくれないと思うけど、本当にごめんなさい……。」

「いいんだよ、愛子君。」

先ほどの目の細い男子生徒が、泣き崩れる愛子の肩に手を置いて言った。

「僕たちは確かに出会い方は良くなかったかもしれない。けれど、君と共に過ごした時間はとても楽しかったし、僕らはもう仲間じゃないか。いまさら君が妖怪だったからと言って態度を変えるような事はしないよ。」

「高松君……」

ああ、全くこいつらは…そのまま夕陽に向かって走れよ、もう。

「和樹君……」神父が困った表情で和樹を見る。

パン、パン、と手を叩いた。

「はいはい、じゃあとりあえず、皆を帰すなら準備をしないとな。」

「準備？」和樹の発言の意図が分からずキョトンとするピートや他の連中。

「だからさ。卒業式、やるつぜ。ここはお前らの学校なんだから？」  
和樹がそう言った途端、皆の顔が輝き出した。

「ああ、そつだよ愛子君！僕らの卒業式をやるう！」

「よし、じゃあ皆椅子を体育館へ運ぶんだ！女子は卒業証書を作ってくれ！僕らは垂れ幕作りと力仕事だ！」

さすがに高度経済成長を支えた世代が多いと違う。こうと決めたら動きが早い。ああ、ピートまでキラキラしてる。こういうノリ好きなんかな。神父、神父、何スピーチの練習してんの。

「みんな…」

呆氣にとられる愛子。みんな、私の事怖くないの？許してくれるの？

そんな愛子を、和樹は優しく見守っていた。人間が好きなら、初めから普通に学校に頼めば良かったのだ。勇気を持って、自分も授業を受けたいと。しかし、それは自分にも言えるのではないか。前の世界でも、一人で背負い込まずに皆と共に在れば…そんな事を考えていた。

ポカッ！　いきなり、叩かれる。

「ほら、新入り！ぼさつとすんなよ！」

ゴツイ兄ちゃんが和樹をつかむ。

「お前も体育館に來い！」

「え、え、俺もかよ！」

有無を言わずず連行される和樹。言い出しつぺだから仕方なだが、こんな扱いつて無いだろ、とボヤいていた。

唐巢神父が校長の役をノリノリで引き受け、卒業式がとり行われる。

和樹も、勿論参列している。

(いや、あの、空気読んでるから言わないけど。俺、こないだ入学式したばかりなんだよ？ここに至っては一時間しか滞在してないんだけど…)

そんな和樹をよそに、卒業式はつつがなく進行して行った。一人ひとりに卒業証書が渡され、そして最後に…。

「出席番号38番、愛子君！」

「はい！」しっかりとした足取りで、神父の下へ向かう。

「卒業、おめでとう！」

「あ、ありがとう、ござい…ます！」

また一雫、涙が流れ落ちた。

パチパチパチパチ！

会場に拍手が鳴り響く。

(恥ずかしい！水晶文珠のおかげで洗脳されないのが、今は恨めしい！)

一人悶絶気味の和樹。赤ら顔は皆と同じだが、質は違う。和樹は、多数派の人間が狂った世界で正常な少数派が異常者として扱われる、という悪趣味なSF小説を思い出していた。

こうして、卒業式は終わった。

一人ひとりが愛子と握手を交わし、愛子が作った出口のゲートをくぐって行く。

そして、最後にピートと唐巢神父、和樹が残された。

「ありがとう。こんな私の為に素敵な卒業式を用意してくれて。」

「提案しただけだよ。ああして皆が協力したのはお前が好かれていた証だ。」

それに頷く神父とピート。しかしこの二人、今回かなりカッコ悪い。和樹もだが。

「これから、私はどうなるのかな。封印されるの？」

「いや、外の連中に素直に謝る事ができたら、その後は俺か神父の保護下に置かれると思う。ね、神父。」

「ああ。君が悪意ある妖怪でないという事が分かったからね。」

その言葉に驚く愛子。この人たちは何故、こんなに優しくしてくれるのだろうか。私が人をさらったのは事実なのに。

「で、保護下に置かれるのは確実として…お前はこれからどうしたい？学校に通いたい？」

愛子は、迷いながらも頷いた。自分も、本物の学校で青春を味わってみたい…贅沢だと分かっているけど、それは誤魔化せない想いだっただ。

「まあ、そうなるよな。じゃあ、取りあえず頼んでみるか。さあ、外に出よう。」

「そつだ。君は立派にここを巣立つのだよ。」  
「いや、神父、それはもういいから。」

「行きましよう。」ピートが手を引く。

愛子は少し照れながら、導かれるままに歩き出した。

元の世界に戻ると、そこにはこの校長と、何故かウチの校長が居た。

「すみませんでした。」頭を下げる愛子。その肩を、優しく叩くウチの校長。…ん？



「もう君は大丈夫だよ、愛子君。」

「……え、高松君!？」

そう、ウチの校長は、あの細目の男子生徒、高松だった。

「和樹君、ありがとう。ついさっき思い出して、急いで来たんだ。あの時の新人は、やはり君だったんだな。」

「あー…こんな事もあるんですね。」

和樹は思った。ならお前が最初から説得に行けよ。しかしそれは愛子は救われないのか。なんかややこしいな。

「校長、愛子君をここで学ばせてやれませんか。彼女はもう危険な存在ではありません。」と、神父がここの校長に言う。

「私からも頼む。ウチの学校より、君の学校の方が愛子君に合うと思う。」

これは、高松校長。まあ確かにウチは根暗なガリ勉が多いかもなあ、と和樹は自分のクラスの連中を思い出して苦笑いした。

それを聞いていたここの校長が力強く自分の胸を叩く。

「まかせろ!きょう日のガキはひねくれていて可愛げの無い奴らばかりだからな!一人でも素直な生徒が居てくれたらこっちも嬉しいよ!」

「いやー、いいのか本当に。つくづく凄い学校だ、と和樹だけでなく隣のピートも目を丸くする。」

「ありがとうございます！私、頑張つて青春します！」

「なんだかおかしくないか。あれ、いいのか？和樹もだんだん分からなくなってくる。」

結局、愛子は唐巢神父を保護者として、教会に住み込む事となった。そこから、ピートと一緒に学校へ通う事になったのだ。それを可能としたのは、和樹が愛子に渡した『隠』の水晶文珠。本体の机を隠せるようにした事によって、見た目は人間と全く変わらなくなった。

和樹はその後の処理を神父に任せ、高松校長と一緒に自分の学校へと戻った。

「しかしあの後、無事に自分の時代に帰れたんですね。」

「ははは、二日ほど神隠しにあったという事にされていたよ。でも、いろいろ助かったから文句はなかったな。」

「助かった？」あの空間のおかげで？」

「実は私はあの頃頭が悪くてね。あの教室で散々勉強したおかげで学年トップになる事が出来たんだ。受験も成功して…今の私がある。」

「なるほど。そりゃ十年以上高校三年間の勉強を繰り返していたらそうなる。よく狂わなかったな。いや、充分狂っていたか。」

「さあ、ついたよ。あ、まだ六時間目の途中か。最後のホームルームには間に合うじゃないか。」

「え、俺帰っちゃダメ？直帰じゃないの？」

高松校長はゆっくり首を振った。

「学校生活は今しか味わえないんだ。一分一秒を大切に、存分に青春を謳歌したまえ！」

(うわ、うぜえ！)

何かいけないものを目覚めさせてしまったようだ。

和樹はガツクリと肩を落としながら、自分の教室へ向かうのだった。

## 第十五話 レストランと幕のはなし

「今日は思う存分食べてくれたまえ。」

およそ唐巢の口から出る言葉とは思えない台詞に笑ってしまう和樹。ここは、レストラン『魔鈴』。最近出来た評判の料理店である。

この日招かれたのは、愛子、ピート、和樹、藤姫、イツナ。主賓は愛子で、ようは愛子の歓迎会をしようという事だった。藤姫とイツナが居るのは和樹と一緒に招かれたからであるが、これは前日の唐巢と和樹のやりとりが発端だったりする。

愛子の保護が決まった後、愛子の通う学校から報酬が唐巢に支払われた。これは通常の報酬に加え、愛子の保護費用も兼ねたものでそれなりに高額であった。勿論、保護費用の方は両校長のポケットマネーである。

この報酬を唐巢は最初断ろうとした。それどころか和樹に渡そうとする。それが和樹の怒りを買い、結果全額受け取る事になったのだ。

「慈善事業は独りでやって下さい。今は保護すべき者が二人もいるでしょう。だいたいS級の癖にE、Dランクの仕事までただ同然で請けるから近所のGSはよそに行って仕事探すハメになっているんですよ。神父はもっと自分の行動がどういう影響を与えるか知るべきです。」

ちなみに和樹の神社にしたって公平がGS業界に喧嘩売るような低金額の除霊をしてたから人の事は言えないのだが、こちらは神社

業界のルールに基づいている。GS芦原和樹として仕事を請ける場合は、法外の金額をふっかけて断つてたりしている。

さて、和樹の言葉で神父は大いに反省したものの、やはり自分を救った和樹に礼をしないとというのは大人として許されない、と言いつ張った。そこで、それならウチの家族に夕食をご馳走してくれと和樹が提案したのだ。ついでに、愛子の歓迎会も兼ねたら人がたくさん居て華やかになるんじゃないか、とも。

「悪いね、あたしまで」藤姫が言つと愛子は、そんなことない、と手を振った。

「神様や、私と同じ妖怪の方まで来てくれるなんて、感激です！」

「本当に、凄いメンバーですよね。」

ピートが言うように、神族、妖怪、人間、半魔と多種多様な面子である。

『オーダーを、受け付けますニヤ。』

そう言ってやって来たのは黒猫。手拭いや水を運ぶのは魔法の筈である。ここは、魔女の末裔が腕を振るう世界でただ一つの料理店なのだ。

和樹がこの店を薦めた理由は、妖怪の同伴が可能だったから。何せ使い魔の黒猫にウェイターをさせるくらいなのだ。妖怪の同伴を断るわけがない。

「コンコンコン。」

『さすがにキツネうどんは無いニヤ。』

「コン…。」

猫と狐の会話とかレアすぎる！

和樹と藤姫と、何気に愛子までイヅナ達に悶絶している間に、唐菓が次々に注文をする。実は最近仕事道具の修復で金欠気味だったのだ。久しぶりにまともに食事をするので、少し興奮気味だったりする。

お任せのコースが一人3・500円とリーズナブルなこのお店は、オシャレな内装もあって女性に人気が高い。今日もたくさんのお客様が来ているが、その多くがピートとイヅナに視線を向けていた。藤姫は綺麗だが同じ女性だし、和樹も見た目は小柄な女の子。ジロジロ見られる事はない。

「僕はニンニクを使わない料理なら何でもいいです。」そんな視線にも気づかずメニューを見るピート。

「西洋料理でそれは難しいわね。あ、日本食のコースもあるじゃない。こっちにしたら？」 親しげに会話する愛子。ちよつと気分が良かったりする。

「イヅナ、あんたお肉ならイケるだろ？これなんてどうだい？」

「ジュルリ…。」

苦笑いしながら口元をハンカチで拭ってやる藤姫。それを見なが

ら、和樹は幸せに浸る。

今日、公平はまた氷室神社へ出向していた。純粹に神主としての手伝いであり、厄介事ではない。一緒に食べれないのは可哀想ではあるが、どうせ向こうでもいいモン食べてるだろ、と和樹は気にしなかった。

食事は、楽しくも穏やかに行われた。愛子は勿論、ピートもこつした店での食事に慣れていなかった為、藤姫と神父によるテーブルマナーの練習時間にもなったりした。ちなみに、イツナは赤ちゃん用の椅子に座って食べている。綺麗な姿勢で、カケラーつ落とさなかった。

比較的遅めの時間に来たせいか、店内の客は少なくなっていた。皆もデザートを食べ終え、ゆっくりとコーヒーや紅茶を楽しんでいる。そんなまったりとした時間を過ごしていると、この店のオーナーである女性がテーブルに近づいてきた。白い肌に、三つ編みにした金髪が映える、見目麗しい魔女。

「初めまして、魔鈴めぐみと申します。本日の料理、ご満足戴けましたか？」

「ええ、美味しすぎて身体がビツクリしました。」

「それ褒めてんのかい？」和樹の言葉に突っ込む藤姫。ボキャブラリーの貧困さは横島の頃から変わらない。

「ふふふ、驚かせちゃってごめんなさいね。」上品に笑う仕草が、印象的だ。

「本当に素晴らしかったですよ。」唐巢もフォローする。

「世界的に有名な唐巢神父にそう言っていただけるのは光栄です。もしよろしかったら、これからもご臈履にお願いしますわ。」

それを聞いたピートは神父への尊敬を新たにした。こんな所にも名前が知れ渡っている。ピートは魔鈴がGSとは知らないので素直に感動していた。

「そつだ、今日はせつかくお会いできたので皆様にこれをお渡ししますね。」

そつ言つと魔鈴は皆に一枚ずつチケットを配る。そこには無料招待券、の文字。

「大英帝国魔術博物展示会？」愛子が不思議そつに読み上げた。

「ええ、私がアドバイザーで参加してるんです。珍しいマジックアイテムや面白い骨董品が展示されますから、GSの唐巢神父にも楽しんでいただけると思いますよ。」

唐巢も興味深そつに聞いている。

うん、これはスルーしよう。和樹と藤姫は心の中でそつ決めた。

前の世界で魔鈴の趣味の悪さを垣間見ている和樹は、彼女の「面白い」という言葉に若干の不安を感じていた。

藤姫に至つては和樹の記憶もそつだが、昔自分が横流ししたアイテムがあるかもしれない。嫌な思い出だし、そつした展示会を警備



する連中に目をつけられたくも無かった。

「もし良かったら、足を運んでみて下さい。」

その言葉を愛想笑いで流す二人であった。

食事会を終え、帰路につく三人。

大きな満月が夜空に浮かび、夜道を照らしている。

「思えば久しぶりかも、コースとか食べたの。」

「あたしはメドーサの頃に散々食べたけど…あそこはトップレベルだね。他の店ならあの五倍の値段は取るんじゃないかい？」

「コン！」イヅナは同意しているみたいだけど頼んだ事あるのかな。

「しっかし、最後のこれはいらなかった。」

ピラピラ、とチケットを振る。

「そうさねえ、美神たちにでもあげるかい？デートに使えるかもしれないよ。」

「お、それいいね。あいつらにあげようか。イヅナ、お前は展示会

行きたい？」

首を横に振る。

「よし、じゃあ明日学校で渡すよ。」

藤姫からチケットを預かると、和樹は月を見上げた。

横島、これは厄介払いじゃないぞ、お前を応援してるんだ。二人の為にやってるんだからな。だからお月様、今の俺のにやけ面はどうか見なかった事にしてください。うふふふふ。

次の日。和樹は予定通り横島に二人分のチケットを渡す。最初は興味なさそうなそぶりを見せた横島だったが、デートに使えと言われた途端に「ありがとうござえますだー！」と土下座までかますものだから和樹も多少の罪悪感を抱いたりした。

ちなみに先日の高松校長の呼び出しに加え今回の横島の土下座で、和樹のイメージはどんどん黒くなっていったのだが本人は全く気づいていない。

そして、日曜日。和樹がいつものように竹箒片手に参道に出て空を仰ぎ見ると……

「ぶっ！？」

そこには箒にまたがり空を飛ぶ横島の姿があった。

【横島忠夫】

フハハハハ！見ろ、人がゴミのようだ！……すみません人間のゴミでいいから地上に下ろしてお願いだから！盗んだバイクで走り出すのはワルくてカッコいいかも知らんが箒に拉致され飛ばされるのは意味不明すぎる！

きっかけは和樹のくれたチケットですよ。なんかレアらしく所長を誘ったら半泣きで喜んでくれたから気分良かったけど、オチはこれですよ。いや、途中までは楽しかったんだよ、確かに。

髪の毛の伸びる日本人形、実は元はキューPちゃんとか（どんな波乱万丈送ったんだ）、見ると一週間以内に死ぬビデオとか（規格がベータな上コピー防止付きで被害がほとんど出なかった）、名前を書くと死ぬノートとか（記入者本人が）、一発ギャグみたいな物ばかりで笑えたんだがなあ。

あれは、ちと人がいない一角で一休みした時の事。早い話イチヤつくの目的だったんだが、それがいけなかったんかなあ。傍で展示されていた箒がいきなり光りだして俺目掛けて突進して来た！いや、いつもの俺ならソーサーで撃退できたと思うけどいきなりだったから反応出来なかったんだよ。そんなわけで俺を拉致った箒はそのま

ま建物を飛び出して今に至る、と。あー、所長心配してるだろうなあ。全く何考えてやがるこの箒は…。

ん？何だ、この音。後ろの方から…

えっ、和樹！？何でお前がここにいるんだ！それも、お前まで箒に乗って！

魔女っ娘か！？似合うぞ、結構！

【横島視点終了】

「チイツ、これ以上スピードは出ないか！」

水晶文珠に『飛翔』と入れ靈力を流すが、なかなか速度は出ない。空を飛ぶイメージを持ってやすい箒を使っても、本家本元の魔法の箒にはかなわない。それが、世界最速の『炎の狐』ならなおさらだ。近づけただけでも奇跡に近い。

「Alto（止まれ）！」

箒の出身国であるスペインの言葉で叫ぶも、効果は無い。前の世界では「オーレッ！」と叫んで暴走、音の壁にぶち当たり墜落して

いる。それだけは避けたかった。スピードを出していない今しかチャンスは無い。

「か、和樹ー！助けてくれー！」

「今やっとなるわー！」

もう一度霊力を練る。…その時、二人の下を新幹線がゆっくりと追い抜いていった。いつの間にか、地上10メートル付近まで高度が下がっていた。

「賭けてみるか…。」和樹はそう言って、素早く新幹線の上に降り立つ。足の裏にソーサーを展開、そして…

ダッシュ！

足を振り上げた際にソーサーを爆発させ推進力とする。超加速も使い、一気に新幹線の上を駆け抜け横島を追い抜く。途中、新幹線と併走する鬼みたいな奴も追い抜いたが、今は横島救出が先だ。構ってられない。

「うおおおおおー！」

新幹線の先頭車両まで走って、そこからジャンプ！後方の横島たちの高さまで上昇した所で加速状態を解除する。そして…

「捕まえた！」

突っ込んで来た炎の狐の柄を掴んだ。

「わっわっわ、何で前から現れるんだよ、和樹!？」

「うるせえ黙ってる!」

手から靈波を出し、念を送る。これなら言葉が通じなくても強制的に止める事ができる。箒はそのままゆっくりと速度を落とし、近くのスーパ―の駐車場に降りた。

「悪い、また助けてもらったな…。」

「一体、どういう経緯でこうなったんだ?」

横島は、これまでの事を話した。とは言っても急な出来事だったから説明もすぐに終わってしまふ。そこで和樹は、この箒が意思を持っている事を思い出して文珠の力を使う事にした。

『伝』

箒の思いが伝わってきて…

「このドアホー!」

横島を思いつきりぶつ叩いた。

「な、な、何でだよ!？」

「戻ったら説明する!とりあえず、展示会場に戻るぞ!」和樹がそう言つと、箒は大人しく二人を乗せて上空へと舞った。

混沌としている会場に、二人が舞い降りる。

「横島君ー！」

「か、和樹さん！？」

そこには涙でボロボロになってる美神と、困惑する魔鈴の姿。二人はすぐさま駆け寄ろうとした。…が、そんな二人より先に動く者たちがいた。

「窃盗犯だ！取り押さえる！！」

「はあ？」

会場にいた警備員が集団で押し寄せて来た。呆れる和樹。さっきの今だから、沸点はかなり下がっている。

「夢でも見てろ、カス共。」

和樹が胸の前で印を組む。途端に、無数の小さな光がその両手から放たれ…

バタツ      バタバタツ

次々と警備員たちが倒れて行く。横島は勿論、美神や魔鈴もその

光景に呆然とする。苛立つ和樹は、そんな三人に声をかけた。

「今から説明するから、責任者集めてきてくれ。」

ドスの効いた声に少し震えながら、魔鈴は急いで館長を呼びに行  
った。

説明は、筈の展示されていたブースで行われた。

この炎の狐は中世に作られた魔法具である。意思を持ち、世界でも最速のスピードを誇る。同時期にもう一つ筈が作られるが、こちら  
は意思を持たない筈。ただ、スピードだけは引けを取らない、同じく世界最速の魔法具『蒼き稲妻』である。

事の発端は、この意思の有無にあった。

それは、恋。長い年月を経て、炎の狐は蒼き稲妻に恋心を抱いて  
しまった。しかし、その恋は報われない。なにせ、相手は何の意思  
も無いのだから。勿論、炎の狐もそれは分かっていたので、悲しい  
が諦めていた。のだが…

目の前でイチャつくカップルを見て、長年鬱積していたものが噴  
き出してしまった。こいつだけは許せねえ、とばかりに横島をさら  
い、どこか遠くの海にでも捨てるつもりだったのだ。

「俺、とばっちりじゃねえか！」

「アホ、人の多い公共の場で見苦しい真似する方が悪いわ！」



和樹の言葉に頷く一同。美神は真つ赤な顔でうつむいていた。

「なるほど…この子はそんな苦しみを抱いておったのか。」

館長らしき人物が炎の狐を手につぶやく。

「しかし、ワシらにはどうしようも無いのう。せめて一緒に飾るか…。」

「私が、なんとかしましょう。」

魔鈴が、前に出て言った。

「私は中世の魔術の研究を専門に行っています。『蒼き稲妻』は十九神が宿ってもおかしくないくらいの年月を経ていますから、私が知っている方法で意思を宿す事は可能でしょう。」

その言葉に館長と炎の狐のテンションが上がる。

「是非とも、お願いします！」

頭を下げる。

「サツサカサツサカ！」

何掃除してんだ筈！

「こつちは話が済んだみたいだが。さて、警備主任さん。俺らを犯人扱いしてくれた落とし前はどうかつけてくれるんだ？」

和樹が本当に怒っているのは横島に対してではなく、コイツらに對してだ。

「わ、我々はただ職務を全うしただけで…」

「なんだ、謝罪の言葉もねえか。俺は箒を取り戻す手伝いをした協力者だぜ？それを犯人扱いして取り押さえようとか良い度胸してるな。GS協会通して抗議させてもらうが文句ないよな？」

その言葉に青くなる警備主任。オカルト関係のイベントはいつも大人数の警備員の依頼がある大口物件だ。もしトラブルを起こして仕事を失ったら大きな痛手となる。

「申し訳ありませんでした。」嫌々頭を下げる警備主任。相手が子供だからと舐めていたのだろう。和樹はこれ以上言っても無駄だと思つて、そこで矛をおさめた。

「まあ、お前の部下にはいい授業になつただろうよ。」

「？」その言葉に困惑する警備主任。

その頃、倒れていた警備員たちは和樹の見せた幻覚から解放され涙を流していた。幻覚：これは和樹の中のルシオラの力。見せた幻覚は、「勘違いで一般人を取り押さえ後遺症の残るような大怪我を負わせてしまい、それが元で仕事や社会的地位、家族を失う」というものであつた。警備員たちは自分たちの過ちを反省し、横島や和樹に頭を下げた。

…そんなわけで、結局騒動に巻き込まれてしまった和樹。ニコニコと館長と話す魔鈴を見ながら、「この人自身が悪いわけじゃないんだけどなあ」と苦笑いを浮かべるのだった。

さて、この話にはちょっとした後日談がある。

和樹は、神社に帰って居間で今回の騒動を藤姫とイツナに話していた。多少脚色をして面白おかしく語る。それを、呆れながら聞く藤姫と、瞳をキラキラ輝かせ聞くイツナ。これはいつもの光景である。そこへ…

「和樹さん、今、ちょっとよろしいですかあ？」

台所の勝手口から、小竜姫が顔を出して声をかけてきた。

実はこの勝手口、妙神山に繋がっていたりする。人間界のパトロールを任せられ神界と人間界の行き来が自由になった小竜姫は、ちよくちよく和樹の所に遊びにくるようになった。だったらいつその事、亜空間繋げちゃえば？と和樹が言った所、何と老師が許可してしまつたのだ。老師自身、ゲームを買いに行くのに便利になると乗り気だった。それ以来、よく遊びに来ている。

さて、この日の小竜姫の用件は少し真面目なものであった。何でも、指名手配犯のはぐれ神族が自主してきたというのだ。

「ん？何でそれを俺に報告するの？」

「あれ、和樹さんに負けて改心したと言っていましたか？」

小竜姫も首を傾げる。そこへ、呑気な声が聞こえて来た。

「ふふふー、それは私から説明するのねー。」

「あらヒヤクメ。貴女も知ってるのですか？」

「勿論、なのねー。」

そう言って、ノートパソコンを開く。そこには、和樹が『炎の狐』を追う姿が真上から映した映像が。

「凄いね、本当に新幹線の上を走ってるじゃないか！」

「コンー！」

「お前ら信じて無かったのかよ！」突っ込む和樹。ちょっと寂しかった。

シーンは丁度、新幹線を突っ走る所。そして、カメラは少しズレて左隣を併走する影を映し始めた。

「ああ、そう言えばこんな奴いたなあ。新幹線と駆けつことか何かの番組の撮影かと思ったよ。」

「TOKIOのメンバーにこんな不細工いないのねー！とにかく、これはぐれ神族の章駄天九兵衛なのね。世界最速を証明するとか言って首都高で車と追いかけてこしてたお馬鹿さんなのね。」

「散々な言われようですね。」と小竜姫。貴女に言われたらお終いです、と言いたい所を我慢する。

VTRは丁度和樹が九兵衛を追い抜き、新幹線の一番前から空中に跳躍するシーンに移っていた。

「ここで負けを悟って、神界に戻る決心をしたらいいのね!。」

「全然相手にして無かったのに…。」

呆然とする和樹。前の世界では横島が一度死んだり、結構大変な思いをして倒した相手だった。

「まあ良かったじゃないか。被害者が少ないうちに倒せて。」

「そうですね。私が直接叩き潰せなかったのは残念ですが…。」黒いぞ小竜姫!

「今度は韋駄天族からご褒美があるかも、なのね!。」

「いらぬよ、そんなの!。」

困った顔で拒否する和樹を、皆は笑ってからかうのだった。

後日、神社に謎の宅配物が届く。それは健康器具のようなものと、解説用のビデオらしき物。タイトルには、こう書かれていた。

『韋駄天の仏陀キャンプ』

言葉にならない和樹の絶叫が、境内にこだました。

## 第十六話 おキ又とユリ子のはなし

プシュツ、と空気の抜ける音が続いて、電車のドアが開く。一気に流れ出る人たち、その中に子供の手を引く女の子の姿があった。

二人は改札を出てしばらく歩く。通路の上に電光掲示板で道案内がされているが、言葉の意味自体がよくわからない。とりあえず、歩いてみる。

「ふえー、東京って凄い…。町並みが駅そっくりです！」

「外に出てないだけである…」

力無くつぶやく子供。ニット帽を深くかぶったその少女はゆつくりと周りを見渡し…

「あっちから外のニオイがするのじゃ」と指さした。

「あ、ありがとう。ごめんね、頼りないお姉ちゃんで…。」すまなさそうな女の子に対して、少女は微笑んでみせる。

「わらわのせいであんな目に合わせておるのじゃ。おキ又は気にせんでよい。」

女の子の名前は氷室キ又。反魂の術で蘇った300年前の巫女である。

「そんな風に言っちゃダメよ！私たちは家族なんだから、そう言う言い方はダメ！」

「おキ又…うむ、そうじゃな。済まなかった。」

「お互い謝ったんだから、これでおあいこね？」ニコツと笑う。

「ふふふ、そうじゃの。では行くぞえ、おキヌ。」

「はい、シヅモちゃん！」

少女の名前は、シヅモ。かつての大妖、死津喪比女の転生した姿であった。

事の発端は丁度1ヶ月前。おキヌが復活して数週間たったある日の出来事である。公平は氷室宮司の連絡を受け、再度長野の氷室神社を訪れていた。

宮司の用件は例祭に関する事である。ここは氏子区域が広範囲なうえに移動に不自由する場所が多く、役員会を開いたり祭りの下準備の為の人集めや段取りに時間がかかる。そこへ死津喪比女騒動が起きて、準備に入るのが遅れてしまったのだ。

「いや、これからも遠慮せずに声をかけて下さいよ。向こうは息子に任せておけますから！」

社務所の一室で二人は談笑していた。二人で手分けして町中を駆け回っていた仕事も、やっと一段落ついた。今は夕食前だというのにビールを飲んでいる。



「ただいま戻りましたー！」 玄関から、元気な声が聞こえてきた。

「おかえり、キヌや。」

「やあ、おかえり、おキヌちゃん。」

「ただいま戻りました、お父さん、公平さん。…あ、顔赤いですよ！もう飲んでるんですか？」

二人の赤ら顔を見てちよっと怒った振りをする。母から、昼間から飲んでいたらそうするように言われているのだ、この辺の人間は、年寄り中心に飲兵衛が多い。酒を飲んでから畑仕事に向かう者すらいる。

「まあまあ、仕事が一段落した褒美みたいなもんさ。大目にみてくれ。」

「気の早い打ち上げみたいなものだよ。…おや、ところでその袋は？」

無理やり話題を変える公平。おキヌの手にあるビニール袋を見て言った。

「あ、これ山菜です。他にも綺麗な石とか、いろいろ見つけちゃいました！山菜は夕食に出しますから、楽しみにしてて下さいね！」

そう言って、台所へ向かう。

「山菜とかの知識って元からの記憶でしょうか？」

「うーん、どうもそうらしい。徐々に記憶が戻ってきてるようだ。」

「しかし良い子ですね。今時分、山歩きであんなに楽しそうにする子なんていませんよ。」

「ここには何も無いなあ。早く高校に通わせてあげたいけど、神社に居てくれると助かるから難しい所だよ。」

二人は台所から聞こえるおキヌの鼻歌を聴きながら、そう話すのだった。

おキヌが夕食の下準備をしていたところ。母が勝手口から大きなダンボールを抱えて入ってきた。

「あ、手伝います！」

「ああ、ありがとうね。これ、内田さんの所から奉納だつて。」

ダンボールの中には新聞紙でくるまれた筍がたくさん入っていた。

「わあ、凄い！」

「お父さんに言って来てくれる？いくらか神前に上げてもらっけど、はやく灰汁抜きしたいから必要数だけ置いて後は水につけちゃうわ。」

「

「ハイ！」

パタパタとスリッパを鳴らして出て行くおキヌを優しく見送る母。早苗もあれくらい素直ならねえ、と呟く。

「さーて、重曹重曹……あら？」ふと、テーブルの上の袋に目をとめる。中には山菜と花、……石？

「言っただけです……三つ置いておいて、ですって。」

「ありがとう、おキヌちゃん。……ところで、コレなあに？石っぽいけど、何かくっついてるわよ。」

「あ、これはですねえ。……本当です、綺麗だから拾って来たんですけど、何でしょうね、コレ。」

見ると、小さい種のようなものが石にこびりついている。種からは、芽らしきものが出ていた。

「あら、芽が出てるわ。これ面白いから植えてきちゃいなさいよ、そこの葱の隣にでも。」

「ハイ！どんな風に成長するか楽しみですね。」

こうして、怪しい種は蒔かれた。

お気づきだろうか、これはおキヌを取り囲んでいた死体を操っていた死津喪比女の霊核のカケラである。イツナが噛み砕いた後、地面に落ちたカケラが偶然種とくっついたのだ。見た目は変色して石と変わらない状態だったので、和樹たちも見落としていた。

「はやく大きくなってね。」

発泡スチロールの葱用花壇に石を埋める。すると、土が淡い光を放った。何故か、おキヌの首から下がっているお守り袋まで光っている。そしてモコツと地表が盛り上がり…

「大きくなってみたのじゃ。」

「早すぎです?!」

尻餅をついたおキヌの前には、子供くらいの大きさの少女が立っていた。

それからは大変だった。声を聞きつけてやってきた父は固まり、公平は取り乱し、ちょうど帰ってきていた早苗は牛乳を噴き出し、母は葱の心配をしていた。いや、人にはならんだろう、葱は。そして、その騒動を見ていた少女は…

「グスツ……ウエエエエエン！」

泣いてしまった。

「ゴメンなのじゃ、生まれてゴメンなのじゃ!ウワアアアン！」

「よしよし、泣かないで、怖い事ないよ。怒ってなんかないよ。」  
おキヌはすぐさまなだめる。

その様子を見て、大人たちは平静さを取り戻した。どうやらこの子は安全なようだ。

泣き止んだ少女を居間に通し、落ち着いてから事情を聞く。少女の名前はシツモ。死津喪比女の種が成長したものだが、地脈と結びつく前に芽吹いた為普通の妖怪になったのだという。

死津喪比女は元々トレントに代表される地霊の一種で、それが巨大な霊脈である、この土地の地脈と結びついて力を得たのがあの姿だったのだ。特に江戸時代は飢饉が度重なり餓死する者、野盗に殺される者が相次ぎ、霊脈に怨念が流れ込む事が多々あった。そこに結びついてしまい、死津喪比女は破壊衝動や殺戮衝動を宿してしまっただのだ。

「わらわは葱と結びついてしまた。」

なんとも奇妙な展開である。

「それで、平気なのか？葱が食べられる所を見たら怖くなるのか…」

公平が心配する。

「いや、それは無いのじゃ。単に葱から効率よく栄養を取れるようになったただけなのじゃ。」

つまり葱好きになっただけだった。

「しかし、どうするかな。県の神社庁に報告したら、最悪封印されかねん。」

宮司が言つと、シヅモは不安な顔をする。

「なんとかならないだべか。こんな子供が酷い目に遭うのは可哀想だよ。」と、早苗。早苗にはこの子があの凶悪な化け物と同じ存在とは思えなかった。

「うーん、ならGSに保護してもらおうか。幸い、ウチの息子にはGSの知り合いが多いし、息子も狐の妖怪を保護してるから。」

公平は和樹の事を思い出して言った。もし困ってる善良な妖怪を見捨てたと知られたら、和樹は烈火のごとく怒るだろう。

「すまぬ、迷惑をかけてしもて…」

「いいのよ、シヅモちゃん。アナタを悪いようにはしないわ。ここで生まれたならアナタもこの家族よ。」

母はにこやかに笑った。今日はお葱も使わないとねえ、と言って葱園から取ってきた葱を洗っている。呑気だ。

「そうだな。芦原君に任せの方が良さそうだ。悪いが頼むよ。私では保護は難しいようだ。」

「いえ、気にしないで下さい。」

「それで、おキヌ。これを機にお前もちよつと東京に行ってみるか？大きな街を見てもみるのも良い経験になるぞ。」

「ず、ずるいだよ！私も行きたい！」

「あなたは学校があるでしょ！」羨ましがる早苗に母が突っ込む。

「ん？おキヌ？」

シヅモが、おキ又の異変に気づいた。

「どうしたのじゃ？さっきから何も言わんが…」

「私…」

呆然としたおキ又がつぶやく。

「私、思い出しました！約束したんです、美神さんたちともう一度会って！」

目を見開く公平たち。

「私、行きます！シヅモちゃんと一緒に、東京へ！」

こうして、おキ又とシヅモは東京へと向かう事になったのだ。

「やっぱり案内してもらった方が良かったかなあ。」

「仕方ないのじゃ、皆、忙しかったからのう。」

やっと駅を出てバスを乗りつき、現在は徒歩で商店街を歩いている。この商店街を歩いて行けば、和樹のいる神社へ着く。時刻は既に夕方、和樹たちも学校から帰ってくるハズだ。

「あら？」おキ又が視線に気づく。先ほどから誰かに見られている感じがしていた。それが、ここに来て強くなっている。

「気づいたか、おキヌ。わらわも気づいた。これは低級霊の類じゃぞ。」

背後を振り向いた。

遠くから、小さく無数の霊気の帯がやってくる。

『ココナラオソイヤスイゾ!』

『カラダ、カラダ!』

『ソノカラダヲヨコセ!』

一本道を悪霊たちが突き進んで来た!

「何をしておる、逃げるのじゃ!」

固まるおキヌの手を引いて、シヅモが叫ぶ。それに我に返ったおキヌはすぐさま駆け出した。

### 【吉村ユリ子】

小テストが返ってきて、若干落ち込み中。文系の私には数学なんて興味ないので…って言ってられたら楽なのに。

隣の席の男子が、何やら泣きそうな顔をしている。クラスでも一番賑やかな横島君だった。同じように、彼も失敗しちゃったみたい。



彼は面白くて人気もあるけど、私にはちょっとうるさく感じられる人だったりする。あと、エッチな話をするのも苦手。男子だけの場所ですればいいのに、隣でするんだもん。相手をしてる芦原君もいっつも困ったような苦笑いをしてる。

芦原君はとても不思議な人。最初見た時はなんで女子がズボン履いてるんだろって思ってた。実は男の子と知った時は驚いたけど、横島君との会話を聞いてて発言がとても男らしくて納得した。独特の声をしていて、凄く女性的なのに静かに喋るとドキドキするくらいハスキーで。普段遠くからしか見れないファンたちは知らないんだろうな。私はちょっと得してる。

でも、その声には私はずっと引つかかっている。この声、あの時の声じゃない？入院している時に聞いた、あの神様の声…。でも普段から人を寄せ付けないオーラを放っている芦原君に聞けるわけもなく…ああ、横島君いいなあ。あんなに気安く話しかけられて。

そんな事を悶々と考えてたら下校時間がきてました。え、私妄想で一日過ごしてたの？凄い才能。何の得にもならない。また落ち込みながら、学校前の坂道をトボトボ歩く。せつかく生き延びたのに、何だか情けない。生きるってもっと楽しいものじゃなかったかなあ。いつものネガティブ思考に陥っていると、商店街に合流する交差点を小さい女の子が走って行くのが見えた。その子に手を引かれた私くらいの歳の女の子が、息を切らしている。　　というか、あれ、私！？同じ顔！？

そしてその逆方向に目を向けると…

何、あれ！？

無数の光が迫ってきていた。

【ユリ子視点終了】

「こっちー！」

不意に聞こえてきた声におキ又が反応して振り返る…前に、声の主はおキ又の手を引いて走り出す。

「おぬし、何を…!?!」

シヅモはそう言っつてその人物を見て驚愕する。おキ又と同じ顔なのだ。

「いいから、こっちに！」

急かすユリ子に、あわてながらも付いてゆく。今は逃げる事を最優先すべきと、シヅモは切り替えた。

三人は、商店街の横道に入る。普通に歩いてたら気づかない、店と店の間。店のバイクが置いてあつて普段は通れないが、今日は通る事が出来た。

ここは、ユリ子が小さい頃に友達と通った秘密の抜け道。親に見つかつて怒られて以来通つてなかつた道である。

記憶を辿りながら走る。悪霊たちは本来なら家を素通りして追跡するのだが、ここいらの家は和樹の霊力の込められた札を神棚に置

いている。家々に簡易結界が張られていて、素通りできないのだ。

『チヨコザイナ！妙十道ライキヨツテ！』

『誰カココラノ地理ニ詳シイ奴ハオランノカ！』

『吉原ナラ知ツトルゾ。』

『秋葉原ナラ俺ノ庭。』

『エエイ、役ニタタン！』

苛立つ悪霊たちをよそに、ユリ子たちは階段を下りて高架下の道を歩いていた。

「猫さん、ありがとう。」

「にゃー。」

ユリ子が礼を言うと、ブサイクなブチ猫は汚い声で返事をして、去って行った。

「お、おぬし猫としゃべれるのか。」

「凄いです！」

二人が感心すると、ユリ子は少し照れながら言った。

「なんとなく、分かるんですよね。あの子、この道は神様の通り道だから見つかりにくいんだって言ってました。」

「神様？」

「ええ、この道を通り直ぐ行けば神社の近くに出るみたい。」

実はこの道、藤姫がよく通る道なのだ。人気の無いこの道なら、藤姫が飛んでも驚く人はいない。買い物帰りで手荷物が多い時などは面倒なので飛んで帰っていた。その為に人払いの術を何度も使っていたりする。

「とりあえず、このまま神社まで行きましょうか。」

「そうじゃの。元々神社に行く予定じゃったし。」

「はい、初めて来た街なので、道が分かって助かりました。」

三人はそう言って歩き出す。

しかし、それは油断であった。藤姫が使った術は、人払い。霊を払っていたわけではない。

案の定、上空を旋回していた悪霊が三人を見つけた。そして、仲間にそれを知らせる。瞬く間に悪霊たちが集まってきた。

「むっ、もう寄ってきおった！」

「くっ……」ユリ子が上空を睨みつける。そして、即座に周囲を確認した。

「あなた達はこのまま神社へ走って！私はこっちの横道を行って悪霊を分散させる！」

「でもそれじゃあなたが…」

「早く！」

ユリ子が叫ぶ。その気迫に負けて走り出す二人。その姿を確認してから、ユリ子は横の細い路地に入って行った。

『ム、ワカレヨッタ！』

『ドツチガ靈気が高カッタ？』

『ドツチモベツピンサンジャー！』

『アツチノホウガ乳ガデカカッタゾ』

『尻ハムコウノホウガイイ！』

『何気ニアノチッコイノガ可愛カッタ。』

『オマエロリコンカヨ』

『『『萌エ〜』』』

『オマエラ、ヤル気アンノカ！？』

しばらく言い争いが続いた後、悪霊たちは綺麗に二手にわかれる。ユリ子の狙い通りになっていた。

「さて、もうすぐ着く頃じゃないかな。」

和樹はそう言って社務所の時計を見る。前もって知らされていた予定では、昼過ぎに東京駅を出てバスに乗る、とあった。

「迎えに行こうか？」 イツナを撫でながら藤姫が言う。

「入れ違いになっても困るし…俺が行くよ。藤姫はここに……ん？」

奇妙な気配。参道脇の用水路沿いの道だ。

「ちょっと、これは悪霊だよ！」

「コン！」

「行くぞ！」

三人は急いで飛び出した。

「はあ、はあ、はあ！」

「おキヌ、もうすぐじゃー！この階段の上から神気を感じるぞえー！」

息も絶え絶えに走る二人を、猛スピードで追いかける悪霊。残りの階段を駆け上がる速さを考えると、追いつかれるのは確実だった。

「ここまで来たのに…」

「諦めるでない！」シヅモが必死に叫ぶ。力を振り絞って走り出すおキヌ。そのまま階段を駆け上がる。が、後方には悪霊が迫っていた。

「神様…！」

おキヌが思わずそう口にした、その瞬間…

『神様参上』

階段の上から、自分たちを飛び越えて行く影。

「行け、赤月！」

『ア、熱ウ！』

『マタ火葬ジャア！火葬パーティージャア！』

紅蓮の炎が悪霊たちを包む。

『被い清めよ十握剣！』

『ナンジャコノ光ハ！？』

『ヒカリ、ヒカリガミエタノデス！』

『パライソサ逝クダー！』

その一振りで、悪霊たちは霞と消え去った。

「はあ、はあ…」

「助かった…のかえ？」

へたり込む二人。イツナがそこに駆け寄る。

「コン！」

「あ、イツナちゃん？じゃあ…」

おキヌが見上げると、そこにはかつて自分を救ってくれた神様。

「ボロボロだねえ。ほら、掴まりな。」

優しく手を差し出す藤姫がいた。

「も、もしやそなたは…」 シツモも気づく。この強烈な靈気。神気を収めても溢れ出す靈気には見覚えがあった。

「よう、死津喪比女。陽気にしてたか？」

「やかましいのじゃ！」

あの恐ろしいまでの悪知恵と戦闘能力を持つ男、芦原和樹だった。

路地裏の道は、途中で行き止まりになっていた。でも、それ以前



に…

「もう、限界、かな…。」

心臓が悲鳴をあげていた。ユリ子は心臓の手術をして以降、医者も驚くスピードで回復していたものの、日常生活において激しい運動を止められていた。

「あの二人、上手く逃げられたかな。」

自分が居ると、きつと二人は見捨てまいと残ってしまふ。だから、離れた。

「お母さん、ごめんね。でも、最後まで頑張るから。」

ユリ子は、行き止まりの壁を背に振り返る。向こうから、悪霊たちが迫って来た。

「負けるもんか！私はあんたたちなんかに乗っ取られたりしない！キツと睨みつける。その気迫が、奇跡を起こしたのだろうか。身体をつつすらと靈気がまとう。

「ナ、ナンダアノ姉ちゃん靈能力者？」

「コラ分ガ悪インデナイ？」

「コッチハコンダケ居ルンダカラ大丈夫ダロウ」

悪霊たちを怯ませ、足止めさせた。

「グッ……」胸が痛む。しかし、絶対に目を逸らさなかった。

そして、悪霊たちとの睨み合いが続くその路地裏に、ある変化が訪れる。

ユリ子の背にした壁から、銀色に輝く、一本の鎌が。

『よく頑張ったな、ユリ子。』

その声はどこまでも優しく。

「あなたは……」

ひるがえる外套はユリ子を守るように悪霊たちの前に立ちほだける。

『ナ、何モンジャ！？』

『ワシラノ獲物ヲ横取りスルツモリカ！』

『イツタイ何処ノモンジャイ！名乗ランカイ！』

悪霊たちは分かっている。突然現れたこの相手は、おそらく自分たちにとって一番相性の悪い、天敵だ。

『ふむ、名前か。』

その髑髏は少し考える素振りをして……

『左遷され閑職に回され……今じゃ落ちぶれたもんだが、昔名乗った名前ならあるな。』

「あ……あ……」ユリ子の瞳から涙が溢れ出した。

『死神、って知ってるか？』

『キシヤアアアアア！』

『ウワアアアアアア！』

一斉に飛びかかる悪霊たち。勝てるわけが無い。しかし同時に、逃げられるわけもない。なら、どうするか。破れかぶれに突っ込むしかないのだ。

『下がっている、ユリ子。』

死神の鎌が、強い光を放つ。

『さあ冥府に逝くがいい。お前らには煉獄こそが似つかわしい。』

振るわれた鎌が、悪霊たちを切り裂いてゆく。その凶悪なまでの霊圧が、刃に触れる事すら許さず悪霊たちをかき消していった。断末魔の悲鳴すら、許さないくらいの速さで……。

神社の社務所に、不思議な空間が広がっている。

双子と見紛うような女性の隣に、どう見ても髑髏なお方と葉っぱを頭に乗せた少女。藤姫、小竜姫、ヒヤクメといった面子もどう接していいか戸惑っている。

「とりあえずシヅモちゃんの保護は俺の名前でやっておくよ。」

仕方ないので和樹が口火を切った。

「す、すまんのう。わらわは迷惑をかけっぱなしじゃ。」

その言葉に藤姫と小竜姫がヒソヒソと話す。

「「本当にあの死津喪比女？」」

小竜姫も天界への報告書を書く際に藤姫から死津喪比女の事は聞いていたが、しぶとく生き汚く、攻撃的で陰湿なイメージを抱いていた。なんだが、まるで違うじゃないか。

「わ、私は美神さん達に会う約束を果たしに来ました。」

「ああ、ちゃんと連絡したよ。しばらく神社に滞在してもらおうから、宿の心配はしないで。シヅモちゃんもね。」

「む？わらわはどうなるのじゃ？」

シヅモの疑問は当然だ。保護される、という事は保護者の管理下におかれなければならない。ずっとここに居る事になるのだろうか。

「そこは、私の方で都合つけます。」

そう言ったのは小竜姫だ。

「私はGS業界にも顔が利きますからね。アナタの居場所が氷室神社でもこちらでも、自由なように手配しておきますよ。」

融通利くようになったもんだ、と和樹も驚く。さすがに大妖死津喪比女を野放しにしようとするれば反発するだろうと思っていた。

「ところで、俺があげた水晶文珠はどうしたんだ？あれがあれば悪霊くらいはじけると思ってたんだが。」

「ああ、それは…わらわが復活する時に霊気の塊を吸収した覚えがあるから、多分そのせいで効果がなくなったかと…。」

罰の悪そうなシツモ。大丈夫ですよ、とおキ又がなだめる。

「なるほどね。結果的に助かったんだからOKでしょ。後で霊気、補充しとく。気にすんな。」

次に、和樹の目はユリ子に向く。

「さすがに退いちゃったかな。俺、こんな風に普通じゃないんだ。ちよっと人以外の知り合いばかりでさ。」

「い、いいえ、私は気にしません！」

そして、ユリ子はおずおずと和樹に尋ねた。

「病院にお母さんを連れて来たのは、芦原君だったんですね？」

「いや、ええと…。」

言葉に詰まった。知らせていいのだろうか？

『この男だ。』

「て、てめえこの死神！」

『このくらい報復はさせてもらおう。貴様の嘘に踊らされてこっちは大変だったのだ。』

実は死神は神族の妨害によって失敗した事を馬鹿正直に上司に報告していた。そして、そんな神族など居ないと怒られ、左遷されたのだ。その後地方回りを経て先日この街に駐留する事になった。死神の出張所である。コレ自体は神族側の最高指導者の指示なのだが、そうと知らない元エリートの死神にとっては窓際族以下の扱いに思えて仕方がなかった。

「あの、一言お礼が言いたかったんです。ありがとうございました。」

頭を下げるユリ子に、戸惑う和樹。藤姫がそれを楽しそうにからかう。

「色々やってるじゃないか。隅に置けないねえ。」

「よせよ。」真つ赤な顔で応える和樹。

「でも、アナタはどうするのね？死神は憑いた相手を送る義務を負うけど、アナタはその子に憑いてしまっているのね。」

ヒヤクメはそれが気にかかった。

『規則なんてどうでも良いさ。何かあれば好きな時に呼び出せばいい』

い。それ以外は適当にそこら辺をぶらついでるよ。』

なんだか駄目人間のような発言だが、これは凄い事だ。いわば、ユリ子の使い魔になると公言したも同然なのだから。

『それに、ユリ子には強い霊能力がある。このままではまた悪霊に狙われかねんからな。時間のある時にでも霊能力のコントロールを教えよう。』

「え、私に霊能力が？」

この言葉に驚いているのは、実は本人だけである。駆けつけた和樹たちは、死神以外の霊気を感じていた。それは横島ほどでは無いが強い結界を展開しており、皆を大いに驚かせていた。

「確かに、君にも霊能の才能があると思う。もしこの先GS試験を受けるなら、俺が推薦状を書くよ。」

和樹の言葉に慌てるユリ子。密かに憧れていた和樹と同じ世界で生きていける。二人だけの秘密…と、妄想が翼を広げ羽ばたいて行く。横島も同じ力を持っていると知ったら、どんなリアクションをするのだろう。

「ありがとうございます…嬉しいです。頑張って、コントロール出来るようになりますね！」

ユリ子は久しぶりに生き活きとした表情で笑った。生きるうえで、明確な目標が出来たからだろう。

それにしても、変な事になったな、と和樹は困惑する。こんな展

開、考えても見なかった。この世界は一体、何処へ向かっているの  
だろう…？

夕方。ユリ子たちが帰り、食卓には和樹、藤姫、イツナ、公平、  
おキヌ、シヅモという六人が集まっていた。テーブルの中央には鍋  
今日は鍋料理である。無論、イツナ用に稲荷もたくさん作ってある。

「大変だったね、おキヌちゃん。シヅモちゃんもご苦労様。」

公平が労う。今日は地鎮祭などの外祭がたくさん入り、どうしても  
迎えにいけなかった。申し訳無さそうに言うと、二人は気にして  
なくて良い、と笑った。

「シヅモちゃんのおかげで最後まで走れました。」

「いい運動になったである。アレじゃ、ダイエットとかいうやつよ。」

「なんとという命がけ。」

「でもシヅモ、アンタさつきからたくさん食べてるけど大丈夫かい  
？これって共食いにならないかい？」

藤姫が言うと、シヅモはキョトンとする。口にくわえた葱の芯が  
飛び出た。



「何故じゃ？植物は食われてナンボじゃぞ？」

「そ、そうかい…。」

その言い方もどうかと思うのだが、本人が良いと言っなら良いの  
だろう。

「植物は皆、実をつける。食べて貰って種を運んでもらう為じゃ。  
根や茎を食べられる奴らは、人に媚びを売って自分を美味くする。  
人間を利用して自分たちの繁殖を手伝わせる為じゃ。この鍋に入っ  
ておる者たちもそうした戦略の一端を担っておるのじゃよ。」

得意気に語るシツモ。

「ふえ〜、だからこんなに美味しいんですね〜。」  
無邪気に鍋をつつくおキヌ。

「ハグツハグツ」  
稲荷を夢中で頬張るイツナ。

「「「……。」」」

そんな三人とは対照的に、和樹たちは、難しい顔で鍋を見つめて  
固まるのだった。



## 第十七話 動き出す運命のはなし

石造りの古い城の、ひときわ広い部屋で女はため息をついた。亜麻色の髪が、艶やかになびいている。薄い紫を帯びた肌は、彼女が魔族である事を表していた。

「一体、どこにいるの…」

外では雷鳴が轟き、女の言葉はかき消されていた。窓に叩きつける雨は、ガラスに映る女の顔を泣き顔に変えて行く。

「失礼します。」

背後で、部下の女が声をかけてきた。

「森をさまよっていた人間の男を捕らえました。」

「ふうん。手配してた人の外見的特徴と合ってた？式神は使えそう？」

「いえ、長髪ではありませんでしたが式神は使えないようです。剣に靈波を流して武器にしてみました…」

「あ、そう…。じゃあ興味無いわ。いつも通りに処理しておいて。」

「ハッ。」

礼をして、部屋を出る部下。思わず漏らしたため息は人間の男に向けた憐憫なのか、上官へ向けたものなのか。

部屋を出てゆく部下を確認してから、女はまた窓の外へと視線を移す。

「早くアナタに会いたい…」

紫色の唇から漏れた吐息がガラスを白く曇らせた。

廊下を出た部下の女は、他の兵士に指示を送る。

「いつものように拷問部屋へ送れ。」

「えー、またですか？」

「今回良い男だから楽しみかも。」

「あ、私参加しますー。」

「ずるい！アンタ昨日もやったでしょー！」

嬉々として声をあげる兵士たち。皆、年頃の女性である。この城には、男の姿は一つも無い。居るのは女性の魔族のみ、である。男は皆料理や洗濯、肉体労働に従事している。

「ほらほら、だべってないでさっさと行く！今回はここに居るメンバー全員だから。」

その言葉に、皆の瞳が輝きだした。地下牢へと向かう女兵士たちの足取りも軽い。そして…

「わー、ホントにいい男！」

色めき立つ女兵士たち。対して男は…

「何をするつもりだ！ぼ、僕は何もしていないぞ！」

自慢の長髪と甘いマスクも今は乱れに乱れている。手は後ろに縛られ身動きはとれない。

「うん、君は何も悪くないよ。ただ、私たちが悪いだけ。それと、運かな。」

「まあまあ、楽しんじゃいなよ、お兄さん。」男を無理やり仰向けにすると、拘束具で身体を固定してゆく。

「こっちのセットは終わったよー。」

「じゃあ、始めなさい。」

指揮官の女がそう言つと、兵士たちは一斉に男に群がった。そして…

コチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨ

「うわはははははは！やめろ、やめ…あはははははは！」

女たちの手がわき腹や首筋をくすぐる。

「ぎゃははははは、何の為にこんなっ……………」

「何の為って、ねえ。」ニコニコ顔の女が隣の女に目配せする。

「ねえ。」

「強いて言えば趣味？」

「上からの命令よ。世界を笑いで満たして平和にするんだってさ。」  
と言いつつ冷酷な笑みを浮かべカメラを回す指揮官の女。

「う、嘘だ、助けてくれ！」

「じゃあ、お次はこれなんてどうかしら。」

手にしたのは、羽箒であった。

「や、やめ、あははははは、あははははははははははー！」

男の笑い声が地下牢にこだました。

兵士たちはその後ろも思い思いの方法で男を爆笑させ、三時間ほど時間がたった頃にようやく拷問を終了した。

「うん、もう限界っぽいね。」

「だらしない。ククス。」

「で、ビデオはまた保管庫行き？ダビングして欲しいなー。」

「あ、わたしもー！」

「ああ、もう！いいからあなた達はコイツを運んで行きなさい！」

指揮官に怒られた兵士たちは慌てて失神した男を担いで出て行く。

「まったく、こういう時だけ熱心なんだから……。」

指揮官の女は、ビデオテープの背に何やら書き記すと、それを手に上官のもとへと向かった。

「あら、早かったのね。」

先ほどの女はつまらなさそうに振り向く。

「そのビデオは？」

「一応、外見だけは似ていたので確認を、と思ひまして。そう言つて、指揮官はビデオを渡す。」

「ふーん、一応見ておくわ。あ、それと、ハーピー呼んでくれる？」

「ハーピー、ですか？あの馬鹿またへマを？」

「ううん、頼みたい事があるだけ。心配しなくてもいいわ。」

「ハッ！至急連れて参ります！」

そう言つて足早に出て行く指揮官。女はそれを見送つてから、また窓の外を見た。雨は既に止み、不気味な夕焼けが広がっている。

「私は待っているだけじゃないのよ。絶対アナタを見つけ出してみせる。」

口元に紫の怪しい三日月。先程までとは違い、瞳には力が漲っていた。

「まあ、それはそれとして。今回の男はどんなのかしら。」

打つて変わつて無邪気な顔でビデオに目を向ける。

そこには、『西条』という文字が記されていた。

「今回は神界の都合で集まっていたいただいて申し訳ありません。」

ここは六道家邸宅。その大広間に集められたGSたちに、小竜姫は頭を下げた。集められたGSは唐巢、美神親子、和樹、六道冥子、小笠原エミ。冥子以外は助手を連れて来ており、和樹は藤姫とイツナ、ユリ子を従えていた。おキ又は留守番で社務所にいる。

「頭をお上げ下さい。小竜姫様でしたら協力を惜しみませんよ。」  
唐巢が言う。かつて師事した間柄なので当然だろう。

「私も頑張ります。冥ちゃんとエミさんがいるし、また一緒に仕事  
が出来るの嬉しいし。」

久しぶりに大人しい口調に戻っている美神。横島の前以外では幼  
児化しないようだ。

「うふふ私も、嬉しいわ。」

「アンタら、遊びじゃないワケ。まず話を聞いて、受けるかどうか  
決めなさいよ。」

頭を抱えるエミが可哀想だ。

「そうだな、まず説明してもらおう。」  
和樹がそう言うと、小竜姫は少し引き締まった顔で話し出した。

「天界の調査で発覚したのですが、次のGS試験に過激派魔族が人  
間のスパイを参加させる計画を立ててるようなのです。今回の作戦



は、その参加する人間の特定と拘束、加えて会場にやってきた魔族の拘束です。」

ざわめく一同。相手は魔族。無傷ではすまないだろう。

「オカルトGメンは会場の警備で手一杯だから、どうしてもあなた達に頼む事になってしまうの。これは神界だけでなく国からも報酬や危険手当が出るわ。」

美神美智恵の言葉に、当然なワケ、とエミが言う。美神や冥子も少し緊張気味だ。

和樹は、横に座る藤姫に聞く。

「お前以外に人間界に通じてる奴なんているのか？指導したりって、結構大変だろ？」

「そうさねえ。破壊衝動抑えて生活するだけで魔族は大変だから、そんなに器用な奴なんて数えるほどしかないと思うよ。特に過激派に身を置く連中なら。」藤姫も首をかしげる。

「今回、潜入捜査として現役のあなた達にもGS試験に参加してほしいのですが……。」

すまなさそうに言う小竜姫に対して、GSたちは渋い顔をする。

「確かに有名な神父やエミさんは顔が知れ渡っているから無理だと思いません。ひのめは悪い意味で目立ってしまったてるし、冥子さんは医療班の仕事で大変でしょう。芦原君は前回の決勝戦で有名になっってしまったから、やっぱり難しいわね。」

美智恵が代弁するように言う。

「だから、今回は助手のあなた達に参加して欲しいのよ。GSの皆には有事の際の戦闘要員として待機してほしいの。」

「「「え!?!」」」

声を上げたのはピートと横島と、大柄な男。エミの助手のタイガ―寅吉である。

「あ、あぶないよう!」慌てて口調が戻る美神。エミは「いいんじゃない?」と平然と言い放つ。「実力は充分だが…」と渋るのは神父。

「故郷の皆の為にも、頑張ります!」

「ワ、ワッシは自信ないですけどん辞退したいんジャー。」

「お、俺がGS!高校生GSとして世間で有名になって美人GSとのコンビでTVや映画に出演してスター街道まっしぐらかよウエヘヘヘヘヘ!」

バラバラな三人の反応。周りの人間は特に横島の反応に呆れかえり、『美人』というキーワードに反応して美神も一人とろけていた。

「あ、あの。私も受けていいですか?」

そこに、おずおずと手を上げるユリ子。

「アナタもですか?」小竜姫が驚く。

「おい、死神。どうなんだ?」和樹が心配そうに聞く。修行場所に境内を貸してはいたが、ちゃんと見ていたわけではないのでユリ子

の実力は分からなかった。

それまでユリ子の影に隠れていた死神が現れる。何人かの人間が、固まった。

『コントロールは問題ない。霊的格闘に不安はあるが、道具の持ち込みが可能なら良い所まで行くんじゃないか。』

その評価に和樹が驚く。だって、ほんの1ヶ月前に指導を受け始めた素人なのだ。

「私も試験、受けたいです。」  
ユリ子の真剣な眼差しが、和樹に向けられる。

許可してもいいか…いや、いくらなんでも早すぎる。しかし、下手な説得には耳を貸してくれないだろう。

「なら、条件がある。小竜姫、妙神山の修行場を使わせてもらえるか？」

「ええ、構いませんが…。」

和樹がユリ子を見る。

「妙神山の加速空間で、基礎から叩き込む。その後、試練を受けて乗り越えられたらGS試験を受けてもいいよ。」

「なっ…無茶だ！」とつさに反応する神父。この中で、唯一妙神山の修行を経験している人間だからこそ、その危険さが分かるのだ。

「試験で死ぬような目にあつたら、どの道終わりです。」  
和樹は冷たく言い放つ。

「吉村さん、それでも受ける?」

「はい。」即答だった。

『私も指導している。そう簡単に死ぬような者ではない。』

死神の後押しもあって、和樹は承諾せざるを得なかった。

そんな和樹を、楽しそうに眺めている藤姫。和樹もその視線に気づいた。

「…なんだよ?」

「そんなに心配なら、和樹も出りゃいいじゃないか。」

「いや、聞いてただろ? 顔売れちまつたから潜入なんて…」  
そう言いながら、和樹は嫌な予感に身を震わせた。

藤姫が、笑っている。目が、和樹をしっかりと捕らえている。これは、蛇の目だ。何かを企んでいる目……まさか。

「だからさ、あんた姿変えられるだろ?」

あああああ! やっぱりか!

「お前、変身まで出来るのかよ。」横島が呆気にとられて言う。

「まあ、観念して皆に御披露目してみせなよ。」藤姫はそう言って

和樹の手を引いて立つ。

「あ、おい！待ってっ！」

「ちよつと着替えてくるよ。」

完全に遊んでいる藤姫に引きずられて和樹は出て行った。そして…。

「どーも。」

一人の可憐な少女が現れた。  
服は、藤姫が霊力で編んだワンピースである。

「『『『えええええー！？』』』」

「コーン！」

イツナだけは、驚かずにキラキラ瞳を輝かせて両前足をもふもふ叩いている。拍手のつもりなのだ。

和樹の外見は、ほぼルシオラである。肌の色は和樹のままだが、背が低い事と、髪がやや長めなのを除けば、その姿はルシオラそのままであった。つまり魔力をメインに持ってきた状態である。神気を選ばなかった理由は、その姿を神が降りた姿であると神父や冥菜に説明していたからだ。

「か、か、和樹なのか？」

横島が興奮している。ああ、やだなあ。こうなるから嫌だったんだ。何が悲しくて自分に欲情されなきゃならんのか。

「確かにこれなら潜入可能ね。あなた、本当に人間？」美智恵が不審そうにつぶやく。

「和樹さんは神界にとって重要な方ですから、詮索は無用ですよ？」小竜姫のにこやかな脅しにビクツとして、美智恵は顔を引きつらせ愛想笑いをする。

「まあ、こうなったら俺も参加するよ。吉村さん、じゃあ妙神山での修行の準備をするから、今日は早めに帰ろうか。」

「はい。」そう言っただけで席を立とうとすると、慌てて声をかける横島。

「あ、俺も修行に連れてってくれ！」

「ワツシも行きたいんジャー！」

「僕もお願いします！」

おい、お前ら。

小竜姫を見ると、やたらと目が燃えている。ああ、しまった！こいつ体育会系だからこういうノリが好きだったんだ！

「いいでしょう！これより妙神山を皆さんに解放します。思う存分修行して下さい！」

ああん、馬鹿！藤姫も笑ってるんじゃない！覚えてろ！

「和樹君、かわいいよう。」

「ね、私も一緒に行つていい？」

「アンタ、こうなった責任、とりなさいよ。」

頭を抱えてウンザリした顔のエミ。いや、こつちだつて被害者なのに…。和樹も困り果てたが、意を決したように言った。

「分かったよ！みんなまとめて面倒見たるわー！」

自棄になつて叫ぶ和樹を見ながら、ユリ子は鼻血を拭っていた。

「芦原君可愛い……。私、生きてて良かったかも……。」

「……………」  
「……………」

神父と死神が何とも言えない表情でその光景を見つめる。

『深く考えない事だ。』

「そうですね……。」

余談だが、これを機に二人は仲良くなつたとの事。神父と死神が、である。

その頃、魔界の某所の兵士宿舎では……。

「ハーピー、居るのは分かってるのです！出てきなさい！」  
あの指揮官の女が扉を叩いていた。

「い、嫌じゃん！人間界なんて行きたくないじゃん！」

部屋に鍵をかけて、布団にもぐり込むハーピー。ガタガタと震えている。

「何がそんなに怖いのです！相手はたかが人間でしょう！」

「違うじゃん！動物とかが怖いんじゃない！」

「動物？」指揮官の女は眉をひそめる。

「鳥たちの間で、鳥インフルエンザってのがはやってるじゃん！私なんか思いつきり鳥じゃん！やられちゃうじゃん！」

「はあ？」

「牛たちの間で理性手放してバーサーカーになる狂牛病とかいうのがはやってるじゃん！牛肉好きなのに、これじゃ返り討ちじゃん！やられちゃうじゃん！」

「……………」

「そんなの怖いじゃん……。私、へまばかりしてきたけどこんなに早く死にたくないじゃん……………」



ドガッ

部屋の扉がけり破られる。

「このお馬鹿！まったくすぐられて悶絶した姿を魔界ネットに流すわよー！」

「い、嫌じゃん！また変な男からハアハア電話かかってくるじゃん！」

実はこれ、リーダーの女のよくやる罰なのだ。ネットに恥ずかしい動画を流すと脅し、言うことを聞かせるという姑息な手段。しかし、強さこそがバロメーターな魔族の世界では情けない姿をさらすのは致命的だ。威厳を無くす事を極端に恐れる魔族は、大抵言うことを聞くようになる。

「だったら、早く準備なさい！」

「し、仕方ないじゃん…。遺書を書くから明日まで待って…。」

「ハーピー！？」

「わー！分かったじゃん！服脱がすのはよすじゃん！手をワキワキすんのも無しじゃん！」

ドタバタと部屋で暴れる二人を、少し離れて見つめる亜麻色の髪の毛の女が一人。

「うーん、今回はエロっぽいのは撮れないか。」

ビデオカメラを片手に残念そうにしているその女こそ、数多のくすぐりビデオをネタに脅迫を繰り返し、血を流さず勢力拡大を謀ってきた恐怖公、メフィストその人である。

「まーいいわ。あの子の総集編だけでも充分ニーズはあるし。早く行かないとまた上映会よ？」

まだ暴れているハーピーたちをニヤニヤと眺めてから、メフィストは満足そうに部屋へと引き返していった。

## 第十八話 嫌われ者のはなし

東京都という所は意外と広く、典型的な大都会から恐ろしいまでの田舎まで様々な場所がある。

ここはその中でも後者に分類される田舎である。街から離れ、かなり不便な所にその寺はあった。

白竜寺。身よりの無い子供たちが多く住んでいる修行道場でもある。

「クソツ、全く勝てやしねえ…。」

その道場の外で庭に水を撒いている男。顔に大きな古い傷痕があるが、それよりも目立つ新しい多くの小さな傷。ぼやきながら水を撒く、その姿は痛々しい。

彼の名前は陰念。喧嘩つぱやい癖に弱い、寺の嫌われ者であった。今日も勝負に負け、庭の水撒きを押し付けられていた。

「お前、また負けたのか。」

唯一気軽に話せる男が、この目つきの悪い男、伊達雪之丞。彼は仏道に帰依しないという理由で嫌われていた。

「うるせえ！次は負けねえ！」

「何度目なのよ、その台詞。」

後ろから現れたのは、二人の兄弟子である鎌田勘九郎である。

「う、後ろに回わんなよ！」怯える陰念。

「失礼ねえ…。」

勘九郎はこの白竜寺でもトップの実力の持ち主。だが、同性愛者である事で嫌われていた。

三人に共通する、嫌われ者というキーワード。それは一般社会よりも、こうした閉鎖的な空間の方が深刻だったりする。特に三人は我が強く大人に迎合する事を良しとしない。一番大人なのは勘九郎だが、彼にしてもこの寺の人間を信用してはいなかった。

「そつえば、今日から修練時間に来る人が変わるみたいよ。」

「へえ、今度は壊れないと良いけどな。」

伊達が邪悪な笑みを浮かべる。

「どうでもいい。」

陰念はそう言って水撒きを続ける。彼にとって、修練の時間は苦痛でもあるのだ。二人と自分は違う。三人の空間に居心地の良さを感じても、修練の時間になると住む世界の違いを実感するのだ。それは、とても孤独だった。

「あんたはいつつもソレねえ。」

呆れる勘九郎。彼にとつて、向上心の感じられない陰念よりも伊達と話す方が楽しい。しかし、放っておくのも良心が咎めた。

そんな三人であったが、この日の修練の時間がきつかけで絆を深める事になる。やってきた新しい先生。その出会いが、後の三人の運命を大きく変える事になるのだ。

「こちらが、道場です。」

案内する坊主のいやらしい視線を感じながら、女は苛立ちをなんとか隠して道場に入る。本来は女人禁制の寺。そこに足を踏み入れる事が出来たのは、ここの住職を魔眼で洗脳したからだ。本来ならそんなに効果の強い物では無いのだが、まともに修行してないのか簡単に引つかかってしまった。

「へえ、それなりに立派じゃん。」

女は道場の子供たちを眺める。ロクな奴が居ない。目が弱い。ここはハズレかと心の中でつぶやいた。

「皆、集まれ！」

エロ坊主が言うと、子供たちが集まってくる。その中にあの三人の姿は無かった。

「あの三人はどうした！」

「陰念なら庭で泣いてるんじゃないですか。」

何人かの口から笑い声が漏れる。

「勘九郎兄ならさつき廊下で見ました。」

「伊達はまた木でも蹴ってると思います。」

「まったく、せっかく先生が来て下さったのに。」  
そう言ってまたネットリとした視線を女に向ける坊主。よほど飢えているようだ。

「おう、悪い。遅れたぜ。」そこへ、三人が戻ってきた。

(コイツら…目が違うじゃん。)

坊主の小言を聞き流す三人の視線は真っ直ぐ女の方を捉えていた。それは性欲じゃない、ただ冷静に分析するような視線。

「揃ったね。じゃあ、自己紹介するじゃん。私の名前は羽居鳥子。今日からアンタたちを指導するじゃん。よろしく!」

やっと見つけた!

コイツらなら強くなりそうじゃん!

ハーピーは心の中でガッツポーズをとって喜んだ。これでネット処刑は免れる!

「ほえ、修行ですかあ。私はお留守番ですか?」  
「ちょっと寂しそうなおキヌ。」

「いや、そんなにかからないよ。向こうは時間の流れ方が違うから明後日には終われると思う。亜空間で繋がってるから何かあったらすぐ来れるし。ちよくちよくこっちの様子も見に来るから。」

和樹がそう言うとおキヌは安心した様な表情になった。さすがに

知り合いが一気に居なくなったら寂しいのだ。

「わらわはここで一緒に留守番をしておればいいんじゃない？」

「ああ、あたしも残るから安心していいよ。」

シヅモと藤姫の会話が微笑ましい。敵同士だったとは思えないほど打ち解けている。

今、居間にはこのメンバーの他に美神と横島、ピートとタイガー、死神とユリ子がいる。冥子は親に止められ、エミは仕事があるからと断った。唐巢も仕事。まあ、普通はそうだろう。

「私は中々仕事来ないんです。」  
「そうやって力無く笑う美神が悲しい。」

「だから、時給下げたって言ってるのに。」  
横島の台詞も泣けた。ああ、これは俺が何とかしなきゃ！和樹も焦る。前の世界の美神さんも大概だが、ここの美神さんも問題だ。

『ん？ゲートが開くな。そろそろか。』

死神が言うように、勝手口が開いて小竜姫が顔を出した。

「おはよーございます！準備はいいですか！？こちらは準備万全ですよー！！」

テンション高いなオイ！さては修行に来る人間が来ないから暇してたな？

「大丈夫です！」

どこの小学校の遠足か。ピート、横島、美神の返事に顔を赤くするタイガーとユリ子、和樹。

「では、いつちよ逝きますかー！」

待て、字が違う！しかし下がらない小竜姫のテンションに引きずられる形で、修行メンバーは亜空間に引きずり込まれて行った。

「よく来たな、修行者よ！」

そこは、鬼門の前であった。あれ、テストするのかわ。ウンザリした目を鬼門に向けると、その扉がギギイ、と開く。

「おお、待っておったぞ。」

「殿下ー！？」

そこには、見違えるほど成長した天竜童子の姿。二十歳前後、確実に自分たちより年上の男の姿である。

「お、お前天竜童子か？」

和樹と横島が驚く。天竜も驚いた顔をしている。

「か、和樹か？どうしたのだ、その姿は。」



そう、和樹は普段から女性の姿でいる。これはこの身体での戦闘に慣れる為だが、藤姫やユリ子の強いリクエストでもある。

「潜入操作の為に仕方ないんだよ。そういうお前だって別人じゃないか。」

「加速空間で散々老師とゲームやら修行やらしておったからな。霊力が大人の基準に達してこの姿になったのだ。」

神族の外見は霊力に引つ張られる。実年齢通りの外見ではないのだ。

和樹は天竜の霊気を知覚して驚いた。単純な霊気の強さなら、ほとんど自分と同じくらいなのだ。ここまで短期間に強くなるものなのか！？そう思って小竜姫を見ると、少し寂しそうな顔で頷いた。

「もう、私より強いんですよ。今では殿下の方が管理人として相応しいくらいです。私が人間界のパトロールをしている間は、殿下がこの管理をしてくれますよ。」

「何、余も暫くしたら天界に戻る。今だけよ。」  
そう言って笑う天竜。

「あの、よろしいでしょうか……」

放っておかれた鬼門が寂しそうに声をかけるも、天竜はそのまま皆を中へと案内するのだった。

「グハッ……」

また一人、男が蹴り飛ばされ壁に激突する。ハーピーはそれをつまらなさそうに見つめた。

「私を倒せたら、好きにしていいいじゃん。」

そう言っつてエロ坊主を相手に戦って、誰一人として攻撃を掠らせずに倒した。子供たちにも同じように言っつて、同じように倒す。残ったのは、あの三人だ。

「女には興味ないけど、その強さには興味あるわ。」そう言っつて構える勘九郎。

「お前の歪み、気に入ったじゃん！」

ハーピーの目に光が宿る。勘九郎の突進を避け、そこから放たれる連撃をかわして脇腹に強烈な蹴りを入れる。

「がっ……」崩れ落ちる。

「もう終わりじゃん？」

そう言っつて近寄る。そこへ……

「死ね！」

勘九郎が猛スピードで眼球目掛け拳を放つ。

「遅いね。」それすら回避して顔面に蹴りを入れた。意識を失う勘

九郎。

「ははは！良いねえ、楽しいじゃん！」

「次は俺だ！」

そう叫ぶ雪之丞。膨大な量の霊気弾を放つ。

「おっそいじゃーん！」

空中に身をひるがえす。

「馬鹿が！空中なら避けられねえだろ！」

「馬鹿はお前じゃん！」

空中にいなながら霊気弾を避けるハーピー。重力を無視したかのような動きに流石の雪之丞も驚く。

「コレが霊気弾じゃん！」

ハーピーから、小さな霊気弾が放たれる。小さいが、それはまさに弾丸のような速さで雪之丞に襲いかかる。

ズガアアアアン！

「ぐあああつ！」

崩れ落ちる。

「霊気自体はまあまあじゃん。…さて、次はお前。」

「ヒイツ！」

情けない声を上げる陰念。次元の違う戦いに震えが止まらなかつ

た。

「なんだ、期待外れじゃん。この二人と一緒にだから強いかと思ったじゃん。ああ、庭で泣いてる奴って、お前じゃん？」

「え……」

「なんだ、アレじゃん？強い奴とくつついてたら苛められないと思ってる奴。ははは、姑息じゃん！弱いなら庭に帰るといいじゃん！」

「くつつ……」

唇を噛む陰念。違う、そうじゃない、アイツらとはそんな仲じゃない！……でも怖くて言えなかった。

「まあ、いいじゃん。この二人は使えそうだから貰って行くじゃん。」

「なっ……何処へ!？」

二人を担ぐハーピーに慌てて声をかける。

「これから山に籠もってコイツらを鍛え直すじゃん。ここのゴミ共と一緒にしてたら腐るだけじゃん。」

二人が連れて行かれる？

俺はまた一人になるのか!？それだけは……イヤだ!

「お、俺も連れて行ってくれ!」

「はあ?」

「何だつてやる！パシリでも構わねえ！だから、ここに置いて行かないでくれ！」

「……………」

情が湧いたわけでは無い。が、コイツ一人くらい一緒でもいいかと思っていた。最初に感じた自分の直感を信じたくもあった。それに、三人で仲が良いなら一緒にした方が精神的に安定するだろう。

「別にいいじゃん。じゃあ、お前そっちの方を持つじゃん。」

「え、勘九郎の方がよ！」

よりもよってガタイのデカくて気持ちの悪い方の勘九郎を持つ羽目になるとは思わなかった陰念は、自分の判断を少し後悔したのだった。

こうして、白竜寺三人の姿が消えた。しかしその事を気にとめる者はいない。住職は洗脳され、他の坊主も魔眼で今まで事を気にしないように暗示をかけられている。子供たちは、元々三人を疎ましく思っていた。

あんな奴ら、いない方がいい。そう誰かがつぶやいた。

ハーピーが訪れなくても、三人はいずれここを離れていだろう……。

ハーピーの修行は、どちらかと言うとサバイバル訓練に近かった。

町から遠く離れた山奥、廃村寸前の村の空き家をアジトに使って、その付近で食料調達…勿論、山菜や獣をとっていた。村には老人が何人かいたが、皆怪しまず、文句も言っでこなかった。それどころか歓迎してもいた。人間に歓迎されるとは思わなかったハーピーは、嬉しくなって修行の合間に三人を村の家々に向かわせ家の改修などを手伝わせた。

「これも一種の修行じゃん！」と言うハーピーに、我慢して従う三人。逆らったら殺される。ハーピーに正体を知らされていた三人は、言う事を聞くしかなかった。なかったのだが…

「おう爺ちゃん、今日は猪がとれたぜ！中々手ごわかった！」

「ふふふ、山菜もこんなに採れたわ！幾らかお裾分けしてあげ・る」

「い、今帰った！買い物はコレで全部行って来たぞ！」

「お前ら馴染み過ぎじゃん！！」

ハーピーが突っ込むくらいに、適応していた。

ここでの暮らしは、三人に思いのほかプラスに働いていたようだ。

勘九郎は、自分を差別しない人間との触れ合いに飢えていた。こ

ここには、自分を傷つける人間はいない。解放されたような気持ちで修行に打ち込めた。心の安定、それが勘九郎に一番必要な物だった。ありのままの自分でいられる。その自分を、老人たちは受け入れてくれた。

雪之丞は、もっと分かりやすい。普段から一対一の戦いばかりにこだわって来たが、山の動物たちを追うにはそんな感覚ではいられない。五感を研ぎ澄ませ、緩急をつけた動きでターゲットを仕留める必要があった。ここには熊や猪といった凶暴な動物も出没する。それがいい相手になり、いい食材となった。

陰念はもしかしたら、この修行の一番の恩恵を受けた人物かもしれない。陰念は他の二人のように霊波を使った修行をさせてもらえず、ただひたすら皆の世話をしていた。町への買い出しを中心に、二人が修行している間は村の家々を回る。それが、陰念にとって無理の無い修行になっていた。なんせ、1日の移動距離は40kmを超える。山道を、である。日に日に身体は引き締まっていた。

そして、大きな変化が一つ。

「今日も疲れたじゃん！陰念、肩揉むじゃん！」

ハーピーのマッサージを担当しているうちに、陰念はハーピーに惹かれていった。

「あ、あの、ハーピーさん…。」

「羽居、じゃん！次言ったら殺すじゃん！」

「す、すみません羽居さん！」

うつすらと香る風呂上がりのハーピーの甘い匂いにドギマギしながらも、マツサージを続ける。

「あの、アレってまだ有効ですか？羽居さんに勝ったら、その…」

「ん？……あー、アレね！ははは、お前も好きモンじゃん！いいよ、どうせ1000年かかっても無理じゃん！」

「お、俺、頑張ります！」

陰念は、誰かと接する事を恐れていた。が、勇気を持って声をかける事が出来るようになっていた。あの日ハーピーに声をかけられたから、こうして充実した日々を送れるのだ。

「ねえ、雪之丞。あの子変わったわねえ。」

「ああ、相変わらず弱いけどな。」

二人は笑って、そんな陰念を見守りながら、近所のお婆さんが作ってくれたオハギを食べるのだった。



## おまけ話 家庭菜園のはなし

和樹たちが修行へ向かった後。おキ又たちは思い思いの時間を過ごしていた。

藤姫はシツモと境内に出ている。最近業者に頼んで、参道脇に藤棚のある休憩所を作った。他にも花壇を幾つか作っていたので、シツモに助言を頼んでいるのだ。

イツナは社務所でおキ又に抱かれている。時折おキ又の鼻をしっぽでくすぐって遊ぶほかは、基本的に寝ていた。おキ又もそんなイツナを撫でながらウトウトとしている。

「あれ、皆もう行ったのかしら？」

そんな時、社務所に人影が。

「ふえ？…あ、ピートさんの彼女さんじゃないですか！」

おキ又がハッと気づいて言った。

「え、あの、彼女というわけじゃ…。」

真っ赤な顔の愛子がいた。

おキ又の発言は、実は間違いではない。ピートにとって愛子は長い時を生きる者同士。最初に仲良くするように仕向けたのは和樹だが、甲斐甲斐しくピートや唐菓の世話や家事をする愛子の姿に、ピートは次第に惹かれていった。元々日本の大和撫子に憧れていた、間違った日本のイメージを持っていたピート。そんな彼の前に思い

描いていた通りの女性が現れたら惚れるに決まっている。

愛子も、ピートを好きになっていた。故郷の為に何かしたいけれど、何が出来るか分からない。いろいろな悩みに真摯にぶつかって行くピートの姿は、青春に生きる青年そのままであった。そして、自分に意見を求めたり相談を持ちかけてくれる。ただでさえ外見が良いうえに性格まで自分好みなのだ。惚れないわけがなかった。付き合い始めるのも、時間の問題だろう。

「あ、あの。私、何か出来ないかと思つて教会で育ててるお野菜を持つて来たの。」  
そう言つて、竹で編んだカゴを見せる。

「わ、凄い！これ、教会で作つてるんですか！？」

そこには色とりどりの野菜が。とても家庭菜園レベルとは思えなかった。

「ほう、これは見事じゃのうー！」

「きゃっ！？」

気づくと、愛子の後ろには興味津々のシヅモと藤姫がいた。

「驚かせてゴメンよ。不思議な野菜を持っているから気になつてね。」

「ふむ。濃い靈気と栄養…これは普通に育てた物ではないのじゃ。」

「ええ、これはたまに教会に来てくれる魔女の魔鈴さんから教わつたやり方で育てたんです。」

愛子の言葉に反応する三人。

「あ、ああ、あの子かい。」

微妙な表情なのは藤姫。

「ふえ〜、魔女さんですか！凄いですねえ！」

おキ又は無邪気に驚く。そして…

「ほう、それは面白いのう！魔女の助言で作られた菜園なら、わらわも見てみたいのじゃ！」

食いつくシツモ。藤姫は、顔をひきつらせて。

「留守番は任せな！あんたたちは気にせず見に行ってきたよ！」

そう言って足早に社務所の中に入って行くのだった。

教会に着くと、運がいいのか悪いのか、魔鈴が訪れていた。

「あ、今お帰りですか？留守だったので、頼まれていた本は郵便受けの中に入れちゃいましたよ。」

「すみません、わざわざ来てくれたのに。」

頭を下げる愛子。その後ろでシツモとおキ又が瞳を輝かせている。

「ま、魔女さんですよ！サインください！」

「わらわも！…っつて、サイン？何じゃそれは？」

あまりの登場にキョトンとする魔鈴。そして…

「わー！貴女、トレントですね！？」

魔鈴も興奮するのだった。

互いに興奮が収まり自己紹介すると、シヅモは早速庭を見せてもらおう。

「ここには元々地脈が走っていたんです。そこから、少し力をかけて貰っただけなんですよ。」

「ふーむ。じゃあ、あの栄養は？市販の液肥ではあそこまでは育たんじゃろ？」

何気に詳しいシヅモ。

「ああ、それはイワシやイモリの粉とかを使っただけです。あと、山の土も貰いました。天矢神社さん所の土です。」

「なるほど、金肥に神社の土か。あそここの土は良質な腐葉土な上に靈気に満ちておるからな。それは充実するわけじゃ。」

納得するシヅモが、菜園の野菜たちを撫でる。

よく分からないけど、とりあえず感心するおキヌ。愛子だって、実は分かってない。言われた通りにしかやってないのだが、それで美味しい野菜が作れたから理屈はどうだっていいや、と考えていた。

「のう、これを使えば、もっと強くて美味しい野菜は作れんか？」  
そう言って、シヅモは服のポケットから幾つか種を出す。

「え、これは！貴女の！？」

「うむ、わらわの霊力を宿しておるから、きっと病気にも強い美味しい野菜が出来るのじゃ。」

魔鈴の好奇心が刺激される。

生きたトレントと会えるだけでも奇跡なのに、その種を使って実験できるなんて！もう、気分はパラダイスである。

「ぜひ、やらせてもらおうわ！」

愛子は、藤姫が逃げた理由が分かった。

一抹の不安を胸に、愛子は遠く離れたピートを想うのだった。

早く帰って来て！！

それからしばらく経った、ある日の夕暮れ。陰念は、珍しくハーピーと一緒に遠く離れた町に買い出しに来ていた。

「今日は久しぶりにご馳走にするじゃん！皆頑張ってるからご褒美じゃん！」

「ありがとうございます！」

陰念にとってはこの二人での買い出しこそがご褒美だったりする。

この日買ったのはかなりの量の牛肉と野菜。そして味噌や醤油といった調味料だった。日々の生活で鍛えられた陰念にとっては、コレでも軽いつと感ぜられる量である。

「あ、あの教会、家庭菜園なんてやってますよ。」

「珍しいじゃん。こんな町中で美味しい野菜なんて作れるじゃん？」

そう言っつて庭を覗き見ると……

『カボチャチャチャヤー！』

『ナスビビビビビビー！』

『食べて、食べて、食べてー！私を食べてー！』

「……………」

やけに大きく成長した野菜達が、せわしなく身体を揺らして叫んでいた。

その前では、一人の少女が半泣きで座り込んでいる。

「私のお庭を返して…。」

「都会って、怖いですね。」

「やっぱり、人間界って怖いじゃん！」

二人は急ぎ足で村に帰って行くのだった。

## 第十九話 妙神山の修行のはなし

和樹たちの修行は、妙神山の一室で行われていた。ここは加速空間と言つて、外との時間の流れから切り離されている空間だ。ここでの1日が外での10分、といった具合である。

横島たちは、ここで小竜姫、天竜、死神の指導を受けていた。

「か、和樹は何でゲームなんてしてんだよ!」  
面白くなさそうに横島が言う。

「彼は別メニユーです。ああ見えて一番キツイコースなんですよ。」

小竜姫の言う事がいまいち信じられない横島。それはそうだが、今和樹がやっているのは最近発売された格闘ゲーム。思いつきり楽しそうなのだ。

『キキツ!』

「あ、それハメ技じゃねーか!」

対戦している老師は言葉を喋らず、ただひたすらゲームに没頭している。

「ほら、余所見しない!」

そう言つて小竜姫が横島の頭を小突く。全身の靈気を練っていた横島の状態が乱れ、靈気が拡散して行つた。

「ああ、また一からやり直しか…」

自業自得である。ここに来て一週間、同じ内容の繰り返しだった



りする。

「横島さんは基礎が全く出来てませんから、靈的格闘はさせませんよ。」

面白くないのはそれだけではない。

自分より経験が浅いと思っていたユリ子が、既に靈力コントロールを身に付け自分より先の訓練に移っている事も気に入らなかった。今は所長と二人で靈波を出しながら走っている。

現在靈気を練っているのは自分だけ。ピートとタイガーは天竜の下で何やら小難しい事を勉強させられていた。

（なんか俺って格好つかねえなあ。）

そんな事を考えながらも、我慢してもう一度靈気を練る横島。身体の奥底に渦巻きを連想する。

それを、静かに見つめる小竜姫。

（和樹さんがこの修行を薦めた理由が、よく分かりますね。）

ここの修行を始める前に、小竜姫は和樹から横島の修行方法について助言を受けていた。

「あいつ、靈気の収束だけは他の連中とは次元が違うから、とにかく今の内にコントロールを完璧にしておきたい。徹底的に基礎を固めてくれ。」

…そして、今に至る。不満は言うものの、自分でもやりやすいのか横島は我慢して同じ修行を繰り返していた。

(ん？なんか胸元にも渦が…)

横島は気づいていない。自分が今どういう状態にあるのか。

『人間か、アイツは…』

死神が、小さくつぶやいた。

「天竜さん、横島さんはどうしたんですかいノー。」

「あれはチャクラを回しておるのだ。霊気を身体の中で練っておるのだが、人の身であそこまで回せるのは珍しい。今第四チャクラが開いたぞ。」

天竜がタイガーに説明するが、タイガーには何の事やら分からなかった。ピートは知識として知ってはいたが、見るのは初めてだった。

「凄いなあ…。」

美神は休憩に入っている。ぼーっと横島の方を見ていた。

彼には、自分より才能がある。そんな彼が、何も出来ない自分といつまで一緒に居てくれるのだろうか？このままでは、自分の所から出て行ってオカルトGメンへ行ってしまうのではないか…。漠然とした不安が、胸を締め付けた。

「死神さん、休憩はもういいです。続き、しましょう。」

ユリ子はそう言っって死神の方を向く。

『ん？大丈夫か？まだ五分と休んでいないが。』

「ええ。彼には負けたくないんです。」

ユリ子は横島に負けたくなかった。和樹を巡る嫉妬心もあるが、それ以上に普段スケベな事を言っただけで自分を不快にさせている横島に負けるのが嫌だった。まだ彼女には横島の良さは分からないのだ。

(なんか、異様に視線を感じる…)

「また、集中が乱れてますよ!」

バシッ!

「だからいちいち叩かないで!」

泣きながら靈気を拡散させる横島。そんな彼を、ニコニコしながら見守る小竜姫。

(なんだか、癖になっちゃいそう…。横島さん、子犬みたいですよ?クスクス…)

頬を少し染めてそう心の中でつぶやくのだった。

『さて、そろそろ始めるか。』

時間にして二時間ほどたった頃、老師がおもむろに立ち上がり和樹に言った。

「OK、何処でしますか?」

和樹も立ち上がる。

『小竜姫よ、影法師の儀を行ってくる。暫くここを外すぞ。』

「え！？あれは、私が最後に仕上げるのでは…」

困惑する小竜姫に老師はニヤリと笑った。

『ワシが、仕上げるのよ。天竜、お前も来い。手伝ってもらおう事がある。』

「よ、余もか!？」

戸惑うものの、天竜は大人しくついてくる。

『小竜姫、死神よ、暫く任せたぞ。』

「『ハッ!』」

ポカンと見ている他のメンバーを置いて、和樹と老師、天竜の三人は加速空間を出て行った。

そこは、同じ異空間でも先程とは全く雰囲気が変わっていた。さっきは道場という感じだったが、ここは丸く境界を引かれた試合場と魔方阵が一つ。それ以外はただ地平線が広がるのみ、である。

「これに乗ればいいんすよね。」

和樹は自分から魔方陣に乗る。魔方陣は強い光を放ち、和樹の分身である影法師を出現させた。

「こ、これはっ!?!」

途端に警戒心を露わにする天竜。対する和樹はため息をつくのみ。

そこに現れた影法師は、前の世界で和樹：横島が最後に見せた魔人の姿。禍々しい悪鬼の姿である。鱗に覆われた身体、紫に変色した腕。頭部には何も無い大きな穴が空いていた。

「随分人間らしくなったと思ったのになあ。結局、中身は変わらないって事ですかね。」

「いや、これから反映させるのじゃよ。さあ、始めるぞ。天竜、さつき渡した蘇生の文珠を用意しておけ。死ぬかもしれん。」

目の前の事に衝撃を受けながらも、指示通りにする天竜。おそらく自分はヒーリング要員なのだろう。そう理解して二人を見送る。

老師の姿が、試合場の向かいのスペースに転移した。

この修行は自分の分身である影法師で3連戦するという内容で、勝てばその都度能力がアップする。本来小竜姫が担当する、一応最高難易度とされる修行である。

『タマモ、出ませい!』

「は!?!」 驚愕する和樹。

そこに現れたのは、九尾の狐：あの、タマモの姿だった。

「久しぶりね、横島。」  
悲しそうな瞳が、揺れている。

「お前：お前も渡ったのか。やっぱり、あの後：」

「ええ。殺された後に願ったの。もう、こんな世界に居たくないって…」

タマモは、静かに言った。

『こやつはの、もう人間を信じられなくなってこの妙神山に身を寄せていたのじゃ。お主の夢を打ち砕いた人間と、もう出会いたくなくなつたんじゃないか。』

老師の言葉に目の前が真っ暗になる和樹。

「お、俺：」言葉が出ない。

「横島、アンタなんで人間なんかと一緒にいるのよ。ここで一緒に暮らそうよ…。」

そう誘つタマモの瞳には、大粒の涙が。

「俺は、運命を変えようと思ってるよ。もう、あんな悲劇を起こさないように…。」

「無駄よ。私が何度人間に殺されたと思ってるの。いつも最後は、身勝手な奴らに幸せを壊されるんだ！」

タマモの慟哭が、言霊が、呪詛のように和樹の胸を貫き苛む。しかし、和樹にはタマモの想いに応えてやれない理由があった。

「俺の周りには、新しい家族がいる。俺は、今度こそ守るよ。お前に辛い想いをさせたのは謝る。俺の力不足だった。恨んでくれて構わない。…できれば、お前ともまた一緒になりたいんだが…そんな気持ちにはなれないか？」

「無理よ…もう、私は怖い思いをしたくないの。人間界は、怖い…」

自分の身体を抱きしめるようにして震えるタマモ。その姿が、痛々しかった。

「そうか…。あんな、お前のカケラの一つが、今うちに居る。家族なんだ。」

「え？」  
思わぬ言葉に顔を上げるタマモ。

「お前も、気が向いたらいつでも来ていいんだからな。だって俺たち、家族だろ。」

その優しい言葉に、タマモはポロポロと涙をこぼす。家族。その言葉に夢を見ていた時があった。前の世界で横島と作った家族。自分にとって一番幸せだった時代である。

「アンタまだそんな事言ってるの。あんなに傷ついたのに、馬鹿よ！大馬鹿よ！」

「おう。俺、馬鹿だからな。」

開き直って笑う和樹。その表情は、確かにあの横島の物だった。我慢出来ずに、タマモは影法師の向こうにいる和樹の胸に飛び込ん

だ。

『勝負、あつたようだよ。』

「え？」

タマモを抱きしめながら、和樹が不思議そうに振り向く。

「これ、勝負だったのよ。」

涙を拭って、タマモが言った。

『ワシの霊気を受け、魂の負荷が取り除かれてるのは分かつとったじやる？そこにはお主の中の悪鬼の魂も含まれておる。タマモの負の感情に共鳴しやすくなっておつたのよ。』

「あの頃の殺伐とした気持ちに戻ってたなら、アンタはまた悪鬼の破壊衝動にとらわれてしまっていたわ。」

「お、おい、試したのかよ!？」

タマモは、首を横に振った。

「一緒になりたかった。アンタが悪鬼になるなら、肉体を捨てて二人で封印されていたかった。でも、無理だつて分かつていたわ。…その姿を見れば、アンタがまだ一途にルシオラって娘の事を想ってるの分かるもの。これは…私のただの意地悪なの。」

『責めてやるな、和樹。こやつはこやつで、悩み苦しんでここにいらるのじゃ。』

老師の言葉に、和樹は自分の思慮の浅さに気づいて反省した。こ



ここまで思い悩ませた原因は前の世界で守り通してやれなかった自分なのだから。

『では、影法師に力を授けよう。』

老師が念を送ると、それまで穴が空くだけだった顔部分に、本来あるべき顔が現れる。それは、横島の顔であった。

『これで、破壊衝動に引きずられない強い精神力を得た。同時に、靈気の消耗も殆ど無くなったぞ。』

「そ、そなた本当に横島なのか…」

天竜も、今の会話を聞いて和樹の正体を知った。信じがたいが、この人物はあの横島と同じ存在。おそらくは平行世界から渡ったきたのだらう。最高指導者に関わっているというのも、頷ける。

「横島、本当に遊びに行つていい？ずっと行きたかったけど怖くて行けなかったのよ。」

やっと笑顔を見せてくれたタマモに、和樹も笑顔を見せる。

「当たり前だろ。あれから特訓してまともなメシも作れるようになった。今度ご馳走してやるよ。」

そう談笑する和樹とタマモを見て、老師はホッと一安心していた。この試練が一番危険だったのだ。この世界に来たばかりの和樹なら、確実に堕ちていただらう。

『次の相手は、これじゃ。ドッペルゲンカー出ませい！』

「タマモ、危ないから離れてるよ。」

「うん、頑張ってるね。」  
そう言っ外に出るタマモ。

そして、次に現れたのは…顔のなかった頃の、和樹の影法師と同じ姿。

「趣味悪いぜ…」

和樹はすぐその狙いが分かった。精神と靈的スタミナを強化した後の戦い。つまり消耗戦を想定した戦いとなる。そして相手は自身。思考を読むタイプだろう。なら…。

「これでどうよ。」

和樹の影法師が、どんどん増えて行く。

『は！？』老師も啞然とした。

理屈は簡単。無限に近い靈的スタミナを手に入れた和樹の影法師は、文珠で自分の分身を作りまくったのだ。その分身が、また分身を作っ…

集団リンチが始まった

「あははははははは！」タマモが、余りの一方的な戦いに腹を抱えて笑う。

「これなら考え読むとかいう次元じゃなくなるよな？」

ボカスカボカスカボカスカ

『や、やめい！和樹の勝ちじゃ！』

慌ててドツペルゲンカーを転移させる老師。これは完全に老師の計算ミスである。まさか影法師が文珠を使うとは思わなかったが、それを可能にしたのは老師自身であった。

『本来ならもつと工夫して乗り切る所を、お主という奴は…』

「面倒くさいの嫌いなんすよ。」

しれつと言う和樹を睨むが、まるで効果なし。仕方なく、また念を込める。今度は影法師の身体がメタリックブルーに輝き出した。

『今回は全体的な霊力の上限を引き上げた。もはやお主を超えるのは最上級神族以上の神々。ワシや竜神王といったクラスや最高指導者くらいよ。』

「またまたそんな〜。」

和樹はそう言うが、影法師から発せられる霊圧は凄まじい。

『しかし困ったのう。これではワシが相手をするとな手加減なぞできんぞ。この修行場が消し飛ぶわい。……天竜、ちよつと来い。』

「え、ええ！？余が、か？」

半泣きである。

『和樹よ、こやつを止めるのが最後の試練じゃ。』

そう言って、老師は天竜の背後に回り…

『ポチつとな』 逆鱗に触れた。

「キシヤアアアアアアア！」

おいしいいい!?

天竜が巨大な竜に変化する。老師はすぐさまタマモを背に隠し、和樹に向かって叫ぶ。

『こやつに破壊行動をさせずに倒してみよ!』

「め、面倒クセエなあ!？」

和樹はすぐさま影法師を分身させ、天竜の身体にまわりつかせる。それはまるで茎に群がるアブラムシのようで見えてくれは悪いが、動きを止めるには確実な方法であった。

和樹は、一瞬で老師の意図を察した。なるほど、これは大量の分身を制御させ、一度に複数の行動をさせる訓練なのだ。分身の一人を弓兵にし、弓、弦、矢にそれぞれ分身を変化させ、天竜の額を撃ち抜けば暴走は止まる。

「そうは行くか!」

影法師が一齐に攻撃を開始する!

……………天竜の、股間に。

オラ!

「ギヤアアアアア!？」

瞬く間に人型へと戻って行く天竜。泡を吹いて、倒れていた。

『て、天竜ー！？』

「あははははははははは！」

「竜の弱点は逆鱗だったか、男の弱点は人も竜も同じだったか……。」「

『何ももっともらしい台詞言つとるんじゃ馬鹿もん！竜神王の跡継ぎを不能にしてどうするんじゃ！？』

「文珠使いましょうか。『絶倫』とか入れて。」「

「あははははははは！」

笑い転げるタマモの横で頭を抱える老師。こちらの思いもよらない方法でクリアする和樹が恨めしい。またもや仕方なく、老師は念を込める。影法師の身体が、透けていった。

『最後の能力は穩行術じゃ。これで、お主は靈的にも肉体的にも気配を完全に消す事が出来るようになった。つまり今回の試練を終えて、強大な力とステルス能力を持つ分身を大量に作って戦う事が出来るようになったわけじゃ。自前の軍隊じゃな。』

これは、実は老師の得意技である。孫悟空の分身術といえば分かりやすいだろう。あれも、毛を媒体に自分に近い実力の分身を作る事ができる反則技である。

老師が最後の仕上げを自分で出来なかったのは、和樹がこれに近い技を二戦目の段階で使えるようになってしまったからだ。個人対個人でなく、軍隊同士の戦いとなってしまう。それは手加減出来るようなレベルの戦いではない。

「ああ、つまり今度老師と戦う時は、老師が分身作ったらそれそっくりの分身作って、一面猿だらけにして混乱させる事が出来るのか……。」

予想の斜め上を行っていた。

『……………。』

「やっぱりアンタ、そういう所は美神令子に似てるわ。」

タマモの台詞に少しギョツとする和樹だった。

異空間が消失し、老師とタマモと天竜を背負った和樹が現れる。そこは、修行場入り口の前。すぐ傍にある門をくぐれば、自宅の間へ帰る事が出来る。

『本当にもう行くのか？』

「ええ。」

和樹は満足そうに頷く。

「吉村さんの仕上がり具合は見に来ますが、それまでは神社に居ます。」

「私も、ちょっとだけ見に行きたいんだけどいい？」

タマモが老師に言つと、老師は優しく笑う。

『勿論じゃ。和樹よ、タマモを宜しく頼むぞ。』

「はい。じゃあ行くつか、タマモ。」

「うん。」

二人が門をくぐって行く。老師は、やっと肩の荷が下りたような気持ちになった。タマモを匿ってから、ずっと和樹と会わせて良いのか迷っていたのだ。情緒不安定なタマモと、時折狂気じみた目で戦う和樹：互いに悪い影響を与えるのではないかと。

『大変なのはこれからじゃろつがな。……ところで寝たふりしとるお主。』

ギクッ！

『あれほど逆鱗という弱点を克服せよと言っておったのに放置しておるとは、いい度胸しておるのう。』

「あ、あれはその、急だったもんで！」

飛び起きる天竜。ろくな言い訳も出来ないまま老師に担がれる。

『ちよいと鍛え直さなければならんようじゃの。ピシバシと。』

「ひいひいひいひい！？」

その絶叫が誰かの耳に届く事はなかったという。

その頃、オカルトGメンの事務所では美神美智恵が思わぬ辞令を受けて困惑の色を隠せないうでいた。

「何故ですか！？この時期に異動など…GS試験での合同作戦まで日が無いというのに…！」

「それは君が心配する事ではない。黙って指示に従う事だ。」

神経質な男が冷たく言い放つ。彼はオカルトGメンで美智恵に並ぶ地位に居る人間である。日本支部は美智恵と彼が共同責任者となっている。彼は更に、オカルトGメンの総本部と強いパイプがある為、実質的には美智恵より上の立場にあると言っている。美智恵の抗議など、最初から聞く気など無かった。

男が帰ってから、美智恵には今回の異動の意図が理解出来ないでいる。部下はそのまま、自分だけが作戦から外れる…不自然すぎた。GS試験で、何か企んでいる？

確かに最近のGメン自体、何か奇妙であった。自分の指導した部下が次々と他国の支部に異動されるなど政治的な意図が見え隠れしていた。しかし、ここまで急な動きは無かったのだが…。

「何にせよ、ひのめ達のフォローはしておかないと…。」  
美智恵は頭を切り替えて、動き出す。それを、横目で見ている部下たち。

口元には、軽薄な笑みが浮かんでいた。



時を同じくして、魔界。メフィストの城に、緊張が走っていた。

「何故、アンタがここに来るのよ!？」

メフィストの顔が青ざめる。間違いなく、殺したはずなのに！自分より遥かに大きな靈気を放つ目の前の男に、驚愕の眼差しを向ける。

「ふむ、なかなかに興味が悪い。さすが私の娘、といった所か。」  
部屋の内装を見てつまらなさそうに呟く男。

すでにメフィストの部下の殆どが無力化されていた。メフィスト本人にしても、少し前に張られた結界のおかげで力の半分も発揮できない状態にあった。

「しかしここは空気が悪いわい。さっさと用事を済ませようではないか。」

そう言って現れる老人。傍らには金髪の女性が控えていた。

「イエス、ドクターカオス。結界自体ノ効果モ・アト30分デ・キレマス。」

「じゃあ、この親不孝者には私たちの家までご足労願おうか。」

「な、何勝手な事言ってるのよ！冗談じゃないわ!！」

そう言って気力を振り絞る。私は恐怖公メフィスト。そう簡単に負けてたまるものか。

「私を舐めているようだね。」

男は、少し目を細めて言った。同時に、右手に霊気が集まって行く。

「あ…あ、ああ……。」

心が折れる。メフィストはその時死を覚悟した。余りにも強大な霊気。間違いなく、あのアシュタロスのもだった。

「お嬢ちゃん、死にたくないなら大人しく来てくれんか。悪いようにはせんよ。」

隣の老人の言葉に、メフィストは必死で頷く。死にたくない。まだ自分の想い人とも出会えてないのに…。

「では、行くぞ。」

男は霊気を収めるとメフィストを一瞥して部屋をでる。その後を老人、そしてメフィストの手を引く女性が続く。床に倒れ付した部下たちは自分たちの主が去って行くのを見ながら、恐怖公の敗北を受け入れられずにいた。自分たちは、どうなってしまっただろう…。

メフィストの敗北は瞬く間に魔界に知れ渡り、同時に魔界の勢力バランスを大きく崩す事となる。混沌の時代の、幕開けであった。



## 第二十話 怒りのはなし

これは妙神山の修行がスタートした日の夕方の事である。

和樹がタマモを連れて神社に帰ってくると、そこには藤姫とイツナした居なかった。

「あれ、おキ又ちゃん達は？」

「ああ、ちよつと用事で出てるよ。魔鈴の所さ。」

微妙な顔で言う藤姫。聞いた和樹も同様な顔をする。

「ねえ横島、この人誰？」

和樹の後ろからちよこつと顔を出して、タマモが言う。警戒心があらわとなっていた。

「あたしは藤姫だよ。こここの神社に祭られてる者さ。」

藤姫はそう言うてにこやかな表情を見せる。しかしその目の奥には微かに驚きの色が混じっていた。

「心配ないよ、お前をどうこうするような奴じゃないさ。で、こつちがイツナ。」

そう言うて藤姫の隣に居る狐を紹介する。

「コン…。」

「え？アンタ…。」

しばらく見つめるタマモ。そりゃあ驚くよなあ、と和樹が苦笑い

する。しかし、タマモのリアクションは予想外のものではあった。

「なんでアンタがここにいるんだ！」

目に殺気を漲らせるタマモ。急いで和樹は抱き止める。

「お、おい、何言ってるんだ!？」

「アンタこそどうしてこんな奴と一緒にいるの!こいつは私の一部なんかじゃない!コイツは…!」

その剣幕に圧倒される和樹。藤姫はすぐにイツナを背に隠す。イツナは…ただ、うなだれていた。

「落ち着け、タマモ!一体何だっけ言うんだ!？」

「くっ…」

タマモの身体に負荷がかかる。結界が作動したのだ。しかしタマモはイツナを睨みつけるのをやめない。そして…

「あれ…なんで?なんで私と同じ霊気まで…。」  
「今までが嘘のように大人しくなる。」

「だから言っただろ、お前の一部だっけ!」

落ち着いたのを確認して、和樹は力を緩める。タマモは困惑した目を和樹に向けた。

「…ゴメン。横島、この子と二人で話をさせてくれる?傷つけないって約束するから。」

今の剣幕を見せられて許可出来るものか、と思いつながら、和樹は悩む。タマモの情緒が不安定なのが、特に心配だった。

「いいんじゃないかい。結界はもう作動してないよ。」

藤姫の言葉に、和樹もやっと気づく。もう結界は大人しくなっていた。

「大丈夫よ。この姿で話すから。」

そう言つとタマモは、一匹の狐の姿に変身する。その姿はあの九尾の子狐であった。

「わかった。イツナもいいか？」

「コン。」

藤姫の後ろから出てきたイツナが返事をする。その目が悲しそうな色をしていたのが和樹には気になった。

二匹の狐が部屋を出て行くのを、二人は複雑な表情で見送るのだった。

「和樹、あれがタマモなんだね。」

「ああ。前の世界で俺が守れなかった家族さ。」自責の念を交えて言つ和樹の背中を、藤姫は優しく撫でる。

「こうしてまた会えたんだ、良かったじゃないか。」

「そうだな。でも……。」

イツナと会わせたのは間違いだったのか？和樹には先程の光景が信

じられない。

「多分、九尾にしか分からない理由だろうさ。自分のカケラと出会ったのは初めてだろう？」

藤姫にも、タマモと過ごした横島の記憶がある。その記憶のどこにも、カケラと出会う光景は無かった。

「ああ、これが初めてだ。」

「なら、あたしたちが考えても仕方ないさ。ここはあの子たちを信じて待つだけだよ。」

「そうだな…。」  
力無く呟く和樹。

なあタマモ、どうしたんだ？

イズナと何があったんだよ？

「ただいま帰りましたー！」

二人の心配をよそに、脳天気な声が玄関から聞こえて来た。おキ又である。ガサガサとビニールの音が聞こえているので、買い物帰りなようだ。

「あれじゃの、いい仕事をした後は気分がいいのう！」  
これはシヅモの声。仕事？何の事だろう。

ガラツと、社務所受付の部屋の戸が開く。

「藤姫様、ただい……ま……」

「ん？どうしたのじゃ、おキヌ……」

二人が和樹たちを見て固まっている。

部屋の中には和樹と藤姫。何もおかしな事は無い。ただ、二人の距離は限りなくゼロに近かった。寄り添い、背中に手を回す藤姫、見つめ返す和樹。

「わ、わ、私たち見てませんからー！」

「ま、まぐわうのかえ！？ちよ、おキヌ離すのじゃ！」

急いでシヅモの手を引いて台所へかけて行くおキヌ。固まっていた和樹たちはようやく互いの状態を見て顔を真っ赤にする。

「ち、違うんだおキヌちゃん！これはそういうんじゃない！」

「そうだよ、ただ慰めてただけさ！」

「きゃーきゃー、聞こえませーん！」

「なんじゃ、なにをどう慰めたのじゃー！？」

ドタバタと台所を走り回る一同。さっきまでの不安も消し飛び、ただ騒がしいいつものノリに戻っていた。



タマモたちが戻ってきたのは、それから30分後であった。人の姿に戻ったタマモが、イツナを抱えていた。

「ただいま。」

「コン！」

二人：特にイツナが元気を取り戻していた事に安心する和樹。仲直り出来たのだろうか。

「ゴメン、やっぱりこの子私だったわ。……うん、私と同じ。」  
タマモが済まなさそうに言った。

「ああ、仲直りできたならそれでいいんだ。」  
深く理由を聞かない方が良いんだろう。そう直感して和樹はそう言った。

「コン？」

そんな時、突然イツナが鼻を上に向けクンクンと匂いを嗅ぐ素振りをする。

「今日は揚げだし豆腐だよ。ちゃんとタマモの分もあるからね。」  
藤姫の言葉に二人の顔が明るくなる。

「コーン！コンコン！」

「私もいいの！？」

まったく、こういう所もそっくりじゃないか。和樹は笑ってタマモを夕食に誘った。さて、今日は昨日買ったお揚げも使って稲荷寿

司も作ってやる。タマモ、覚悟しろよ？俺の実力を思い知らせてやる！気合いを入れて和樹は腕まくりをするのだった。

夕食は、帰ってきた公平も交えて賑やかなものとなった。お揚げや稲荷に感動するタマモとイツナに、魔鈴と家庭菜園を作ったというシヅモたちの土産話も盛り上がり、さらには和樹と藤姫の急接近の話で公平も交えヒートアップした。まるで台風の中で食事してるみたいだね、と藤姫が漏らす。

そんな大騒ぎの夕食を終え、疲れきっていると勝手口のドアから小竜姫の声が聞こえて来た。

「和樹さあーん、今からお時間いいですかあー？」

「ダメって言ったら泣くんだろうなあ。」

つぶやいて腰をあげる。いいですよ、と言ってドアを開けると小竜姫が顔を出した。

「あ、お食事でしたか？」

「いや、終わった所。いつでもいいよ。」

そう言う和樹の後ろに広がる楽しそうな団欒を見て、小竜姫は羨ましそうな表情をした。

「今度誘ってくださいね？」

「はいはい。」

苦笑いを浮かべる和樹。自動的に老師達も来る事になるじゃない

か。

「あ、悪い。先に行つててくれ。俺は片付けとかしてから行くから。」

「分かりました、では私は指導の続きをしていますね。」　そう言つてゲートに消える小竜姫。

「あ、私もそろそろ帰るわ。」

タマモが言うと、イツナが寂しそうな声を上げた。

「キューン…。」

「また来るわよ、じゃあね。」

そう言つてイツナの頭を撫でる。その姿は、ここに来たばかりの時のタマモからは想像出来ないくらい優しいものであった。

「元気でのう。」

シヅモや藤姫たちに見送られて、タマモは妙神山へのゲートをくぐつて行つた。

### 【横島忠夫】

ええいむさ苦しい！和樹の野郎がバックレて男密度が上がリやがった！いやアイツも男なんだろうけど今は女でしょ？やっぱリビジ

ユアル的に貴重だったんですよ、この空間には！

だってねえ、基本的に男と女に分かれて修行しているわけですよ。そこに触れ合いなんてナツシング！小竜姫様？あのサドっ子なんて女じゃない！散々叩いて「あれ、今なんで叩いてたんです！たっけ？」とかおかしいだろ！？叩くのの夢中になるとか指導じゃないだろ！まあ、鍛錬中薄目で小竜姫様の脇から覗く横子子を堪能してたんですが！忘れてくれてて良かった！

まあ俺の担当が小竜姫様ってのはタイガーたちよりマシかもなあ。なんか天竜童子が股間押さえて涙目で帰ってきてから老師も交えて修行してたし。嫌だろ猿と股間少年に指導されんのは。絵的に気味が悪すぎる。

所長は途中から合流したヒヤクメの指導を受けてますよ。楽しそうですよ。混ぜて欲しいなあ。だって雑誌見てるし！こんな服いいよね、とか言ってるし！平和過ぎる…。

その少し離れた所でスポコン真っ青な筋トレとかやってるのは同級生の吉村さんですよ。なんか俺に冷たいんだよなあ。和樹が出て行った後の休憩時間に「吉村さん凄いな。俺馬鹿だから全然先に進めないよ。」って話しかけたのよ。へりくだって持ち上げる、これ円滑な人間関係を築き上げる基本！そしたら…

「横島さんには負けませんから！」  
…ですって！あらやだ奥さん会話が繋がってないわ！？えーと、馬鹿だからって所に引っかけたんかな？そうか、馬鹿キャラで競おうってことか！

「果たして俺を超えられるかな！？」  
鶴のポーズをしてみました。そしたら…

「馬鹿にしないで！」怒られました。ねえ死神さん、俺なんか変な事したかなあ？

「言ってしまうえば全てが変だな。」そうですか、だと思ったよチクシヨウ！

それからまた俺が瞑想という名の妄想で暴走してた時、外から戻ってきた小竜姫様がこんな事をおっしやいましたよ。

「そろそろ横島さんにも実戦形式の修行に移りますか。」

実戦ツスか！実践じゃなくて？いや危ないでしょ！

「美神さん、こちらへ来て下さい。」

いやいや所長！？俺に所長を攻撃しろって事か！？

「いえ、横島さんは避けるだけです。美神さん、神通棍で彼を攻撃して、一撃でも当てられれば次の修行に移りますよ。」

えええ！俺痛いだけツスか！？

「そ、そんな事出来ないよう！」

そうツスよね、恋人同士ツスよね！

「横島さんはさっき私をいやらしい目で見てましたよ。」

ちよ、小竜姫様ー！？

「横島君、浮気はいけないんだよ！」

いや所長、思いつきり構えちゃって何やる気になってんスか!?

「では、始め！」待って待って！

「キヤトルミューテイレーション！」何その呪文!？所長、正気に戻って下さい！

振り上げられた神通棍が、何やらグニヤグニヤ曲がって行って、鞭のようになってこうやって付けると…エロい！てーれってれー！いや落ち着け俺！

「しよ、所長、それじゃまるでSMですよ！」

「え、蠟燭なんて持ってないよう！じゃあ、これで！」

いや、誰も炎出せとか言っていないツス！所長から放たれる火球を何とか避ける。その俺の足元を、所長の鞭がピシッピシッと叩いてきた。

「あ、危なっ！」

「血いーパツパ、だよっ！」

それ何か飛び散って無いツスか!？やめて、俺にそんな趣味は無いツス！

「美神さん、いいなあ…私も、したいなあ…」

こら小竜姫様！アンタ何怪しい事言ってるんだ！ヒヤクメも写真撮らない！

「いけないっ！横島さん、霧になって時間を稼ぐんです！」

ピート無茶言つな！俺はそこまで人間やめてはいない！

うわぁん、こっちから取り押さえる事も出来んとは……そう思っている、視界に吉村さんの姿が。

俺を見てニコニコしていた。

ムカついた。ええ、ムカつきましたよ？

なんでそこまで嫌われてるのか分からないけどさ。嫌いなら無視しておけばいいだろ。人が傷つけられそうになってるの見て笑うって何だよ。苛められてる奴見て笑ってる奴っているよな。まるでそっくりだよ、ああいう連中に。そうやって俺の事見下して楽しんでいるのか？

…ああ、そうなんだな？

「てめえぶざけるなあぁあ！」

身体中の靈気を一気に練り上げる。イメージは某龍玉漫画の超野菜人間。あらん限りの力で体内の靈気を爆発させる。

ブオオオオオオオ！

「きゃあああ！？」吹き飛ぶ誰か。誰かいたのか？

「よ、横島さん、攻撃は……」

「自分の身を守って何で非難されなきゃなんねえんだ！」

そう言っつて、俺は一つの方法を思いついた。ああ、守るためだ。守るためなら許されるだろ。

「靈気がここまで膨れ上がるなら…自分の身体を覆うくらいワケ無  
いよな？俺は鎧をイメージして靈気を収縮させる。そして気づけば…

アレ？何か戦隊物のヒーローみたくなってませんか？

「ま、魔装術！？」

小竜姫様、何で剣を抜くんスかね。そんな事したら…

「これ、正当防衛ツスからね。」

思いのほか身体が動く。俺の蹴りは小竜姫様の顔面をとらえ…

「そこまでだ。」

寸前で止められた。足が空中で、小さい手に掴み止められている。

帰ったハズの和樹が、そこにいた。

【横島視点終了】

「で、説明してくれるんだろうな。」

和樹の冷たい声が響きわたる。声に混じるのは怒気というより殺  
気にちかい。傍らのタマモは平気な顔をしているが、内心は震え上  
がっていた。



「俺は自分の身を守っただけだ。今の蹴りも正当防衛だぞ。」  
一人震えて無いのは横島。まだ怒りが収まらないのか和樹を睨みつけて言った。

無言で、和樹は横島を殴る。しかし、その拳は横島の身体を纏う靈気に弾かれた。

「あ？お前も力で無理矢理言う事を聞かせるつもりか？」  
横島の瞳にも殺意が宿った。和樹も少し驚く。これは、本当に横島なのか？

「横島、冷静になって倒れている人を見る。」

「え…所長？」

そこには気絶する所長の姿。

「お前、一体何があった？恋人も目に入らないくらい怒るなんて普通じゃないだろ。殴ろうとしたのは、お前に自分のやった事を分からせる為だったんだが…悪かったよ。」

和樹が謝ると、横島もやっと冷静さを取り戻す。そして、美神を抱きかかえて謝っていた。

「すみません、私が無理な修行をさせてしまったんです。」説明に入る小竜姫。

小竜姫の話によると、横島の靈気コントロールが充分にこなされていないと判断し、靈格的闘のトレーニングに移った。横島は反射神経がいいので美神と組ませ避ける練習をさせようとした。が、美神が攻撃を渋った為、美神にハッパをかける。暴走した美神は横島に

攻撃を仕掛けるようになって、これで修行になると思っていたら、突然横島が暴走した…というのだ。

「横島、今の説明で充分か？おれにはお前がキレた理由がイマイチ分からないんだが。」

「ああ、キレたのはその話とは違うよ。」  
「言いにくそうにする。」

「俺がやられてるの見てへらへら笑ってる奴がいた。それが気に入らなかったただけだ。」

「なるほどな。」ため息をつく。確かに、そんなに弄られ慣れてないこの世界の俺なら頭にくるだろうな。やっぱり学校変えたのまじりかかったかな、と和樹は少し後悔していた。

「今は、それが誰かとかは聞かないよ。ただ、お前がやった事は恋人を気絶させ、神とはいえ女性の顔面に蹴りを入れようとしたって事だ。頭にきて自分を見失うって、怖いだろ？」

「……。」

黙って頷く横島。目には涙をためていた。

「しばらく、向こうで休憩してる。美神さんと一緒に。」

和樹の言葉に大人しく従う横島。その背中に、和樹は声をかけた。

「お前、強くなったな。驚いたよ。」

横島は振り返らずに、力なく片手をあげて応えた。泣き顔を見せなくなかったのかもしれない。

「さて…。」

和樹の怒気が強まる。

「老師、天竜、あなた達は一体何をしていたんですか。一言諫めるくらいしても良かったんじゃないですか？」

「すまん、余にはこうなると予測出来なかった。」  
震える天竜。

『いざという時の為に治癒の文珠を用意しておったが、止めるまではせんかった。すまんとは思っておるよ。』

本来の老師であれば修行で死ぬくらいは覚悟しろ、と言うのだが、今回のようなトラブルは防ぐべきだったと反省していた。そもそも同じ場所で複数の人間に指導をするのは今回が初めて。こうしたトラブルを防ぐ為にも実践形式の修行は別の空間でやるべきだったが、そこまで気が回らなかった。

「これからは、なるべく止めて下さい。」  
そう言って和樹は怒りをおさめる。

小竜姫らに対しては何も言わなかった。ただ、失望しただけだった。そして最後に…

キツと睨む。

視線の先に居たのはユリ子。

ユリ子は表情を凍りつかせ、立ちすくむ。和樹はその姿からすぐに目を逸らし、横島の元へ向かった。

攻められる横島を笑うような人間は、ここには彼女しかいない。ピートやタイガーの性格から言って横島の応援はしても馬鹿にする

ような事は絶対しない。消去法で分かる事だった。横島が嘘をついている可能性はゼロ。自分の事だからよくわかる。

和樹は、今更ながらに妙神山での集団での修行は失敗だったかもしれないと後悔し始めていた。

意識を取り戻した美神は泣いて謝る横島を抱きしめて慰めていた。

「すみません、俺馬鹿だから後先考えられなくて…」

「いいんだよ、私もひどかったから。もう横島君を叩いたりなんかしないよ。」

…全く、見せつけてくれる。話しかけられる雰囲気ではなかったのだ、和樹はタマモを連れて老師の所へ行く。ピートとタイガー、天竜の修行スペースに近いせいか、三人は緊張していた。よほどさっきの和樹が怖かったのだろう。

「老師、先程は偉そうな事を言っすみませんでした。」

『いや、お主は正しい。謝る必要は無いぞ。』  
心が広い。和樹相手だからこそ、だろうが。

「それで、老師。横島の奴はどこまで強くなっただんですか？手加減していいと言え、俺の攻撃を弾きましたよ。」

和樹は先程の横島の霊的防御力の高さに驚いていた。あの攻撃は

少なくとも霊気ガードが出来ると踏んで、防げないレベルの威力にしていた。和樹は未だに横島が防壁の水晶文珠を使っていると勘違いしている、それなりに強い攻撃であった。それを、横島は自分の霊気だけで完全に防いでみせたのだ。

『ふむ、第四チャクラまで回したのは確認しておる。あの姿は初めて見たのう。』

「この時点で四つも？俺でさえアシユタロス戦のだいぶ後で開いたの…。」

前の世界では修行らしい修行もせずアシユタロス戦を迎えただけに、ここの自分のポテンシャルの高さに驚いていた。行く行くは自分になるとは言え、ここまで差がつくのか、と。

「なんか横島じゃないみたい。」

今日初めてこの世界の横島を見たタマモは、美神に頭を撫でられている横島を見ながらつぶやいた。

自分の知ってる横島は、痩せ我慢ばかりしていた印象が強い。泣く時は東京タワーの上でだけ。馬鹿やってるのも全部演技で、美神の事務所をやめてからは誰にも甘えず強いふりをしていた。本当の自分は妖魔保護区でしか見せなかったように思う。しかしこの横島は素直に怒る。素直に泣く。少し新鮮だった。

「ぶつけ本番で霊気の鎧まで作る、か。多分もう文珠作れるんでしようけど、それはやめましょう。」

『そうじゃな。あの横島は真面目で脆い。心を鍛えれば自ずと作れるようになるじゃろ。』

そう言う老師の言葉に違和感を覚えるタマモ。見ると、横島は美神にジャレついていた。

「真面目？」

さっきの今でもう明るさを取り戻している横島を見て、どこが真面目だよ、と思うタマモであった。

## 第二十一話 それぞれの思惑のはなし

7月の中旬。学生は夏休みに入る時期である。和樹達は学校に通いながら妙神山で修行する、という生活を続けていた。加速空間での生活は外時間の三時間に対して二週間の時間を過ごせるので、ただの修行だけでなく勉強にも活用し、期末試験に充分間に合わせる事が出来た。

「私に、任せるのね〜！」

…というヒヤクメが率先して勉強を見てくれた。和樹などは今更勉強の必要が無いのでピートやタイガーの勉強を見てやっていた。無論、それは漠然と決めていたのではなく、ちゃんとした狙いがあった。あの行動であった。

「横島さん、ここ違いますよ。途中式の計算が…。」

「あ、ああ、本当だ。ありがとう。」

横島とユリ子を一緒にさせ、関係改善を図っていたのだ。二条出身の二人のテスト範囲はピート達よりもずっと広いので、和樹が離れれば自然と二人になる。どうもユリ子が反省して落ち込んでいたようなので、謝る機会を与えようとも思っていた。

「あの、横島さん！」

意を決したようにユリ子が声をかける。

「今まで、嫌な態度取ってゴメンなさい！私、横島さんに嫉妬して…。」

「嫉妬？」横島がキョトンとした表情をする。自分なんかの何に嫉妬するというのか。

「横島さんは、芦原君と親しいじゃないですか。誰とも話そうとしない彼とも話が出来て…自分に出来ない事を簡単にしているのを見ていて、羨ましかつたんです。霊力だつて凄くあるし…。」

横島にとつては寝耳に水という感じである。吉村ユリ子は男子の間で人気の高い高嶺の花。そんな彼女が自分に嫉妬？それも和樹と親しくしているから…。霊力？そんなに凄いならとつくに他の修行に移ってるって。

「俺も嫉妬してたよ。君の方が俺よりずっと先の修行をしてた。俺の方が先にGSの仕事を手伝ったりしてたのに。学校では人気あつて勉強もできる、それにこっちでも優秀とか、卑怯だよな…って思ってた。俺、カツコ悪いよな。」

この告白に、今度はユリ子が驚く。

自分が人気者？友達と呼べる人は居なくて会話の出来る人間は二人だけ、帰宅部で読書しか趣味の無い私が？勉強だつて文系は確かに上の方だけど理数系は平均とれたらいい方なの？それに修行なんて死神さんの言うとおりにしてるだけだし…。

「なんだか、私横島さんの事誤解してたかも…。」

「俺も、ちゃんと吉村さんの事見てなかったのかな。」

そう言つて、恥ずかしそうに笑う二人を、遠くから見守る影二つ。

「うう…浮気はいけないんだよ…。」



「ただ相互理解を深めているだけなのね。そんなに心配する事も無いのね、勉強もちゃんとしてるみたいだし。」

「ほ、保険体育なら教えられるんだよ！」

「発想がオツサンなのねー！」

なんだか気の抜けた会話をしていた。

「ほんに助かるよお、寝るときお星様見なくちゃなんねえかと思つたもの。」

「ははは、こんな事くらいお安いご用だぜ、ばあちゃん！」

陰念は笑って工具を片付ける。今日は嵐で壊れた屋根の修理をしていた。

「陰念、もう木材は要らないのね？こつちは運んじやうわよ？」

「ああ、お願いします。」

そう言う陰念の指示に従いながら、勘九郎は楽しそうに笑う。ここに来て、どんどん陰念は輝き出していた。実は手先が器用でこついった大工仕事得意だったり、年寄りに好かれる性格だったり。知らなかった一面が見れて、勘九郎は陰念の事を見直していた。

「最近、ちょっと引き締まって来たしね。」

ゾクッ！

「な、なんだ!？」

悪寒を感じてキョロキョロする陰念。確かに危険察知力は成長していた。

「おーい、こつちも終わったぜ!」

雪之丞も鹿と猪を背負ってやってくる。

「鹿まで捕まえたのかよ…!」

「隣の山まで追いかけてやっとだけどな!」

得意気に語る雪之丞に、陰念は勿論、婆さんや見物に来ていた爺さんたちも驚く。逃げる鹿を捕まえるのは銃を持ったマタギでも無理だ。

「まるで天狗だねえ。」

感心する婆さんが言つと、雪之丞は渋い顔をした。

「ああ、天狗ならこの間会ったぜ、負けちまったけどな。今度会ったらただじゃおかねえ!」

「お前ムチャクチャだな…。」

陰念の感想に頷く老人たちであった。

「ふんふんふん」

山道を一人散歩するハーピー。麦茶の入った水筒を振り回し鼻歌を歌っていた。

この村に来てまだ一ヶ月だが、思いのほか馴染めてハーピーは上機嫌である。爺さん連中は優しいし、弟子たちの上達も早い。普通のGS相手になら後れをとらないレベルにまで達していた。それに…

「メフィストもやられて、晴れて私は自由の身じゃん！一応義理でGS試験にはアイツら送り込むけど、その後は自由じゃん！」

これが何より嬉しかった。何とあのメフィストが人間の軍門に下ったという。その知らせをつけて、ハーピーは小躍りして喜んだ。

もう自分は自由だ！もう恥ずかしい写真やビデオで脅されずにすむ！

「自由、自由、フリーダムじゃん」

そんな奇妙な歌を口ずさんでいると…

「あんたって人は……油断大敵よ、ハーピー。」

「ヒッ!？」

目の前に一人の女がいた。

「今の歌も面白いから記録しちゃってたり。」

「イヤアアアアアア!？」

件のメフィストの、意地悪そうな笑みがハーピーを恐怖に陥れた。

「で、今更何の用じゃん。こっちは忙しいじゃん。」

嫌そうな顔をするハーピーにメフィストが笑いかける。ここはハーピーたちのアジトにしているあばら屋。陰念たちは怖がって炊事場に逃げ込んでいる。

「いやー、私の親父に頼まれて様子を見に来たのよ。今度のGS試験は大変みたいだから。」

「親父？……う、嘘じゃん。生きてるはずないじゃん。」

そんなワケないのだ。

「それがねえ、人間に転生しやがってたのよ。この間会って簡単に負けちゃった。」

苦笑いを浮かべるメフィストだが、そんなに簡単に済ませられる問題ではない。メフィストは姑息な手段で恐怖公を名乗っていたが、アシユタロスは殺戮をもって恐怖を与えてきた本物の恐怖公だ。また魔界が殺伐とした世界に戻ってしまうのか？

「また、私を使い捨てるじゃん？もう、嫌じゃん……。」

「馬鹿ねえ、私はもう上司じゃないし、ただ忠告に来ただけよ。貴女はもう私の配下じゃないわ。」

「……その忠告って何じゃん？」

ハーピーが聞く体勢に入るのを確認してから、メフィストが一冊のファイルを出す。そこには人名と顔写真、経歴が記されている。

「これはね、私の配下に手に入れさせた、今後の試験参加者リストよ。中でも要注意人物だけを集めた物なんだけど……。」

「ふーん、そんな心配しなくてもウチらの合格は確実じゃん！」

そう言いながらファイルをめくる。そのうち一枚の写真に、やたらバタバタとシールが張ってあった。そこには要注意の文字が。

「なんじゃん、コイツ？…：芦蛭子…：（芦原和樹）？」

「その子ね、親父が言うには人間界で一番強いみたいよ。当たったら、せめて大怪我しないように場外に逃げて負けろってさ。」

「ど、どんな化け物じゃん！？」

「で、その隣の子いるでしょ、長髪の。」

メフィストの言うとおりに視線を移して行くと、そこには長髪の凛々しい男の姿が。ちよつとカツコいいかもしれない。備考欄には『式神使い』とある。

「ま、まさか！」

ハーピーが驚いてメフィストの方を見ると、彼女は幸せそうな顔で言った。

「ええ、私の、想い人よ。」

話は少し遡って…ここは、北海道の洞爺湖近く。芦優太郎除霊事務所の一室である。拘束を解かれたメフィストと優太郎、カオスとマリアがテーブルを挟んで向かい合って座っていた。…特上寿司を食べながら。

「はぐはぐ、人間界って美味しい物だらけねえ、んぐんぐ！」

メフィストが頬を膨らませ必死に大トロを食べていた。

「食べ過ぎだろう、君は！マリアの分まで！」

優太郎が注意すると、マリアが微笑む。

「ワタシハ電気ト・ショートケーキガアレバ・充分シアワセデス。」

「土偶羅の奴め、勝手にマリアを魔科学で改造しおって！ケーキばかり食べるようになったわい！」

カオスが愚痴る。が、これは優太郎の命令だったりする。マリアの動力源が電気のみだと、金が掛かりすぎるのだ。今では食事も出来、燃料費は格段に安くなった。外見も、人間と殆ど変わらない身体となっている。腕が飛んだり足からジェットが出る以外は。

「生クリーム巻き、アリマセンカ？」

「んな気持ち悪いもんじゃないわい！」

そんなせわしない食事も一段落して。メフィストは優太郎の質問に一つ一つ丁寧に答えていった。

「…つまり、前世の恋人を見つける為にGS試験に人を送ろうとしていた、と。何故GS業界に？」

「だって、前世と同じように能力に目覚めたなら絶対その能力を活かした職につくでしょ？なら、同じ業界にスパイを送り込まないと」

優太郎とカオスが視線で会話する。嘘はついていないようだ。

「で、前世での恋人の名前は何だ？悪いが私には前世の記憶が所々欠けていてね。」

「…ムカつくわね、仕方ないけど。」

メフィストは自分の恋人を殺した本人が覚えていないと言ったのを聞いて、一瞬殺気立つ。しかし勝てるわけもないので我慢した。

「鬼道誠司。陰陽師だって言ってたわ。」

「…!？」 二人の顔が強張る。

(ちょっと待て、高島ではないんか？お主の記憶と違っておるぞ！?)

(ああ、私も驚いている。鬼道?)

「ちょっと、何よ？」

二人のリアクションを不審がるメフィスト。そんな三人を黙って見ていたマリアが、おもむろに口を開いた。

「魔界データベースヲ確認シマシタ。陰陽師高島八・彼女ニ会ウ前

二・シンデイマス。」

「なっ…どういう事だ、マリア！」  
優太郎が焦る。

「貴族ノ女性ノモトニ夜這イニ行ク際、ヨリ多クノ性交渉ヲ可能トスル為ニ若返リヲ図リ・文珠ヲ受精卵ニマデ戻ツテ・乾イテ死ニマシタ。」

「…どんな死に方だ…。」

ガックリとする二人。メフィストも何とも言えない顔で白けていた。

…そんな中、優太郎は内心では別の事を考えていた。

この世界のメフィストが、高島との絆を作れなかった理由…。いや、それ以前に、世界を渡りながら美神家やメフィストに生まれ変わらない理由…。

（娘よ、代価に差し出したのは…この絆か…。）

本来なら渡らないはずだった魂。最高指導者から、条件付きで渡す事を許されたい。そして、適合する器を拒否したとなると…。

（魂の器を借りたのか。ルシオラが蘇るまで、その器を守る為に。お前はそうまでして、償いたかったのか…）

優太郎の目に、涙が滲む。しかしその表情には悲しみの色はなく、決意を新にした強い意志が宿っていた。



(しかし…私を舐めるなよ？娘が消える運命にあるというならば、その運命に抗い、復讐してやるうではないか！)

「なるほど、この鬼道政樹って男がターゲットじゃん？…て事は見つけ出した今はもうGS試験を受けさせる必要はないんじゃない？」

「ええ、でも出来れば協力関係は築きたいからパイプ役として欲しいんだけど…やってくれる？」

ハーピーは考える。今回の試験は弟子たちの目標である。ここで資格を取らせたら、自分が居なくなってもアイツらだけで生きていけるだろう。危険はある。自分は魔族だし、魔族と関わっていると知れたらアイツらの身に危険が及ぶ。どうしたら安全に事が運べるのか。

「ふふふ、そこはそれ、ちゃんと考えて来たわ。」

「な、何じゃん？」

メフィストがひそひそとハーピーに耳打ちする。

「ゴニョゴニョ」

「え、なんでじゃん。嫌じゃん。」

「だから、ゴニョゴニョ…。」

「い、痛いじゃんそんなの！」

「大丈夫、痛いのは初めだけよ。それで、ゴニョゴニョ…。」

「ひいひいひい！」

その会話を一枚戸を隔てて聞いている三人。

「何話してんのかなあ…。」

「羽居様があんなに怯えるの初めて見るわ。」隙間から覗く。

「あ、あのデカイ胸…ママに似ている！」

雪之丞だけはノリが違った。

「何にせよ、俺たちは従うだけさ。そうだろう？」

「勿論よ。…雪之丞、それくらいにしときなさい。」

っ…

「ひいひいひい！？」

背中を指でなぞられた雪之丞が奇声を上げた。

村は、相変わらず平和だった。

そして、所変わってここは六道家の庭園。一人の男が今まさにその命の灯を消そうとしていた。

「め、冥子はん、堪忍や…。僕の負けや…。」

「え、まだ鬼ごっこしかしてないのに。」

残念そうに言う冥子と、その式神たち。十二神将と呼ばれた六道家最強の式神たちは、この数時間男を追いかけ回していた。今は捕まえて式神の一つが男を口の中に入れている。

「い、今は我慢や…GS資格とって借金返し終わったら、僕は自由になるんや…」

式神の口臭に泣きながらブツブツと言う。

男の名は、鬼道政樹。六道家の従業員にしてメフィストの想い人である。

鬼道は父に借金のカタとして六道家に売られた。結局父は失踪し自分は冥子専属の執事として式神にいじめられる日々を送るハメに。恨むのは父と六道家。そしてそれ以上に、弱い自分である。

その言葉を聞いた冥子は、寂しそうな顔をした。自分のそばに居てくれている鬼道が居なくなるのを想像して、段々悲しくなっていく。

「や……やああ、まーくん、行かないでー!!」

シギヤアアアアアア！

「な、なんやー！？」

男をくわえたまま式神が暴走する。庭園は結界を張ってはいるものの、見る見るうちに荒れ果てて行った。

そんな光景を、館の最上階から見下ろす影が一つ。

「あらあら、また借金が増えたわね。」

六道冥菜その人であった。

冥菜はすぐに業者を呼んで庭園の修復を依頼した。

鬼道政樹の名前で……。

## 第二十二話 試練のはなし

「さて、そろそろ試練を受けてみる？」

妙神山の修行場で、和樹がユリ子に言った。あれ以来皆と仲良く修行をしているユリ子と横島は、和樹も驚く速さで実力をつけて行った。

横島は靈気の鎧を完全に使いこなしている。サイキックモードと名付けられたその姿はまるで宇宙刑事とか特撮のノリであった。一度、和樹が「助けてヨコシマ〜ン！」と言ったら「それだけはやめて」と泣かれた。

ユリ子の方は、靈力よりも体力の向上が著しかった。特に瞬発力を活かした動き、小刻みにフェイントを入れながらのステップワークは和樹も感心する程であった。靈力に関しても、身を守るには充分なレベルである。

「試練、ですか…。」

今のユリ子には、以前のように横島と張り合う気持ちなど無い。だから、冷静に自分の実力を見つめ直していた。

「私に乗り越えられるでしょうか？」

「ああ、いけると思うよ。」

和樹は即答した。基本的に真面目なユリ子である。ここでの修行でも真剣に取り組み続けていた。慢心も無いようだし、もう大丈夫

だろうと判断していた。

「分かりました、お願いします。」

頭を下げるユリ子。それを見て、和樹はニッコリ笑って美神と横島にも声をかける。

「二人にも試練を受けてもらうから、一緒に来てもらえるか？」

「え、私も？大丈夫かなあ…。」

「現役GSがそんな事言わないでくださいよ！」

横島の言う事ももっともだ。

「ぼ、僕も…」

そう言っについて行くこうとするピートを、天竜が止める。

「次の機会にしておけ！お前、まだ魔の力をコントロール出来てないだろうが！」

「うっ…僕は神父の弟子なのに…」

泣く泣く引き下がるピート。タイガーは元から怖がって試練を受けながらなかった。

「では、行きましょうか。」

小竜姫の案内で、和樹と三人は加速空間を出て行くのだった。

【吉村ユリ子】

とうとう、試練がやってきました。自信は無いです。だって、一体どんな内容なのか分かりませんから。下手な自信は慢心と同じですからね。

その試練の場所は奇妙な空間でした。何も無い、ただ広い地平線が広がっているんです。横島さんが、美神さんに「こーなったらここでアダムとイヴに！」なんて言って飛びかかっていました。和樹さんが「俺と似たようなリアクションするなー！」って突っ込んでたけど……え、誰に対して迫ったの！？和樹さんの試練の時は天竜様と……えええ！？

いけない、また鼻血が！ごめんなさい死神さん、ティツシュわざわざ持ち歩いてもらって。さて、気を取り直して試練です！はい、気合いはちゃんと入れてます！だからそんな目で見ないで、和樹さん！

試練は、自分の影法師を出して戦うみたい。三連戦？さすがに厳しそう。そう思って魔方阵の上に立つと、私の影法師が現れます。

それはまるで、西部劇のガンマンでした。え、なにコレ？女だからガンウーマン？普通にスナイパー？でも銃持ってないです！どういう事！？

和樹さん達も不思議そうに見ていましたが、私には少し理由が分かかって来ました。多分、これは私の戦い方が関係してるんですよね。

「では、始めます！ゴレム出ませい！」

小竜姫様のかけ声と共に出てきたのは岩に覆われた一つ目の大男でした。……え？いいんですか、これ。行きますよ？

私は人差し指を相手に向けて、ピストルのように構えます。そして目を狙って…

BANG！

「ガアアアアアツ！」

声を上げてゴーレムが倒れました。私の技は、指先から靈氣を放出する靈氣弾です。ただ、余りに圧縮して撃つから速くて見えないみたい。死神さんに言われて練習していたんだけど、上手くいきませんでしたね。あれ、なんか皆がビックリしてる。なんで？

「では、影法師に力を授けます。」

小竜姫様が言うと、私のガンちゃん：（今命名）の手に銃が。小竜姫様の話では靈氣を圧縮する時間を限りなくゼロに出来るようになったらしいです。うふふ、これで本物の早撃ちが出来ますよ！

「カトラス出ませい！」

次に出てきたのは黒い鬼みtainな妖怪。足が刃みたいになってます。その足が…あっ！？

「カトラス！？」

慌てる小竜姫様。合図無しでいきなり襲いかかって来るんですもの。

……早撃ちするに決まっていますよね。



BANG!

霊気弾を撃つと、相手の顔に命中します。顔は…うわぁ、ちょっと説明したくないです。簡単に言うと、グロイです。

「そ、そんな、カトラスが一撃で？」

「今のつて無効ですか？」

私が言うと、小竜姫様が首を振りました。

「奇襲さえ退ける速さは見事です。ちゃんと力を授けますよ。」  
そう言うと、私のガンちゃんもまた変化します。今度は…スコップ？ゴーグル？横長の装置が目部分を覆いました。

「これで霊視能力が身につきました。目も、良くなったはずですよ。」

これは嬉しいです！本の読み過ぎで視力が落ちてきていたので、あ、本当によく見える！

「次が最後です！ドツペルゲンカー出ませい！」  
現れたのは私の影法師と同じ姿。これは厳しいですね…。

予想通り、遠距離からの撃ち合いになりました。時間にして二十分くらい、銃で撃ち合います。互いに銃口の向きで相手の攻撃の方向を見極めていました。空中で、互いの銃弾がぶつかり火花を散らしました。

段々頭がクラクラしてきます。何も考えられなくなってきたその

時…私の銃弾が相手の銃口に吸い込まれて行くのが見えて。

ズカアアアアアン！

相手の銃が爆発しました。

「それまで！」

小竜姫様の声に、やっと状況が理解出来ました。勝ったんですね、私…。

ホッとした瞬間、身体から力が抜けていきました。

【ユリ子視点終了】

和樹は、半ば呆然とその光景を眺めていた。最後の戦いもそうだが、二戦目の奇襲を退けた場面が特に衝撃的だった。あの攻撃、前の世界では美神さんでさえ防げなかったのだ。よくここまで成長したものだ、と思う。GS試験に挑戦する資格は充分にある。

最後の強化で全体の能力が大幅にアップしたユリ子の影法師は、西部劇のようなファッションからSWATのような狙撃手の格好に変化した。

「おめでとう、吉村さん。GS試験へのチャレンジ、応援するよ。」

和樹が抱きかかえそう告げると、ユリ子はニッコリと微笑んで意

識を失った。

小竜姫が次に呼んだのは美神。こちらは圧巻だった。内容はユリ子と同じで影法師は前の世界と殆ど同じ。炎を纏っているくらいしか違いはなかった。しかし、決定的に違う事が一つ。それは靈気の総量である。

美神は、ここでの修行をヒヤクメの指導のもとで行った。美神に欠けていた靈気の制御能力を徹底的に鍛え上げたのだ。また、この美神は成長期が終わっていなかった。靈気自体のキャパシティも格段に大きくなっていったのだ。

一体目のゴーレムは炎で焼き尽くし、二体目のカトラスは靈気の鞭で転ばせ八つ裂きにした。最後のドツペルゲンカーもワザと意識を暴走させ心を読まれないように戦った。あたり一面は火の海、ただ美神の影法師だけがその真ん中に立っていて、ちよつと暑がっていた。

和樹は痛感する。本当に、成長期に基礎訓練をしつかりしていると全然違う。美神の見違える成長に感動しながら、和樹は横長の方を見た。次は、お前だぞ？

#### 【横島忠夫】

凄いわ所長。吉村さんが40分近くかけて戦った内容を20分でクリアとか。さすが現役GS。格が違うなあ。

まあ俺は素人だから時間かけても怒られないだろう。えっと、こ

の魔方陣だっけ？俺はどんなの出てくるのかなー。

ん？何だコイツ…アルマジロ？

なあ和樹、これは無いだろ？ガンマン、ヴァルキリーと来て、いきなり動物って。それも凄いデカいし！柔らかくてデカいなら隣のトロールの親しみやすさがあるけど、これは抱きついたって痛いだけだろ…。

「では、金剛羅刹、出ませい！」

待てー！なんで俺だけこんなゴツイ奴なんだよ！小竜姫様…いや、こんな奴小竜姫でいい！本気でム力つく女だな、コイツ！毎回俺ばかりキツく当たりやがって。いいよ、殺ってやるよチクシヨウ！

金ピカに光る鬼が目の前にいる。とにかく戦うしかない！鬼の棍棒が俺に振るわれるが…

ガキイツ！ なんとかはじく。

次々振るわれる棍棒を全てはじくものの、このままではジリ貧だ。何とか攻撃したいが早く攻撃に移れない。どうするか…。ああ、守りながら攻撃だな。

身体を丸め、ゴロゴロと相手に向かって回転する。そして…。

ガシッ！ ゼロ距離接近、相手の身体にしがみついた。思いつきり腕と足を使って締め上げる。

ぎゅっうっうっうっ！

「ぐっ、ぐあああああ！」

鬼が、雄叫びを上げて霞のように消えた。ふう…でもスタミナ減

ったな。これはマズい。

「では、力を授けましょう。」

そう言うのと影法師が姿を変える。お、人型になった。…なんか特撮ものに出てくる怪人だな。アルマジロ男、とか。でも、これでやつとまともに動けるようになった。次はまともに戦えるな。

「次、ドッペルゲンカー出ませい！」

ふざけんなー！なんでよりもよってコイツが二番手なんだ！疲れているのに！チクシヨウ、硬いコイツが相手とか嫌がらせじゃねえか。絶対スタミナ切れになるって。こうなったら頭を使って切り抜けるしかない。

とりあえずボケーツとしてみました。

「キシヤアアアア！」

うわあ、普通に攻撃してくるじゃねえか！何が考え読むだよ！あ、休もうとしたのがバレたのか。

こうなったら攻撃あるのみ！肉弾戦だ！しかし…なんか向こうの方が力強いぞ！？何だコレ、卑怯じゃねえか！だったらコレしかない！

サイキックソーサー！

手に霊気の盾を展開する。それを投げつけて相手を遠ざける……ん？なんで向こうはこの攻撃をやってこないんだ？

やっと気づいた。向こうはあくまで影法師のコピーをしているだけ。俺自身の技までは使えないんだ。よっしゃ、これで何とか戦える！

…結局30分近くかかったよ。もう異常にふらふらになりながら勝利する。

影法師がまた変化する。ん？なんか細くなっただけじゃないか？え、そう言えばさつきも何の能力が上がったのか教えてくれなかったよな。…アンタ本当に力くれてんの？そう聞こうとした俺の言葉を遮るように、小竜姫が言った。

「では、最後の相手は私です！」

ちよつと待てコラ。お前、ただ俺をいじめたいだけだよな？いい加減にしてくれよ。もうウンザリだ…。

「じゃあぶつ殺してやるよ!!！」

疲れたとか、そういう次元の問題じゃない。こんなイジメは修行じゃないだろ！本気で殺してやる！

靈気の鎧…サイキックモードになると、俺の影法師は一気に間合いを詰める。そこへ…

ブウンッ！ 剣撃。そして、今まで誰にも見せなかった力を使う。手から伸びる一本の棒。サイキックロッドだ。

ドスッ

小竜姫の鳩尾にクリーンヒット、鈍い音をたてた。まだ行くぞ！

ドドドドドドドドドドドド！

ひたすら突く！それだけじゃない、全身に小さなソーサーを展開、

細長い針状にして身体に植え付けて行く。

「クッ！」

小竜姫が突きの嵐から離脱、俺の背後に回る。余りの素早さに追いつけない！

「もらった！」

小竜姫の声がした瞬間。全身に植え付けた見えないくらい細い靈気の針が一斉に小竜姫の身体に放たれた。

「きゃあああああああ！」

余りの量に吹っ飛んで逃げる小竜姫。ざまあ見る。今までの恨みだ。いくら素早くてもこれなら避けられないだろう。ヤマアラシの術。アレは毛の生えたアルマジロだよな？

小竜姫が自身にヒーリングをかけて体勢を整えようとしている。させない！ロッドを一気に伸ばし、今度は小竜姫の額を狙う。が…アレ？いつの間にか後ろにまわりこんでる？

ドカツ！

「ぐっ…！」

剣撃を鎧で防ぐ。おい、コイツ何かやったな！？こんな避けられないだろ！

俺は靈気を集中する。コイツは何かやった。それが何かは分からないけど、一瞬で背後に回るくらい素早く動いた…。でもそんな事出来るなら最初からもって使ってるよな。何かタメの時間が必要なのか？

ロッドで剣撃をはじめながら考える。幸い、小竜姫の持つまだら模様の剣は思いのほか軽い。これなら持ちこたえられる。

「うおおおお！」

体内で練った靈気を腹から発射！さすがに読めなかったのか直撃して小竜姫は吹っ飛んだ。やはり、あの能力はタメの時間が必要なんだな。でなきゃ今のは避けられるハズだ。

小竜姫が動きを止める。ここだ！

身体のまわりに靈気のドームを展開して全方位からの攻撃に備える。そして…

ガキイイイン！

やはり、背後からの攻撃。何とか食い止めた。

「なっ！？読まれている！？」

慌てて飛び退く小竜姫。しかし、しまったな。これで不意を突く方法が無くなつた。どうすればいい？

小竜姫は警戒していたが、俺にスタミナが無いと分かると一気に攻めに転じてきた。ああ、正解だよチクシヨウ！好きにしろよ、殺せよ！そんなに俺が嫌いだよ！

しかし、俺は諦めきれなかった。

なんでこんな奴に殺されなきゃなんねーんだ！？そう思った時、俺の中の何かが叫んだ。



「うおおおおお！」

ザシユッ！

俺の胸から血飛沫が舞う。死んだな。でもこれで捕まえたぞ！

ガシッ！

「なっ！？」

小竜姫が困惑の声を発する。チャンスは今しかない。

『爆』

いつの間にか手のひらに握りしめていた球を小竜姫の背中に当てる。瞬間、目の前が光に包まれた。

【横島視点終了】

やりすぎだ。和樹は小竜姫の態度に違和感を感じていた。追い詰めるとは言ったがここまでやれとは言っていない。超加速まで使って、どういっつもりなんだ！…しかし横島も小竜姫の攻撃を直感で防ぐ。どうなってる？如意棒まで作り出した。こんなに強いのか！？

しかし感心して見ていられたのはそこまでだった。小竜姫、アイツ確実にムキになってやがる！止めようとして和樹が走り出したが、一歩遅かった。

横島の身体から、血飛沫。小竜姫の身体が返り血で赤く染まる。影法師が、横島の身体とリンクしてしまったのだ。

「てめえええ！」

逆上する和樹の声は、次の瞬間爆風にかき消された。

小竜姫の身体が、結界の端まで吹き飛ばされる。和樹は咄嗟にシールドを張って爆風を防いだ。不幸中の幸いは、試練を終えた二人がこの場に居ない事だ。こんな見たら美神は確実に暴走するだろう。

和樹は、文珠を用意して横島に近づく。小竜姫と同様に爆風で吹き飛ばされた横島の身体は、埃と血にまみれて転がっていた。

「これは…」

酷い。この傷は、確実に殺す意図を持ってつけられていた。和樹は急いで文珠を発動させる。

『治癒』

文珠は光り輝いて、横島の身体を癒やして行く。みるみる傷は塞がり、跡形も無くなった。顔にも赤みが差し、霊気も安定している。これで、横島は大丈夫だ。

「次は、こつちか。」

和樹は警戒しながら小竜姫に近づく。一体どういつつもりで…そう思いながら近づいて、倒れた小竜姫を見る。

「なっ!?!」

肌が紫に変色していた。墮天しやがった……。和樹は呆然とした。コイツは何故ここまで追い詰められていたんだ？何を悩んで…

「うわあああああ！」

突然飛びかかってくる小竜姫。黄色く光る目で和樹を捉える。魔眼で縛ろうとしたのだ。

「つまらない真似はよせ！」

霊波刀で袈裟切りにする。体力が残ってないのか、まともに斬られた。

「ぐっ…何で、何で私が人間に負けるの…ずっと修行してきたのに…天竜殿下にまで追い抜かれて…。」

血の涙を流す小竜姫。

なるほど、強さを追い求めた武神なのに人間に負けるのが心の底では我慢出来なかったのか。

「そうか…。俺や横島に負けるのが嫌だったんだな。コイツを消せば俺も消えるとも思ったか？」

言いながら、和樹は老師の言葉を思い出していた。あまりきつく言っつな、まだこの小竜姫は未熟なのだ、と。それに一度魔力で染めた事があるし、魔に惹かれ易くなっていたのだらう。

「もう一度、神族に戻りたいか？」

「……はい。」崩れ落ちる小竜姫。

ため息をつく和樹。この小竜姫は墮ちてしまった。弱い人格は消えるかもしれない。

「目をつぶって、楽にしる。」

和樹はそう言って、小竜姫の身体を抱きしめた。

『靈基崩壊』水晶文珠を発動させる。

「ああ…和樹さん……。」

閉じられた目蓋から、一筋の涙。小竜姫は光の粒となって、『収集』の水晶文珠に吸い込まれて行った。

この世界でも、俺は小竜姫を…

和樹は泣いた。結局自分が追い詰めてしまった。前の世界でも、アイツの心の葛藤を放置して…自分は何をやっているんだろう。

和樹は、水晶文珠を飲み込むと体内の小竜姫と共鳴させる。膨大な量の竜気が、和樹のチャクラを通して練り上げられていった。

そして、和樹の口から一匹の竜が生まれる。

「和樹さん……。」

人の姿に戻る小竜姫。その姿は元に戻ったが、雰囲気は変わっていた。

「消えたか、あの小竜姫……」  
悲しくなった。

「いえ、今は眠っています。とても、深く……。また、アナタを苦しめてしまいましたね。」

そう言う小竜姫は、少し大人びていた。和樹を抱きしめて、背中

を撫でる。

「でも、もう苦しめません。ずっとアナタと共に在り続けます。」

「うん…うん、ありがとう。そして、ゴメンな。また、助けてやれなかった…。」

こぼれ落ちる涙を止められず、和樹は泣きじゃくった。

「すみませんでした。」

土下座する小竜姫に横島は驚いて慌てる。あの小竜姫が、ここまでするなんて。もしかしたら、あの無茶ぶりは自分を覚醒させる為の演技だったのか？

「いや、謝ってくれたならいいんです。俺も、生意気な態度取ってしまってたんで…。だから、頭を上げてください。」

小竜姫は頭を上げ、立ち上がる。そして、横島の身体を抱きしめた。

「しよ、小竜姫様!？」

「今から、力を授けます。…私つたら、酷いですね。力を与えるどころかハンデを与えていたなんて。」

実は以前の小竜姫は横島にハンデを与えていたのだ。スピードと

霊的スタミナを封じられた状態であの試練はスタートしていた。

「まず防御です。おそらく人間でこの霊的防御を貫ける者は和樹さんくらいでしょう。」

影法師の鎧が、アルマジロの甲羅から武将の鎧に変わる。

「次に攻撃です。霊波の出力が桁違いに跳ね上がったハズです。あのアルマジロの甲羅でさえ、今のアナタなら簡単に斬り飛ばせるでしょうね。」

何も持っていない手に、槍が現れる。刀でないのは、如意棒を扱った経験からだろうか。

「最後にスタミナです。今までよりも霊気の消耗が減って、普段の生活でも疲れにくくなったハズですよ。」

身体が全体的に金色を帯びる。光り輝く武将がそこにいた。アルマジロからエライ出世である。

そして最後に、小竜姫は横島の頬にキスをした。

「小竜姫様!？」

「これはお詫びです。一応、この世界ではファーストキスですよ。」  
「いたずらっ子のように笑いながら言う小竜姫。横島の心にもうわだかまりは無くなっていた。」

「こらもー愛の告白としか思えない!さあ小竜姫様、セカンドもサードも済ませちゃいましょー!」

ガスツ！「何トチ狂ってんだ阿呆！」

和樹の突っ込みが炸裂した。

「うふふ、すみません。調子に乗ってしまいました。」  
謝る小竜姫。変わりすぎだ、と和樹はため息をついた。

「なあ横島、お前さつき最後に何をやったんだ？お前、爆発させる技なんてあったか？」

「ん？」

横島は和樹の言葉に少し戸惑う。最後、最後：何をやったかな。  
「ああ、何かビー玉みたいなのを小竜姫様の背中に当てたような。」

その言葉に二人はゾツとする。文珠だ。コイツ、文珠に目覚めて  
いる！それも、逆鱗に『爆』を当てやがった！ぶつけ本番でなんと  
いうエゲツナイ攻撃。これでは小竜姫でも堪らない。よくそのまま  
死ななかつた物だ。

「横島さん、そのビー玉は今出せますか？」

「…いや、どうやって出した分からないんですよ。っていつか俺が  
出したんスか？」

和樹と小竜姫は顔を見合わせ、まだ文珠の作り方を教えるのは早  
いと判断した。

「いえ、聞いてみただけです。もし横島さんが出せたら、見てみた  
かったなあって思っただけですから。」

「ははは、でも爆発しちゃいましたから危ないツスよ。」

その言葉に頭を抱える和樹。小竜姫、この世界のお前はある意味最高の指導者だったのかもしれない。ここまで成長させる事はなかったんだよ…。



## 第二十三話 G S試験開始!のはなし

夏休みに入った。和樹達は期末を無事に乗り切って、あと数日後に迫るG S試験に向けて最後の調整を行っていた。心配されていた横島の成績は、なんとか平均より上を維持する事が出来た。ピートやタイガーも無事に赤点を免れ、メンバーに脱落者は出なかった。それもヒヤクメと小竜姫、和樹が指導したおかげである。

ヒヤクメはその後変化した小竜姫にいち早く気づき、一時ショックで寝込んでしまっていた。それは当然で、ヒヤクメにとって小竜姫は大切な友達だったのだ。

神界でも、相手の心を読む心眼の持ち主であるヒヤクメは、周囲の神族に嫌われたり警戒されたりしていた。そんなヒヤクメの能力を知っても避けなかった、初めての神族が小竜姫だった。勿論勝手に心を覗こうとしたら仏罰という名のお仕置きが待っていたが、それさえしなければ普通に接してくれたのだ。それはヒヤクメにとって大きな事であった。

ショックを受けるヒヤクメに、小竜姫は優しく話しかけた。

「この世界の私は、心の傷を癒やす為に眠っています。もし立ち直れたら、今の私と完全に融合するでしょう。アナタの知っている小竜姫は、必ず帰って来ます。それまで、待っていてくれますか？」

「小竜姫…。」

小竜姫の言う事は嘘ではない。藤姫が人格を維持したように、この世界の小竜姫の心が癒やされ強くなれば、今の小竜姫を取り込ん

で融合できる。今は、和樹の中にあつた意識がメインに出ているだけなのだ。

「それに、ヒヤクメ。私の居た世界でもアナタは大切な友達でした。アナタが受け入れてくれるなら、この世界でもアナタと友達でいたいです。」

「う、うわあああぁん！」

堪えきれず泣きつくヒヤクメ。その背中を優しく撫で、慰める。こうして、ヒヤクメは変化した小竜姫を受け入れたのだった。その後少し体調を崩したものの、小竜姫の看病によって回復したヒヤクメ。復帰してからは、今まで以上に張り切って横島たちに勉強を教えていた。

『和樹、お主にはまた嫌な思いをさせてしまったな。』

「いえ、俺のせいです。老師の忠告をちゃんと受け入れて、あいつの事を見てやれていれば……。」

うなだれる和樹に、老師は言う。

『お主は自分に出来る事を行った。未熟なのは小竜姫の落ち度じゃ。教え子を殺しかけ、墮天までさせたのはワシの指導不足じゃよ。何でも自分のせいにするな。』

「……………」

やるせない気持ちで、ヒヤクメ達を見た。終わりよければ……なんて言って割り切れるほど和樹は大人ではなかった。

さて、無事夏休みを迎えた一同は現在試験対策の為に妙神山に集まっている。それぞれ二次試験の実戦を想定した対策を立てている中……横島だけは一次試験の筆記試験の勉強をしていたりする。

「なんでまたテストなんやー！もう勉強は嫌ー！」

「ガンバだよ、横島君！ほら、この鉛筆はよく転がるんだよ！あ、コックリさんて試験で使って良かったっけ？」

いや普通の助言せえや。和樹は横島の勉強を見ながらぼやく。横島には、基本的な知識がまったく無かった。いきなり霊能に目覚めてしまった上、知らずにチャクラを第五まで開いてしまったのだ。未だにチャクラを「ぐるぐる」、霊視を「サイキック覗き」と呼んでいる。

「なんだよ自縛霊って。」

「この場合、地縛霊な。その字だと一人SMみたいだろ。」

「またえつちな事言ってるよう。」

これは勉強なのだろうか。横で見っていたユリ子が苦笑いしていた。そんなやり取りをしていると、下界から帰って来た小竜姫が慌てて修行場に入ってきた。

「た、大変です和樹さん！これを見て下さい！」

小竜姫の手には、書類の束。その一番上の紙を、和樹に手渡す。

それを見て、和樹も顔色を変えた。

「美智恵さん、解任されたのか!？」

美神も、その声に反応した。

「ママが!？」

「ええ、それに新しい責任者の名前を見て下さい。」

小竜姫の言葉通りに視線を移すと…そこには和樹にとって忘れられない名前が。

「西条って…。」

うんざりした顔をする。美神も複雑そうな顔をした。

「お兄ちゃん、帰ってきちゃうんだ…。」

明らかに嫌そうである。

「所長、誰ですか、この西条って人。」

横島は気が気ではない。お兄ちゃん?所長とどういう関係だ?

「あのね、ちっちゃい頃にママが家に連れて来た人なんだけど…自分の事お兄ちゃんって呼べってうるさかった人なの。仕方なく呼んでたけど、気持ち悪い目で私の事見て嫌だったなあ。」

おい西条、なんだこれは。

おまえ、ここじゃ嫌われまくってんだな。

「許せん!所長、今回の作戦、断りましょう!」

横島が激怒する。

「横島さん、落ち着いて下さい！こんな雑魚、横島さんの敵ではありません！」

小竜姫、お前も落ち着け。

「そうだよ、子供の頃の私でも燃やせたもん。大丈夫だよ！」  
それは大丈夫じゃない、いろんな意味で！」

しかし、ここで西条が登場とは。何がどうなっている？美智恵さんは今何をしているんだろう…。和樹が小竜姫に聞くと、その答えは意外なものであった。

「実は美智恵さんはオカルトGメンを辞めて…六道女学院の特別講師になったようです。」

最凶のタッグが誕生した！！

「あ、冥ちゃん所に行ったんだ。それなら安心だよ。」  
あんただけだ、安心しているのは！和樹が頭を抱える。

前の世界で、美智恵は六道家の支配下から抜け出そうと必死だった。冥菜が自分の師である以上仕方なかったのだが、良いように利用されるのに我慢出来なかった美智恵は、アシユタロス事変を利用して状況を打開しようとした。自分の娘を英雄に仕立て上げ、GS業界での発言力を強めたのだ。

もう一人の英雄である横島の活躍を情報統制で隠し、勝手にスパイに仕立て上げた謝罪もそこに表舞台から消し去った。その結果、美神親子は英雄視され、横島は人類の裏切り者というイメージ

を拭いきれないまま一般社会からはじき出される事となったのだ。和樹にとっては忌々しい思い出だ。

…しかし、この世界ではむしろ進んで協力関係にある。なんでだ？

「和樹さん、今回の作戦は私が指揮を取ります。西条の好きにはさせません。」

「え、ああ、そうだな。」

我に返る。そうだ、今は作戦に集中しなければ。

「ところで、やけに沢山書類があるな。なんだこれ？」

「ああ、これは今回の試験関係の書類です。皆さんの受験評や、試験案内の資料ですよ。」

そう言っつて、横島たちに書類を配って行く小竜姫。最後の書類を和樹に手渡す時…。

「ああ、当日はちゃんと女性らしい服装をお願いしますね。あくまで潜入なんですから。」

「グッ……………」 そうだった…。和樹は嫌な顔を隠そうともしない。そして、周囲を見て爆発する。

「そんなキラキラした目で俺を見るなー！！」

キヤー、と楽しそうに散らばるユリ子たちを追いかけ回している

和樹を見ながら、小竜姫は微笑んでいた。

「和樹さん…いえ、蛭子さん。ちゃんとしたドレスを着たら、きっと綺麗でしょうね…。」

うつとりする小竜姫の横で、ヒヤクメが呆れている。

「やっぱり小竜姫は小竜姫なのね。私に女装男の子本を勧めまくった、あの小竜姫なのね…。」

霊気で作ったハリセンを振り回す和樹を眺めながら、ヒヤクメはつぶやくのだった。

試験当日。まだ陽も上がらないような時間。村の入り口には見送りの人間が集まっていた。

「陰念、もう出るわよー！」

「ああ、今行く！」

そう言って、あばら屋から出てくる陰念。心配そうに振り返る。

「大丈夫さ、あんなんでどうにかなるタマじゃねえだろ。」と、雪之丞。陰念もそうは思っただが、心配なものは心配だった。

ハーピーが体調を崩したのは、メフィストが帰った直後だった。

心配しなくていい、魔族特有の物だと説明するハーピーの言う事を信じてはいたが、治りの遅さに不安が増していた。

「大丈夫じゃよお、ワシらがちゃんと見とるもの。安心しなせえ。」

「頼むわね、おじいちゃん。」

誰かに頼れる、というのは本当に助かるものだ。

「これは、朝ご飯に食べるんだよ。」

おばあちゃんが手渡すのは、三人が大好きなオニギリ。猪の肉を味噌と合えて焼いた具が入っている物である。大きな弁当箱には他にも沢山の野菜が。

「ありがとう、ばーちゃん！これで試験は合格間違いなしだな！」  
雪之丞が興奮して言う。陰念も感動していた。

この村は、いわゆる限界集落。食料は殆ど現地調達だし、年金暮らしの年寄りばかりだが環境が厳しいのでいろいろと金がかかっていた。買い物も一苦労なのだ。そんな村で、朝早くから沢山の食材を使って弁当を作ってくれる。一人で作れる量ではない。きつと前もって声を掛け合って準備していたのだろう。そして、見送りまでしてくれる。これで頑張れないハズは無いだろう。

「じゃあ行ってくる！姐さんの事、頼んだぜ！」

雪之丞の声に、他の二人も続いた。

「行ってきます。」

「行ってくるぜ、みんな！」

そう言っ歩き出す陰念。すると、先ほどのおばあちゃんが陰念



を呼び止めた。

「陰念ちゃん、これ持っていきなさい。」

それは、小さい御守りだった。

「お、俺に？」

「ええ、陰念ちゃんは危なっかしいからねえ。しっかり頑張ってきてなさい。」

「ちえっ、俺そんなに子供じゃねえよ。」

「そうねえ、あたしの弟そっくりよ。」

「そんなに老けてもいねえ！」

その言葉に笑う爺さんたち。陰念もつられて笑う。

「でもありがとう。大事にする！」

「気をつけて行ってらっしゃい。」

陰念が大きく手を振ると、少し先にいる雪之丞たちのあとを追って駆けていった。その背中を、爺さんたちが見送る。

「ほんに正吉に似とるて。」

「ええ。あの子は戦争から帰って来れなかったけど……。陰念ちゃんは無事に帰ってきてね。」

小さくなつて行く背中を見ながら、そう呟くのだった。

試験会場は、六道専修大学で行われる。その名の通り六道グルー  
プの大学である。つまり、美智恵も関係者として警備に当たれるの  
だ。作戦会議の場に現れた美智恵に、苛立ちを隠せない男がいた。  
西条と共にやってきた、神経質そうな男。美智恵に異動を告げた、  
あの男である。美智恵はその姿を見て、彼らの狙いを察した。

国連の組織であるGメンは政府の依頼を受けて行動するが、指示  
系統は別である。あくまでGメンは別の機関だ。あの男は政府との  
パイプも強い人間。日本政府とGメンを癒着させ、自分の発言力を  
高めようとしているのだろう。そして、Gメンを自分の思うがまま  
にするつもりなのだ。でなければ西条のような頭の悪い男をトップ  
に置こうとは思わないだろう。

（血の気の多い人間を集めたのも、妖怪を殺す対象としか見ていな  
い政府の意向、か。）

美智恵は確信した。この連中は、会場に現れた魔族を殺す為に集  
まった。観客の安全など二の次だろう。

続々と集まるGメン連中を確認しながら、美智恵は携帯電話で連  
絡をとる。その相手は、六道冥菜であった。

「先生、やはり観客の安全の為にこちらの人間を増やした方がいいですね。出来れば結界を張れる人間が欲しいです。」

「分かったわ。スタッフを十人くらい客席に追加するわね。」

足りるだろうか……美智恵は不安にかられる。しかし、足りない分はひのめ達に頼もう。こちらも人員不足なのだ。

会場に入った時、和樹はただならぬ殺気を感じた。それは自分と  
いうよりも会場全体に向けられている。まったく、この警備員は  
監視にしてももう少し上手く出来ないのか、と呆れた。

「皆、受付を済ませてくれ。」

そう指示を出す和樹。真剣な表情なのだが…

「分かりました、お嬢様。」

「行ってきます、お嬢様。」

「それではまた、お嬢様。」

「行ってくるんジャー、お嬢様。」

「て・め・え・ら〜!!」

真紅のドレスに身を包んだ和樹、もとい、芦菫子がそこにいた。

これは、藤姫の仕業である。もしかしたら、こういう形で仕返し  
しているのかもしれない、と和樹は思っていた。今度、機嫌取りに

何か奢ってやるのかな。

「凄く似合ってますよ、蛭子さん！」

おキ又がニコニコして言う。分かってる、悪気は無いのだ。それは分かっている。

「ほれ、どうした。陽気に行こうではないか蛭子！」

こっちは悪意だらけだ。てめえ、そのニット帽取って除草剤撒いてやるのか！

今回、応援におキ又とシヅモが参加している。シヅモが居るのは危ないのだが、和樹の水晶文珠で妖気を消しているので感知されなくなっているのだ。これでバレル事は無いはずである。どうしても見たいと言ったシヅモの願いを叶えてやったのだった。藤姫とイツナは神社で留守番をしている。イツナは変身出来ないし、藤姫は魔族に顔が知られているので面倒な事になるのを避ける為に遠慮した。公平は神社での祈祷の予約が一杯で身動きがとれない。

これから小竜姫が指揮をとる作戦は、逐一和樹の持つ『伝達』の水晶文珠を通して経過が伝わってくるようになっていく。念話も出来るのだが、それは距離や心理状態によっては伝わりにくくなってしまう。より確実な方法を選んでいく。

「よし、正常に作動してるし問題無しか。……じゃあ俺も受付行ってくるわ。」

「あ、駄目です！わ・た・し、ですよ！」

「うむ。雅に、わ・ら・わ、もお勧めじゃー！」

この……。

「『ワタクシ』も行って参りますわ！オーホホホホ！」

和樹が壊れた。

固まる二人を残して、和樹は受付へと軽やかに歩いて行く。

混雑した会場に、モーゼ現象が発生していた。

慣れない人ゴミを掻き分けて、雪之丞が受付を探す。

「がーっ！なんでこんなに多いんだよ！見えねえじゃねえか！」

「落ち着きなさい、雪之丞。上に案内があるじゃない。」

勘九郎の言う通り、きちんと矢印で受付案内が書かれていた。

「でもまあこう多くちゃウンザリするよなあ。」

陰念も人ゴミが嫌いなので雪之丞の気持ち分かる。田舎暮らしに適應している今なら尚更である。

そんな会話をしていると…

会場の人ゴミが一気に動き出す！

「わっぷ、何だ一体!？」

ドツと押し寄せる人の多さに困惑する陰念。勘九郎も慌てる。雪之丞だけは5メートルほど跳躍して会場の上部にある鉄筋部分にぶら下がって難を逃れた。そして上から会場を眺めて……固まった。

「オホホホホ、受付はこちらかしら!？」

赤いドレス姿の女性が、かるやかなステップで走って行った。人垣が、というか人の海が割れて道が出来る。

「何なの？何が見えるのよ、雪之丞!」

「おい、俺にも教えろよ!」

下から聞こえる仲間の声も、今の雪之丞には聞き取れない。それくらい、衝撃的だった。そして…

「ママー……!」

ポタポタ…

「うわ、何これ!血!？」

「キヤー!」

「てめえ、そんな所で鼻血垂らすな!」

阿鼻叫喚である。

そんな事が起きているとは露知らず、和樹は優雅に受付を済ませ  
のだった。

## 第二十四話 二次試験開始！のはなし

一次試験は午前中に行われた。筆記と霊波測定テスト。前回目立ってしまつて反省した和樹は、今度は前もつて合格ラインを調べ、ギリギリの霊波を出して合格した。幸い、穩行術で霊波をコントロール出来るのでこの辺は楽であつた。だが、前回とは逆に「弱い」「カモ」という目で見られてしまい、また注目を浴びてしまつていゝる。横島とユリ子、ピートとタイガーは揃つて上位の霊波を出して合格。特に横島とピートは高い霊波を出して目立つていた。

「ねえ、アンタまで受ける事なかつたんじゃない？」

二次試験会場で、一次を突破したメンツを見ながら勘九郎が言う。ちよつとムスツとした陰念が口を開いた。

「俺も受けるつてあの女が言つたんだよ。俺もこんな所にいるより看病してたいさ。」

「あの姉さんには世話になつたからな。もう一度会つて礼を言いたいぜ。」

雪之丞はメフィストに短期間だが修行を見てもらつていた。

「ところで、気になる奴はいたか？」

陰念が聞くと、二人は複雑な表情をする。いた、どころではなかつた。要注意リスト以上に力を持っている人間が多かつたのだ。二人の霊力は抑えていたとは言え中の上程度。陰念は合格ラインギリギリである。



「あの横島とかいう奴はヤバいな。あんな濃い靈氣見たことねえ。」

「あと、ピートって子ね。本当にキュツと締まった良いお尻してたわ。」

空気が凍る。

「と、とにかくあのファイルがあてにならない事は証明されたよな。」

「気を取り直して陰念が言う。三人が見つめるのは一枚の写真。人間界最強のシールが貼られた芦瑩子である。」

「53マイトってなんだよ」

「陰念より低いわ。ただの頭のおかしな女だったって事ね。」

「コイツになら…勝てるかな。」

ここにも和樹の作戦に引っかかっている人間がいた。

昼休みが終わり、会場が大勢の観客に埋め尽くされる。二次試験が開始されるのだ。オカルトGメンたちは会場の要所要所に配置されるが、基本的に会場警備はGS協会の依頼した民間の警備員、そして六道大のスタッフが当たっている。そして、美智恵は小竜姫にも頼んで美神と小笠原エミを会場にまわしてもらっていた。

「ひのめ、彼氏の活躍が見れて嬉しいワケね？ニヤついているワケ。」

「にゅふふふ、そんな事ないよう。」

「まあ気持ちは分かるワケ。私も助手の修行の成果を確かめられるし…。けどね、仕事はちゃんとやるワケ。」

「わ、分かってるよ。エミさんの所の子も応援するよ！」

「……………」

強くなっても美神は美神だった。

その頃、和樹達も組み合わせ表と睨めっこしているいろいろな意見を交わしていた。

二次試験は二回勝てば資格を所得できる。皆見事にバラけて、資格所得は大丈夫そうだ。ただ一人を除いて…

「横島さん、ワツシは、ワツシは…!!」

「ええい、離れる気色悪い！とつとと覚悟を決める！」

相手は陰念。和樹が前もって注意しろと言っていたメンツの一人である。前の世界でもタイガーと戦っており、その時はタイガーのボロ負けに終わった。メドーサの配下の一人として魔装術を授けられていたが、今回はどんな力を持っているのか…。

「大丈夫ですよ、油断さえしなければ！」

ピートが励ます。ユリ子も、心配そうだ。

「今更何を言ってるのですか、タイガー。男ならシャンとしなさい」  
和樹が叱咤する。

「あのさ、そのキャラ続けんの？」

「テメーラが言い出したんだろうが、付き合え阿呆。」

ドスの効いた声で言う和樹に震えあがる横島。悪乗りしすぎた…。

『第一回戦を始めます。受験者は指定のコートに移って下さい。』  
場内アナウンスが流れた。

「では行きますわよ、皆さん。」

周りの好奇の目に晒され、真っ赤な顔をして皆は試合に向かうのだった。

『A会場第一試合。芦蚩子 対 金堂大智、試合開始!』

会場に声援が響き渡る。

和樹はドレスの端を摘み優雅にお辞儀すると、相手の姿を見た。

……ん？

「お前、あの憎き芦原和樹に似ている！関係者だな！ぶっ潰してやるぜ……!」

どこかで見たとような…。

ああ、あの妖魔ハンター志望の馬鹿じゃないか！まだ諦めてなかったのかよ。和樹は懐かしい顔を見て笑ってしまっ。が、コイツを野放しにしては妖怪たちの身に危険が及ぶ。早々にリタイヤしてもらうに限るが…。

「覚悟しろよ、お前の靈気は俺の半分しか無い。公開リンチにしてやるぜ。せいぜい泣き喚いて俺を楽しませろよ？」

下卑た笑みを浮かべる。

よし、死刑決定。

和樹は靈力を最小限に抑え、相手に向かって印を組む。目に見えないくらいの無数の小さな光が、相手の身体の周りを飛び交った。

「むっ!?!」

男は混乱する。会場から、人が消えた。ここに居るのは自分と女だけである。女は、酷く怯えていた。ドレスははだけ、まるで自分を誘っているようだ。

「へっ、泣いても叫んでも誰も助けに来ねえぜ？」

そう言っ、服を脱ぐ。ここには自分たちしかない。思いつきり楽しんでやる！

その時、女が悲鳴を上げた。

「きゃあああああ！」

『金堂大智、婦女暴行未遂および公然猥褻罪の現行犯で逮捕する!』

男が気付くと、会場には観客が大勢。皆、非難の視線を向けていた。腕には手錠が。そして見上げると…。

オカルトGメン西条の姿があった。

「蛍子ちゃん助かったんですね!良かったです〜!」

顔を両手で隠しながらもしっかり指の間から覗いていたおキヌが、安堵の声をあげる。

「まったく、公衆の面前でいきなり素っ裸になるとは何を考えたんじゃない!」

シヅモも、汚い裸を見せられておかんむりである。会場のリアクションも概ね二人と同じであった。

…しかし、ごくわずかの人間にはその絡繰りが分かっていた。

「なんつーエゲツナイ事を…。」

VIPルームの唐巢神父が頭を抱える。勿論集音マイクで会話を聞いているので相手の下劣さは分かっていたが…。

「同情の余地は無いわ〜。消えてもらって正解よ〜。」

ニコニコと笑う冥菜。なるほど、女である事を利用して幻術も合わせればああいった戦い方も出来るのか。犯罪にも使えそうな手である。

それを聞いていた、あの神経質そうな男が悔しそうな表情を浮かべた。将来Gメンにスカウトしようと思っていた人材だったのだ。しかし今更見逃す事も出来ない。モニターに映る得意気な表情の西条を睨みつけるしか、今は何も出来なかった。

会場の端で出番待ちをしていた横島たちも、勿論気づいている。

「幻術、だよな。」

「はい、殆ど霊気を感じませんでした。光の粒が見えたくらいですね。」

ピートが解説すると、ユリ子が口を挟んだ。

「あれ、ホタルですよ。一つ一つが小さなホタルで、自立して動いてました。」

「見えたの!？」

驚く横島。自分には、細い光の糸にしか見えなかった。

「ええ、全部で十三匹飛んでましたよ。綺麗でしたけど、ちょっと悲しい光でしたね。」

ユリ子には、幻想的に見えた光。夜、暗闇の中であれを見たら、きつと心を奪われてしまうと思っていた。

その頃、そこから離れた会場では一人の男が修羅と化していた。

「ぼ、僕は負けられん！負けられへんねやー！」

怒涛の靈波砲攻めにたじろぐ相手。鬼道政樹はそのスキを見逃さない。影から式神を呼び出し、その手に持った刀で相手を切り裂く。

「ぐああああ！」

崩れ落ちる相手を確認して、鬼道は血走った目を審判に向ける。

『し、勝者、鬼道政樹選手！』

「あたりまえや早よう言わんかい。」

鬼気迫る表情のまま、試合コートを後にする。審判は額に浮き出た汗を拭つてため息をつくのだった。

…そして、それを観客席で見守る男たち。

芦優太郎とカオスである。

「余裕が無いな…。資格所得はギリギリといった所か。」

「仕方ないじゃろ。打たれ強いのはいいが、それだけではのう。式神も充分には使いこなせとらんし。」

何故メフィストが惚れたのかは分からないが、二人は鬼道の合格を祈っていた。

時を同じくして、D会場でも一つの勝負が決しようとしていた。陰念と、タイガーの試合である。

試合は、意外にもオーソドックスな肉弾戦になっていた。タイガーは幻術使いではあるが、防護境界の張られた試合会場では広範囲の幻術を展開出来ない。結局自分をトラ男に見せるくらいしか出来ないうえに幻術を破られたらその相手には二度と同じ幻術が効かないという欠点があった。そして、陰念にはトラがよく分からなかった。

トラ自体は知っているが、日常的に雪之丞が倒してくるクマや猪を見ていると、どれだけ強いのか分からなくなってくるのだ。自分もクマと戦った事があるが、遠くから気づかれないように霊気弾を撃つくらいはしたものの、トドメはいつも雪之丞。中途半端に攻撃参加して勝っていただけに、動物の強さがいまいち分からない。

結果的に、タイガーのはったりは通用しなかった。そこで、肉弾戦である。互いに霊気を込めた拳で殴り合う。地味ではあるが、実はこういう戦いを求めているオツサンの客は大盛り上がりである。

「いけ！そこだ！ああ、何やってんだ！」

雪之丞もノリノリである。

「陰念、負けたらお仕置きよ！」

それだけは嫌だ！実はもう限界なのだが、気力で踏ん張る。

「タイガー、負けたらしばらく仕事は無いワケ！」

エミのその言葉に、同じく限界のタイガーも踏ん張る。エミしゃん、それはあんまりジャー！



もう、避ける事も忘れて殴り合う。どちらかが集中力を切らせば、  
靈気ガードが無くなり無防備になる。気力の勝負であった。

羽居さん！羽居さんに褒めてもらっただ！陰念はフラフラになり  
ながらも、全力で靈気を込める。すると、信じられない事が起きた。

ピヨコッ

背中に、小さな羽のような物が生えた。

「ッブフーッ！」「」

皆が吹き出す。見た目ヤンキーの陰念の背中に、可愛らしい羽が  
生えたのだ。陰念自身も不思議でならない。

「阿呆、今だ！ぶん殴れ！」

雪之丞の言葉にハツとする。相手のタイガーが呆然としている。  
今しかない！

「うおらあああ！」

バキッ！ 「げはああっ！」

崩れ落ちるタイガー。

『勝者、陰念選手！』

その言葉を聞いた陰念も、口元に小さな笑みを浮かべた後、その  
場に倒れ込んだ。

「陰念!？」

駆け寄る雪之丞。背中への羽は消えていた。

「君、救護班が来たから後は彼らに任せたまえ。」

審判に言われ、離れる雪之丞。

「ダメージはでかかったわね。次は棄権させた方がいいわ。」  
勘九郎の言葉に悔しそうな表情を浮かべる。

「でも、アイツ最後に成功させやがったな。それだけでも凄いで。」

「可愛らしかったけどねえ。」

タンカに乗せられ運ばれて行く陰念を見る二人の視線は、いつもより優しかった。

「あの馬鹿、最悪なワケ…。」

対する小笠原エミ。同じ負けるにしても格好良くまけるならまだしも、師匠の顔に泥を塗るような恥ずかしい負け方を…。仕事を放棄して帰りたい衝動を抑えていた。

「エミさん、あんまり怒っちゃ駄目だよ。タイガー君頑張ったよ。相手の子も頑張ってたよ。いい試合だったもの。」

「最後を除けばね…。」  
美神のフォローも通じない。

「しかし…。最後のアレ、何なワケ？やけにしっかり物質化したワケ。」

エミは不思議に思っていた。霊力が大した事ない割には、羽はしっかりしていた。

「ウチの横島君も出来るよ。流行ってるのかなあ。」

「まさか。あんたの彼氏も異常なワケ。普通、そんな事出来る霊力あるならもつと効率いい使い方するワケ。」

そう、霊気を身体に纏ったりするのは燃費が悪くて無駄ばかりなのだ。だからこそ、あの羽の意味が分からなかった。

「でも、可愛かったね。」

美神にはそこまで考える頭が無かったりする。

エミは美神を無視して思考に没頭した。

そして同じ頃、VIPルームの小竜姫も今の魔装術について考えを巡らせていた。あの魔装術は、羽。となると、藤姫の懸念していた通りの魔族が関与していると見て間違いない。

「しかし、やけに弱かったですね。」

小竜姫が気になったのはそこだった。

本来、魔装術は中級以上の魔族にしか扱えない術である。なら、どんなに弱い奴が契約しても全身を覆うくらい出来るハズだ。なのに、出たのは背中の一部。これは明らかにおかしい。魔族の方が、弱っている可能性がある。

ハーピー、アナタは今どこにいるのですか？

会場にすら現れない警戒心の強さは彼女らしいかもしれない。が、小竜姫には何かが引つかかってならなかった。

一方その頃、村のあばら屋ではハーピーが服を着替えていた。

「アイツ、成功したじゃん。戦い、始まってるじゃん……。」  
身体の魔力が共鳴したのだ。遠くで陰念が魔装術を使ったしるしである。

熱はまだあるが、こうしてはいられない。身体に鞭打って、会場に向かおうとしていた。

メフィストは勘九郎に霊光舞踏術を、雪之丞には魔装術を教えていた。自分も陰念に魔装術を教えていたが、陰念の霊気が足りずに成功しなかった。自分自身を責める陰念を見てハーピー自身も悲しい気持ちになり、何とかしてやりたいと思っていたのだ。それが、ついに成功した。

「だ、駄目じゃん。今の私の魔力じゃ、近くに行かないと……。せっかく成功したのに、負けちゃうじゃん……。」

ふらつく身体を必死に立て直す。そして、村のみんなの事を想って……ハーピーは魔力を込めた歌を歌った。歌声は水面を広がる波紋のように村を覆い尽くして行く。農作業をしていた爺さんや食事を作っていた婆さんたちは、その歌声に聴き入りながらも何かが抜け落ちて行くような不安や寂しさを覚えた。

ハーピーは、村の連中の意識をコントロールして自分に気づかないようにしたのだ。ついでに、自分に関する記憶も、消し去った。自分出来る、恐らく最後の魔術である。

「みんな、優しくしてくれてありがとうじゃん。……アイツらの事、よろしく頼むじゃん。」

あばら屋を出たハーピーは、気力を振り絞って翼を広げる。風をつかまえると、大空へと舞い上がって行った。

その日、村から一羽の鳥が消えた。

## 第二十五話 華麗なる戦いのなし

ラプラスのダイスというものがある。何者をも干渉させぬこのダイスは、二次試験の振り分けを絶妙なバランスで行っていた。和樹たちのメンバーは全員、資格所得後にぶつかる様になっていたのだ。そして、タイガーを除くメンバーは皆、危なげなく勝ち進んでいた。

「俺、強いのかな…。」

今更自分の強さに気づく横島。ピートも、今まで横島たちとしか稽古をしていなかった。ので他の受験者の弱さに戸惑っていた。

「お二人とも簡単に勝ってしまいましたもんね。」

そう笑うユリ子。しかし、客観的に見てユリ子が一番得体の知れない実力の持ち主として警戒されていた。

攻撃が、見えないのだ。

一回戦、試合開始と同時に崩れ落ちる対戦相手。審判でさえ軽くパニックになった試合を、横島達は勿論和樹さえも驚いて見ていた。「ふふつ、死神さんのアドバイスです。」

ユリ子はそう言って笑っていたが、その余裕さよりも絡繰りの分からない技に横島達も警戒する。和樹はすぐわかったが、もしかしたら今大会で一番危ない相手かもしれないと苦笑いを浮かべていた。

ユリ子はどうやら、手ならどんな場所からでも霊気の高圧縮噴射が出来るらしい。さっきの試合は、だらんとぶら下げた手の、親指の爪から高速で霊気弾を発射していた。相手の眉間に。

「えげつない所は、女性らしいわ。」  
和樹は、ニコニコしているユリ子を見てつぶやいた。

観客席でも、和樹たちの応援団が興奮気味に話している。おキヌ、シヅモ、愛子と魔鈴の四人である。

「次勝つたら、合格なんですよね！凄いです！」

パンフレットを確認しながらおキヌが言う。一緒に眺めているシヅモも、はしゃいでいた。

「まったく奇妙な力を持った人間が多いのう！ビックリ人間コンテストじゃ！」

「今回は特別ですよ。こんなにレベルの高い人が揃うのは珍しいんですよ？」

魔鈴も興奮気味に説明する。自分もGS資格をもち活動している身である。この中から助手にスカウトするなら誰かな、と物色するように見ていた。

そんな三人の会話も耳に入らないのは、愛子。愛子は先ほどのピートの戦いを反芻しながらぼんやりとしていた。

「格好良かった…。」

ピートはいつもの紳士的な佇まいとは打って変わって荒々しく、

男らしかった。気迫のこもった眼差しに、ドキドキした。まるで銀幕のスタアの様…。試合も、相手の攻撃を軽くかわし、まばゆい光を放って倒していた。凄い…。愛子はその光景を思い出して恍惚とする。

「お、二試合目が始まるぞえ。」

シヅモの声に我に返る愛子。いけない、ちゃんと応援しなきゃ。気を取り直して会場を見ると、そこには和樹の姿。

「また変な事が起こらないといいんですけどね。」  
魔鈴の言葉に思わず頷く。

「さっきの今で、精神的に辛かったら可哀想ですよね。」  
そう心配する愛子に、シヅモと魔鈴は声を揃えて言った。

「「無い無い。」」

『A会場二回戦、第一試合。芦菫子 対 フランク・北条 試合開始！』

「いきますよ、お嬢さん！」  
金髪をなびかせ、神通棍を構える優男がそこにいた。

「ええ、お手柔らかにお願いしますわ。」  
優雅にお辞儀する和樹。はたから見たら、パーティー会場のワンシーンである。

「ふふふ、捕まえて御覧なさい！」



和樹は軽やかなステップで相手の攻撃をかわす。身体を回転させる度にひるがえるドレスのスカート。

「やりますね、お嬢さん！」

こちらもつられてダンスのような足運びをしてしまう。まるでワルツが流れているかのような身体の動き。会場にいる客も段々何を見ているのか分からなくなってきた。

しかし、それを見ていた一部の人間には気づいていた。また、小さい光が舞っている。二人の動きに合わせるように、ホタルは淡い光を放ち乱舞する。

「はっ！」

男の手が和樹の腕を捕らえる。

「捕まえましたよ、お嬢さん。」

「ええ、お見事ですわ。」

その時、二人を見守っていた客席から大きな拍手が。同時に、オーケストラが曲を演奏し始める。指揮者がこちらを見て、ウィンクをした。

「一緒に一緒に下さる？」

「喜んで。」

手を取り合う二人。ホールにはいつの間にか、同じように手を取り合う人々が踊り始めていた。

「ふふふっ、お上手ね！」

「君もね。こんなに素敵な時間が過ぎせるなんて思わなかったよ。」

流れるメロディに身をゆだね、二人は踊る。そして、二人のダンスが激しさを増していったその時、曲は突然終わりを告げた。

『場外！勝者、芦蛭子選手！』

「ハッ!?」

我に返る男。気づくと、手をとっている女性はコートの中、自分は外にいた。

「ごめんなさい、残念ですけどダンスはお終いです。」

そう言って、和樹は小さくお辞儀をする。つられてお辞儀をする、会場から割れんばかりの、本物の拍手が。

「……幻、だったのか。」

呆然とするが、これも自分の実力不足だと納得する。

「合格おめでとう。」

「ええ、ありがとうございます。」

二人は言葉を交わして、コートを後にするのだった。

…後にこの試合は伝説として語られる事になる。まったく血を流す事なく、ダンスで勝負が決まった試合。何故か会場も大盛り上がりで、この模様は多くの雑誌で取り上げられる事になった。その写真には、華麗に踊る二人と幻想的に光る無数のホタルが写っていた。次の試合では、ダンスの試験と勘違いして受験する人間が続出したという。

「なんじゃありゃ…。」

横島が言つと、ピートも困つたような顔をする。一体何が起きているのか。和樹は全くと言って良いほど靈気を発していない。これは異常である。相手の自滅も不気味だが、ピートにはこちらの方が気になった。そして、意見を聞こうとユリ子の方へと振り返るが…。

「！」

ユリ子が鼻血を流して悶えていた。

「か、か、和樹さん…。」

「ユリ子さん、気を確かに！もう試合は終わっています！」

ピートが慌てている横で、横島は暗澹たる気持ちになっていた。何故かと言つと…

『第二試合、横島選手と九能市選手はコートに入ってください。』  
次の試合が自分だったりするからである。

『A会場第二試合、横島忠夫 対 九能市氷雅 試合開始！』

「さっきの後つて、やりにくくないか？」

「同感です。」

そう言いながら構える二人。

横島はサイキッククロッド、九能市は刀を構えている。…つて、

「銃刀法違反だろ、それ!？」

「あら、ただの霊能道具ですわ。」

それを聞いて思い出す。確か試験の案内に、登録すれば持ち込み可とか書いてあったな。にしても刀って。忍者ルックスに合わせるならコスプレ会場だけにしてくれ。

「うふふ、私、誰かを斬るのって初めてですの。楽しみですわ!」  
瞳に狂気じみた光が宿っている。若干怖じ気づくものの、横島は考えていた。

コイツは、この会場で人を斬るつもりらしい。ルールで許可されたなら、人殺しでも楽しんでやるような人間。試験に合格しようがしまいが、こんな人間が人斬りの味をしめたまま社会に出たら危ない。きつと、霊能犯罪に手を染めるだろう。そうなったら、所長と戦う可能性が出てくるのではないか。

所長を危険な目に合わせない為に…勝たなければならない!

「行きますわよ!」

九能市が妖刀ヒトキリマルを手に突っ込んできた。

ヒュッ

寸前で避ける。しかし九能市は手を休めない。次から次へと剣撃を繰り返してきた。それを、ロッドではじく横島。

キーン、キーン、キーンッ!

汚染されていたとは言え小竜姫の剣を防いだロッド。この程度で

はビクともしない。が、そのあまりの速さに攻撃に転じられない。

「クッ…。」

どうすれば攻めに転じられるか。考えていると、先ほどの光景が頭をよぎる。

踊り、ステップ…ああ、使えるな。

横島は相手の刀をロッドではじかず紙一重でかわし、すれ違いざまに肘打ちを入れる。ダンスのような足捌き。和樹の動きを真似たのだ。

「ぐあっ！」飛び退く九能市。

横島は舌打ちした。ロッドでは長すぎて、すれ違いざまの攻撃に向かないのだ。しかしこの長さに慣れている今、下手に長さを変えたら防御が不安定になってしまう。

「まだまだこれからです！」 さっきよりいつそう早くなる動き。それを起用にはじく横島。これではジリ貧だ。だったら…

「ハッ！」

横島の腹部から発せられる霊気弾が、九能市の胸部に直撃する。

「ぐふっ!?!」吹っ飛ばす。

さあ考えろ、どうやってこの状況を打開する?…そして、横島の脳裏に昔見た映画のワンシーンが蘇った。

ああ、これと組み合わせればいいのか。

「スキありいいい!」

突っ込んで来た九能市が、刀を横島の頭に振り下ろす。対する横島はロッドを横に構え…。

ガキイーン！

刀を受け止める。すると、ロッドは真っ二つに折れてしまった。

「うふふ！お終いです！」

そう叫んだ九能市は、すぐに違和感に気づいた。霊気が、折れる？とつさに後ろに飛び退く。九能市の頭のあった場所を、ブウンと何かが振り抜けて行った。

「勘がいいな。これ避けるのか。」

「なっ…何ですかそれは！？」

横島の手にあるもの。それは先ほどまでのロッドとは違っていた。

「要は、イメージの問題なんだよな。」

ヒュンヒュンツと、横島の周りを霊気の短い棒が高速で飛び回る。それは、霊気でできたヌンチャクだった。

見た映画は『燃えよドラゴン』、名作である。

「こいよ、斬るんだろ？」

横島の目が据わる。

「ふん、こんな物！」　また一気に間合いを詰め、刀を振るう。それを、あの足捌きでかわしてすれ違いざまに…

ドガッ!

又ンチャクが、九能市の後頭部を直撃した。

「…っ!?!」

倒れる九能市。そこへ、横島が追撃する。思いっきり振り抜いた又ンチャクが、九能市の手首に直撃した。

「うあぁっ!」

カランカラン、と音を立てて刀が落ちる。それを又ンチャクで場外へとはじき出すと、横島は九能市の腹部に蹴りを入れて上体を折らせた。

グツと首に腕を回しロックする。靈気を漲らせ、完全に固定した。

「今、どんな気持ちだよ。これから、殺される気持ち。俺に教えてくれないか?」

「な、何を!?!」 声先ほどまでと、全く違う。異常に冷たく、不気味だった。

「その気持ち、お前に斬られる奴は皆感じるんだよな。そして、死にたくなかったって泣きながら成仏も出来ずに…悪霊になっちゃうんだろっな。」

「何を言ってるんです! 離しなさい!」

もがくが、全然外れない。怖い。コイツの声が、怖い!

「そんな悲しい靈を救ってやるのが、GSなんだよ。なら、その元凶となるような犯罪者予備軍は…今、消してもいいよな?」

「ヒッ…」

九能市は感じた。自分に向けられた殺気。これは、本物だ。本当に、この男は自分の首をへし折ろうとしている！

「ま、参りました！お願い、殺さないで！！」

『勝者、横島忠夫選手！』

横島はホールドを解いて、静かに九能市の身体を離す。九能市は急いで飛び退くと、震える身体を抱きしめながらコートを出て行った。

「なんか、後味悪いな。」

横島は暗い表情のまま、コートを後にした。GS資格所得など、どうでも良かった。ただ、今はこの気分を忘れたかった。

「ねえ、あの子ども？」

試合を見ていた勘九郎が雪之丞に聞くと、雪之丞はニヤついて答えた。

「アイツは強い。べらぼうにな。相手が女だから手加減していたみたいだが、本気を出したら一瞬で終わってただろ。」

雪之丞は、横島の力はこんな物ではないと見ていた。先ほどの戦い、もつと簡単に勝てたはずだ。それをしないのは、今後の戦いを見据えて自分の力を隠しているのだろう、と。それは半分正しい。



横島の力はこんな物ではない。ただ、久能市に対しては手加減ではなく相手の得意な接近戦で叩きのめしてやりたかっただけだ。ただ、ム力ついていただけだった。

その少し離れた場所では、警備に当たっているエミと美神が居た。

「凄い…前見た時より全然強いワケ！どんな修行したワケ！？」

「え、え、えつと、ずっと目をつぶって、たまにえつちな事言っ叩かれてたよ？」

「…えーと、とりあえず瞑想でいいワケ？」

「うん。あと、お勉強かなあ。私も先生とかしたよ！宇宙の魅力とか！」

わけが分からない。エミは混乱しながら横島の姿を目で追った。あの間抜け面が、今では男の顔になっている。

なんでウチに来なかったんだろっ、と心底美神を羨ましがっていた。

小竜姫は、横島の試合を興味深く見ていた。それは戦いそのものではなく、横島の発した霊気である。

「あれは竜気…。」

そう、横島の霊気には竜気が混じっている。この世界の小竜姫は横島に心眼を授けていない。じゃあ何故横島の身体から竜気が感じられるのか。その理由は一つしかなかった。

天竜殿下のヒーリング。

一度命を落としかけた横島の身体に流された、尋常でない量の竜気が、彼の成長を促していたのだ。人の身でありえない成長を遂げた理由は、そんな所にあった。さらに付け加えるなら、横島の魂はあの時霊基崩壊を起こしていた。それを天竜の全身全霊の竜気で再構成したのだ。もはや、横島は半分龍神族のような身体になっている。小竜姫と互角に渡りあえたのも、当たり前前だった。

「歴史が変わると、こんなにも違いが出てくるのですね。」

小竜姫は横島の姿を眩しそうに見ながら、呟いた。

そして、同じ気持ちを抱いている者が他にも。

選手控え室のモニターを見ながら、目を輝かせる。横島忠夫…この世界でも、その凛々しい姿は変わらない。

早く戦ってみたい！腰に下げた刀を撫でながら、女は尻尾を振るのだった。



## 第二十六話 犬と蛭のはなし

横島が、暗い表情で控え席に座っている。ピートもユリ子も、その近寄りがたい雰囲気戸惑っていた。

それまでも、修行の時に激高する横島を見ている二人。本気で怒っている時の怖さは知っている。が、今は酷く落ち込んでいた。こんな横島は初めて見るかもしれない。

「少し外の空気を吸ってくるか？」

そんな横島に声をかけるのは和樹。皆が気をつかっている中、あえて声をかける理由はただ一つ。一人にしてこれ以上悩ませないようにする為だ。

「今はそんな気分じゃ……」

「あら、ワタクシの誘いは受けられないのかしら？」

冗談めかして言うと、横島は呆れながら笑う。さっきといい、和樹のお嬢様バージョンは似合いすぎている。

「分かったよ、お嬢様。」

やれやれ、と腰を上げる横島。それを羨ましそうに見るユリ子。やっぱり横島さんばかりズルいな、と思っていた。

この試合会場は、大学の体育館を使って行われている。六道グル

ーブが作っただけあって巨大で、高校生スポーツ等の全国大会に使用される事も多い。そして選手の休憩場なのだが、体育館に隣接する学生用のラウンジと一般にも解放されている巨大な食堂が用意されている。和樹は横島をつれてラウンジの方へ来ていた。

「ここならモニターもあるし、皆の試合も見れるでしょ。」

「すげーな…ここ学校かよ？」

全体的に白っぽい色調で統一された内装、パツと見大きな喫茶店？そんな印象を受ける。奥には購買があるらしく、文具や本が見えた。

「取りあえず座りましょうか。ここは飲み物は頼めるのかしら？」

「ああ、セルフっぱいな。俺が取ってくるよ。何がいい？」

「じゃあ、紅茶で。ストレートでいいわ。」

「あいよ。」

このやりとりを、周りの人間がチラチラと見ていた。何でこんな所にカップルが…。というやっつたみると、異様な試合をした二人に対する警戒心。仕方のない事だった。

和樹は、そんな視線を無視してぼんやりとモニターを眺める。巨大モニターは四分割され、それぞれが各コートの中継している。そして、その一つに見知った顔を見つけた。ピートである。相手は…あれ、あの姿は…？どこかで見た事あるなあ、と思つてモニターを見ていると…。

「相席、よろしいでござるか？」

「ええ、どうぞ。」

妙な口調の女が話しかけて来た。時代錯誤の着流し姿、腰には刀、そして顔には…

「!?!」

般若のお面を被った怪しい人物がそこにいた。

『D会場第三試合、ピエトロ・ド・ブラドー 対 鬼道政樹 試合開始!』

「いくで、兄ちゃん!往生せえやー!」

鬼道の霊波砲がピートに放たれる。ピートは難なくそれを避けると、距離を保って素早く左右にステップを踏んだ。

「行きますよ。」

鬼道の動きに慣れると、今度はピートが攻勢に出る。小刻みに回転するようなステップから、鬼道の身体にジャブや蹴りを放った。

ビシッ ガシッ

「ぐっ、そんなん効かんで!」

鬼道の防御力は半端ではない。毎日のように冥子の十二神将に袋叩きにあっているのだ。しかし、それだけでは勝てない。こちらの攻撃が全く当たらないのだ。

「ちつ、ちょこまか逃げよって！あんさんもさっきのダンス女の仲間か！？」

ステップワークが似ているのだ。

実は、ピートと和樹はヒヤクメの指示でダンスを応用した足捌きの練習をしている。はつきり言つてヒヤクメの趣味なのだが、確かに参考になる部分も多かったのでピートは黙って従っていたのだ。

「これもなかなか馬鹿に出来ないんですよ？」

「やかましい！遊び半分なら去ねや！」

それにしても余裕がないな、とピートは思う。ここは今のうちに体力を削ってしまおう。

ガスッ　ガスッ

避けながら相手の顎や耳に靈気を込めたジャブを見舞う。それだけではない。相手の死角からいきなり靈気の粒を飛び出させ、驚かせて動きを止める。これは和樹に教えてもらった技だ。

「な、なんやこんなモン！」

鬼道はイライラを募らせる。攻撃自体は大した事ないのだが、思うように近寄れない。

「うおおおおっ！」

キレた鬼道は、ダメージ覚悟でピートに突っ込む。そして、霊気弾を受けつつピートの腕を捕まえる事に成功した。

「覚悟せえや！」

「嫌です。」

途端に、ピートの腕が霞のようにかき消えた。

「なっ!?!」

「ダンピールフラッシュ！」

ズガアアアアン!

至近距離から放たれる霊波にたまらず吹っ飛ぶ鬼道。

「う…:こんなモン…:こんなモン！」

鬼道は、使うまいと決めていた式神を呼び出す。まだ上手く扱えないのでトドメをさす時以外封印していたが、使わないと勝てそうになかった。

「これは…:。」

ピートも警戒する。影の中から出てきた式神は、一振りの刀を持っていった。そして…:

ヒュッ!

その刀を鬼道に向かって振るう!

「な、なんや夜叉丸!言うことを聞かんかい！」

避ける鬼道。それを執拗に追う夜叉丸。



『降参するかね!?!』

審判が聞くも鬼道は断固として認めない。

「嫌や、僕は負けるわけには…うわあ！」

「危ない！」

とっさに鬼道を庇うピート。夜叉丸の刀がピートの背中をざっくりと切り裂いた。

「ぐああああ！」

そのピートに、容赦なく刀を振るう夜叉丸。会場が悲鳴に包まれた。

「や、やめい!やめえや夜叉丸！」

鬼道が止めるも、全く言うことを聞かない。

『勝者、鬼道政樹選手!鬼道政樹選手、式神をしまいなさい!』

「せやかて…!」

その時、夜叉丸の身体を巨大な霊気の弾が襲った。

ズガアアアーン!

『ビギイイイ!』

消し飛ぶ夜叉丸。啞然とする審判に、男が大声で叫ぶ。

「何してるの!?!はやく救護班を呼びなさい!」

『そ、そうだった！救護班、至急ピエト口選手を医務室へ運びなさい！』

バタバタとナース服のスタッフが現れる。六道のヒーリング能力者たちだ。運ばれて行くピートを呆然と見送る鬼道に、先ほどの男が声をかけた。

「アナタのせいで楽しみが減っちゃったじゃない。次の試合の前に、遺書でも書いておく事ね。」

「行こうぜ。姉さんのお気に入りだから期待していたが…ただの阿呆じゃねえか。」

去って行く二人の言葉が重くのしかかる。勝ったのか、これは？しかし、これでGS資格は取った。今は頭を切り替えて次の試合に挑まなければ。

六道から逃れられるなら何でもする…。そんな鬼道には、ピートの心配をする心の余裕などなかった。

「ピート君…。」

唐巢は渋い顔でモニターを見ていた。負ける相手ではなかったが、相手を助ける為に大怪我を負い敗北してしまった。それは、何とも彼らしい負け方と言える。

「ごめんなさいね。ウチの子が無様な真似をしちゃって…。」

「いえ、これも勝負ですから。彼の治癒力ならすぐ回復しますよ。」

そう言いつつ、唐巢は鬼道に腹を立てていた。未熟なまま試合に挑み、暴走して勝つ。こんな人間に資格を与えるなんて正気ではない。この受験システムには不備がありすぎる、と思っていた。

対して、あのGメンの男は上機嫌である。ピートという半魔の男が負けた。これでいい。人間の社会は人間が守る。人外がGS資格を取るなど論外だ、と思っていた。

その頃、ピートが運びこまれた医務室のドアの前には、顔面蒼白な愛子が居た。

「今は治療中で立ち入り禁止です。」

スタッフに言われ、仕方なく医務室前の長椅子で待っていた。しかし座っていられず、うろつろと歩き回る。付き添いの魔鈴も心配そうにしていた。

「意識を回復しました。」

部屋から出てきたスタッフがそう言って、愛子のもとへ来る。

「今は面会出来ませんが、あなたへの伝言を頼まりました。『負けてゴメン、心配かけたお詫びに今度ケーキをおごりますね』だそうです。」

「……………馬鹿……………」

ホッとして、涙が滲む。彼が心配かけまいとワザと軽口を叩いて

いるのには気づいている。だから、自分もそれに乗っておこう。彼の負担にはなりたくないから…。

魔鈴に慰められながら、愛子は涙を拭うのだった。

【横島忠夫】

なんなのこの空間。俺がジュースや紅茶を持って戻ってくると、和樹あらため蛸子お嬢様の隣に怪しい仮面の人物が座っていた。

「あ、おかえり。紅茶ありがとうね。」

あー、やっぱり可愛いわ。ある意味一目惚れだったからなあ。こうして一緒にいられるだけ幸せなんだが…。

「お邪魔してるでござるよ。」

ああ邪魔だよ何だよお前！つか女か！般若とか意味不明だよ怖いよ！

丸テーブルに三つの椅子、何故か俺にやたらと近いんですがどういう事？確かにスレンダーボディがいい感じだから個人的に歓迎したいがそのお面が全てを台無しにしていますよ。

「まあ、いいじゃない。ほら、試合見ましようよ。」

不審がる俺に蛸子お嬢様が声をかける。優しいなあ。これが演技なんて勿体無いなあ。まあ、あんな恥ずかしい真似されるのはもう嫌だけど。

「…ちよつと聞いていいでござるか？」

なんだよゴザルって。何処の方言だよ。まあいいや、何だよ？

「二人は恋人同士でござるか？」

ブツ！飲みかけのオレンジジュース噴いたぞオイ！

「ふふふ、そう見える？」

なんで否定しないの！？もしかして俺に惚れてる！？そうかそうだったのか今まで気づいてやれなくてゴメン、俺は所長の巨乳にばかり目が行ってお前の事まで気が回らなかつたよ。これからはお前の微乳も見守って…

「誰が微乳じゃボケー！」

バキツ！ はうん、ソフトSM!?

「か、変わらないでござるな…。」

何だよ、お前俺を知ってるのか？さては俺のファンだな？いや、ストーリーカー？怖いよ般若のストーリーカーとか！

「いや、実は拙者、GS資格をとってから事務所を開くつもりでござるが…横島殿をスカウトしたいのでござるよ。それで、二人の関係を聞いたのでござるが…。」

うおっ！引き抜き！？俺なんかをスカウト！？…俺、偉くなったなあ。しかし残念！俺にはもう所属する事務所があつたりする！断

るに決まっている！

「な、何ででござるか！？待遇面では優遇するでござるよっ。」

ほう、試しに聞いてやるつもりではないか。

「まず、三食昼寝付きでござる。」

ん？

「夕方には散歩に行くでござるよ。」

んん？何かおかしくないか。

「夕食の後は一緒にお風呂に入って、夜は…は、恥ずかしくて言えないでござるよ！」

ちよつと待てー！それGS違うだろ！俺、なんかヒモだろそれ！  
行かねーよ馬鹿ー！！

「何ででござるかー！こんなに良い条件なのに！時給255円より  
マシでござるっ！？」

なんだよその労働基準法違反しまくった金額は！？俺はちゃんと  
給料もらっとなるわい！時給1500円！危険手当も別にもらっとなる  
し充分幸せじゃい！

「そんな…」

いや、なんかそんな崩れ落ちかたしなくても。っーか、何笑って

んだ和樹！このおかしな女どうにかしてくれよ！？」

「ねえ、じゃあ勝負したらいいじゃない。どちらが上の順位か、とかで勝負して、負けたら相手の言うことを聞く、とか。」

いや、それ俺にメリットあんのか？

「乗ったでござるよ！」

決断はえーよ、ハアハア言うな般若の面で！

勝ったら横島殿に来て貰うでござるよ。嫌なら、負けなければ良  
いだけでござる。」

ふふん、と言う般若。そうかい、やたらと自信満々じゃないか。  
じゃあ俺が勝ったら？

「拙者がお嫁さんになるでござるよ。」

変わんねーじゃねえか！

### 【横島視点終了】

隣でドタバタやっている二人を見ながら、和樹は懐かしい気持ちに浸っていた。端から見たら、自分とシロはこんな風に見えていたのだろうか。

犬塚シロ。人狼の娘。前の世界を知っているという事は、シロも死んで肉体を失ったのか？

前の世界。横島は早々にシロを人狼の里に帰している。自分が狙われているのを知ったからだ。最後まで渋っていたものの、納得して帰ってくれたハズだったのだが…。おそらく、また里を抜け出したのだろう。そこで…。和樹は悲しくなった。けれど、今のシロは楽しそうにしている。きつと、シロにはシロの想いがあってここに居るのだ。なら、応援してやろう。

そんな事を考えていると、フロアに悲鳴のような声が。皆、モニターを見ていた。

「ピート!?!」

横島が叫ぶ。ピートが滅多刺しにあって倒れるVTRが流れている。

「あれは…吸血鬼でござるな。」

その言葉に反応した横島が、シロの胸倉を掴んだ。

「吸血鬼だから何だってんだよ!?!」

差別しているように聞こえたのだろう。友人を酷く言われたと勘違いしてしまったのだ。その腕を、シロは軽く捻り上げる。

「ぐっ、いつっ!?!」

「落ち着くでござるよ。吸血鬼なら、あの程度の傷ならすぐ回復すると言いたかったのだからよ。」

腕を放すシロ。今の動きで、横島はシロの強さを肌で感じた。体



捌きでは、かなわない。

「ピートらしいわね。相手の事気遣って負けるなんて。優しいけど、それじゃ現場に出たら死んじゃうわ。」

「敵に情けをかけるなら、相手を選ぶべきでござったな。あの男、弱い癖に勝ってしまったから次の試合で殺されるかもしれないでござる。」

その会話を聞いて、横島は二人と自分の差を感じていた。あの光景を見て、自分は冷静でいられなかった。けど二人は違った。

「お前ら、凄いな。」

寂しそつに言う横島。それに、シロは不思議そつに答える。

「いや、横島殿も十分に凄いでござるよ？少なくとも…」

「ん？」

和樹が視線を感じて振り返る。

「その女に引け目を感じる事は無いでござる。」

サーッと、横島の顔から血の気が引いて行く。こいつは今、盛大に地雷をふんだ。

「あら、そうかしら？何故そう思うの？」

「何故も何も、おかしな術をかけて踊って勝つとか姑息な手段で勝ち上がっているでござる。そんな女狐みたいな奴が強いわけないでござるわ。」

ライバル心剥き出しなシロ。自分の飼い主に近づく邪魔者、という目で和樹を見る。しかし…こんな所でもタマモを引き合いに出すとは意識しすぎだろう。

「ふふふ、面白いわね、アナタ。ちなみに、私たち次の試合で当たるみたいよ?」

トーナメント表を見ると、確かに次の試合で当たるようになっていた。

「ふん、横島殿の隣にぶさわしいのが拙者であると、証明してみせるぞいぢわるよ。」

「楽しみにしてるわ。うふふふ。」

「……………助けて……………」

二人に挟まれて恐怖に固まる横島。ちよつと前まで自分がダークな気持ちでいたなんて、完全に忘れていた。

## 第二十七話 銃とお尻と漢のはなし

タイガーに続いてピートまで敗れ、小竜姫は今回の試験のレベルの高さに驚いていた。曲がりなりにも妙神山で修行した人間が…。確かにピートの敗北は実力と違った要素に左右された。しかしそれも、手早く倒せないくらい相手の防御が優れていたからだ。

「困りました、これではターゲットが絞れませんね。」  
知らないフリをして小竜姫がつぶやくと、唐巢が頷いた。

「魔族の気配を感じる要素は今の所無いですからね。強いて言えば、あの羽を出した少年ですが…。」  
魔装術にしては小さすぎる。そんな力の無い者をスパイにするだろうか。唐巢は首を傾げる。

「今の所会場にも魔族の気配はありません。計画を断念してくれたならいいのですが…。」

その会話をGメンの男はニヤニヤしながら聞いていた。馬鹿め、こちらは情報を掴んでいるぞ。

その通報を受けたのは大分前である。白竜寺の住職から、誘拐された門下生の搜索の依頼を受けた。手続き上は普通に寺を出ているのだが、自分は魔族の女に暗示をかけられていた、と主張するのだ。試しに調べてみた所、確かに寺の坊主たちに術が施されている形跡があった。

寺から消えた三人は日頃から素行が悪かったらしい。魔族の狙いやすい人間だった。そしてその魔族に関する情報は、意外な所から

出てきた。更衣室の隠しカメラである。

坊主の一人が、女性の指導員の着替えを盗撮する為に仕掛けたカメラに、決定的な証拠が残っていた。羽である。

今回のスパイは確実にあの三人だ。そう踏んだ男は、ワザと泳がせ試験を待った。確実に、あの魔族はここに現れる。魔族を殺し、政府の信頼を得るチャンスであった。

「せいぜい踊らされるがいい。」

男はそう含み笑いをして、モニターを眺めていた。そして、その表情を観察する小竜姫。『伝達』の水晶文珠に念を込めて、和樹に情報を伝えた。

会場にはハーピーはまだ来ていない、Gメンの男は和樹の睨んだ通り白竜会をマークしている、と。

『B会場第五試合、吉村ユリ子 対 シャーマン武田 試合開始！』

「頑張れー！ユリ子さん！」

ドンドンパフパフドンドンパフパフ

「かっとなせーユリー子ーなのじゃ！」

観客席から聞こえてくる奇妙な応援に、ユリ子は顔を赤らめながらも手を振って応えた。

VIPルームでのやり取りが行われていた同時刻、会場ではユリ子の第二戦目が始まっていた。相手は半裸、全身に呪文のような刺青を入れた男である。

「これってセクハラじゃないんですか？」

そう思つユリ子。女性に優しくない試験だなあ、と呆れる。

「風のある所に神あり！神のある所に力あり！」

男が詠唱を開始すると、首に下げられたネックレスのような装飾品に靈気が集まって行く。どうやら結界に使つてる靈気を吸い取っているようだ。反則ではないだろうか。

「えいつ」

吸い取られてゆく靈気の中に、靈気弾を幾つか混ぜてみる。勢い良く流れに乗つて靈気弾は相手の首へ向かつて…。

ズガアアアン！

「うぎゃあああ！？」

全弾命中。ひるんだ所に、ユリ子はありつたけの靈気弾を放つた。

ドドドドドドドドドドド！

「うわあああああああ！？」

見るも無残な状態で、男は崩れ去つた。

『勝者、吉村ユリ子選手！』

高らかに告げる審判の声に、ユリ子は万感の思いでガッツポーズ

をする。

「和樹さんの試合に間に合いました!」  
合格よりそっちの方が重要だった。

「凄いです、ユリ子さんって強いんですね。」

「ふむ。これまで殆ど一瞬で終わらせとるからのう。」

二人は、せっかく応援に来たのにすぐ終わってしまったので、ちょっと寂しかった。そんな事を言っていると、席を離れていた魔鈴達が戻ってくる。

「おお、どうじゃった? ピートは無事かえ?」

「ええ、すぐ回復するそうです。」

魔鈴が答える。愛子は泣き疲れたのか少し疲れた顔をしていた。

「残念でしたね、ピートさん。」

おキヌがそう言つと、愛子は静かに首を振った。

「生きていてくれたら、私はそれでいいわ。それだけで、充分なの。」

「愛子さん...。」

皆がしんみりしていると、場内アナウンスが響きわたる。会場が、

不思議なムードに包まれた。今度は何が起きる？そんな期待に胸を膨らませ、観客は拍手を送った。

『A会場三回戦第一試合 芦蛸子選手、犬塚シロ選手はコートに入ってください。』

「来おったぞ。さすがに真剣勝負の後に見るのは嫌じゃのう。」

「うーん、でも応援はしましょうよ。」

シヅモと魔鈴が複雑な表情で見守った。

コートに入る和樹とシロ。シロは敵意剥き出しで和樹を睨みつける。

「手加減はしてやるでござるよ。弱い者イジメは卑怯でござるからな。」

「あら、嬉しいわ。今度は何をして遊ぼうかしら。」

ムッキーン！とシロがうなる。和樹は言いながら、どうも今の自分にはルシオラに引張られているな、と自覚した。彼女なら、言いそうなセリフだった。

『芦蛸子 対 犬塚シロ 試合開始！』

その声が聞こえたと同時に、シロは仮面に手をかける。

「ひとつ、人の男に手を出して…」

「は？」和樹はポカンとする。

「ふたーつ、不埒な破廉恥行為…。」

「……。」ああ、あれね。

「みつつ淫らな悪を斬る！」

言いたい放題だな。

そしてシロが仮面を投げる！ここだ！

「この犬塚シロが…」

パシンッ！ あうっ！？」

まばゆい光が、和樹の手から放たれる！

サイキック猫騙しであった。しかも強力版。霊的防御の無い人間なら失明しかねないレベルである。

「み、見えないでござる！おのれ卑怯な！先生の技を…！」

そこまで言つて、シロは気づいた。

気配が無い！？普通の気配どころか霊的な気配も感じない！二才イまでしない！

「ど、どござるか…？」

刀に手をかけ、五感を研ぎ澄ませる。相手が動くなら、絶対音はする。それを聞き取るしかない。そこへ…。



パンッパンッパンッ！手拍子。

「鬼さん、こちら」

「おのれ女狐えええ！」

激高したシロが、音の方へ刀を振り回す。その時、和樹は刀を見て少し驚いていた。

シロの刀は、かつて自分たちを苦しめた妖刀、八房であった。

「まあ、どうでもいいけど。」

「そこかあっ！」

一振りでも八回斬るといふ八房の連撃をかわし、和樹は手を叩いた。

「手の鳴る方へ」

「うがーっ！」

ビュンビュンビュンッ

虚しく空を斬る。シロは段々泣きたくなってきた。

そして、シロがコートの手元まで来た、その時。

「お尻ドーン！」

「わーーーーー！」

シロのお尻を両手の平で、コートの外に突き出した。

『勝者、芦蛭子選手!』

「ごめんねー!」

和樹は、片手で謝るジエスチャーをする。段々視力の戻ってきたシロは、涙を浮かべながら抗議した。

「卑怯でござる! やり直しを要求するでござる!」

審判は無言で首を振る。

「酷いでござるー!」

とつとつ泣き出した。まるで子供だ。仕方なく、和樹が話しかける。

「ねえシロ、何で私のニオイが分からなかったと思う?」

それを聞いて、シロは泣きながらも和樹の方を見た。

「グスツ… そっいえば、何ででござるか?」

可哀想に、涙でぐしゃぐしゃだ。

和樹は、ハンカチでシロの顔を拭いてあげながら、コートの外に誘導する。

「じゃーん、コレなんだった!」 会場脇まで連れて来てから、和樹は小さな御守り袋を取り出す。和樹が持ち込んだマジックアイテムである。その袋の中には…

『無臭』の水晶文珠があった。

「これは…っ！」

シロが、信じられないような目で和樹を見る。

「まったく、油断する癖直ってねえなあ、シロ。また散歩オアズケするぞ？」

「先生……っ！」

感極まったシロは、全力で和樹に飛びつくのだった。

ユリ子と横島は啞然としていた。

横島は、和樹の戦い方に。あの般若女を、手玉にとって無傷で勝った。どこまで強いんだ、あいつは！？トーナメント表を見ると…ヤバい、準決勝で当たる！勿論いつかは当たるんだろうが、出来れば決勝まで当たりたくなかった！何気に横島、決勝まで残る気満々だったりする。

ユリ子は、試合の後を見て啞然としていた。さっきまで戦っていた相手と抱き合っているのだ！それも、相手の子は抱きつくだけでなく顔にキスの雨を降らせている！何、あれ？和樹さんはそっちの趣味があったの！？あれ、でも本当は男の子なんだよね。あれ？

そんな二人の混乱をよそに、とあるコートでは激戦が繰り広げられていた。

二回戦の最終試合、余りに長すぎて他のコートでは三回戦が始まってしまっていたという、とんでもなくタフな試合。

陰念の試合である。

通常、試合は無制限一本勝負で行われるが、大抵15分程度で終わる。が、陰念と蛮玄人という大男の試合は、一時間が経過しても勝負がつかない。

「くそ、倒れる！何故倒れない!?」

「うるせえ…倒れたくないから、だよ…。」

顔を腫らして、それでもまだ倒れない陰念。ただでさえ前の試合で重傷を負っていたのに、もう意地で立っているのだ。試合を見守る観客からは、ドクターストップさせろという声。しかし、この試験には試合中のドクターストップは無い。

「うぬぬぬ、腕が上がらん！」

攻撃を繰り返す方のスタミナは、とつくにゼロである。元々、この選手は試合開始直後に「これが100%の力だ！」と全力で靈波を出して、ハツタリかまして相手を棄権させる事で勝ってきた男である。そんなに強くないのだ。

対する陰念は、スタミナだけはあるものの打撃力は普通以下。前の試合で怪我を負っているのかかなり弱くなっている。低レベルな試合なのだ。

「た、倒れる！」

男の大振りなパンチをかわす。しかし、攻撃をする体力がない。もう、奇跡が起こらない限り勝つのは無理だろう。観客は皆、痛々しい気持ちで試合を見守っていた。

しかし、奇跡は起きたのだ。

陰念が、最後の賭けに出る。残った靈気を右手に集中して、相手の攻撃を待っていた、その時。視界の端に、二階観客席フロアのドアを開けて入ってくる女性の姿が見えた気がした。

(羽居…さん?)

右手に靈気が収束して行く。

(羽居さん、駄目だ、休んでなきゃ…)

収束された靈気は、右手に手甲のようなものを作り出した。

(俺、大丈夫だから。羽居さんの為に勝つから。だから…)

迫り来る男の攻撃を、身を沈めてかわす。

(そんな心配そうな顔、しないでください…。)

ズガアアアーン!

「ぐあああああつ!」

陰念のアップercutが、蛮の顎にクリーンヒットした。蛮はそのままコートに倒れると、意識を失った。

『勝者、陰念選手!』

観客席から歓声が響き渡る。涙を流す者もいた。

( やりましたよ、羽居さん… )

陰念はそう呟いて、意識を手放した。

「陰念！やったな、陰念！チキショー泣けてきやがった！」

「ちょっと、そんなに揺らさないの、死んじゃうでしょ！」

興奮して陰念の身体を揺らす雪之丞を、慌てて止める勘九郎。そんな勘九郎も、陰念の勝利に胸を熱くしていた。

あれほど棄権しろと言つて止めたのに、言う事を聞かなかった陰念。もしかして、自分に逆らつたのはあれが初めてではないだろうか。死んでも知らないわよ、と突き放しても、全然折れなかった。

「漢に、なつたのね。」

救護班に運ばれる陰念を見ながら、勘九郎は滲む目元を拭うのだった。

そして、そんな感動的な場面に水を差す男が一人。

「会場内を調べる。ハーピーが現れたようだ。」

VIPルームから抜け出した司令官が、無線機を片手に指示を出す。会場に散らばっていた隊員たちの目が、狂気じみた色を帯びていった。

【羽居鳥子】

勝ったじゃん、アイツ。ここまで来るの、大変だったけど…来れて良かったじゃん。魔装術、下手くそだったけど…でも、勝てたじゃん。本当に、良かった…。

もう、羽も出なくなつて魔力も無くなつて…自分には何か出来るのも、さつきで終わりかも知れない。だから、それを知らせないといけないじゃん。あと少し…頑張ってくれじゃん、身体！

階段を下りるのが、辛い。関節に、鈍い痛み。もう身体を維持出来なくなつてる？いやじゃん、そんなの！つたえなきやいけない事があるのに！途中、何度か転げ落ちる。その度意識を失いかけるけど、何とか立ち上がった。ふらふらしながら、廊下を歩くと…

あつたじゃん、医務室！

あそこに、陰念がいる！早く伝えないと…

タンッ！

……………え？ 何じゃん、今の音…。

力が抜けて…駄目じゃん、そんな。

陰…念…が…

【羽居視点終了】



## 第二十八話 陰謀と対策のはなし

医務室の冥子は、二戦続けて重傷を負った陰念の治療に専念していた。十二神将の一体、シュウトラのヒーリングで陰念の傷を治してゆく。

ヒーリングを施しながら、冥子は不思議に思っていた。何故こんなになってまで戦えるんだろう。一戦目でさえ普通なら起き上がれないほどの怪我を負っていたのに。自分なら、一週間はメイドに甘えきりな生活を送っていただろう。

「う…ああ、羽居さん！」

突然、目を見開く陰念。周囲を見渡し、ここが医務室だと悟る。

「駄目よ、まだ治療中なんだから。」

「うるせえ、もう大丈夫だ！」

そう言っただけでベッドから起きる陰念。他の怪我人の治療に当たっていた医者も何事かと駆け寄ってくる。

そこに、廊下から奇妙な音が響いて来た。

タンツ…という、乾いた音。

「！」

陰念は胸騒ぎを覚えて、駆け出す。医者の制止を振り切ってドアを開けると、そこには…。

「は…羽居…さん？」

女性が一人、倒れていた。胸から、赤い液体を流して…

「きゃあああああ！」

ナースの一人が悲鳴をあげた。

「動くな！」

そこへ、威圧的な声が響く。

見ると、倒れた女性を遠巻きに取り囲むように、男たちが銃を構えていた。

「てめえら…何しやがった！」

陰念の言葉に、にやついた笑みを浮かべる男たち。

「何って、魔族を撃つただけさ。市民の安全を守る仕事だよ。」

陰念がハーピーと繋がっているのを知っているせいか、挑発的な言い方をしている。

「んだとお！」

ジャキツ！一斉に銃を構えるGメンたち。銃口は陰念に向けられていた。

「そいつも仲間だ。拘束しろ。抵抗するなら撃ち殺せ。」

「ふざけんなあ！」

睨みつける陰念に、容赦なく向けられる銃口。そして、放たれる銃弾。

ダンッダダダンッダダダダッ！

それを、全て受け止める霊気の壁。

ガガガガガガガガガッ！

「お前ら何やってるのか分かってるのか？」

「物騒極まりないでござるな。」

煙幕が解けて視界が戻ると、そこには赤いドレスの女性と、着流しの女性の姿。二人は、羽居と陰念を庇うように立ちふさがっていた。そして、周囲には靈気で出来たドーム。銃弾は全て、そのドームに食い込んだまま空中で停止している。

「き、貴様！」 指示を出した男が、着流しの女性の尻尾を見て叫んだ。

「獣人！ 魔族の仲間だ！ 撃ち殺せ！」

その言葉に反応するGメンたち。しかし、それ以上に早く反応した人間がいた。

『戻』 和樹の文珠が光を放つ。空中の弾丸が、一つ残らずGメンたちの銃口へと戻って行く。そして…

ズガアアアン！

Gメンたちの銃が爆発した。

「き、貴様らああ！」

「まったく、何の罪も無い人間に何してんだお前は。」

そう言う和樹に、男はヒステリックに叫ぶ。

「貴様こそ正気か！？ ソイツは魔族なんだぞ！ 貴様も魔族の回し者

か！」

「はあ？人間じゃねえか、コイツ。」

和樹が文珠で羽居の怪我を治しながら言う。魔力は感じない。普通の霊気だけだ。

「う、嘘をつくな！証拠だってあるんだ！」

そこに、通報を受け駆けつける小竜姫と西条、唐巢神父。美智恵の姿もある。

「あなたは…！何故医務室の前で銃撃などしたのです！」

小竜姫が男を責める。

「うるさい！市民の安全の為だ！こいつらが邪魔しなければ仕留められたんだ！」

「拘束せよ、という作戦のハズですよ！勝手な行動は慎んで下さい！」

「黙れ！ここは人間界だ！我々のやり方でやる！」

そのやりとりを、周囲の人間は啞然として眺めていた。この男は異常だ。

「一般人を殺しかけて市民の安全とか、とち狂ってるよな、オッサン。」

「一般人？」

和樹の言葉に反応したのは、西条である。

「ああ。靈氣に魔力は混じっていない。人間だよ。」

「でたらめを言うな！白竜寺からの資料にあっただろう！あの鳥獣人がこの女だ！」

男が西条に叫ぶが、西条は不思議そうな顔をする。

「白竜：ああ、あの盗撮で立件された寺ですか。あそこの資料？盗撮の証拠ですか？子供の。」

「……何？」

男の動きが止まる。

「あの、保護していた子供たちの着替え写真を盗撮して売っていたという件でしょう？」

西条の言っていることが、分からない。男は混乱しながら西条に確認する。

「ハーピーの画像があっただろう！それがこの女だ！」

「女性が寺に居るわけないでしょう。現に、そんな画像ありませんでしたよ。」

男の中で、何かが切れた。

「この阿呆が！もういい、私がトドメを刺す！」

そう言ってホルスターから拳銃を抜こうとする男。その瞬間、唐巢と美智恵の神通棍が男の首の前で交差する。

「しまつてもらいましょうか。」

「罪の無い人間相手に銃口を向けるのは、犯罪ですよ。」

「！」

追い討ちをかけるように小竜姫が言い放った。

「今回の作戦の、Gメン側の最高責任者は西条さんとあります。勝手な真似は慎んで下さい。」

「ぐっ……」

男は西条を睨むが、西条はニコニコと笑っただけだ。馬鹿にされている。

「覚えておけ、今回の件は大問題になるぞ！」

その言葉に、西条が答えた。

「ええ、そうですね。勝手に作戦に介入したうえに人間相手に発砲して、施設にも被害を与えたのですから。」

西条の言葉に顔を真っ赤にしながら、男は逃げるようにその場を後にするのだった。

和樹は、男が消えるのを確認してから、医務室で怯えるナースたちに言った。

「怖いのは分かるけど、この人たちを治療してやってくれ。」

「は、はい！」

医務室に運ばれてゆく羽居と陰念を見ながら、和樹は一段落ついたと胸を撫で下ろしていた。これで、人間側の強硬派勢力はお終い

だ。

「和樹さん、一体どういう事ですか？」

小竜姫の質問は、その場にいた人間の共通の思いであろう。和樹は皆をラウンジに集めて説明を始めるのだった。

オカルトGメンから美智恵が外れたのを知った和樹は、ヒヤクメに頼んで前後関係を調べてもらっていた。そこで浮上してきたのが、長嶋幸三郎。先ほどの男である。

オカルトGメンは日本の一部勢力にとって厄介な存在であった。妖魔の根絶を表立って謳い、実は裏で妖魔の金銭売買を行うという犯罪を犯す連中。そう、南部グループに代表される犯罪集団と繋がりのある勢力である。

オカルトGメンを掌握してそうした勢力と結びつく…長嶋にとって、それは大きなビジネスチャンスであった。政府との関係強化、自身の趣味である妖魔殺しとハンターの育成、妖魔売買での金儲けの為に早期に実現したかった。そこに、今回の作戦である。利用しない手は無かったのだらう。魔族を殺し、政府からの信頼と実績をあげるチャンスであった。

そうした情報を得た和樹が次に行ったのは、スパイを送り込む魔族の特定。藤姫の予想に賭けてハーピーを調べてみたら、一発でピングである。そして、白竜寺も予想通りに関係していた。じゃあ、早めに潰そうかと思っていた矢先に、一人の男から連絡があったのだ。芦優太郎である。元々、女になった時の戸籍を作る時に色々連絡を取り合っていたのだが、やたらと良いタイミングで連絡が入って警戒すると、予想通りGS試験の事であった。

話によると、芦の所で世話している魔族が、今回のスパイ騒動の原因であるらしい。もう悪さはさせないし、ハーピーは純粹に指導しているだけなので見逃してやって欲しい、との事。白竜寺の問題点や三人の孤独などの事情を知った和樹は芦に全て任せてこの件から手をひく事にした。変わりに和樹が警戒していたのが、Gメンである。

急遽責任者になった西条の素性を調べてみると、すぐにおかしな事に気づいた。イギリスの魔の森で行方不明になった後、何故か発見救助された五日後には日本のGメンのメンバーに選ばれている。ここに不自然さを感じて芦の所の魔族に確認を取った所、またもやビンゴ。西条は魔族と協力して、妖魔に対する人間の犯罪行為を撲滅させる為に日本のGメンに潜入していたのだ。

今回の作戦は、妖魔を狙った犯罪をしている連中と、妖魔共存派の戦いでもあった。

西条たちが具体的に何をしていたのかは分からなかったが、先ほどのハーピーの身体を見て和樹は理解した。ハーピーは完全に人間になっていた。つまり、あの男をハメて社会的な信用を無くし、Gメンの妖魔ハンターをも一斉処分しようとしたのだろう。あの状態で会場に来てしまったのはイレギュラーだっただろうが。

ハーピーの写真といわれる盗撮写真は、既に西条らの一部の人間に消されていた。寺の坊主の犯罪を立件した際に消したらしい。そこから辺は芦の指示のようだ。他にも色々暗躍していたらしいのだが、今関係あるのはこれくらいだろう。

「今回の件では、言ってみれば悪意の無い魔族を人間から守る、という方向から動いてる人たちも居たんです。」

和樹の説明は西条が所々補足したものの大体においてその通りで



あった。西条は和樹の捜査力と人脈、観察眼に驚いていたが、事前に芦から『協力者』と聞いていたので納得していた。

「あなたが魔族と繋がっていたとはね。」

美智恵は内心シヨックであった。魔族に狙われた経験がある為、西条の行為を裏切りのように感じてしまっていた。

「ええ、遭難している所を助けてもらいました。それから、なんと  
言うか：仲良くさせてもらっています。」

少し困ったような、照れたような表情。女の勘で、色仕掛けにやられたな、と判断する。

「彼女は人間なんだね？なら、今回の作戦はどうなるんだい？」

「勿論、GS試験会場の警備だけになります。魔族のスパイなんて元々存在しないんですから。」

唐巢の質問に明確に答える和樹。小竜姫も頷いた。

こうして、スパイ騒動は一端の終着を迎えるのだった。事の真相を知った皆は、それぞれの持ち場に戻って行く。

「小竜姫。」

その背中に声をかける和樹。

「なんででしょう。」

「怒ってる？」

すると、小竜姫はちよつと拗ねたような表情をした。

「いいんです。私には演技なんて出来ないし、知らないほうが上手

く行きますよね。」

「やっぱり怒ってる。」

可愛くプイツと横を向く小竜姫に困ったフリをする和樹。勿論お互い本気ではない。前の世界ではよくやっていた会話だった。

「そこでき、最後に小竜姫にやってもらいたい事があるんだけど…。」

「

「私なんかがお役に立てるのでしたら何なりと」

ちよつと本気で拗ねてるかもしれない。

「白竜寺の三人の後見人の件なんだけど…」

和樹の心配は、三人である。もし白竜寺の住職らが後見人を取りやめるなどと言ってきたら、三人の資格は取り消しとなるだろう。あの長嶋という男は絶対に何か仕掛けてくる。そのターゲットに三人が選ばれる可能性は高かった。

「ああ、それなら私も確認しましたが、あの寺の住職ではありませんでしたよ?」

「は?」

目が点になる。やっと仕返しが出来るとニコニコしながら小竜姫は後見人の名前を告げる。和樹はその名前を聞いて、悔しそうな声を上げた。

「結局、また負けたわけね。」

その名前は、芦優太郎。

先の先まで手を打っていたのだ。

医務室では、陰念が冥子の式神にぐるぐる巻きにされていた。蛇年を司る、サンチラである。

「いや、もう逃げねーから！離して！」

「駄目よ、絶対安静にしてなきゃいけない身体なんだから。」

陰念は思う。こんな状態で安静にしてられるか、と。

うなづねと巻きつくサンチラとベロベロとなめてくるシユウトラに弄ばれて泣きそうになっていると、隣のベッドで眠っていた羽居が目を覚ました。

「じ、じいは…？」

「羽居さん、目が覚めたんですね！」

その声に、羽居がハツとする。陰念！良かった、生きていた！

「陰念、無事じゃ……わーっ！？」

そりゃ驚く光景である。

「羽居さん、羽居さん！わかりますか、陰念です！」

「怖いじゃん！そこまで変化するなんて予想外じゃん！」

魔装術と勘違いしていた。

何とか冥子がサンチラとシュウトラを離すと、陰念は羽居に駆け寄った。落ち着いた羽居は済まなさそうに陰念を見る。

「もう、私に力は無いじゃん。だから、試合には出ないで欲しいじゃん。」

「試合？」

陰念が今更気づいた。試合。自分は二回戦も勝って、次の試合の為に回復していたのだ。もし試合に出れないと…

「あ、俺、試合に出ないと失格になっちまう！」

焦る陰念。その様子を見ていた医者が、陰念に告げる。

「君は私の判断で棄権にさせてもらったよ。ドクターストップだから、資格は剥奪されない。合格おめでとう、陰念君。」

「え……。」

言われた事の意味が分からずボーっとする陰念に、羽居が興奮気味に声をかけた。

「良かったじゃん！もう戦わなくていいじゃん！陰念、合格したじゃん！」

「え？え？……合格？」

「そうじゃん！頑張ったじゃん、陰念！」

羽居が、感極まって陰念に抱きついた。それにしどろもどろになる陰念。冥子はそんな二人をキラキラした目で見ていた。

「何だか映画のワンシーンみたいじゃ〜ん。」

口調がうつっていた。

同時刻、某ホテルの最上階の一室で、とある大物政治家と三人の人物が密談を行っていた。

「以上が、会場の集音マイクと監視カメラで得られた証拠です。手元の資料の信憑性は裏付けられましたよね〜？」

間延びした声とは裏腹に、目つきは鋭かった。

「ナルニア、ザンスでも、日本の犯罪組織による妖魔の密猟は問題になっていきます。このままでは国際問題に発展しかねません。」

隣の男も強く主張した。その妻らしき人物は黙って政治家の男の顔を見つめる。

「ふーむ、よくここまで集めたもんだな。」

そう言っつて、資料に目を通す男。鋭い眼光を放つ。

「分かった、この問題はこっちで処理しよう。こいつらは別口でも名前が拳がっているから、そろそろまとめて潰しておこうと思っっていたんだ。」

「お願いしますね、先生。」

女性が初めて口を開く。

「恩人の頼みとありやあ断るわけにもイカンだろう。また大船に乗ったつもりでドーンと構えてな。」  
ニカツと笑う男。

そんな光景を見つめながら、夫は今まさに戦っているであろう息子に思いを馳せていた。

（忠夫、頑張れよ。）

男の名は横島大樹。横島忠夫の父である。妻の百合子と六道冥菜を伴って、デタント肯定派の人物議員の下に相談に来ていたのだ。自分の仕事先であるナルニア皇国の王からの依頼も兼ねて、一時的に帰国していた。

そして、その相談相手は時期総理候補とも目されている人物。大樹は、持てる人脈全てを使って息子を守ろうとしていた。息子の試験の邪魔は、誰にもさせない。

…ちなみにこの議員。後に総理となり横浜の街を舞台に壮絶なバトルロワイヤルを繰り広げるのだが、それはまた別の話である。

## 第二十九話 激闘のはなし

横島とユリ子はラウンジでウンザリした顔をしていた。理由は別だが二人に共通した思い。それは…解決したなら帰してよ、である。

スパイの話がガセネタだったと聞かされたからと言って、二人の気持ちが出来なくなったわけではない。どんどん強くなる対戦相手。合格したなら別に帰っていいじゃないか、と考えるのは自然な流れである。

その思いは、横島の方が強いかもしれない。とうとう準々決勝。相手はこれまで正攻法で勝ち上がってきた伊達雪之丞である。いや、これはまだマシだ。これに勝った後がマズい。和樹なのだ。

和樹は、あの後も奇想天外な勝ち方で準々決勝まで勝ち上がっていた。突然相手と二人でジャンケンし始め、相手は「ち・よ・こ・れ・い・と！」と叫んで場外へと飛び出してしまった。幻術…その恐ろしさを垣間見た。あんな負け方、恥さらしい所である。

その次の試合は、相手が棄権して不戦勝。当たり前だ、もう和樹が弱いだなんて見方をする人間は居なくなっていた。しかし、棄権した人間に向けられたブーイングは凄まじかった。会場は、明らかに笑いを求めている。その期待を裏切った選手には敗北以上の責め苦が待っているのだ。

ユリ子は、それとは違って純粹に帰りたいかった。相手はむさ苦しい男ばかり。早く終わらせる事しか考えず速攻で霊気弾を連射してたら簡単に勝ててしまっていたのだ。次の相手はまたもや男。それも、滅茶苦茶強い。

その男の三回戦、ユリ子には直視に耐えない試合となった。凄惨だった……と言えば凄惨だったかもしれない。男は執拗に寝技に持ち込んで長髪の男の身体を撫で回していた。

「いややー！こんな試合はいやー！」

審判に泣きつく関西弁の男。胴着ははだけ、顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。戦意喪失で、ギブアップ扱いとなった。

「あれって、捕まらないのかしら？」

和樹に襲いかかって逮捕された男を思い出す。あれが逮捕ならこれも逮捕でしょ？納得がいかない。とにかく、その男と次の試合で当たってしまう。棄権したいが、タイガーやピートのように資格を取れなかった仲間や応援に来てくれた皆を思うと出来なかった。

時間は、時として無情だ。

『C会場準々決勝、吉村ユリ子 対 鎌田勘九郎 試合開始！』

審判が、容赦なく声を張り上げた。

「私は男の子にしか興味ないの。さっさと終わらせてあげるわ。」

「奇遇ですね。私も女の子にしか興味ありません。」

「あら、気が合うじゃない。」



「まったく。」

何気ないユリ子の爆弾発言の後、二人は距離をとるようにジャンプする。ユリ子にとっては、自分に向かって来ない相手は初めてである。

勘九郎は、ユリ子の能力を正確に把握していた。遠距離攻撃に特化したスナイパー。でも、実際は近距離でも隠し種を持っているだろう。でなければ、あんなに冷静に自分に突っ込んでくる相手を撃退出来ない。ここまで勝ち上がってくる人間が、なんの対策も練っていないハズがないのだ。

「行くわよ！」

勘九郎が腕を振るうと、巨大な霊波がユリ子に放たれる。それを、横っ飛びして何とか避ける。

「くっ！ 凄い霊気……っ！」

「ほらほら、どんどん行くわよ！」

その位置から動かないまま、勘九郎は両腕を交互に振るった。

ゴアアアアツ！ ゴアアアアツ！

それを、必死に左右に飛んで避ける。反撃の体勢に中々移れない。

「きゃっ！」

足がもつれ、転ぶユリ子。万事休すである。

「せめてその可愛い顔を傷つけないようにしてあげるわ。」

勘九郎の霊気が膨れ上がる。そして、合わされた両手から特大の

霊波が放出された！

ドガアアアアンツ！

ユリ子の姿が、霊波の塊に飲み込まれて行く…。

「ユリ子さは一ーンっ！」

観客席のおキヌが絶叫する。ユリ子の居た位置は今では煙に包まれて見えなくなっていた。

「何が顔を傷つけないじゃ！アレでは消し飛んでしまっわ！」

シツモも涙を浮かべ叫ぶ。…しかし、魔鈴だけは落ち着いて試合を見ていた。

「見て下さい、上です！」

指差す先は、コート上空。宙を舞うユリ子の姿があった。

「な、何で!？」

勘九郎は困惑する。あの女にこんな跳躍能力は無かったはずだ。

なのに、何故？

答えは簡単である。ユリ子は、勘九郎の「顔は傷つけない」という発言から、下半身かその手前に霊波をぶつけ爆風で場外に吹き飛ばすつもりだと見ていた。そこで、霊波が直撃する直前に真下に両手を広げ霊波をジェット噴射、真上に回避する。爆風はユリ子を猛

スピードで上空へ吹き飛ばし、勘九郎の視界から消える事に成功したのだ。

「でも甘いわ！空中じゃ身動きとれないでしょ！」

「必要ありませんからね。」

ユリ子は手を広げ、指先を勘九郎に向ける。そこから、細かい靈気の粒が勢い良く噴射される。それはさながら霧のようにコートを埋め尽くした。

「こ、これは…！？」

勘九郎が困惑しているうちにコートに着地するユリ子。ゆうに20メートルはある高さから、無傷で着地する。靈気コントロールによる身体強化に加え、結界内が靈的攻撃でしかダメージにならないからこそ、出来た離れ業であった。

ユリ子はすぐさま勘九郎から距離を取ると、指をパチンと鳴らす。

バアンツ！

「きゃっ!?!？」

勘九郎の腕付近の霧が爆発した。大したダメージにはならないが、威嚇程度にはなった。この技は、妙神山でピート相手に模擬戦をした時に和樹から教わった技だったりする。霧になったピートに手間取っていた時に、「ならもつと沢山の霧で包んじゃえ！」とアドバイスしてもらったのだ。それ以来、ピートから少し距離を置かれたりしている。圧倒して勝ってしまったから、プライドを傷つけてしまったらしい。

「やるわね！貴女を軽く見ていたのは失礼だったみたい。」

「いえ、ずっと軽く見てくれていいんですよ?」

「まさか。本気で行くわよ!」

内心、しまったなあ…と後悔するユリ子。なんで今日に限って頭の回転が早いのか。これが学校のテストの時なら良かったのに。

勘九郎の両腕が光を放つ。そして、その両腕を広げると空中に無数の霊気ね球を作り出した。

「霊光舞踏術：こんな所で使う事になるとはね。」  
そう言っただけ勘九郎はその場で身体を回転させた。舞うように腕を振り回すと、霊気の球も動きに合わせて猛スピードで勘九郎の周囲を飛び回り始める。……それはまるで霊気の嵐。ユリ子の撒いた霊気の霧は、瞬く間に消し飛んでしまった。

「そんな…。」

自分の技を簡単に破られてショックを受ける。ここまで強いのか、この男は!

「さあ、覚悟しなさい!」

勘九郎が力いっぱい腕を振るう。霊気の球はまるで壁のようになってユリ子を襲った。

「まだ…っ!」

ユリ子は勘九郎の向かってくる方向にジャンプして転がる。勘九郎の腕と霊気球の隙間に飛び込んで回避したのだ。トドメを刺そうとして大振りになった勘九郎の失敗である。

「うわあああああ！」

ユリ子は叫び声を上げながら、両手を勘九郎に突き出す。そこから放たれる全身全霊の霊気弾は、今大会でユリ子が見せる最大の量であった。霊気のマシンガンを、至近距離で放ったのだ。

ドガガガガガッ！

「ぐああああっ！」

勘九郎の巨体が、空中に吹き飛んだ。しかしユリ子は攻撃をやめない。それは恐怖心からである。今攻撃をやめたら、絶対やられる！霊気を放ち続けるユリ子。限界はとうに超えていた。目が霞んでくる。

ズガガガガガッ！

「ぐっ、ぐあああああ！」

勘九郎はコートに落ちるまでマシンガンを受け続け、着地体勢もとれないまま地面に叩きつけられた。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

霞む目を必死に開けて、ユリ子は勘九郎の落下した場所を睨みつける。そして……

『場外！勝者、吉村ユリ子選手！』

会場は大歓声に包まれた。

あれ、私勝ったの？ユリ子は審判の声に力を抜く。その場に座り込むと、それまで堪えていた恐怖が蘇ってきた。

「う、うう…怖かった…」  
身体を抱きしめ震えていると、近寄ってくる影が。

「何が怖かった、よ。貴女の方が何倍も怖いわよ。」

勘九郎である。実際はそんなにダメージを受けていなかった。あの叫び声は、空中に飛ばされた時に「このままでは場外に落ちる！」と焦って出てしまった言葉である。

「うわっ、全然効いてないんですね…。」

「でも、負けは負けだわ。自分の技にあんな弱点があったなんて知らなかったし。勉強になったわ。」

そう言っつてユリ子に手を差し伸べる。ユリ子はその手をとると、震える足に力を入れて立ち上がった。

試合前までは気持ち悪がっていたのに、今ではこの男に好感さえいだいていた。

試合を間近で見っていた雪之丞は、勘九郎の戦いを見て苦々しく思っていた。油断さえしなければ勝てたのだ。とつくに追い抜いていたとは言え、かつて自分が全く歯が立たなかった男が、相手に一撃も当てられずに負ける。いい気分はしなかった。

「しかし、あの女も大したもんだぜ。」

一撃もらえば即アウト、そんな薄氷を踏むような戦いをしてここまで勝ち進む…彼女の今までの相手は決して弱い相手ばかりではなかった。実力は本物だ。雪之丞は、心の底からこの大会に参加出来た事に感謝する。自分の求めていた戦いが、ここにはある！

「おかえりなさい、吉村さん。よく頑張りましたね。」

和樹がユリ子を労うと、ユリ子は疲れたような表情をしたまま微笑んだ。言葉使いがお嬢様なのは、勘九郎も一緒だった為だ。手を引く勘九郎が、心配そうに和樹に告げる。

「この子、霊力が枯渇しちゃってるの。次の試合、棄権させた方が良くない？」

初めて聞くお姉言葉にギョツとなった横島だったが、ユリ子の体調を心配して顔色をうかがう。少し青ざめていた。

「わ、私は大丈夫ですよ！」  
空気が痛々しい。和樹はやれやれとため息をついて、ユリ子の手をとった。

「え？」

「吉村さん、ちょっと我慢して下さいね。」

和樹はユリ子の手を自分の胸に当てると、目蓋を閉じて全身の霊気を練って、ユリ子の身体に注ぎ込んだ。

「きゃっ、これは…!?!？」

ユリ子の身体が淡い金色の光に包まれる。みるみるうちに顔色が良くなり、身体に力が漲ってきた。

「ワタクシの霊気を分け与えたのです。これで大分回復したハズですよ。」

「ええ、なんだか包まれているようで、幸せです。愛情一本って感じです。」

それは違っただろ、と横島が心の中で突っ込む。勘九郎は微笑ましそうに眺めていた。

「でも、そんな力があるのに何故普通に戦わないのかしら？」

勘九郎の疑問に、和樹は何でもないと応える。

「だって、それではつまらないじゃありませんか。」

笑顔でそう言う和樹に勘九郎も呆れ笑いをする。それに文句を言うのは、横島だ。

「あのな、俺、もし次勝ったらお前と当たるんだぞ。頼むから、普通にしてくれよ……。」

嘆く横島。

「アナタは次の試合の事を考えなさい。相手の伊達さんは多分今大会で一番まともで強いから。」

「あら、分かっているじゃない。」

和樹の言葉に気を良くする勘九郎。仲間が褒められて悪い気はない。

「アナタも本当はもっと強いでしょう？ 私のお友達を傷つけないでくれて、ありがとございます。」

丁寧に頭を下げる和樹。勘九郎は、和樹を見直していた。



（ただの馬鹿女じゃなかったのね。霊能力も桁外れだし、観察眼もある。人間界最強と書いてあったのも、今なら頷けるわ。雪之丞、アンタ次で負けた方が幸せかもよ？）

コートへと意気揚々と向かう雪之丞を見ながら、勘九郎はそう呟くのだった。

「小竜姫様、吉村さんはどんな修行をしたのですか？」

VIPルームで試合を見ていた唐巢が尋ねる。かつて、自分はユリ子の出場を無茶だと言っていた。それが、ここまで戦えている。素質を見抜けなかった自分の至らなさを恥じると共に、小竜姫の指導力に驚いていた。

「ユリ子さんは、今が成長期ですからね。ひたむきに努力して何があっても挫けない、そんな心の強さも兼ね備えています。こうなるのは、自然な事なのですよ。」

そう言う小竜姫だって、内心では驚いているのだ。前の自分だってユリ子が受験すると聞いて驚いていた。きっと、今の自分がその場においても同じリアクションをするだろう。

ユリ子には、横島のような飛び抜けた才能は無い。しかし、霊気のコントロールだけは基準を超えていた。そこを、徹底的に鍛え上げたのだ。そして、その能力を応用する技を教えたのは和樹である。結局、自分の指導だけではここまで成長させる事は出来なかった。

「次は、横島君ですか。彼も、強くなった。若い子がどんどん自分を追い抜いて行くのは、見ていて少し切ないですよ。」

「まさか。貴方は今でも充分一線で戦えるではありませんか。」

「いやあ、齢ですから…。」

薄くなった頭をポリポリと掻きながら、少し寂しそうな表情をしていた。

確かに、横島やユリ子は人間界でも有数の実力者となっている。しかし、GSとして社会で生きて行くなら話は別だ。やはり今でも親父や美智恵たちは業界を牽引する実力者であり、若手を導く偉大な先駆者であった。小竜姫は、唐巢の自分自身への過小評価を残念に思いながらも、優しく声をかける。

「貴方は私の弟子です。迷ったら、いつでも妙神山に来てくださいね。」

「ははは、ありがとうございます。」

そんな和やかな会話をしていると、スピーカーからアナウンスが聞こえてきた。二人の目がモニターに向けられる。若き才能が、今激突しようとしていた。

『B会場準々決勝、横島忠夫 対 伊達雪之丞 試合開始!』

「行くぜ、横島！」

「来なくていいけど！」

ガシィッ！ 互いの拳がぶつかる。霊気を飛び散らせ、二人の身体が交錯した。

ドガドガドガドガ！

叩きつける拳。互いの霊気を削りあう。驚くべき事に、横島の拳と雪之丞の拳は速さも重さも全く同じ。まるで鏡合わせの戦いであった。

「やるじゃねえか！」

「そうでもねえよ！」

横島がそう言いながら腹から霊気弾を発射する。拳に気を取られていた雪之丞は不意をつかれてまともに食らった。

「ちっ、セコい真似しやがって！」

そう言って距離をとる雪之丞。すぐに体勢を整える。

「照れるじゃねーか、褒めるなよ。」

「褒めてねえ！」

雪之丞が全身に霊力を込める。すると、みるみるうちに全身を物質化した霊気の装甲が覆った。魔装術である。それは何だか、甲殻類を思わせるビジュアルであった。前の世界でも魔装術を使っているのだが、比べると霊気の密度は段違いに高く、装甲は目映い光を放っていた。それは、契約者がエネルギー結晶体を適合させたメフイストだという事に起因するのだろう。

「俺は誓った！死んだママの為にも、強くなるってなあ！」

「そ、そーか、凄いな。そんな海老みたいな格好して公衆の面前でマザコンアピールとか、俺には真似できん！」

「んだと、コラア！」

飛びかかってくる雪之丞。先ほどとは段違いに速い！横島は焦りながらも靈気の壁を張って攻撃を防ぐ。

ドガドガドガドガ！

繰り返される拳が壁を破壊して行く。パキン、パキンと六角形のカケラとなって砕けてゆく壁。

「おらおら、どうした！？守ってばかりじゃ負けちまうぜ！」

「お気遣いどうも。でも、お前も油断してたら昔みたいに負けちゃうぞ？」

「何！？」

その時、雪之丞の身体を無数の拳の雨が襲いかかった！

ダダダダダダダッ！

「ぐあああああ！？」 たまらず後退する。速い！魔装術で強化した自分より速い！？混乱する雪之丞は、横島の姿を見て更に困惑した。

「てめえ！？」

「行くぜ、ダテ・ザ・キラー。浪速のペガサス舐めんなよ？」

そこには、自分と同じように靈気の装甲に身を包んだ横島の姿。装甲は白く輝き、背中には美しい翼が生えている。そう、その姿はペガサス。瞬速のペガサスが、そこにいた。

「な、なんなワケ？」

「うわあ、横島君カッコいいよう！この間一緒にビデオ見て、あの格好してくれたんだよ！」

美神が興奮気味に話す。それを聞いて、エミは呆れて笑う。

「ああ、あれね。十二星座の。」

「カッコいいよう！カッコいいよう！」

もうはしゃぎまくりである。本当に成人式迎えたのか、この子は？

それにしても、あの装甲。二人共普通に纏っているが、あんな事出来る人間なんて、世界にどれくらいいるだろうか。10人いれば良い方じゃないか？エミは大会のレベルの高さに驚いていた。外見に惹かれてピートに注目した時、彼が今大会の優勝者になると思っていたのに…。

「まったく、こんな戦いされたら、GSのイメージがおかしくなるワケ。」

とうに和樹のせいでおかしくなっているのだが、確かにこの戦いも相当におかしかった。

「オラァ！うなれ拳！燃えろ小宇宙！」

そんなものではありません。

「セブンセンスズに目覚めた俺にそんなもの効くか！」

へんな薬キメてませんか？

「海老ラ・ストリーム！」

「ペガサス妄想拳！」

技の名前を叫ぶのは、お約束。

元ネタとなったアニメが流行った当時、小学生たちの間でこうした遊びが流行っていた。しかし、二人は高校生くらいの年齢。いい歳してゴッコ遊びかよ…と思うなかれ。何故なら二人は霊能者。はた迷惑な事に彼らは…

実際に技を繰り出してしまうのだ。

ズガアアアアアン！

会場の空気が震える。二人の小宇宙：いや、霊気がぶつかり合った衝撃である。観客は思わぬ技のぶつかり合いに異様な盛り上がりを見せていた。

「てめえ、思い出したぞ！あの時の借りは返してやる！」

「銀行口座をお願いします！」

ガスツ　パキツ　ドカツ　バシツ

「食らえダテ・エクスキューション！」

「させるかpegasus労災アタック！」

ズバアアアアアッ！

目映い霊気の光が会場を照らす。アホみたいな戦いだが、発せられる霊気は恐ろしい量である。気づけば、結界スタッフ達がコートを取り囲み必死で結界を維持していた。スタッフ達は泣きそうな顔で二人を見ている。早く終わってくれ！

横島の繰り出す拳は正確に雪之丞の身体をとらえ始めていた。遊んでいるように見えて、実は横島は雪之丞の弱点を探っていたのだ。雪之丞は、死角からの攻撃には敏感に反応するが、見えている場所からの攻撃には素直に反応してしまう。つまり、フェイントに引っかかりやすい。

「モザイク修正拳！」

パキツ！

「キックじゃねえか！」

段々と疲れが見え始める雪之丞。焦ってきていた。魔装術を維持する靈気も、切れてきたようだ。

「次で終わりにしてやる！」

雪之丞は賭けに出た。魔装術を解いて、全靈気を拳に集中する。まるで、小さな太陽のように光を放った。

「ああ、終わらせよう。」

横島も、同じように靈気装甲を解いて拳に靈気を集中する。こうしたノリが好きなのだろう。

「おらああああああ！」

「うおおおおおおお！」

ドガアアアアアアアアンツ！！

凄まじい光に包まれる。

コート周囲に居たスタッフが、吹き飛ばされた。しかし、前もって駆けつけていた唐巢、小竜姫、和樹らの張った結界が靈気を押し留める。

会場からは、コートの中の様子が見えなくてどよめきが起こっている。でたらめだ。

そして、立ち込めるモヤが晴れて行き…。



『勝者、横島忠夫選手!』

そこには、無傷で立っている横島の姿。割れんばかりの大歓声中、自身の手を見つめてため息をついていた。

「ふう……やっぱりコレ、俺が出してたんだな。」

そう言いつつ、手のひらの上の『反』文珠が、音も無く消え去った。

### 第三十話 パンティ、ボンテージ&チャンピオンのはなし

今、ユリ子は混乱中である。

何故、こんな事がおきてしまうんだろう。モニターを見て啞然としていた。

そこに映し出されているのは横島の試合ではない。自分が次に当たる相手が決定する、D会場の準々決勝である。そこには、倒れ伏して身動き一つしない二人の男の姿。

『マック怒鳴度選手、ミスター土宇夏選手、両名試合続行不可能とみなし、この試合を引き分けとする!』

「ふ、不戦勝!？」

ラウンジで思わず声をあげてしまう。自分が、決勝戦…。こんな展開になるなんて思わなかったユリ子は、呆然とするしかない。

「良かったわね、決勝進出おめでとう。」

そんなユリ子に声をかける人物。勘九郎である。隣に、なにやら目つきの悪い男と綺麗な女性を連れていた。

「あ、ありがとうございます。」

とりあえず礼を言う。しかし、顔色で心境はバレバレのようだ。

「ふふふ、そりゃ次の相手がどっちも無茶苦茶だから、気も滅入るわよねえ。」

「え、ええ。身内だからまだ気楽ではあるんですけど…。あ、座りますか?」

そう言つと、女性が口を開いた。

「いや、これから医務室にお見舞いに行くからいいじゃん。決勝、頑張るじゃん。」

「うちの勘九郎を倒したんだ。無様な負け方すんなよ?」

「こら、プレッシャーかけてどうすんの!」

パコツと目つきの悪い男を殴る勘九郎。ユリ子に手をふると、二人を引き連れてラウンジを出て行った。

「そう、ですよ…。勘九郎さんの分も、頑張らなきゃ。」

正直言つて、和樹も横島も当たりたくない相手である。どちらに転んでもとんでもない展開になるのだ。強いて言えば、和樹の方が気を使ってくれるから怪我の心配はない。恥ずかしい思いはするかもしれないけど…。横島も優しいが、怒ると見境なくなるので、怖かったりする。

「和樹さん、頑張つて!」

今まさに戦おうと対峙する二人をモニターを見ながら、ユリ子は祈るのだった。

『準決勝 芦菫子 対 横島忠夫 試合開始!』

とつとつ始まってしまった。

華麗にお辞儀する和樹に、憂鬱な気持ちで合わせる横島。会場からは割れんばかりの拍手が鳴り響く。

「覚悟はよろしくって?」

「よろしく無かったら優しくしてくれる?」

「まさか。賤のなっていない執事にはお仕置きです!」  
ピシィンツと和樹の作り出した靈気の鞭が床に叩きつけられる。

「…っていつか、そんな痛々しい主従関係は嫌じゃー!」

「おほほほほほ!」

ピシッ!ピシッ!ピシィッ!

繰り出される鞭を、横島は何とかかわす。和樹はそれを、不思議に思った。ここまで避けられるのか?自分は確かに鞭を使い慣れてない。だから美神さんの動きを思い出して攻撃しているのだが、この避け方は既にこちらの攻撃を知ってる避け方だ。どこかで見せたっけ?

「器用に避けますね!なら、これならどうです!?」

そう言って、和樹は出力を上げた靈気の鞭を横島に向かって投げる。空中でストップした鞭はその場で高速回転し、靈気の弾を周囲に撒き散らした。

ズダダダダダッ!

「あ、あぶねー！」

慌てて飛び回って避ける横島。避けながらも、和樹の姿をとらえる。すると、和樹の手が胸元で奇妙な形に組まれていた。

ヤバい！

横島は急いで靈気のドームを作り出して全方向からの攻撃に備えた。靈気弾は乾いた音を立ててはじかれて行く。その中に、小さな虫のような影もあった。

「あら、バレました？」

「なめんなよ？俺だって強くなっただんだ！」

その言葉にサディステイックな笑みを浮かべる和樹。ドームを展開する横島に向かって一気に跳躍する。

スタツ ドームの上に降り立つと…

「イツツ・シヨウターイム！」

「な、なんだ！？」

タタタタンツ タタタタンツ  
タタタ・タタタ・タタタタンツ

和樹が軽快にタップダンスを始める！靈気で強化されたピンヒールがリズムカルにドームを削りはじめた！

ガガガガガガガッ！

「うわー！何すんじゃボケー！」

「オーホホホホ！良くつてよ！良くつてよ！」  
お嬢様というより女王様になっている和樹。一体何の影響を受けているのだろうか。

「嬢王様とお呼び！」

「何か新しい称号出た！？」

言いながら、必死でドームを強化し続ける横島。もしこれがサイキックソーサーなら横にはじけば回避出来るのだが、ドームという広範囲の防御なので相手に足場を作ってしまったている。どうにも出来ない。

「次はアイリッシュ・ダンスにしましょうか！」

会場の声援がヒートアップする！和樹はスカートを掴みあげ、リズムカルにステップを踏み始めた！……そして、これがいけなかった。

苦々しく頭上を睨みつける横島。そこに見えるのは…。

「へブーーーーンッ！」

「キヤアアーーーーッ！？」

思わぬ方向から霊波を受けて吹っ飛ぶ和樹。消耗しかけていた横

島はこの世の天国を垣間見て靈気を回復していた。可愛い女の子のパンチラ、プライスレス。

空中で回転しながら、和樹は着地体勢に入る。しかし、横島の攻撃はなおも続く！

『滑』

ステーーーーーン！

「痛ーーーーッ！？」

文珠での攻撃によって、着地に失敗して後頭部を打ちつける。チクシヨウ、この展開はヤバい！

「うおおおお！」

迫り来る横島、目が怖い！俺に飛びかかれた女性の気持ち、今なら分かる！

「させるかーーーーッ！」

倒れたまま全身全霊で靈気を発射する。寸前まで迫ってきていた横島は、たまらず後方へと押し戻された。

「う、うおおおお！」

「くっくっくっくっ！」

いつの間にか靈気の鎧を身に纏った横島。聖なる星ぼしの力は今、セクハラの為に使われようとしていた。

「桃・源・郷・が、見えてきたー！」

「な・ん・の・事だああ!?」  
押し戻しながら、立ち上がるうとする和樹。今日二度目の失敗である。

はだけたスカートから、多分、見えてしまったのだ。

そして、横島の額に靈気の渦が開かれる。アジナー、第三の目の異名を持つという…

第六チャクラが開かれた。

ズオオオオオオツ!!

「嘘でしょー!?」

和樹の身体を膨大な靈力が襲う!そして、踏ん張る事も出来ずに和樹の身体は吹き飛ばされていった。

『場外!勝者、横島忠夫選手!』

会場は異様な盛り上がり。盛大な拍手に加えて、何故か口笛まで聞こえる。

「負け…?俺が、横島に…:…?」

今起きた事が信じられない和樹は、呆然とへたり込んでいた。横島はそんな和樹を気遣っているのか、こちらをじっと見ている。



その時、観客席に不思議な動きをする人物が。  
あれは…芦優太郎！？  
ん？サイン？こちらにサインを送っている。

パンツ

っー

丸

見え

「わーーーーーっ！？」

慌てて飛び起きてスカートを直す和樹。そして横島のもとへ走って行くと…

「このアホー！思いつきりガン見しやがってー！」

ゲシッ ゲシッ！

「っ、ごめんなさーい！？」

逆上した和樹は、小竜姫たちに取り押さえられるまで横島を蹴りまくるのだった。

…こうして、和樹の二度目のGS試験は終わりを告げる。ちよっぴりほる苦い、思い出だけを残して…。

大食堂のとある一角にあるテーブルに、ピートと付き添いの愛子、タイガーが座っている。そして、テーブルにノートパソコンを開いているのはヒヤクメ。先ほどの試合を画面に映していた。

「…これは、なんというか。」

「凄いのか分からんノ。」

「うう、ピート君はあんなに必死だったのに…。」

さめざめと泣く愛子。私の大切な人はあんな目にあつたのに、この人達は何をふざけているんだ！そんな思いで画面を見つめていた。

「まあまあ、本気を出したら会場が吹き飛ぶのね。これで済んで良かったのね。」

ヒヤクメには、こうなる事が分かっていた。今回、和樹が試験対策の為にヒヤクメに相談していたのは周囲に被害を与えない戦い方。自分の霊気が余りに強い為に、下手をしたら死人を出してしまうかもしれない。そう思つて霊気を殆ど使わない奇抜な戦い方をしてきたのだ。そして、それはヒヤクメと協力して編み出した戦術であった。

「元々、スパイが確認出来たら早めに負けて作戦に参加する予定だったのね。だから、この負けもシナリオ通りなのね。」

「そ、そうでしょうか。和樹さん、かなりショックを受けてますけど…」

「あら…？」

確かに、モニターには泣き崩れる和樹の姿。なだめる小竜姫と獣人の女の子に顔をくしゃくしゃにして泣きついている。どう見ても本泣きである。

「あれー？」

ヒヤクメも焦る。ひよつとして本気だったのか？……そんな事を考えていたら、ふと、良い事を思いついた。

「こんな珍しい事、ここだけで見てるのは勿体無いのねー。」

動画を圧縮してメールに添付する。送り先は…妙神山のパソコンである。そのメールは早々に開封され、タマモの操作の下、老師や天竜の目にとまる事になった。

妙神山に爆笑が響き渡るのは、その直後の事である。

「うわああああん、馬鹿に負けたー！」

「馬鹿言うなー！」

会場で大泣きをする和樹に横島が突っ込む。しかし早く泣きやんでくれないと、周囲の目が横島に対してドンドン冷たくなるのだ。どうして良いか分からず、まごつく横島。泣きたいのはこっちだと愚痴る。

「よしよし、もう大丈夫でござるよ。この男は拙者が叩き斬っておくじやれる。」

「オイ、お前俺に惚れてたんじゃないのかよ!？」

そんなやり取りをしていると、息を切らせて駆けよってくる人物が。ユリ子である。ユリ子は涙を流しながら和樹の元にやってくる  
と…

「なんで負けちゃったんですかー!」

ぽかぽかぽかぽかぽかっ!

「痛い痛い痛いつ、何でー!?!」

和樹を叩いた。

「だって、だって、次は横島さんなんですよ!?!お嫁に行けなくなっちゃうじゃないですかー!」

「俺を何だと思ってるんだー!?!」

叫ぶ横島を周囲の人間は冷たく睨む。コレはユリ子が正しい。さっきの試合を見た者は誰もがそう思った。

「ぐすっ、ごめんなさい。怒らないで下さい…。」

しゅんとする和樹を見て、顔を赤くするユリ子とシロ、小竜姫。

(か、可愛い、和樹さん…)

(何だか持ち帰ってしまいたいでござるよ)

(私のストライクゾーンど真ん中じゃないですか!)

キッと横島を睨む三人。

「「「あやまりなさい!」「」」

「う、ごめんなさい。」

横島は気圧されて謝った。え、何でここまで攻撃されるの、俺？

なんだが納得いかない横島を見ながら、和樹はほくそ笑んだ。

決勝戦は、三十分の休憩を挟んで行われる。横島は、一人会場脇の通路を歩いていった。一人悪者にされて面白くないのは勿論だが、次のユリ子戦をどう戦って良いのか考える時間が欲しかったのだ。普通にやったら怪我をさせてしまう。仕方無いかもしれないが、横島は女性を傷つけるのは嫌だった。そうでなくてもユリ子は学校で隣の席なのだ。後々気まずい関係にはなりたく無い。

「どうすっかなあ…。」

悩んでいると、頭上から声が聞こえてきた。上は観客席だ。誰だろっ？

「横島くん！」

「所長！」

美神だった。警備の仕事も一段落したのか、横島の姿を見つけて走ってきたのだ。

「決勝、頑張つてね！応援するよ！」

「所長…。」

胸が、じーんとする。そうだ、自分は何の為に戦ってるんだ。所長の為だろう！

「任せて下さい！この横島忠夫、所長とその乳の為に頑張ります！」  
「ま、またえつちだよ！」

恥ずかしがる所長に萌えて…いや、燃えてきた！横島はグングンと漲る靈気を感じる。タイトスカートから覗く美神の白い三角形を見上げながら、横島は力強く拳を握るのだった。

そして時は過ぎ…

『決勝戦 横島忠夫 対 吉村ユリ子 試合開始！』

前代未聞、普通科の高校一年生同士によるGS試験決勝戦が始まった。

「行きますよ、横島さん！」

強気のユリ子に、横島は静かに拳を向け構えをとる。

「死ぬ気で来い。」

一気に靈気を纏う。その姿は、あのペガサスでは無く、いつか小竜姫の顔を砕こうとした姿である。サイキックモード。横島の本気だった。

「そ、それは…!?!」

「決勝なんだ、本気で行く。」

そう言うつと横島は拳に靈氣を乗せてユリ子に繰り出す。普通の間には目視出来ない速さ。ユリ子には見えるものの、身体は反応出来ない。

その拳がユリ子の身体をとらえる瞬間。ユリ子の首にかけられた趣味の悪い髑髏のネックレスから靈氣が放たれ、横島の拳を遮った。

「!」 飛び退く横島。

「死神さん…。」

ネックレスの髑髏が、話し出した。

『さすがに今回は助けが要るだろう。』

「ありがとうございます。」

横島の目に火が灯る。なるほど、接近戦対策はマジックアイテムか。これなら全力で戦っても問題無いだろう。なんせ、相手は神族と戦うつもりなのだ。

横島は全身のチャクラを回す。結界が粉碎されかねない靈氣が横島の身体から放たれ、台風のように渦を巻きだした。

『いかん、ユリ子、全身の靈力をガードに回せ!』

「はいっ!」

遠距離攻撃が来ると踏んだ死神が指示を出す。しかし、横島は竜巻を纏ったままユリ子に突っ込んできた!

「うおおおおお!」

当たれば木っ端みじん。誰が見てもそう思う巨大な靈気がユリ子の直前まで押し寄せて…

消えた。

「え…？」

ユリ子が戸惑う、その瞬間…

ドガアアッ！

「きゃあっ！？」

背後から横島の蹴りがユリ子の背中目掛けて放たれる。ネックレスが靈力を消費してバリアを張るが、衝撃はユリ子をコート中心まで突き飛ばした。

横島には、場外で勝負を決めるつもりは無かった。

共に妙神山で修行した仲間である。全力で戦う事が武神である小竜姫や老師への恩返しであり、自分の倒してきた受験生たちへの礼儀だと思っていた。

「死ぬ気でかかって来いって言っただろ。何の為にここに立ってるんだ！」

「くっ…！」

ユリ子は、やはり横島は怖いと震え上がっていた。しかし、勘九郎たちの言葉を思い出して心の震えを押しとどめる。

ようやく冷静になったユリ子は、横島に向けて指を構えた。

「分かりました、後悔しないで下さいね！」

そう言うと、靈気弾を横島に向けて連射する。対する横島はその



攻撃に、手にした珠を向けた。

『反』

放たれた霊気弾が、そのままユリ子に跳ね返る。

パチンッ！

ユリ子が指を鳴らすと、霊気弾は空中で霧散した。

「消えた？」

「コントロールだけなら、負けませんから。」

先ほどとは違って、猛禽類のような鋭い眼差しを向けるユリ子。

死神は、その様子を見て驚いていた。

ユリ子は確かに努力する才能に恵まれた秀才タイプの人間だ。しかし、どこか消極的で、自分から前に行くという気概は無かった。今までの戦いにしても、相手を拒絶する為に必死になっていただけであり、戦う事に対して積極的だったわけではない。

しかし、今は違っていた。前向きに、戦おうとしている。勘九郎戦よりも、積極的に。それは霊波にも現れていて、全身の霊気が体内で練り上げられているのを、死神は感じていた。

『ユリ子、そのまま、霊気を身体の周りで循環させ続ける。』

「え？あ、はい！」

よくわからないが、ユリ子は言う通りにする。次第に身体が金色に近い霊気を帯びてくる。

「行きます！」

ユリ子はその状態を維持したまま、横島にむかって突進する。迎えうつ横島。ユリ子の手から発射されるおびただしい量の霊気弾を難なくはじく。

ガガガガガガッ！

全て弾き飛ばした後、横島は上空を見上げる。そこには跳躍したユリ子の姿。霊気を漲らせ身体強化して跳んだのだ。そして…

「たああーっ！」

「うるあああ！」

ユリ子の蹴りが横島に放たれる。横島もそれを腕で弾き飛ばそうとして…

ガシッ！

「はっ！？」

困惑した。ユリ子の放ったのは蹴りだったが、何故か横島が振り上げた腕に絡みついていたのだ。

「折れる！」

ギリギリギリ…

「ぐっ…うあああ…！」

激痛が横島の腕を襲う。いつもなら太腿最高と喜ぶ所だが、そん

な事を言っていられないレベルの攻撃だった。

「本気を出して下さい、横島さん！」

ユリ子は足を締めながら、不安定な体勢で霊気のマシンガンを横島の顔面向かって放つ。

ズガガガガガガッ！

「ぐっ……うるああああ！」

横島は全身の霊気を爆発させる。まるでダイナマイトが爆発したかのような轟音と共に、ユリ子が吹き飛ばされる。

「きゃああっ！」

来る、と予測していたから霊気バリアを張るのは間に合ったが、予想外の威力に驚いていた。ネックレスの霊気も、かなり消費している。

『聞け、ユリ子。』

「…死神さん？」  
体勢を立て直したユリ子にネックレスが話しかける。

『今のお前は和樹の霊気を取り込んで、霊的な枷が取り払われた状態にある。この状態なら、私と契約出来るだろう。』

「契約？」

『うむ。今のユリ子なら、私の神気に耐えられるハズだ。行くぞ！』

「きゃっ!?!」

ユリ子の身体を取り巻いていた光が収束を始めた。横島はその様子を見守る。今手出しをするような無粋な真似は出来ない。ユリ子が強くなるなら、それは仲間として歓迎すべき事だからだ。それに…決勝戦。他の連中に格の違いを見せつける義務がある、と考えていた。

靈気の収束がおさまる。ユリ子は自身の身体を眺めて…

赤面した。

「いやああああっ!なんでこんな格好なんですかー!」

「よ、吉村さん、そんな趣味が!?!」

『すまん…私が死神である事を忘れていたな。』

きわどいボンテージ姿、手には死神の鎌。黒に統一された色調はどこからどう見ても…

悪の女幹部だった。

「い、いい加減にするワケ…」

もはや脱力して立ち上がれない小笠原エミ。まともだと思っていたあの女の子まで変身した。これでは、GSが変身して戦うものだ

というイメージがついてしまう！

「……………」  
対する美神ひのめは、ただ呆然とコートを眺めている。いつもならはしゃぎまくるのに…エミが恐る恐る美神に近づくと、美神は突然大声で叫ぶ！

「頑張れ、ヨコシマーン！」

…！！

会場が一瞬、静まり返る。そして…

「ヨコシマーン！ ヨコシマーン！」

大声援が巻き起こった！悪乗りが過ぎる！

「ちょ、アンタなに言ってるワケ！？」

「う、宇宙刑事がピンチなんだよ！？応援しなきゃ！」

「あー！もう、このお馬鹿！」

…これに対しておキヌも負けてはいない！シツモと一緒にメガホン持ち出して大声を張り上げる！

「ユリ子さは一ーん！頑張ってくださいーいー！！」

「女王様のお色気攻撃なら勝てるのじゃ！惱殺ビームをだすのじゃー！！」

「シヅモちゃん!？」

何やら危ない発言をするシヅモに魔鈴が慌てる。しかし、観客たちはこの発言にもいち早く反応してしまう。

「女王様っ!女王様っ!」

会場に響き渡る、ヨコシマンコールと女王様コール。もはや、G S試験とは関係ない次元の戦いとなっていた。

「…もう、さ。戦って、忘れよう。」

「そうですね…。その方が精神衛生上、良さそうですね…。」  
顔を真っ赤にして、言葉を交わす。互いに構え、攻撃の体勢に入った。

「行くぞ!」

「はいっ!」

横島の身体が靈気の竜巻を纏う!ユリ子は鎌を手に走り出した!

「せやあっ!」先に攻撃するのはユリ子。高速で鎌を振るう。それを横島は光り輝く腕ではじく。

ギインッ!

「まだっ!」

はじかれた鎌を、今度は振るわずに突き出す。柄の部分から、霊  
気弾が高速で発射された!

ズガアアッ!

「ぐっ!」

さすがに怯む横島。ユリ子は、思っていた以上に素早く、攻撃も  
重い。動きも、読み辛い。

「食らえ!」

横島も攻撃にうつる。低い姿勢を保ち相手に向かってダッシュす  
る。ユリ子は続けて霊気弾を発射するが、それを頭部に展開したサ  
イキックソーサーで全て弾き飛ばす。

「うおらあっ!」

横島はユリ子の足元まで接近したかと思うと、一気にユリ子の顎  
目掛けて蹴りあげる。サマーソルトキックだ。それを紙一重でかわ  
すユリ子。しかしそれはフェイントだった。

ガシッ

「きゃっ!?!」

「今度は俺の番だ!」

横島の足はユリ子の首をロックしていた。そして、そのまま足で  
ユリ子を地面へと叩きつける!

ドカッ！

「ぐうっ…！」

鈍く鋭い痛みがユリ子を襲う。ネックレスの霊気ガードのおかげでなんとかダメージを和らげていたが、普通の人間ならこれだけで死んでいる。

「このっ…！！」

ユリ子は鎌を手放し、手を横島に向ける。その指全てから、またもや発射される霊気のマシンガン。

ズガガガガガガッ！

「がああっ!?!」

余りの勢いに、横島がたまらず離れる。ヤバイ、遠距離だけじゃなく、近距離でも充分戦えるのか、ユリ子は！横島は、意外なユリ子の健闘に焦り始める。本気の本気、出さないと厳しいかも…。

「たああっ!」

思案する一瞬の隙を逃さず、今度はユリ子が攻撃に入る。それも、肉弾戦だ。横島の左腕目掛けて回し蹴りを放つ。

ズガアッ！

「ぐっ…！痛うっ!」

顔をしかめる横島。そして気づく。さっきからユリ子は、自分の左半身…特に腕を狙っている。締め上げられた、腕を…。



「ハッ！ハッ！せやあつ！」

ガスツ ガスツ ビシィツ

ヤバい。攻撃は弱まる所が強まる一方だ。ユリ子はもう靈気が尽きてもおかしく無いくらい靈波を放出している。この攻撃も、本当に命を削る覚悟で行っているのだらう。早く決着をつけないと…！

その時、目の端に小竜姫と和樹の姿が見えた。和樹は、会場端の非常扉を指差し、手で合図している。小竜姫は扉の所まで移動してから、防護結界を展開した。…ああ、そう言う事か。横島は頷く。

横島は攻撃を受けながら、ユリ子を誘導する。もはや意識が朦朧としているユリ子は、横島の狙いが分からず攻撃を続けていた。

(この方向なら、誰もいない、か…。)

横島の身体の奥底で練られていた靈気が、突如として表出する。それは先ほどの竜巻の二倍近い渦。その全ての靈気を、右腕に宿す。そして次の瞬間、凶悪なまでに巨大な靈波砲が、ユリ子のすぐ隣の空間に放たれた。

グオオオオオオオオッ！！

まるで獰猛な獣の雄叫び。

ネックレスの靈気が尽きたユリ子は、その余波だけで場外に吹き飛ばされた。そして…

ドガアアアアアアアッ！

結界を突き破って、会場の非常扉に直撃する。そこには小竜姫に加え和樹も巨大な防護結界を張って立ちふさがっていた。

『場外！勝者、横島忠夫選手！』

「まあ、小竜姫様にまで頼まれたら聞くしかないよな。」

横島は、倒れているユリ子を担ぎ上げると救護班のタンカに乗せる。そして小竜姫と和樹に向かって、大きく手を振った。

横島は元々ユリ子をKOするつもりも傷つけるつもりも無かった。ただ、中途半端な気持ちで戦ってほしくなかっただけだ。戦いの最中に和樹からサインを受けた際、和樹が済まなさそうに謝っていたのを見た、というのも場外で早めに終わらせた理由の一つ。それを見て、自分をワザと怒らせて決勝で本気を出させようとしたのを察した。やり方は汚いが、確かに自分は怒らないと力を発揮できない質だ。そして、全力でやらなければ観客は勿論、会場のGSたちも怒るだろう。

「ちゃんと言葉で伝えて欲しいよな。」

それだけが不満だったが、観客席で大きく手を振る美神の姿を見て、横島は機嫌をなおした。

やりましたよ、所長！

あなたの横島が今参ります！

横島は喜びを爆発させながら美神のもとへ駆けて行った。

「いちち、アイツ本気で俺を潰すつもりだったな？」

横島の霊波を防いだ和樹は、両手に息を吹きかけながらぼやく。

「仕方ありませんよ。あんなにからかったら、誰でも怒ります！」  
小竜姫の小言にしょげる和樹。

「でも、悔しかったんだもん。」

和樹は、本気で悔しかった。今度こそ、一番を取れると思っていた。なのに、寄りによって優勝はこの世界の自分。涙自体は本物であった。

「私の気持ち、少しは分かりました？」

「あー、分かる。あんなに負けそうになったら墮天したくもなるよ。……って、小竜姫!？」

今、私のもつて言った？

「はい。…ちゃんと、戻りましたよ。和樹さん、私を助けてくれてありがとうございます。」

この世界の小竜姫だ。前の世界と完全に融合したらしい。

「良かった、目覚めてくれたんだね。でも、なんで？」

「だって、和樹さんのやられっぷり見たら、悩んでるのが馬鹿馬鹿

しくって。」

「おーい！」なんつー理由！

「うふふ、冗談です。でも、心の整理がついたのは本当ですよ。」

そう言っつて、小竜姫は和樹の頬にキスをした。

「覚悟してくださいね？私を完膚無きまでに叩きのめして、墮として、命まで救っちゃったんです。こんな仕打ちを受けたの、初めてなんですよ？」

「え、あ…、え？」

「私、負けず嫌いなんです。前の世界の私なんか目じゃないくらいに、和樹さんを墮として愛して、夢中にさせてあげちゃいますから。」

「いや、その…。」

「さあ、行きましょう。皆、待ってますよ。」

「あ、ああ…。」

大胆な小竜姫にドギマギしながら、和樹は後を追って走って行った。

GS試験は、こうして横島忠夫の優勝で幕を閉じた。それは、彼にとっても、和樹にとっても、今後の運命を左右する大きな出来事となる。しかし、この時点ではその重要性に気づいている人間は居ない。ラプラスのダイスが紡いだ運命が、今、音を立ててその歯車を回し始めた…。

### 第三十一話 宴の終わりのはなし（前書き）

今回、後半にクロスネタ入ります。長かったGS試験編も今回で終わります。後書きでお知らせがありますので見てやってください。

### 第三十一話 宴の終わりのはなし

日も落ちて、辺りがすっかり暗くなった頃。長かったGS試験も終了して、今は表彰式が行われている。今回の試験は初めて一般マスコミの取材が許可されており、詰めかけた報道陣のカメラのフラッシュが表彰者を照らしていた。GS試験では初めてとなる16歳での優勝者である。二位も16歳。GS試験合格者全体で見ても似たような年齢の若者が多い。これにはGS業界だけでなく一般社会からの注目をも集めていた。

最優秀合格者の賞状を手に、にこやかに笑う横島。同級生であるユリ子も隣に立って笑う。それを遠目に眺める和樹は、不安な表情を浮かべていた。

(普通の生活に戻れなくなるんじゃないか?)

その気持ちは、客席にいる美神も同様に抱いていた。

(ここまで注目されて、つらくならないかな…。ご両親に申し訳ないよ…。)

横島夫妻から「息子をよろしく」と頼まれているだけに、今の横島の注目のされ方に不安を感じていた。

そんな心配をよそに、横島はセレモニー進行に従い壇上で感想と抱負を述べていた。そんな横島の姿に見とれる美神。

「カッコいいよう。」

先ほどまでの不安も、今はどこかに行っていた。

ちなみに今回和樹はまたも審査員特別賞を受賞してしまう。さすがにランクはEだが、金一封と賞状を受け取った。師匠を芦原和樹にしている関係で、やるうと思えば明日からでも正式にGSとして活動できるが、和樹にそのつもりは無かった。

「のう、これで良かったんか？お主の目的は何だったんじゃ？」

客席でクリームパンを頬張りながら、カオスが隣の女性に話しかける。女性は亜麻色の髪をかき上げながら微笑んだ。メフィストである。

「資格さえ取って貰えばそれでいいの。今はまだ六道を出てもらっちゃ困るしね。」

「分かったぞ。雪之丞か勘九郎を六道の事務所に送り込む気だな？」  
優太郎の言葉に大きく頷くメフィスト。

「資格を取れば鬼道君もただのお守りからGS事務所の職員に昇格するでしょう？そうなれば、こっちの人間を送り込めば接点を設ける事が出来るわ。」

「もし独立しても霊能以外の取り得がないからオカルトGメンくらいしか就職先がない。そしてそのオカルトGメンは配下の女たちで固めてある、と。随分用意周到な事だな。」

芦が呆れた風に言う。メフィストの配下で忠誠心の高かった女兵士は、人間に化けてオカルトGメンに潜入済みである。西条の部下



として…。

「ふふふ、そつちでも別に構わないけどね。あの西条って子、彼の前世で上司やってたみたいだし。」

昔を思い出してカラカラ笑うメフィスト。そんな彼女を見ながら、カオスは苦笑いを浮かべる。

「なんにせよ、気の長い計画じゃわい。」

コーヒー牛乳をがぶ飲みするカオス。口元から少しこぼれたが、マリアがすぐさま拭う。

「五百年以上も待ったのよ？これくらい何でもないわ。あの人にはじつくり時間をかけて人間界に絶望してもらって、魔界へ来る気になってもらうの。勘九郎を送り込めば…くくくつ、一年も保たないわね。」

少女のような笑顔でどす黒い台詞を吐くメフィスト。陰鬱な表情を浮かべて立っている鬼道を、優太郎とカオスは気の毒そうな目で眺める。マリアは黙々とシュークリームを頬張っていた。

「しかし、あんたも物好きよねえ。そんなにあの子が気に入った？」  
思い出したようにメフィストが声をかけた相手は、ハーピー。いや、羽居である。

「な、なんじゃん。別にいいじゃん！」  
顔を赤らめる羽居。

「悪いなんて言ってないわよ。人間になれたし、このまま魔族に戻らないで人として生きる？」

「でも…。」

迷う。自分には居場所がない。あの村の人間はもう自分を忘れて  
いるのだ。Gメンにも目をつけられて、陰鬱たちに迷惑をかけてし  
まうだろう。もう、自分には戦う力も殆どない。

「それなんだが、君は私の従兄妹という事になっている。人として  
生きるなら、私の事務所で働いてみるか？君のように魔族や妖怪か  
ら人間になって働いている者も居るし、居心地は悪くないはずだ。」  
と、優太郎が提案する。これは優太郎が計画の始めの段階で考えて  
いた流れだったりする。メフィストも賛同した。

「陰念と一緒になら、何処でもいいじゃん。」

頬を染めた羽居は、会場に並ぶ陰念を見ながら答えるのだった。

『和樹さん、今の会話、聞き取れました？』

「勿論。ちゃんと対策は立ててあるから大丈夫だよ。」

小竜姫の持つ『伝達』の水晶文珠から聞こえたメフィストたちの  
会話は会場の集音マイクが拾った音である。ターゲットが何故鬼道  
なのかは分からないが、せっかく安定している勘九郎にまた差別的  
な目を向けられる生活を送らせるのは可哀想だ。彼には、理解者の  
存在が不可欠なのだ。だから、その理解者をこちらから紹介してあ  
げる必要がある。

「ねえ、勘九郎さん。ちょっといいかしら。」

表彰式が終わり会場の人間がバラけ始めると、和樹は勘九郎に話しかけた。

「あら、何かしら。」

「貴方にはお友達がお世話になったから、お礼をしたくて。」

「そんな、いいのよ。負けたのは自分の落ち度なんだから。」

まったく、いい性格じゃないか。前の世界でも、こうなる可能性はあったのだろうか。

「あのね、あなたに紹介したい人がいるんです。多分、貴方と同じ悩みを抱えている人なんだけど…。」

「え…?」

びっくりする勘九郎。悩みとは何だろう。そんな表情をする勘九郎に、和樹は少し声をひそめて言った。

「うちの近所にお豆腐屋さんがあるんだけどね…。」

話を聞いた勘九郎の顔が、みるみるうちに輝き出す。少し離れて見ていた横島と雪之丞。その不気味さに血の気がひいて行く。

「俺に勝った賞品として、アレ持って行っていいんだぜ?」

「どんな罰ゲーム!? タミヤのキットセットの方が数倍マシやわ!」

思わず関西弁に戻る。二人は子供の頃、当時流行っていたミニ四駆の全国大会で戦った事があった。大阪代表が横島、東京代表が雪之丞である。

「あの時と今回は負けちまったが、次は負けねえからな！」

「今度は何で勝負するつもりよ。お笑いか？」

「しねーよ！適わねーよお前の身体はったギャグには！」

「やる前から敗北宣言か？天国のママが笑ってるぞ？」

「ママが笑顔でいてくれるなら、それでいい…。」

「そうじゃねえ！」

すでに漫才に入っている雪之丞に、勘九郎が声をかけた。

「ほら、行くわよ！明るい未来が待ってるわよ！」

「ママ…ママ…」

「あら、スイッチ入ってるわね。なにかした？」

勘九郎の質問に、冷や汗をかきながら首を振る横島。

「仕方ないわねえ、ほら、来なさい。」

「ママ…」。

「はいはい、後でオッパイあげるわよ？」

「マンマ！マンマ！」

奇妙な会話をしながら会場を後にする二人。

「ヤバくないか？」

「し、しらん！俺は何もしてない！」

和樹と横島は顔を青くしてそれを見送った。

「それにしても、まさかユリ子が決勝に進むとは思わなかったのじゃ！」

公平の運転するマイクロバスに揺られながら、シツモが嬉しそうに話す。

ここには、小竜姫、ヒヤクメ、おキヌ、シツモ、そしてユリ子と和樹が乗っている。ユリ子は家まで送ってあげる事にした。氏子の送迎に使ってるバスなのでもっと乗せる事が出来たが、それは止めておいた。不合格になった者もいるし、横島と美神は二人きりでお祝いしたいだろうから遠慮したのだ。シロに関しては、必死で横島についていこうとした所を和樹が気絶させ、会場に来ていた人狼の里の者に連れて帰らせた。やはりこの世界の横島にも未練があるらしい。確かに和樹は外見からして変わっている。あの横島の姿を求めてきたシロなら仕方ないが、何だか浮気っぽくないか？と和樹は

思った。

「でも横島さんも酷いですよー。もっと優しくしてくれても良かったのに！」

「いえ、試合ですから。逃げ腰の私を叱ってくれたから、私も真剣になれたんです。」

おキ又の憤りをなだめるユリ子。試合後横島は医務室までやってきてユリ子に土下座をして謝った。結果的に恥ずかしい目にあわせてしまった事と、偉そうな事を言ってしまった事を。その誠実な姿を見て、ユリ子は横島の事を怖いとは思わなくなっていた。そして、精一杯戦えた事に感謝していたのだ。

「アイツ、本当に怒りっぱいんだよな。最後まで俺目掛けて靈波ブチかまして…。」

「わ・た・し？」

「わ・ら・わ？」

「もういいだろ!？」

楽しそうに笑う皆をバックミラーで見ながら、公平は煙草をふかす。

『さて、こつちもこつちで動かんとなあ。』

短くなつた煙草をもみ消すと、ゆっくりアクセルを踏み込んだ。

神社では、藤姫が夕食の準備をしていた。といってもケーキを用意するだけ。イツナ用のケーキも勿論買ってある。今回は妙神山の面子もいるので量が多い。老師や公平の為に普通の料理も用意しているが、そんなに手間はかからなかった。

「イツナ、もう居ないだろ？警戒しなくていいよ。」

「クウーン…。」

和樹が試験を受けている間、何度か結界が作動した。分かりやすい悪意。結界は強烈に拒絶し、侵入者が神社の境内に足を踏み入れる事はなかった。

「まったく、馬鹿な人間もいるもんね。」

「というのはタマモ。文庫本を読んでいる。」

「ここにいる面子を知ったら腰を抜かすだろうな。余は戦っても良かったが。」

「馬鹿モン、和樹に迷惑がかかるじゃろうが。」

天竜と老師はゲームをしていた。最新ソフトである。

カーテンの隙間から、こっそり外を覗いて警戒するイツナを抱き上げると、藤姫は優しく撫でた。

「アンタに怖い思いはさせないさ。あたしが、ちゃんと守ってあげるよ。」

「キュウン…。」

その時、外から聞き慣れた車のエンジン音が。

「コン！」

「ああ、帰ってきたね。」

車が境内に入って駐車スペースに止まる。そこから降りてくる人の気配。やっと帰ってきた！イツナの気持ちを察して藤姫が玄関へと小走りで向かう。

ガラガラガラ…

「ただいまあ〜。」

「コーーーーーーン！」

「おわっ！」

藤姫の腕から、和樹の胸へと飛び移る。慌てて受け止めるとイツナの頭を撫でる。

「なんだ、そんなに寂しかったのか？」

「コン！コン！」

必死で頬ずりしてくるイツナ。なんだか様子が変だな。

「藤姫、何があつた？」

食事の用意してある居間に行くと、和樹は藤姫に事の顛末を聞いた。妙な連中が神社に入ろうとしていた事、結界に拒絶され入れなかつた事。

「多分、アイツらだな…。それなら、もう大丈夫だと思う。六道家の当主が手を打ってるらしいから。」



「そうかい。なら良いんだけど…。」  
そんな二人に、ヒヤクメが声をかける。

「もう、早く食事にするのねー!」

「そうよ、お腹ペコペコなんだから。」

タマモも急かす。

「そうだな。またケーキを用意してくれたみたいだし。じゃあ、開けるぞ?」

その時、ヒヤクメとタマモの顔に奇妙な笑みが。おキヌとシヅモは何の事やら分からずキョトンとする。

周囲を見ると、老師と天竜は距離を置いていて、公平は耳を塞いでいる。藤姫に至ってはイヅナを抱えて守るように台所へ避難していた。

ケーキには、チョコレートで文字が書かれていた。そこに記されていた文字とは…

『ダンス部門優勝おめでとう!』

「うがあああああああ!」

和樹の雄叫びが夜の神社にこだました。

宵闇に紛れて、男は走る。

「何故だ、何故うまくいかない！」

あの時自分の計画を邪魔した女の素性を調べ、女の住んでいる神社に妖怪が保護されている事を知った。適当に罪をでっち上げ見せしめに始末しようとしたが、結界が張ってあり侵入出来なかった。それだけではない。

「あんた、何しでかす気じゃ！」

婆さんがいた。その隣にはお玉を手にしたオバチャン。

気づくと周囲を商店街の人間が取り囲んでいるのだ。

「ここは神様のいらっしやる所だ。馬鹿な真似はよすんだな。」

豆腐屋の前掛けをしたヤンキーっぽい兄ちゃんが睨みを効かせる。

「な、なんだお前らは！公務執行妨害で逮捕するぞ！」

「令状見せるや、兄ちゃん。なんの権利があつてうちの神社に喧嘩ふっかけとる？」

ひとときわ恰幅のいいオッサンが言う。周囲の視線は、一様に厳しく男を射抜いていた。

「くっ…、こんな事をして只で済むと思つなよ！」

捨て台詞を残して去るしかなかった。

そして、男はターゲットを変える。

ハーピーが滞在していた村なら、魔族をかくまった罪でしょっぴける。そう確信していた。

「私に恥をかかせた罪、後悔させてやる！」

もう、この男に理性は無い。冷静な判断さえ出来なくなっていた。山道を駆ける。かなり時間がかかったが、あと少しで村だ。

しかし、男が村に着く寸前で立ちほだかる者が現れた。

暗い森の木々をかき分けて現れたそのモノは、月明かりを浴びて身体を闇より浮かび上がらせる。

「な、何者だ！」

足を止めて構える男。

紫色に輝く身体から発せられる電子音と人工的な声が、それに答える。

『悪党に名乗る名前は無い！』

「なんだと!？」

反射的に銃を撃つ。銃弾は全て弾き返された。

「な、な、な…。」

『ふふふ、先に手を出したのは貴様だぞ？この場合、私の攻撃は全て正当防衛とされる!うふふふふふ!』

手には、ライトセーバー。過剰防衛です。

「う、うわあああつ！」

『逃がさん！クッキー・ダイナミック！！』

「ぎゃあああああああつ！」

闇夜に、男の断末魔の叫びが響き渡った。

「なんの声じゃん？」

羽居は牡丹鍋を食べながら窓の方を見る。何も見えなかった。

「どうせ野犬だろ？熊にでも襲われたんじゃないか？」

「それはそれで大変でしょ？」

雪之丞に突っ込む勘九郎。陰念は羽居に優しく声をかける。

「何があっても、俺が守りますよ！」

「陰念…。」

照れる羽居に、雪之丞が白ける。まったく、見せつけてくれるぜ。でも悪い気はしなかった。寺に居た頃は毎日暗い顔をしていた陰念が、明るく笑っている。こんな事になるなんてな、と雪之丞は笑う。笑いながら、今日の出来事を振り返っていた。

表彰式が終わって、三人は後見人の芦優太郎に挨拶に行った時に、羽居は一緒に村には戻れそうにないと言った。なんでも、村人の記憶から自分に関する記憶を消したという。

「だって、もう死ぬって思ったじゃん。だから、村の皆がつらくないよつにと思って…」

「もう、死なないって言ってたでしよう？」

「やれやれ、と言うメフィスト。ハーピーを人間にしたのはメフィストらしい。」

「帰りましょう、羽居さん。きつと、覚えてますよ。もし忘れていても、また仲良くなればいいじゃないですか。」

「そうだけ、どうせ皆歳いつてるからボケてて…」

ポカッ！「何言つのよ雪之丞！」

勘九郎が突っ込むと、ようやく羽居は笑顔を見せた。

「分かったじゃん！うん、皆と一緒にいるじゃん！」

「そう言っつて、優太郎の方へ向き直す。」

「私、やっぱり村に戻るじゃん。」

「ああ、分かった。元気だな、羽居君。困った事があつたらいつでも相談にのるよ。」

「寂しくなるわ。また貴女のビデオを見て孤独を慰める日々が来るのね…。」

「き、気色悪い事言っなじゃん！て言っかビデオ消して！」

じゃれ合う二人を、カオスがニコニコと笑顔を浮かべ見ている。

「これで、ひとまず実験は終了じゃな。アレの試作機は順調に結果を出しておる。計画を前倒ししても問題なかるう。」

「ああ。でも、大丈夫だろうか。この世界の霊的エネルギーはまだ他の世界と比べても強いとは言えないが。」

「なあに、完成させるだけじゃよ。使うのは、時期を見て決めれば良かるう。」

優太郎の問いに得意気に答えるカオス。その隣では、マリアがチユツパチャプスを舐めていた。

「いつまで食つとるんじゃ、はよう行くぞ、マリア！」

「イエふ・ドクふあーカオちゅ。モゴモゴ。」

「かーっ！」

羽居たちを見送ってから、優太郎たちも賑やかに会場を後にするのだった。

羽居たちが村に戻る頃には日も完全に暮れていた。が、村に戻ってあばら屋に入ると、すぐに村人が訪ねて来た。

「おう、お帰り！俺っとこの野菜、そこに置いたから食べてくれや。」  
比較的若い爺さんがニカツと笑う。そして、羽居の方へと向いた。  
「お嬢ちゃんももう元気みたいだし、今度また手伝い頼むわ！」

「え、え、何で覚えてるじゃん！？」

混乱する。自分の魔術は効かなかったのだろうか。

「あー、確かに忘れてかけとったけどよう、関係ねえのよ、この村は。お隣さんはお隣さん、村の仲間は村の仲間さ。ボケて忘れても村に居るならお仲間だから。それにお嬢ちゃんは目立つからよう。見たらすぐ思い出したさ。」

なんとという理由だろう。予想外の展開に言葉をなくす。

「あら、お帰りなさい陰念ちゃん。羽居ちゃんも良かったわあ、心配したのよ？」  
後からやってきたおばあちゃんまで覚えていた。

「おばあちゃんも、覚えて？」

「ええ、ボケ防止に日記をつけてるからねえ。ちゃあんと、覚えてますよ。」

もう、涙がこらえられなかった。

「う、うわああああん！おばあちゃん！おばあちゃん！」

抱きつく羽居。その姿に三人も貰い泣きしてしまった。

「奇跡って、やつなのかもなあ。」

思い出して、雪之丞がつぶやく。そうしてモグモグと肉を頬張りながら、いちゃつく二人を眺めていると、隣から妙な声が聞こえてきた。

「つぶ、つぶつぶ…。」

さっきから勘九郎はどうしたんだろうな？

やたらと不気味に妄想にふけっている勘九郎から距離を置いて、雪之丞は鍋をつつくのだった。



### 第三十一話 宴の終わりのはなし（後書き）

クロスネタは『真剣で私に恋しなさい！』より、クッキーでした。

さて、今回で主要キャラがだいたい出揃ったワケですが、この話以降のデータがPCと一緒に逝ってしまったので思い出しながら書く事になりました。よって、更新スピードはかなり遅くなります。ごめんなさい。

一応流れとしては、これから夏休み、それぞれのキャラにスポットを当てたほのネタが続き、休み明けに急展開します。その戦いが一応本編のラストエピソードとなり、いろんな謎が解ける…という感じにしたいです。

そのエピソードが終わってからは、クロスネタを細々とやっていけたらいいな、と。

拙い文章で申し訳ありませんが、これからもGS和樹極楽大作戦を、どうぞよろしく願います。

### 第三十二話 夏休みと猫のはなし

ほかほかとした陽気の朝。和樹はいつものように社務所のシャッターを開けて授与品の準備をしていた。今日は朝から暖かいので、昼には暑くなるかもしれない。扇風機を出して置こうか、と迷っていた。

G S 試験を終えた和樹たちは、ようやく学生らしい毎日に戻る事が出来た。横島は美神の事務所に通ってバイトの日々を送り、ピートやタイガー達もそれぞれの仕事や鍛錬に忙しい日々を送っているらしい。資格を取った横島だけでなく、次の試験に挑む二人も必死になって経験を積んでいた。

「しかし、寂しくなったなあ。」

和樹がそう言うのも無理は無い。最近大勢で居る事が多かったが、その仲間たちがそれぞれの持ち場に戻った。それだけではない。この間まで一緒に住んでいたおキヌとシヅモも、G S 試験が終わってから実家の長野に戻って行ったのだ。基本的に人間嫌いのタマモも妙神山から出て来ないし、神社はまた藤姫とイヅナ、公平と和樹の四人に戻っていた。

ずっと社務所にいてくれたおキヌ。和樹は所々微妙に配置が変わっている棚の置物や花瓶に、おキヌの居た名残りを感じて少し寂しい気持ちになっていた。

「コン！」

「そうだねえ。和樹ー！ちょっとおいでー！」

和樹が社務所で物思いに更けていると、台所から藤姫の呼ぶ声が聞こえてきた。

「ん？どうかしたか？」

そう言っただけで、台所の調理台の上にはお弁当が三つ。イツナが妙にキラキラした目をしている。

「ああ、今日は社務所を閉めて、出かけないか？これは公平が釣りに行くから作ったんだけどさ、ついでに私達の間も作ったのさ。あたし達も、何処かへ行こうよ。」

この時間になっても家にいるなら川釣りか…。なら、魚は夕飯にはならないな。そう思った和樹は夕飯の買い物や調理にかかる時間を計算して、行ける場所を限定して行く。

「近くの山をハイキング、って感じになるけど良いか？」

「ああ、いいじゃないか。」

「コン！コン！」

二人の反応は上々である。若いのに枯れた趣味などと言っただけ。実際、イツナも連れて行ける場所になると限られてくるのだ。

「あたしもちょっと気になる山があったさ。」

藤姫が一枚の紙を取り出す。地図のコピーのようだ。

「これって…近くだな。あれ、もしかして…。」

「ああ、あたしが逃げ込んでた廃病院さ。これは肝試しのスポットを集めた雑誌のコピーなんだけど、夜な夜な人影がちらつくとか悲鳴が聞こえるとか…いろいろ言われていてね。」

なにもそんな所に行かなくても。

和樹が怪訝な目で藤姫を見ると、藤姫が焦って言った。

「いや、何でもゴールがあると達成感があるだろ？それに、近場で変な奴らにうるつかれるのも嫌じゃないか。もし霊障ならうちらで対処出来るし。」

「コンコン！」

同意するイツナ。いや、君が心配だから渋ってるんだが…。しかし、藤姫の言う事ももっともなので和樹は渋々頷いた。

「俺たちから、あんまり離れるなよ？」

「コン！」

元気よく返事をするイツナ。まあ自分たちに危害を加える事の出来る奴なんて居ないだろうから、大丈夫か。和樹はそう納得して外出の準備に取りかかった。

和樹の部屋は一時期霊能道具や学校で使う教科書等が散乱した状態だったが、試験終了後は時間が出来たおかげで掃除をする事ができた。今では見違えるように綺麗になっている。が…。

「クローゼットの中身の半分が女物って嫌だな。」

芦菔子バージョン用の衣服が多くなって困っている。和樹は、今では隅っこに押しやられたジーンズを出して着替えた。鏡を見て、「俺は男だ」と三回唱える。そんな自分が悲しかった。

「よし、こんなもんだろ。」

山に入るので長袖にした。最近短く切った髪の毛を手櫛で適当に梳いて整える。その上に野球帽を被って、完了である。

「なんだい、こういうのをシヨタって言うのかい？」

ドアを開けた藤姫が言う。

「やめてくれ。俺は普通です。」

最近藤姫が毒されてきていた。ていうか勝手に開けるな、と。

「コンコンコンコンコン…。」

ゴメン、イツナ、俺は長文苦手なんだ。分からないよ。というか何クローゼットの中に入ってるの。あ、それはこの間のドレスじゃないか！着ないからね！？

慌ただしく準備を済ませ、家を出る。公平に確認とった所、ニジマスと岩魚がターゲットらしい。期待している！と言っていたので、今日は早めに帰って買物物を済ませよう。期待を裏切るのが得意って自分から言っていたからな。和樹はそう心に決めて、公平に声をかけた。

「神主がボウズとか、やめろよ？」

「それは無いと、主に誓おう！」

一体うちは何教なんだか。

目的の山は、天矢神社の裏山から道が続いている隣の山である。途中に川が流れており、それを境界線に神社側が私有地、向こうが国有地となっていた。一応、向こう側はハイキングコースとして有名である。

「ちょっと歩くだけで空気が違うねえ。」

「コン！」

二人は上機嫌。確かに、境内に比べると空気にひんやりとした湿り気が混じり、土の香りや木々の香りが強い。美味しい空気という言葉の意味はよく分からないが、これがそういう物なのだろうか。

「人払いかけてあるだけあって荒らされてないし、雰囲気いいな。」

そう、ここはかつてイヅナが縛られていた場所に近い。そして、強力な人払いの結果がかけられていた場所である。イヅナは平気なのだろうか。

「コンコンコン」

気にしているかと思ったら、何ともないようだ。自分の方がナイーブになりすぎているのかもしれない。

一時間ばかり、そうしてのんびり景色を楽しみながら歩いていると、目的の廃病院が見えてくる。ちょっと目的地を近く設定しすぎたかな、と和樹が思ったその瞬間。

「危ない！」

イツナを抱き上げ飛び退く藤姫、和樹はサイキックソーサーを展開して迎撃体勢に入る。

ビシッ

「痛っ!？」

飛び出した少年が、威力を加減した小さなソーサーにはじかれ尻餅をついた。

「ん？」

よく見ると、少年の頭には猫の耳みたいな物が。

(おい、藤姫。どういう事だ?)

(参ったね、ビンゴだよ)

あちゃー、と頭を抱える藤姫をジト目で見る和樹。最初からおかしいと思っていたが、厄介事に巻き込むつもりだったのか?

(後で説明してもらおうからな。)

(分かったから、そう睨まないでくれよ…)

「立てるか？」

そう言って手を差し伸べる和樹。しかし少年はそれを振り払うと廃病院の中へ走り去って行った。

うーむ。和樹は悩む。放っておいたらトラブルが起きそうだ。ここで獣人が人間相手に危害を加えたら妖怪全体のイメージが悪くなる。イツナやシツモが生きにくくなってしまわないか。

「仕方ない。ちょっと寄ってみるか。」

観念した和樹は廃病院へと歩いて行く。藤姫も、イツナをしっかりと

り抱きかかえて後をついて行った。

廃病院の中は相変わらず埃っぽく、床に散らばるガラスやゴミで汚かった。こんな所に住んでいるのだろうか。

和樹は霊視で建物の中の霊的気配を探知する。一階奥、おそらく売店のあったであろうフロアに二人の気配をとらえた。

「多分、これ狙ったんだろうな。」

和樹がバッグを指差す。弁当だ。

「だとしたら、外で獲物をとれないって事だね？身を隠す必要がある…。追われてるって事だね。」

「コン…。」

悲しそうにするイツナ。そりや自分と同じ妖怪が辛い目にあっていたら悲しいだろうな。和樹はイツナの頭を撫でてやった。

「大丈夫、悪いようにはしないよ。」

「コン！」

三人は慎重に廊下を歩いて行った。

猫又。前の世界ではゴルフ場開発候補地に住んでいた関係でGSに狙われる事になった。ぶっちゃけ美神令子であるが、当時の横島はクビ覚悟で猫又たちを庇って美神と対決した。この世界では美神ひのめが遭遇すると思っていたのだが。



「か、母ちゃん、来た！」  
少年の声だ。

「下がってなさい。絶対、出てくるんじゃないわよ。」  
母親だ。確か、美衣さんと言ったか。廊下に面した少し広い空間。倒れた長椅子を積んでバリケードを作り、その手前に立ちふさがっていた。

「私達を、退治しに来たのですか。」  
警戒心に強張った表情。

「話し合い……って言ったら信じる？」

和樹の問いに眉を吊り上げる美衣。やはり話にならないようだ。仕方ない、と和樹は藤姫に目配せする。頷いた藤姫と和樹は身体から神気を発した。猫又の二人は膨大な金色の靈気に呆然とする。

(しまった、やっちゃまった！)  
和樹は心の中で軽く舌打ちした。今の和樹は小竜姫に近い外見。せつかく短くした髪の毛が復活してしまった。

「か、神様ですか！？」  
美衣が、やっと警戒心を解く。

『ま、まあ、そんな所。』

「あたし達は敵じゃないよ。困ってるなら助けてやるつもりだと思って来たのさ。」

藤姫の言葉を聞いて、美衣は身体の力を抜いた。よほど緊張していたのだろう。そして、自分と同じ妖怪のイツナの姿を目にした途端…

「うう…ありがとうございます…。」  
その場に泣き崩れた。

「母ちゃん…?」

恐る恐る長椅子の影から顔を出す少年。にっこり笑って和樹が手招きすると、戸惑いながらも近づいてきた。

和樹たちは、二人を病院の外の空気の良い場所へと移動させ、事情を聞く事にした。

事の発端はやはりゴルフ場開発に関するものだった。ただ違うのは、猫又退治の依頼を受けたのが美神ではなくオカルトGメンだった事である。

オカルトGメンはGS試験の後に大規模な人事異動があった。妖怪ハンター気取りの人間が皆消えて、体質が変わったと聞いていた和樹は少し驚く。変わってないじゃないか、と。

しかしGメンは確かに変わっていたのだ。派遣されてきた人間は猫又に事情を説明して出て行ってもらうように説得を試みた。交渉は上手くいっていた。しかし、途中で邪魔が入ってしまう。地元の猟友会の人間の奇襲攻撃である。

ゴルフ場の開発地の誘致を何とか成功させたい地元人間にとって、出て行ってもらうだけでは駄目なのだ。また、戻ってきてしま

うかも知れない。確実に殺してしまおうという狙いだった。猟友会の人間は全員Gメンによって捕らえられたものの、その騒動の最中に怪我を負った美衣は息子を連れて逃げ去っていた。

そして、何とか山の中で雨露を凌げそうな場所を見つけて…今に至る。

「なるほど。それは災難だったね。」

人間に戻った和樹は、少年の頭を撫でながら言った。残念ながら髪の毛は長いままだ。

「信じて良いかな、と思った矢先に襲われて…。もう、何を信じたら良いのか分からなくなっ…。」

美衣はこのまま病院に身を隠して生きて行こうと思っていたらしい。良かった、心霊スポットとして紹介されていたのだ、これから被害者が出るところだった。

「ん？」

和樹が少年の視線の先を見る。ああ、そう言えば腹ペコだったな。

「とりあえず、食事にしましょう。アナタたちの分もありますから。」

「え、よろしいんですか？」

「ああ、あたしも何故か作り過ぎてしまっ…。」

藤姫が言う。和樹は何か言いたげな視線を送ったか無視された。

バッグから弁当箱を取り出す。確かに多い。出かける時は気づか

なかったが、普通の弁当箱じゃなく重箱用の入れ物三つである。それもこれは家にある一番大きなサイズじゃないか。四人プラス一匹で食べきれるのか？

少年：ケイという名前らしいが、そのケイは弁当箱の中身を見て顔を輝かせた。

「母ちゃん、魚がある！」

「これ、跳ねないの！ちゃんと座りなさい！」

そんな親子を見て、和樹は羨ましそうにする。横島だった頃も両親と一緒にいた時間は長くなかったし、この世界では孤児院育ち。母親という存在を忘れかけていた。なんだか懐かしく、少し寂しい気持ちになった。

食事は、なんとも賑やかに行われた。ケイはまだ子供。過酷な生活に慣れていなかったたので、警戒しなくていいという雰囲気嬉しかったのだろう。子供らしい無邪気さで和樹や藤姫と沢山おしゃべりをしていた。

美衣はさすがに大人らしく、ケイを見守りながらも周囲への警戒を怠らない。食べながらもリラックス出来ない姿を見て、藤姫は不憫でならなかった。

食事が終わり、ケイとイツナが藤姫のそばで遊んでいる時。和樹は美衣に話しかけた。

「美衣さん、これからここに留まるのは、ケイ君のためにも良くないですよ。」

「それは…分かってますが、私達には居場所が無いのです。」

「それなんです。僕の知り合いのGSに保護してもらおうのはどうでしょう。残念ながら、今の世の中間人と関わらないで生きて行くのは難しいです。僕が信賴するGSにお願いしますから、親子で人間界で暮らしてみませんか。」

その言葉に戸惑う美衣。殺されかけたばかりなのだ。当たり前  
の反応だろう。

「それは…。」

「僕も保護の資格持ってますから、僕の所でもいいですよ。イツナを保護してますしね。ただ、僕の知り合いの所の方がアナタに合っていると思います。」

「私に？」

和樹は藤姫を見た。

「情報くれたの魔鈴さんでしょ？」

「なんで分かったんだい？」

藤姫が笑う。ため息をつく和樹。やっぱりか。

「これから、会ってみてくれませんか。嫌なら、僕の所でもいいんです。ケイ君にはこんな所より、ちゃんとした家に住んでもらいたいですし。」

そう言つと、観念したのか美衣は頷くのだった。

昼下がり。レストラン魔鈴は昼のお客ラッシュを乗り切って一段落していた。和樹に連れられて美衣とケイが店に入ると、その姿を見た魔鈴が驚きの声を上げる。

「藤姫様、もう保護なされたんですか!？」

「ああ、後はよろしくお願いするよ。」  
そう言って帰ろうとする藤姫の手をしっかりと握る和樹。

(まあ付き合えよ)

(情熱的すぎるよ、いたたた)

恐る恐る美衣は魔鈴を見る。この人が保護者に？

和樹は魔鈴に二人の事情を説明する。魔鈴の店なら猫又がいても全然不思議ではない。美衣にも仕事を与える事も出来るし、ケイだって住み込みなら寂しくないだろう。魔鈴も人手不足と言っていたので三方得だらけの話だと和樹は思っていた。

「大丈夫ですよ。ここは妖怪のお客様も来ます。差別や偏見を持つお客様はそもそも近寄らないので、きつと安心して暮らせると思います。」

その言葉に、美衣は決心した。

「よろしくお願いします。」

深々と頭を下げる美衣。藤姫と和樹はホッと胸を撫でおろすのだ。  
った。

時刻は丁度おやつの間。和樹たちはここでケーキ等を頼み、穏やかな時間を過ごした。

さて、その帰り道。美衣たちと別れて夕食の買い物をしている時。和樹は抱いていた疑問を藤姫にぶつけていた。

「最初から説明してくれるか？」

「わ、分かったよ。」

藤姫の話によると、つい先日商店街で魔鈴に出くわした時に美衣たちの搜索を依頼されたらしい。

美衣たちと交渉を行い失敗した後、Gメンの総責任者である西条は何人かのGSに協力を要請して美衣の搜索を行っていた。その一人が魔鈴だったのだ。和樹の所に連絡が無かったのは、西条が和樹を知らない為である。西条が見たのはあくまで芦螢子。彼にとって和樹は前回準優勝したGS実績の無い高校生でしかない。

依頼を受けた藤姫は悩む。オカルトGメンと関わりたくないのは和樹も一緒のハズだ。魔鈴の名前だけでなく西条の名前まで出たら嫌がるのは目に見えている。かと言って自分だけで搜索に行くと神社の仕事を和樹に押し付けてしまう。依頼を断るという選択肢もあったが、今の藤姫にはそれも後ろめたく感じてしまう。美衣と過ご

した横島の記憶を持ってしまっているからだ。

藤姫は悩んだ末、事情を告げないまま和樹と一緒に搜索する事に決めた。探すだけ探そう。それで見つからなければ普通にハイキングで終わらせるだけでいい。一度は探したんだ、という事実があれば後ろめたさを感じなくてすむ。

「最初から言ってくれたら良かったのに。」

「言ったら依頼受けたかい？」

うーん、と考える。

「Gメンの後始末はGメンでしろって言ってたかもなあ。美衣さん達の事は心配だけど、こっちの横島に任せたりしてたかもね。」

「ほら。それにさ……。」

藤姫が、手を繋ぎ直す。それは、指を絡める恋人繋ぎだった。

「一緒に出かけたかったのは、本当だよ。最近、こういう事ってなかっただろっ？」

「あ、ああ、うん。」

藤姫の可愛らしく照れた顔を見て和樹も真っ赤になる。普段飄々としている癖に、たまにこうして可愛くなる。卑怯だよな、と和樹は思った。

「ごめんね、和樹。次からはちゃんと言うよ。」

「うん、そうしてくれると、助かる、かな、」

和樹の頭の上に乗っているイツナは、満足そうに頷く。仲良し一番。



「コン？」

そんな会話をしていると、商店街に見知った姿が。イヅナがいち早く反応し、つられて二人も気づく。

「あれは、公平じゃないかい？」

「ホントだ。何してんだ？……って、おい、魚屋じゃなーか！」

いつも行く魚屋である。という事は、釣れなかったな、あの馬鹿親父！

「ねえ、ニジマスや岩魚がターゲットだったんだろう？」

「普通の渓流に行ったんじゃない？釣り堀なら買って誤魔化す事も出来ただろうに……。」

「にしても店に置いてあるのは基本的に海の魚だけだろう？」

「何買って来るつもりなんだか。」

「コン……。」

哀れみに満ちた眼差しを向ける三人に気づかぬまま、公平は店の親父に大声で注文する。

「この鯛三つ！あとカレイも一枚もらおうか！」

なんて言うてからかってやるうか。和樹の顔に邪悪な笑みが浮かんでいた。



### 第三十三話 ユリ子の出会いのはなし（前書き）

この話は、『真剣で私に恋しなさい!』とのクロスエピソードになります。苦手な人は、後書きだけ読んで下さい。本編に関わる流れの部分は、そちらで説明します。川神百代が登場しますが、中学生くらいの設定にしております。そこら辺が気にならない人は、読んでやって下さい。

### 第三十三話 ユリ子の出会いのはなし

鉄橋をカタンカタンと音をたてて電車が走る。窓から見える街並みが夕焼けに照らされて、真つ赤に燃えて見えた。その眩しさに、ユリ子は目蓋を閉じる。堪えてきた涙が一滴、頬を伝った。

電車は横浜から東京へ向かう路線である。自分の住むアパートに帰るには終点まで乗らなければならない。が、ユリ子は途中の駅で降りるとハンカチで目元を押さえながら改札を抜けた。

この日、ユリ子は横浜に住む叔父の家に呼び出された。両親が死んでから身元保証人となってくれているが、嫌われており、距離を置かれている。両親の残した遺産は叔父が管理しており、その遺産目当てで自分の保証人となったのは想像に難くなかった。その叔父の呼び出しである。良い話でないのは目に見えていた。

叔父の要求は至ってシンプルであった。GS試験に合格したなら自分で稼いで生きて行けるだろう。なら、遺産を置いてとつとひとり立ちしろ、と。無茶な話である。そんな無茶が通るわけが無いのだが、ユリ子はそれを受け入れてしまう。何とか当面の学費と生活費は確保したが、遺産の八割近くを叔父に取られてしまった。

何故、ユリ子がここまで酷い扱いを受けているのか。それには理由があった。

ユリ子は小さい頃から『死神』というあだ名で呼ばれていた。関わった人間が怪我をしたり死んだりしたからだ。保育園の先生、小学校の友達、中学生の頃憧れていた先輩。父は事故で亡くし、母は自殺した。そして、もう一人。叔父の娘で、唯一気軽に話のできた

従姉妹である。

ユリ子の入院中、何度か見舞いに来てくれたその従姉妹は、帰りで交通事故に遭い亡くなってしまふ。従姉妹は、数日前にユリ子のベッドのそばで佇む死神を目撃しており、それを日記に書いていた。

日記を読んだ叔父は、ユリ子に娘の死の原因があると決めつけてしまった。だからこそ遺産を奪って路頭に迷わせてやろうとしていたのだが、法律上それは無理である。よって、保護者という名目で遺産を預かり管理していたのだ。GS資格を取ったと知った時は馬車馬のように働かせようとしたのだが、妙な力で反撃されたら適わないので追い出す事にしたのだった。

悪質な、八つ当たり。それを許してしまうユリ子。後ろ向きで内罰的な思考は中々なおらないようだ。ユリ子は、失望と悲しみを胸に叔父のもとを後にする。

いつの間にかユリ子は大きな川に沿った道に出ていた。多摩川である。ユリ子は川べりに下りて、地面に腰を下ろした。膝を抱え、川向こうの街並みを眺める。その風景はオレンジに輝いていた。次第に滲んでぼやけた光が変わって行ったが、目を拭う気にはなれなかった。このまま消えてしまえたら……いつもの後ろ向きな思考に浸ってしまうユリ子。強くなったのに、これでは逆戻りじゃないかと抱えた膝に顔を埋めていた。

「おう、嬢ちゃん。どうした？」

そんなユリ子に、声をかける男がいた。パリッとしたスーツに身を包むその男は、精悍な顔つきをしている。ニカッと笑うその姿は、

不思議なオーラを放っていた。

「貴方は…？」

「いや、ただの通りすがりのオッサンさ。嬢ちゃんがあんまりしょぼくてだから気になったのよ。一体、どうした？」

普段なら、冷たくあしらって逃げる所だが、この時は何故かそんな気になれなかった。この男の表情があまりに人懐っこい笑顔だったから、かもしれない。

ユリ子は、簡単な経緯を話した。遺産の事は話さずに、ただ両親を亡くし親戚に疎まれているという事を。GS資格を所得した途端、突き放されて一人ぼっちになってしまったと。

話を聞いた男は、ふむ、と言って足元の石ころを拾って立ち上がる。

「見てな、嬢ちゃん。」

そう言つと男は綺麗なアンダースローで石を投げる。川の水面を細かく飛び跳ねる石は、広い川の三分の二を越えた所で小さく音を立て沈んでいった。

「凄いです！そんなに遠くまで行くなんて、見たこと無いです！」  
驚くユリ子に男は苦笑いをした。

「でもまあ、向こう岸は遠いよなあ。何度か練習したが、まあこれくらいが精一杯さ。」そして、一息入れて男はユリ子の顔を見て言った。

「なあ嬢ちゃん。周りに流されて生きるのも良いがな、沈んだまま

じゃあいけねえよ。途中で沈んでも良いけどよ、とりあえずあの石ころみたいに流れに飲まれないように跳ねてみないか。」

「え…?」

「向こう岸は遠いさ。もしかしたら無えのかもしれないなあ。でも、今の嬢ちゃんみたいに横で見ている喜んでくれる奴が出てくるかもしれないねえぞ? だったら、また跳ねてみようとも思えてくるさ。気持ち落ち着いたら、また頑張ってみねえか。」

「……………」

「嬢ちゃんには、GSなんて才能があるじゃねえか。てことは先生だっているんだろう? 一人生きているわけじゃねえんだ、いろいろ相談したり、試してみようや。駄目なら、また沈んでもいい。その時はここに来な。嬢ちゃんとは、また会えそうな気がする。」

そう言って男は、ユリ子にまた笑いかける。ユリ子も、何故か先ほどまでの陰鬱な気持ちを忘れて笑顔になっていた。そうだ、何故今まで忘れていたのだろう。自分には、相談できる人がたくさんいるじゃないか。

「そうですね。私、何もしいまま沈んでいました。それじゃあ、駄目ですよね。」

「おおよ。いい顔するじゃねえか。」

「ふふふ。ありがとうございます。」

ユリ子はそう言って笑うと、ふと思いついて男に話しかける。

「そうだ、さっきのあれ、もう一度見せてくれませんか?」

「ん？気に入ったか？よし、じゃあもう一投だ。」  
そう言うとまた石を拾い上げる。

先ほどとは寸分違うないフォームで、腕を振るう。石は、また細かく水面を切り裂き跳ねていった。そこへ…

B A N G !

ユリ子が指先から霊気弾を発射した。

霊気は勢いを無くしていた石に直撃すると、そのまま石をコーティングして勢いを取り戻す。石は水面を飛沫を上げ切り裂き、向こう岸まで跳ねていった。

「ふふふ、向こう岸まで行けましたね。」

「…ははは、こりゃ参ったな！いい腕してるぜ嬢ちゃん！」

驚いて目を丸くした男は、すぐに大きな声で笑い出した。ユリ子も笑う。なんだか小さい頃の無邪気な時間を思い出して、楽しかった。

そんな楽しい時間も、すぐに終わりが来てしまう。近くの道路に駐車していた黒塗りの高級車から一人の秘書らしき人物がやってきて、男に話しかけた。

「ち、もう時間か。じゃあな、嬢ちゃん。機会があったら、また会おうや。」

「はい、お元気で！」

そう言って、ユリ子は二人を見送った。なんとも不思議で、現実



離れた出会い。夕陽を背に受けた男は、一度だけこちらを振り返り手を振ると、車の中に乗り込んで走り去って行った。

ちなみに、ユリ子はこの男と意外な形で再会する事になるのだが、それはまた別の話である。

元気を取り戻したユリ子。これからの事に思いを巡らせながら、川べりから駅へと歩いていった。途中に掛かる橋を歩く。眺めがよく、少し足を止めて風景を眺めた。

そんなユリ子を、舐めるような視線で見つめる男たちがいた。夏休みで気持ちの浮ついた地元の不良たちである。

「ねえ、何してるの？誰かと待ち合わせ？」

一人の男が声をかける。後ろから、数人の男が続いた。

「何もなければ一緒に遊ばない？」

「ねえ、遊ぼうよ。」

その声に緊張するユリ子。危険だ。

「いえ、私帰りますから！」

「そんな事言わないでさあ。」

「ちよつとくらい良いだろ！？」

詰め寄る男たちに、ユリ子は恐怖する。そして…。

「やめてー!!」

ありったけの靈気弾を発射した。

ズドドドドドドド!

「くくうぎゃあああつ!?!」「くく」

吹っ飛ぶ男たち。全員、橋の外へとはじき出され…

ザッパーンッ!

多摩川に落ちた。

「はあ、はあ、はあ…」

へたり込むユリ子。ナンパなんてされた事がない上に不良に絡まれるのも初めて。やっぱり男は怖い…そんな気持ちで橋の下を見る。数人が岸に這い上がっていた。…早く逃げないと!

「ははははは!お前、強いな!」

そんな時、背後から声が聞こえた。

振り返ると、長髪の女の子がいた。自分より年下…恐らく中学二年生くらいだろう。黒で統一された服装はかなり格好良く、ユリ子は目を奪われた。

「なあ、私と手合わせしないか?」

物騒な言葉に、ユリ子は我に返る。手合わせ?喧嘩?横浜って怖い!こんな女の子まで喧嘩するの!?

「あの、私心臓を手術して間が無いので…殴り合いは出来ないんです。」

「え、そうなのか？なら無理かあ。うーん、つまらないぞ！」  
「なんだか男の子みたいな口調。とりあえず喧嘩は回避できたようだ。」

「じゃあ、さっきお前がやった射撃で勝負だ！ここから、アイツらを狙撃するぞ！」

「え……ええええっ！？」

ムチャクチャだ！いくら向こうが悪いと言ってもそれは…。しかし下を見てみると、こちらに向かって男たちが凄じ剣幕で怒って叫んでいる。犯す、とか殺す、とか…。これは、身を守る為にも撃退した方がいいようだ。

「的は八人か。じゃあ、持ち弾四発な。そっちが先行でいいぞ！」

女の子が、勝手にルールを決める。仕方ない、やるか。ユリ子は指を構えると男たちに向かって霊気弾を発射した。…四発同時に。

「……ぎゃあああああ！」「」「」

「おおっ！？」

同時に吹っ飛ぶ四人、驚く女の子。距離にして役五十メートルだったのだが、ユリ子にとってその距離はまず外す事の無い距離である。飛んだ四人はまた川に投げ出され、残った四人はきびすを返して逃げ出した。

「やるなあ、お前。タイムラグ無しってのは驚いたぞ。」

「え、あの、逃げちゃいますよ！距離遠くなって、不利に…」

「ん？ああ、そんな事か。じゃあ、私の番だな。行くぞ？」

のんびり構えている女の子。残った四人はすでに100メートル以上離れている上に、バラけだした。

「ハッ！」

声を発する女の子。その手から放たれるのは、霊気と違って燃えるようなエネルギーの塊…気である。四つの気弾は、まるで自動追尾システムでもあるかのように男たちを追いかける。そして…

「ぎゃあああ！」

「うわあっ！？」

「ぐはあああっ！」

「ぶぎゃー！？」

遠く離れた所で悲鳴を上げた。

「うーん、コレじゃ勝敗がつかないなあ…。」

いや、もう勝負ついているだろう。自分より圧倒的に悪条件で、クリアーしてみせたのだ。ユリ子は呆気にとられる。そして、まさか勝負がつくまで帰してもらえないのでは…と不安を感じ始めた。

「うーん、じゃあ今度は何で……………ん？」

「え……?」

その時、遠くから何やら音が。ピーポーピーポーと大きな音を立てる一台の車、それは…

「ヤバい、逃げるぞ!お前、この辺の人間じゃないだろ、電車使うのか?」

「え、はい。…キャツ!?!」

女の子は、ユリ子の手を引いて走り出す!車は、パトカーだった。男たちに絡まれていたユリ子を見て、通行人が通報していたのだ。しかし現状は…ユリ子の過剰防衛と受け取られかねない。

「少し裏道通って駅に行くからな!」

「わっ…は、はい!」

何でこんな事に!?!ユリ子は手を引かれるまま必死で走る。普通に走ると遅れるので、身体全体に靈気を巡らせ身体強化した。あの、変身する一歩手前の状態である。

「お!?!やるな、お前!じゃあもつとスピード上げるぞ!」

「ハイ!」

裏路地や、危ない人のいる通りを走り抜ける。それはまるで一陣の風。途中、喧嘩している集団の中を走り抜けたが、先に行く女の子が一瞬で全員を吹き飛ばした。何という戦国無双。ユリ子は、飛ばされた人間全員に靈気弾を当て、地面に落ちる勢いを殺した。こちら人間離れしている。

そして、ようやく駅にたどり着いた。女の子は全然疲れてないよ  
うだが、ユリ子はバテていた。今日はきつと、一週間分は走ったよ  
うな気がする。何キロカロリー消費出来たのだろう。散々な目にあ  
ったものの、いつの間にかユリ子は楽しくなっていた。どうも自分  
は壊れているな、と思う。そして、女の子と顔を見合わせ…。

「「あはははははははは！」「」

二人は爆笑するのだった。

駅の改札口。ユリ子は切符を買って女の子に別れを告げる。

「お前、面白かった！名前は？」

「吉村ユリ子、って言います。あなたは？」

「私は川神百代！世界最強を目指してる！」

自信満々に言う百代。確かにこれだけ強ければ実現不可能な目標  
ではないだろう。

「また会えたらいいですね。」

「ああ！早く全快して、手合わせ出来るようになれよ！」

いや、それは嫌だ。…などと言えるわけもなく、ユリ子は笑顔で  
頷くと改札を通って行った。手を振る百代にユリ子も手を振って応

える。今日は、最悪な1日だと思っていたのに。何だか凄く大変で、楽しい1日になっていた。

ユリ子は帰りの電車の窓から外を眺める。反射する自分の姿の向こうに、沢山のネオン。残像が赤や黄色の糸になって過ぎ去って行く。流れて行く世界に、自分も飲み込まれず飛び跳ねて行けるだろうか。そんな気持ちになったが、その不安を打ち消すような百代の笑顔を思い出し、ユリ子は微笑んだ。あの子みたいに、なりたいなユリ子は何やら物騒な事を考えながら窓の向こうを眺めていた。

そんな事があってから数日後。  
ユリ子は天矢神社に来ていた。

「バイト？吉村さんが？」

和樹は驚いたような表情をする。確かに破魔札の売り上げのおかげで人を雇えるくらいには余裕があるが……。事情を知らない和樹は戸惑うが、横にいた藤姫は何でもないように言う。

「いいじゃないか。社務所に入ってもらっただけでも助かるし。公平もおキヌの後釜が欲しいって言ってただらう？」

確かにおキヌがいた時は凄く助かっていた。一人増えただけで、負担は一気に少なくなる。

「いいけど、条件面は親父に相談してもらっよ。俺一人じゃ決めら

れないから。」

そう言って和樹は公平を呼んだ。ユリ子は門前払いも覚悟していたので、ホッと胸を撫で下ろす。これで、しばらくは安心して学生を続けられそうだ。

「おまたせ、ユリ子さん。じゃあ社務所に入ってもらえるかな。」

「はい。」

公平に促され、ユリ子は社務所に入って行った。

「しかし、理由を聞かなかったね。何でだい？」

「だって、プライベートに口出ししたくないし。ワケありっぽかったから、無理に聞いて傷つけたくないんだ。」

藤姫はやれやれと肩をすくめる。

和樹は遠慮しすぎだ。女は、好きな男には踏み込んでもらいたいモンだよ、と心の中でつぶやく。

「この間、5000万円の破魔札作って売れたから、金銭面では問題無いんだよな。確かにここらで一人増やすのも良いかもしれない。」

「和樹は、嬉しくないのかい？」

何だか、少し他人行儀な気がして藤姫が尋ねる。和樹は困ったふうに答えた。



「一緒にいたら、嬉しいよ。楽しくなると思う。でも、さ。知ってるだろ？俺、惚れっぼいんだ。仲間以上の気持ちを抱いてしまっそうで、怖いんだよ。そんな気持ち…持っちゃいけないんだ。だって、俺は…」

…俺は、元々この世界の人間じゃないから。

そんな言葉を飲み込んで、和樹は寂しそうに微笑んだ。藤姫は、その笑顔を見て悲しい気持ちになる。こんな辛い笑顔は、見たくなかった。きつと、和樹はその孤独感を誰にも打ち明けられずに今まで過ごして来たのだろう。魂のどこかで和樹と繋がっている藤姫は、和樹の気持ちを少しだけ理解する事が出来た。

藤姫が、和樹の手に自分の手を重ねる。自分には、その辛い気持ちを癒せないのかい？そんな目で和樹を見つめて…

ガラスと部屋のドアが開く。

「おう、採用だ採用！」 公平に邪魔された。

「な、何だい藪から棒に！」

「何ってユリ子ちゃんの採用だよ！いやー、いい子じゃないかユリ子ちゃん！ちなみにこれからずっと住み込みだからな！和樹、しっかり見てやれよ！」

何気にちゃん付けになっていた。

「え、住み込み？」

驚く和樹。ユリ子が事情を説明すると、和樹は納得して頷いた。

この歳で親戚から邪険にされたら、本来なら塞ぎ込んでしまうのが普通だ。よくこの子は前向きでいられるな、と和樹は感心する。

だったら知り合いとしてサポートしてやろう、と受け入れた。

「よろしくお願いします。」

「こちらこそ。よろしく、吉村さん。」

それを、微妙な表情で見つめる藤姫。確かにユリ子は良い子だから同居も賛成だが…和樹と二人きりになれる時間は減るんだろうなあ。そこらへんが、少し寂しい藤姫だった。

### 第三十三話 ユリ子の出会いのはなし（後書き）

こうして、親戚に冷遇されていたユリ子は、和樹の居る天矢神社に住み込みで働く事になりました。

これで、神社は公平、和樹、藤姫、イツナ、ユリ子の5人体制になります。妙神山から遊びにくるメンバーも居ますし、きつとドタバタと楽しい日々を送って行く事でしょう。

本編終了前の真剣恋クロスネタは、一応これで終了。機会があればユリ子を主人公に外伝を書いてみたいです。いつになるかは分かりませんが。

### 第三十四話 虎と娘っ子のはなし

その日、タイガー寅吉は悲しみに打ちひしがれていた。手元には、結構な額の現金。普段、給料の殆どを積み立てに回されている彼にとっては、本来ならば喜び飛び跳ねるような額である。しかし…

「ハア〜……エミちゃん、あんまりジャー…。」

ため息がまた一つ。情けない声を出してタイガーは雇用主の名前を呟いた。

GS試験で陰念と戦っていた時に聞いた、小笠原エミの言葉はどうも本気だったらしい。あの試験が終わってからしばらくしたある日、事務所へ向かったタイガーはエミから暇を言い渡された。

「今日から三週間、アンタには休暇をとってもらうワケ。怪我もしてるし、しばらく身体を休めると良いワケ。」

エミはそう言って、当面の生活費等をタイガーに渡した。タイガーはショックで話を聞いていなかったが、この金は先のGS試験潜入調査で得た報酬のタイガーの取り分。それと事務所としての危険手当でプラス医療手当である。そこに、エミの個人的な気遣いから多少のボーナスが加えられていた。いつもなら積み立てに回せ、と言う所だが、試験に落ちてからずっと気落ちしているタイガーに少し豪遊でもして気を晴らしてもらおうと思っていたのだ。

しかし、タイガーはちゃんと人の話を聞いてなかった。自分はどう要らないのではないか。ひょっとしてこれは退職金？そんな有り得ない考えが頭の中をぐるぐると回って、負のスパイラルを描いて

いた。

結局、その後のエミの言葉を聞き流してしまったタイガーは、三週間の休み、という単語だけを覚えて自宅のボロアパートへと帰って来たのだった。

「ワツシは…ワツシはこの先どうしたらいいんジャー…」

誰かに相談しようとも思った。しかし、顔を思い浮かべると同時に断る理由まで浮かんできてしまう。

横島サン…いや、恋人との時間を邪魔したら怒られるんジャー。怒った横島サンはエミしゃんより怖いんジャー…

ピートサン…いや、ピートサンにも恋人がおるんジャー。多分この場合怒るのは愛子しゃんなんジャー…

和樹サン…一番怖いんジャー。おなごだったイメージ強すぎてどう接していいのか分からんし…第一、おなごの取り巻きが一番多いのも和樹サンじゃケン、あれだけの人数のおなごに怒られたら心が折れるんジャー…

もう、断る言い訳を探してるだけなウジウジとした思考に没頭し始める。これがタイガーがタイガーたる所以ではあるのだが、それにしては酷い。

しかし次の瞬間、タイガーは衝撃的な事に気づく。見開かれた目。その顔には驚愕の表情。タイガーは震える声でつぶやく。

「ワツシしか、一人モンがおらん！皆、恋人持ちばかりジャー！」

なんという思考。先ほどまでの悩みから変化しすぎである。

「これは…これは一大事じゃケン、早くなんとかせんとワツシだけ寂しい毎日を送る羽目に…っ！」

とつくにそうした毎日を送っている事にも気づかず、焦り出すタイガー。女は苦手だが女好きという難儀な性格の彼に、果たしてついて来てくれる奇特な女性はあるのだろうか…。タイガーはとりあえず、身近な女性を思い浮かべる。そして…

「うう…、エミしゃんあんまりジャー！」

スタートに戻った。

結局その日はエンドレスリピートを繰り返す壊れたラジカセのようにタイガーは煩悶し続けたのだった。

…そして、一夜明けた朝早い時間。タイガーは、使い古したマウンテンバイクにまたがり朝日を眺めた。

「エミしゃん、ワツシは男になる！立派な男になって見せますケン、待っててつかあさい！」

懐には大金。タイガーはペダルを力強く踏み込むと、朝日に向かって走り出した。

「この金で、立派に女を克服して見せるケンノー！」

これはひどい。

…最悪な方向に決意を新たにしたいタイガーは、高らかに宣言する。

新聞配達のおじさんが吹き出し、どこかで犬がわめきたてたが、今のタイガーにはどこ吹く風であった。

こうして、タイガーの波乱に満ちた夏休みはスタートした。彼は知らない。この旅が、彼を本当の意味で漢にする旅となる事を。そして、その後の彼の人生を大きく変えるきっかけとなる、という事を…。

「タイガーが居なくなっただけ？」

朝、美神ひのめから電話を受けた小笠原エミは間の抜けた声を出した。何でも、夏休みの宿題を終わらせる会を発足した横島とピートがタイガーの自宅を訪ねた所、留守だったらしい。大家さんには前日に「遠出しますケン」と伝えていたようだ。電話をしても繋がらず、心配していた。

「ああ、それなら心配要らないワケ。暇を出したのは私だし、ある程度お金を渡したから遊びに行っただけでしょ。」

『そっかあ、安心したよ…。前会ったら暗かったし、これで元気になるといいね。』

「怪我してる割に遊びに行く元気があるなら、来月の試験も心配無いワケ。これで今度こそ、資格所得は間違いないワケ。」

『え…？試験？』

自信満々に答えるエミの言葉に、キョトンとする美神。

「ええ。来月末にもGS試験があるワケ。アイツには昨日ちゃんと話していたから、もしかしたらその為に今のうちに遊んでおくのかも知れないワケ。」

『うわー、凄いやる気あるね！そんな風に見えなかつたけど、立ち直り早いんだ、タイガー君。男の子だなあ。』

感心する美神に得意気になるエミ。当たり前だ、自分がわざわざ発掘してきた才能なのだ。こんな所で潰れるワケがない。見てなさい、ひのめ。アンタの所の助手にも負けなくらい有能だという所を、次の試験で証明してみせるワケ！

エミは強い信頼をタイガーに置いていた。もし彼がちゃんとエミの話聞いていたら…もしエミが自分の期待を彼に伝えていたら…この夏休みはきつと平凡な夏休みとなっていただろう。

その後しばらく談笑して電話を切ったエミは、ここに居ないタイガーを思った。次に会う時までには、思う存分楽しんで元気になって戻って来い、と。

その頃、タイガーは国道を猛スピードで南下していた。目指すは



横浜。湘南の海を目指して突っ走っていた。

「海に行けば、おなごは盛り沢山なんジャァー！金さえあれば、ワツシでもモテモテじゃけんノー！」

最低な事を口走りながら。どうも、大金と夏休みの解放感がタイガーを間違った方向に目覚めさせたようだ。

タイガーは今回、いわゆる自転車一人旅的なニュアンスで家を出ている。大きなリュックに水筒、寝袋をマウンテンバイクに括り付けて…明らかに遊んでいる女性から避けられるスタイルのだが、彼にはそれが分からなかった。

「しっかし、ここは何処ですかいノー…どうも地図とは違う道のような気もするんジャァー…」

気づくとタイガーは山の中、道に迷っていた。東京から横浜なら電車で行けばいいものを、自転車一人旅などと調子に乗った結果がこれである。分かりやすい国道を選んできたハズのだが、今ではその道も細くなってきた車がギリギリすれ違えるくらい。周囲は木々に覆われ見通しが悪くなっていた。

そして、運の悪い事に…

ポツツ…

ポツツ…ポツツ

「い、イカン、雨が降って来たんジャァー！」

焦るタイガー。雨合羽をリュックから取り出し、急いで着る。しかしあまりの巨体に、雨合羽はまるで子供用のように一部しか覆わ

ない。気が動転したタイガーは何故か虎男に変身するが、しよせん幻術なので雨をはじけるわけもなく、直で身体に受けまくった。

ザーッ！

「うああああ、こんな夏休みはイヤなんジャー！」

国道を自転車に乗った虎が猛スピードで駆け抜ける。途中、車とすれ違わなかったのは幸運だった。目撃されたら確実に通報されるだろう。

…どれくらい走っただろうか、タイガーは息を切らせながら自転車をこぎ続けていた。さすがに幻術は解け、ビショビショの身体が露わになっている。雨合羽は風に煽られもはや役目を果たしていなかった。

「ぶ、ぶえつくしよん！」

さすがに頑丈なタイガーも体調を崩し始めた。このままでは山中で行き倒れに！？タイガーはイヤな光景を頭の中から必死で排除する。

そうして走っていると、道を外れた所に民家を見つけた。これ幸いと、タイガーは急いで自転車を走らせる。雨宿りだけでもさせて貰えたら充分助かる。

この時、タイガーは披露の極致にあつたから、気づけなかった。自分が、異空間に踏み込んでしまったという事に。

「すみません、誰かおらんかいノー！」

古い日本家屋。住んでいるとしたら高齢者だろうか。そう思いながら声をかけるが誰も出てこない。ううむ、これは変だ。タイガーはやっと違和感に気づく。呼び鈴の無い家も珍しいが、果たしてこんな雨の中家を留守にするものだろうか。

仕方ないので、タイガーは玄関先に腰を下ろして休憩させてもらう事にした。さすがに勝手に上がるわけにはいかない。腰を下ろすだけでも楽になるのだ。

しばらく休んでいると、身体が急速に冷えて来た。これはいけない！慌てるタイガー。すると、不意に玄関近くの襖が開く。

スッ…

「え…、だ、誰かおるんかいノー…？」

しーん、と静まり返っている。

なんだか気味が悪いと思っていると、今度はその奥の襖が開いた。これは、来いと言っているのだろうか。

「お、お邪魔しますケン…」

恐る恐る、上がる。次々と開いて行く襖。それを追うように歩いて行くと、たどり着いた先には時代がかった囲炉裏のある部屋があった。火がくべてあり、吊されたヤカンから湯気が出ている。季節は夏だったが、身体の冷えている今は有り難かった。

…相変わらず、誰も居ない。

タイガーは無人の座敷部屋で、座布団に座って周囲を眺めた。古い。本当に現代なのだろうか？そして、身体を休めながら気づく。

あれだけ激しかった雨音がしないのだ。これは、本格的におかしい。

しかし疲れきっていたタイガーは、どうでも良くなっていた。敵意は感じられないし、今更心配した所でどうにかなるものでもない。

「これなら、服も乾い……おお!？」

濡れていた服を乾かそうとしてタイガーは驚く。なんと、先ほどまで絞れるくらいに濡れていた服が乾いているのだ。これは、助かる。

「何処の誰かは分らんが、助かったんジャー。」

タイガーは無邪気に喜んだ。誰も居ない空間に礼を言ってから、かじかんでいた手を囲炉裏へ向ける。服を乾かした絡繰りなど、彼にとってはどうでも良かった。

ゆらゆら揺れる火と、シュンシュンと音を立てるヤカン。ボンヤリと見つめながら、タイガーは今までの生活を振り返っていた。

小笠原エミがタイガーを助手に迎えたのは、それまで働いていた助手たちが怪我で退職してしまっただけからである。典型的な後衛タイプのエミは、攻撃に移るまでの時間稼ぎをする為の前衛を必要とする。それが、最近悪霊たちが強力になってきており、今まで前衛で頑張ってきた人間は皆怪我を負ってリタイアしてまった。その後、頑丈な壁役を探して様々な人間を試した結果、ダントツで頑丈だったのがタイガーだったのだ。

幻術を駆使するタイガーは、主にヤクザなど裏の人間がターゲットとなる仕事で活躍した。幻術で怖がらせるだけで簡単に終わる仕

事が多かった。悪霊戦でも壁として非常に優秀だったので、エミとしてはこれ以上ないくらいに重宝していたのだ。実際、タイガーを雇ってから収入はウナギ登り、仕事の成功率も今の所100%を維持している。

タイガー自身、GS試験が始まる前までは、自分の実力に多少自信を持っていた。しかし、その自信もピート、横島と出会う事で脆くも崩れ去る。特に、横島。自分と同じ年齢で、霊能に目覚めたのも自分より後。持って生まれた才能の差を始めて実感したのだった。

ワツシは、何をしてるんジャろう…

タイガーは、力なくつぶやいた。

どのくらい、時間がたっただろうか。

気づくと、タイガーは先ほどの囲炉裏のある部屋に隣接する座敷で、布団に寝かされていた。襖は開いており、視線を向けると囲炉裏の火が見えた。

そこには、小さな女の子がいた。

黒髪おかつぱ頭、緋色の着物を着た姿は日本人形のような。ちょこちょこことせわしなく動いていた。

「あ、あの一。」

恐る恐る声をかけるタイガー。女の子は一瞬ビクツとするが、タイガーの方を見ると安心したような表情をした。

「気づいたのだな。食事の用意をしてある。食べられるなら、食べるといい。」

女の子のいる場所を見ると、小さなお膳が置いてあった。そこにオニギリが五つほど置いてある。

「すまんノー、布団で寝かせて貰って、食事まで用意してもらつとは世話になりっぱなしジャー…。」

恐縮するタイガーを見て、女の子は笑う。

「お前は、怖がないんだな。」

「恩人を怖がる程、恩知らずではないですケン。ありがとうございます、ですジャー。」

「お前は、良い奴だな。ありがとう、って言ってくれたのは、お前で四人目だ。他は逃げたり怒ったりしたからな。」

何ともぶっきらぼうな受け答えだ。だが、この子には似合っている気がした。

タイガーは、女の子に促されるまま囲炉裏のそばの座布団に座る。用意してくれたお茶を飲みながら、タイガーは自己紹介をした。

「ワツシは、タイガー寅吉と言いますケン。こんななりしてるけど、立派に人間ですジャー。」

「ははは、分かっている。しかし、虎か。強そうで良い名だ。…私

は、この屋敷に生まれた妖怪だ。自分が何者かは、分からない。何せここには、私以外に誰もいないからな。」

こんな屋敷に、一人。寂しいだろうに、とタイガーは同情した。

「ここは…一体どこなんジャー？どうも、迷い込んだみたいな感覚なんジャー…」

「ここは、マヨイガという。出口、入り口とも全ての森に通じ、一つの所に留まる事は無い、らしい。」

らしい、と言った。つまり、出た事が無いのだろう。

「か、帰るにはどうしたら良いんかいノー。」

「普通に玄関から出れば良い。大抵は同じ所に出るようだ。」

タイガーは安心した。玄関先に自転車を止めたままだったのだ。初めての給料で買った中古のマウンテンバイク。無くなるのは嫌だった。

その後、タイガーは女の子の用意してくれたオニギリを食べながらいろいろな話をした。エミに拾われる前の失敗談や、仕事での楽しい思い出。女の子は楽しそうに聞いてくれた。娯楽に飢えていたのかもしれない。

何時間たったのだろうか。

そろそろ帰ると言うと、女の子は少し寂しそうな顔をしてタイガーを玄関に案内した。

「また、会えるかいノー。」

女の子は、首を振った。

「この仕組みは良く分からん。ただ、出て行った人間がここにもう一度戻ってくる事はなかった。」

それは…寂しすぎる。タイガーが暗い顔を見ると、女の子は慌てて話を変えた。

「そ、そうだ。マヨイガから出ていくなら何か一つ物を持って行く事になっている。何か、欲しい物はあるか？」

急に言われて、戸惑うタイガー。欲しい物？目の前の女の子が年頃のおなごなら、躊躇なく…いや、躊躇しながらも「お前が欲しいんジャー！なんて言ってたんジャがノー…」

「ん？私？」

「え…ああ！？声に出てもうたんジャー！いや、無理なのは分かっていますケン、聞き流してつかあさい！」

「いや、無理ではないぞ。私はこの主ではない。単にここで生まれただけだからな。」

「え…ええと、なら一緒に来るかいノー？」

そう言つと、女の子は頷いた。

…いいのだろうか？本人が良いと言つなら、いいのだろうか。



「じゃあ、よろしく頼みますケン。」

「ああ。よろしく頼む。」

その言葉を交わし、二人は一緒にマヨイガを出るのだった。

ゆっくりと休んで体力の回復したタイガーは、やはり妙神山で修行しただけあつてすぐに周囲の異変を察知した。マヨイガは既に消え、小さな祠があるだけだった。そして、そこから出て来た自分たちを取り囲むように、農家らしき人たちが集まってきた。手には、鍬や鎌を持っている。

「童神様を連れて行くでねえ！」

「この罰当たりが！屋敷から何持つてく気だ！」

「コイツも殺してしまうだ！わしらの宝を横取りする気だ！」

タイガーは混乱する。なんだ、これは！童神？この女の子の事か？殺す？

「今、殺すと言ったな？どついう事だ。」

女の子も、その言葉を聞き逃さなかった。嫌な予感が頭をよぎる。

「ああ、童神様。大丈夫です。御屋敷から盗みだされた物はちやあ

んと取り戻しました。だから、出て行く事なんて無いんです。」

「そうじゃ。童神様はこれまで通り、御屋敷に留まってワシらに幸を授けてくれればええんじゃ。」

女の子の顔が怒りに紅潮する。

「あれは私が持たせた物だ！答える、殺すとはどういう事だ！」

その問いに答える者はいない。ただ、感情の無い目で女の子を見つめるだけだ。無言。それが、嫌な想像が現実に起きてしまった事であると確信させる。

「ま…まさか…。そんな、美也子や健二、孝蔵は…そんな、そんな……」

ショックを受ける女の子の前に、スツと、タイガーが庇うように立つ。事情はよく分からない。自分は頭が悪いから。だが、そんな頭の悪い自分にも分かった事がある。コイツらが、この女の子をこの土地に縛り付けているのだ、という事。全ての森に通じているハズのマヨイガを、あの祠を使って縛り付けていたのだろう。

「こんな、小さなおなごを閉じ込めて…せっかく出来た友達も奪つて、許せんのだジャー！」

「ふん、盗人がやかましい！これはこの村のやり方なんじゃ！」

「よそ者は出ていけ！童神様を置いて出て行け！」

「いや、秘密を知られたからには生かして外には出せん！殺してしまえ！」

その言葉を聞いて、女の子は悲鳴をあげる。

「や、やめるのだ！殺す必要はないだろう！やめてくれ、タイガーは…タイガーは何も悪くない！何も取ってはいない！！」

しかし、その言葉を遮ったのは意外な事にタイガーだった。

「いや、盗って行きますケン。大人しく盗られてつかあさい。」

瞳に燃え盛るのは野獣の魂か。普段大人しいタイガーとは思えない気迫が、全身に漲っていた。

タイガーは、この時、初めて仕事を抜きにして純粹に誰かを守りたいと思っていた。そして初めて、誰かの為に怒っていた。その気持ち…GS試験でも発揮出来なかった彼の本当の実力を引き出していた。

「タイガー…」

女の子が見上げる。その姿は、先ほどまでの朴訥な大男の姿では無い。金の毛並みに覆われた背中に、思わず見とれた。

最強の獣が、そこに居た。

「化けモンじゃああああっ！」

「殺せ殺せ！童神様を取り戻すんじゃあああ！」

一斉に襲いかかる村人たち。相手がどんな者であろうと、今まで

このやり方で殺してきた。警察であろうと、GSであろうと、なにも知らない子供であろうと……  
しかし、相手が悪すぎた。

「グオオオオオオオオオオ！！」

全身の靈気を爆発させ、全方向に向かって靈波を放つ。同時に、女の子の周りに靈気の壁を作って巻き込まれないようにした。これは、横島でさえ未だに成功させる事の出来ない、高次元の靈気コントロールである。それを可能にしたのは、タイガーの資質の問題なのだろう。

横島が怒りをトリガーとしたように。タイガーは守りたい気持ちを通りガーとして覚醒したのだ。

タイガーの靈気放射によって村人の殆どが吹き飛び、意識を失う。殺してはいない。どんなに怒ろうと、タイガーは命までは取らない。ただ、心だけは破壊し尽くしていた。靈波に乗せた、幻術で……

唯一攻撃を免れたこの村の村長は驚愕していた。こんなに強い者が村を訪れた事など、今まで一度もなかったのだ。殺しをしてもバシなかったのに……この村は幸運を約束されたのではなかったのか！？

「お……おのれえ、お前さえ来なければ……っ！」

「来なければ……きっと、この娘っ子は一人ぼっちだったんジャー。子供の幸せ奪って、大人がいい思いをするのは、間違つとるケン。」  
「妖怪なんだぞ！座敷童子なんだぞ！座敷童子はいつか出て行ってしまう！幸せを留めておくには縛り付けなくてはならん！その何が悪い！」

座敷童子。幸せを呼ぶ子供の妖怪。しかしタイガーにはよくわからなかった。

「子供は外で遊ぶもんジャー！閉じ込めて何が幸せかああああ！」  
ズレながらも、怒りは本物だ。後ろで見えていた女の子は感動する。自分を妖怪と知っても、この男はただの子供と見てくれていた。

タイガーは拳を放つ。村長は、精霊石を投げつけその攻撃を逸らした。

「グッ…霊能者!？」

「ははははは、当たり前よ！ワシがマヨイガを縛り付けたんじょからな！」

タイガーの顔色が変わる。

「もつと言ってしまったえば、これまでマヨイガに近寄ってきた者を殺すように指示してきたのもワシよ。当たり前じゃろう、村の宝を狙う者は皆殺しじゃ！」

そう言っつて、村長は一枚の札をとり出す。吸引札。それを女の子にむけた。

「ワシが所有権を持てば座敷童子の加護はワシのモンじゃ！お前なぞに負けはせん！」

恐らく、ボケが始まっていたのだろう。座敷童子の加護が働いているのならば。その加護を受けているタイガーに、そんな策が通じ

るハズが無いのだ。

バキバキツ…

一本の木が、村長に向かって倒れてきた。そして…

ビリッ！

枝が、吸引札を破いた。

「な、なにいいいい！？」

…ハッ！ ま、待つんじゃ、話し合おう！金か、金が欲しいか！？」

迫り来るタイガーに命乞いをするが、もう遅い。村長は、タイガーに頭を鷲掴みにされると、尋常ではない量の霊波を流し込まれる。ビクビクツ…と何度か痙攣した後、意識を失った。タイガーの流し込んだのは、最悪な幻術をみせる霊波。今頃村長は気が狂うほど禍々しい悪夢に苛まされているだろう。

終わった。

辺りに静寂が戻ってくる。

タイガーは危険が無い事を確認してから、変身を解いた。彼は未だに気づいてないが、あの虎の姿は横島と同じ霊気の鎧である。大量の霊気を消耗して少し疲れた顔のタイガー。しかし、その表情はどこか清々しかった。

「タイガー！」

走ってきた女の子を抱きしめるタイガー。それを抱き上げ肩に乗

せると、タイガーは倒れているマウンテンバイクを起こしてまたがった。

「さて、何処に行くかいノー。」

「いいのか？私は座敷童子らしいから…狙われるかもしれんぞ？」

心配顔で言う女の子に、タイガーは大声で笑った。

「ワツシは馬鹿だから分かりますケン、とりあえずやりたい様にやるだけなんジャー！」

何という男だろう。

「しっかし、名前が無いと不便ジャーノー。なんて呼べば…」

「そうだな…」

女の子は少し考えて、言った。

「これも何かの『縁』だ。『ゆかり』と呼んでくれ。」

「よっしゃ！じゃあゆかりしゃんしっかり捕まってるつかあさい！  
おもむろにペダルをこぎ始めるタイガー。ゆかりは驚いてタイガ  
ーの頭にしがみつく。

「わ、わ、タイガー！？」

「落ちないように、気をつけるんジャー！」

そう言って力いっぱいペダルを漕ぐタイガー。瞬く間にスピードは加速、風となって村を離れ、国道に乗った。時速は自転車でもス

ピード違反じゃないかと思われるくらいである。

この日…山に不思議な叫び声を聞いた者が居たと言う。

「これも一応、ナンパ成功なんじゃあああああ！」

「はあああああ!？」

タイガーの未来は、きつと明るいだろう。

ちなみに…問題となった村は、何故か今頃指名手配されていた犯罪者が逮捕されたり、地中から行方不明者の遺体が発見されたりと大騒動が起きたらしいが、タイガー達にはもはや関係ない話である。



### 第三十五話 虎と犬ともやしっ子のはなし

海沿いの道を、タイガーは走る。肩には小さく変化した座敷童子のゆかり。さすがにマウンテンバイクに二人乗り：それも肩に乗っていると警察に怒られるからだ。今ではハムスター程度の大きさになっていくゆかりは、タイガーの髪の毛をつり革代わりにしていた。

「タイガー、金はあるか？あるなら、食事にした方がいい。」

「む？あ、ああすまん、腹減ったんかいノー？」

「いや、私でなくお前だ、タイガー。今朝私の握り飯を食べて以来何も食べてないだろう。もう昼過ぎだ、何か食べた方がいい。」

その言葉に、タイガーはやっと自分の空腹に気づく。マヨイガについたのは昨日の夕方。そこで寝た時間は実は半日以上だったらしく、起きて座敷童子と初顔合わせしたのは今朝の早朝だった。その時食べたオニギリが五個だったが、村人と戦ったり自転車で走りつ放しだったりでカロリーはかなりマイナスになっていた。

「金ならちゃんと用意しとるケン、どこか適当に入るかノー。」

「タイガー、せっかくだから魚が食べたいのだ。」

ゆかりが言うと、タイガーは笑顔で頷いた。その表情は、どこことなく父親モード。せっかく海に来たというのに、タイガーは当初の目的を完全に忘れていた。

海沿いの道を離れ、タイガーは町中の道へと進路を変える。ちょうど港町となっており、小さな定食屋を幾つか見かける。

「多分、あそこが美味しい店っぽいな。」

指差すゆかり。その方向には、少し古びた小さな店があった。地味で、地元の間しか行かないような雰囲気だ。タイガーは少し躊躇したものの、ゆかりに従う。確か座敷童子は幸を呼ぶという。ならば海の幸には詳しいだろう。全く以てトンチンカンな納得の仕方をするタイガー。

自転車を店先に止めて、ゆかりを地面に下ろす。すぐさま子供の姿に戻ると、タイガーの手をとって店へと入って行く。見た感じは親子である。

店は、狭く安っぽい造りだった。カウンター席の椅子はパイプ椅子だし、テーブルにしたってかなりくたびれている。壁はヤニなのか日にあせてるのが黄色っぽかった。

「いらつしゃい、お二人さんだね。」

店のおばちゃんが対応にでる。小太りで、威勢が良さそうな感じだ。

「お客さん運がいいよ。ちょうど黒鯛の良いのが入ったんだ。食べるかい？」

少し戸惑うが、滅多にしない贅沢なのだ。タイガーは頷いた。他に、刺身の盛り合わせ等を頼む。値段は……いい値段だ。以前の自分なら絶対頼まないだろう。しかし今は保護者。ゆかりの為にもセコい真似はしたくなかった。

さて、結論から言うと、この店は大当たりだった。量も質も最高、さすが座敷童子に選ばれるだけはある。ゆかりもタイガーも夢中で食べまくった。黒鯛だが、塩焼き、潮汁、チヌ飯という黒鯛尽くしという形で出てきた。これだけ頼んで二人分で四千円を切るのだから

ら、良心的な店だろう。二人は幸せな顔で舌鼓を打っていた。

あらかた食事を終え、ゆっくりお茶を飲みながら窓の外を眺める。その時、タイガーは何となく疑問に思っていた事を店のおばちゃんに聞く。

「なんだか町に作業中の人が沢山おるんじやが、何かあるんですかいノー？」

自転車を走らせていた時から、気になっていたのだ。この町には、やたらと作業中のオッサンが多かった。のぼりを立てたり、提灯を飾っていたり。

「ああ、祭りの準備だよ。それ知らないで来たのかい？」

「はい。ワツシら、親戚の家から適当にサイクリングしてきましたケン。ここに立ち寄ったのは偶然なんですジャー。」

これは、ゆかりが決めた設定だった。遠出をしてると知れたら、子供連れである事を怪しまれる。近場を散歩してるだけなら、微笑ましく思われるだけだ。タイガーの性格からしてアドリブは効かないと判断して、ゆかりが前もって決めていた。狙い通り、おばちゃんも笑って言う。

「いいねー、やっぱり若いうちは外で遊ばないと。だったら、この近くに神社があるから寄ってくと良いよ。まだ店は出てないだろうけど、夕方からは出店が沢山建つよ。」

「タイガー、見よう。」

ゆかりが興味津々の眼差しでタイガーを見つめる。大した目的があるわけでも無いので、タイガーは頷いた。

会計を済ませたタイガーは、おばちゃんに神社の場所を詳しく聞いてから店を出た。歩いてすぐのようなので、ゆかりも変化せず歩いて向かう。

「祭か…。どんな神様が居るのだろうか。」

「神族さんはおらんと思っくんじゃー…。」

こちら辺の認識の違いは、タイガーが海外で育ったという事が関係するのだろう。神といえば神族と直結するのは西洋的な考えだ。人の理解の及ばない存在を、まとめて神と崇める考え方をするのは日本的であると言える。ゆかりにとって、座敷童子という妖怪と呼ばれたり童神と神様扱いされたりしたので、二つの垣根は非常に曖昧だ。

「タイガーはもう少し勉強したほうが良いな。」

「勉強は苦手なんじゃー…。」

そんな話をしていると、目的となる神社へと続く階段が見えてくる。町の真ん中にいきなり現れる小さい山のような塚のような場所。その頂に向かって階段は続いていた。長くて、少し急だ。

「ゆかりちゃん、捕まっつてつかあさい！」

そう言っつて、タイガーは右肩にゆかりを乗せる。そしてマウンテンバイクを左手で持ち上げると、そのままの体勢で階段を駆け上った。

「うわあああ！？速すぎる、タイガー！」

「うおりゃああああ！」

タイガーは猛スピードで一気に階段を上って行く。見た目からしてインパクトがある。途中、すれ違った爺さんが目を丸くしていた。

神社の境内につくと、そこにはまだ準備中の出店が十軒ほど。どの店も完全には出来上がっていないようで、そこかしこでカンカン、と金槌を叩く音が響いていた。

作業中の人の邪魔にならないように気を付けながら参道を歩いて、社の前へと向かう。社自体は小さな物だった。

「ここは、愛されてるようだな。優しい気持ちに溢れている。」  
にこやかな表情で言うゆかり。しかしタイガーは奇妙な気配を察知していた。妖怪だろうか？

そう思ってキョロキョロしていると、自分たちの来た参道を歩く青年の姿を見かけた。細く、何だか頼りない雰囲気だ。手にリードを持っており、犬を連れていた。散歩だろう。

「こんにちは。」

こちらに向かって歩いていた青年は、タイガーの視線に気づくと挨拶をする。

「こ、こんにちはですジャー。」

「こんにちは。」

旅に出ると、普段気後れして挨拶出来ないタイガーでさえ挨拶が出来る。不思議なものだ。

『ふむ。霊能者と妖怪か。』

「「え!?!」」

その声は、やけに低い場所から聞こえて来た。

『俺はここだよ。』

見下ろすと、そこには犬。嘘だろう? タイガーは目を剥く。そのリアクションに、青年も驚いた。

「君はマーロウの言葉が分かるの!?!」

「マーロウ?」

首を傾げるゆかりに、犬は話しかける。

『俺の名前だ。GS犬マーロウと言えば、業界じゃ知らねえ奴はいねえだろうな。』

「GS…!?!」

驚くタイガー。自分が取れなかったGS免許を、犬が取っているなんて… ちょっと落ち込んだ。しかし、感じる霊気は確かに重く力強かった。

『お前ら、面白そうだな。ちょっとそこの木陰で話しねえか? おい春樹、ジューズ買ってきな。』

「な、なんで僕が…」

文句を言いながらも自販機のもとへ行く青年。主従関係は逆転し

ているのかもしれない。マーロウはタイガーたちを連れて、社脇の木陰に移動して行った。

大きなクスノキの下の芝生に腰を下ろすと、タイガーたちは自己紹介を始める。まず初めに自己紹介をしたのはジューズを買ってきた青年だった。

彼の名前は、吉村春樹。何でも、彼の家は代々霊能者の家系であり霊能犬のブリーダーをやっていたらしい。このマーロウという犬は特に優秀で、警察に出向する事も大いのだとか。

「ボクの家系は、動物と会話出来る人がよく出るんです。霊能の家系で、昔は大きな派閥を作っていたらしいですが…まあ、時代の流れと共に能力者も減って。今はボクだけになりました。」

寂しそうに笑う春樹。そんな春樹の横で、つまらなさそうに耳を掻くマーロウ。

『コイツはな、優しすぎてGSには向かないんだよ。この間も悪霊に騙されて三途の川を渡る所だった。』

「マ、マーロウ！反省してるから蒸し返すなよ！」

そのやり取りを見て、思わず吹き出してしまうゆかり。なんだかいいコンビである。この二人なら、自分の事を話してもいいかもしれない。そもそも、このマーロウという犬は勘が鋭いようだから、自分がただの妖怪でない事に気づいてるだろう。タイガーに目配せしてから、ゆかりは話し始めた。

「私は、ゆかりと言う。最近まである村に幽閉されていたが、このタイガーという男に助けられた。座敷童子と呼ばれたり、童神と呼ばれたり、どんな妖怪かは自分でも分からん。」

そう言つと、二人は目を見開いて固まった。

『驚いたぜ。奇妙なニオイがすると思つていたが…。』

「ボク、初めてだよ、座敷童子に会うのは！」

興奮する二人に戸惑いながらも、タイガーに「ニオイ？私は臭いか？」と聞くゆかり。

『そうじゃねえよ。臭いのはこっちの大男の方だ。』

「マーロウ！」

「ワツシですか！…：そう言えば風呂に入ってなかつたんジャー！ゆかりちゃん、すまんですジャー！」

慌てるタイガーにゆかりは苦笑いして返す。確かに少し気になつていたので。

「春樹、この辺に湯浴みの出来る所は無いだらうか。」

「じゃあ、ウチに来るといいよ。丁度今日は祭りだから、泊まつていくといい。」

え、それは迷惑にならないのだろうか？タイガーが済まなさそうな顔を見ると、春樹は笑った。

「ボク、一人暮らしだから大丈夫だよ。遠慮しなくていいから。」

『そうだぜ。俺たちも暇してたからな。面白い話が聞けそうだ。』



これが渡りに船、というやつなのだろうか。タイガーは二人に出会えた幸運に感謝して、その申し出を受ける事にした。

春樹の家は、海から少し離れた丘の上に建っていた。白い小さな家。塗装で誤魔化してはいるが、だいぶ古いようで壁にはうっすらとヒビが入っている。

タイガーは早速風呂を借りた。汗は乾いて塩になって身体にこびりついていた。どろりでもヒリヒリするわけだ、とタイガーは洗い流しながら思う。いや、肌が赤くなっているから日焼けだろうか。

風呂からあがったタイガーは、先ほどこいそびれた自分のこれまでの経緯を話す。小笠原エミに拾われた話や、仕事の話、この間のGS試験の話。ゆかりは聞くのは二度目だったが、ニコニコと笑顔で聞いていた。話というより、一生懸命話すタイガーの表情が見ていて不思議と和むのだ。

春樹とマールウの二人も、タイガーの話を楽しそうに聞いていた。が、GS試験の潜入捜査の話で六道という単語が出てくると春樹は暗い顔をする。

「ん？どうしたんかいノー？」

「いや、君は六道派閥の人なの？」

派閥？タイガーは考える。小笠原エミは六道冥子と仲が良い。しかし、六道の親たちとは距離を置いている。自分にも、余り安易に近寄るなど言っていたような。…そう言うと、春樹はホツとしたような顔をした。

「良かったよ。一度、勧誘を断ったら仕事がいきなり減った事があってさ。もう関わりたく無かったんだ。」

『ああ、俺もな。GS犬としてGメンに出向しに東京に行った時も、俺を引き抜こうとしゃがったからな。印象は最悪だ。』

さすがにタイガーも渋い顔をする。やる事がえげつない。試しにエミと冥子の合同除霊の際のエピソードを話してみる。冥子の式神が暴走して、ビルが倒壊した話だ。春樹は気の毒そうな顔をしたが、マーロウは思いつき笑い転げた。犬が笑い転げる姿なんて、かなりレアである。

「そう言えば君は、次の試験を受けるの？」

突然春樹に聞かれて、考え込むタイガー。もしかしたらクビになるかもしれないのに、GSなんて目指して意味があるのだろうか。そう言うと、答えたのはマーロウだった。

『その座敷童子を、ちゃんと保護したかったらGS資格は取っておいた方がいいぜ。まずしっかり手続き踏んで、ちよっかい出す奴を牽制出来るようにしておけ。』

「し、しかし、クビになってたらワッシはどの道試験を受けられんのジャー…」

『ははは、それならいい考えがある。要はGSが後見人になりゃあいいんだろう。』

嫌な予感がする。

「まさか、マーロウ……」

『ああ、その時は俺がお前の師匠になってやろう。』

ええええええーっ!?

犬が、犬が師匠!?!タイガーとゆかりが目を見開いて驚く。本気で言っているのか!?

『GSランクAの俺の推薦なら協会も断れんハズだしな。タイガー、仕事をする為じゃなくていい。となりの娘を守る為に、試験に挑戦してみねえか。』

守る為!その言葉に、タイガーの心に火がついた。

「分かりましたンジャー!GS試験に挑戦してみますケン、御指導よろしく頼みます!」

『おう、任せな!お前を一人前のGS犬にしてやる!』

ん?

「待つてよ、ブリーダーはボクの仕事だよ!」

こら待つて!タイガーが焦る。

「そして飼い主は私だ。」

ゆかりが一番黒い事言った！タイガーは、慌てながら考えていた。何故、こうなった…。確か自分はナンパする為に旅に出たのでは？

その日の夜。タイガー達は祭りを見に神社へやって来ていた。スピーカーから流れてくる祭囃子の音がなんとも良い雰囲気を出している。人も結構集まって来ていて、小さな港町の割には賑わっている。

「おう、焼き鳥の二オイじゃねえか。」

「マーロウ、歳を考えてくれよ？十七って、人間で言えば八十超えてるんだから。」

「犬で言えばピチピチの未成年じゃねえか。」

「え？あれ、未成年？あれ？」

まったく、二人の会話は面白いな。タイガーとゆかりは笑いながら、そんな二人について行く。出店は思いの他沢山出ていた。小さな境内にひしめき合うように建てられた出店は、ちよつとした迷路のようだ。タイガーはゆかりの手をしっかりと握って、はぐれないようにした。

ちよつと、四人が何か食べようと店を物色していた時。タイガー

は何やら奇妙な気配を感じた。

「気づいたか？こいつは犬神よ。どうもこの祭りの時期に現れてはひと暴れしやがるんだ。」

「君と会った時も調査中だったんだよ。あの時感知出来なかったから今年はないと思ってたんだけど…。」

「やっぱり人が集まってから暴れるつもりだったんだな。面倒クセエ奴だ。」

二人はそう言って、気配の方向へ駆け出す。判断が早い。タイガー達も急いで走り出すと、前を行く二人が神社の裏手にある林の手前で立ち止まった。濃密な妖気。これは強い！

「見てな。」

次の瞬間、マーロウが林に向かって吠える！霊能力のある者なら、その口から光が放たれるのが見えただろう。霊気の衝撃波は林の一部に当たるとはじけて爆発した。

グギヤアアアアッ！

そこに現れる一匹の犬。デカイ。凄くデカイ。タイガー並みの大きさなのだ。もはや犬というレベルじゃない。

「さすがに、手伝いますケン。」

タイガーが言うと、マーロウは笑った。

「弟子の実力、見せて貰うぜ？」

タイガーも笑い、目蓋を閉じた。そして、全身の霊気を練り上げ

姿を変える。ゆかりを守る。マーロウと春樹、祭りに来た皆を守る……。心の中で呪文のように唱え、ゆっくりと目蓋を開けると、タイガーは一匹の虎となっていた。マーロウと春樹は、呆然とそれを眺めている。

「ウオオオオオンツ！」

「ガアアアアアアツ！」

これは何の怪獣大決戦か。雄叫びをあげた両者は、同時に地面を蹴り上げ突進する。

「ガアアツ！」

タイガーが先に攻撃を仕掛ける。ブウンツと風を切って放たれるフック。しかし…

スカッ

犬神は、尋常ではない速さでそれをかわす。そして、タイガーの脇腹にキバを立てようとして…

「ギヤンツ!?!」

靈気の鎧に弾かれる。互いに、攻撃が通じない…？

『タイガー、精神感応とやらを使ってみる！それなら速さは関係ねえ！』

マーロウの指示に従うタイガー。フンツ、と気合いを入れると、周囲の景色が変化する。相手は犬。正常な判断を出来なくさせるには…

あたり一面に、ビーフジャーキーが現れた。

「グオツ！？ウワオン、ウワオン！」

『おっほ、こりゃあ最高じゃねえか！夢なら覚めるな！』

「え、餌代が楽になるよ！って、これ人用じゃないか！ボクも食べたい！」

……………マールウと、何故か春樹までひっかかる。ゆかりはビーフジャーキーを知らないので戸惑うばかりだ。

「タイガー、気にせず攻めるのだ！」

『了解ジャー！』

我に返り、攻撃を再開するタイガー。犬神に迫り、パンチを雨あられのように繰り返す。しかし、それを直感でかわし続ける犬神。あまりに素早すぎる。幻のビーフジャーキーを追いつつ、避ける事も出来るとは…。タイガーも焦りはじめた。

ゆかりは考える。マールウは最初、何をした？吠えていた。何故あの攻撃が効いたのか…

「タイガー、声だ！マールウのように声に靈氣を乗せてぶつけければ当たる！」

『な、何！？ありや人間にや無理だぜ！ああ、くそっ、まて肉！』

タイガーは、体内で靈氣を急速に練り上げる。試してみる価値は

ある。そう思つて、集中しはじめた。幸い、相手は幻に意識が行つていてこちらを攻撃してこない。

…その時、タイガーは体内に何かが渦を巻くのを感じた。

(な、なんじゃ、これは?)

途端、タイガーの身体が膨大な靈気に包まれる! 荒々しい毛並みに、恐ろしく伸びた牙。そして…

「グオオオオオオッ!」

凄まじい轟音と衝撃波が、犬神を襲う!

ズガアアアアアアンツ!

マーロウの放った何十倍もの衝撃波をまともに食らった犬神は、そのまま消し飛んで靈気のかげらさえ残さなかった。

「わ、ワツシは…」

変身を解いたタイガーは、今自分が何をやったのか理解出来ないでいる。そんなタイガーに、ゆかりは労うように声をかけた。

「タイガー、カッコ良かったぞ。さすが私を救ったヒーローだな。派手な勝ち方だ。」

誉められて、顔を赤くして照れるタイガー。良く分からないが、喜んでるし、まあいいか。タイガーは考えるのを止めた。そして、二人の方を振り返ると…



『ふぬぬぬ、後少しなんだが…!』

「マーロウには渡さない!これ塩分キツいんだから…っ!」

未だ幻と格闘していた。

幻術を解いて二人が元に戻ると、タイガー達はまた出店のある場所へ戻る。あれだけ大騒ぎしたのに、皆平然としていた。それどころか、こちらに向かって拍手までしてくる。なんだ？

「犬神退治は毎年恒例になってるんだ。いつも取り逃がしてるからね。町内会からは、毎年追い払って欲しいという依頼を受けてるんだよ。まあ、慣れたもんなんだ。」

『今年は、すっかり退治したからな。喜んでんだろうさ。』

マーロウの言うとおり、先ほどの戦いはすぐに通報され町内会の会長や警備に来ていた警察が駆けつけ見守っていたらしい。すぐにその会長がタイガー達の所へやってきて礼を言ってきた。追い払うだけでも結構な額が報酬として払われるが、今回は完全退治。提示された金額は莫大であった。

「タイガー君、今回の報酬は君が受けとりなよ。」

ニコニコと言う春樹に、タイガーは気の毒な顔をした。人が良い

にもほどがある。さつき食費がどうとか言ってるのを聞いたのだ。受け取れるハズがないだろう。

「ワツシには今の所金銭面での不安は無いですケン、春樹さんが受け取ってつかあさい。一宿一飯の恩ですジャー。」

「そんな…」

戸惑う春樹。マールロウは春樹を無視してタイガーに話しかけた。

「おう、それなら明日、俺が良いものを見せてやるよ。ちよつとしたお礼だ。」

良いもの？

「まあ、その娘や春樹にや早い店さ。男の嗜みだからな。」

タイガーの目が輝き出す。おお、そっち方向か！？やっと女克服の足がかりが！

「なんだよマールロウ。ボクはタイガー君より年上だよ？」

「ククク、まあ坊やには早いつてこつた。」

笑うマールロウに訝しむ春樹。ううむ、これは面白くなってきた！

結局、会長からの報酬は春樹がみな受け取り、代わりに出店での買い物は春樹の奢りとなった。買い食いを始めると春樹の機嫌も戻り、マールロウも目的の焼き鳥やステーキ串にありつけてご満悦だ。タイガーも、おでんを美味しそうに食べている。しかし、そんな中、ゆかりだけは先ほどの会話を思い出していた。

(どんな店に行くつもりだ…？これは、こっそりついて行くしかない！)  
だらしない顔で何やら妄想しているタイガーを睨みつけながら、  
ゆかりは林檎飴を頬張っていた。

…そして、次の日。

タイガーは失意のどん底にいた。

『おおう、いいケツしてんじゃねーか！どうしたタイガー。楽しめよー！』

「こんな毛むくじゃら見て楽しめるわけ無いんジャー！」  
連れられて来た店は、ペット同伴OKの喫茶店だった。  
確かに、こついった店はペットからしたらキャバクラか出会い系  
つぼくはある。

「あら、そのワンちゃん元気ねえ。」

「あ、どうもすいませんのジャー…」

しかしタイガーに近づくのはババアばかりだ。というかマーロウも歳の癖して盛っている！犬の雰囲気当てられたのか、ババアも  
いかがわしい目でタイガーを見つめていた！

『やっちまえよ若人。』

「人生終わってしまっくんジャー！」

結局タイガーは小一時間、ペット喫茶で羞恥に耐えなければならなかった。自分は一体、なんの為にここに来たのだろう？そんな疑問を、抱きながら…

さて、その頃小さくなっただゆかりはというと。

「むっ、私はお前の子では無いのだ！やあ、舐めるな、ふにふにするなあ！」

店の猫にすっかり抱きしめられ、可愛がられていた。

### 第三十六話 虎と神父と腐れ神主のはなし（前書き）

今回作中に登場する神社と同じ名前の神社は全国各地にあります  
が、それらの神社とは何の関係もありません。フィクションだとい  
う事を念頭に置いて、読んでやって下さい。

### 第三十六話 虎と神父と腐れ神主のはなし

タイガーたちが横浜の港町にやって来て、もう二週間が経とうと  
していた。最初は一泊だけのハズだったが、タイガーがマーロウに  
指導を受ける為に宿泊を延長したのだ。春樹も、まだまだタイガー  
に恩を返したいと強く引き止めていた。

『いいか、タイガー。お前えはスピードが無え上に不器用だ。だか  
らこそ、この吠える力を完全にマスターしねえと素早い奴には勝て  
ねえだろう。』

「承知しとるんジャーわんこ先生。」

今日も、二人は高台の広場で特訓をしている。マーロウの言う通  
り、人間でありながら吠える事の出来るタイガーは、それをマスタ  
ーすれば自身の弱点を完全にカバー出来る。GS試験に挑むなら  
ば、絶対に必要になる力だ。

『まずお前えの今の問題点としては力が安定しねえ所だ。普段の状  
態で、しっかり吠える事が出来るように特訓だ！』

「分かつたんジャー！」

そして二人は、海に向かって吠え始める。わん、わん、と。これ  
は端から見たらシユールな光景だろう。吠える度に口元が光るのだ  
から尚更だ。

二人が特訓をしている時、春樹とゆかりはだいたい買い物をした  
り釣りをしている。主に夕飯の為に買い出しだが、ゆかりのおかげ

か運が良く、釣りでは高級魚が釣れたり、買い物ではクーポン券を貰えたりする。今日も買い物を終えてマーロウたちのもとへとやってきたのだが…

「マーロウ、どうしよう！この間応募した懸賞、当たっちゃったよ！」

『ま、またかよ！？商店街の福引きでも最高でカップラーメンしか当たらなかったお前が…』

「それは言わないでよ！？」

どうにも運が良すぎるのだ。これは絶対にゆかりのせいだ。恩を返す所か、プラスばかりが増えて行く。春樹は申し訳なくて仕方なかった。やはり何か別にお礼をしたいとタイガーに申し出たが、タイガーは笑ってこう言った。

「こうしてわんこ先生に指導してもらえただけ有り難いんジャー。ワッシにしたら、助けて貰いつ放しで申し訳ないくらいじゃケン。」  
『そうだけ春樹。コイツは一生モンの宝になる技を身につけたんだ。今にガツポリ稼ぐようになるさ。後々の為に恩売っといていいくらいだぜ？』

「もう、マーロウ！」

二人のやり取りを見ながら、ゆかりは安心していた。自分には、近くの人間に幸福を授ける力があるらしい。それを知って、タイガーや春樹たちは欲にくらんだ目をしたりしない。こんな人間もいるのか、と感心していた。

ゆかりは、やはり座敷童子だった。日々生活していて、それを自覚していた。座敷童子とは、家に憑くもの。それでいながら、一つの所に留まる事の出来ない存在。ならば何故こうして自由にしているのか。

それは、タイガーがマヨイガから持ち帰ったからだ。マヨイガから持ち帰った物は、永遠にその持ち帰った人間のものになる。タイガーは知らず知らずに、ゆかりを自分のものにしていったのだ。そして、タイガーが拒否しない以上一生幸運を約束される。

ゆかりは、この事をタイガーに内緒にしようと心に決めた。信用していないのではない。逆だ。もしこの事をタイガーが知ったら、自分のせいで不自由をさせていると勘違いして所有権を放棄しようとするだろう。それだけは、嫌だった。

ゆかりは、タイガーが好きになっていた。

その日の夕方。

春樹の運転で、少し離れた店に向かっていたタイガーたちは不思議な光景を目にする。

「春樹さん、あれは何ですかいノー。」

「え？ああ、海神祭の神輿だね。そうか、だから今日こんなに渋滞してるんだ。失敗したなあ。」



海神祭？ゆかりが尋ねると、答えたのはマーロウだった。

「主人神社<sup>メイン</sup>って所の祭なんだけどな、昔は海で死んだ奴を祀ってた神社だ。今じゃ観光に向いてないからって全く別のモン祀ってる罰当たりな神社さ。」

「マーロウ、言い過ぎだよ。…でもまあ、典型的な観光神社だよ。昔から居る地元の人からは、嫌われてる。」

そう言う春樹の顔も、少し嫌そうな表情をしていた。

ゆかりとタイガーは、警備員に誘導され道路を横断する神輿をボンヤリと眺める。若い人ばかりが担ぐ神輿は、奇妙なくらいカラフルで有り難みは感じられなかった。

神輿が渡りきってしばらくしてから、やっと車が流れ出す。タイガーの腹がグウと鳴ると、皆が笑った。さっきまでの微妙な空気は、それで消し飛んでしまった。

### 【唐巢神父】

シンプルに生きていられた頃に、戻りたいと思った事は無いが、懐かしく思い返す事はある。それは複雑な利害関係が絡む仕事を請けた時や、世の無情を感じた時など、様々だ。教会を飛び出し、俗物の崇める神を憎んでいた頃。きつと私は今よりも輝いていたのだらう。

その仕事を請けたのは、依頼者がGS協会を通して私を直接指名してきたからだ。私は神社業界には詳しくないから分からないが、

GS業界と距離を置く彼らにしては直接的なアプローチ。少し警戒しながらGS協会の人間に詳細を聞くと、やはりクセ者であった。

その神社は主人神社といい、最近新しく宮司が変わったという。その宮司は金儲けに走り、昔から伝わる行事を廃止して全く関係の無い観光行事を始めたという。地元の人間の反対を押し切り行われるイベント。何故か増え続ける霊障。今回の依頼は、そうした霊障を引き起こしている原因を突き止めるというものだ。

この神社が神社業界の助けを受ける事が出来ない理由。それは、境内にチャペルを建てた事が原因だ。宗教上の意味を無視して、結婚式はチャペルの方が人気があるからと営利目的で建てた事によって、業界から締め出される事になった。その後も競馬に勝つ為の神社や、境内に墓地を作るなど好き勝手やっていると言う。同じ業界に助けを求められないという事で、今回GS業界に助けを求めたというわけだ。

私は、このような仕事を請ける時は助手を付けないようにしている。過保護と思われるだろうが、ピート君にはあまり汚い人間を見せたくは無い。彼には、こうした仕事は早すぎるのだ。…こんな事を言ったら、和樹君にまた怒られてしまうかな。甘やかすのは優しさじゃない、と。

私はその神社についたのは、昼下がりの事であった。霊障の起こりやすい時間帯に合わせてやって来たのだが、今日は祭のある日らしい。宮司は私を応接室に通して早速仕事の話をするのだが…

「あの、祭に出なくてよろしいので？」

「ああ、息子に任せてます。私は夜だけ担当しますから。」

いいのだろうか？

宮司の話では、毎年この祭の後に境内で悪霊が暴れまわるらしい。明らかにこの神社のやり方が原因だろう。和樹君がいたなら簡単に解決しそうだが、生憎私はクリスチャンだ。私は私のやり方でやるう。

私は、まず境内を歩いて回った。そこで気づくのは、恐ろしく巨大な霊道の真ん中に、この神社が建っているという事だ。この社は、慰霊碑の役割をしていたのだろうか？また、異様に霊気の淀みが多い。意図的に、ここに留めようとしている。直感的に、そう思った。

「宮司、ここでは慰霊祭をしていますか？」

「あー…昔やっていたようですね。しかし、辛気くさいと観光には向かないでしょう。五年前に廃止しましたな。」

完全にそれが原因だ。それからもしばらく調べてみたのだが、調べれば調べる程原因はそれしか考えられなくなる。

「この神社は、そもそもその為の神社だったようです。その祭を復活させないと、霊障は無くならないでしょう。」

そう言うと、彼は困った顔で私に泣きついた。

「ど、どうにかありませんかね。観光協会には、華やかなイメージを作ってくれと言われてるんですよ。あなた、SランクのGSなんでしょう？」

「残念ですが、私にも出来る事と出来ない事があります。原因解明

が仕事の内容でしたね。私の仕事はこれで終わりのようです。」

「し、しかし証拠も無いし…」

怒りがこみ上げてくるのを感じながらも、何とか堪える。その時、神社の入り口：大鳥居の方から、悲鳴が聞こえて来た。慌てて走り出す私たち。駆けつけてみると、そこには…

白装束を着た幽霊の大群がいた。

【唐巢視点終了】

ゆかりが居ると、つくづく運が良い。店を出たタイガーや春樹はそれを実感していた。

渋滞に疲れたゆかりの為に、タイガーたちは当初予定していた店に行くのを諦め、海外沿いにある小さな食堂で食事をとる事にした。そこはオープンテラスのような場所があり、ペット同伴が可能であった。タイガーたちはテラスの席で、海に沈む夕日を見ながら食事をとったのだが…。

その食事が、最高だったのだ。

その店ではしらすをメインにした料理を扱っていたのだが、その味は市販のしらすとは全く違っていた。タイガーは、余りの美味さに涙を流した。ゆかりも、疲れが吹き飛んだと上機嫌だった。地元の人間である春樹も初めて入ったという、知る人ぞ知る店だったらしい。マールウも、しらす丼を美味しそうに食べていた。

そして、帰り。

帰宅ラツシュに捕まると思いきやかなりスムーズに流れる道路事情に気を良くしていると、急に道が混雑してきた。見ると、海沿いにある神社付近で交通規制がかけられている。そこには、誰かが張った結界。幽霊らしきものも見えた。

それを見たタイガーは、すぐさまシートベルトを外して外へ出ようとする。

『おう、タイガー！厄介だぞ、あれは！』

『だからこそ、行くんジャー！！』

『チツ、面倒クセエ奴だな。おい、春樹！お前はゆかりと一緒に車の中で待っている！』

「え、マールウ！？」

慌てる春樹に対して、ゆかりは冷静だ。車外に出てこちらを振り返ったタイガーと、目を合わせる。

親指を立ててみたら、タイガーも笑って親指を立てた。

マールウと共に駆けて行くタイガーを見送りながら、ゆかりは祈る。神様、どうか二人が無事に帰って来ますように、と。

唐巢神父には、確かに和樹のような強さは無い。横島のような意外性も、美神のような特殊な才能も無い。しかし、彼は今でも最高のGSであり続けている。それは経験と勘、積み重ねた実績など様々な要素を判断材料としての評価であるが、何より。どんな状況でも諦めない強い心が、彼を最高たらしめているのだろう。

数百という霊を、彼はたった一人で食い止めていた。

持っていた精霊石は底を尽き、手にした神通棍も壊れかけている。聖書の文言を唱え続けた喉は枯れ、霊の攻撃を受け続けた身体には無数のキズがあった。しかし、そんな状況にあっても、彼は観光客を避難させ境内に結界を張り、被害を最小限に食い止めている。並みのGSなら絶望にとらわれ何も出来ないで殺されている所だ。

(さて、どうやって打開するか…)

唐巢がそう考えていると、どこからともなく大きな声が聞こえて来た。

『ウオンツ!』

唐巢を取り囲んでいた霊たちの一部が、まばゆい光を浴びて消し飛ぶ!そして、一匹の犬が、唐巢のそばに駆けて来た。

『誰かと思ったら神父じゃねえか!馬鹿野郎、つくづく貧乏クジを引く奴だなテムエは!』

「マ、マーロウ!?!」

驚愕する。以前仕事で一緒になったGS犬のマーロウだった。何故、彼がここに?戸惑う唐巢は更に衝撃を受ける。

『おう、やっちまえタイガー!』

タイガー? その言葉を聞いて反応すると同時に、神父の頭上に一匹の黄金の虎が現れる。霊たちを飛び越えた虎は、空から靈気を爆発させた!

ガアアアアアアアツ!!

虎の雄叫びが、霊たちを一人残らず消し飛ばした。

タイガーは地面に着地すると、変身を解く。そして、呆気にとられる唐巢に挨拶をした。

「お久しぶりですジャー。GS試験以来ですケン。」

「た、タイガー君...?」

戸惑う唐巢。当たり前だ。ここにいるタイガーと、あの陰念に負けたタイガーが同一人物だなんて思う人間は居ないだろう。漲る自信と精悍な面構えは、あの横島以上のオーラを放っていた。

『...悪いが、悠長に話してる場合じゃねえみてえだな。本命が来やがったぜ。』

マーロウの言葉に、二人は緊張感を取り戻す。マーロウは、ただ真っ直ぐ鳥居の方を見つめていた。

ちりーん...

ちりーん... ちりーん...

張り詰めた空気に、ただ鈴の音が響く。

青い、炎のような物が揺らめいている。それはゆっくりと近づきながら、姿を人の形へと変えて行き…

『チクシヨウ、座頭頭ざとうがしか！お前ら油断すんじゃないぞ、コイツは別格だ！』

目の無い坊主の姿となった。

神父とタイガーは、臨戦態勢をとる。獣の本能を持つタイガーは、相手の危険性をいち早く察していた。あまりに濃い死の臭い。ただそこに居るだけで、そこかしこに死の気配が漂う。

唐巢は、後方で倒れている宮司に声をかける。

「宮司、慰霊碑のあった場所はどこですか！？彼は海で死んだ人間の魂を伝える妖怪です！弔う為の場所が、この近くにあったはずだ！彼は、それを探している！」

「ひっ…い、今はチャペルが建っている！」

ギリギリ、と歯を噛み締める。コイツは、そんな場所で拳式を拳げさせて来たのか…！

『どつする気だ。』

「チャペルに誘導します！二人は、彼が別の方向に行かないようにして下さい！霊たちは彼の歩いた道をなぞって行きます！」

「了解ジャー！」



『クソ、言ったからには何とかしろよ!?!』

三人は、その言葉を交わすと座頭頭を迎えうつ。座頭頭はゆっくりと歩きながら、鈴のついた杖を鳴らす。

ちりーん…

同時に、タイガーの身体が吹き飛ぶ!

「ぬおおああっ!?!」

『そいつも音に霊波を乗せる!ガードを解くんじゃねえぞ!』

「りよ、了解ジャー…!」

強烈な攻撃だった。タイガーは、内臓が揺さぶられたような不快感を感じながら態勢をたてなおす。

座頭頭は、ゆっくりと歩みよってくる。神父はその座頭頭に、静かに話し掛けた。

「こちらです。あなたが探しているのは、こちらにあります。」

ちりーん…

『ぐああっ!』

今度は、マールウが霊波で吹っ飛ばされる。しかし、空中で回転して勢いを殺してなんとか着地する。コイツは話を通じないんじゃないか!?!

「さあ、こちらです!」

神父に誘導されるままに、座頭頭は移動する。

ちりーん…

「ぬうううっ！」

今度は唐巢が霊波を受けるが、踏ん張った。

距離にして、役300メートル。その間、タイガーとマーロウ、唐巢は座頭頭の霊波攻撃を受け続けた。数にすれば圧倒的にタイガーが多い。この中ではダントツで耐久力がある為だ。そのタイガーが意識を朦朧となるくらいに攻撃を受けた所で、座頭頭はチャペルの中に入った。

チャペルの中、その中央に来た所で、座頭頭の表情が変わる。杖で床を叩いたり、周りの机を叩いたりしている。慰霊碑を探しているのだろうか。

「おい…これはもしかして、霊脈を使って神上がりさせる気じゃねえか？」

神上がり。仏教で言う所の成仏にあたる。

しばらく座頭頭は杖で周りを確かめていたが、納得したように一度頷くと杖を床に突き立てた。

「…あ…ああ…う…」

聞き取れないような小さな声で何かつぶやくと、杖を中心として半径10メートルほどが光に包まれる。

「これは…。」

「後ろから、幽霊が来たんジャー。」

タイガーの言う通り、座頭頭の通った道を沢山の幽霊が歩いてきた。その一人一人が、光の中へ入って行く。幽霊たちは光の粒となつて、チャペルの天井を突き抜け空の彼方へと飛んでいった。

一人…また一人…

その光景を、三人は静かに見つめていた。

座頭頭は、きつと、慰霊祭を行わなくなった神主の代わりに死者の魂を送りたかっただけなのだろう。最後の一人が天へと旅立つまで、三人は黙って見守っていた。そして…

座頭頭が、こちらを向いて頭を下げる。

「すま…な…かつ、た…。」

青白い炎に包まれた座頭頭は、そのまま光と共に消えて行った。

『…これで、終わったのか？』

「いえ、海難事故で亡くなる方は毎年です。やはり慰霊祭を再開しない事にはまた繰り返し返されるでしょう。」

「なんとも…悲しいんジャー…。」

三人は、複雑な表情でチャペルを後にする。結局、悪いのは神主なのだ。やるべき事をやらずにいるから、こんな事になる。まあ、これに懲りて少しは真面目にするだろう。そう思っていたのだが…

チャペルから出てきた三人を迎えたのは、妙に機嫌のいい宮司である。

「さすがSランクGSの唐巢神父、お見事でした！まさかあんな化け物まで退治してくれるとは！」

「え…？いや、倒したワケでは…」

「いやいやご謙遜なさらないで下さい！しかし最後の除霊もさすがでしたなあ。……ものは相談なんです、最後のアレ、来年もやつてもらえませんか？」

「…は？」

固まる。意味が分からない。

「いや、最後の光。チャペルのステンドグラスに映えましてね！外から見てたら幻想的でしたよ！あれなら観光客も喜びますから…」

目の前が、真っ暗になる唐巢。人間に、ここまで絶望した事は無かった。怒りに我を忘れ、殴り飛ばしてやりたい衝動にかられる。いつその事、本当に殴り飛ばしてやろうかと思った、その瞬間…

バキィッ！

タイガーの拳が宮司の顔面に炸裂する。宮司は軽く2メートルほど宙を舞い、地面に叩きつけられた。

「神父さんは殴ったらいけないですケン、ワッシが殴っておきましたんジャー。」

笑うタイガーに、唐巢は驚く。こんな性格だったろうか。

『ははは。これが若さって奴なんだろうな。見てて気持ち良いぜ。』  
マールウはそう言って笑ってから、唐巢に真剣な目を向ける。

『お前も俺から見りゃ充分若いぜ。偶には、弾けてみても、いいんじゃないねえか?』

「……………」 思わず黙ってしまった。

結局、その後「待たせている人が居るから」とタイガーとマールウはさつさと帰っていった。唐巢には、何ものにも縛られないそんな二人の姿が眩しく見えた。しばらくして意識を取り戻した宮司が難癖をつけ報酬を支払う事を渋ると、唐巢はにこやかな顔をしてこう言った。

「報酬は結構です。私も、悪魔から謝礼を受け取るワケには行きませんから。」

顔を真っ赤にして怒る宮司を一瞥してから、唐巢は神社を去る。オンボロのサニーに乗り込むと、暗くなった海沿いの道を飛ばした。「酷い赤字になってしまったな…。でもまあ、こんな日もあるだろう。」

生活の為に請けた仕事。報酬が貰えなかったのは残念だったが、

あんな人間に貰った金で生活して行くとは思えない。悪魔の囁きに勝ったな、と唐巢は笑った。

海風が吹きすさぶ中、唐巢は窓を全開にして風を全身に受けながら車を走らせる。薄くなった頭が乱れに乱れたが、構わなかった。

何となく、そういう気分だったのだ。

春樹の家に帰ると、タイガーは風呂に入って疲れを癒やした。余程疲れたのか、眠りかけて湯船に何度か顔を突っ込んだりした。

風呂上がり、居間でゴロンと横になって窓から入ってくるそよ風を感じていると、マールウがそばに近寄ってきた。

『よう、湿気た面してるじゃねえか。何考えてる？』

「わんこ先生……」

タイガーは少し躊躇してから、語った。

「あんな風に、幽霊でも食い物にするような人間もおるとというのが信じられんのジャー……」

あの宮司を殴った時の感覚が蘇る。果たして、あの人間を助けて良かったのかとも思った。

『確かに気分の悪くなる野郎だったな。けどよ、人間ってそんなモンだぜ。一々気にしてたら身が持たねえ。』

達観している。それだけのモノを見てきたのだろう、とタイガーは思った。

『お前えは難しい事を考えるな、馬鹿なんだからよ。あのクソ野郎をぶん殴ってどうだった？ 気持ち良くなかったか？』

「それは…まあ、スカツとしたんジャー。」

『なら、いいんじゃないか。迷ってた奴らは上手く送れたし、悪い奴は殴り飛ばした。俺たちは無事だ。めでてえ話じゃねえか。』

そう言われると、そんな気がしてくるから不思議だ。タイガーは元気を取り戻していた。

「タイガー、かき氷をつくるが何味がいい？」

台所から、ゆかりが声をかけてくる。タイガーはガバツと起き上がる。「イチゴ！」と叫んで台所へ飛んで行った。

その姿を見ながら、マーロウはつぶやく。

『馬鹿って奴は、偉大だぜ。』

口の端をニヤリと吊り上げ、マーロウは笑うのだった。

因みに、例の神社はその後問題を起こし続け、自己破産や宮司の失踪と言った負の話題を提供して潰れる事になった。跡地には昔と同じ形の慰霊碑と社が建てられ、余所のまともな神主が夏になると出向ってきて、慰霊祭を執り行うようになった。霊障も無くなつたようだ。

そして唐巢神父。

気まぐれに買った宝くじが当たったり金銭的に大きな仕事舞い込んだり、しばらく異常な幸運に恵まれ続けたという。



### 第三十七話 伊達とお隣さんのはなし

一つの人生において、門出という物が何度訪れるのかはわからないが、間違いなく今日という日は重要な門出の一つとなるだろう。伊達雪之丞は村の入り口で、少ない手荷物を詰めたボストンバッグを担ぎながらそう思った。

GS試験に合格した後、メフィストの依頼でGSとして働く事になった雪之丞。そもそも魔装術を習う条件が、GSとして働く事だった。勤め先は六道除霊事務所。後見人の芦優太郎と、オカルトGメン西条の推薦という強烈な後押しで内定を得た。

「にしても、早いじゃん。勘九郎はもう少しここに居るみたいじゃん。」 ちよっと寂しそうに言う羽居。隣の陰念も寂しそうだ。

「わりい、やっとアパート決まったから向こうで色々揃えたくてな。すぐ仕事に入れるようにスタンバっておきたいし。」

雪之丞は一人暮らしを始める予定だ。正式に所属が決まるのは9月1日。それまでに生活基盤を整えて起きたかった。ちなみに勘九郎は、最近知り合った友人の家への居候が決まっている。いろいろな話が二転三転して、GSにはならず豆腐屋に勤める事になった。なんでだ？

「雪之丞。一人で寂しくなったらすぐに電話しなさい。添い寝くらいならしてあげるわ。」

「その前に通報してやりたい気分だぜ…。」 雪之丞がそう言うと、周りに集まっていた爺さんたちが笑った。

今日は村の仲間が旅立つ日。勿論、村の人間総出で送り出すつも

りだ。

「元気で、頑張れよう！」

「向こうで立派ななって来いよ！」

「いつでも帰って来い、また旨い野菜食わしてやる。」

皆、口々に激励の言葉を送った。おばあちゃんは、手拭いで目元を押さえながら、ただ笑顔で頷いていた。

そんな皆に礼を言って、雪之丞は村を出る。最後に、陰念に向かって声をかけた。

「水田、出来るの楽しみにしてるぜ。諦めんなよ！」

「ああ！絶対、里を復活させてみせる！」

陰念は今、近くの溪流から水を引いたり湧き水を利用したりして昔村にあった水田を復活させようとしていた。陰念は、本気でこの村で生きて行くつもりなのだ。

「じゃあ、行ってくるぜ！」

雪之丞は力強く手を振って、村を後にした。皆は、雪之丞の姿が見えなくなるまで手を降り続ける。村人たちは、まるで自分の孫を見送るかのように優しい目で雪之丞を見送った。

東京の、とある小さなアパートに、雪之丞は部屋を借りている。

このアパートは、前の世界で横島が借りていたアパート。この世界では横島は学校に近い事を優先していたので、ダントツの安さを誇るが学校からは離れているこのアパートを選んではいなかった。

雪之丞はまず、勘九郎に習ったように大家さんの部屋へと向かう。引越しの挨拶に渡す菓子折りを手に、ドアをノックした。

「はい、はいはいちょっと待ってねえ。」

しゃがれた声の婆さんの声。しばらくして、ドアが開いた。

「今日から104号室に住む伊達雪之丞です。引越しの挨拶にきました。」

馴れない敬語で話す。婆さんは雪之丞の渡した菓子を受け取ると満足そうに笑った。

「すっかりした子だね。若いのに感心だよ。じゃあ、これが鍵だから受け取りな。」

そう言っ て鍵を渡す。

「ああ、103号室は空き部屋だから、挨拶は105だけでいいよ。」

「分かりました。」

その後、雪之丞はゴミの日などの決まり事を聞いてから大家の部屋を後にする。どうやらこのアパートはあまり住人が住んでいないらしい。前の世界では住んでいた浪人生も、こちらの世界では受験に成功したのか住んでいなかった。

「さて、次は隣か。面倒くせーよな、挨拶なんて……」

元々、人付き合いが苦手…というか人見知りの激しい雪之丞だ。

挨拶まわりなんて苦痛でしかないのだが、村での生活を思い出して

我慢する。

「すみませーん、隣に引越して来た伊達ですがー。」  
呼び鈴を鳴らして、声をかけた。ガサガサ、と奥で物音がしたか  
と思うと、何を恐れているのかゆっくりとドアが開かれる。

「どうも、花戸です…わざわざご丁寧にどうも…。」  
弱々しく挨拶に出るのは、明らかに病気をしています、という外  
見の中年の女性。雪之丞は少し退いた。

「あ、ああ、伊達雪之丞といます。これ、挨拶の品なんですが…」  
その時、女性の目がギラついた！

「あら、それはどうもご親切にありがとうございます！」  
ガシツと菓子折りを奪い取る。そして…

「よっしゃ久しぶりの菓子や！食うでー！」  
なにやらおかしな生き物が見えた。

「な、なんだテメーはっ！？どっから出てきやがった！」  
見ると、その身体は生身ではなく霊気が物質化してできた身体。  
魔族か神族だ。雪之丞が警戒して睨みつけると、その生き物は驚い  
たふうに目を大きく見開いた。隣の女性も驚いている。

「アンさん、ワイが見えるんかいな!？」  
「び、貧乏神が見えるんですか!？」

貧乏神…。ああ、俺は厄介な事に巻き込まれちゃったようだぞ…。  
雪之丞は内心でウンザリしながら天を仰いだ。

花戸房江と名乗った女性に部屋の中へと通された雪之丞は、そこで貧乏神が取り憑いた経緯を聞く羽目になった。関わりたくない気持ちと、隣近所だという事で我慢しなくてはという気持ちの狭間で揺れながら、雪之丞は複雑な表情をしていた。

この貧乏神は、房江の祖父に当たる人物に取り憑いていたらしい。悪徳高利貸だった祖父は、沢山の人間を自殺に追いやり恨みを買っていた。その恨みによって、貧乏神が引き寄せられ取り憑く事になったという。その恨みは強く、祖父の亡くなった今もこうして子孫に取り憑いているというのだ。

「ワイも、これ以上罪の無い人間を巻き込みたくないやけどなあ……。アンさん、霊能者やる？何とかしてやろうって思ってこおへんかなあ。」

貧乏神の狙いは、この男がお人好しなら貧乏神の試練を受けさせて自分を福の神に変化させる事だった。貧乏神の試練。それは心理的な選択を強いたり、善良な答えを選んだ者の清い心と同調して貧乏神の属性を変化させる儀式である。しかし、雪之丞の返答は期待していた物とは全く違った。

「はあ？何で俺が。どうにもなんねえだろ。言ったそばから罪の無い人間巻き込んでんじゃねえ。」

口調が元に戻った。

「恨むんならその祖父さんを恨みな。俺には関係ねえ。」

「なっ…アンさん、薄情やな！目の前に困ってる人間居ってその態度は無いやろ！」「ちよつと貧ちゃん、落ち着いて！いくらなんでもそれは失礼よ！」

何故こんな茶番に付き合わなくちゃなんねえ？俺は挨拶に来ただけじゃねーか。段々と腹の立ってきた雪之丞は、さっさと帰る事に決めた。去り際に、

「初対面の人間に不幸自慢してんじゃねえ。胸糞悪くなるぜ。」  
…キツイ一言を残して。

背中に貧乏神の罵詈雑言を受けながら、雪之丞は部屋へと戻って行った。

その日の夕方、雪之丞は近所のファミレスで食事をとっていた。生活費に関しては、後見人の芦優太郎からまとまった金額が振り込まれている。秘書の石田という女性の話では、GS試験参加依頼を受けた報酬らしい。仕事が始まるまで、この金で食いつないでくれと伝えられた。

「たまには豚肉も悪くねえな。」

豚肉の生姜焼き定食を食べながら、雪之丞は先ほどまでの事を思い出していた。

挨拶まわりでの一件。

初日から隣と気ままずくなるなんて、と少し落ち込む。結局あの後

部屋に戻ったものの、隣から恨みがましい声や泣き声、壁を蹴る音が聞こえて来たのでウンザリして部屋を出た。

「結局あのアパートは寝に帰るだけだな。仕事が始まったら社宅に移れるか相談すつか。」

物を揃えるのはそれからでもいいか……。そう考えれば今無駄金使わずに済む、と考えていた。

雪之丞は、安易に誰かを頼る人間を嫌悪している。自分は自分の力で逆境を乗り切ってきた。周囲から煙たがられ、冷たくされても自分のやり方を変えた事は無かった。それを貫いたからこそ、今の自分があるのだ。安易に誰かにすがりついて助けを求めたなら、今の自分は無かつただろう。その思いは、陰念の成長を目の当たりにしてからは益々強くなっていた。陰念も、自ら立ち上がって努力した人間である。あの貧乏神のように、助けて当たり前だろうという態度で来られると蹴り飛ばしたくなってくるのだ。

「どうにかしてやりたいなら、自分でなんとかすりゃいいんだ。」

本当に助けてやりたいなら、あの貧乏神が自分の体質を変えろとかすればいい。何もしないで頼るんじゃない、と雪之丞は思った。

世の中の大抵の事は根性で乗り切れると思っっている雪之丞らしい考え方だった。

備え付けのドリンクバーでたらふくジュースを飲んだ雪之丞は、腹をタブつかせながら会計を済ませる。レジの女性は癒し系の清楚な美人で、イライラしていた雪之丞は少し機嫌をなおしていた。単純である。

「さーて、帰るか。あの貧乏神がまた騒いだら、今度はぶちのめし

てやる。」

そう思って、自分のアパートに帰る雪之丞。幸い、隣は静かだった。雪之丞は寝袋を取り出して就寝の準備をする。布団は、寒くなつてから買おうと思つていた。

…どれくらい時間がたっただろうか。

雪之丞が部屋で寝る前のストレッチをしていると、コンコン、とドアをノックする音が聞こえた。

「夜分遅くにすみません、隣の花戸です。」

それは、若い女性の声だった。はて、娘でもいたのだろうか。訝しげながら雪之丞はドアを開ける。どこかで聞いた事あるような…と思つてみると、そこには。

「「あ…！」」

あの、ファミレスのレジにいた女性が立っていた。

「あなたはお店で…。」

「ああ、偶然つて怖いな。今日から住む事になった伊達だ。まあ、いつまでいるかは分かんけどな。」

そう頭を搔いて言う雪之丞。ここを出たいという気持ちがあるため、そう答えてしまう。

「あの、私隣の花戸小鳩と言います。お昼に、うちの貧ちゃんが失礼な事を言つたみたいで、どうしても謝りたかつたんです。」

「あー…別にあんたが悪いワケじゃねえし。今後絡んで来なけりや



構わねえよ。」 雪之丞は、マズいなと思っていた。自分は、母を連想させる女に弱い。この女は…デカイ胸もそうだが、雰囲気が今までに会ったどの女性よりも母に似ていた。

「すみません、あの子に悪気は無いんです。私やお母さんを思う気持ち  
持ちが暴走しちゃって…」

…なんだか、自分の方が悪者に思えてくる。  
その時、小鳩のお腹が小さく音をたてた。

きゅるるる…

顔を真っ赤にする小鳩。もう駄目だ…雪之丞は不干涉を貫く事を断念する。笑いたければ笑え、俺は女に弱い！

「事情は知ってる。米と漬け物とかなら沢山あるから、わけてやるよ。」

「う…あの、よろしいんですか？」  
恥ずかしいけど、生活が苦しい状況でこの申し出は有り難い。

「ああ。田舎の連中が沢山持たせてくれたんだが、生憎炊飯器がねえから食べられねえんだ。今日買いに行こうかと思っただけど忘れちゃってな。」

その言葉を聞いて、小鳩は顔を明るくさせる。

「じゃあ、うちの炊飯器で炊いてオニギリ作りましょうか？明日の朝ご飯にどうですか？」

「ん？ああ、それは助かるな。頼めるか？米なら腐るほどある。実際、腐らせるかもしれないから困ってた所だった。」

雪之丞は、押し入れの下のスペースに入れていた米袋を取り出す。精米された白米が10キロ、玄米の状態の物が40キロ近くある。今日、芦優太郎が郵送で届けてくれたのだ。キッチン下からは、大きなタッパーに詰められた漬け物類。こちらは田舎の爺さんたちの手作りだ。

「俺一人じゃ元々食いきれねえからな。いくらかそつちで貰ってくれねえか。…正直言つと、精米機を使った事がなくて、どうしたらいいか分からなかった。」

そう言つて恥ずかしがる雪之丞に、小鳩は微笑んだ。この人は、きつと一人暮らしが初めてなんだろう。田舎の家族に大切にされてるみたいだし、悪い人ではないようだ。

「私で良かったら、今度お教えしますよ。大丈夫、精米してないなら日持ちしますから腐りません。」

小鳩はそう言つて、雪之丞から渡されたお米と漬け物を受け取つた。「明日の朝には炊き上がるようにしておきますから」と言つて、隣へと戻つて行った。

…いい。

…いい子だ。

…引つ越して来て良かったかもしれない。

そんなふうに思いながら佇んでいると、いきなり真横にあの貧乏

神が姿を現す！

「うう…アンさん、ホンマはええ人やったんやなあ…」

「おわっ！なんだお前、どっから入りやがった！？」

飛び上がって驚く雪之丞。まるで気配を感じなかったのだ。野生の動物を相手にしていた、この自分が。雪之丞は内心かなり動揺していたが、表面上はなんとか取り繕って貧乏神の方へ向き直った。貧乏神は、ボロボロ泣いていた。泣きながら、土下座をし始めた。

「おい、どうしたよ。」

「いや、小鳩に親切にしてくれた事と、昼間のお詫びや。ワイも冷静になって考えたんや。確かにアンさんの言う通り、安易に人を巻き込む所やった。ホンマ、勝手な事ばかり言って済まんかった！」

「い、いや、分かってくれたらもういいって。頭を上げな。」

雪之丞も鬼では無い。謝る相手を許さないのは、相手が悪人の時だけと決めていた。…しかし、一つだけ気になる事が。巻き込む…

「お前、俺に何をさせるつもりだったんだ？」

「え…い、いや、それはもうええんや！忘れてくれ！」

ガシッと、貧乏神の肩を掴む雪之丞。気になった事は徹底的に追求したくなる質らしい。

「まあ、言ってみろよ。場合によっては、力になるぜ。」

「アンさん…。なら、言うだけ言うけど…」

貧乏神は語り出した。自分を貧乏神から福の神にする方法、貧乏神の試練の話。この方法に伴うリスク、失敗したら一生取り憑かれる事や、何度か小鳩に勧めようとしたものの、失敗した時の事が怖くて言い出せなかった事。自分でもどうにか出来ないかと色々試したが無理だった事などを…

「なるほどな。オメエはオメエで必死だったワケだ。…よし、だったらその試練、俺が受けてやるよ。」

「なっ…！？アンさん、話聞いてたか！？失敗したら、一生貧乏になるんやぞ！」

「んなモン怖くて生きてられるか。腹減りやそこの鹿とって食ってた人間だぜ？死なねえんなら平気だ。」

この男は、なんて豪快なんだ。貧乏神は啞然とした。この男なら…成功させるかも知れない。

「それに、俺はどんな試練も乗り越えてきた。これからも全部乗り越えていくしな。オメエの言う試練ってやつも、楽勝で越えてみせるぜ。」

「い、言ったな！どうなっても知らんぞ！？後悔しても遅いからな！？」

「上等だぜ、かかって来な！」

貧乏神の取り出した、がま口の財布から黒い霧のようなものが出て、部屋を埋め尽くす。霧にまわりつかれた雪之丞は、凄い勢い

で財布の中に吸い込まれて行った。

気づくと、そこは真つ暗な闇に覆われた世界。雪之丞は一本のレ  
ンガ道の上に倒れていた。

「なんだ、ここは…」

あたりを見渡すと、道以外には二つの扉だけ。それぞれの扉には  
隣に窓がついており、向こうが見えるようになっていた。道は二手  
に別れ、この二つの扉の前に続いていた。

雪之丞は、まず一つ目の窓を覗いた。

そこには、ボロボロの服を着た雪之丞と小鳩の姿。ガリガリに瘦  
せた房江の前に、涙を流していた。金があつたら、何か食べさせて  
やれるのに…。そんな言葉を呟いていた。

雪之丞は、ブチ切れた。

なんだ、コイツは。俺の姿で、何ふぬけた事言つてやがる。金が  
無い？だつたら鹿でも猪でもとつて来いよ！その女が好きなのか  
？だつたら泣かせるような真似はするな！第一、お前は忘れたのか  
？あの日誓つただろう、冷たくなったママに泣きつきながら！

「強くなるんじゃないのか、テメエーは！！」

ドカツと扉をけり破る。

コイツは、コイツだけはぶっ飛ばしてやらなきゃ気が済まねえ！

しかし、雪之丞の拳が相手に届く事は無かった。

ぐにゃり、と空間が歪む。

「クツ、畜生、なんだこりゃ！まで、あの野郎、ぶっ飛ば…」

暴れる雪之丞だったが、全く抵抗する事も出来ずに闇の空間から放り出されて行った。

貧乏神のがま口財布から、雪之丞が飛び出してきた。ここは、雪之丞の部屋。無事戻って来れたようだ。そして…

ピカアアアツ！

貧乏神の身体が光る！

「よっしゃ、成功や！これでワイも福の神やー！」

光に包まれ、姿が見えなくなる貧乏神。雪之丞は未だに先ほどの怒りのやり場に困っていたが、とりあえず今は我慢して成り行きを見守っていた。

次第に光は収束してゆく。そしてそこに現れたのは…

「な、なんや!？」

確かに福の神ではあった。しかし、それは前の世界のようなツタ

ンカーメンもどきの姿ではない。まるで、皇帝のような服装に身を包んでいる貧の姿であった。

「あ、アンさん、どういう解決方法したんや？こら福の神どこの話ちゃうで？金を司る神様並の力を持つとる！」

「いや…方法って言ってもな…。」

雪之丞は、自分の行動を貧に話す。と言っても本当にすぐに終わってしまった。実際、覗いて怒って殴ろうとしただけなのだ。しかし、貧にはその説明だけで充分だったらしい。

「つ…つまり、アンさんは何の試練かも分からず、もう一個の扉も見んと突っ込んだんか！目の前の光景が、許せなかっただけで！それで帰れんようになるとは思わんかったんか！」

「まあな。」

「もし…もし、もう一つの扉の向こうに金持ちで豪遊しとる自分を見かけたらどないしとった？綺麗なネーチャンはべらせてたりしたら。」

「ん？そうだな…。」

少し考えてから、言った。

「んな奴、怒る価値もねーな。いや、大切な人を不幸にさせてないならまだマシかもしれねえ。ただな、俺は強くなる為に必死なんだ。そんな気持ちを忘れた俺には、興味ねえな。」

なんとという事だ。こんな理由で正解を選んだ人間などいただろうか。貧は信じられないものを見る目で雪之丞を見ていた。この男は優しさや愛情で選んだのではない。大切な人間を失おうとしていな

がら何も出来ずに泣くしか出来ない自分に怒って扉を開いたのだ。金など、判断材料にも入らなかった。本当の意味で、この男は金銭への執着を持たずに試練をクリアした。この劇的な変化はおそらく、最上の結果を出したからこその変化なのだろう。

「アンさん…ホンマにアンさんは男の中の男、漢や！一生憑いてくわ！」

「い、いや憑いてくるな！貧乏神に憑いてこられても困る！」

「なに言つてん、もうワイは福の神やぞ？ほないっちょお仕事させてもらいまひよか。ほれっ！」

持っていた木槌を振るう貧。出てきたのは…

ゴトッ

「！？」

純金のインゴットだった。

「お、お、お前、これはヤバいだろ！」

「アカン、これは効果がデカすぎる！あのカーチャンこれ見たら心臓止まりよる！」

慌てふためく二人。結局、雪之丞が質で換金して貧に少しずつ渡す事になった。さすがに、いきなりバンバン出したら房江の心に悪影響を及ぼしかねないからだ。何気に房江は金銭欲が強いらしい。

その後、しばらく二人は今後の事を話し合った。福の神という事



が知れ渡ったら狙われてしまう。なら、雪之丞が保護すればいい。雪之丞は微妙に嫌がったが、貧の猛烈なアタックによって最終的には折れる事になった。近々、GS協会に申請に行く予定だ。

「しかし…ホンマにええんか？」

帰り際、貧が雪之丞へ振り返って言う。

「アンさん、小鳩の事好いとったやろ？アンさんのおかげやと知ったら好感度滅茶苦茶上がるで？」

雪之丞は、今回の変化に自分が関わった事を伏せておいて欲しいと頼んでいた。

「ああ。そういう、恩売って気を惹くのはフェアじゃねえ。それにな、今回のはあの女の為にやった事じゃねえよ。」

ニヤリと笑う。

「お前が、必死になっていたの、知ったからな。俺は、頑張る奴は嫌いじゃねえ。だから助けたのさ。あの女は関係ねえよ。」

貧の目に、また大粒の涙が。

「ワ、ワイを惚れさせてどないすんねん！一生憑いてくわー！！」

「だから字がこえーんだよ、くつつくなー！！」

結局貧が隣に戻ったのは、それから一時間後の事だった。

…しばらくして。

電気を消して寝袋にくるまっていると、隣の部屋から笑い声や喜びの音が聞こえてきた。きっと、福の神になった事を知って喜んでいるのだろう。雪之丞は、目を閉じて微笑んだ。あんな声、どこかで聞いた事があったな。ああ、あれは…

雪之丞の目蓋の裏に、母が生きていた頃の光景が蘇っていた。一家団欒。二人きりだったけど…裕福では無かったけど、楽しかった思い出。強くなる為に必死に鍛え始めてからは、振り返る事の無かった記憶。

小鳩たちの笑い声を子守歌に、雪之丞は久しぶりに暖かなあの日々を夢に見ていた。

## 外伝1 世界を渡った少女のはなし

これは、今から数年ほど前の話。ただ一人の男の為に世界を渡った、少女の物語である。

その日、山深い場所にある人狼の里で、犬塚シロは不安そうな眼差しで空を見つめていた。

「空気が…張り詰めている…。」

幾千もの人間や魔族、時には神族さえ斬り捨ててきたシロ。数々の修羅場をくぐり抜けた経験から、近く大きな戦いが起こる事を予感させていた。

犬塚シロ。人狼の少女。

霊波刀を使いこなし、驚異的な身体能力を有する彼女は人間界でも有名なGSであった。美神除霊事務所での活躍で注目を浴びた彼女。しかし彼女はその表舞台から姿を消す事となる。

きっかけは、横島忠夫の独立騒動であった。

美神令子という徹底的なリアリストと、妖怪に肩入れし始めていた横島忠夫との間に生じていた亀裂は、目に見えない形で深く大きくなっていったらしい。敵と判断すればどんな相手だろうと容赦なく殺して行く令子の姿に、横島は拒絶反応を示すようになった。

クリスマスも間近に迫った12月のとある寒い日、横島は退職届けを令子に手渡した。激怒する令子、反対するおキヌ。無関心を装いながらも戸惑うタマモと、何故、としか言えないシロ。普段の道化の横島に馴れていた皆は、横島の心の変化や悩みなど気づくハズも無かった。

激怒した令子によって発せられた、クビという二文字によって横島は事務所を出る事になった。彼はこれを機に、妖怪の保護活動を行っているNGO団体に所属して妖魔の保護に生涯を捧げる事となる。発起人の名前は表向き人間の名前となっているが、実質はデタント派の神魔が結成した団体である。スパイ疑惑等で人間界に居場所を無くしていた横島にとって、身を寄せる場所としては最適であった。

その後の美神除霊事務所は、転落の一途を辿った。ほんの数年で、事務所内の不協和音は勿論、GS協会からも距離を置かれるようになった。以前にも増して日陰の仕事に手を出すようになり、タマモやシロ、最後にはおキヌでさえついていけず事務所を去る事になる。そんな最中に飛び込んで来た知らせが、令子を狂わせた。

『横島忠夫、妖怪保護活動での功績が認められSランクGSに認定される』

いつの間にか別の師匠の下でGS資格を所得しなおしていた横島は、数々の犯罪集団を壊滅させ、奴隷や実験材料にされていた妖怪を救っていた。その活躍は全世界におよび、GS業界の絶大なるイメージアップに貢献していたのだ。その活躍によって、日本に大規模な妖怪保護地区を作る事が認められた。場所は、かつて妙神山があった所である。管理人として神界と魔界の合意のもと小竜姫が任命された。

令子を狂わせたのは、その記事の掲載されたGS協会会報にあった、一枚の写真。

自分の事務所をやめたタマモとシロ、横島の友人たちが、笑顔で写っていたのだ。孤独感に苛まされていた令子は、横島への怒り

に我を忘れる。彼の活動を妨害するように、妖怪殺しの依頼を受け続けるようになった。その活動に目を付けたデタント反対の過激派魔族や神族も、莫大な金額を援助する。いつしか令子の活動は、様々な思惑を持った人々によって利用されていく事になる。

シロが横島の命令で人狼の里に戻ったのは、そんな不穏な動きが目立ち始めた頃の事だった。横島は、戦いを繰り返すうちに殺伐とした顔になって行くシロに、里で心を落ち着かせて来いと言った。いつも第一線で横島の隣で戦うシロは、人間の汚さを何度も目撃してきた。憎しみと怒りに染まった瞳は、保護された妖怪さえ恐怖するようになっていたのだ。

抗議するシロ。横島はそんなシロを抱きしめて言った。

「今生の別れじゃないんだ。少し、のんびりして来い。時期見計らって、迎えに行くからさ。な？」

「分かったでござる。約束でござるよ？いつまでもほったらかしてたら、こっちから訪ねに行くでござる。」

「ははは、大丈夫だよ。新しい散歩コース、考えておくからな。」  
くしゃくしゃと髪を撫でる、遅しい手。シロは心の中で「嘘つき」とつぶやきながら涙を流した。

人狼の里に戻ったシロは、横島の言う通り心を落ち着かせるように、静かな日々を過ごした。たまに訪ねてくるタマモに近況を聞く他は、ただ剣を振るい、瞑想に耽る。以前なら村の男たちが求婚に迫っている所だが、その余りの強さと凜とした佇まいに言い寄れない。本能的に、別次元に至っている存在であると悟っていたのだ。

そんな、修行僧のような日々を送るシロ。心穏やかに生きる事の素晴らしさを実感し始めていた矢先に、あの張り詰めた空気を感じたのだ。

(先生：先生が危ない！)

すぐに寢所を飛び出し、村の外へと向かうシロ。それを止めるように、村の男たちが取り囲んだ。

「いけません、シロ殿！今は危険です！」

「どうか、今だけは村の中に！」

その言葉に、シロの目が鋭くなった。

「貴様ら、何を隠してるでござるか？」

男たちの目が泳ぐ。シロの手に、霊波刀が出現した。それを見て、一人の男が慌てて口を開く。

「し、神族の方が朝方いらっしやったのです！これから大きな戦いがあるから、里から出るなど！」

「シロ殿を失いたくなければ、何としても足止めしろと言っていたのです！」

「どうか、どうか今だけは…！」

ギリギリと歯を鳴らすシロ。この腑抜け共め、牙を研ぐ事を忘れてばかりか何が敵かも分からないのか！

「退かねば、斬る。」

シロの霊波刀が物質化する。目に宿る殺気に男たちは震え上がった。

た。

それを少し離れて見ていた老人が、男たちに声をかけた。

「退け、皆の衆よ。」

「「「ち、長老!?!」「」」

それは、人狼の里の長老であった。

「シロよ、お主の好きにするがいい。もはやお主の事を止められる者はここにはおらん。」

「…行ってくるでござる。」

言葉少なに、シロは村を飛び出して行った。

「長老、何故行かせたのです!」

「シロ殿が死んでもよろしいのでござるか!」

口々に詰め寄る男たちに、長老は一括した。

「この馬鹿者共が!神族だからと、言うことを無条件に信じるとは何事じゃ!人狼の誇りを忘れたのか!」

その言葉に、頭を垂れる男たち。

「本当にシロを大切に思っておるなら、応援してやれい。そして、信じてやるのじゃ。あやつはもはやこの里…人狼一の猛者じゃ。神族相手だからと簡単に死ぬような者ではない。」

そして、少し間を置いて続けた。

「里に縛り付けておこうなどと思うから、そんな言葉に引っかかる

のじゃ。シロが外で己を高めたように、お主らも外に出た方が良いかもしれんのだ。」

閉鎖的な世界で満足している男たちには理解出来ない話ではあったが、仕方なく引き下がる事にした。そんな男たちを見て、長老はため息をつく。外に出たシロ以外、未だに自分より強い者が現れないこの村のあり方は、間違っているのではないかと。

村を出てすぐに、シロは異変を感じて立ち止まる。どこかで、誰かが戦っている。闘気に似た何かを、感じとった。

「これは…タマモ!？」

駆け出すシロ。ニオイで場所を特定して、猛スピードで森を駆け抜ける。視界の先で、炎がはじけるのが見えた。間違いない!

人狼の里の結界を突破して、シロは森を抜けた。開けた場所に出ると、そこには金色の大男と、倒れているキツネの姿。九つの尾は、力なく横たわっていた。

「お…遅いわよ…馬鹿…」

「タマモオオオッ!」

駆け寄るシロ。しかし、そこに男の拳が直撃する。



「ぐあつ!?!」

とっさにサイキックソーサーを展開するも、簡単に破壊されて吹っ飛ぶ。慌てて態勢を立て直して敵と向かいあった。

『ほう。このダチカラオの拳を受けて立つとはな。』

「うぬぬぬつ! 貴様でござるな、村の男どもに足止めをさせたのは!」

ダチカラオは大声で笑う。

「はははははつ! あのだもか。俺が少しおどしたら尻尾を巻いて震えあがっていたな! あれが武勇を誇ったフェンリルに連なる血族かと思つと滑稽だつたぞ!」

「き…貴様あ!」

激昂するシロ。そこに、弱々しい声が聞こえてきた。

「シ…ロ…足を潰した、から…アンタなら、倒せ…る…」。

「タマモ!?! 分かつたでござる!」

見ると、確かにダチカラオの足には無数のキズ。踏ん張れないからこそ、先ほどの攻撃にシロでも耐えられたのだ。

極限まで物質化した霊波刀を構え、シロは走り出した。

『ふん、死にぞこないに何を言われたか知らんが、なめられたものだ!』

ブウンツと太い腕がうなる。しかしそれを、驚異的なスピードで

かわすシロ。動物的感覚と積み重ねた戦闘経験は、神族ですら目で追えない動きを可能としていた。

ズバッ！

「うぎゃあああつ！」

ダチカラオの足首を切り裂く。焦ったダチカラオは腕を振り回すが、シロは難なく避けて霊波刀を後頭部に突き刺した。

「ぐ…あああ…」

霊波刀はダチカラオの口から飛び出した。そのままシロは、横島から持たされていた文珠を取り出す。霊波刀のせいで閉じる事のない口の中に、文珠を投げ入れた。

「爆」

ドガアアアアアアッ！

ダチカラオの頭が、吹き飛んだ。崩れ落ちる、巨体。次第に光の粒になって、空へと登って行く…

「タマモ！」

シロは急いで駆け寄り、タマモの身体を抱き上げる。人の身体に戻れないくらい、消耗していた。

「しっかりするでござる、タマモ！」

「シロ…よく聞いて…」

タマモは、か細い声を振り絞って言う。

「横島、暴走、しちゃった…美神に、ホタル、壊され…て…。アイツ、止めて…。里のみんな、助けて…」

「タマモ…しかし、タマモが…」

「馬鹿、犬…っ！私なら、時間がたて…ば…回復する、から…！早く、行け…っ！」

「くっ…！」

涙を拭って、シロはタマモを横たえ立ち上がる。

「帰ってきたら、文句沢山言っでやるでござる！」

「上等…よ…！」

シロは後ろを振り向かず走り出した。なんで、なんで皆嘘つきなんだ！馬鹿な自分にだって、あれが空元気だって分かっている。けど、タマモの思いを無駄にはできない。

まってるでござるよ、先生！

シロは横島のいる里へと駆けて行った。

ダチカラオが天に還っていった後。

タマモは、最後の力を振り絞って立ち上がった。

「出てきなさいよ、人間…！」

森の木々の影から、武装した三十人ほどの人間が現れる。妖魔を狩って生きているGSたちだ。タマモは未だに日本政府から警戒されており、仕留めたら裏で賞金が手に入る。チャンスだった。

「汚い…ヤツら、ね…。けど、舐めないで、欲しいわ…。」

タマモの魂がはじけ、身体がまばゆい光に包まれる。そこに現れたのは巨大な妖狐の姿。命を引き換えに行われた最大の秘術であった。

『消し去ってくれるわ、人間どもがああああっ！』

木々が、震えた。

風が吹き荒れ、空を雨雲が覆う。

滝のような雨が降る。雷鳴が轟き、辺りに無数の雷が落ちた。

逃げる事も出来ずに、頭を噛み砕かれ身体を引き裂かれて行く人間たち。暴風雨に包まれた山々に、風に運ばれ悲鳴が響き渡った。森の動物たちは怯え、あるものは巢の中へと隠れ、あるものは慌てて逃げ惑う。

禍々しい風が止むまで、その悲鳴は辺りに木霊し続けた。そして…

嵐が、去っていった。

風は止み、雲の合間からは、日が差し込む。山の草木は雨露に光を乱反射させていた。

そんな、輝く世界に溶け込んでゆくように。

タマモはこの世界に別れを告げて旅立って行った。

シロは走った。

ただひたすら、全力で走った。

遠くで誰かの呟いたサヨナラに、瞳を滲ませながら、前だけを見ていた。

空に、爆音が轟いている。無数の神族、魔族が交戦する中、その中心で一際大きな光が周囲を照らした。

ドオオオオオオンッ！

消し飛んで行く神族や魔族。次々と迫り来る敵を蹴散らす、かつての師匠の姿に、シロは思わず嗚咽を漏らしそうになる。

なあシロ、簡単に嫌いって言っちゃ駄目だって。いつか、分かってくれる日が来るかもしれないだろ？それまで待ってあげような。

俺は、信じてるよ。信じるのやめたら、さ。俺は俺でなくなっちゃう気がすんだよな。

シロ、そんな怖い顔すんなよ。ほら、笑おうぜ。みんな、お前に笑って欲しいんだよ。

今生の別れじゃないんだ。少し、のんびりして来い。時期見計らって、迎えに行くからさ。な？

…横島の言葉が、脳裏に蘇ってくる。嘘つき…。そんな姿になったら、もう笑えないじゃないか。憎んで、憎んで、もう人では無くなっている横島の姿に涙が零れる。

シロは、妖怪の里にたどり着く。そこには、破壊された家や殺された妖怪と、人間たち。

「誰か…誰か生きてる人はいないでござるか!？」

しかし、返事をする者はいなかった。遅かったのだ。

…シロは、間に合わなかった。

「う…う…う…何故、何故でござるか!何故、先生を、皆を…!」

その時、上空で凄まじい爆音が響いた。これまでとは桁の違う衝撃波が、シロを襲う。

「ぐ、ぐううっ…何が!？」

見上げると、そこには霊基崩壊を起こして消えてゆく神族、魔族たち。そして、宙に浮かぶ二柱の神たちの姿があった。

『横つち、もうええやる。もう、充分殺したやる。』

『もはや、貴方を殺そうとする過激派勢力は居ません。もう、休んでいいんですよ。』

空に、声が響き渡る。横島は、ただシロの佇む荒廃した村を見下ろしていた。

「…いないんすよ、みんな…。どこ、行ったんだろう…。」

何を言ってるでござるか、先生！拙者はここに居るでござる！しかし、必死に見上げるシロは気づいてしまった。

横島の顔には、あるべきものが無かった。あの優しい目が、笑いかけてくれる口が、無い…。ただ、黒い穴のようなものが穿たれているだけなのだ。

（先生…先生…もう、見えないのでござるか？拙者の事、分からないでござるか…？）

膝から崩れ落ちるシロ。瞳から、ポロポロと涙がこぼれ落ちた。

『横つち…。』

『皆、向こうで待ってますよ。貴方も、一緒に行きましょう。』

二柱の神たちは、そう言って横島を抱え、空へと登って行く。シロは、輝く空に横島が消えて行くのを、ただ見送るしかなかった。涙で視界が滲むなか、最後の瞬間までシロはその場に座り込んで空を見上げていた。

どれくらい、時間がたっただろうか。シロは、不意に人の気配を感じてその場から離れた。今は、誰が敵かは分からない。ひとまず別の場所へ移ろう。

シロは、山の木々に紛れながら慎重に降りてゆく。

その時、シロの頭に先ほどの神の言葉が蘇ってきた。

『皆、向こうで待ってますよ。貴方も、一緒に行きましょう。』

待ってる？他に世界があるのだろうか？死んだ、というには表現がおかしい。それに…最後の消え方は、死んだ時の消え方ではない。まるで、文珠で移動したみたいな…

！！

シロは気づく。文珠！あれが未だに美神令子の事務所にあるなら、それを使って後を追えないだろうか。

思い立ったらすぐに行動に移すシロ。警戒しながらも恐ろしいスピードで山を降りると、急いで美神の事務所を目指した。距離はか



なりあつたが、シロは持ち前のスピードで風のように街を駆け抜ける。

事務所についたのは、およそ三時間後であった。

『お久しぶりです、犬塚シロさん』

「人工幽霊！今は挨拶してる場合ではないでござる！中に入れてくだされ！」

『しかし…オーナーからは誰も入れるなど…』

「美神令子は死んだでござるよ。」

『…！？』

確認したわけではない。しかし、あの横島と対峙して生きてるわけは無いと思つた。だから、断定したのだ。そして、人工幽霊もシロの言葉が事実であると判断した。霊的なパスが、どことも繋がっていないのだ。

「拙者は、文珠を回収しに来たでござる！あれは、悪用されたらとんでもない事になるのでござるよ！もう、オカルトGメンも信用出来ないでござるから…！」

『わ、分かりました！』

事務所の扉が開く。シロは急いで令子の部屋へと向かった。最後にこんな嘘をつくのは罪悪感が芽生えるが、シロはそれを心の奥底に追いやる。

『机の横の、上から二段目の引き出しです。鍵は私が開けましょう。』  
すると、カチャツという音がして引き出しが開いた。中には…かなりの数の文珠が。

「これは…一つも使わなかったでござるか？」  
浪費癖のある令子の割に、数が多すぎるのだ。

『オーナーは…大切にしていましたよ。一人で、その文珠を胸に抱いて、泣いてる時もありました。』

シロは、戸惑う。そんなに想っていたなら、なんで…。素直になれば、先生はいつでも迎えに行くというのに！分かってくれる日が来るって、待っていたのに！

『素直になる…。それは、人によっては難しい事なのかもしれません。』

人工幽霊は、どこか寂しそうにつぶやいた。

『さあ、行って下さい。あなたが行ったら、私も眠ります。』

「人工幽霊…。」

『思えば、いろんな事がありましたね。楽しい事も、辛い事も…。次のオーナーと巡り会えるまで、私は追憶に戯れる事としましょう。』

シロは、声を震わせながら言った。

「さらばでござる、人工幽霊。」

『さようなら、シロさん。良い、夢を。』

館を出るシロ。背後で、綺麗だった洋館が古びた姿へと変わって行った。

(今日1日で…何度別れの言葉を聞いたでござろうな。そして、これから…拙者も世界に別れを告げるでござるよ。)

文珠に文字を入れるシロ。だが、どういれていいか分からない。世界移行？どこへ行ったのだ？猪突猛進、後先考えないシロの悪い所だ。

その時。

『あー、アカンアカン。そんなんしたら自分、亜空間に閉じ込められるで。』

シロの背後に、あの神の一人が現れる。サタンだ。

「き…貴様！先生をどこにやったでござるかー！」

とっさに掴みかかるシロ。空中で身体が止まると、回転しながら地面に落ちた。

「むぎゅっ…」

『そないせんでも連れて行ったから心配せんでもええよ。』 サタンはのんびりした口調で言った。

『しかし、文珠集めるとはやるなあ…。ホンマは霊体しか移行でけへんのやけどこれなら生身で行けるな。』

シロにはチンプンカンプンだ。生身？

『せや。ホンマは、向こうに行ったら向こうの自分と同化すんねやけどな。どうする？自分、その身体のまま行きたいか？それやと向こうの自分と二人同時に存在する事になるけど。』

「どんな形でもいいでござるが、文珠を使いたいでござる。これは、存在そのものが危険過ぎるでござるから。」

シロが人工幽霊に言った事は、全部が嘘ではない。実際悪用すると危険だし、オカルトGメンの西条が令子に文珠を譲るように言い寄っているのを見た事がある。

『分かった。なら、今からでも行けるけど…なんか聞いたく事あるか？』

サタンが聞くと、シロはすぐに質問した。

「タマモは…タマモは渡ったでござるか？」

『あー、あのネーチャンなら寝て過ごしたい言うから妙神山に送っておいたで。……ん？どうしたん、自分？』

ガツクリと崩れ落ちるシロ。タマモめ、こんなに自分を心配させるとして…。会ったら絶対文句言つてやると心に決めた。

『で、時期なんやけどな。横っちは中学三年で同化するようにしてる。自分も同じ時期に人狼の里に行ってもらう。でな、向こうにいたら、すぐに横っちに会うのは我慢してくれんか。』

「な、何故でござるか！？拙者はすぐにでも…」

「アカンアカン、横っちがこっちの世界の事引きずって魔人化した

らどないすんねん。少し、落ち着くまで待ってあげれんか。」

「うう…分かったでござる。」

これは、仕方ない。さすがにあの姿は二度と見たくない。

『よっしゃ。ほな、行こか。向こうについたら、まず里の一員になるんやで。』

「分かってるでござるよ。」

シロは、持っていた文珠をサタンに渡す。サタンは文珠を数えてから更に靈気を加え、文珠の色を虹色に変えた。そして、シロに向かって文珠をかざす。シロの身体を虹色の靈気がまとい、空に開いた時空の歪み目掛けて一気に飛び立った。

『ほな、頑張りやー。』

かなり適当にエールを贈るサタン。シロは少し脱力しながらも、燃えるような瞳で時空の歪みを睨みつけた。

「先生、約束したでござるよ？いつまでもほったらかしてたら、こちから訪ねに行くでござるって。絶対、見つけ出してみせるでござるよー！」

そんな決意を叫びながら、シロは世界を飛び越えていった。それを見送りながら、サタンは、ふと言い忘れていた事に気づいた。

『あー…横うち、別人なつとるんやけど…。まあ、分かるよな？鼻利くやるうし。』

サタンは知らない。

この後、その横うちである和樹に自慢の鼻を封じられるシロの姿を。

想い人にお尻を突き飛ばされて、泣きじゃくるシロの姿を…。

人狼の里。

外界から結界で遮断されたこの地を、シロは崖の上から見下ろしていた。

世界移行を成功させたらまずやること、それは人狼の里の一員となる事。…いや、違う。この世界では、そんな悠長な事はやっていけない。

人狼の里を、掌握してやろう。二度と、神族にビビるような事のないように、男たちを徹底的に鍛え上げてやる！そして…

眼下に広がる里の光景、その中で、木の棒を振る子供の頃の自分の姿を見つける。

(この世界の拙者を、最強の剣士に育てあげるでござるよ！拙者が先生の所にお嫁さんに行っても、里を守るようにするでござる！)

ニヤリと笑ったシロは、おもむろに霊波刀を作り出した。そう、これは挨拶代わりだ。

「とりゃあああああつ！」

シロは、崖から里へ向かって飛び降りる。霊波刀を構えると、力一杯結界をぶった切った。

ズガアアアアンツ！

慌てふためく里の皆を挑戦的な目で睨みつけながら、シロはこの世界での第一歩を踏み出すのだった。

### 第三十八話 ダテ・ザ・キラーのはなし

とある高層ビルの最上階の一室で、男は苛立ちの声を上げる。ヒステリックな響きが聞くものを不快にさせる、独特の声。受話器の向こうの人物も、きっと眉をひそめている事だろう。

「なんで呪いが解けるんだよ！なんで一気に借金返せるんだよ！おかしいだろ！？あれはお祖父様の最高の呪いだっただ！第一あの親子に返済能力なんて…」

受話器の向こうの人物が、言いにくそうに言う。

「いえ…実は、借金返済は伊達雪之丞という男が肩代わりして行っただよです。GSの資格を持っているので、呪いを解いたのも恐らく…」

受話器を握る手が、震えた。こうなったら、手段を選んではいられない。とにかく無理矢理でも籍を入れさせてやる…。今まで僕の好意を無碍にしてきたツケを払わせてやる…！

「僕が、行くよ。呪符なら、いいのを買ったんだよ。これなら、また呪いで縛ってやれる。君は、そのまま監視を続けてくれ。」

「畏まりました。」

受話器を切ると、男は窓を見下ろす。眼下に広がる光景を眺めながら、つぶやいた。

「小鳩…君を手に入れる為なら、僕は何でもするんだ。そう、何でも、ね…。」



口元を歪めて笑う男の声が、部屋に響き渡った。

雪之丞が一人暮らしを始めてから、一週間が経とうとしていた。福の神となった貧は雪之丞を兄貴と呼び懐いており、その関係もあって花戸親子との関係も良好だ。貧には、小鳩に内緒で例のインゴットを換金した金を少しずつ渡している。と言っても、押し入れの中に適当に置いてあり、貧がそのつど必要な金額を勝手に持っている。銀行代わりなのだ。この間は借金返済の手続きを行ったが、その時適当にふりまくった小槌から飛び出したインゴットもすべてこの押し入れに入れてある。かなり不用心だ。

「アンさん、ええ加減扇風機でも買ったらどうや？ここ暑いやろ。夜中寝苦しくないんか？」

この日、東京は記録的な猛暑に襲われていた。ただでさえ七月下旬、もうすぐ八月なのだ。普通なら熱中症で倒れているだろう。貧は、先ほどの金でクーラーを買っていた。小鳩の稼ぎもあって、生活はかなり楽になったらしい。

「扇風機なあ…。思いつきりトレーニングした後には水風呂入ったら、眠くてスグ寝ちまうから寝苦しくないし、必要ねえような気もするな。」

「いや…寝てる間にヤバい事なるかもしれんやろ？せめて、小さく

てもええから冷蔵庫は買つとき。氷あるだけでだいぶ違うで？」

貧も、段々この男の無茶ぶりに不安になって来ていた。放つといたら死んでしまいそうなのだ。何も無い部屋で満足している雪之丞が、なんだか怖くも思えてくる。

「じゃあねえ、買ってくるわ。値段かんねえから幾ら持つてけばいいかんねえな。」

雪之丞は引き出しから十万円ほど取り出す。それをズボンのポケットに無造作に入れると、アパートを出た。出る時に…

「金余つたら、残りでアイスでも買ってくるわ。」

「どんだけ買ってくるつもりやねん!？」

貧の突っ込みを聞いて、これなら横島に笑いで勝てるかもな、と笑って雪之丞はドアをしめた。

雪之丞が向かったのは、少し離れた所にある商店街である。勘九郎が世話になる豆腐屋があるらしく、それを少し見たいという気もあつた。

「こつという所の電気屋なら親切だつて、小鳩は言つてたよな…」

世間知らずな雪之丞の判断材料の全ては、小鳩だつたりする。世話になりっぱなしだつた。

電気屋を探してしばらく歩く雪之丞。すると、目の前にどこかで

見たような顔が。機嫌良さそうに鼻歌を歌っている。

「散歩、散歩、散歩でござるー」

「死ぬ！奥多摩まで走るとか、俺でも死ぬ！」

それは、人狼の剣士犬塚シロと、それに引きずられている芦原和樹の姿だった。

雪之丞は、芦菔子の正体を知らされている。だから、あのGS試験会場での和樹を見て一度対戦してみたかったのだ。犬塚シロも戦ってみたい相手だった。そんな二人が、揃ってそこに居る。血が騒いだ。

「おう、久しぶりだな。」 雪之丞が手を上げ挨拶すると、シロたちも雪之丞に気づいた。

「ん？お主は…伊達雪之丞でござるか！奇遇でござるなー！」

「ゆ、雪之丞！元気してたか！？つもる話もあるだろうからこれから遊びにイタタタタ！」

異様に強い握力のシロに掴まれ、逃げられない和樹。靈力を回していない基本スペックでは、人狼のシロにはかなわないのだ。これが人類最強かよ、と苦笑いする雪之丞。仕方ない、助け船を出してやるか…。

「あー…シロ。散歩する体力あるなら、俺と戦ってくれねえか？一度お前と戦ってみたくつてな。」

「む…？」

シロはあくまで和樹と一緒に散歩をしたいだけなのだが、雪之丞

に対しては悪い感情を持ってないので、少し考える。

前の世界では、横島が独立した後、真つ先に味方になったのが雪之丞だった。自分が人間の汚さに絶望しかけた時、裏社会を生きてきた雪之丞に悩み事を打ち明けた事もある。自分同様接近戦を得意として、正攻法で戦う雪之丞と戦うのは、結構楽しかった。この雪之丞はどうなのだろうか？

「構わんでござるよ。」

シロは、雪之丞の申し出を受ける事にした。ホツとする和樹。散歩という名のトライアスロンをしなくて済んだ。雪之丞様々である。

「じゃあ、ウチに来るか？境内だったら広いし、よそに迷惑かかないだろ。」

「ああ、分かったぜ。」

内心ガッツポーズを取りたいくらい喜んでる雪之丞。シロと戦えば、シロを手玉にとった和樹の強さも実感出来るだろう。それは、今後の糧となる。

和樹に案内されて、雪之丞は天矢神社へと向かった。

天矢神社につくと、和樹はすぐに社務所へ行って藤姫に手合わせの件を伝えた。境内に人払いをかけるので、もう今日は社務所を閉めて自由にしていてくれと言った。藤姫は頷いてシャッターに手をかけ…

「…!?!?」  
固まった。

前の世界で自分が指導した雪之丞。こちらで見るのは初めてだ。  
(和樹、どついう事だい?)

(ん?ただの手合わせだよ。シロもやる気満々だし、藤姫も見るか?)

藤姫は頷いた。GS試験での戦いは、実際に見たわけではない。  
雪之丞がどれだけ戦えるのか、気になっていたのだ。藤姫は急いで社務所を閉めて、和樹たちの後を追った。

手合わせは、本殿前の広間で行われた。シロは霊波刀、雪之丞は初めから魔装術を使う。和樹は結界が作動しないように制御する係だ。審判は、藤姫が勤めた。

「じゃあ、30分一本勝負だよ。…始め!」  
藤姫が開始を宣言すると、雪之丞は猛然とシロに突っ込んだ。

「うおりゃあああぁっ!」  
魔装術によって能力の跳ね上がっている雪之丞の攻撃をかわすのは、容易ではない。特に、契約者はメフィスト。今や上級魔族となっているメフィストの授けた魔装術はメドーサのものとは桁違いのパワーを持つ。

しかし、その突進をシロは真っ向から受け止める。…左手に展開したサイキックソーサー一枚で。

「な…片手で!?!?」

「この程度なら拙者の未熟なソーサーでも充分対応出来るでござるな。」

シロは雪之丞の力を確認するかのようにつばやく。

「では次はこちらから行くでござるよ。」

シロの霊波刀が、雪之丞へと振るわれる。負けず嫌いな雪之丞は自分も同じように受け止めてやろうとして…  
やめた。

ヒュン、ヒュン、ヒュン！

一振りで三回斬りつける高速の剣撃を、雪之丞は紙一重でなんとかわした。直感で、受けてはいけないと判断したのだ。そして、それは正解だった。

「避けて正解でござるよ。勘はいいみたいでござるな。」

シロは、雪之丞にある程度実力があると判断して、少し本気を出す事にした。

「先生、蘇生の文珠を用意して欲しいでござる。二十秒以内にお願ひするでござるよ。」

「お、おいシロ！？」

次の瞬間、シロの身体が消えた。いや、あまりに速すぎて見えなかった。雪之丞の身体がくの字に曲がり、口からおびただしい量の血を吐く。

「ぐっ！？…があっ……」

その雪之丞の背中に霊波刀を突き刺し、霊気を爆発させる。魔装術が解けた雪之丞はそのまま地面へと倒れこんだ。

「や、やめ！和樹、早く文珠を！」

「分かってる！」

和樹は慌てて文珠を使って雪之丞を蘇生させる。シロの言っていた通り、『治療』では駄目だった。雪之丞は、ほとんど即死に近い状態だったのだ。

「シロ、やり過ぎだって！お前、今のは俺でも避けられないぞ！」

「い…いやー、ここまで弱いと思わなかったでござるよ…。」

シユンとうなだれるシロに、藤姫は愕然としていた。和樹の言う通り、あの攻撃は超加速を身につけていて初めて避けられるスピードだった。雪之丞に避けられるわけがない。雪之丞だって充分強くて驚いていたのだが、シロは次元が違う。

「とりあえず、罰として散歩おあずけ。」

「そ、それは酷いでござるよ！」

和樹は疲れた表情でシロの頭を小突いた。

雪之丞が目を覚ましたのは、それから二時間近くたった正午過ぎだった。社務所の奥の和室に寝かされていた雪之丞は、ふと、何か

の視線を感じて目蓋を開ける。そこには…

「コン！」

キツネがいた。

「なんだお前。」

まだハツキリ回らない頭で、起き上がる。逃げないキツネの頭を撫でていると、トントン、と襖を叩く音がした。

「すみません、起きてますか？」

「あ、ああ…。今起きた所だ。」

雪之丞が返事をする、遠慮がちに襖が開く。現れたのは、長い黒髪の綺麗な女性…

「…！お前、GS試験の時、勘九郎と戦った…」

「あ、はい。吉村ユリ子です。伊達雪之丞さんですよ。勘九郎さんは元気ですか？」

ああ、色んな意味で危ないくらい元気さ。そう答えながら内心驚いていた。ここはどんな神社だよ！これだけの猛者が集まるとか、何かの道場でもあるのか！？と。そして、やっと気づく。自分が、その猛者の一人にやられたという事を…。

「俺、やられちゃったのか…。ここまで実力が違いすぎると、笑えてくるな…。」

力無く笑う雪之丞。ユリ子は何と声をかけて良いか分からなかった。

しばらく雪之丞が落ち込んでいると、ユリ子の後ろから和樹とシ



口が入ってきた。

「よ、身体は大丈夫か？」

「すまなかつたでござるよ、雪之丞。」

雪之丞は、謝るシロに謝罪の必要はない、と言った。これは自分の弱さが招いた結果だと。雪之丞自身、GS試験でのシロの負け方を見て悔っていたというのもある。今回の敗北は、良い教訓となった。

雪之丞がシロにそう言って話が落ち着くと、シロは雪之丞の身体の周りをクンクンしてから、不思議そうな顔をした。

「雪之丞殿は、神族と同居してるでござるか？やたらと濃い神気の残り香があるのでござるよ。」

「ん？神族？…ああ、元貧乏神ならいるぜ。今じゃ福の神なんて言つて胡散臭い教祖みたいな格好してるけどな。」

雪之丞は、和樹たちにこれまでの経緯を話す。

貧乏神。

和樹の頭に、あの関西弁のやかましい神と、優しくて胸のデカい小鳩の姿が浮かんできた。デカかった。間違いなく、Fはあった。ふくの神の『ふく』が『ふくよか』を意味するなら、小鳩こそがふくの神だと思っていた。最近、微妙に横島に戻ってきている和樹である。

「ただ…疑問だったんだがよ。貧乏神って、神だろ？人の恨みとかで縛り付けられるもんなのか？」

雪之丞の言葉で我に返る和樹。：確かに、考えてみるとおかしい。確か、小鳩の曾祖父にあたる人間が呪いを受けて貧乏神に取り憑かれたと言う。これでは、まるで使役されているようだ。

和樹は、自分より神族や魔族に詳しい藤姫を呼んで聞いてみたが、やはり不自然な事だという答えが返ってきた。

「人に憑く奴はターゲットが死ねば余所に行くからね。それも、神族になるような存在なら、取り憑いて反省させるべき人間にしか取り憑けない。そういう制約があるはずだよ。家系に取り憑くのは怨霊の類だと思っけどねえ。」

藤姫は、少し考えてから言った。

「もしかしたら、強い力を持った霊能者が、呪いか何かで縛り付けたのかもしれないね。その曾祖父とかいう奴が悪人なら、色々恨みも買ってただろうし。」

和樹は、段々と心配になってきた。もし、まだ小鳩の家系が恨まれているなら：また別の呪いを受ける事にならないか？

それは雪之丞も思っていた事らしい。布団から抜け出した雪之丞は、すぐさま和室を出ようとする。

「おい待て、雪之丞！」

「なんだ、和樹！早く帰って確認しねえと……」

「何か着ろ！」

和樹に言われて初めて気づく。雪之丞はパンツ一枚だった。

「ご、ごめんなさい、血だらけだったから早く洗濯しなきゃって……」  
顔を両手で押さえ、指の間から目を爛々と光らせるユリ子。シロ

は吹き出し、藤姫は脱力した。イツナは：恥ずかしそうにしつぽで顔を隠している。

「う…うおおおっ！これなら文句ねえだろ！」

雪之丞は魔装術を展開する！そしてそのまま社務所の外へと飛び出して行った。

「馬鹿、それはそれで不審者だ！」

慌てて追いかける和樹、ついて行くシロ。残った三人はしばらく呆然としていた。

猛スピードで走る雪之丞とそれに追隨する二人。和樹も嫌な予感がしていたので、花戸親子の安否を確認したかった。決して、目の保養が目的ではない。多分。

着くと、そこは和樹には懐かしいオンボロアパート。壁のシミやひび割れさえも同じで少し感動する。懐かしい風景だが、雪之丞の部屋の前を見てそんな気持ちは吹き飛んだ。

「貧、房江さん、どうしたんだ!？」

そこには、倒れている房江と、それを介抱する貧が。房江の身体には、禍々しい黒い霧のような物が取り巻いていた。

『あ…アンさん…遅かったやんか…。どこ、行つとつたん…？』

「悪い、遅くなった！何がどうしたってんだ！？」

雪之丞が言うと、貧はヨロヨロとしながら立ち上がった。貧も、黒い霧を身にまとっている。

『前々から、小鳩に言い寄つとつたアホがおんのやけどな…、何度も断つとつたら、キレよつた…。呪いの札バラまいて、小鳩さらつて行きよつたんや。この呪い…、ワイを縛り付けとつたのと同じやつやで。簡単にはとれん…』

ギリギリ、と齒を噛む雪之丞。何なんだ、そいつは…！

「雪之丞、落ち着け。まず二人を助けるぞ。」

和樹はすぐさま房江の身体を調べる。使われた札の種類さえ分かれば文珠で治せるのだが…。

「…って、これ厄珍堂の札じゃねーか！あのオッサン、また怪しい霊能グッズ手に入れやがつたな！？」

G S協会非公認の札。かなり特殊な呪いの札だ。陰の気を集めるという効果を持つこの札は、使い方によってはかなり危険な物となる。既にある呪いを補強したり、元々別の人間に向けられていた呪いを無関係な人間に放つ事が出来るのだ。そして、一番危険なのは…貧乏神でさえ縫い付けてしまう、呪いの固定。余りに危険なので、流通は禁止されていたハズなのだが…

「まあ、札が分かれば打ち消せるけどな。」

和樹は、『解呪』の文珠で房江と貧の呪いを解く。光は一気に黒い霧を消し飛ばし、房江と貧の顔にも生気が戻った。

和樹たちは、まず雪之丞の部屋で、回復した房江に事情を聞いた。花戸の高利貸しには、ライバルとなる高利貸しが居たという。両者共仲が悪く、暴力団と繋がりがあある関係で時に血を見る争いを展開する事もあったという。祖父が貧乏神に憑かれてからは、そのライバルが一気に勢力を伸ばした。没落する花戸をあざ笑いながら、金融業界の一大派閥を作り上げるに至る。確たる証拠は無いが、十中八九、貧乏神を縛り付けたのはこのライバルの人間だろう。

今回、小鳩をさらったのはそのライバル高利貸しの跡継ぎの男だという。どういう経緯か知らないが、幼少の頃より小鳩につきまわっていた。最近ではバイト先に嫌がらせをして辞めさせようとするなど行動がエスカレートしていたという。

「警察とかはどうしてんだよ。」

『アカンねん、どう手をまわしたんか知らんけど、ロクに取り合ってくれん！いつつもたらい回しか保留や！パトロールなんて口ばかりやしな！』

貧が憤り、房江が泣く。雪之丞は怒りに顔を真っ赤にしてるが…。和樹とシロは違った。

「雪之丞、今回は立件できるし助け出すのもワケないぞ。」  
そうやって、和樹は先ほどの札を見せる。

「違反した札を使った犯罪。オカルトGメンなら、動いてくれる。尚且つ今回は神族を不当に縛り付けた。もはや人間界だけの問題じゃない。」

「それに、拙者がいれば何処につれて行かれようが探し出せるで。」

ざる。小鳩殿の匂いと、札についた臭いがあればワケないでござるよ。」得意気に言うシロ。二人は、かつて前の世界でこの手の犯罪者と戦って来た経験を持つ。対処の仕方なら馴れたものだ。

「済まねえ、恩に着る！」

涙を流して頭を下げる雪之丞。魔装術が解けて思いつきりパンツ姿なのが玉に瑕だが、潔く和樹たちに助力を求めた姿は男らしかった。

その頃。

件の男のビルの一室で、小鳩は純白のウェディングドレスを身に纏って椅子に縛り付けられていた。

「そうだ。母親にかけられた呪いを解いて欲しかったら大人しくしてるんだ。君さえ手に入れられれば、僕だってこんな無茶はしないんだ。」

「何故…何故私なんですか…」

「分かってるだろう!? 好きじゃなきゃこんな事はしない! 君が僕だけを見てくれれば良かったんだ! なのに…なのに、いつの間にか伊達とかいう男と親しくなりやがって…!」

バサバサ、と手にした写真を小鳩に叩きつける。それは、小鳩を写した盗撮写真。雪之丞に向けて微笑む姿が写し出されていた。

「僕には、こんな笑顔見せた事無かったのに!」

小鳩は、悲しくなっていた。

彼とは、幼なじみだった。尊大な態度は昔からだったが、決して悪い人間ではなかったハズなのに。子供の頃は、小鳩だって笑顔で彼と遊んだ事もあったのに、もう彼はその事も忘れていた。全ては、恐らく、お金に心を狂わせられたせいなのだ。お金さえあれば何でも出来る…中学生の頃、友人と称する人たちにお金を与えていた姿を見た時。もし止めていれば彼はここまで狂わなかったのではないか。

小鳩は、その贖罪として結婚を受け入れようとしていた。筋違いもいい所である。

男は、結婚式という形式で、強制契約の儀式を行おうとしていた。場所は隣接する教会。勿論、あのGS、伊達雪之丞の襲撃を警戒して暴力団を雇って警備は万全だ。欲しいものは、何としてでも手に入れる…心なんてものは、金さえ与えれば後からついてくる。そう信じていた。

「じゃあ、行こうか小鳩。」

縄を解き、手を取る。

あきらめ顔の小鳩は、力無く手を引かれ、部屋を出て行った。

「アッテンション！ーッ！！」

鼓膜をぶち破るかのような大声が、オカルトGメン東京支部に響き渡る。隊員達は一糸乱れぬ統率の下、直立不動の態勢で司令官の女を見た。和樹たちは…啞然としている。

「今回の作戦は、神族に呪いをかけ不当に縛り付けた重大犯罪者の逮捕と、拉致された花戸小鳩の救出である！この作戦は人間界での魔族の信用を得る為にも必ず成功させねばならない！」

おいおい、正体ばらして…いいのか。ここには魔族関係者しか居ない。和樹は呆れながら周囲を見渡した。

司令官は、春桐魔奈美という女性だが、前の世界では魔界の特殊部隊に所属するワルキューレ大尉だった。こちらでは、どういう経緯かオカルトGメンの副隊長を勤めている。隊員たちは皆女性で、やはり魔族。芦優太郎から話は聞いていたが、ここまで完全に掌握をする事は無いだろうに。

「これよりA班は依頼者である芦原和樹氏と共に容疑者の確保と女性の救出に向かう！B班は厄珍堂へ行き事情聴取へと向かえ！」

「……了解！」「」「」

一斉に敬礼すると、隊員たちは素早く身支度を整え作戦会議室を飛び出してゆく。指示を出した後、春桐は和樹の方へと歩いて来た。

「さて、作戦には和樹さん達も参加すると言う事ですが、戦闘面は大丈夫でしょうか。…いえ、実力を疑っているのではなく、同じ人間を相手にして面倒な事にならないかと思っただけです…。」

「ああ、それは大丈夫だよ。学校にバレてもGS関係の仕事だと言



えば口出し出来ないようにしてあるし。」

和樹は即答する。春桐の心配は、万一作戦中に人を殺してしまった時、所属する学校などで問題が起こらないかという事である。

「拙者も問題ないでござる。」

「俺も大丈夫だ。」

その答えを聞いて、春桐は頷いた。

「では、これから現場へ向かいます。作戦中は、司令官である私の指示に従って下さい。」

「コ、イエス、サー！」「」

そう言うと、春桐は楽しそうに微笑んだ。

和樹たちとオカルトGメンは、前もってシロが特定していた地点へと向けて動いていた。嗅覚で方向を断定し、房江と貧から得た容疑者の情報を照らし合わせる。あとは広範囲をカバーするGメン特製の見鬼くんや小鳩の霊体反応を探し出しておしまいだ。

現場へと向かう大型車の中、雪之丞は魔装術を展開して全身を覆っていた。その姿に隊員たちは珍しそうに見入っている。春桐も、少し驚いていた。

「それは、メフィストの魔装術ですね。知り合いだったのですか？」

「え？ああ、羽居：ハーピーの所で修行してた時に会ったんだ。面白いからって、教えてくれたぜ。アンタも、知り合いだったんだな。」

春桐はニコニコ笑っている。

「一応、元上司にあたる人物です。今は、ただの友達ですよ。」

後ろで会話を聞いていた和樹が驚いていた。メフィストとワルキユーレが、友達？どうなってるんだ？いろいろ疑問に思ったが、今聞く事でも無いか、と聞かないでおいた。今は、それより…

「雪之丞。お前、小鳩に正体を見せないつもりなのか？」

雪之丞は言っていた。今回の件、俺が助けに行った事伏せて置いてくれ。俺も、魔装術で全身覆って誰か分からなくするから、と。

「ああ…。こんな格好、普通の奴は怖がるだろ。それに、アイツは今まで暴力団やら借金取りやら、世の中の汚い所ばかり見てきたしな。今回の件が片付いたら、俺みたいな戦う事しか能がねえ日陰者とは関わらずに、綺麗な場所で生きて欲しいって思うんだよ。」

何言ってるんだ、こいつ。

何のダークヒーロー気取ってるんだ。男なら誰が敵になるのが守り通せよ…とも思うが、口にしなかった。何故なら…

「ぐすっ…」

「うう…格好良すぎます…」

隊員たちが感動して泣いてしまってるのだ。こんな空気で言える

ワケがない。

「うう、漢でござるよー！」

まあこの犬は置いといて。

和樹は何としても雪之丞に小鳩を救って欲しいと考えていた。

教会では、どこからどう見ても結婚式、という装いで儀式が行われようとしていた。契約書も、婚姻届に似せた様式である。男は、これが本当の結婚式だとばかりに興奮し、幸せそうな顔で小鳩を見つめている。周囲には、護衛につけた数人のボディガードのみ。大多数の人間は、教会の外で見張りをしている。

小鳩は、身体の奥から沸き起こる嫌悪感と恐怖感に震えが止まらなかった。母の為…貧の為…そう考えて自分を納得させていたが、やはり儀式を目前にすると本能が拒絶反応を示す。憧れていた結婚式が、こんな形で行われるなんて…それも、これから交わされる契約は悪魔を呼んで行われると言う。そんな結婚式があるだろうか。

小鳩は、瞳を滲ませた。

これが、夢なら覚めてほしい。これが物語の世界なら、すぐにでも正義の味方が助けしてくれるのに。

…その時。

教会の外で、けたたましい音が響いてきた。車の急ブレーキ音、誰かの叫び声、連なる銃撃音。教会の中のボディガード達も困惑

する。

「な、何なんだよ！お前ら、ボサツとしてないで見てこいよ！」

ヒステリックにわめき立てる男。ボディガード達は、何か言いたげな表情をしつつも言うとおりに出て行く。いいのだろうか、この中の警備は…

「い、い、今更来たって遅いんだ！」

不安な表情を隠せないまま、男は小鳩に手を伸ばす。身を退いて怯える小鳩。その二人の耳に、今度はすぐ真上で大きな音が聞こえてきた。

ガシャアアアアンツ！

教会の上部、ステンドグラスに描かれたキリストが砕け散った。

赤や青、原色の硝子が乱反射してゆっくりと落ちてくる。その光の欠片たちの真ん中に…

真紅の甲冑に身を包んだ一人の男の姿があった。

教会を取り囲むヤクザの集団に、車ごと突っ込む春桐。停車と共に車の中から和樹や隊員たちが飛び出す。和樹の『反』文珠で敵の銃撃を反射すると、後は一方的な戦いとなった。

そんな中、和樹は叫ぶ。

「雪之丞、お前は中へ行け！お前が小鳩を助けるんだ！」

「なっ…いや、俺は…」

困惑する雪之丞。

敵をなぎ倒しながら、隊員たちも口々に雪之丞へ声をかける。

「きつと、待ってますよ！」

「格好良い所、見せてください！」

「大丈夫、あなたならやれます！」

ハッキリ言っつて悪ノリである。単に、自分たちの好きな展開に持っつて行きたいだけなのだ。

…そんな中、シロだけは真面目な声で雪之丞に言った。

「雪之丞殿。どんなに強くても…躊躇して、間に合わなかったら何の意味も無いでござる。今、そこに立っているのは誰の為でござるか！」

「…!!」

皆、銃弾と剣戟の嵐の中、雪之丞の決断を待つ。雪之丞は、目の

前に迫って来ていた雑魚を殴り飛ばしてから、春桐の方を見た。

「上官命令だ。行つて来い！」

「おう！」

背中に隊員たちの声援を背負って、雪之丞は教会へ向かって駆け出した。

教会上部、雪之丞は全身を魔装術で覆い、ステンドグラスをぶち破って内部へと侵入した。

高さ約10メートル、雪之丞は並んでいる机を叩き割って着地をする。降ってきたガラスの破片が床の上を踊った。

「な…化け物だ！おい、警備、なにやってんだよ！おい！」

雪之丞は、怯える小鳩の姿を見る。ウェディングドレスに身を包んだ小鳩は、美しかった。しかし、その顔に涙の跡を見つけ悲しくなる。なんて顔させやがる…これが好きになったやつにする事が。

「お前、何なんだよ！何モンだよチクショウ！」

急いで小鳩を引き寄せようと手を伸ばす男。雪之丞は、素早く小鳩の前に立つと男を蹴り飛ばした。

ドガッ！

「うわあぁっ!?!」

尻餅について怯える男。雪之丞は、自分の名を名乗るつもりは無かった。だから、こう言ったのだ。

「俺の名は…ダテ・ザ・キラー!!」

「伊達さん!?!」

…バレた。

「ダテ…あ、あのGSか! チクショウ、また邪魔しやがって!!…けど、もうお前はお終いだぞ。こんな事したら、警察が黙っていない!」

急に強気になる男。余程自信があるようだ。

「お終いはオメーだ阿呆。ここに来てんのはオカルトGメンだぜ。逮捕されんのはお前だつてさ。」

「な…デタラメ言うな! 警察機関には根回しは終わってるんだ! オカルトGメンだって、前々から賄賂を渡している!」

残念、オカルトGメンはつい最近体制が変わっている。ついでにその件でも近々逮捕状が出る。

そんな、情けない事を叫んでいると、男の前に小鳩が歩いてきた。

「ああ、小鳩! やっぱり僕の…!」

パアアンツ!

教会に、小鳩の平手打ちの音が響いた。

「いい加減にして！…お金の事ばかり気にして、あなたは何も分かってない！」

男は、信じられない物を見るような目で小鳩を見た。

「な…何言ってるんだよ。お金がなくちゃ、何も出来ないじゃないか。君は、社会の事が分かってないからそんな事言うんだよ…」

「そうね。私、アルバイトしかした事ないから、社会の事は分かりません。けど…あなたより、ずっと、人の気持ちは分かるつもりです。あなたは、結局人を見ていないじゃないですか。奪ったり、押し付けたり、振り回すだけ。私、そんな人を好きにはなれません。」

「グッ…ううう…！」

こみ上げてくる怒りで顔を赤くする男。

「君だって、僕の気持ちが分かってないじゃないかあああつ！」

拳を振り上げる。身をすくめる小鳩。雪之丞は、死なないように手加減してアッパーカットを放つ。

「ばぐうつ！？」

情けない声を出して吹っ飛ぶ男。雪之丞は、冷たく言い放った。

「そりゃそうさ。小鳩が分かるのは人の気持ちで、人でなしの気持ちじゃねえ。…小鳩、行こう。知り合いが貧とお袋さんを治してくれた。皆、待ってるぜ。」

「はい。」



小鳩の手を取って、その場を後にする二人。こんな下らない奴にこれ以上付き合う必要は無い。外の銃撃も止んでいる。もう、安全なハズだ。

「ふ…ふふふ…人でなし、か。」

雪之丞達の背中に、男の笑い声が響いてきた。

「だったら、なってやるよ、その人でなしにさあっ！」

なんだ、と振り返る雪之丞。小鳩は、ハツとする。

「いけない、契約書！彼が持ったままだわ！」

「もう遅いよ！出でよ、契約神ミトラ！僕と小鳩の婚姻を結ぶのだ！」

持っていた精霊石を、床に叩きつける。前もってうっすらと描かれていた魔方陣が、光を放った。

ズズズズズ…

魔方陣から、巨大な悪魔が現れる。獅子の頭を持ち、漆黒の翼をためかせた上級魔神。契約を司るゾロアスター教の神、ミトラであった。

『どうも。』

…やけにフランクだ。

「この契約書通りにするんだ！早くしろ！」

「てめえ！」

雪之丞が急いで駆け出すが、遅かった。ミトラは契約書を手に取り、内容を確認して…

『だめー。』

拒否した。

さすがに雪之丞もずっこける。

「な、な、なんで！？なんでダメなのさ！？」

『あのね、婚姻届なんて大事な物、なんで鉛筆で書いてちゃうの。万年筆が無かったら、せめてボールペンで書きなさいよ。』  
何気に常識人だった。

『あとね、漢字の間違い多すぎ。ちゃんと初めから書き直しなさい。はい、消しゴム。』

「わ、分かったよ。僕だって初めてなんだから、そんなキツク言うなよ。」

男は、ブツブツ言いながら消しゴムで自分の名前を消す。そこへ…

バキイイッ！

「はぶあんっ！？」

雪之丞の拳が炸裂する。男は、その場で縦回転して床に叩きつけられ、気絶した。

「伊達さん！」

「よし、これで契約は無しだぜ。ミトラさんよ、呼び出して悪かった。もう、帰っていいぜ。」

にこやかに、雪之丞が言う。しかし、ミトラは首を横に振った。

「ダメー。」

「な、なんだと!?!」

「あのね、契約書用意しちやっってる状態で呼び出したら、その契約書の分は契約執行しないと帰れないの。だから、その空白埋めて提出して下さい。」

なんとという事だ…

雪之丞は契約書を見て、うなだれる。小鳩は、自分の欄をしつかりボールペンで書いてしまっているのだ。これは…

「伊達さん、ちょっと見せてもらえますか?」

「あ、ああ。」

雪之丞は、契約書を小鳩に渡す。そして、なんとかならないか思案を始めた。

契約書を破るのは無しだ。契約神の前でそんな事をやったら殺される。ハッキリ言って、こいつに勝てるとは到底思えない。

「伊達さん、ゆきのじょうの『じょう』ってお城の『城』ですか?」

「ん?いや、『丞』だ。こっ書くやつ。」

「ありがとうございます。」

しかし、こっした契約ってなにか抜け道ないのかよ。印鑑押してないからダメ、ってのはどうだ!?!

「印鑑は必要なのか？」

『いらぬよ。靈気を少し分けてもらうからね。』

何なんだよ、市役所手続きみたいな感じじゃないのかよ！

「伊達さん、生年月日書いてくれますか？」

「は？まあいいけど…」

「ありがとうございます。」

どうすればいいんだ…このままここに引き止めたらこの馬鹿男が目覚めます。早く解決方法考えねえと…

「家族欄とかは別にいいんですよね？」

『うん、いいよー。魂の契約だからねー。』

…さっきから、小鳩は何をやってるんだろっな？

そう思って振り向くと、小鳩は真剣な顔で雪之丞を見つめていた。

「伊達さん。伊達さんは、私の事、好きですか？」

「ん？ああ。……え？」

「良かった！私も、伊達さんの事大好きです！」

雪之丞の顔が、茹で上がる。今、何て？俺は何て返した？

「伊達さん。伊達さんは、私を大切に思ってくれますか？」

「そりゃどうでも良かったら助けにこねえし…って、何言ってるやがる！？」

「良かった…。私、捕まえられてる間、伊達さんが助けに来てくれたらって思ってたんです。会って間もないアナタの顔ばかり浮かんで…。」

キュッと、手が握られる。

「私を、救ってくれますか？お礼は、私の全てを捧げます。」

「はあっ！？いや、お礼なんていいんだ。俺はお前を助けたくてここに来ただけで…」

ニコッと、小鳩が笑った。

ニコッと、ミトラも笑った。

オヤッと、雪之丞は首を傾げた。

「では、お願いします。」

「はい、確かにー！これで二人は魂レベルで結ばれたから、これから何が何でも結ばれるように強制力が働くようになるからね。邪魔は入らないようになるから、仲良くするんだよ？」

「はい！ありがとうございます！」

雪之丞は、今更ながらに理解する。今、今渡したのはあの契約書じゃないか！？

「じゃー帰るね。二人とも、お幸せにー！」

陽気な声を出して去って行くミトラ。雪之丞は慌てて追いかけるが、魔方陣は光の粒となって消えてしまった。雪之丞は、勢い良く

床に顔面から突っ込んだ。

しばらくして、表を完全に鎮圧して駆けつけた和樹たちが見たのは、魔装術が解けパンツ一丁で放心状態になっている雪之丞と、それに幸せそうに寄り添う小鳩の姿であった。

…こうして、雪之丞の長い長い1日はやっと終わりを告げる事になったのである。

さて、件の男であるが、雇っていた暴力団地獄組メンバー共々オカルトGメンのご用となった。罪状は多岐に上るがその中でも特に大きく目を引くのが、神族に対する行為である。

厄珍堂から出回った違反呪符の殆どを、この男が購入している記録が出てきたのだ。貧乏神と房江に対して使われた事が証明された後、男は神界の裁判にかけられる事になった。そこで、ヒヤクメの調査によって祖父の悪事もバレる事になる。神族に対する犯罪行為を、男は祖父の分まで背負う事となった。

男に課せられた罰。それは…

死後、貧乏神となる事

男は、今世で人間社会の罰を受けた後にも更に罰を受ける事にな

ったのだ。

…ちなみに厄珍も違反品を売りさばいた事で同じくオカルトGメンに逮捕されたが、すぐに保釈金を払って出てきたらしい。彼は、きつと懲りないだろう。知らせを受けた人間は、皆そう思ったという。

そんな騒動があつてから、数日。雪之丞と小鳩は、表向き何時もと変わらない生活を送っていた。雪之丞は日々修行に励み、9月からの正式採用に備えている。小鳩は、前よりも少し余裕を持ったシフトでアルバイトに励んでいた。まるで、あのとんでもなく長い1日が嘘だったかのよう。二人は二人の日常に戻っていた。ただ、一つだけ前と変わった事がある。それは…

『アンさん。今日こそは扇風機買って来いや？そろそろ本格的に死ぬる時期来るで？』

「あー、分かった。けど、あれは買わなくていいよな？」

『ん？ああ、あれな。アンさん、分かっとなるやないか。』

朝、二人が笑いあっていると、雪之丞の部屋のドアがコンコンとノックされる。

7時ジャスト。小鳩のモーニングコールだ。

「貧ちゃん、雪之丞さん、朝ごはん出来ましたよー！」

「はいー！」

揃って返事をする二人。急いで着替えて、小鳩たちの部屋へと向かう。

以前と一つだけ変わった事、それは…

雪之丞の買い物リストから、炊飯器が消えた事だったりする。



### 第三十九話 鬼道と夜叉丸のはなし

GS試験を終えた翌日の朝、鬼道政樹は六道冥菜に書齋に呼び出された。一体なんの用だろう…。GS試験での無様な試合に関する小言だろうか。恐る恐る書齋に入ると、冥菜は予想外に朗らかな笑顔で鬼道を出迎えた。

「あのね、今日はご褒美と、今後の事でお話があるの。」

「…褒美と、今後ですか？」

「そう。政樹ちゃんもGS資格を所得したでしょ？それで、まずそのご褒美に、政樹ちゃんの今までの借金を無しにしてあげるわ。」

！？

聞き間違えではないだろうか。借金を…チャラに？

「それでね、9月からGSとしてウチの事務所に入ってもらいたいんだけど…他の事務所へ行きたいならそれでもいいわ。」

「え…あの、冥菜はん？」

鬼道は困惑する。一体どうしたというのだ、この人は？あまりにも自分にとって都合の良いすぎる展開。何か裏があるに違いないが…

「一応、8月中頃までには進路を決めて欲しいのよ。ウチに居るか、外に出るか。政樹ちゃんも男の子だから、一人立ちするのもい

いかもね〜。」

何故？何故？

一向に冥菜の考えが読めない鬼道。結局これで話は終わってしまい、鬼道は半ば放心状態で書斎を後にする。その姿を見送ってから、冥菜は満足げに頷いた。

冥菜には、元々鬼道を手放す気など無かった。没落したとは言え、昔は六道と並ぶ名門だった鬼道。霊的には優秀な血筋であり、その血を依り代とした式神を使う鬼道政樹は娘の結婚相手に最適だと考えていた。子供が産まれれば、鬼道の式神「夜叉丸」を六道の人間が受け継ぐ事が出来る。

鬼道は、中学を卒業してすぐに六道の使用人として働くようになった。つまり、学歴も無く手に職も持っていないので、外に就職に出るのはかなり厳しいのだ。鬼道の性格から考えると、GSの才能の活かせる場所でしか生きて行けないだろう。生活レベルを下げる事に耐えられないように、食事は娘と同じ物を食べさせてきた。もし根性を出して一人立ちしても、そこは六道が圧力をかければ問題ない。

では、何故こんな回りくどい事をするのか。それは、鬼道に自分から六道の事務所に入りたいと思わせる為だ。

嫌々働いていると、きっと娘に対して今までと同じような気持ちで接してしまうだろう。これでは執事の頃と一緒だ。それに、仕事に前向きになれなかったら最悪現場で死んでしまうかもしれない。鬼道を失ったら、娘は立ち直れないだろう。∴全ては娘の為。鬼道には他に道が無い事を理解して欲しかったのだ。

冥菜との話を終え、自分の部屋に戻った鬼道は悩んでいた。どうしよう、いきなり自由になってしまった。冥菜からは、しばらく執事の仕事を休んでしっかり考えて欲しいと言われた。仕事がポツカリと空いてしまったのだ。日頃、六道憎しで思考が止まっていた鬼道は、いざ自由にしていると言われても困るだけだ。

「休みなんて…有って無いようなもんやったしなあ。」  
ベッドに身を投げ出し、天井を見つめる。自分には、何が出来る？外に出て、何をしたかった？GS資格をとった方がいいが、これ以外に出て生きていけるのか…。

そこまで考えて、ふと、鬼道は気づいた。仕事が休み…なら、自由に時間を使える！鬼道はすぐに身支度を整えると、上司にあたるメイド長のフミのもとへ向かった。

「す、すみません、フミさん！外出許可を頂きたいのですが！」  
ビシッと姿勢を正して言う。私用で外出するなど、生まれて初めてかもしれない。緊張していた。

「はい、構いませんよ。」

「え…？」

呆気なく許可が下りて、拍子抜けする鬼道。いつもなら、外出許可書を書いて貰わなければならないのに…。

「あなたは、今日付けで執事の任を解かれています。GSになった事ですし、これからは私の部下ではなく同じ六道の従業員となるのですよ。もう、私の許可など要りません。」

そして、少し間を置いて続けた。

「遅れたけど、GS試験合格おめでとう。鬼道君、よく頑張ったね。」

「フミはん……。フミはん、ありがとう！」

不覚にも、涙が滲んだ。

「外出、するんでしょう？早く行かないと、窓拭き命じるわよ？」

悪戯っぽく笑うフミ。鬼道は目を服の袖でゴシゴシ拭った。

「あ、あかん、それは堪忍や！ほな、行ってきます！」

慌てて走って行く鬼道。それを見送りながらフミは微笑んだ。将来、六道を継ぐ人材。飴と鞭で飼い慣らしてきたのだ。今回で、完全に信頼を勝ち取った。後は頃合いを見計らって色仕掛けで墮とせば……。フミは妄想の翼を羽ばたかせご機嫌になっていた。

鬼道が向かった先は、とある教会だった。唐巢親父のいる、あの教会である。鬼道はあのGS試験で、自分を庇って倒れたピートに謝りたいと思っていた。あの時は余裕がなくてそんな事も考えられなかったが、試験が終わってからはずっと気掛かりだったのだ。特に……休憩所の食堂で泣いているピートの恋人らしき女性を見てからは。

鬼道はまず教会に入らず、門についてる呼び鈴をならした。門は開いてるし出入り自由なのだが、自分が歓迎されるわけがない。ま

ず敷地に入る前に許可をとろうと考えていた。

ガチャツ…と教会の扉が開く。中から現れたのは、あの日見た女性だった。

「あなたは…」

警戒するような表情をする。

「鬼道政樹と言います。GS試験での事で、ピートさんに謝りに来ました。お取り次ぎお願い出来ますでしょうか…。」

何度も練習した言葉。緊張で、少し膝が震えた。

女性は、しばらく鬼道を睨みつけてから、つぶやく。

「何故あの日、医務室に来てくれなかったんですか？私はその日、彼を傷つけた後に何もしようとしなかったあなたを見ています。介抱しようとも、謝りにも来なかった。今更来たって、受け入れられるわけではないです。」

その言葉に、鬼道はうなだれる。やはり、門前払いだ。予想はしていたが…辛い。

「それは、本当に申し訳ないと思ってます。僕は…」

「いいから、帰って下さい。そして、もう顔を見せないで。」

ピシヤリと言い放つ女性に、もはや鬼道は言葉を無くすしかなかった。思えば、あれは死んでもおかしくない怪我だったのだ。もう少しで恋人を失う所だった人に、自分はなんて軽い気持ちで謝罪の言葉を口にしたのか。

女性が教会へと入って行き、扉を閉める。鬼道は、その場に膝か

ら崩れ落ちた。

(僕は…僕は甘かったんやな。傷つけた事、軽く見すぎてた…)  
泣きそうな顔になる鬼道。そんな鬼道の背中に、一人の男が声をかける。

「あれ？君は試験の時の…」

鬼道が振り向くと、そこには金髪の好青年。ずっと謝りたかった、あのピートの姿があった。

「ふむ…では君は、六道家を出るためになりふり構わず戦っていたのか…。」

ここは、教会の中。唐巢神父は鬼道の話聞いて、何とも複雑な表情をしている。ピートは、気の毒そうな顔を。愛子はまだ許せないようだが、鬼道の話聞いて若干怒りも和らいでいた。

その後、ピートに向かって土下座をして謝り続けた鬼道。ピート自身は全然気にしてなかったのに逆に困ってしまい、慌てて神父に助けを求めた。何事かと駆けつけた神父が鬼道をなだめ、何とか落ち着いて貰ってから中へと通したのだ。そこで、何故GS試験でそのような余裕の無い戦い方をしていたのか聞いていた所だった。

「とにかく、資格を取れば出られると思って…。式神もろくに操れんクセに、僕は試合をしちゃうんです。」

鬼道の告白は、聞いていてかなり痛々しいものだった。あまりに理不尽な扱い。冥菜の事を良く知る唐巢にはそれが容易に想像できた。あの人なら、やりかねない。身にしみて実感できる。

「しかし…暴走したのは見ていたが、反逆するのは珍しいんだよ。君の式神は、いつもあなのかな。」

唐巢は、そこが気になっていた。符術としての式神と違って、自らの血に縛り付けるタイプの式神は自立した知性を持ち、しっかりと霊力を与えて制御すれば暴走はしない。暴走しても、主を襲うなんて事はまず無いのだ。

「夜叉丸は…いつも僕が何か命令すると段々機嫌悪くなって、最後にはキレよるんです。だから、ホンマは1日1回くらいしか使わんのやけど…。」

チラッとピートを見て、申し訳なさそうに言った。

「ピートはんが強すぎて、前の試合で使ったのにまた出してしまうたんです。で、暴走してしまっ…」

ピートは、強いと言われたのが嬉しいのか、少し照れながら頭を掻いた。神父は…やはり、何かを考えこんでいる。しばらくうなづいた後、鬼道に向かって言った。

「やはり、君の式神は何かおかしい。どうだろう、一度妙神山へ行って式神を見て貰っては。」

「妙神山？」

何の事やら分からないという表情の鬼道。ピートは、唐巢の意図が分かって納得した。夜叉丸や十二神将のような式神は、普段影の中に居て契約者の霊気や感情と密接にリンクしているらしい。なら、

シャドウを扱った修行をしている小竜姫なら問題が分かるのではないか。おそらくそう言う理屈なのだろう。

「妙神山は、自身の限界まで鍛えぬいた人間がさらに高みを目指す時に訪れる修行場だよ。その管理人の小竜姫様なら、君の武神の問題が分かるかもしれない。どの道そのままGSをするのは危険だ。私が紹介状を書くから、是非時間があるうちに行って来なさい。」

そう言うのと唐巢神父は紹介状を書き始めた。それを、申し訳なさそうに見つめる鬼道。ピートと愛子は、GS試験の時から想像出来ない鬼道の変わりように驚いていた。あそこまで鬼道を追い詰めた六道とは一体どれだけ酷いのか、と。

その日、鬼道は妙神山への紹介状を受け取り、教会を後にした。ピートは鬼道を責めてはいなかったし、愛子も納得はしていないものの、最初のようなキツイ態度をとる事は無かった。教会を出た鬼道の顔は、憑き物が落ちたかのように晴れ晴れとしていた。

それを…

遠くから監視している者がいた。大きなレンズのような一つ目を持つ一匹のコウモリである。コウモリは小さく「キキッ」と鳴くと、その場から飛び去って行った。

「うふふふ…可愛い顔してるなー…。」



モニターに映る鬼道の顔を見ながら、メフィストはにやついていた。そばにいる魔族の女性達は、そんなメフィストを微妙な目で見つめている。

ここは、メフィストの数あるアジトの一つ。かつて部下だった女兵士たちの住むマンションの一室である。その女兵士たちも、今では友達のような関係になっている。呼称こそ以前と同じだが、態度はかなりフランクだ。

「ねーメフィスト様？ やっぱりさつさとさらった方が早くない？」

「うん、私もそう思うー。またくすぐっちゃってさー、色々したりー…」

「この手の子って、DMかDSのどちらかよね。今のうち奴隷に仕立て上げるべきよ。」

好き勝手に言い始める女たちに、メフィストは顔を真っ赤にして言う。

「だ、ダメよ！ ちゃんと惚れさせて、告白してもらっただから！」

怒ってるのではなく、照れている。

「それに…」

少しジト目で皆を見て言った。

「まだ、そんなお腹になりたくないもの！」

「……………だよねー……………」

一様に頷く。彼女たちのお腹は、皆大きくなっていた。

メフィストの兵士たちは、メフィスト敗北後は魔界から人間界へと逃げてきていた。魔界では今、内乱の時代に突入しており、それ

ほど高い戦闘力を持たない彼女たちには生きて行きにくいのだ。芦優太郎のもとに身を寄せる事になった彼女たちは、その後オカルトGメンに所属して働く事になる。

彼女たちが中心となって、オカルトGメンは再始動する。メフィストの友人であり元軍人のワルキューレも加わり、順風満帆のスタートをきった…かに思われたのだが。思わぬアクシデントに見まわれた。

女たちは、皆、妊娠していた。

相手は誰か。そんなのはもう決まっている。問題は彼女たちが産休で抜ける間どうするのか、だ。メフィストは人間界のはぐれ魔族を必死で探し出し、何とか人数を確保した。それを、ワルキューレと二人で鍛え上げたのだ。これには、本当に苦労した。

メフィストがしばらくそんな苦労話をしていると、ガチャッと部屋のドアが開く。振り返った女たちはにこやかな顔で迎えた。

「やあ、遅くなってすまない。言われた通りシャーベット作ってきただけ…。あまり身体を冷やさないでくれよ?」

大きなお盆に色とりどりのシャーベットが入った器を乗せて、彼女たちの夫が現れた。西条だ。

わー、と手を叩いて喜ぶ女たち。エプロンをした西条は、器を配りながら苦笑いをする。妻たちの世話をする為に、時折有給をとっている西条。いつの間にか、主夫に馴れてしまっていた。子供が産まれたら、きつと育児休暇をとる事だろう。

「ねー西条くん。あなたも大概にしなさいよ?」

「ぼ、僕は襲われた側なんだが…」  
少し怯えながら抗議する。それを、メフィストはスプーンをくわえながらジト目で見る。

「また、新人指導しなきゃならなくなつたんだから…。今度は、アナタが指導しなさいよ？」

「は？」

固まる西条。女たちは、その反応を見ながらニヤついていた。

「ワルキューレ、来月から産休入るから。変わりに弟が来るから、ちゃんと指導してあげなさい。」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！彼女、本当に!？」

涙目で混乱している西条に、メフィストは呆れながら言った。

「女の嘘って怖いでしょ？これに懲りたら、余計な事考えないで真面目に仕事しなさい。」

真っ白に燃え尽きる西条を見て、妻たちは笑い転げるのだった。

次の日、鬼道は紹介状を手に妙神山の門前まで来ていた。唐巢は、「今回は修行ではなく診察してもらうのだから、天矢神社のゲートを使わせて貰えるか聞いてみようか」と言ったが鬼道は遠慮した。そこまで甘えるのは悪いと思っていたのだ。

妙神山への道は確かに遠く険しかった。が、スタミナだけはかなりある鬼道。大して体力を消耗せずたどり着く事が出来た。

「ここが、妙神山の修行場……。けったいな門やなあ。」

門には、大きな鬼の顔がはめ込まれている。その顔のそばには木札がかけられており、そこには見る者を威嚇するかのようなメッセージが刻まれていた。

『この門をくぐる者 汝一切の望みを捨てよ 管理人』

「望み、か……。何やったんやろうな、僕の望みは……。」

鬼道は自嘲気味に呟いた。実際自由にしていいたいと言われると、何をしたかったのか分からなくなったのだ。あれだけ恨み、憎しみ、逃げ出したいと願っていたハズなのに……。

「で？アンタらまさかこのまま背後から襲ってくる気と違うよな？」

鬼道が、鬼の顔に話しかける。背後に歩み寄ってきていた首無し巨人たちが、ピタリと動きを止める。

『ぬ、ぬう！？よく気づいたな！』

『今度こそ驚いてくれる人が来たと思っただが……』

少しへこんでいた。

「悪いけど、遊びに来たんと違うからな。唐巢神父という人から紹介状を書いて貰っとる。こここの管理人に会わせてもらえんやろか。」

さつさと話を進めようとする鬼道。しかし、鬼門たちはそれを一蹴した。

『ならん！もし通りたくば我々を倒すのだ！』

「……………」

白ける鬼道。関西の出ではあるが、鬼道は基本的にノリが悪いのだ。

「まあええわ。ほな、はじめよか。」

まともにリアクションをとってもらえなくて、かなり寂しくなってきた鬼門。これが仕事なのに。何か悪いことしたのか？鬼門たちはへこみながらも構える。

『なら、行くぞ！』

『そんな態度でいられるのも今のうちだ！』

鬼門たちは、鬼道目掛けて襲いかかる。まず一体の鬼が鬼道に向かって蹴りを放った。鬼道は軽々とそれを避ける。すると…

『へぶっ！』

『ぬおっ！？スマン、左の！』

向かって右側にある鬼の顔に蹴りがヒットした。鬼道は、門を背に戦っている。当たり前の展開だった。

次に、もう一体の鬼が体当たりをかましてきた。これも、難なく避ける。

『ぐはっ！？』

『わ、悪い、右の！』

しばらくそれを繰り返していると、鬼門たちは仲間割れを始めた。

『さてはワザとやっておるな!?!』  
『そつちこそ、意図的にしておるであろう!』

ギヤーギヤーと騒ぎ出す鬼門たちを、鬼道はしばらく白けた目で眺めていた。すると突然、ギギイ、という音を立てて門が開かれる。

「うるさいですよ! 一体何だと言うのですか!?!」

現れたのは、ショートヘアの活発そうな女性。健康的な美しさに、少し鬼道は見とれてしまった。鬼門たちは女性に一括されると、嘘のように大人しくなった。

「あら、あなたは…。GS試験を受けていらした方ですね。どうなさったのですか?」

こちらに気づくと、女性はニコツと笑って声をかけてきた。

「え、あの…唐巢神父という人に言われて来ました。鬼道政樹といえます。これ、唐巢神父から書いて貰った紹介状です。」 そう言っつて紹介状を渡す。少し驚いたような表情をしていた。

「あら、唐巢神父が? 珍しいですね。ちょっと読ませてもらいますね。…ふむふむ。」

紹介状に目を通す。そこに書かれていた内容を読んで、納得いったように頷いた。

「なるほど。事情は分かりました。それでは、早速中に入って下さい。あなたの式神、見せてもらいますから。」

「は、はい! お願いします!」

執事としての教育が行き届いている鬼道。綺麗な90度のお辞儀をした。女性は苦笑いを浮かべる。

「そんなに堅苦しくしなくても結構ですよ。…自己紹介が遅れました。私、この副管理人をしています、小竜姫と申します。宜しく願いますね。」

小竜姫はそう言ってから、鬼道の中へと案内した。緊張しながらついで行く鬼道。やはりというか何というか…鬼門たちは忘れ去られていた。

『右の…ワシら、今回ケンカしただけで終わったな…』

『言うな、左の…。それでも出番はあったのだ。無いよりは…無いよりはマシだ…』

何とも悲しい会話をしながら、涙を流すのだった。

修行場に通された鬼道は、まず銭湯の脱衣場のような部屋に入つて服を着替えさせられた。霊的な修行をする場所なので、俗界の衣服を着てはいけならしい。鬼道は言われるままに衣服を着替える。ちよつと中国風のデザインの服だった。

「では、こちらです。奥へどうぞ。」

「はい。失礼します…」

ガラスと、風呂場のあるような引き戸を開けると、そこにはだ

だっ広い風景が。和樹や横島たちが試練を受けた、あのシャドウの儀式を行う修行場だ。

「この魔方陣の上に立っていただけですか。アナタの式神を出してみます。」

言われた通りに魔方陣の上へと歩いて行く鬼道。中心に立つと、魔方陣が光りだした。その光と呼応するかのように、鬼道の影から式神が現れる。

「夜叉丸…。」

現れた夜叉丸は、まず何事か分からず辺りをキョロキョロと見回した。そして、小竜姫と鬼道の姿を見つけてしばらく顔を交互に見続ける。

…どれだけ時間が経過しただろうか。夜叉丸は次第に不機嫌になり、額に青筋を立てる。そして、懐の刀に手をかけた。

「ちょ、夜叉丸!?!」

夜叉丸は勢いよく鬼道に向かって駆け出す! 刀を抜いて、上段に振りかぶった。

キーンッ!

小竜姫がそれを簡単に神剣ではじく。そして、一括した。

「静まりなさい! 私の前で狼藉を働くならば仏罰を下しますよ!」  
ビリビリ、と鼓膜に響く。夜叉丸だけでなく鬼道までもその場に



倒れて震え上がった。

「まったく、一体どうしたと言うのですか。」  
カタカタと震える夜叉丸をなだめながら、小竜姫は夜叉丸の額に自分の額を当てる。これは、テレパスの一種。言葉の話せない夜叉丸とコミュニケーションをとっているのだ。

しばらく、「ふむ、ふむ…」という小竜姫の相槌だけが辺りに響く。鬼道は不安な顔でそれを見つめていた。そして…

「はあ…。鬼道さん、何故式神がアナタを襲うのか分かりました。」  
「なんだか、小竜姫が疲れたような顔をする。うつむいて涙を流す夜叉丸の頭を撫でながら、鬼道に説明を始めた。」

夜叉丸は、鬼道家に代々仕えている式神である。元は一振りの刀の九十九神で、鬼道誠司という人物が初めて血の契約を交わし式神とした。式神、とは言っているが使い魔に近い存在だ。符の代わりに血に宿る霊気で召喚する仕組みである。

鬼道の当主たちは皆、賢く強く優しかった。仕えるに値する人物たちだった。しかし…前回は酷かった。我欲の強いだけのロクデナシ。仕えるのが馬鹿馬鹿しくなっていたのだ。そのロクデナシから鬼道政樹に移ってからはかなり気が楽になった。どこか初代に似ている眼差しに、期待してもいたのだ。実際、成長するに従ってどんどん霊力は高まり、外見も凛々しくなっていた。

だが、期待は裏切られた。

素質は充分すぎるくらいある。優秀な主だ。しかし、鬼道は自分の式神よりも六道冥子ばかりを気にしていた。冥子の式神にも頭を下げたりいいように弄られている。何をされても我慢して、媚びへつらっているように見えた。

まあ、それだけなら失望するだけで済んだ。しかし、ある日冥子の手伝いで除霊現場で戦った時。悪霊の攻撃を受けて倒れた夜叉丸に、鬼道は言うてはいけない言葉を投げかけてしまった。

「立てい、夜叉丸！男やる！！」

…その時、何かが壊れた。

酷い。

こんなのって、無い。

だって…

だって、自分は女の子なのだ。

夜叉丸の心の中で、何かが急速に冷めていった。冥子にばかりいい顔をして、自分には冷たい理由。自分を男だと思っていたからだ。いつも乱暴に命令してくるのも、優しい顔をしてくれないのも…

その日以来、夜叉丸は言う事を聞くのを止めた。最初は我慢しているのだが、あの乱暴な命令を聞いているとイライラしてきて我慢出来なくなってくる。結果、気づくと刀を持って攻撃してしまうようになつていた。先ほど鬼道を襲ったのは、隣に小竜姫が居たからだ。また自分以外の女性と楽しそうにして…と、キレてしまった。

説明を聞いた鬼道は、愕然としていた。夜叉丸が：女！？ずっと長い間一緒にいたが、まったく気付かなかった。それが本当なら：いや、本当なのだろう。だとしたら自分はなんて酷い事をしていたのか。

夜叉丸が、小竜姫の後ろで小さくなってこちらを伺っている。悪いのは鬼道なのに、自分が悪い事をして怒られるのを恐れているよくな仕草。それを見て、鬼道はいたたまれない気持ちになった。確かに自分は日頃夜叉丸に乱暴な言い方をしている。男と思っていたと言っより、式神という存在をまるで道具のように思って扱っっていたのだ。ちゃんと人格を持った存在なのに…。その態度の積み重ねが、夜叉丸をここまで怯えさせてしまうまでになっていた。

「夜叉丸…。」

鬼道は夜叉丸の少し前まで歩みよると、その場で土下座をする。「すまんかった、夜叉丸！僕は、お前の事をちゃんと見てやれんかった！許してもらえんかもしれんけど、謝らせて欲しい！ホンマ、すまんかった！」

夜叉丸は、予想外の展開に戸惑った。どうしたらいいか分からず、オロオロしている。そこへ、鬼道は続ける。

「夜叉丸。お前が望むなら、気の済むまで僕を斬っつけて構わん。僕は、今までずっとお前の心を傷つけて来た。それで償えるんやったら：幾らでも斬っつけてくれて構わん！」

鬼道の言葉の後に、小竜姫が付け加える。

「私はヒーリングが出来ますから、本当に斬ってくれても構いませんよ。本当に貴女が恨みを抱いているなら。斬る事でそれが晴れるのなら、彼の言葉に甘えたらどうです？」

夜叉丸は…しばらく考えてから、刀に手をかける。手が、震えていた。鬼道は覚悟を決めたのか、姿勢を正して目をつぶっていた。

カチャツ…と、金属が擦れる音が響く。それは何度も細かく震えて、音を立て続けた。夜叉丸の身体も、小さく震え続ける。一歩踏み出してはうるたえ、また一歩踏み出しては震えを大きくする。そして…

『ピ…ピイ…』

ポロポロと涙を流して泣き始めた。

「斬らないのですね？」

小竜姫の言葉に、何度も強く頷く。

「許してあげますか？」

その問いにも、夜叉丸は大きく頷いた。小竜姫は、鬼道に優しく声をかける。

「鬼道さん、あなたの誠意は通じたみたいですよ。今後、今の気持ちを忘れずに彼女と接する事が出来たら…もう彼女が暴走する事は無いでしょう。」

目蓋を開ける鬼道。彼の目にも、うつすらと涙が浮かんでいた。

「夜叉丸、ありがとうな。許してくれて、ホンマにありがとう。」

『ピイイイ…』

感極まった夜叉丸は、鬼道に抱きついて大泣きを始めた。それを強く抱きしめ、鬼道は何度も夜叉丸に謝り続ける。

小竜姫は、微笑みながらそれを眺めていた。きつと、これからこの二人は最高のコンビになる。そんな予感を、抱きながら。

夜叉丸が泣き止んで、しばらくしてから鬼道は小竜姫に尋ねた。

「あの…ここで修行させてもらう事は出来まへんやろか。」

来た、と思つて小竜姫は内心ガッツポーズをとる。

「何故ですか？あなたの目的は式神の暴走を止める事でしょうか？」

「その…僕はまだ、夜叉丸に相応しい主ではないんです。修行なんてロクにやつとらんし…。だから、いきなりで厚かましいかもしらんけど…ここで修行させて下さい！早く一人前になって、夜叉丸を安心させてやりたいんです！ここは最高の修行場やと聞いとるし、絶対成長出来ると信じてます！せやから…」

必死に訴える鬼道、それを感動しながら見つめる夜叉丸。小竜姫も、修行場を誉められて気分が良くなっていた。

「良いでしょう！では、今日からあなたの妙神山での修行を認めます。基礎からみっちりやりますから、へこたれないでくださいね？」

「はい！宜しくお願いします！」

元気よく返事をする鬼道。彼は、この日初めて純粹に強くなりたとい願つた。それは彼が今まで生きてきて初めての事。逃げたいとか、復讐したいとか、そういった負の感情はそこには全く無かった。

鬼道の顔は、今までになく輝いている。夜叉丸は、頬を桜色に染めながらそう思っていた。

…こうして、鬼道政樹の妙神山での修行は始まった。六道家に残るのが、それとも外に出るのかはまだ分からない。しかし。

この修行によって、彼は人間界最強の式神使いになる。それは六道家が彼を自由に扱えてきた日々が終わりを告げる事をも意味していた。

## 第四十話 前世のはなし

その日、六道家のメイド長のフミは一本の電話を受け取ると、少し慌てたように六道冥菜に取り次いだ。電話の相手は鬼道政樹。妙神山のふもとの公衆電話からかけているという。

「…というわけで、妙神山で修行する事になりました。勝手に決めてしまい、申し訳ありません。」

「いいのよ。小竜姫様のご好意なら有り難くお受けしなさい。くれぐれも、失礼の無いようにね。」

のんびりした口調で言うものの、心中穏やかではないのか眉間には微かに皺がよっていた。

ピツ…とボタンを押して通話を終える。受話器をフミに渡すと冥菜はため息をついてフミに言う。

「美智恵ちゃんに伝えてもらえるかしら。政樹ちゃんのGS正式免許を認めるテスト、美智恵ちゃんに任せるって。」

「はい。かしこまりました。」  
フミはお辞儀をして、部屋を出ていった。

鬼道は、美神美智恵を師匠としてGS試験を受け合格した。よつて、正式なGSとして活動するには美神美智恵に認められなければならない。これは、余所の事務所を選んだ時に鬼道の活動を制限するための手綱であった。美智恵に認められなければ、鬼道は余所で正式なGSとして活動できない。助手として生きるのが精々だ。

今回、美智恵に暗に頼んだのは、鬼道がここを出ようと出まいとテストをして欲しいという事。もし妙神山で劇的な成長を遂げた場合に自分に刃向かうのではないかと心配になっていたのだ。美智恵なら、鬼道がどんなに強くなるかと倒せるだろう。これを機に、どちらが上かハッキリ分からせようと思っていた。

そんなやりとりがあったてしばらくした頃。六道冥子は中庭を小走り横切るフミの姿を、自室の窓から眺めていた。

(何をそんなに急いでるのかしら?)

昨日から、何故か皆せわしない。いつもそばに仕えていた鬼道もいない。構ってくれる人もあまり居ないし、仕事の依頼もない。なんだかつまらなかった。…冥子は、フミの後をつける事にした。

トトトトトト...

部屋を出て、階段を下りる。フミは丁度一階ロビーに入ってきた所だった。顔は、少し険しい。

冥子はそんなフミの様子に気づかないで、ただ楽しそうに追いかける。気分は悪戯っ子。フミをどうやって驚かそうかと考えていた。そんな冥子に気づかず、フミはある部屋の前で歩みを止めると緊張した面持ちのままノックをする。中から返事があると、フミは「失礼します」と言って入っていった。

冥子は足音を立てないように慎重に近づくと、話し声を聞き取ろうとドアに耳をくっつけた。ボソボソ、と聞こえてくる二人の女性の話し声…。それはフミと、時折霊能力の指導をしてくれる美神美智恵のものであった。



「あの人も…大人気なさすぎね。GS試験、見てたでしょう？あの不安定な戦い方見てたら小竜姫様も心配で鍛えてあげたくもなるわよ。別に謀反を起こそうなんてつもりは無いハズよ？」

「しかし…強くなって本当に外へ行ってしまったら！この際に、しっかりと手綱を握っておかないと…」

焦りながら話すフミ。個人的な感情で話している事は、もうバレバレだった。美智恵は、呆れながら言う。

「あの人もあなたも…鬼道君に出て行って欲しく無いなら、その事をちゃんと伝えた？単に押さえつけてるだけではいつか関係が壊れるだけよ？」

「しかし…六道の人間が鬼道の人間に頭を下げるなどあってはならない事です。ましてや当主である冥菜様が…」

「あのねえ…」

白けてしまう美智恵。こんな時にまで面子にこだわるとは、重病だ。

「家柄や権力で理由付けした所で、所詮、人と人なんだから。あの子、人の誠意を金で押し量るような曲がり方はしてないでしょう？そういうタイプは情に訴えれば応えてくれるのに、なんでわざわざ禍根を残すようなやり方をするのかしらね。」

美智恵は、リアリストだ。交渉に必要なのはあくまで相手のパーソナルを分析する為の情報のみ。家柄や生まれは数ある情報の一つであって、それだけを頼どころに交渉したりするのは余りにナンセンスだと考えていた。

第一…もし彼が自分から強い意志を持って修行を望んでいたとし

たら。それが、六道を離れる為だとしたら。どのみち六道は彼を手に入れる事など出来ない。手遅れだからだ。GSは精神的ストレスが非常に影響を与える仕事であり、無理やり押さえつけても役に立たないGSになってしまっただけなのだ。

「まあ、ここに雇われている身ですからテストは行います。ただ、あなた達はあなた達でしっかり考えなさい。彼に一体何を求めているのか。ひよっとしたら、彼を永遠に失うかもしれないのだから。」

「なっ…。わざと負けるつもりですか！？あなたが負ける事などありえませんか！」

「違うわよ。私が、神族に手ほどきを受けた人間相手に油断するわけないでしょう？全力で行くわ。…だから、ね？」

美智恵は、ゾクリとくるような恐ろしい顔で言った。

「彼と死に別れる事になるかもしれないわよ。後悔しないよう、伝えておくべき事は伝えておくようにしておきなさい。」

！？

その言葉に反応したのは、フミだけでは無い。部屋の外にいる冥子も同様だった。

(まーくんが…まーくんが死んじゃう！)

冥子は、足を震わせながら、その場を後にする。一体何をどう聞いていたのかは分からないが、その顔は酷く青ざめていた。階段を手すりに寄りかかりながらフラフラと上り、自室へと転がり込む。

( どうしよう…まーくんが居ないのは、死んでしまいそうだから？  
よく聞き取れなかったけど…まーくん、無事に戻って来て〜！ )  
涙をためながら、冥子は机の引き出しから何やら沢山の紙を取り  
出し…何かを折り始めた。それは奇妙な形に歪んではいるものの、  
鳥のような形に姿を変える。

…ヨガのように身体をくねらせた、折り鶴がそこにあった。もしか  
しなくても、千羽鶴を折るつもりなのだろう。  
冥子は、必死で鶴のような物を折り始めた。

妙神山に、悲鳴が響き渡る。

修行がスタートしてから二日目、未だ基礎中の基礎を習っている  
だけだと言うのに、鬼道は早くもへこたれそうになっていた。

「し、死ぬ！これは…アカン！」

「この程度、あなたには日常茶飯事でしょう？」

絶えず巨大な霊気弾に四方八方から攻め続けられる修行。体内の  
霊気を完全にコントロールして、シールドを張り続ける。霊的なス  
タミナを鍛えるのが目的だった。確かに、十二神将の暴走に巻き込  
まれた時と感覚は似ているかもしれない。

「うぬぬぬ…こんな、こんなモンでへこたれてたまるかあっ！」  
必死で耐えるが、身体から急速に力が抜けて行く。限界だった。  
朝から、夕方まで。食事休憩以外はぶっ通しでこの修行を繰り返していたのだ。

ドガアアアアッ！

周囲の霊気弾が鬼道を押しつぶし、爆発する。普通の人間なら死んでいる所だが、鬼道はというと…

「いちちちち…痛いもんは痛いな。」

少し涙を滲ませるくらいでピンピンしていた。これには小竜姫も呆れる。

「あなたは打たれ強さだけなら人間のレベルを超えていますね。」

「日頃から散々、痛めつけられとるし…。」

苦笑いしながら言う鬼道。あのGS試験の時にも感じていたが、この男は元々の身体の強さが半端ではない。あの試験でもし夜叉丸が暴走していなくても、ピートに鬼道を倒せたかは微妙な所だ。小竜姫は、もしかしたらこの男は大きく化けるかもしれないと思っていた。

「で、次はまたさっきの続きですか？」

「うーん…。いえ、体内の霊気も枯渇気味ですから止めておきましょう。これ以上は、死んでしまいますから。」

その言葉を聞いた鬼道は、思わずその場に座り込んだ。立っているのもやっとなったのだ。

『ピィ。』

気づくと、すぐ後ろにタオルを持った夜叉丸が控えていた。

「ああ、ありがとう夜叉丸。ホンマにお前はええ娘やな。」

『ピィ〜』

褒められて、とても嬉しそうな夜叉丸。自分で拭こうとする鬼道を制して、代わりに汗を拭いてあげている。その姿はまるで恋人同士のような。小竜姫は、やれやれと肩をすくめて言った。

「汗を流して来たら、そのまま夕食にしましょう。私は厨房にいますから、お風呂から上がったら声をかけて下さい。」

イチャつく二人にそう言うてから、小竜姫は修行場を後にする。

(私だつて和樹さんに甘えたいのになあ)

…そんな事を考えながら。

その日の夕食時。通された和室で、鬼道はかなり緊張しながら食事をとっていた。目の前には斉天大聖老師。その隣に天竜殿下。反対側に小竜姫。自分の右隣には妖狐タマモ、左隣に夜叉丸。人間は自分だけである。

「いちいちビクついてないで食べたら？」

タマモに促されて箸を進める鬼道。確かに美味しいのだが喉を通らない。今、自分は夢を見ているのではないかと思ってしまう。神様に囲まれて食事なんて、そんな経験出来る人間はめったに居ないだろう、と。

すると、左からスツと何かが。見ると、夜叉丸が箸で魚の切り身を鬼道の口元に運んでいた。

『ピ。』

「え、いや、まさか夜叉丸…」

『ピイ。』

少し上目使い。反則だ。

「分かった、分かったからそんな押し付けんどいて。…あーん。」

顔を真っ赤にする鬼道。モグモグと咀嚼する。緊張よりも今は気恥ずかしさが勝っていた。それを見ながら、天竜は笑う。

「やはり可愛い女の子に食べさせてもらうと格別だろうな。小竜姫、余にもあーんを試してみないか？」

「待つてて下さいね。今煮物の中から蓮根と人参だけをピックアップしてますから。」

「な、何故余の嫌いな物ばかりを!？」

和やかな食卓。老師も、にこやかな表情をしていた。そこに、一石を投じる者が…。タマモである。

「じゃあ、次は私の番ね。はい、あーん」  
鬼道の口の中に、サラダを突っ込む。突然の事に困惑しながらモグモグと口を動かす鬼道。タマモは、夜叉丸に視線を送り…

「ふふんっ」

…と勝ち誇るように鼻で笑った。

夜叉丸は…燃えた。

「あー、もう何やつちゆうねん。子供やないんやし自分で…モガアツ!?!」

凄い勢いでご飯が口の中に突っ込まれた!目を白黒させて慌てる鬼道。タマモは笑い転げている。夜叉丸は茶碗を空にすると、満足そうに頷いてタマモに向かって挑発的な視線を送った。

その挑発を受けたタマモは、にこやかに笑って…味噌汁を口に含んだ。

!?!

タマモが鬼道の肩を指でつつき、振り向かせる。その口元に顔を近づけ…

「んー」

「な、なんやー!?!」

「ピイイイツ!?!」

それは…口移し。迫り来るタマモの唇に、鬼道は顔を真っ赤にす

る。夜叉丸は慌てて止めると思いきや、自分も味噌汁を口に含んで  
対抗心を燃やしていた。

だが、そこまでだった。

それまで青筋を立てつつも我慢してきた小竜姫の雷が、炸裂した  
のだ。

「い・い・加・減・に、しなさい!!」

「ブハアッ!?!」

…後に、鬼道は語る。

あの瞬間、自分が若干M気質である事に気づいた、と。  
顔中に味噌汁を浴びながら、鬼道は涙を流すのだった。

妙神山の修行は、毎日ドタバタと騒々しくも楽しく行われた。時  
折小竜姫の精神面をケアする為に和樹がやってきて、鬼道の代わり  
にいじめられるようになったおかげで修行自体は無理の無いペース  
で行われた。鬼道は、和樹に泣きながら感謝していたという。

そんな日々が、およそ二週間ほど続いた頃。鬼道は突然小竜姫に  
呼び出された。

…そこは、初めて小竜姫に案内された部屋。だだっ広い空間と魔方  
陣のある…シャドウの修行を行う部屋だった。今日は、アドバイザ



―として和樹もいた。

「鬼道さん。今日はあなたのシャドウを使って訓練をしたいと思えます。」

「え…シャドウって夜叉丸の事ですか？」

鬼道はまだシャドウの事を知らない。夜叉丸を引き出した光景を思い出していた。

「いえ、違います。シャドウはあくまでアナタ自身の霊体の姿ですから。百聞は一見にしかずと言いますから、今から出してみまじょうか。」

小竜姫は鬼道を魔方陣に立たせると、まず夜叉丸を引き抜き外に立たせる。次に、鬼道自身のシャドウを引き抜いた。

その姿は、鬼道政樹本人と瓜二つ。やや、シャドウの方が逞しい。

『ピ…ピイ…』

夜叉丸が、ポロポロと涙を流す。そう、その姿は自分と契約した初代の主。鬼道誠司の姿だったのだ。夜叉丸が政樹に初代の面影を見たのは当然と言えば当然だった。何故なら彼は…

「驚きました。前世の姿をここまで再現するとは…」

小竜姫が感嘆の声を上げる。そう、鬼道政樹は鬼道誠司の生まれかわりなのだ。シャドウは、どうも前世の姿を反映させやすいらしい。

「これが僕の前世…。あんまり、変わらんなあ。」

鬼道だけは、何とも微妙な表情でシャドウを見つめていた。

修行は、シャドウを使った三連戦ではなかった。シャドウを使ったトレーニング…真剣勝負ではなく、あくまでトレーニングとしてモンスター達と戦うのだ。鬼道は、今金色の鬼と戦っている。

その光景を見ながら、和樹は兼ねてから疑問に思っていた事を小竜姫に尋ねた。

「なあ、シャドウが前世の姿を反映するなら…横島のあの姿って、何だったんだ？」

横島のシャドウは、アルマジロに似ていた。アルマジロと、トカゲを足して2で割ったような、外見。陰陽師の名残など全く無かったのだ。

小竜姫は複雑な表情で応えた。

「やっぱり、気になりましたよね。ちょっと竜神族的に話せない事なんです…和樹さんなら話しても問題ないでしょう。誰にも言わないと約束してくれますか？」

「ああ。竜神族的に、というならあのアルマジロは竜神族か。」  
和樹の頭の中で、次々と情報の断片が組み合わさって行く。天竜のヒーリングが、何故あそこまで適応したのか。何故、魔装術のような真似が出来るのか。何故、文珠が作れるのか…。

#### 【小竜姫】

私達竜神族は、昔は沢山居たのですが時代の移り変わりと共に少なくなっただけで行きました。強すぎる為に危険視され、神からも人からも退治すべき対象と見られていた時代が長かったですからね。神族に組み込まれてからは狙われる事も少なくなりましたが、やはり誇り高い種族ですから、他の神族の下につく事を良しとしない者が多

く現れます。魔族になる者や、人間界に隠れる者が後を立たなかったのです。

私が人間界のパトロールをしているのは、人間界に住む竜神族を見つけ出し説得をするという任務を請け負ったからというものもあるんです。竜神族は、神界に置いて非常に少数派となっており、発言力も低い。竜神王こそ最上級神族の力を持っていますが、次に強いのが天竜殿下と私というくらいに人材が不足していますから。そんな時に現れたのが、横島さんでした。

横島さんのシャドウは、地竜族の中でも温厚な鎧トカゲ族でした。その鎧トカゲ族最強の戦士であり、人間界で非業の死を遂げたのが横島さんの前世です。GS試験後にヒヤクメと共に調べたのですが、彼の前世の人生は和樹さんには聞かせたく無い内容でした。彼も人に疎まれ、妖怪たちと共に生きて、殺された過去を持っていたのです。竜神族からは裏切り者とさげすまれていて、私は何としても彼の素性を竜神族に知られないようにしようと心に決めました。きっと、手のひらを返したように媚びを売って、横島さんを神族に引き込もうとするでしょうから。

老師は、この事を知っています。最高指導者に説明を受けていたようですね。あの日、天竜殿下がメドーサに襲われた日。和樹さんが現れなければ横島さんはあの時点で覚醒して竜神の才能を開花する予定だったらしいです。しかし、もしそうなら、今ごろ彼は人として生きて居なかったでしょう。メドーサも藤姫になれなかった。私は、和樹さんが居てくれて良かったと思います。

横島さんが魔装術に近い芸当が出来るのは、元々鎧トカゲ族の技だからです。文珠は和樹さんの真似かもしれませんが、竜神族にも文珠を使える者はいますから素質はあったのでしょね。…和樹さ

んとしては複雑でしょうが、この世界の横島さんはあなたとは別人です。けど、その魂に刻まれたものは余りに似ていました。だからこそ、最高指導者たちはあなたの代わりを彼に頼んだのでしょいうね。私から言わせれば、身勝手極まりない話ですが。

でも、何にせよ前世は前世です。和樹さんたちは今を生きているのですから、今を大切にしてください。横島さんも、和樹さんも。私達が全力でお守りしますから、ね。

【小竜姫視点終了】

話を聞き終えた後。和樹は、知らずに涙を流していた。横島の前世の話は、彼には余りに衝撃的だった。横島の前世、それは余りに自分に似すぎていた。そして最高指導者達が言ったセリフ：全部、こっちの横島がなんとかするからお前は好きに生きる…これは、他の誰かを犠牲にしると言っているも同然だ。和樹は今更ながらにそれに気づいた。前世で同じ苦しみを体験した横島を犠牲にする事など、やはり和樹には出来ない。

もし、また世界に危機が訪れるような事が起こったら。横島たちに任せるんじゃないかって、俺が守ってやろう。…和樹はそう心に決めた。

今までどこか他人事のようにこの世界と距離を置いてきた和樹だったが、この日を境に周囲と積極的に関わって行く事になる。それは、かつて彼の愛した女性が望んでいた事でもあった。

「ヨコシマは、ヨコシマらしく。」

そして、和樹は誓うのだ。

「あの二人、やっぱり一回どついてやる。」

その時どこかで二柱の神が悪寒を感じていたらしいが、それは割とどうでもいい事である。

和樹たちが話をしている間、鬼道は金剛羅刹を相手にシャドウを操る練習を繰り返していた。金剛羅刹は割と優しい性格らしく、まるでボクシングのトレーナーのようにリードしてくれる。鬼道は言われるがままに拳を打っていた。…その時。

勝手に魔方陣から飛び出したモンスター、カトラスが鬼道に襲いかかった。

「出ていいとは言っていないでしょう！戻りなさい！」

以前も、言うことを聞かずに飛び出したカトラス。血に飢えているようだ。今の鬼道のシャドウは丸腰である。確実に殺せる！

猛スピードで迫るカトラス、小竜姫は超加速に入ろうとして…和樹に止められた。

「な、何故!？」

「見ろ！」

和樹に言われて視線を向けると、鬼道のシャドウは片手を真上にかざしている。そこに、離れて立っていた夜叉丸が吸い込まれるよ

うに移動して…一振りの刀に変化した。

ザシユツ…

『ギヤアアアアツ!』

シャドウは、無駄の無い動きでカトラスを切り捨てる。断末魔の悲鳴をあげ、カトラスは爆発した。

「これは…」

「夜叉丸は、刀の九十九神だったんだな。なら、このスタイルで鍛えるのもいいんじゃないか？」

二人が見つめる中、鬼道は呆然と自分のシャドウを見つめていた。それは、自分でありながら自分ではない存在。夜叉丸を手に堂々と立っている姿を見ながら、鬼道は不思議な感覚を覚えていた。

昔…確かに、夜叉丸を手に戦った覚えがある。

亜麻色の髪の女性を守る為…仕事を辞めて、都を捨てて…恐ろしい悪魔に立ち向かい、そして死んだ。涙をながす女性に…自分は何と言ったのだったか。

(これは、前世の記憶?)

戸惑いながらシャドウを見ると、シャドウは少し顔をこちらに向けて。小さく口元を動かし、鬼道に声をかけた。

『血の封印を解こう。…今の君なら、使いこなせるはずだ。』

「え…、なんて？」

次の瞬間、鬼道の頭の中に膨大な量の情報が流れ込んできた。それは、今では失われた古代の陰陽道の知識。身体が引き裂かれるような幻痛に耐えながら、鬼道は必死で意識を保つ。気を失ってはいけない…貴重な知識を、一つたりとも取りこぼしてはいけない！

…どれくらい、時間が経過しただろうか。

固唾を飲んで見守っていた和樹と小竜姫の目の前には、先ほどとは別人のように精悍な顔つきをした、鬼道政樹の姿があった。

## 第四十一話 鬼道政樹の決断のはなし

妙神山の修行場の裏手には少し開けた場所があり、小竜姫は普段、洗濯物を干したり、時折やってくる動物たちに餌をあげたりしている。

この数日は、その餌やりは鬼道の仕事になっていた。

あの後、前世の知識を得た鬼道はしばらく考え事を続けた。無理もない、突然別の人生が頭の中に飛び込んできたのだ。小竜姫は修行を一旦やめて、鬼道に心を落ち着けるように言った。和樹は何かあった時の為に文珠をいくつか鬼道に持たせ、帰っていった。渡した時、鬼道は確かに和樹を見て「高島殿？」と言っていたが、和樹はニッコリ笑って「大昔は、な。」と流した。どうも、前世の記憶に引っ張られすぎている…それが少し、心配だった。

鬼道は、1日を瞑想して過ごしていた。知識の整理をしているだけなのだが、周りからは瞑想しているように見える。そして、何故かは分からないが鬼道の周りには鹿や猿といった山の動物たちが集まるのだ。

「ま…またお前らかいな。僕の髪なんて食わんでええやろ…」

今日は鹿とウサギと小鳥である。鬼道は仕方なく、出入り口付近の籠に入れてある根野菜や木の実を与えた。動物たちはもそもそと静かに食べ始める。

鬼道は、そんな光景を眺めながら今後の事を考えていた。



自分は知識を得た。それは今の六道家にも無いような貴重な知識であり、術を行使するだけなら間違はなく現代最高の術者と言える。しかし…自分にはこの社会を一人で生きていく力は無い。

今まで、力さえあれば出ていけると思っていた。が、それは違う。自分には、古代の知識はあるが現代の知識が無さ過ぎる。これではまともに生きて行けないだろう。だったら、学べばいい。問題はどこで学ぶか、だ。

そこまで考えていると、ふと冥菜とフミ、冥子の顔が浮かんだ。

恨んでいたし、今でも納得行かない事が多い。しかし…フミは自分にキツいだけではなかった。最後におめでとうと言ってくれた。冥菜も、借金をチャラにしてくれた。そこに裏があるうとも、かけられた言葉や優しさは嬉しかった。自分をここまで養ってくれたのは、六道である。そこを、簡単に捨てる事など鬼道には出来なかった。それに…

(冥子はん…。僕は、君の事が好きやった。君が僕の事を玩具として思っただけでも、僕は確かに君に惚れとったよ…。)

鬼道が小さい頃に一目惚れした冥子。彼女は時に鬼道を傷つける事を言ったり、十二神将をけしかけて袋叩きにする事がよくあった。長年積み重ねて来た恨みから恋愛感情は消えてしまったが、それでも自分にとって一番身近な女性。共に過ごした時間が一番近い…家族のような存在だ。彼女を置いて行くのは…心が痛む。

鬼道は、結局鬼道なのだ。気弱で、お人好し。そこは、変わらなかった。ただ、一つだけ変わった事がある。

（まあ、六道で色々勉強させて貰おうか。情の続く限り恩返しして、頃合い見計らって独立してもいいし…六道の人脈を利用して。せっかく六道におるんやし、それを活かさん手は無いやろ）

以前よりも狡猾になっていた。鬼道は、出来る事なら六道内部で様々なノウハウを吸収してやろうと考えていたのだ。

（冥信さん。僕から式神のノウハウを奪ったように、僕もあなたの子孫から色々いただきます。恨まんといって下さいね？）

少し、邪悪な笑みを浮かべる鬼道。

普段懐いてくる動物たちも、この時ばかりは鬼道に近寄る事は無かった。

妙神山で鬼道が覚醒してから2日が経ち、鬼道は小竜姫に修行の再開を申し出た。もう自分は大丈夫だ、と。しかし小竜姫の返事は意外なものであった。

「鬼道さん。あなたは今回一気に成長し過ぎました。しばらく人間界に戻って、心と身体を慣れさせた方がいいと思います。」

「え…？いや、もう大丈夫やけど…」

「それは、今のあなたがそう考えているだけですよ。私もあなたのように別人の記憶を頭に入れた事がありますが、人格が引つ張られ靈的に不安定な状態が続きました。今のあなたも同じような状態です。」

しばらく、靈的に落ち着くまで修行を中止しましょう。」

余りの展開に驚く鬼道。自分では心の変化に気づいていないので納得行かないが、小竜姫様がそう言うなら仕方ないと諦めた。

「ただ、それだと可哀想なので私から少しだけ力を授けましょう。」  
残念がる鬼道に、小竜姫は苦笑いしながら手をかざす。鬼道の身体を、青白い光が包んだ。

「こ、これは…?」

「夜叉丸さんとの靈的な繋がりを強化しました。あなたの成長が、夜叉丸さんの能力にダイレクトに反映される事になります。知識を共有する事も出来ますから、今まで以上に連携して戦えるようになったハズですよ。」

実は、あの修行場での一件：カトラスの奇襲を退けた時点でお詫びに与える予定だった能力だった。下手に他の能力を高めるよりも、連携を強化した方が効果は高いと考えていた。元々今は靈的成長期。放っておいても単純な能力なら勝手にガンガン成長する。

「でもこれって、もしかして夜叉丸の記憶まで入って来おへんかなあ。」

「あ…」

やっちまった、と小竜姫が口を押さえる。しばらくすると、鬼道の脳裏に夜叉丸の記憶が流れ込んできた。その多くが、何故か鬼道政樹に関する事ばかりだったのがまだマシだったが…

「うわ、夜叉丸！何妄想しとんねん！？」

赤面する鬼道。慌てて影から飛び出した夜叉丸が、ボコボコにした。

「い、痛い、痛い痛い！堪忍や、夜叉丸！」

『ピイ、ピイ、ピイイイッ！』

冷や汗をかきながら、小竜姫は後退する。泣きながら折檻する夜叉丸とされるがままの鬼道にゴメンナサイと頭を下げると、一目散に逃げ出した。…超加速を使って。

夜叉丸の暴走を止める為にやってきた妙神山。結局そこでの修行の日々の終わりを飾ったのは、やはり夜叉丸の暴走だった。

鬼道政樹が六道低に帰ってきたのは、修行を始めて丁度三週間が経った日であった。妙神山のふもとの町の公衆電話から連絡を入れた途端、一台のリムジンが鬼道の前にやってきた。出てきたのはフミであり、半ば拉致のような強引さで鬼道を車内に押し込んだ。これは、普通ではない。理由を尋ねたが、フミは思いつめた表情で俯くばかりだった。

屋敷につくと、すぐに冥菜が現れた。取り繕ってはいるが、かなり緊張している。鬼道には、今まで分からなかった冥菜やフミの心の動きが手に取るように分かっていた。

「ただいま戻りました。」

「おかえりなさい、政樹ちゃん。妙神山での修行は、どうだったかしら？」

「こちらの様子を伺うような表情。鬼道は正直に言った。」

「はい、夜叉丸の気持ちを分かってやるようにと指導されました。以前のような暴走はもうありません。」

その言葉に、冥菜は安堵した。式神の制御だけなら、大してパワーアップしていないだろう、と。これなら美智恵を超える事は無いはずだ。

「あのね。急で悪いんだけど、政樹ちゃんがどれだけ成長したか見せて貰えるかしら？」

「…はい？」

ポカンとする鬼道。

「今日、美智恵ちゃんが屋敷にいるのね。ちょっと、手合わせしてみてくれないかしら？」

まあ、どれだけやれるのか気になるのだろう。相手が美神美智恵という所が容赦ないと思うが、自分にどれだけやれるのか知りたい機会である。鬼道は頷いた。

「分かりました。修行の成果、お見せします。」

「じゃあ、荷物を置いたらロビーに来て頂戴。」

冥菜はそう言うとパタパタと走り去って行った。

鬼道が部屋へと向かう際。後ろについて歩いていたフミは、我慢  
出来ずに口を開いた。

「…鬼道君。なんで帰って来ちゃったの？」

「え…あの、フミはん？僕、帰ってこん方が良かったんかな。」

フミは俯く。それは、見ようによつては肯定の仕草にも見えた。  
「美智恵様は、本気で戦うと言つてた。殺すかもしれない…。  
こんなの、力試しなんかじゃない！奥様は、ただ鬼道君を痛めつけ  
てコントロールしたいだけよ！」

鬼道は驚いていた。フミが、雇い主を批判している。こんな事は、  
今まで一度だつて無かつたのだ。見ると足が震えているし、本気で  
心配しているのだろう。しかし…

「なんや、僕が負けるん前提に話進めてないですか？大丈夫です、  
僕を殺せる人間はまず居ないですから。」

「でも、GS界最強の美神美智恵様ですよ！？鬼道君は、相手を甘  
く見てます！」

必死で言うフミに、鬼道は笑つて返した。

「フミはん、フミはんに育てられた僕を信じて下さい。僕と夜叉丸  
のコンビなら勝てます。約束しますよ。」

フミは、何も言えなかった。鬼道の自信に満ちた笑顔に、目を奪われていたのだ。いつの間に、こんなに男らしくなったのだろうか。ほな、と手を振って部屋に戻る鬼道を、フミは少し上気した顔で見送った。

部屋に戻ると…

ベッドの上には、何故か冥子が寝ていた。

「え、何で？ 僕の…部屋やんな？ …ん、これは……。」

ベッドの横。紐に吊された、沢山の折り紙。これは千羽鶴だ。おそらくフミと二人で作ったのだろう、綺麗な形のもと、不思議な形のものがある。

「冥子はん…。これ、思いつきり病人や怪我人に贈るもんなんやけど…。これから戦う僕にはキツイジョークに見えて仕方ないんやけど…。」

鬼道は、千羽鶴を手に取る。人の心は紙に宿りやすい。千羽鶴に触れた手に、作った者の想いが流れ込んできた。

(まーくん、死なないで)

(まーくん、元気になって、早く戻って来て)

(また、遊ぼうね、まーくん)

(鬼道君、生きていて下さい)

(出来れば、逃げて下さい)

(あなたが死んでしまいかもしれないなんて、考えたくなかった…)

そこに込められた想いは、純粹に鬼道の身を案じていた。美智恵の脅しのおかげで、二人は真剣に鬼道の事を大切に考えるようになっていたのだ。

鬼道は、そこで気づいた。今回は、紙だから相手の気持ちを知ってジョークじゃないと気づけた。けど…今までキツイジョークだと流して来たものに、今回のように純粹な想いが込められていたとしたら。夜叉丸を知らず知らず傷つけてきたように、自分も冥子を傷つけた事は無かったか…。

「あー…待て待て、僕は何を考えてる？」

自分でも分からない。が、今まで抱いてきた冥子への悪い感情は嘘のように消え去っていた。

鬼道は、寝ている冥子の頭を優しく撫でる。冥子は「うにゅ」と言って微笑んだ。その愛らしい寝顔に顔を近づけると、鬼道は冥子のおでこにキスをした。

「ふにゃ？」

冥子がぼんやりと目蓋を開ける。目の前の人物に焦点を合わせ、しばらくぼんやりと見つめた。そして…

「まーくん？」

「ああ、僕や。ただいま、お姫様。」



涙が、ポロポロと零れ落ちる。

「まーくん…まーくん、まーくん！」

冥子には、飛び起きて鬼道を抱きしめた。鬼道も、優しく背中に腕を回す。胸にすがりついて大泣きする冥子の耳元に、鬼道は優しく囁いた。

「心配せんでも、ちゃんと戻って来ます。勝手に死んだりせんから、安心して下さい。」

「でも…でも、先生が死に別れるって…！」

冥子には、不吉なキーワードしか記憶に残らなかったらしい。鬼道もそれを聞いて、美智恵が真剣勝負を挑んで来ると悟った。

「大丈夫や、冥子はん。僕、だいぶ強うなったから死ぬ事は無いよ。これからちよつと手合わせしてくるけど、応援してくれるか？」

なだめながら言うと、冥子は鬼道を見上げながら「うん」と頷いた。

六道の屋敷には、昔から修練に使われている部屋がいくつもある。そのうちの一つ、地下にある修練場に、鬼道と美智恵は対峙していた。

「じゃあ、無制限一本勝負ね。試合、始め！」

神通棍を手に構える美智恵。鬼道は夜叉丸を影から呼び出す。

「鬼道君、あなた弱くなつたんじゃない？」

「え？」

それは、一瞬だった。夜叉丸が飛び出た瞬間、美智恵は持つていた吸引札を夜叉丸にかざす。札は光を放つと、夜叉丸を勢いよく吸引込んでしまった。

「以前のあなたなら使い所を選んでいたけど…なまじ制御出来るようになったからって無意味に呼び出すなんてね。」

美智恵が、ニヤリと笑う。試合を見ていた冥菜も笑顔だ。対照的に、フミと冥子は沈痛な面持ちをしていた。これでは、もう勝負にならない…そう、誰もが考えていた。しかし…

「ほな、行くで？」

鬼道は構わず走り出した！

「なっ！？」

美智恵もこれには驚いた。まさか丸腰で突っ込んでくるとは思わなかったのだ。しかし美智恵も戦闘経験の多い猛者である。すぐさま切り替えて、神通棍で迎撃する。

ギイイインッ！

神通棍は、鬼道の身体に当たる前に弾かれた。混乱する美智恵。そんな隙を逃さず、鬼道は美智恵に接近する。

鬼道の影と美智恵の影が重なった瞬間。鬼道は叫んだ。

「来い、夜叉丸！」

途端に美智恵が手にしている吸引札が燃え尽きる。そして、それと同時に一本の刀が美智恵の影から飛び出し、美智恵の脇腹を切り裂いた。

「キヤアアアアツ!？」

夜叉丸はすぐさま人型に戻り、鬼道のそばに控える。美智恵は無傷だった。見ると、服の下にセラミックスーツを仕込んでいた。

「…式神を呼び出せたのは、何故かしら。」

「え？そりゃ霊体しか吸引できない吸引札で、実体の伴う九十九神なんて吸っても封印できませんよ。そんなに封印できたら、同じ方法で作られた十二神将が最強だなんて言われるワケないですよん…そんなん、知ってたでしょう？」

鬼道が言うと、美智恵はニツコリと笑った。

「ちゃんと、式神の勉強してきてみたいね。以前のあなたなら、あれでパニックになってたでしょう？」

「そ…それはそうかもしれない…」

鬼道は苦笑いする。確かに、何も知らなかったら先ほどの攻撃で勝負は決まっていただろう。美智恵は、鬼道の成長を試していただけだったのだ。

「なら、これからは本気で行くわ。かなりキツイと思うけど、死んじゃ駄目よ?」

「望む所や！」

美智恵の身体が、にわかに輝き出す。これは…電気！？鬼道は急いで夜叉丸に叫んだ。

「あかん！夜叉丸、影に戻り！」

『ピ！？』

夜叉丸が影に戻ると同時に、美智恵の身体から稲妻が放たれる。それはまさに一瞬の出来事。

ガアアアアアッ！！

鬼道の身体に、稲妻が直撃する。周囲にパチパチと電気や靈気をはじけさせた。

「まーくん！？」「鬼道君！？」

二人の声が震えた。あれは、即死だろう。落雷を受けて生きている人など居ない。しかし…煙が晴れると鬼道は無傷でそこにいた。

「な…何故！？さつきも、攻撃をはじめていたけど…」

「気になるやろうけど、タネあかしは試合の後にしましょ。さあ、今度はこっちの番や！」

鬼道はそういうと、懐から紙のような物を取り出す。念を込めると、それは巨大な火の鳥となって美智恵を襲った。

「符術！？」

「そうや。紙さえあれば念で文字を焼き付けてどんな札でもその場で作り出せるようになったんです。どんどん行きますよ！」

鬼道は、次々と火の鳥を放つ。美智恵は必死に雷で撃退するも、有り得ない霊力のこもった火の鳥に苦戦する。結果、美智恵のスタミナは底を尽き…

「ま、参った！私の負けよ！」

美智恵は降参した。

これ以上戦っても勝ち目が無いと、判断したのだ。

この結果を、誰が予想しただろう。冥菜は、愕然としていた。美智恵が負けた事もショックだったが、鬼道の戦い方にもショックを受けていた。夜叉丸が居なくても、鬼道は凄まじく強かったのだ。

冥菜が特にショックを受けたのは、最後の火の鳥だった。その場で札を作って呼び出すなど、今の時代にそんな芸当の出来る人間など居ない。それも、あんな強力な札を作れる人間となると絶対に居ないだろう。これではGSにならずとも破魔札等を売るだけで生計を立てていける。もし外に出たら…鬼道は六道以上にこの業界に影響力を持つようになるのではないか。

冥菜は、何かが足元から崩れ去るような感覚を覚えた。

…そんな冥菜に、鬼道は声をかける。

「冥菜はん、これで入社試験は終わりですか？」

「……え？」

今、鬼道は何て言った？

「入社試験ですよ、入社試験。僕、六道の事務所に入りますから。今の、採用の判断材料になりませんか？」

冥菜は、耳を疑った。この子は、これだけ力をつけながらここに留まってくれると言うのだろうか。今までの仕打ちを考えたら、出て行くとはかり思っていたのだが…。

「あの…いいの？今の政樹ちゃんなら、どんな所でも生きて行けそうなの？」

「ええ。どこでも生きて行けるなら、六道でも生きて行けますよね？9月から、よろしくお願いします。」

頭を下げる鬼道。冥菜は、救われたような気持ちになっていた。良かった…。貴重な人材を失わずに済んだ…。と。冥菜は気づいていない。自分が戯れに言った借金チャラの件が、この結果に繋がったという事を。

「こちらこそ、よろしくね。」

にこやかに、答える。もはや明らかに安堵した表情。ポーカーフエイズに徹していたハズなのに、いつの間にか素の表情になっていた。眺めていた美智恵も、苦笑いしていた。

鬼道が事務所に入ると決まった時。当然の事ながら冥子とフミは喜び、鬼道に駆け寄ってきた。冥子は鬼道に抱きつき、フミも目をハンカチで拭いながら鬼道を祝福した。

「まーくん、ありがとう！また、一緒なのね！」

「鬼道君、死ななくて良かった！」

喜ぶ二人。それを見ていた美智恵は、鬼道に先ほどのネタばらしを頼んだ。

「鬼道君。あの火の鳥といい、霊気ガードといい、一体どうやったの？」

特に、あの稲妻の直撃は魔族ですら消し飛ばす最強の技だった。殺す覚悟で放ったのだが、傷一つついて無かったのだ。いくらなんでも、おかしい。

「ああ、あれ、全部符術です。防護札で神通棍はじいて、雷は木やから金でねじ曲げてかわしたし…火の鳥は元々鳥型やから楽に呼び出せましたわ。」

「鳥型？」

疑問に思う美智恵に、鬼道は懐から何かを取り出す。それは…あの千羽鶴だった。

「冥子はんとフミはんが折ってくれたもんです。これだけ想いが込められた紙は、中々無いですから。特に冥子はんの霊力は半端じゃないから、強力な符術を行使出来ました。」

そう言うと、美智恵は納得したという表情をする。これなら、あのムチャクチャな攻撃も理解出来る。

そんな中…冥子は固まっていた。





さて、その頃西条のマンションでは例によってメフィストが鬼道の様子を眺めて悶えていた。

「駄目、格好良すぎる、鼻血でる…」

「わ、わー！？カーペットが血まみれじゃないか、止めたまえ！」  
半泣きで掃除を始める西条を無視して、メフィストは女達に振り向いた。

「最高じゃない！？もう、こんなに強くなるなんて…」

「確かに男前になったかな。」

「最後締まらなかったけどね。」

「でもメフィスト様余裕かまして大丈夫なの？あの冥子って女やフミって女、明らかに鬼道君の事好きそうよ？式神だって…」

その問いに、メフィストは余裕の表情で答えた。

「当たり前じゃない。人間界の倫理なんか知ったこっちゃないわ。妻が何人いようと、彼が私を見つけ出して大切にしてくれたらそれでいいの。第一、彼は私の物になるって約束してくれたんだもん。信じて、待つわ。」

女達は呆れていた。恋愛に奥手なのか積極的なのか分からない言葉だからだ。欲しいならさっさと奪ってしまえばいいのに…と思っていた。

そんな視線を無視して、メフィストは鬼道誠司との思い出に浸っていた。

悪魔と知っていないながら、助けてくれた。自分に恋を教えてくれた。愛し合う事の素晴らしさ、そしてそれを失う悲しみを教えてくれた。身を呈して自分を救ってくれた、彼が最後に残した言葉。

「いつか、また巡り逢おう。今度は僕が君を見つけてみせるよ。その時こそ、この魂を君にあげよう。未来永劫、君と在り続けると約束する。」

気弱で、消極的だった彼。自分の為に戦って、最後は勇敢に散った。その面影を色濃く残す鬼道政樹を見つめながら、メフィストは恍惚としている。はやく、はやく私を見つけ出して…。潤んだ瞳は、恋する乙女そのものだった。

…そのすぐそばで。

「ぬおおおお、次から次へと…！ティツシュ、ティツシュが足りない！」

西条が血の海と必死に格闘していたのだが、誰もそれに気を止める者は居なかった…。

## 第四十二話 海のはなし(上)

8月上旬。夜になっても気温が中々下がらない時期になって、天矢神社の社務所もクーラーを稼働させるようになった。

和樹、ユリ子、公平の部屋にはそれぞれクーラーが設置されているが、藤姫の部屋には設置されていない。藤姫自身がクーラーが苦手不要らないと言った為だが、この暑い夜、彼女は妙神山へ避難していたりするのだ。小竜姫と剣の稽古をしたり、彼女は彼女なりに日常を楽しんでいたりする。

この日も藤姫は夕食を終えると妙神山へのゲートをくぐって行った。ユリ子は夏休みの課題をいち早く終わらせる為に部屋に籠もっている。公平はビールを飲みながら野球中継を見ていて、和樹は台所の片付けを終え居間でイヅナと寛いでいた。

「どうですかイヅナさん。」

「コーン。」

仰向けになった和樹が、揃えた両足の裏にイヅナを乗せ、空中をゆらゆらさせる。イヅナは四肢をピンと伸ばし、空を飛んでいるような格好だ。最近のお気に入りであった。

「何だ何だ、父さんも混ぜなさい。」

ほろ酔い気分の公平。ビールをロング缶四本も飲めばそうなるだろっ。

「どう混ぜるんだよ。」

「和樹の顔の上に俺が乗る。」

「死ぬ死ぬ。」

そんな下らない会話をしていると、テレビがCMを流し始めた。野球は終わったらしい。『この夏、海でも肌を焼かない為に完全紫外線ブロック!』

「焼きたくなきゃ海に行かなくやいいんだがなあ。」  
オッサンの公平はCMに突っ込むのを忘れない。

「そう言えば海、行ってないなあ。」  
和樹がつぶやくと、公平はニンマリとして言った。

「ユリ子ちゃんの水着が見たい、って事か？和樹も男だな。」

「誰もそんな事言っていないだろ。下手したら俺にビキニ着せようとする女だぞ?」

そこで和樹は気づく。誰かの気配。それは勝手口の方から感じる。

「藤姫を見た。」

ゲートから顔半分だけ出した藤姫がこちらを見ていた。

「怖いよ!今真剣にビビったぞ!」

「コン!」

イツナの尻尾が丸まっていた。やはり怖かったのだろう。

「ごめんよ。シャンプー取りに戻って来たんだけど、面白い話して

るじゃないか。海、行くのかい？」

驚かせてご満悦な藤姫が聞いてくる。これはもう海に行くのは決定だな、と和樹は観念した。

「ああ、そう出来たら良いなって話をしていた。」

「いいじゃないか。クラゲの出ないうちに行つた方が良いから、今の内だよ。」

クラゲの出る時期はお盆過ぎからだ。確かに、行くなら今の内がいい。

「和樹、ユリ子ちゃんにも言つて来たらどうだ？」

公平が言つと同時に居間の戸が開く。

「話は聞かせてもらいました。」

「怖いよ！思いつきり戸の前で盗み聞きしてたたる！？」

ユリ子が得意気な顔で立っていた。

「和樹さん、水着買わなくちゃいけませんよね。一緒に買いに行きましょうか。」

「いや、俺はもう持つてるからいいよ。」

「何だかテンションがおかしいぞ。」

「和樹、あんたどんな水着持つて行くつもりだい？」  
藤姫が聞いた。

「え、普通にトランクスタイルだけど？」

「ちょ、ちょっと待って下さい！上は、上は何を…？シャツですか？」

ユリ子も不思議な事を言う。

「何って着ないだろ、普通。」

ブフーーーーッ！

ユリ子が鼻血を噴き出した。藤姫がそれを見て大笑いしている。公平は何が何だか分からず、困惑したままだ。

「いや、俺は男で行くから。」

しょうがねえなあ、と和樹は呆れ顔でユリ子を見る。この子、こんなキャラだったかな。今更ながらにユリ子という人間を認識しなおす和樹であった。

結局、話し合いをする必要もなく、その場にいる全員が海へ行く事に賛成した。この時点では、まだ誰も知らない。この海への旅行が、奇妙な騒動に発展するという事を…。

#### 【横島忠夫】

ふはははははは！夏！海！燃える太陽、眩しい肌！これこそが夏休みらしい最高のロケーション！いやーやっぱり海はいいなあ、ねーちゃんいっぱい居て！

しかし所長、これ仕事なんスよね？

めっちゃ砂で城作ってますが！何これ姫路城？なんで無駄に造形リアルなんスか！？

「ここから横島君狙うんだよ。」

大砲ツスよね！それ大砲ツスよね！俺なんかしましたか！？

…しかし、かがんで城つくる所長工口いい！凄いな、もうたゆんたゆんですよ！

「横島君、ドーン！」

ドガッ！

痛い！霊気飛んで来た！ハイテクツスね！？

「ちゃんと、周りの観察しなきゃ駄目だよ？」

ええ、もうチェックは怠りないツス。所長より胸の大きい人は居ませんでした。

「違うよう！霊的な変化！」

ですよー。はい、そつちも大丈夫です。だから安心して俺の熱視線を感じていて下さい！

「もっ…。」

顔を赤らめる所長が可愛くて仕方ない！本当、俺は幸せ者だよ。

あ、こらそこ行く男共、見るな！この乳は俺のもんじゃ！

今回は海のお仕事。何でも、悪戯に人を溺れさせる妖怪の退治らしい。なんともスケールの小さい…だからこそ、ウチに回ってくる仕事なんだけど。おかしいなあ、実力だけなら凄いなあ、所長。

「信頼つて、1日2日じゃ得られないから仕方ないよ。」

そう言う所長が切ない。何とかならんもんなあ。

…それにしてもこうして現場に来ると海水浴客多いわ。確かにこれだけの人数が危険にさらされるのは大変だ。ねえ所長、これランクの仕事じゃないでしょ。もう少しふっかけても良かったんじゃないスか？

そんな事を言っていたら、さっそく遠くで悲鳴が！よっしゃ来い妖怪！男なら容赦しないが女ならじつくり観察してやる！…つて、あれえ？駆けつけてみたら、なーんか何処かで見たとような奴だなあ。

「横島君、コンプレックスだよ！」

ああ、アイツか！こないだ夜景スポットで退治したばかりの奴だ。こんな所にも出るとか、モテない男の僻みって怖いな！

「ううん、今回は女の人みたいだよ？」

え？女？だったらじつくり見て…つて、うわあグロい！？

「だ、駄目だよそんな事言っちゃ！せめて不細工くらいで止めておかないと…」

『ぐきやー！憎い憎い、美人が憎いー！』

所長がトドメさした。



そりゃ女にとっては所長は敵だろうよ。小さいけど美人で胸がデカくて優しい。男なら誰でも虜にしてしまうからな。

「横島君、油断しないで！」

「大丈夫ツス！不細工には容赦しないツスから！」  
自分で言ってるかどうかと思う。

ドガドガドガドガ！

とにかく殴る！靈気をみなぎらせ殴打殴打殴打！もうね、ここまで不細工で太ってイボだらけとかモンスターですよ。ドラクエとかに出てきそうなもの。毒の息とか吐いて。

『ひ、ひどいー！私が何したって言うのよー！』

「お客さん溺れさせたでしょー！」

『知らないわよ、そんなのー！』

あれ？そう言えばコイツ陸地に現れたな。確か依頼書では泳いでる客に絡んで溺れさせるとか書いてたような。

まあコイツはコイツで退治しますけど。

「美容整形アタック！」

ズガッ！

『ギアアアアアッ！』

俺のサイキクロッドの突き一発で昇天するコンプレックス。しっかり顔面ヒット。顔をどうにかした所でモテそうにないけどな。けど今こうやって倒しても来年の今頃にはまた現れるんだろうなあ…

「横島君、さっきの場所に帰ろうか。」

あれ、あの城ツスか？よっぽど気に入ったみたいツスね。

「ううん、違うよ。あれ、砂でコーティングしてるだけでサーチ結界の核が入ってるの。念を込めると、探したい物を探索してくれる優れもの。」

なるほど！ただ遊んでいたワケじゃなかったんスね！しかし、いいんスか、あれ。なんか波に流されてますけど。

「ああー！ー！ツ！？」

【横島視点終了】

公平は浮き足立っていた。

それは海へ行けるから、というよりも車を運転出来るから、という理由で。以前まで乗っていたカローラは塾の講師をしていた頃の友人に譲って新車を購入していたのだ。本来なら中古で良かったのだが、和樹に怒られて新車にした。

「家族みんなで乗るんだから、しっかりした車を買おう。」

その一言で決まったのだが、皆の意見である。「たくさん乗れるがコンパクト」という無茶な要望をクリア出来る車は、この頃は中々無かった。で、結局買ったのはデリカのバンである。

「いいじゃないか、見た目はアレだけど中は広いよ。」

「コン！」

「荷物沢山積めますね。」

評価は上々だった。

「なあ親父、もっといい車でも良かったんだぞ？」

「馬鹿、お前は簡単に稼いでるからそう言うが、一般的には充分贅沢な買い物なんだ。」

和樹が横島の頃と決定的に違う点は、この金銭感覚だったりする。最初の頃こそコンビニ弁当を値段を睨みながら選ぶくらいの感覚があったのだが、最近は値段をロクに見なくなった。買い物自体、食品以外滅多に行かないから金遣いが荒くなったワケではないが、金銭感覚は確実に変わっていた。

海へ行く当日。

公平は皆を乗せて国道を走る。調子良く飛ばしてご機嫌な公平の後ろで、和樹は面白くないような表情でむくれていた。

和樹は、また女になっていた。

ユリ子の強烈なススめでビキニを買わされ、多数決で和樹の女性

化が決定した。男で行く…というのが和樹と公平。女で行く…というのが藤姫とユリ子。間に挟まれたイツナは、恐る恐る…藤姫のそばに移動した。女での外出が決定した瞬間である。

「コン…」

濟まなさそうに、和樹の座る席にくるイツナ。和樹は…

ふにっ

イツナの鼻をつまむ。しばらくして、イツナは「ブハッ」と言っ  
て口を開いた。

「和樹、イツナに当たるのはよしな。男らしくないよ。」

藤姫がイツナを抱っこして言う。和樹はシヨボンとしていた。

「いいよどうせ今は女だし。俺、今日はナビに徹してるから。」  
完全に拗ねている。これはイジメすぎたかな、と藤姫とユリ子は  
顔を見合わせる。けど、見たいのは見たいのだからしょうがない。

一人だけ、地図を見ながら他と距離を置く和樹。なんとかして機  
嫌を直して貰わなければ！ユリ子と藤姫は考える。まず、ユリ子が  
アタックした。

「和樹さん、和樹さん、私たくさん飴玉持って来たんですよ！一つど  
うですか？」

そう言いながら巾着袋を開くユリ子。中には色とりどりの飴玉が。  
和樹はシヨボンとしながら覗き込み…

「コーラ味が無いから、いい。」

また一人の世界に戻って行った。

「…ぶっ飛ばしていいですか？」

「飴玉つて子供じゃないんだから…。またコーラ味つてマニアックだね。」

そう言いながら、今度は藤姫が自信満々に和樹に近寄って行く。

「和樹ー、ちょっと見てごらん。」

「……………？」

またもや、シヨボンとした顔で振り向く和樹。藤姫はおもむろに大きく開いたシャツの胸元を指で引っ張る。こぼれ落ちるたわわな…果実。

「…………… 大きいからと言って、それが正義とは限らない。」

和樹はまた一人の世界に戻って行った。

「途中で気づいたけど、これじゃ痴女だね。」

「和樹さん、今思いつきり女なうえに胸も一番アレですからね。」

さて、こうなるともはや残るのはイツナしかない。二人はイツナに最後の望みを託した。

和樹のそばに歩いて行くイツナ。和樹も、悲しそうな顔でイツナを見る。すると…

「……………？」

イツナは、その場で前屈みになると、揃えた前足の間に顔を突っ込んだ。

「……………!?!」

和樹は気づいた。これは…これは、土下座だ！土下座のつもりなのに、三つ指ついたようなポーズとごちゃ混ぜになっている！

「何なんだい、これ？」

「後ろから見たら黄色い毛の塊ですね…。でも、何だか効いてるっぼいです。」

和樹は、よくわからない萌えポイントを突かれて悶絶していた。

そこに、イツナはトドメをさす。

「……………コン？」

恐る恐る頭を上げて、少し斜めに傾げたのだ。

和樹が、敗北した瞬間だった。

「うわああん！ごめんなイツナ、怒ってたワケじゃないんだ！心配させて悪かったああああ！」

「キューン！キューン、キューン！」

ひしつ、と抱き合う二人。互いに涙を流し熱い抱擁をしている。それを見ながら、藤姫とユリ子は呆れていた。

「付き合ってられないね。あ、飴玉もらっていいかい？んーと、このいちご味。」

「どうぞどうぞ。ライチも美味しいですよ。あ、じゃあ私もオッパイ触らせてください。」

「ど、どんな交換トレードだい!?!」

そんな、賑やかな後部座席の様子を見ながら…公平は涙を流す。  
「あの…ナビ…お願いしたいんだけど…聞いてないね。うう…」

和樹が復帰するまで、公平は必死に道路標識を目で追うのだった。

和樹たちが海沿いの駐車場につくと、そこは人ごみでごった返していた。それもそのはず、今日は特に暑く最高気温は38度を越えるらしい。ただでさえここは鎌倉の海だったりする。由比ヶ浜で客が居ないなんて事はない。

「全く、どつから沸いて出てきやがんだか…」

車を降りて、和樹はそうつぶやく。その姿に、道行く人たちは思わず振り返った。鮮やかな赤のビキニが栄える、美しい少女がそこにいたからだ。

「今の時期は、何処の海もこんな感じですよ。」

次に降りてきたのは、少し大人しそうな長髪の少女。水色の、清楚な感じの水着。セパレイトではあるが、パレオをまとい上品に纏めている。そして…

「まあ、少し遠くまで泳げば少なくなるだろ？ここだけだよ、狭苦しいのは。」

最終兵器が降り立った。

黄色を基調とした水着は際どいVラインを描き、胸元は凶悪なまでに開いて藤姫のGカップほどある胸を強調していた。水着に描かれた模様も、そのメリハリのつきすぎたスタイルの上で歪み、原形が分からなくなっていた。…道行く人の足は止まり、かるく渋滞が

起きた。

「よし、じゃあ行くか。」

そこに、最後にイツナを抱いて降りてきた公平が声をかける。公平は普通のハーフパンツのような水着だった。ただ：普段はあまり気づかないが、彼も結構いい身体をしているのだ。今日はサングラスをかけ、髪をオールバックにしている。そして、その微妙な毛深さと引き締まり具合はある種の人たちに強烈にアピールするらしく…

「……ウホツ！」「……」

「………っ！？」

突如として背中に悪寒が走る！

「よし、ここにいたら邪魔になるから早く移動しよう！うん、そうしよう！」

身の危険を感じた公平に急かされて、和樹たちは足早に砂浜へと向かうのだった。

数多くの歌やドラマで取り上げられる鎌倉の海は、バブル崩壊後も変わらず、軽薄な若者の集まる軟派スポットで在り続けている。和樹達も例によってそうした連中に声をかけられそうになったが、見た目カタギの人間に見えない公平の姿を見ると皆慌てて逃げ出した。

「…俺、塾じゃ人気あったんだけどな。そんなに怖いかな。」



「まあ、街中で遭遇したら通報されるだろうな。」

「パンツ一丁で街中うろついたらそりゃ通報されるだろう。」

今、公平と和樹はビーチパラソルの下でくつろいでいる。クーラーボックスの中に入れた缶ジュースを飲みながら、ビーチボールで遊ぶイツナと藤姫とユリ子を眺めていた。

「和樹は混じってこないのか？…ああ、眺めていた方がいいのか。」

「いや、それが全然ムラムラこねーんだよな。あんだだけデカいのがぶるんぶるん弾んでても、嬉しいどころか嫉妬心すらわいてくる。男に戻らないと楽しくないな。」かといつてその格好のまま男に戻るなよ？さすがにお前でも通報されるぞ。」

「しないって、さすがに。」

そう言うってから、和樹は立ち上がると思いつきり伸びをした。

「俺、少し泳いでくるわ。」

公平にそう告げると、和樹は海へと向かって駆けていった。

その後ろ姿を見送りながら、公平はつぶやいた。

『まだ分離するには早いかもしれんなあ…。もう少し安定してからでないと怖くてしゃあないわ。こら、向こうに言って欠片の復元を進めてもらわんとアカンかもな…』

公平はそう言いながら、携帯電話を取り出して通話を始める。ディスプレイには芦優太郎の名が映し出されていた。



## 第四十三話 海のはなし(中)

勢い良く水をかき分け、和樹は海を泳ぐ。しばらくして人気の無い所にまで来ると、ようやく落ち着いて水面に身体を浮かべ仰向けになった。

波に揺られるままに、和樹は真つ青な空を眺めた。雲一つ無い青空。深い青が、まるで海のように見える。どちらが本当の海か分からなくなるような錯覚を覚えながら、和樹は身体の手を抜いていった。

「気持ちいいなー…」

そう言いながら、視線を横にずらす。遠くに見える浜辺では、相変わらず沢山の人の姿。和樹はそれを見ながら複雑な気持ちになった。

「もし、本当に自分自身としてあの世界の過去に戻ってたら…美神さんの身体見放題だったよなー…」

今のスペックなら…時給255円って事は無いだろう。もしかしたら実力を認められて対等な関係になれたかも？そうなら美神さんも俺に惚れて…

そこまで考えて、やめた。

こんなif、意味が無い。今の世界だってありえない奇跡なのだ。これ以上望んだらバチが当たる。しかし、それでも思ってしまうのだ。あの乳、もう一回拝みたかったと。女である今の自分でも、あのプロポーションは魅力的だった。

そんな事を考えてると…

さわっ…

「あうんっ…!?!?」

突然、何かが太腿を触った。

さわっ… むにゅ…

「わっ、な、なんだ!?!?…うひゃひゃひゃひゃひゃ!?!?」

大笑いしながら悶える。確認する為に大きく息を吸い込んで海中に潜ると…

「ガボツ!?!?」

そこには、無数の手があった。霊体だ。

(な、なんだこりゃ!?!?心霊スポットだったのか、ここは!?)

既に至近距離にまで迫ってきていた霊体は、無数の手で和樹の身体にまとわりつく。初めこそ混乱していいように弄ばれていたが、相手の正体が分かると逆襲に転じた。

(お、俺はなあ! 触るのは好きだが触られんのは大っ嫌いなんじゃボケー!?!?)

ズオオオオオオツ!

霊体が、和樹の身体から発せられる霊気に吹き飛ばされる。無数の腕たちは、光の中に消えていった。そして…何やら小さな球が残

る。海中に沈んでゆく球を、和樹は急いで回収した。

「まったく、なんてエロい幽霊だ……。確かアレ、柄杓で水を流し込む妖怪だろ？これのせいでおかしくなったのかよ。」

あれは、船幽霊。柄杓をくれと言ってくる妖怪で、素直に柄杓を渡すとその柄杓で水を船に流し込んでくる迷惑な存在だ。決して、エロ目的の妖怪ではないハズだが……

妖怪の中にあつた球は、厄珍堂の簡易サーチ結界セットの核パーツだった。

「あのオッサンとこのアイテムか。ん？念が込められてるな。誰が込めたんだ？何探したら船幽霊がああなるんだよ。」

和樹は球を霊視する。すると、中から知ってる声が聞こえて来た。

『この乳は俺のもんじゃー！』

ブチッ！

和樹の中で、何かが切れた。

その頃、ユリ子達は公平の勧めで海の家に来ていた。和樹が泳ぎに行っており、公平とイツナはパラソルの下で帰りを待つらしい。

昼食は先に二人で食べて来て、と言われていた。

「私たちだけって何だか気が引けますよね……」

「帰りに焼きそばとか持ち帰られる物買って帰ろうか。」

二人がそう話ながら海の家に近づくと、やはりというか何というか、軽いノリの男たちが声をかけてきた。

「ねえ、これからお昼？良かったら一緒に……」

そこまで言って、固まる。その目は、ユリ子を見て震えていた。

「て、てめえはあの時の……！」

「あなたは……あの時の不良の人たち！」

少し前にユリ子が多摩川に落とされた不良少年たちだった。彼らは顔を赤くしていきり立つ。

「てんめえ、今度は逃がさねえからな！無茶苦茶に犯して……」

ポンポン……

吠える少年の肩を、誰かが叩く。振り返る少年。そして……

「うわああああっ!?!?」

腰を抜かした。そこには、恐ろしく大きな男が立っていたのだ。

「あれ、タイガーさん？」

「なにやら不穏な空気が漂ってましたケン、声かけさせてもらいましたんジャー。この人たちは、知り合いですかいノー？」

男は、タイガーだった。ユリ子はタイガーの質問に首を振る。するとタイガーは、怯える少年たちに手をかざした。

途端に、少年たちはビクツと身体を震えさせる。目がトロンとして…

「うわあフナムシ！」

「やめろ、俺はノンケだー！」

「ナンパ成功したと思ったら、かーちゃんだったーっ！」

口々にワケの分からない事を口走って、駆けていった。

呆氣にとられている二人に、タイガーは話しかける。

「しかし、奇遇ですケン。ワツシは休みをもらって旅行に来てたんジャがユリ子しゃんたちも遊びに来たんですかいノー？」

「え…あ、はい！和樹さんの家族と一緒に遊びに来てたんですよ！今はお昼を食べに来たんですけど…。」

「変な連中に絡まれちまつてね。あんたが追い払ってくれて助かったよ。」 藤姫は言いながら、タイガーを見る。前回会った時はGS試験前。その頃と比べると、別人のようなオーラを放っている。だいぶ、鍛え上げたのだろう。

「そついえば…タイガーさん、さっき何をしたんですか？あの人たち、ちょっとおかしかったんですけど…」

ユリ子が聞くと、タイガーは何でもなさそうに言う。

「あれは、幻覚ですジャー。とりあえず、『その場から逃げたいシチュエーション』を見てもらってますケン、ここには戻って来ないと思っんジャー。」

とんでもない事だ、とユリ子は驚く。和樹でさえ、印を結んでから幻覚を見せるまで多少のタイムラグがある。が、今タイガーがやったのは片手をかざすだけ。たったそれだけで、細かなシチュエーション設定までして幻覚を見せたのだ。…これは、防げない。

「ところで、昼と言ってたけどここで食べるんですかいノー？もし良かったら、近くに美味しい食堂がありますケン、そっち紹介するんジャー。」

タイガーの申し出は、別に下心など無い。本当に、近くに美味しい食堂があるから言っていた。だから、藤姫も気軽に誘いに乗った。「いいね。せっかく食事をするなら、美味しい所がいいからね。…そこは、動物が行っても大丈夫なのかい？」

「はい、こないだ犬と一緒に食べに行きましたケン。今日も犬と一緒にですジャー。」  
タイガーが笑う。確かに、それならイツナが一緒でも大丈夫だろう。

その時、タイガーの後ろから、その犬を連れた青年が声をかけてきた。小さい女の子も一緒だ。

「タイガー、お知り合い？」  
「砂浜に草履はダメだ…タイガー、やはりおんぶをしてほしい。」  
「ん？なんだタイガー、隅に置けねえじゃねえか。ナンパかよ。」

なんとも賑やかな面々。藤姫も驚く。犬と言っても霊能犬だ。妖怪の少女までいる。

そして…ユリ子も驚いていた。



「春樹お兄さん!？」

「え…ユリ子ちゃんか!？」

互いに目を丸くして、固まっていた。

海から上がった和樹は、横島の霊体を感じてから肩を怒らせて歩いてきた。あのやろっ、馬鹿な念込めて物騒な物を海に流しやがって!アイツのせいであつたといけない方向に目覚めそうだったんだぞ!…和樹は少しだけ顔を赤らめながら、そう呟いていた。

すると、突然近くで何かの音が。

ガスッ

「あああ何故こんな所にクーラーボックスが!? 突然の出現にたまらず僕が慣性の法則に従っておねーさんに向かって倒れるのは何ら不思議では無いし悪気なんて皆無だったりするので生まれた時から愛していましたーっ!！」

ムギユッ

「ふにゃあああっ!？」 和樹の悲鳴が響いた。見ると、そこにはしっかりとしがみついて胸に頬ずりをしている横島の姿が。

「て・め・え・はあ〜！」

「え、あれ、和樹！？なんで和樹が…」

オロオロする横島に、和樹のアップパーカットが炸裂した。

「いつぺん死んでこーい！」

ズガアアアアッ！

「あぶりるらびーん！？」

横島は、星になった。

とりあえず和樹は水着を整えてから、美神の姿を探す。奴が来ているなら、彼女だつて来ているだろう。そう思つてキョロキョロしているのと、やはり同じようにキョロキョロしている美神ひのめの姿を発見した。

「おーい、横島君、どこー？もう探さなくていいから戻っておいでー！」

必死で、横島を探していた。和樹は、つい今しがた空から落ちてきた横島を担ぎながら美神のもとへ向かった。

「美神さん、奇遇ですね。こいつ、探してたんですか？」

「あ！横島君！…と、和樹君！？うわあ、また女の子だ、可愛いよー！」

目をキラキラさせる美神。なんだか、俺は女の姿の方が受けがよいような気がする…。和樹は少し悲しくなった。

「俺に抱きついてきたから殴りました。で、これは海の中で見つけ

たんですけどコイツの念が入ってたんで美神さんのやつですよね？」  
持っていたサーチ結界の核を渡す。美神は顔を輝かせて喜んでい  
た。…彼氏の浮気は、いいのだろうか。

「良かったよう、これが無くちゃ仕事にならなかったの！」

「仕事？ああ、GSの仕事で来てたんですか。…ん？俺が倒したア  
レかな？」

和樹は、海に出たエロ幽霊の事を思い出した。しかし…この核で  
おかしくなったので違うかもしれない。試しに美神に聞いてみると、  
やはり違うという答えが返ってきた。

「船幽霊って、一応前もって柄杓をくれて言うでしょ？それに、  
何体もいるよね。私が受けた依頼だと、ターゲットは人型で一体な  
の。溺れさせる、という所は似ているけど…」

そこまで言うと、美神は急にお腹を押さえた。…が、すぐに可愛  
い音が鳴り響く。

きゅっううう

「あうう…ごめんなさい、お腹空いちやっただ。和樹君、良かったら  
一緒にお昼どう？」

「いいツスね。家族と来てるんで、美神さんもこっちで食べましょ  
うよ。すぐ近くに皆いますから。」

「うん！」

一向に起きない横島を無視して勝手に決める。ここら辺、少し怒  
ってるのかもな、と和樹は笑った。美神令子と比べたら、随分可愛  
い怒り方だ。

「ほら、横島君、起きないとまた悪魔合体ゴッコするよ?」

「が、合体事故はイヤアアアツ!?!」

…ごめん。こっちの方が怖い。

飛び起きた横島が寝ぼけてコンゴトモヨロシクと言う姿に、和樹は心の中で合掌していた。

和樹が美神と横島を連れて戻ると、ビーチパラソルは既にたたまれ、公平の周りにはやけに大勢の人間が。

「おう、和樹! 丁度良かった、今から飯に行くぞ!」

見ると、そこには藤姫たちに加えタイガーの姿も。あと、ひ弱そうな青年と子供…犬までいる。

「タイガー、久しぶりだな。こっちに来てたのか。」

「あ、てめえどこに行ってたかと思っただら!」

和樹と横島が声をかける。横島の話では、夏休みの宿題を一緒にやるうと声をかけたがアパートに居なかつたらしい。

「すみません横島さん、ワツシも色々ありましたんジャー。」

頭を下げるタイガー。横島は「怒ってねえけど遊ぶなら俺たちも誘えよな」と笑っていた。あれ以来、仲良くやっているようだ。

「まあ、いいじゃないか。あんたたちも一緒かい? じゃあ車一台じ

「や足りないね。」

藤姫がそう言うと、春樹が手を上げた。

「タイガーは僕たちの車で行くよ。公平さんはバンだから後二人乗せられる？」

「ああ、余裕だよ。その店って車で近くなんだよね？悪いけど、先頭走ってもらえるかな。」

公平と春樹が話す横で、和樹がタイガーに携帯電話を渡す。

「これ、俺の携帯。着信の一番上に親父の番号あるだろ。そこにかけて、ナビしてくれ。俺は親父の携帯持って誘導するから。」

「分かりましたんジャー。」

段取りも整い、皆はそれぞれの車に乗り込んだ。この時期は水着の上に多少何かを羽織るだけで普通に歩き回れるので、一々着替えなくて済む。公平の車に乗り込む女性たちは、皆シャツとパレオを身につけるだけだ。横島は、この世の天国かと涙を流しながら車に乗り込んだ。

車の中で、藤姫がユリ子に尋ねる。

「そっいえば、あの春樹って子はどういう人なんだい？お兄さんって言ってたけど。」

「ああ、彼は遠い親戚なんです。霊能の家系で…以前、少しの間だけお世話になった事があるんです。」

少し言いにくそうにするユリ子。和樹も興味があっただが、聞かない事にした。…それよりも、気になる事があった。

「さっき気づいたんだけどさ。一緒にいた女の子…多分、座敷童子だぞ。大丈夫かな、アイツら。狙われるかもしれない。」

その言葉に、ユリ子が不思議そうに答える。

「え、何で狙われるんですか？」

「幸福を呼ぶって言われてるからさ。妖怪狩りしてる奴らの格好の獲物だからな。まあ、何でかタイガーと契約してるみたいだから靈気が漏れたりしてないしバレないと思うが。」

その話を聞いていた美神が、何やらうんうん頷いている。横島が何事かと聞くと、美神は潤ませていた。

「きつと、タイガー君は囚われていたあの子を助けたんだよ！それで、あの子の保護者になるためにGS試験に挑むんだね！凄いドラマチックな、ヒーローみたいに！」

言ってる事はそのものズバリなのだが、皆はいつもの美神の妄想かと流していた。…これが真実であると証明されるとは、この時誰も想像してはいなかった。

車で十分くらい走ると、目的の店が見えてくる。和樹はタイガーからの電話を公平に伝えながらナビをする。広い駐車場に車を止めると、皆が車の中から出てきた。イツナを抱えた和樹は、先に店に入り人数を伝える。店員が席を用意し終えてから、皆を店内に呼んだ。

この店は、タイガー達が鼻屑にしている店らしい。シラスがメイ  
ンという珍しい店で、皆揃ってシラス丼を頼んでいた。味の方は…  
解説の必要は無いだらう。感動した、とだけ記しておこう。

食事の間、座敷童子のゆかりによるタイガーの活躍話が披露され  
た。タイガーは終始照れていたが、その活躍ぶりは以前のタイガー  
を知っている和樹たちには衝撃的であった。美神などは「エミさん  
が聞いたら泣いて喜ぶよ…」と先に泣き出す始末。横島は勿論、和  
樹もタイガーの成長はかなり刺激となっていた。

そんな話で盛り上がっている最中。霊能犬のマーロウはイツナと  
一緒に少し離れた場所でシラスを食べながら話をしていた。

『見た所ワケありみたいだがよ。まあ、気楽にいこうや。』

「コン…。」

イツナは小さく頷く。どうも、マーロウにはイツナの言葉が分か  
るようだ。

『今見てる事、感じてる事。それを大切にするんだぜ。俺もお前も  
…そう長くはねえ。限りある生だからよ、大事に生きねえとな。』

「コン。」

イツナはしっかりと頷いた。今感じている幸せ…それは、永遠に  
手に入らないと思っていた奇跡なのだから。あの楔から解き放つて  
くれた和樹の為にも、毎日を明るく楽しく生きないと。それが、和  
樹への恩返しに繋がるのだから…。

『そう、前向いて生きな。いっぱい食って、コンコン鳴くんだ。』

「コン！」

一鳴きして、イツナははぐはぐとシラスを食べる。それを見て、マールウは満足そうに頷いた。

（年寄りには、これくれえしか出来ねえが…。和樹とやら、後はオメエさんの仕事だ。コイツに、本当の笑顔をさせられるのは、きつとオメエさんしか居ねえ。…頑張れよ）

ゆかりの話に聞き入っている和樹の横顔を見て、マールウはそう呟いた。

楽しい昼食を済ませると、皆はまた海へと戻る事になった。何でも、タイガー達は海辺の霊障を防ぐ警備員の仕事をしているらしい。美神が仕事で来ていると知って、手伝う事になったのだ。和樹たちも、当然手伝うと申し出た。何があったのか、最近の和樹は積極的に周囲と関わろうとしている。公平はそれを良い変化だと喜び、今回の手伝いを承諾した。

昼下がり、相変わらず賑やかな由比ヶ浜に戻ると、皆は打ち合わせ通りに分散して警戒にあたる。GS業界でも有数の実力者が揃っているのだ、直ぐにターゲットは見つかるだろう。誰しもそう思っていたし、実際そうだった。

…ただ、いくら何でも。



こんなに派手に現れなくていいじゃないか、と。

突然、沖の方から凄まじい音量の音楽が流れて来たかと思うと、一隻のクルーザーが猛スピードで疾走してきた。その穂先に立つ、一人の女性。

『沈め、沈め、男たち』 今日は何人墮ちるかしら』

字余り気味の歌を超絶美声で歌い上げる妖怪…

セイレーンの姿がそこにあった。

第四十四話 海のはなし(下) (前書き)

今回、歌詞で著作権に触れる箇所があったので黒塗りにしました。  
これはこれで迫力あるかもしれない。

## 第四十四話 海のはなし(下)

海の歌姫、セイレーン。

その歌声を聴いた者は、海の藻屑となってしまうと言つ。そして、この海で真つ先に被害を受ける人間と言えは…

『貴方を殺して〜私は生きる〜』

「なんつー歌だ、こええー！」

「うわあん、せつかく上手く乗れてたのにいい！」

「せめて板に立たせてえええ！」

サーファーの皆さんだった。

「ああ、いたなあ、こんなの。」

少し疲れた顔をして、和樹は呟いた。確か、前の世界では…歌つて倒したんだつたか。それ以外の攻撃が無効化される結界を張るらしく、歌でしか倒せなかつたらしい。なら、こつちでも歌、か…。

和樹は、海の家に行つてゴムボートを三隻借りた。今回は、これしか数が無かつたのだ。これは…少し不味いかもしれない。

「えーと…この中で歌えて、靈力の高い人つて誰かいるか!？」

和樹が、集まってきたメンバーに声をかける。体内の靈気を声に乗せてぶつけるしか、セイレーンを倒す方法はないはずだ。そう言うのと、皆は一樣に自信の無さそうな顔をする。

…しまった。前の世界では美神令子によって解決された事件。この世界の美神は完全インドア派でカラオケなんて歌わないのだ。他に

も六道冥子や小笠原エミといった連中が歌っていたが、ここには居ない。これは、結構ピンチじゃないか？

とりあえず、和樹は体内霊力がずば抜けているので参加決定。藤姫とユリ子は…凄いい勢いで首を横に振っている。春樹も×印。横島は…

「任せろ。尾崎豊なら全曲いける！」

…凄く不安だ。けど、霊力もかなりあるし戦力としては充分かもしれない。横島を二番手として起用する事に決めた。さて、最後のメンバーであるが…

「和樹、タイガーを推薦する。」

声をかけたのは、座敷童子のゆかりだった。

「タイガーは声に霊力を乗せる攻撃を使いこなすから、きっと上手く行く。」

驚く和樹。確かにそんな技を使ったと昼食時に聞いてはいたが、歌にまで応用できるとは…。それに、幸運を呼ぶ座敷童子の推薦だ。なんとかなるかもしれない。

「分かった。頼むぜ、タイガー。」

「ワ、ワッシは歌なんて殆ど歌った事ないんジャー！」

「大丈夫だ、タイガー。私に秘策がある。春樹、例のビデオテープを、海の家でタイガーに見せてやってほしい。」

自信満々のゆかり。秘策…なんだか凄そうだ。和樹はタイガーの事をゆかりに任せ、横島に説明を始めた。

「いいか、このゴムボートに乗ってセイレーンの所まで行って、勝

負を仕掛ける。声に靈氣を乗せて相手に競り勝つたら勝ちだ。相手は歌のエキスパートだから、一回で勝てるとは思わない方がいい。俺が相手の靈力を削るから、出来ればお前が仕留める。」

「分かってる。ここで所長にいい所を見せて男を上げてみせようじゃないか！」

よし、と和樹は頷く。美神の為なら、横島は力を発揮できるはずだ。さて…

チラッと見ると、タイガーたちは海の家に入って何かしている。春樹が、「先に行ってて！スグに間に合わせる！」と手を合わせて済まないというポーズをとっていた。仕方ない。

「行くぞ。俺達二人が先行する。」

「よっしゃ、待ってる水着のねーちゃん！セクシーボイスでメロメロにしてやる！」

…やっぱり危ないかな？

一抹の不安を覚えながら、和樹は公平が運転するゴムボートに乗り込んだ。

セイレーンは、つまらなかつた。せつかく地中海からはるばるやってきたのに、逢いたかつた人には逢えない。騒ぎを起こせば来てくれるかと思えば軽薄そうな男ばかりが来る。とりあえず沈めてはいるが、殺したりはしていなかつた。ボードも、なんだか高そうな

ので壊したりはしていない。

『沈め沈め、私の為に』

「うわーっ!? また沈むー!」

「慣れてくると気持ちいいー!」

「水着が脱げたー!? なんだか快感ー!」

…なんだか、段々喜ばれて来てないか。セイレーンは疲れた顔で男たちを眺める。すると、浜辺の方から二隻のゴムボートがやってきた。コイツらは…霊能者?

「セイレーン、騒ぎを起こすのもそこまでだ!」 キツと睨みつけてくる少女。見た瞬間、かなりの使い手だとすぐに分かった。退治に来た人間の中では、恐らく今までで一番強い部類に入るだろう。

「悪いがお前は俺の美声に惚れて今日から俺への愛を歌う事になる!」

にへら、と笑いかけてくる少年。見た瞬間、かなりのアホだとすぐに分かった。口説きに来た男の中では、恐らく今までで一番ダメな部類に入るだろう。

面白い。

久しぶりに楽しめそうだ。セイレーンは、品定めするような視線で和樹たちを眺め、ほくそ笑んだ。

「悪いけど、私は歌うのを止めないよ 止めさせたかったら、歌で勝負しなさいよね」

無意味にメロディをつけて、なんとなくミュージカルだ。和樹は少し退きながらも啖呵を切った。

「上等だ！これから歌でお前を叩き潰してやる！」

ゴムボートを運転していた公平が、近くにやってきた漁船に合図を送る。漁船は急遽藤姫が近くの漁師に頼んで借りてきたものだ。海の家にあつたカラオケの機材を積んでいた。合図と共に積み重ねていたスピーカーから大音量の音楽が流れてくる。和樹はマイクを手にすると思いい切り霊気を爆発させた！

「行くぜ！：：Like a knifeだ！」

軽快な演奏がスピーカーから流れてくる。これは、かつて前の世界で和樹が歌いたかつた歌。可愛い女の子にもみくちやにされながら武道館で歌ってみたかつたらしい。ただ、和樹が歌うには一つ問題があつた。

「：：ー」

発音が滅茶苦茶だつた。

なおかつ霊力を込めすぎて、聞き取れない声になっていた。これには漁船に乗っていた藤姫たちもウンザリした顔をする。

「うああああ、なんなのこの言葉あああ！？：：あ、いけない、歌わないと！」

セイレーンも慌てて歌いはじめる。和樹の歌は発音こそ酷いが、音程もあつてるし込められた霊気も凄まじい。出だしをつまづいたセイレーンは、かなり焦っていた。

「：：ー！、、、！」

「You made me mad, You made me  
prisoner your love」

ズオオオオツ、と靈気がぶつかり合う。セイレーンは妖怪の中でも伝説的な存在であり、その力は下級魔族にも匹敵する。

そう簡単には引き下らない。戦いは長引くと思われた。が…その時…

ふわぁ〜！

奇妙な音が響き渡った。

異様に自己主張の激しいその音は、和樹のすぐそばから聞こえて来た。不思議に思っただけをみると…

(……！？ 馬鹿親父、何してやがる！)

公平が、箏篋(雅楽の縦笛のような楽器)を吹いていた。

ふわぁ〜〜〜！

(息子よ、俺にはこれくらいしかしてやれん！すまなんだーっ！)

「、、つ…、、、ー！、、、ー…」

(チクシヨウ、リズムが…リズムがとれねーっ!?)

途端に形勢が逆転する。息を吹き返したかのようにセイレーンの靈気が和樹を押しつけ…

ザッパーンッ！

和樹たちの乗ったゴムボートが転覆した。



「てめー、クソ親父なんて事しやがる!？」

「日本人なら日本の歌を歌えー! ああ、筆筈が! 二十万もしたのに  
いいいいっ!」

「知るか! せめてプラスチック製にしとけ、というか邪魔すんなー  
!」

…醜い親子喧嘩が始まった。

後に、藤姫は語る。あの時の和樹は、多分世界で一番カッコ悪かつた。

第一回戦は、和樹の敗北で終わった。セイレーンは思わぬ消耗に内心かなり不安だったが、気丈に振る舞い声をかける。

「さあー、次は誰かしら」

その声に反応したのは、勿論我らが横島…

「コン!」

では無く、いつの間にかゴムボートに乗っていたイツナだった。  
これには横島も驚く。

「和樹。このキツネ、思いっきり歌う気満々なんだけど。」

ゴムボートを戻してなんとか海からあがった和樹に、横島が声をかける。和樹はイツナの真剣な目を見て、決断した。

「横島…。デュエットだ！」

「聞いた事ねーよ、キツネとデュエットとか!？」

しかし、もう遅い!

藤姫は素早くリモコンを操作するとカラオケに番号を送った!

スピーカーから、なんだか和やかな曲が流れて来た。これは…

『雪やこんこ』

夏なのに。

しかし、イツナは燃えていた。これなら…これなら歌える!

「…ゆきや」

「コン!コン!」

「あーられや…」

「コン!コン!」

セイレーンは鼻血を噴き出した。これは…これは可愛過ぎる!しかし、あなどれない。確かにあのキツネは、靈気を鳴き声に乗せていた。これは、消耗している自分にはキツイ!

「降っては)コン!(降っては)コン!( ずんずんつもる )ッ  
コンコン!)」

「Pretty, pretty angel with kiss

それは、凄まじい戦いだった。鼻血を撒き散らし必死に歌うセイレーン、納得行かないながらも必死に歌う横島と、威勢良く歌うイツナ。このまま行けば、横島たちの勝利だ。しかし…

イツナの勢いがヒートアップする！

「やー(コン！)まものは(コン！コン！)らも わたぼし(コン  
コンコン！)かぶり、か(コンコンコンコンコン！)れき残らー…

歌わせんかあああいつ！」

(コーーコーンツ)

ザッパーンツ！

転覆した。

イツナは…少し楽しくなりすぎたらしい。

「ちっ…横島もダメだったか…。」

「いや、原因作つたの和樹だろ。」

公平が突っ込むも、和樹は聞いていない振りをする。イツナは、和樹の文珠によって既に助け出されていた。

血まみれのセイレーンは、肩で息をしながらよろけている。しかし、これで勝った…。コイツらが何度立ち向かってこようと、負け

はしないだろう。そう安心しながら、ふと浜辺の方を見ると…

!?

巨大な身体をした威つい男が、小さな女の子と一緒にゴムボートに乗ってこちらに迫って来ていた。

「タイガー、作戦通りにするのだぞ。」

「し、しかしゆかりちゃん、これは歌と言えるんかいノー…」

「そんな事言ったら、春樹の好きなデスメタルとやらは歌どころの騒ぎではないだろう。まかせておけ、何を言われようと私が言い切るめる。」

それは、冷徹な軍師のよう。ゆかりの自信に満ちた目にタイガーも少し怖がっていた。

「あら…お次はお嬢さんかしら それともそちらのおにーさん？」

「ワ…ワツシが行くんジャー！」

タイガーが高らかに宣言する。ゆかりは、春樹に借りた携帯電話で藤姫に連絡して曲名を伝えた。

『…え？いや…本気かい？』

「本気も本気、大真面目だ。」

仕方なく、カラオケに番号を入れる。流れて来た曲は…あのマイコーでジャクソンな人の名曲だった。

ドン、ツツ…ドン、ツツ…ドン、ツツ…ドン、ツツ…

「しよ、正気か、タイガー!?!」

「コン!コンコン!」

和樹は目を丸くし、イツナは興奮している。有名なイントロが流れる中、タイガーは奇声を発した!

『ぼっっ!』

「「「「!?!」「」」」

途端に、周囲の風景が一変する。これは…

沢山の観客、ライトアップされたステージ。モータウン25周年のイベント会場であった。

いつの間にか、タイガーはラメ入りの黒いスーツに身を包んでおり、同じく黒い帽子に手をかけて踊り出す。

これは、幻覚。凄まじい密度の幻覚で、周囲の人間全てをマイクワールドに取り込んでしまったのだ。そして…

『ヒーツハツ!』

発する奇声。そこに、マローウ仕込みの雄叫びが炸裂する!

ズガアアンツ!

『ちよっ、何!?!歌じゃないじゃない!』

「ふん、たわけが!ヒーホーヒーホー言ってるのも歌のうちだ!」

なんとという卑怯技。ゆかりはマイコーのブレスや奇声も歌と判断し、イントロで無駄に奇声を発するようにタイガーに仕向けたのだ。

「ハッ…ダッ…ヒーツ！」

ガアンツ！ズガアアンツ！ドガアアアンツ！

踊り、叫び、クルクル回るタイガー。思いつきり不気味なのだが、幻覚補正でそれなりにマイコーっぽく見えなくもない。…しかし。

タイガーは生真面目だった。

そして、少し順番を間違えていた。

本来であれば間奏で踊るハズの動きを、ここで入れてしまったのだ。

…それは、ムーンウォークだった。

ススススス…

ザッパーンツ！！

「……………」

幻覚が、消える。赤くライトアップされたスタジオが消え、一面に海原が戻った。

…タイガーは、溺れていた。

「うむ。これは…負けだな。」  
「……………」

誰もが、このあんまりな結末に絶句していた。ただ、一人を除いて。

「…ぶ、ぶははははははっ！だめ、だめ、おっかしー！あははははは！」

セイレーンだった。どうも、彼女のツボを刺激したらしい。セイレーンは過呼吸になるくらい笑って…

「だ、だめ、歌えな…」

ザッパーンッ！！

クルーザーの上から転げ落ちて、海へと叩きつけられた。これは…

「うむ。引き分けだな。タイガー、良くやった。」

「ゆ、ゆかりちゃん、ワツシは泳げないですケン、助けてくださいやーい!？」

溺れるタイガーを優しく撫でるゆかり。それを見ながら、和樹たちは呆然とするのだった。

こうして、セイレーンはタイガーと引き分けた。それは歌姫としてのプライドを酷く傷つけたらしく、セイレーンはクルーザーに戻ると泣き出してしまった。

「うづうづ…いくら何でも、こんなのもって無い…。」

まあ、それはそうだろう。

「なあ、お前、何しに来たんだ？」

和樹が、なるべく優しく話しかける。セイレーンの事を詳しく美神に聞いた所、彼女は死傷者を出してはいなかった。単に、サーフアーを沈めて遊んでいただけだった。それも、すぐに助けて陸に上げていたのだ。何故、こんな事をしていたのか気になっていた。

「お前の行為は、一応営業妨害だったりするから退治要請が出るんだけどさ。さっきから見ると妙なファンみたいなのも居るし、あんまり退治したくないんだよな。」

それには、春樹や美神といった直接依頼を受けた面々も頷いていた。周りを見ると楽しそうに波に弄ばれている若者が多数いるし、嫌われてるわけでは無さそうだった。

「私は…日本にドクターカオスが居るって聞いたから来たのよ。」

「カオス？」

意外な名前だ。ん？そう言えば、前の世界に居た時もなんかカオス絡みだったような。

「随分前だけど。地中海の方に居た時に、ドクターカオスと勝負した事があったのよ。で、負けちゃった。初めて、歌で負けたのよ…。あれ以来、いつかりベンジしてやりたくて世界中を探しまくったの。」

あれえ？コイツ、カオスを探してたっけ？和樹は困惑した。

「彼、私が訪ねに行った時はもう他の国に行っちゃって…。悔し



くて追いかけてたら、ここまで来てたのよ。ここで暴れてたら、また逢えるかと思っただけだ……。」

セイレーンの目は、完全に恋する乙女の目だった。ああ、そういう事か…和樹は納得する。追いかけているうちに、気持ちが変わって来たんだろう。

「俺の知り合いが保護してるらしいから、掛け合ってみてもいいぜ。」

「本当!？」

セイレーンが飛びついてくる。それを何とか制しながら、和樹は言った。

「だが、まずこの自治体の人達に謝つとけ。皆を危険な目にあわせたのは変わらないんだ。」

「う…そうね。分かったわ。」

やけに物分かりがいい。皆はホッと胸をなで下ろした。これで、この海の騒動は終わり。やっと平和に遊べるようになった。

和樹たちはセイレーンを連れて、浜辺へと戻っていった。

借りていた船やゴムボートを返し、美神と春樹は仕事の依頼をしてきた人間と連絡をとった。ややこしい事は向こうに任せて、こっ

ちは帰る準備でもしようか。…そう考えながら海の家でかき氷を食べっていると、一人の男が声をかけてきた。海を家の管理人の男だ。

「あのー…セイレーンさんはどうなるんでしょう。捕まって、どこか行っちゃうんでしょか。」

「なんだか名残惜しいような言い方だ。」

「いや…今回は危険な事してたからある程度は罰を受けるかもしれないけど、罰金くらいじゃないかなあ。」

和樹が答えると、男は安心したような顔をする。

「良かった…。実は、最近彼女の歌を聞きたくてやってくる人が増えてたんです。それにここ、夜はライブハウスに変わるんで、彼女をスカウトしたかったんですよ。」

「はあ…。」

生き活きと話す男に若干退きながらも、和樹は考えた。…こういう風に、社会に溶け込めるならそれも幸せかもな、と。セイレーンは今、美神たちと一緒に自治体のお偉いさん達と話をしている。きつと彼女の事だ、うまくやってくれるだろう。

「後で、直接誘ってみたらどうです？彼女歌うの好きみたいだから、きつといい返事が聞けると思いますよ。」

「はい、そうします！」

男はそう言うと、足早に奥の部屋へと戻って行った。

日が傾きかけて来た頃。

美神たちの交渉の結果、セイレーンは地元のGSである春樹が保護するという形で落ち着いた。罰金の類は海の家管理人の男が肩代わりする事に。その分、セイレーンが海の家を中心にライブを行ったりして働いて金を返すという方向で話がまとまった。

「迷惑をかけて、すみませんでした。これからは、陸で歌って行きます。」

そう言って頭を下げるセイレーンに、和樹たちは暖かい言葉を贈った。この人なら、多分上手くやれるだろう。そんな気がした。

「カオスの方には、こつちから伝えておく。この海の家住所と電話番号を覚えておくからな。」

和樹がそう言うと、セイレーンは嬉しそうに礼をする。基本的に礼儀正しいのかもしれない。

「さて…そろそろ帰るか。あれ、吉村さんは？」

見ると、ユリ子の姿が無かった。公平の姿も無い。さっきまで一緒にかき氷食べてたのに…。

「和樹は公平を探して来な。あたしたちはユリ子を探すよ。」

「コン！」

藤姫も今気づいたようだ。手分けして、探す事になった。和樹は公平を探しに行く前に、セイレーンの方を向く。

「俺ら、これから帰るから。あんたも元気だな。」

「はい。和樹さんたちもお元気で。」

軽く手を振ると、和樹は海の家を後にするのだった。

【吉村春樹】

「お兄さんが生きていてくれて、嬉しいです。」

夕焼けに染まった浜辺を歩きながら、ユリ子ちゃんは少し憂いを帯びた表情でそう言った。今は僕と彼女の二人だけ。マーロウたちは気を利かせて駐車場へ先に向かっていている。

「君がGSになったと聞いた時は、驚いたよ。以前の君なら、絶対選ばない道だと思ってたからね。」

「ふふふ、私も変わったんですよ。」  
「にっこりと笑うユリ子ちゃん。…こんな笑顔、見た事無かったな。」

彼女と会ったのは、三年ほど前の事だった。父親を亡くし、学校で苛められ不登校になっていた彼女を、ひと月だけ家で預かった事がある。無口で、他人を怖がり、いつも何かに怯えたような顔をしていた。

彼女はいつもマーロウのそばに居て、たまに近所の猫と話すくらいで僕とはあまり口をきかなかった。初めて話したのは…彼女をか

ばって、車にひかれた時かな。青ざめて「大丈夫？」と聞いてくる彼女に、「大丈夫だよ。そんなに痛くないから」と返して気絶したんだよね。ちよつと、アホな会話だった。

僕が入院したすぐ後に、彼女は自分の家に帰って行った。自分の事を、死神だつて言つてたらしい。そばにいと、僕が死ぬと思つたんだつて。誰がそう思わせたのか知らないけど、酷いと思つたよ。あの後…何度か手紙を送つたけど、返信は無かつた。

「あの…ずっと音信不通にしているごめんなさい。私、お兄さんが怒つてると思つて中々勇気が出なくて…」

「怒つてなんかいいよ。ただ、ちよつと寂しかったかな。あんなの僕気にしないのに、つて。ユリ子ちゃんも、もう気にしなくていいからね。」

そう言つと、彼女は複雑そうな顔をしてうつむいた。まあ、気にするなと言つても無理かな。じゃあ、こうしよう。

「気にしないでいいけど、一つだけ約束して欲しい事がある。」

「え？何ですか？」

「それはね、これからはちゃんと車に注意して歩道を渡ること！もし近くに僕がいたら、またかばつちゃうもの。さすがに、次は痛いと思つんだ。」

ユリ子ちゃんはキョトンとしてたけど、すぐに笑顔になつてくれた。

「はい、約束します。あの時は、ごめんなさい。」

うん。これで、ユリ子ちゃんも心に引っかけた物が取れただろう。…ああ、そう言えば忘れていた。マールウから伝言を預かってたんだ。

「ユリ子ちゃん。マールウから伝言だよ。『いい女になったじゃねえか。次会うときは子供を産んどけ。五匹くらい』だって。」

「う…。やっぱり、そう言う所って変わってないんですね。」苦笑いするユリ子ちゃん。そんな彼女に、遠くから声をかけてくる人が。あれは、藤姫さんだ。もう、帰るのかな。

「あ、迎えみたいです。お兄さん、今日はありがとうございました。」

「こちらこそ。凄く楽しかったよ。元気でね、ユリ子ちゃん。」

「お兄さんも、お元気で。」

礼をして去って行くユリ子ちゃん。僕は大きく手を振ってから、マールウたちの待つ駐車場へと向かった。あまり長々と感傷的に見送るのは、好きじゃないんだ。縁があつたら、また会えるだろうし、ね。

【春樹視点終了】

和樹が駐車場に足を運ぶと、公平は既に車のそばに立って電話をしていた。和樹の姿を見つけると、慌てて電話を切る。

「何だよ、聞かれたら不味い事か？」

「い？いやいや、そんな事ないぞ。氏子の人だよ。」

その返答に、ため息をつく和樹。

「あのさ、悪いとは思ったけど見ちまったんだよ。昼飯の時、親父の携帯使ってナビしただろ。着信履歴……」

公平の表情が、固まる。和樹は、内心ビクつきながら話した。……  
関係が壊れる真似はしたくなかったが、気になってしまったのだ。

「親父が何をしてるのかは分からないし、話せない事なら聞かないよ。ただ……教えて欲しい。危険な事には、手を出してないんだよね？」

「……ああ、それは約束する。俺は、家族を守る為に生きてるんだ。」

サングラスを外し、真剣な表情で言った。

「詳しい事は、今度二人きりの時に話そう。俺も正直、隠すのしんどくなつてたからな。」

公平の言葉に、安堵する和樹。もし、拒絶されたら……さすがに、凹んでいただろう。正体がどうあれ……自分の父親である事には変わらないのだ。

遠くで、藤姫とユリ子の声がした。この話は、これでお終いだ。

和樹は気を取り直して藤姫たちに手を振る。公平も、車に乗り込むとエンジンをかけた。

…こうして、和樹たちは海での一騒動を乗り越えて家路についた。いつもと変わらない車内での会話。しかし、藤姫だけはその空気の変化に気づいていた。

（そうかい、もう話すんだね。）

公平と目でコンタクトを交わし、藤姫はため息をつく。打ち明けた後も、和樹が公平を受け入れてこの家族が続くといいけど…。

そんな不安を胸に、藤姫は車窓から沈み行く太陽を眺めていた。



## 第四十五話 芦原公平のはなし

朝、早い時間に神社の本殿で一人の男がお供え物をしている。白衣袴姿の男は、手に持った三方という入れ物を神前に丁寧に備えた。そして、一度手を軽く叩いてから酒の入った入れ物と、水の入った入れ物のフタをとる。用意されてるお供え物は、お米とお酒、塩と水である。これが、この神社で毎朝上げられている日供であった。男はその後祝詞を上げると、神社を出て社務所へと帰っていった。

男の名は芦原公平。

日頃遊んでいる印象が強いが、それなりに神主らしい生活をしていたりする。

あの海での騒動が終わって一夜あけた今日。公平は本業に戻るべく日課となっている朝の献饞を行い、日常へと戻っていた。社務所に戻るとホワイトボードに書かれた予定を確認して、祈祷の予約が入っている日をチェックしていた。

「…戸松さんとはこの間お婆さんが亡くなったから初宮参りはキャンセルだろうな。確認の電話いれとくか…。」

帳面をパラパラめくって連絡先を確認する。その時、何やら背後から視線を感じた。チラリと窓ガラスに目をやると、開きっぱなしにした戸の向こうから、和樹がこちらを見てる姿が映っていた。何だか、不安そうな表情だ。

もしかしなくても、昨日の話の続きがしたいのだろう。

やれやれ、と公平は苦笑いをした。ちょうど掃除機を持って近く

を通っていた藤姫に声をかける。

「ああ、悪いけどこれから和樹と二人で出かけて来たいんだけどいいかな。」

「え？…ああ、あの事かい。いいけど、話すんならちゃんと全部話すんだよ。お昼は私とユリ子で勝手に済ますから、あんた達は外でゆっくりしてきな。」

「ああ、分かってる。…それと、来週の初宮で予約入れてる戸松さんに確認とってもらえないかな。お婆さんが亡くなったらしいから、多分キャンセルになると思う。」

「分かったよ。お昼に電話入れてみるから、安心して行つてきな。」

藤姫がホワイトボードに『TEL確認、初宮キャンセルか？』と記入する。それを見てから、公平は遠くで頭だけ出してこちらを伺ってる和樹に声をかけた。

「おいノゾキ小僧！ちよくら出かけるぞー！」

「う…あ、人聞き悪い言い方すんなよ！」

顔を真っ赤にして焦る和樹。気配を完全に消していたのに何故バシたんだ、と困惑していた。公平はそんな和樹に車のキーを見せて続ける。

「久しぶりに、親子でドライブでも行こうか。お前を連れて行きたい所があるんだ。」

「え？ああ、分かった。」

何にせよ、やっと二人で話す事が出来る。和樹は早速、部屋に戻って外出出来る服装に着替える事にした。

「あのさ。」

藤姫が声をかける。

「あなたがどつちだろうと、和樹の親である事には変わりないんだからね。それだけは、忘れないでくれよ。」

「分かってるよ。安心しろ、こう見えて結構、アイツの親やって長いんだ。」

公平はそう言って、装束室に向かった。さて、どう説明したらいいか：頭の中で色々考えるものの、まとまらない。まあいいか、成るようになるさ。公平はそうつぶやきながら私服に着替えるのだった。

東京の街を、公平の運転する車が走る。ジーンズにＴシャツというラフな出で立ちで、和樹はその助手席に座っていた。

「こうして二人で出かけるのは、久しぶりかもしらんなあ。」

「うん」。俺のGS試験以来かな。その前は、俺が退院した時からいだと思う。」

横島の意識を取り戻した時だから、だいぶ前の事になる。公平は日頃塾の仕事で忙しくて中々一緒にはならなかった。

「そうか…。すまなかつたな、あまり構ってやれなかつた。」

「いや、それは仕方なかつたし。別に謝らなくていいよ。」

そう言つて、黙り込む。どう話を切り出していいか、和樹は悩んだ。車は軽い渋滞につかまり、ほとんど進まなくなつていた。

「なあ…。先に聞いておきたかつただけだよ。」

悩んだ末に、口を開く。

「親父…親父は生きてるよな？死んでなんかいないよな？」

「…いきなり、凄い事言つた。何でそう思つた？」

「だって、靈気がまるで感じないんだ。俺が、親父と一緒に寝たくないって言つたの覚えてるか？小学生の頃…」

「あー…あれな。何気にショックだったぞ？とうとう俺も加齢臭を気にしないといけなくなつたかと焦つたんだ。」

少し冗談めかして言つと、和樹も少し緊張を緩めた。

「あれ、さ。親父がまるで、幽霊みたいに見えて怖かつたんだ。生きている人間の重みみたいなのが無かつたから…最初、死んだかと思つて不安になつたくらいに。」

「なるほどなあ…。まあ、当たらずとも遠からず、かな…。」

「…え？」

固まる。当たらずとも遠からず？

公平は、ため息を一つついた。

「じゃあ、まずそこから話そうか。俺の事…俺が何者なのか、をな  
遅々として進まなくなった道路を見ながら、公平はタバコに火を  
つける。本当は向こうについてから話そうかと思っただが…仕方ない。

不安そうな和樹に優しく微笑みかけながら、公平は語りだした。

### 【芦原公平】

お前は覚えてるかな…義母さんの香苗の事を。あいつを事故で失  
ったのが、そもそもの始まりだったのかもしいないな。

こんな事今更言うのもなんだが、俺は香苗を愛していた。アイツ  
の為に生きていたも同然だったからな…。失った時は、まるで世界  
が終わったような気持ちになったもんさ。お前を引き取っていたか  
ら、何とか生きなきゃと思えたんだが…まあ、辛かった。

俺が当時塾の先生をしてたのは知ってるよな？事故後、お前を養  
う為に先生を続けていたんだが…何というか、駄目になったんだよ  
な。その、不安定になったというか…必死になって頑張っていたん  
だが、それが生徒に受け入れられなくなってな。簡単に言くと、ク  
ビになったんだ。

俺は、どうしたら良いか分からなかったよ。お前を養う為に、す  
ぐにでも他の仕事を見つけないきゃならない。ただ気だけが焦ってた

な。…で、ある日の夜さ。全てがどうでも良くなったような…そんな気持ちになった。

先に謝っておく。

すまない。和樹、俺は…お前を見捨ててしまった。

夜中、ただ寝ていただけなんだがな。身体力がどんどん抜けて行くような感覚に襲われたんだ。そして、冷たくなってゆく。生きる事を諦めた途端、身体までが諦めたらしくってな…驚きつつも、俺はそれを受け入れてしまった。

で、な。そんな俺に、誰だか分からないが声をかけてくるやつが現れた。妙な関西弁で、まくし立てるんだよ。『アカン、何死んどんねん！子供一人残して、それでも男か！』ってな。俺も何か言い返したかったが…遅かった。そのまま、俺は意識を失ったよ。

そこからは、不思議だったよ。俺は、誰かが勝手に動かす俺の身体をただ眺めていた。毎日毎日、俺の背中に張り付いて俺を見ていたんだ。悔しいが、誰かの操る俺は優秀だった。日雇いの仕事を探し出して、とにかく精力的に働いていたよ。三十後半の身体にはキツイ仕事ばかりで大変そうだったが、必死に頑張っていた。それは…ただ眩しかったな。

そんなある日、俺は何故だか自分の身体に戻っていた。そして、それまで俺の居た場所には悪魔のような姿の男がたっていたんだ。

『ほな、今日からバトンタッチや。自分で身体を動かすんやで。』

俺は…生き返ったらしい。

この男は、俺にもう一度チャンスをくれたんだ。そう思ったよ。

俺は、がむしゃらに働いた。慣れない仕事だろうが何でもやった。

商店街の人たちと掛け合つて、神社の仕事と平行して出来る仕事を紹介してもらつたりもしたな。必死で動いて、働いて…気づいたら俺は、あれだけ抱えていた悲しみを忘れて笑えるようになっていた…薄情だと思ふだろ？けど、事実さ。身体動かして何も考えないようにならなければ、心は回復してしまつたらしい。

それからだいぶ経つて、香苗の命日を迎えた。その日、俺はアイツの実家の墓の前で手を合わせていたんだが、その時またあの男が姿を現したんだ。

『調子はどうや。身体、妙な事ないか？』

「あんたは…。ああ、大丈夫。前より動けるくらいだ。若返つたのかと勘違いしたくらいにな。」

『あー、やつぱりか…自分、だいぶ靈感強い上に一度死んだ後にワイと繋がつたから適応しよつたな。』

「は…？」

その男の説明では、俺は死体を操る霊らしい。ただ、身体自体は生きてるし霊体も肉体に繋がっているから生きてるのと変わらない。その接着剤みたいな役割を、男が担ってくれていたようだ…俺は男とも霊的に繋がってしまった。いわゆる神族や魔族と同じような存在になつてしまつたらしいんだな。

『こつなつたら自分には、ワイの手伝いしてもらおうか。人間界に現界する時の依り代としてもちようどええわ。』

俺に断る理由は無かつたよ。生き返らせてくれた恩人だからな。それ以来、俺は男の指示に従つて色々動く事になつたというワケだ。

…お前が俺を怖がっていたのは、俺が霊気のコントロールを覚えてなるべく霊気を外に放出しないようにしていたからじゃないかな。俺だけならともかく、男の霊気を感知されたら色々問題がおきそうだったからな。

なんせ、いわゆる悪魔の親玉みたいな奴だろう、サタンって。見つかつたら危険すぎるじゃないか。

【公平視点終了】

和樹は、呆然としていた。

サタン…あの最高指導者の一人が、あろう事がこんなに近くに居たとは…

最初はただ、電話で芦優太郎と何を話していたのか聞きたかっただけだった。それがいきなりコレである。藪をつついて蛇どころの騒ぎではない。親父をつついてサタンである。

「親父、もしかしてそいつ、今も居るのか？」

「ん？ああ…言いくいけど居る。」  
そう言つと、公平の身体にうつすらとサタンのシルエットが現れた。

『毎度…。久しぶりやなあ、横うち！元気してたか…はぶあっ！？』



和樹の鉄拳が炸裂した。  
しっかり靈気を込めた右ストレートだった。

『な、なにすん自分！いきなりコレは酷いやろ！？』

「うるせえ、今まで居たんならどうして黙っていやがった！」

興奮する和樹。それを公平がなだめる。

「落ち着け、和樹。一応俺の恩人だから、勘弁してやってくれ。でもって俺も痛かったりする！」

『い、一応ってなんやねん。段々扱いがぞんざいになってきとるやろ！』

ぶーぶー文句をたれる。和樹は振り上げた拳をなんとか下ろすとサタンを睨みつけた。

「一体どういっつもりなんだ？親父を助けてくれたのは感謝するけど…何か危険な事させてるんじゃないだろうな。」

『あ、当たり前や。幾ら靈的に繋がってようと一介の人間に危険な真似なんかさせるかいな。…まあ、それはこれから行く場所見れば分かるわ。』

そう言つと、サタンはまた公平の身体の中に消えて行った。

「親父…これから行く所って？」

「ん？俺が日雇いの仕事を辞めてから、あのサタンに言われて勤めていた所だよ。まあ、塾と言えば塾だ。」

「塾？」 確かに、ここ数年塾の話聞いていたな。なら、あれは嘘では無かったのか…。和樹は今までの公平との会話を思い出しながら、そう考えていた。

公平の運転する車は渋滞を抜け、いつの間にか閑静な住宅街に入っていた。その一角に、少し大きな建物がある。看板には日本語学習塾とあった。公平はその駐車場に車を止めると、和樹に声をかけた。

「ここだ。降りるよ。」

「うん…。」

言われるがままに降りる。公平が携帯電話で連絡をとると、すぐに建物から一人の女性が出てきた。…どこかで見た顔だ。

「先生、お久しぶりです！お待ちしておりました！」

少しウェーブがかった長髪が目をひく、グラマラスな女性だ。どうやら、この学校の職員らしいが…。和樹は、その外見や雰囲気にも物凄い既視感を感じた。この人と自分は…確実に会った事がある！

「ああ、久しぶり。倉田さん、コイツが前言った息子の和樹だ。」

和樹、紹介するよ。この学校の事務員の、倉田育子さんだ。」

公平が促すので、頭を下げて挨拶をする。「あ、どうも。芦原和樹です。」と言うと、倉田と呼ばれた女性はにこやかに笑った。

「あなたが平行世界の私を助けてくれた和樹さんですか。初めまして、倉田育子と申します。グーラー、と言った方が分かりやすいでしょうか？」

!?

グーラー。

前の世界では妖魔の里の管理人をしてくれた女性。里の住人をいち早く避難させ、自分は横島が来るまで戦い続けた。外見は人間になっっているので分かり辛いが、力強くも優しい目は確かにあのグーラーだった。

「グー…ラー？この世界の？」

「はい。実験材料にされそうだった所を唐巢神父に助け出されたんです。その後、芦原先生の塾で社会常識を身につけて…今は、この職員として雇って貰ってます。」

「俺がサタンに頼まれて働いていたこの塾はな。外国人の生徒もいるが魔族、神族の留学生もいる。時には妖怪が人間社会に溶け込めるようにここで教育してたりもするんだ。」

もう、和樹の開いた口は塞がらない。なんなんだ、ここは!?!自分以前の世界で実現したかった夢が、ここでは既に現実の物として存在している！

動揺する和樹を、公平は建物の中へとうながす。倉田の案内で、和樹は戸惑いながらも入り口のドアへと歩いて行った。

建物の中は至って普通の塾といった様相だった。和樹はその職員室に通されると、ちらほらと見える人以外の気配をもった職員たちに挨拶をする。雪女、ぬらりひょん、一つ目小僧：どこのお化け屋敷かと突っ込みたくなる面子だが、皆、人間に化けていて普通の人には気づかれていないようだった。公平の姿を見た妖怪たちは嬉しそうな顔をして出迎えていた。

「和樹、この奥の部屋で話をしよう。」

公平が、少し重い扉を開ける。中は少し広い応接室のようになっている。高級そうな皮の貼られた椅子が並んでいた。和樹は促されるままその一つに座り、公平が向かいの椅子に座る。倉田はよく冷えた麦茶を二人に出した後、一礼して部屋を出ていった。

「あの…全く飲み込めてないんだけど…」

「そりゃそうだろうな。まあ、今は聞くだけでいい。…この塾はな、俺がこの間まで勤めていた塾だ。俺はここで妖怪たちの世話と勉強を教えていた。何人か大検所得したし、それなりに成果は上がってたな。お前、俺が塾やめると聞いた時おかしいと思わなかったか？ やけに簡単にやめれるな、とか。」

「え…まあ、そうだな。3月なんて、受験真っ盛りだし。1月に神主業を優先できるのも変だとは思ったよ。冬季講習で外部の人間も入ってくる時期だから人手不足だろうし。」

「答えは簡単、俺はこっちで働いていたんだ。受験とかはあまり関係ない。」

そう言っただけ公平は麦茶で喉を潤した。さて、これからが大変だ。

気を引き締める。

「俺がここを辞めたのはお前が稼いでくれるからというのもあるが、サタンに頼まれていた事をやり終えたから、というのもある。俺はここで妖怪たちを社会に適用させ、そのうちの何人かをサタンの知人の事務所に送り込んだ。その事務所の主が、お前のよく知る人物だったわけだ。」

「芦優太郎、か…。」

繋がってきた。和樹の頭の中のパーツがカチカチとはまって行く。

「イシユタル、リリス、サキュバスといった連中は皆良い事務員として芦君のサポートについているらしい。で、やっと肩の荷が下りた俺は今では神主業に専念していると言うワケだ。…ここまでは、分かったか？」

「ああ…なんとか。」

振り返ってみれば、確かに家を空ける回数や時期、持っていた仕事の教材も塾の先生とは違っていたような。そんな事を考えていると、不自然な所ばかりが思い出され、何故今まで気づかなかつたのか逆に不思議なくらいだった。

「ここからは、俺じゃなくコイツに話して貰おう。」

また、公平の身体からサタンが現れる。なんだか、ちょっと悲しそうにしていた。

『コイツ呼ばわりされとるけど魔界で一番偉い人来ました！。公平、後でエビス奢るんやで。』

やっぱり、少し怒っていた。

『さて、横つち。今疑問に思つとるのはアシユタロスとワイらが何やつとるか…でええかな？』

「え…いや、その前に。」

少し怯えながら公平を見る。

「親父は俺の正体を知ってるのか？こことは別の…」

『そらそつや。手伝ってもらつとる事にも繋がるしな。』

サタンが、当然だろという表情で言った。そこに、公平が付け加える。

「サタンから、大まかな事は聞いている。聞いた上で、俺は俺に出来るやり方でお前をサポートしたいと思つたんだ。」

ニッコリ笑う公平。和樹は少し、涙ぐんでいた。

『さて、こつからは本題や。ええか、茶々入れんでしっかり聞いていな。』

サタンは二人を見ながら言う。トーンの変わつた声に、二人は緊張しながら聞く態勢に入った。

サタンは語る。

それは一部であるが、和樹をノックアウトするには充分過ぎるほど衝撃的であった。

サタンの話では…

この世界は、アシュタロスの作り出した宇宙の卵の一つであるらしい。それも、和樹が横島の頃に、アダムとイブに余計な事を教えてダメにした卵を再生したものだという。

『宇宙の卵は貴重やから、アシュタロスは後で回収して直しとった。それをキーヤンが見つけて万一の為の逃げ場所として確保しとったワケや。まあホンマはアシュタロスにゆっくりしてもらお思って置いといたんやけどな。』

アシュタロスの死後に、彼の魂を癒やす為の世界としてこの卵は用意されていた。しかし…残念な事に、万一と恐れられていた事態が起きてしまう。それは、横島を狙った神魔族の暴走。そしてそれによる、世界崩壊の危機…サタンたち最高指導者たちは、横島の魂が悪用される前にこの卵の中に避難させていたのだ。殺された、彼の仲間の魂と一緒に…。

『ここはな、言わば魂の揺りかごや。アシュタロスも横つちも…疲れとったやろ？充分頑張った二人に幸せになつてもらいたくて用意された世界やっただけど…まあ、ここも自立した一つの世界やからな。悪い奴はおる。それを、ワイらが色々手を回して始末しとったワケや。』

横島の死に様に、一番胸を痛めたのがアシュタロスだった。自分の生き様をなぞるように世界を敵に回して死んでいった横島。その魂を救う為に、和樹となった横島をサポートしようと思った。公平

にサタンを通じて接触を取り始めたのは和樹をサポートするためだった。

『で、ここからが今やってる事や。横つちを和樹とするに当たって、その魂の器となる物を使ったんやけどな。神の器、ちゆうやつや。今、自分の身体になつとる奴なんやけど、実はもう一つ用意してる。何で分かるか？』

言われても、和樹は首をひねるばかりだ。話が突飛過ぎて、ついに行けなくなっていた。

『ホンマはな…ルシオラのねーちゃんを生き返らせる予定やった。』

「ルシオラ…」

和樹の胸が高鳴る。

今ではもう、夢の中でも逢えなくなってしまった恋人。自分を初めて好きになってくれた女性…。

『けどな、アシュタロスが言うには不完全な状態で魂を分離しても無理らしいんやて。せやから、完全にせなあかん。そこで、ドクタ―カオスの出番が来るわけや。』

どんなワケだ。ルシオラで頭がいつぱいな和樹はもはや混乱状態である。いくら知識は豊富でも、基本的に馬鹿な和樹は目を回し始めた。

『簡単に言うとな。あのコスモプロセツサーをこの世界でも作る。で、それを使ってルシオラのねーちゃんの身体を向こうの世界から引っ張って来て、こっちで復元してしまおう言うワケや。カオスはその為の開発を手伝っとなる。』



やっと、理解し始めた。

つまり…ルシオラを復活させる為に、公平やサタン、アシユタロス達は動いていたのか！

「和樹。俺がやったのは、妖怪や魔族たちの教育くらいだ。たいそうな事はしていない。けどな、一度は見捨ててしまったお前を助けてやれるのなら、俺は何だってするつもりだ。そんな気持ちで、今までサタンに協力してきた。」

『実際、公平のお陰でこっちは横っちの状態をいつでもチェック出来とったからな。大助かりやった。今はまだ不安定な魂やけど、基本的に分離は可能や。ただ、万全には万全を期っしたいから、欠片の復元を急いどるっちゅうわけや。コスモプロセッサーな、ほとんど完成しとるで。こないだ実験でねーちゃんの欠片の回収には成功しとるし。』

和樹の知らない所で、沢山の人たちが動いていた。その事実には、和樹は思わずポロポロと涙を流す。もう、諦めかけていたルシオラの復活。それが、知らないうちに実現可能な段階にまで来ていたのだ。

「和樹、これで分かったか？俺の携帯の着信に芦優太郎の名前があった理由。」

無言で頷く和樹。もう、声も出せなかった。うん、うんと辛うじて声を出して頷いた。顔は…涙でぐしゃぐしゃだった。それを、公平は乱暴に手でわしゃわしゃと撫でる。

「お前は本当に泣き虫だなあ。言っただろ、俺は家族の為に生きて

るって。これくらい、親なら当たり前だ。」

『世界の仕組みすら組み替えかねん作戦に荷担する親なんて、聞いた事ないけどな。』

そう言つて笑うサタン。公平も笑った。

お茶のお代わりを持ってきた倉田がドアをノックするまで、和樹はしゃくりあげて泣いていた。思えば、こちらの世界では嬉しくて泣く事ばかりだ。前の世界と違うのは、やはりここだろう。

和樹は、知らない。

実はこれ、かつて横島だった頃の悪戯が関わっているという事に。

アダムとイブに教えた性教育：実はその際に、和樹は愛の素晴らしさを説いていた。そして、どうも再生時にその辺りの名残が出ってしまったらしい。世界の基本的な成り立ちとして、愛情が一つのキーワードとなつてしまっていた。

この世界の仲間たちがやたらとカップルだらけになっているのは、実は和樹のせいだったのだが：和樹は勿論、神族魔族に至るまで誰も気づいていなかったりする。しかし、結果的にこれで良かったのかも知れない。少なくとも和樹はこの世界に愛されていたし、和樹もこの世界が好きになり始めていた。

塾での説明が終わった後。和樹は塾を見学して、妖怪たちと話をしたりしてから帰った。それは里に居た時のような優しさに溢れた雰囲気、和樹は久しぶりに自分がやりたかった事や目指していた夢を思い出していた。

塾を出て、これから昼でも食べようと車に乗り込む和樹。窓から倉田に手を振って別れの挨拶をしてから、運転席の公平の方を向いた。

「親父、ありがとうな。話してくれて、嬉しかった。」

「こつちこそ、ありがとう。まだ俺を親父と呼んでくれて、嬉しいよ。」

公平の言葉に、和樹は鼻の頭を搔いて少し照れながら小さい声で言った。

「…俺にとっては、最高の親父だよ。」

それは、車のエンジン音にすら消されそうな小さな声だった。公平の耳に届いたのかどうかは、定かでは無い。ただ…心なしか、アクセスを踏む足が勢い良くなっているような気がしなくもなかった。

そんな二人を見ながら、サタンは一人頷く。

『この分なら、二人とももう安心だな。…ま、後はアシユタロスの腕の見せ所や。あんじょう気張りや、アシユタロス！』

ここには居ない男に心からのエールを贈り、サタンは消えて行くのだった。



## 外伝2 女たちのはなし

これは和樹たちが海へ行っていた時の話。

人狼の里のシロは、この日も近くの滝で水浴びをしていた。何せ、とにかく暑い。連日の猛暑で里の者たちは皆グロッキー気味だった。

「やはり滝の水は冷たくて気持ちいいでゴザルなー。」  
滝壺の中から水面に飛び出すと、シロはそう言って髪を掻きあげる。顔にへばりついた長い髪を後ろにやると、シロは左手にサイキックソーサーを展開した。

「バレバレでゴザルよ。」

シュツと、草藪に向かってソーサーを投げる。その途端、大きな爆発音と共に数人の男たちの悲鳴が聞こえて来た。

「うわああ、痛い痛い！」

「なんでバレたのだ!？」

「三郎、お前の鼻息が荒いせいだ!」

「何を！尻尾振りすぎるお前のせいだ!」

何とも情けない事を喚いてる男たちに、シロは言い放った。

「さっさと行かないと、次の稽古で腕を切り落とすでゴザル。」

「くくくひひひひひひっ!」「くくく」

這々の体で逃げ出す男たち。その背中を見ながら、シロはため息をついた。

(この世界の里の連中も…弱すぎるでゴザルな。これでは神族たちの争いに巻き込まれたら皆殺しでゴザル。)

シロにとって、里の者が神族にひれ伏した前の世界の出来事は屈辱以外の何物でもない。思い出してムカムカきたのか、シロは何もない空間に向かって拳を振るった。すると…

バキィッ!

「痛あつ!?!」

飛び出して来た何者かにクリーンヒットする。見ると、そこには小さな霊波刀を作っている少女の姿が。

「あ、すまん、ちびシロ!わざとじゃないでゴザル!」

「ね、ねーさま強い…どいぢわる…」

それは、この世界のシロ。シロの妹分にして愛弟子のちびシロであつた。

シロがこの世界にやってきて初めにやったのは、人狼の里の掌握と彼らの強化であつた。それにはまず、鎖国状態にある人狼の里に襲撃をかけ、外には自分たちより強い奴らがいるという事という事を教えなければならぬ。シロは結界を強引に叩ききると、困惑する

里の男たちを次々と斬り伏せた。

里の男たちは、とにかく弱かった。この世界の父、犬塚八子と長老は流石に多少時間がかかったが、それでも十秒程度で倒せた。犬飼ポチという、前の世界で因縁のある男も居たが、論外だった。妖刀八房を持ち出し襲いかかってきたが、その八房を隙をついて奪い、丸腰になった所をボコボコにした。ポチは両腕を複雑骨折してしばらく刀を振れない身体となった。

そんな中…この世界のシロだけは多少良い動きをしていた。勿論、長老たちにも及ばないが、年齢の割に強かったのだ。シロは自分の素性を明かし、長老にこの里の人間を鍛えたいと告げた。

「拙者のいた世界では、人狼は下級神族に媚びへつらう飼犬に成り下がっていたでゴザル。この世界も、こんな低い次元で満足しているようなら同じ道を辿るでゴザルよ。」

この発言は、里の男たちを刺激した。低い次元。これまで武人を自称してきた自分たちを馬鹿にしている…。男たちも、いつかこの女を力でねじ伏せてみせるといきり立った。勿論、貴重な女を逃がしたくないという理由もあり、シロはこの里に迎え入れられる事となった。

シロの稽古は…厳しかった。

人狼は類い希な超回復能力を持っている。絶えず限界ギリギリの修行をしてきたシロは、その回復能力の限界を良く知っている。里の男たちは命の危険を感じるレベルまで痛めつけられた。少しでも気を抜くと発勁の攻撃で内蔵を破裂させられるのだ。殺伐とした戦いを繰り返し、男たちは眠っていた闘争本能を呼び起こしていった。

シロの稽古は八子やポチをも対象としていた。シロにとっての父、犬塚八子は永遠に強者の象徴であり、だからこそあんなに弱い父の姿は受け入れられなかつたのだらう。プライドをズタズタに引き裂くくらい徹底的に叩きのめし、初心に戻って鍛錬するように告げた。

…人狼の里で、いつしかシロは畏怖の対象として恐れられるようになっていた。

しかしそんな中、この世界のシロ…ちびシロだけはシロを怖がらなかつた。勿論、未来の自分だと聞かされたからというのものもある。が、何よりその強さと美しさに憧れていたのだ。まだまともに稽古をつけて貰えない身だが、一分一秒でも長く一緒にいて、少しでも何かを吸収しようとしていた。

ちびシロはシロを姉と呼び、まるで付き人のような生活を送る事になる。それはシロ本人にとっても嬉しい事であった。いくら強くても、一人ぼつちはやはり寂しいのだ。

この日もちびシロは姉の水浴びする姿に見とれていた。なんて綺麗なんだろう。そして、引き締まった身体をしているんだろう。本当に将来自分もあんな風になれるのだろうか？男たちを撃退する姿を見ながらそう思っていた。

ちびシロは、自分もそろそろ稽古をつけて欲しいと思った。まだ未熟な霊波刀を出して、猛然とシロに向かって走り出す。そして…あえなく撃退された。

「ち、ちび！大丈夫でゴザルか！」

慌てて抱き上げてくれるシロに、ちびシロは少し鼻血をだしなが



ら言った。

「やっぱりねーさまは強いでござるな。まるで歯が立たないでござる。」

「全く、ちびはまだ焦らず基礎体力をつけてるでござるよ。ちゃんと鍛えると約束したでござるう?」

「でも…拙者ももっと構って欲しいでござるよ…。」

シヨボンとするちびシロを見て、シロは少し驚く。可愛い…。姉の気持ちとはこんなものなのか。

「な…なら、今日はちびと二人でお出かけでござる。一日一緒にいてあげるでござるよ。」

「本当でござるかーっ!?!」

途端に輝く顔。満面の笑み。これは…何とも言えない可愛さがある。シロはしばらく我を忘れて見とれていたが…

「…ねーさま、早く服を着た方がいいでござる。また見られてるでござるよ。」

…!

気づくと周囲に男たちの影が。

「うがー…!」

ズガアンツ!ドガアンツ!

「」「」「うびやあああっ!?!」「」「」

顔を真っ赤にしながらサイキックソーサーを乱れ撃ちするシロ、逃げ惑う男たち。それを見ながら、ちびシロは「やっぱりカッコ悪いかも」とつぶやいた。

その日、シロはちびシロをつれて和樹のいる神社へと向かった。ちびを紹介するという名目もあるが、ちびに外の世界を見てもらいたいという思いもあった。そして、何より…。

（公平殿には会わせておきたいでゴザルな。きっと、ちびが将来外に出る時力になってくれるでござるから…）

シロと公平は、知り合いだったりする。

シロが人狼の里に落ち着いてしばらくしてから、公平はサタンを宿してシロに会いに来ている。そこでGS試験に横島が出る事を教え、もう横島に会いに行つていいと告げたのだ。その際、あの日本語学校で教鞭をとるGSの女性を師匠として紹介した。名前は、阿部マリア。ある時は看護婦、またある時は先生、GSだったりもするその正体は…

サタンの相方だったりする。

キーヤンと呼ばれた最高指導者を宿す女性はGSとして活動する傍ら、サタンと一緒に日本語学校の講師をしていた。

公平と彼女の支援のもと、シロはGS試験に挑み見事資格を所得する。敗退の仕方は何ともアホだったが、あのシロが優勝出来なかったという事で人狼の里の連中の意識を外に向けるきっかけにはなった。

その後も、公平は魚釣りに出かけると言っては人狼の里によく来ている。そこで近くの溪流でシロと釣りをしながら近況報告などをしていたのだ。公平がよくボウズで帰ってくるのは、実は釣れた魚をシロに全部あげてるからだっったりする。

「前に言ってた、魚のおじちゃんの所に行くでござるか？」

「うむ。拙者の先生も居るでゴザルから、ちびにも紹介するでござるよ。」

シロに肩車されているちびが、嬉しくて身体を揺する。シロは苦笑いしながら言った。

「さあて、これから飛ばすでゴザル。しっかり捕まってるでゴザルよ。」

「え？わっ…きゃああああっ!？」

いきなり加速するシロ。超加速に匹敵するスピードで、山道や町の中を駆けて行く。目まぐるしく変わる景色を見ながら、ちびシロは姉の先生という人物と会つのを楽しみにしていた。

シロ達が天矢神社についたのは、里を出てから一時間程度経った頃だった。丁度、お昼少し前だ。ちゃっかり昼食をご馳走になろうかと、シロは社務所の受付へと足を運ぶ。すると、そこにいたのは…

一匹の狐だった。

容姿は、タマモそっくりだ。だが、以前公平にイツナという妖狐の存在を聞いているシロは、それがイツナだと察した。

「すまない、イツナ殿。公平殿が先生は居ないでゴザルか？」

シロが、狐に優しく声をかける。イツナは優しく、愛嬌があると聞いていた。タマモとは違うだろう。

「……………」

狐は、ジッとシロを見つめる。少し驚いているようにも見える。

そして、しばらくシロを見つめた後…

「フンッ…。」

そっぽを向いた。

「…イツナ殿、聞いては下さらぬか？」

瞬間的に頭にきたものの、そこはグツとこらえる。シロだって、もう大人だ。妹分もいる。ここは我慢しなければ…

「くはあ…。」

狐が、つまらなさそうに欠伸をした。

ブチッ

「貴様あああつ、下手に出ればいい気になりおつてええ！」

「ね、ねーさま落ち着いてー！」

いきり立つシロ、それを抑えるちびシロ。狐はガラス越しにそれを眺めながら少しご機嫌だった。そこへ…

「何事ですか、騒々しい！」

一人の女性がやって来た。小竜姫だ。シロは思わぬ人物の登場に驚き、そして…

「もう、タマモさん！ちゃんと人の姿で対応して下さいと言っただけではありませんか！」

「…いいじゃない、面倒くさいんだもの。」

懐かしい人物の登場に啞然とした。タマモ。かつてのライバルであり、喧嘩仲間。そして…最高の相棒だった存在。世界を渡ったと聞いていたが、こんな所で会えるとは。というか…

「なんでお前が先生と同居してるでゴザルかー！」

「反応する所間違ってるでしょー!？」

人の姿になったタマモに突っかかるシロ。小竜姫の雷が落ちるまで、二人の喧嘩は続いたのだ。...

社務所内、応接室に通されたシロは和樹と公平の不在を聞いてシヨックを受けていた。ちびシロも残念だったが、そのかわり武の神と謳われる小竜姫と出会えてご機嫌である。

「小竜姫様はここに住んでるでござるかー？」

「いいえ、今日はお留守番でここに居るんですよ。いつもは、ここから遠いお山に住んでいます。」

にこやかに、受け答える小竜姫。出されたジュースを勢い良く飲むちびシロを見ながら微笑んだ。

「ねえ、まさかアンタの子供じゃないわよね。」

「そんなワケないでゴザろう。拙者は先生以外の人間に身を預ける事は無いでござる。」

ムスツとしながら言うシロ。タマモは呆れながら言った。

「まだ諦めてないの…。あの姿見たら、和樹になってもアイツがルシオラって娘の事を想い続けてるっての分かるでしょ。」

「でも…追いかけて続ければきっと振り向いてくれるでゴザルよ…。」  
少しシユンとするシロ。ちょっと怖いストーカーかとタマモは口走りそうになるが、言わない。流石に今のシロが本気でキレたら怖いからだ。

そんな会話をしていると、それを聞いていた小竜姫が話に入ってきた。

「あら、和樹さんは前の世界で私と恋仲でしたし、恋愛には結構寛大ですよ？」

「「え…！」」

この声はシロとタマモだが、意味合いは違ってくる。シロは、何故小竜姫が先生と…という驚き。タマモは、なんで言っちゃうのよ面倒くさい…という落胆だった。

「それに、和樹さんは最近以前の横島さんに戻って来てますからね。誘惑したら結構良い反応してくれますし、チャンスはあると思いますけど。」

その言葉に、シロの目が燃える。ガシツと小竜姫の両肩をつかむと、真剣な表情で言った。

「その話、詳しく聞かせるでゴザルよ！」

あゝあ、聞いちゃった。自信無くすだけなのになあ…。タマモは可哀想な人を見る目でシロを眺めながらジュースを飲んでいた。ちびシロは相変わらずお菓子を勢い良く食べている。色気より食い気の方がシロらしいわよね、などと思いつながら小竜姫の話に耳を傾けた。

【小竜姫】

私とタマモさんは妙神山に暮らしてるんですが、ゲートでこの神社と繋いでいるので和樹さんと会う機会は多いんです。藤姫さんなんかは、クーラーが苦手なので暑い日は妙神山で寝てたりしますよ。和樹さんも、私との手合わせに付き合ってくれています。

和樹さんって私とルシオラさんの因子の影響を受けてかなり女性化してるんですが、私はその因子をある程度受け継いでからは少しずつ以前の横島さんに戻って来てるんです。まだ飛びかかって来てはくれないですけど、視線はちゃんと男の子してますね。胸とかお尻とか、たまに視線を感じますし。

以前から、藤姫さんが寝起きに悪戯してたんですが…和樹さん、積極的にアプローチすると顔を真っ赤にして恥ずかしがるんですけど、喜んでるのは確かみたいで、最近では起きてないふりして藤姫さんの胸に顔をうずめてるんですって。私も試しに手合わせの時に、稽古着の下にちよつと頑張った下着つけてワザと服をはだけさせたら、和樹さん隙だらけになっちゃって。もう日頃当たらない攻撃が面白いように当たって爽快でした。あ、話逸れましたね。

それでついこの間。私がヒヤクメとお風呂に入っていると、もの凄く微かでは在りましたが気配を感じたんです。もはや直感レベルの感知ですね。虫以下の小さな気配…こんなの、和樹さんしか出来ません。もう、嬉しくて涙が出そうでしたよ。すぐにヒヤクメに場所を探し出してもらって、私は裸のまま超加速で和樹さんを捕まえてお風呂の中に引きずり込んでやりました。

和樹さん、「わー！ちよつとした出来心だったんだ、勘弁してー！」ですって。そこは関西弁になってくれた方が横島さんっぽくて良かったんですが、それでも覗きをしてくれたのは大きな前進でした。え？その後ですか？…まあ、ご想像にお任せします。ヒヤクメ



にでも聞いてみて下さい。多分彼女、顔真っ赤にして逃げちゃうでしょうけど。

何にせよ、和樹さんはちゃんと女の子の好きな男の子です。シロさんがアプローチしたら、ちゃんとリアクションしてくれると思いますよ。世界を渡ってまで想いを伝えるのですから、和樹さんもきつと無碍にはしないでしよう。

大丈夫、彼、ちゃんと立派に男の子でしたから。

【小竜姫視点終了】

シロは…ガックリとうなだれていた。

(先生…先生、あんまりでゴザル…。拙者には全然手を出してくれなかったのに…)

口惜しいというより、情けなかった。自分には、魅力が無いのだから…。

「あ、あのね、シロ。アンタは充分美人だから。私が保証するから元気出しながら。」

「もう良いでゴザル。…拙者、旅に出るでゴザルよ…。」  
タマモのフォローも効果が無いようだ。席を立とうとするシロ。  
そんなシロに、タマモは思いついたように声をかける。

「ほら、思い出さない！アイツ、美神とかいろんな女性に飛びつ

いてたけど、みんな少しエッチな格好してたじゃない！きつと、アンタみたいな健康的な美よりも妖しい女の格好とかに惹かれる質なのよ！」

「ム…。それは、服装とかの問題でゴザルか？」

「そう！だから、アンタもそういう格好で迫ったらいいじゃない。きつと、アイツも目の色変えて喜ぶわよ。…小竜姫、アンタたくさんそういう下着買ってたでしょ。まだ着てないのシロにあげなさい。」

「えっ！何で私のを…」

困惑する小竜姫。それは困る、わざわざ通販で取り寄せた高級品なのに！そう言つと、タマモは見たことも無い恐ろしい表情で睨みつけた。

（アンタが余計な事言わなきゃこんな事にはならなかったのよ！）

そう言われたら仕方ない。まあ、実際少し自慢したかったのは確かだったのだ。小竜姫はシロにサイズを聞いて、それに合った物をあげる事を約束した。サイズは偶然にも殆ど変わらない。どちらもスレンダーで…慎ましやかな胸をしていたのだ。

タマモは、何とかシロの機嫌が直ってホッとした。こんな所で喧嘩なんてされたら堪らない。特に男絡みの喧嘩は散々経験しているだけに見るのも嫌だ。そう思いながら、ふと視線をずらすと…

椅子の上で寝息を立てているちびシロの姿があった。やはり、シロは子供の頃の方が可愛いな…。タマモは寝ているちびシロを撫でながら、そうつぶやいた。

さて、そんな事のあった日の夜。公平たちは海での騒動を終えて疲れきって帰ってきた。

「ただいまー。留守番ありがとうねー。」

ガラガラと玄関の戸を開けて和樹が声をかける。すると…

「お帰りなさいでゴザルー！」

「ん？…うわああっ！？」

ランジェリー姿のシロが、三つ指ついて出迎えた。

「ご飯でゴザルか？お風呂でゴザルか？それとも…」

最後まで言わせない。和樹は顔を真っ赤にして目を逸らしながら言った。

「ハウス！」

「あんまりでゴザルーーー！」

その日は夜遅くまで騒動が続いた。きっと、和樹が経験したこの夏一番長い一日だったに違いない。

## 特別編 お盆と夏の夢のはなし

暑く、眩しい日差し。

そこから中から聞こえてくる蝉時雨に、流れる汗を拭いながら陰念は空を仰いだ。

今年は何十年に一度という猛暑らしい。高齢者ばかりのこの村も、比較的涼しいとは言え熱中症などに気をつけないとすぐに倒れてしまふ。陰念はその対策の為に、この数週間ずっと村の水路を整備していた。

この村では昔、田んぼを沢山作っていた。人が少なくなり、人手が足りなくなると村の主流は田んぼから畑作へと移り、水をはる為の水路は埋められたり塞がれたりした。

陰念はそうした水路を復活させ、溪流の水をひいて流す事に成功していた。溪流からはホームセンターで買った資材でパイプを作り水をひいた。この作業は村の人間総出で行われ、気づけば村中に水路が張り巡っていた。

水の力は偉大だ。村の中を水が流れるだけで、体感温度はかなり下がっていた。田んぼを再生させる第一歩にもなり、皆は水路の完成を喜び村中を上げて祝っていた。

そんな矢先。

陰念たちは一つの別れを経験する。

いつも自分たちの世話をしてくれていたおばあちゃんが、天寿を全うしたのだ。89歳。人としては長く生きた方だろう。村の皆は

悲しみながらも、穏やかな表情でおばあちゃんを弔ってやった。

しかし、そんな中…羽居だけはおばあちゃんの死を受け入れられずにいた。

「で…おばあちゃんはいつ生き返るじゃん？」

その言葉に、陰念は不思議な顔をした。いえ、人は生き返らないんです。生まれ変わる事はあるかもしれないが…。陰念の言葉を聞いた羽居は、衝撃を受けて…塞ぎ込んでしまった。

神族や魔族は、死んでも時が経てば生き返る。かつて起きたハルマゲドンではかなりの数の神魔が死んだが、現在はその半分近くが生き返っているのだ。彼らは終わらない生の中で幾度となく争い、消えて行く。それが、この世界の神魔の常識であった。

だからこそ、羽居はショックだったのだ。死が…とてつもなく重く感じられた。そして、ハーピーだった頃に作戦で殺めた人間たちを思い出して怖くなったのだ。自分は、今までなんて軽い気持ちで人を殺していたのだ、と。

あばら屋から一步も出られないくらい、羽居は精神的に参っていた。陰念が抱きしめ慰め続けて、やっと最近になって食事が出来るまでには持ち直していたが…。かつての活発な姿は、そこにはなかった。

陰念は羽居の世話をしながらも、村人たちと協力して村の整備や野良仕事に励んだ。毎日毎日、必死になって村を駆け回る。それは、並大抵の事ではない。羽居を支え続けると決め、村を再生させると誓った陰念だからこそ成し遂げられた事と言えよう。

八月の中頃。羽居は何とか元気を取り戻し、陰念の仕事を手伝えるまでになつていた。今は、村の集会所でおばちゃん達と提灯や笠の修繕を行っている。これは、お盆の準備だ。

「所で…お盆つて何じゃん？この笠とか、どうするんじゃない？」  
羽居はお盆を知らない。皆が準備してるから何となく手伝つていたのだ。

「んー、簡単に言つとね。この時期に、死んだ人達が帰ってくるんだよ。」

「ご先祖様が戻つて来て、私たちの生活を見にくるのさ。だから、お迎えの準備をしてるの。笠は、盆踊りの為だよ。」

盆踊り…。何だろう、それは。そう聞こうとすると、不意に集会所の扉が開く。沢山のおじいちゃん達と、陰念が入ってきた。

「おー、ここは涼しいなー！」

「おつい、麦茶出してくれえ！」

ガヤガヤと騒々しくなる集会所。今まで作業していたおばちゃん達は、はいよ、と言つて麦茶を準備する。羽居もコップを出しに食器棚へと向かった。

女たちが席を離れている時。陰念はテーブルの上にある笠を見て質問した。

「盆踊りに使うんですか？なんかデカ過ぎないスか、これ。」

「ん？でもこれくれえデカくねえと横から顔見えちまうだろ。」

「これはよ、顔見せねえ為にデカいんだわ。」

おじいちゃんが手に取って、広げて見せる。扇形だった笠は、開くとかなり大きかった。

「陰念ちゃんは知らんかもしれんが、盆踊りつてのはよ、死んだ奴らと一緒に踊るもんなんだ。」

「顔隠して、帰ってきたやつらが混ざりやすいようにしてんだよな、この笠は。だから、顔見せちゃいけねえのさ。」

真夏だと言つのに、陰念の背筋が凍る。え、盆踊りってそんなものなのか？

「あの…それ本当に？」

恐る恐る聞くと、先ほど笠を開いたおじいちゃんがニコニコしながら答える。

「ああ、本当さ。この笠、確か六十以上あってよ。けど村のモンは五十も居ねえ。なのに毎年あぶれる奴が出るんだよなあ…。」

実は怖い話が大嫌いな陰念。勘弁してくれと涙目になっていると、麦茶を持ってきたおばちゃん達が陰念に声をかけた。

「信じちゃダメだよ、陰念ちゃん。この人、こうやってからかうの好きなんだから。」

「笠足りなくなんのは帰省してきた家族が被ってるからに決まってるんじゃないか。」

なんだバラすなよ、とおじいちゃんが言つと、集会所に皆の爆笑が響いた。ホツとする陰念。そんな中、羽居だけは真面目な顔をしている。



「おばあちゃん…来るかな。」

その言葉を聞いて、陰念は一瞬言葉をなくす。羽居さん…。どう応えていいか迷っていると、おじいちゃん達が代わりに答えた。

「おセイさんは祭り好きだから、絶対来るだろう！」

「盆踊り好きだったからなあ。」

「きつと、羽居ちゃんの事心配で来るんじゃないかねえか？な、陰念ちゃん！」

肘でつつかれ、陰念も答えた。

「そうですよ！きつと見に来ますから、元気な所見せて、安心させてあげましょう！」

そう言うと、羽居は笑顔になった。

「うん！じゃあ、私も準備、もっと頑張るじゃん！」

久しぶりに見た、羽居の笑顔。陰念は喜ぶと同時に、おじいちゃん達に感謝した。自分だけでは、こんな顔させる事は出来なかっただろう…。改めて陰念は、この村に住んで良かったと思っていた。

陰念たちはその後、休憩してから矢倉作りに入っていた。盆踊りの時に、この矢倉を中心に円を描くように回って踊るのだ。昔は太鼓を乗せて叩いていたため頑丈に作らなければならなかったが、今はスピーカーを設置するだけなのでそれほど手間はかけない。陰念はおじいちゃん達に色々と教わりながら、作業を進めて行った。

その作業が、終盤に差し掛かった時。夕焼けが真つ赤に景色を染める中、一人のおじいちゃんが陰念に声をかけてきた。

「あの、よ。昼の話なんだけだよ。」

「え…ああ、盆踊りの話ですか？」

「おう。あれな、結構馬鹿に出来ねえんだわ。」

そのおじいちゃんは、普段とは違って真面目な顔をして言った。

「羽居ちゃんが居る手前、冗談ですませたけどよ。陰念ちゃんには、ちゃんと言っておかねえといけねえと思ってな。…もし、本当におセイさんが戻ってきて踊ってたらよ、声は掛けねえでくれ。」

「え…。声、ですか？」

「ああ。声かけるとよ、連れてかれちまうって話があつてな。まあ、今までにちよくちよく出たんだわ。で、盆過ぎて往生する奴もいてよ。だから陰念ちゃん、念の為、覚えておいてくれや。」

陰念は、神妙な顔をして頷いた。なんだか分からないが、今の話は冗談には聞こえなかったのだ。

皆が作業を終え片付ける中、陰念は完成した矢倉の長く伸びる影を見つめていた。さっきまで何でもないような風景だったのに、少し恐ろしく感じられていた。カナカナカナカナ…と鳴くヒグラシの声に少しビクついて我に返った陰念は、手早く工具を片付けて撤収の準備に入るのだった。

その日の夜。あばら屋で陰念はいつものように羽居と一緒に夕食を食べていた。今日は二人で一緒に素麺を作った。簡単な料理だが、まだ料理自体をよく覚えていない羽居にとつて素麺でもかなりのチャレンジだったりする。今回は、うまく出来ていた。

「作るときは暑かったけど、食べる時は涼しいじゃん。陰念、この麺汁どうやって作ったじゃん？かなり美味しいじゃん。」

「ああ、それは鰹と昆布で出汁取ったんですよ。後は醤油とかです。レシピは松崎のおばちゃんに教えて貰ったのメモしといたんで後で見せますよ。」

陰念は、羽居が塞ぎ込んでいる間に家事全般をこなしていた。近所のおばちゃんたちに料理も教えて貰ったりしており、それは逐一ノートに書き留めていたのだ。今では大抵の料理を作れるようになっており、羽居に料理を教えたりもしていた。

「勘九郎や雪之丞も、こないだおばあちゃんの葬式に来た時驚いてたじゃん。陰念、料理上手って。」

「いやあ、いつの間にかこうなつてたんです。雪之丞は彼女に任せっぱなしで勘九郎は賄い付きだから料理する必要ないですからね。必要に迫られたら作れるようになりますって。」

言うてから、陰念はしまったと口を押さえた。今の言い方は羽居を傷つけないか…。しかし、羽居はにこやかな顔のまま陰念を見つめていた。

「私には、勿体無い彼氏じゃん。これから料理沢山覚えて、陰念を

楽しんでみせるから…待ってて欲しいじゃん。」

「羽居さん…。」

思わず涙ぐむ陰念。誰かに想って貰えるというのが、こんなに嬉しいものだとは知らなかったのだ。

「いいんですよ、急がなくて。俺、こうして二人で作る夕食が一番好きですから。」

きつと、この光景を見たら雪之丞たちは呆れるんだろうな、と陰念は思った。自分だって呆れている。こんな齒の浮くセリフを言うキャラじゃなかったのに。思わず苦笑いしてしまうが、羽居が幸せそうにしている姿を見て、まあいいかと思った。人間、生きてりゃ変わって行くもんなのだ。

「ああ、そう言えば羽居さん。明日の盆踊りはどうします？身体、まだ本調子じゃなかったら見てるだけにしときますか？」

「え？うくん…。踊り自体知らないから、今回は遠慮しとくじゃん。身体も、まだ重いし…。」

人間になったばかりの羽居は、やはり魂自体の霊力が強すぎる為に強烈な靈感を持つ人間となっている。故に、肉体が魂に追いつけずこうして体調を崩す事が多々あった。メフィストの話では、半年はこの状態が続くらしい。

「じゃあ、明日は俺が羽居さんの分まで踊りますよ。こう見えて、盆踊りは結構上手いんですよ？」

重い雰囲気にならないように少し冗談めかして言うと、羽居は楽しそうに笑った。ああ、なんだ。俺にも出来るじゃないか。陰念は羽居の笑顔を見ながら心の中でガッツポーズをするのだった。

翌日。

村はいつになく活気づいていた。

都会に出ていた家族たちが帰ってきていたり、この盆踊りの日に合わせておじいちゃん達の友人たちがやって来ていたのだ。この日、村の人口は1.5倍くらいに増えていた。ある者は溪流で遊んだり、またある者は虫取りをしたりと、盆踊りまでの時間を皆有意義に過ごしていた。陰念や羽居も、集会所に来た子供たちの相手をしたり楽しい時間を過ごした。そして…

日もすっかり落ちた頃。

矢倉のスピーカーから音楽が流れて来る。盆踊りがスタートしたのだ。こんなに人が居たのか、というくらいの人間が法被や浴衣を着て広場に集まっている。笠を頭に被って円を描くように矢倉の周りに散らばり、曲に合わせて踊っていた。

陰念は、集会所の脇で数人のおじいちゃん達と音楽の操作を担当する係である。踊りに行くのはローテーションで回そうと決めていた。今日は広場の周りに出店も出ており、羽居が差し入れに皆にかき氷を振る舞っていた。

「ただ踊るだけで楽しいのか疑問だったけど、皆本当に楽しそうにしていますね。」

踊ってる人たちを見ながら陰念が言つと、おじいちゃん達は笑つた。

「人が集まるだけで、楽しくなるんもんさ。久しぶりに顔会わすのもおるから、嬉しいんだな。」

「これ楽しみにしてる奴も結構いるんだよ。」

そんな会話を交わしていると、ふと羽居は不思議な感覚にとらわれた。

「陰念…。なんか、おかしい。変な感じ…。」

「羽居さん、大丈夫ですか？どこか具合悪くなりました？」

すぐさま陰念は反応して羽居の顔を覗き込む。顔色は…悪くはないが、表情が少しこわばっていた。おじいちゃん達も何事かと心配そうに見る。

「なんか…、異界みたいな感じ。人だけの空間じゃなくなってるじゃん。」

陰念も、気づいた。

まるで何かの結果が張られたような、感覚。この地域一帯が、別の世界のような異質な空気を放っている。その中心は、あの盆踊りの矢倉だった。これは…異界を作る為の儀式のような物なのだろうか？

そんな事を考えていると、突然羽居が声を上げる。

「おばあちゃん!？」

その声に、陰念は勿論おじいちゃん達も反応して踊っている人たちを見た。

「は、羽居さん、どこですか!？」

「あの、黄色い着物着た女の人の後ろ!ちょっとだけ、口元が見えたじゃん!」

まさか、とおじいちゃん達は顔を見合わせる。

顔を見せないで踊っていると、手振りや身体つきしか見えない。

そこに、誰かの姿を投影するからあの怪談じみた話が生まれたのだ。本当に故人が現れる事は無いハズなのだが。しかし…

「う…うう…おばあちゃん、おばあちゃん…っ!」

羽居は、ボロボロと涙を流す。その涙は本物だった。羽居は、知らず知らずに矢倉の方へ向かって歩き出していた。

「は、羽居ちゃん、駄目だ!」

「いかん、行っちゃなんねえって!」

あの噂を思い出して慌てて止めるが、まるでその声が聞こえないかのように羽居はフラフラと歩いて行く。そんな羽居の前に、陰念は立ちふさがった。

「陰…念?何で、止めるじゃん…?」

「羽居さん、忘れ物ですよ。」

陰念の手には、笠が二つ。

「一緒に行きましょう。声は掛けちゃ駄目らしいけど、一緒に踊るのはいいみたいですから。」

そう言って、笠を羽居に渡す。大丈夫、ちゃんと無事に戻るからとおじいちゃん達に合図をして、陰念は羽居の手を引いて踊りの輪へと入っていった。

陰念は、おばあちゃんと思われる人の近くに入ると、羽居に踊りを見せる。

「俺の真似してくださいね。」

周りに合わせて踊り出す陰念。羽居も見様見真似で身体を動かす。元々歌や踊りを得意とするハーピーだった羽居は、すぐにその動きを覚えた。

音楽が流れる中、二人は踊る。チラチラと人の間に見え隠れするおばあちゃんは、顔こそ見えないが楽しそうだ。言葉を交わせないけど、今、確かにそこにおばあちゃんがいる。暖かい、優しい匂いがしたような気がした。

（陰念、おばあちゃん、踊ってるじゃん…）

（ええ。やっぱりあの話、本当だったんですね。）

目だけで会話する二人。それは、おじいちゃん達も同様だった。

「なあ、おセイさんだな。」

「ああ。腰曲がってんのに無理する所とかそっくりだわ。」



「いや、それより陰念ちゃんだ。ありゃ正吉の生き写しじゃねえか…」

「ああ、似てるとは思ってたが…。」

驚いている理由の一つは陰念だった。おばあちゃんの弟の正吉にそっくりだったのだ。おじいちゃん達は、その光景に在りし日の姉弟の姿を見ていた。世話好きな姉と、やんちゃな弟。自分たちを引っ張って村中を駆け回ったガキ大将を思い出し、思わず目頭を熱くした。

その頃、陰念自身も不思議な感覚を覚えていた。

（あれ、なんか身体が勝手に動いてるような。それになんか眩しくねえか？）

矢倉が光を放っている。皆はそれに気づいていないのか、普通に踊り続けていた。これは…なんだ？

「い、陰念！怖いじゃん！」

羽居も異変に気づいており、踊りをやめて陰念にしがみついた。

光はそのまま強くなっていき、周囲を真っ白に染め上げる。

「大丈夫です、しっかり捕まっています！」

肩を抱く陰念。辺りははいつしか白一色となり、二人はそのまま世界に溶け込んで行った。

気づくと、陰念は日差しの照りつける田んぼのあぜ道に立っていた。周りには、家がぼつぼつと建っているだけ。山の位置や地形で村だと分かったが、何だか風景がまるで違った。

(ど…どうなってるんだ?)

困惑する陰念。すると、すぐ隣から羽居の声がした。

(い、陰念…私たち、この男にとりついてるじゃん!)

なんと、自分の身体だと思っていたのは陰念に良く似た少年だった。意識は二つ。陰念と羽居、二人の意識は同じ身体の中にあっただのだ。そして、さらに…

(え、あれ、勝手に動いてるし!)

身体は勝手に動いていた。これは取り憑いてるといふより覗いてる感覚に近い。

(どうなったんですかね、俺たち…)

(何かの術式が展開されたのは、確かじゃん。けど、こんなん状態じゃどうしようもないじゃん。)

意識だけあっても身体が動かせないのなら意味は無い。二人はとりあえず憑いたまま、事の成り行きを見守る事にした。

少年は、どうやら釣りの帰りのようだった。竹竿を片手に持ち、もう片方の手には餌の入った小さい袋を持っていた。ただ：妙に拳動不審である。さつきから、やたらと周囲を警戒していた。そこへ…

「こらー！正吉待ちなさい！」

「うわあ、姉ちゃん！」

大きな声が聞こえて来た。驚く少年。呼ばれた名前を聞いて、陰念たちも驚いていた。

（正吉つて、おばあちゃんの弟ですよね？）

（じゃあ、姉ちゃんつてまさか…）

田んぼのあぜ道を走ってくる一人の女の子。少年は大体10歳くらいだが、女の子はそれより少し年上で中学生くらいだった。お下げに結わえた髪が可愛らしく、つぶらな瞳が印象的な可憐な少女。あのおばあちゃんにどこことなく雰囲気似ていた。

「またアンタ三枝さんとこの鯉釣ろうとしたんだってな！いい加減にしなないとその竿へし折るぞ！」

「い、いやだ！この竿だけは駄目だあああ！」

…可憐なのは外見だけなようだ。陰念と羽居はそのパワフルな声と発言内容に驚き、本当にあのおばあちゃんかと疑う。しかし、その眼差しの暖かさは確かにあのおばあちゃんのもだった。

「ヤス君やケン君はアンタに無理矢理つきあわされたってね。人様に迷惑かけるなって言っただろう？」

「だって、溜め池で釣りすんなって言うんだから仕方ないだろ！あつちゃん所沢山鯉いるんだから一匹くらい…」

バキィッ！

少女の拳が炸裂する。

「口で言って分からないんなら身体に分からせようか。」

ドスの利いた声で言うと、さすがに少年も黙り込む。この声は怖い。陰念と羽居も震え上がっていた。

少女は少年の耳を引っ張ると、そのまま来た道を戻る。泣きながらゴメンを繰り返す少年。その光景を見ていると、また周囲の景色が変化して行く。

（これ、記憶じゃん。多分この正吉って子の記憶を、追体験してるじゃん。）

（何故、こんな事に…？）  
（分からないけど…もしかしたら、あの会場に正吉も居たのかもしれないじゃん。正吉の仕業…かもしれないじゃん。）

羽居だって分からない。が、確かにあの時矢倉を中心に何かの術式が展開された。そして今このような現象が起きているという事は、正吉が自分たちに何かを見せたいのではないか…。なんとなく、そう思ったのだ。

羽居の想像は、当たっていたようだ。

陰念たちは、それから様々な光景を目の当たりにしていった。友達を連れて山を駆け回る正吉。傷だらけで帰って来た正吉に文句をいいながら消毒薬を塗る姉。虫相撲で遊ぶ正吉、虫が嫌いで逃げ回る姉。それはのどかで、平和な時間だった。陰念と羽居も、それを見ながら楽しそうにしていた。

しかし、時が過ぎて成長するに従って、その記憶に影が宿るようになる。…戦争だ。村から大人の男の姿が次々と消えて…残された村の人達から笑顔も消えて行った。そして、ついに正吉の元に召集令状…赤紙が届いた頃。その記憶の旅も終わりに近づいてきていた。

正吉の最後の記憶は、村から少し離れた沢での光景から始まった。そこには、陰念そっくりな青年となった正吉。そして、美しい大人の女性となった姉の姿があった。

「ここ、俺の一番好きな景色なんだ。」

正吉が口を開く。姉は、どこか沈痛な面もちで俯いていた。

「お盆になれば、蛭で一杯になるからな。姉ちゃん、虫が嫌いだから嫌がるかもしれないけど…。俺が向こうに行ってる間、代わりに見てくれねえかな。」

「…いやだ。はよ帰って来て、自分で見ればいい。戦争から、ちゃんと帰って来て、自分で…」

そこまで言って、声を詰まらせた。必死で涙を堪えている。正吉は苦笑いをしながら姉の背中を撫でた。

「分かった。約束するよ。ちゃんと帰って来て、自分で見るさ。そ

の時は、姉ちゃんも一緒に見ような？本当に、すごい綺麗なんだから。ここ一面、キラキラ輝くんだよ。」

楽しそうに語る正吉。姉はやっと、笑顔を見せて言った。

「そんな人相悪い面して綺麗好きなんだから、人間って分からないもんだわ。」

「それ家族に言う事か！」

二人で笑いあう。それは、端から見たら楽しい姉弟の姿にしか見えな。けれど陰念たちはその結末を知っている。きっと、目の前の二人も予感しているのだろう。二人の笑顔は儂くて、それこそ今にも消えてしまいそうな蛍火に似ていた。

どれくらい、そうしていただろう。

沢を流れる水音だけはそのままに、辺りは暗くなっていた。正吉は居ない。姉の姿だけが、そこにある。これは…正吉の記憶ではないのだろうか。

(陰念、これ違う。おばあちゃんの記憶じゃん。)

(おばあちゃん…何やってんだろ…)

沢に足を浸し、姉は歌をくちづさんでいた。それは、とても小さな声で聞き取れないが…その唇の動きで、羽居は察した。

ほ…ほ…ほーたる来い…

それは、蛍を歌った民謡だった。一人で姉は、そこにいた。それはとても悲しく…切ない姿だった。闇の中、ただ水音だけが響く。

そこに蛭の姿は無かった。

(こんなの…あんまりじゃん。おばあちゃん、可哀想じゃん！)

(羽居さん…)

陰念も、何と言っているのか悩む。自分だって辛いのだ。何故死にしまったんだ、正吉！ここには居ない自分によく似た男に怒る陰念。すると、それまで水に素足を浸していた姉がこちらを向いた。

「ありがとうね、陰念ちゃん、羽居ちゃん。」

(おばあちゃん!?) ( )

目を見開いて驚く。何故、こちらが見えてるんだ!?

「年寄りの思い出話に付き合ってくれて、ありがとうね。お盆にまた村に帰ってきたら、どうしても思い出しちゃってねえ…。私、結局あの子と蛭を見る事出来なかったから。」

少し悲しそうにする姉。それでも、どこかスッキリした表情をしていた。沢の様子を確認できたからかもしれない。

「陰念ちゃん、羽居ちゃん。一緒に踊ってくれてありがとう。私はもう行くから、二人も帰りなさい。また来年、会えたらいいわね。」

そう言って、姉はこちらに背を向けると沢の向こうへと歩いて行く。いやだ、もっと話したいのに！羽居は必死にもがくが、意識しかない今の状態では何も出来ない。二人は、歪む世界に飲み込まれながら必死におばあちゃんの姿を探し…そのまま気を失った。

二人が意識を取り戻すと、そこは盆踊りの会場だった。ちょうど曲が終わった所で、周りは休憩に入ったのかガヤガヤとしていた。

「陰念、おばあちゃんは…?」

「いや…居なくなりました。」

おばあちゃんらしき人影が踊っていた場所には、それらしき姿は無い。きつと、もう行ってしまったのだ。二人は肩を落として残念がった。

「おーい、大丈夫かあ!」

そんな二人に声をかけるのは、あのおじいちゃん達だ。今なら、羽居も陰念も彼らの名前が完璧に分かる。ヤス、ケン、ヨウ、あっちゃん。正吉の子分たちであった。

二人は心配させまいと元気良く手を振ると、また集会所脇へと戻って行った。そして、皆に今起きた事を話す。最初は奇妙な顔をして聞いていたが、釣りや山で遊んだ光景を話すと流石に驚いた顔をした。

「ああ、そんな事もあったなあ!あれ三枝さんとこの鯉って結局正吉が釣り上げたんだか?」

「いや、正吉はタニシを餌にしたから釣れなかったんだよ。実際はヘラブナ用の練り餌で俺が釣ったんだ。」

「ありやお前の仕業だったのか!正吉がやったとばかり思ったんだがなあ!」



思い出話に花が咲く。

しばらくそんな話をしてから、おじいちゃん達は少し悲しそうな顔をしてため息をついた。

「しかし、蛭なあ…。最近は何多に見なくなっただわ。」

「ああ、居るには居るらしいけど、見なくなった。何年前に産業廃棄物とか山に捨ててた連中もいたから、それも原因の一つかもしれないなあ…」

「おセイさんは可哀想だが、蛭をあの沢で見るのは厳しいな。もう少し綺麗な上流ならまだしも…」

おじいちゃん達の話では、もう何十年もこの近くで蛭を見ていないという。これじゃあ、おばあちゃんが可哀想だ…羽居は困った顔で陰念を見る。陰念は…何でもないような顔をしていた。

「昔はこの近くでも見れて、上流にはまだ居るんでしょう？なら、諦めず頑張っていれば戻ってきますよ。もっと周りを整備して、自然を綺麗に保っていれば、きっと…」

陰念にだって確証など無い。何故蛭が来なくなったのかも分からないし、それはこれから調べないといけない事だ。ただ、これは直感でそう思ったのだ。このまま頑張っていれば、きっと村は蘇るし蛭だって戻ってくる。陰念はそう信じていた。

「俺が、絶対おばあちゃん達にあの沢で蛭を見せてやります！だからみんな、信じてついて来てくれませんか！」

その言葉に、おじいちゃん達は頷いた。その姿は、本当にあの正

吉の姿だった。自分たちを引っ張り回し、そして沢山の素晴らしい思い出をくれたガキ大将。その力強い目を見れば、自然とやる気がわいてくるのだ。あの時の仲間が揃っているなら…不可能なんて無い。

「乗ったぜ、陰念ちゃん。おセイさんの為にも、いつちよやったるか！」

「俺もやるさ。あの二人にはお世話になったもの。」

「お前はおセイさんに惚れてただけだろうが！」

「言っなよう。」

ゲラゲラと笑うおじいちゃん達を見ながら、羽居は心強く思っていた。何だかわからないが、この人達はきっと成功させる。そう思わせるパワーがある。おばあちゃん、待っててね。きっと、正吉との約束を果たさせてあげるから！

盆踊りはその後も続いた。

陰念たちは音楽を流す係に戻って、今度はおじいちゃん達が踊っている。羽居は出店で食べ物を買って来て、陰念とそれを食べながら踊ってる人達を楽しそうに見ていた。

あの術式は…もしかしたら、この村の人達を作ったものなのかも

しない。

お盆には、死んだ人達が帰ってくる…。故人に会って、また一緒に過ごしたいと思っただけ何十年と踊って来た『場』に、いつしか想いが積み重なって一つの術式を作っていたのではないか…。羽居はそんな気がしていた。それは、とても優しく…。儂い夏の夢のようなものだった。

そんな事を考えていたら、ふと、どこからともなくコロコロと可愛い音が聞こえてきた。盆踊りの音にかき消されそうなくらい小さい音だったが、確かに聞こえてくる。これは、何だろう？

「凄いな、ここでも聴けるんだ。」

陰念も気づいたらしく、驚いた顔をしている。

「陰念、これ何じゃん？可愛くて好きじゃん、この音。」

「ああ、これはカジカガエルの鳴き声ですよ。前、上流行った時に聴いたんですけどね。水の綺麗な所にしか居ないんです。」

そう言ってから、陰念はニコツと笑った。

「羽居さん、きっと蛭は戻ってきますよ。カジカガエルがいるような場所なら、蛭も生きていけるはずですから。」

「陰念……。」

少し涙ぐみながら、羽居は頷いた。

二人は微かに聞こえるカエルの鳴き声に耳をすませながら、目を

閉じる。目蓋の裏に映し出されるのは、あの二人が約束を交わした  
沢の光景。無数の蛍が飛び交う中、姉弟が楽しそうにそれを眺めて  
いた。

ほ・ほ・ほーたる来い

羽居と陰念の耳に、二人の歌声が聞こえたような…そんな気がし  
た。

## 第四十六話 龍虎相打つはなし

その日、事務所に久しぶりに出勤したタイガーは、内心かなりビクつきながら雇用主である小笠原エミの前に顔を出した。約束である三週間がたったのだ。タイガーとしては、自分の進退が決まる重要な日。ゆかりも人形大のサイズになってカバンの中に入っていた。

「エミちゃん、その…ワツシの勤務なんジャけど…。」

つい昨日までの頼もしい姿はナリを潜め、オドオドと切り出す。今のタイガーに勝てる人間など殆ど居ないほど強いのに、やはりエミ相手だと萎縮してしまうのだ。もしかしたら、クビなのでは。そう思っただけエミを見ると…

「あら、元気そうね。その分なら、またバリバリ働けるワケね？」

やけに明るく返すエミ。あれ？

「エ、エミちゃん、ワツシはクビでは無いんですかいノー？」

「…はああ？」

今度はエミが不思議な顔をする。何故クビなどと言う言葉が飛び出してくるのか分からない。しばらく二人が奇妙な顔をしていると、見かねたゆかりがカバンの中から這い出して来た。

「タイガー、私が説明するぞ。」

「な、なんなワケ、あんだ!？」

そりゃあ驚くのも無理はない。パツと見、日本人形みたいな妖怪

がカバンの中から出てきて口をきいたら大抵の人間はビビるだろう。そんなエミに、ゆかりは動じず挨拶をした。

「私は座敷童子のゆかりと言う。タイガーに助けられ、自由となった。まずは、私から説明させてもらうが構わないか？」

その堂々とした態度に呆気に取られながらも、エミは頷いた。座敷童子？助けられた？疑問符ならいっぱい頭の上に浮かんでいるが、今は話を聞いた方が良さそうだ。

「まず…タイガーは突然長期の休みを貰って混乱して、クビにされると思ったらしい。」

そう言うと、エミは心外だと言う顔をする。ゆかりはそれを見て、やはりタイガーの早とちりだと得心した。マヨイガや春樹の家に居た時にタイガーの話を聞いていたが、その話を聞く限り、このエミと言う人間がそんな冷たい人間には思えなかったのだ。

「…とにかく、勘違いしたタイガーは傷心旅行に出たらしい。そこで、私の住むマヨイガという所に迷い込んだ。私はある村の人間に閉じ込められていたらしく、タイガーはそこから助け出してくれたのだ。」

「ちょ、ちょっと待つワケ！タイガー、あんたどこでマヨイガに迷い込んだワケ？」

エミの顔に驚愕の色が。まさか、とタイガーを見る。

「それが…64号線に乗った所までは覚えてるんジャが、そこから分からんですケン。適当に走っとったら、迷い込んでしまったんジャー。」

ガツクリとうなだれるエミ。少し前に、指名手配されていたGSの犯罪者や行方不明の死体が見つかった事で世間の注目を浴びていた村：奥幸村の事に間違い無い。オカルトGメンの要請で、呪術に使われた呪符などの鑑定を頼まれたから分かる。村人の証言から、童神様が出て行ったと聞いて気になっただけだったが、その時は詳しく調べる事が出来なかった。なら、あの虎の化け物というのはタイガーの事だったのか！

「そして次に、タイガーは私を海に連れて行ってくれたのだが、ここでマーロウという犬と春樹という人間と会う。彼らと協力して犬の妖怪や神社で暴れる幽霊、海で歌う妖怪達を退治したな。」

もう、エミの頭はパンク寸前だ。マーロウ：GS界では知らぬ者の居ない最高のGS犬。そしてその飼い主といえば六道の誘いを断ったGSとして有名だった。そして、犬の妖怪は知らないが、神社の幽霊なら唐巢神父から聞いてはいた。海の妖怪も、美神ひのめから聞いている。しかし…この三週間、どれだけ濃い時間を過ごしてきたのか…。

「それで…タイガーは私を保護する資格をとる為、GS試験を受けたいと言っている。それに先立って、今日は自分の処遇を聞きに来たという訳だ。もしクビなら、マーロウが師匠として名前を貸すと言ってくれているからな。」

タイガーは怒られると思って、目をつぶり縮こまっている。勝手に話を進めたり、他のGSに協力を求めたりしたら…怒られるに決まっているのだ。裏切りと受け取られても仕方がない。しかしエミは怒りもせず、そんなタイガーを見て少し悲しい顔をしていた。

唐巢や美神から伝え聞いたタイガーは、とても力強く頼もしい存在として語られていた。しかし、今日の前にいるタイガーはどうだ。緊張して、顔色を伺ういつものタイガーだ。そうさせる原因は…確実に自分にある。いつも叱りつけたりしていたから、自分の前では自信を無くしてしまっているのだろう。エミはこれまでの自分の行いを省みて、反省していた。

その様子を、ゆかりは注意深く見つめる。このエミという女性は、きつと真面目で不器用な人間なのだろう。なら、自分が助け船を出してやるうか。

「タイガーはな、お主に拾ってもらえて幸せだと言っていた。だからこそ、何も恩を返せていないのにクビになるのは辛いとも言っていたぞ。タイガーの頭の中は、いつもお主の事ばかりだ。」

「ゆ、ゆかりちゃん、何故言ってしまうんジャー!？」

顔を真っ赤にするタイガー。恥ずかしくて涙目になっていた。その様子を見て、エミは少し安心する。良かった、少なくとも嫌われではない。そんなワケないとは思っただが、厳しい言い方をして傷つけていたら、失望して出て行ってしまいかもしれないのだ。実際、それで辞めた人間は今まで何人もいた。

「タイガー。とりあえず言っておくけど、あんたは私が見つけた宝なワケ。この事務所の主力だし、勝手に出て行くとか許さないワケ。」

「え…ワツシが？」

思わぬ優しい声に驚く。それに、宝？そんな事を言ってくれたのは初めてではないか。



「それと…あなたの活躍は、唐巢神父やひのめからも聞いてる。ここでの活躍も期待してるから、また今日から頑張ってる欲しいワケ。」

「エミちゃん…」

感動で前が見えなくなっているタイガー。何度、こう言ってくれるのを夢想した事か。やはり褒めてもらえて一番嬉しい人は、エミだった。

エミは、思い出したように机の引き出しに手を入れると、そこから書類の入った封筒を取り出す。そこらタイガーの名前と、GS試験の文字が。

「あなたならすぐに立ち直って試験を受けられるだろうと思って用意してたワケ。…というか、休み前に説明してたハズだけど、聞いていなかったワケね？」

「す、すまないんジャー…。けど、本当に出ていいんですかいノー。ワツシは、前回一回戦で負けたくらい弱いのに…。」

タイガーは、未だに自分が弱いと思っている。前回早々にやられた事と、横島の恐ろしいまでの強さばかりが印象に残っており、それに比べたら…と自信を失ってしまうのだ。

身体の傷が治っても、心までは中々回復しないものだ。エミは仕方なく、携帯電話を取り出すと美神の事務所に電話をかける。こうなったら、荒療治だ。

「タイガー、今から少し身体を動かすワケ。」

「…え？」

なんの事が分からないタイガー。ゆかりは…ニコニコとしていた。何が起きようと、タイガーなら大丈夫と信じているのだ。エミが通話をしている間、二人は対照的な表情でそれを見ていた。

さて、ここは和樹の居る天矢神社。社務所には和樹と公平、そして何故か横島がいた。

「そこを何とか！もう一越え！」

「アホか、これ以上下げたら相場が崩れるわ！」

横島は今、破魔札の買い付けに来ていた。現在、厄珍堂は営業停止処分を受けている。自然と、破魔札の買い付けはこちらになるのだ。

「和樹、友達価格でもいいじゃないか。」

公平が言うものの、和樹はガンとして首を縦に振らない。

「駄目だ、コイツ図に乗るから。一度味をしめると何度も来るぞ。下手したら転売して儲けかねない。」

「どんだけ信用ないんだ、俺は！？」

といいつつ、否定は出来ない。実際、事務所が金に困ったらそうしようと思っていた。未だに美神事務所は安定して仕事を受けられない状態にある。今までは母の口効きでGS協会から仕事を回して貰っていたが、今はそれを断っている。母に対してカッコつけた結果だ。横島は横島なりに事務所を心配して、多少セコい真似をしてでも美神を助けようとしていた。

「第一…お前、文珠作れただろ？あれが使えたら金使わずに済むだろうに。」

「いや…それが最近うまく行かぬーんだよな。」

横島は試しに右手に靈気を収束させるが…球を形作った途端、煙のような物がそこから吹き出した。

「あぶねっ！」

慌ててそれを和樹が握る。手の中で球は小さく爆発し、消えていった。

「馬鹿、社務所吹っ飛ばす気か!？」

「わ、悪い。けど、そんな感じで失敗するんだよ。こっちは、平気なんだけどな。」

そう言うと、次に横島はサイキックソーサーを展開するそして、それに文字を入れた。

「和樹、ちよつとごめんな。」

「は？」

言い終わらない内に、横島が和樹に向かってソーサーを投げる！いや、目の前だから叩きつけるが正解か。不意をつかれた和樹は避

ける事すら出来なかった。

ドガァン！

「うわっ！何を…！？」

痛みは無い。が、何か妙な感覚だ。靈気の煙に包まれながら、和樹はケホツケホツとむせる。やがて煙が晴れると、そこには…

「てめー！何するにやん！」

猫耳の生えた和樹がいた。

「わはははははははっ！」

爆笑する公平。これは可愛い。

「まあ、そう言う事なんだ。」

「わ、ワケ分からにやいし！にやんだよコレは！？」

自分の姿を手鏡で確認して焦る。まるで猫又だ。

「いや、文珠って余程集中しないと出来なくてさ。戦ってる最中に成功した事はあるけど普段は全然駄目なんだ。で、仕方ねーからソーサーに文字入れてみたんだよ。因みに今は『猫』って入れたけど、威力は半減して中途半端に猫化しただろ？あまり実用的じゃないんだよな。これだと所長は使えないし…」

真面目に困ってる様子の横島。言いたい事は山ほどあるが、今は我慢しよう。和樹は気を取り直して話を続けた。

「確かに文珠に頼ってたら美神さんは成長しにやいよな。いつもお

前が近くにいるとは限らにゃいし。…仕方なにゃい、なら今回だけ多少安くしてやるにゃん。」

そう言う和樹の隣で肩を震わせる公平。横島は真面目な顔で和樹を見つめた。

「和樹、これからその姿で生きて行かないか？」

「ふざけるにゃん！」

ニヤー！と憤るも、全然怖くなかった。

…その時。

ピンポーン

社務所の呼び鈴が鳴らされる。猫化した和樹の代わりに公平が出ると、そこには小笠原エミと美神ひのめ、タイガーとゆかりの姿があった。

「ごめん下さい、ウチの横島がこちらに伺ってると思つのですが…」  
公平相手なので、大人の口調になる美神。忘れがちだが、彼女は成人した立派な大人なのだ。

「はい、来てますよ。おーい、横島君ー！所長さんがお迎えに来たみたいだぞー！」

奥の部屋に声をかける公平。しばらくしてから、パタパタと小走りに横島が現れた。

「所長、お待たせしました愛してます！」

バキイツ！

「挨拶代わりに盛るのはよすワケ。」

社務所の受付窓から飛び出して美神に抱きつかうとした横島を、エミが叩き落とした。地面に這いつくばる横島。そこに、美神がしゃがんで話かける。

「あのね、横島君。タイガー君の練習に少し付き合っただけなのよ。」

「練習… ツスカ？」

首を動かして、美神を見る。すぐ目の前のジーンズのミニスカートから、淡いピンクの布が見え隠れしていた。これは… 良い！

「タイガー君がね、次のGS試験に出るの。その前に、ちょっと手合わせしておきたいんだって。」

「ほうほう。」

「タイガー君って自分の実力が良くわからないんだって。だから、横島君が相手をしてあげて欲しいの。」

「なるほどなるほど。」

「横島君は前回のチャンピオンだし、こういうの… って、横島君？」

一向に起き上がらない横島。何だろうとその視線の先を追って…

火を放った。

ポオオオオッ！

「あ、熱い！燃えるような恋！？」

「炭になってしまえばいいワケ。」

呆れてジト目をするエミ。本当にコイツが優勝したのかと思ってしまう。

そんなやりとりをしていると、ふと、ゆかりが口を開いた。

「ここは、和樹の家なのだろう？和樹はどうしたんだ？」

「ああ、アイツなら…今はそっとしておいてやってくれ。」

応えたのは公平だった。和樹は恥ずかしくて出て来れない。今はきつと、自分の身体を元に戻そうとしているハズだ。

そして、それは当たっていた。当たっていたのだが…

「く…クソツ！何で戻らないにゃん！？コレじゃ時間経つのを待つしかないにゃん！」

文珠で戻ろうとしても戻らなかった。どうも…効果にロックをかける事が出来るらしい。なんて傍迷惑な…と横島を恨みつつ、和樹は社務所の奥の部屋で試行錯誤を繰り返していた。

手合わせは、買い物から戻ってきた藤姫の立ち会いのもと行われる事になった。二人がもしエキサイトしたら、和樹以外では藤姫く

らしいか止められる者がいないからだ。一緒に帰って来たユリ子とイヅナは…何故か、社務所に入ったきり出てこない。時折、猫の悲しそうな鳴き声が聞こえてくるばかりだ。

「じゃあ、無制限一本勝負で行くよ。純粹に格闘技術を見たいから、幻術と文珠は無しだよ。」

境内の真ん中、広くなっているスペースで向かい合う二人に、声をかける。横島は流石に余裕の表情だ。優勝者というのもあるが、横島はタイガーの成長を直に見ていない。幻術を使った所しか見ていないのだ。そして、今回はその幻術を使わない。負ける事は無いだろうと思っていた。

対するタイガーは、緊張しっぱなしだ。無理も無い、あの決勝は半端じゃなかった。モニター越しですら恐怖を感じていたのだ、直に戦うなど…

その時、ゆかりがタイガーに声をかけた。

「タイガー。お前には私がついている。運はお前に味方するハズだ。それに、後ろにはお前の好きな女が居るのだ。男なら、守ってみせろ。」

「守る…」

もはやこれは暗示に近い。守る、という言葉聞いた途端、タイガーの身体から震えが止まった。そして、その顔に気迫が漲ってくる。

エミは…目を丸くして驚いていた。



何という、男らしい表情をするのか。いつもうつむいて暗い顔でオドオドしていたタイガーはどこに行ったのだろう。そこにあるのは、エミの知らない男。丸まっていた背をピンとして、胸を張って相手を睨みつけるタイガー寅吉の姿であった。

「何をしたワケ？あんなに変わるなんて…」

「私としては、こちらが普通なのだがな。むしろ、エミの前であんなタイガーに違和感を感じる。」

そう言ってから、ゆかりは笑った。

「きつと、エミにだけは嫌われたくなくて萎縮するのだろう。エミは、どうなんだ？タイガーの想いに応えてやる気持ちはあるのか？」

エミは顔を真っ赤にして焦る。私がタイガーと？冗談もほどほどに……そこまで考えて、気づく。自分は確かに面食いではある。しかし、今まで外見だけの男になびいた事は無い。むしろ、軽薄そうな成りをした男は警戒していた。避けてすらいた。

自分にとって、実は外見の良し悪しはそれほど順位が高くないのだ。どちらかと言うと、信頼できるかどうかで人の価値を計っている傾向がある。なら、外見以外でタイガーを見てみるとどうなるか…。

性格は、従順で大人しい。しかし今の姿を見る限り、やる時はやる男のようだ。自分に好意を持っているのは知っている。裏切るような頭も無いし、その点は安心出来るだろう。

実力はどうか。テレパスは元々使える能力だし、頑丈な身体もポイントが高い。唐巢や美神の話では、さらに声に霊波を乗せて攻撃出来るらしいし、攻撃の幅はかなりある。霊的格闘にばかり突出した横島と比べたら、タイガーの能力はかなりGS向きなのだ。

生活面や金銭感覚も、自分が躰ているから無茶な事はしていない。問題にしていた外見にしたって、こうしてキリツとしていれば、どちらかというところ格好いい部類に入る。コレは…

エミは困惑していた。考えれば考えるほど、タイガーは優良物件なのだ。否定する理由がない。あえて言うならまだ高校生という所だが、それは自分好みの色に染め上げられるという事でもある。

「う…なんか、ヤバいわけ。そういう目でなんか、見てなかったのに…」

知らないうちに、少女のように顔を真っ赤にしているエミを見て、ゆかりは隠れてガッツポーズをとる。

これでタイガーとエミの関係がうまくいけば、自分も事務所に居座る事が出来るだろう。タイガーの住んでる部屋は狭いので、ゆかりとしては広くて綺麗な小笠原事務所に寝泊まりしたかったのだ。これでタイガーとエミが恋仲になれば自ずとそうなるだろう、と見ていた。ゆかりは結構自分勝手なのだ。

そんなふうにはエミが悶々としてゆかりがほくそ笑んでいると、境内に藤姫の凜とした声が響きわたる。

「始めっ！」

対峙した両者はほぼ同時に靈気の鎧を身に纏い、相手に向かって駆け出した。

横島は驚いていた。別人のように自信に満ちたタイガーの姿もそうだが、靈気を身に纏った姿には衝撃を受けた。これは…ちよつと横幅のあるタイガーマスクだ。対する自分は宇宙刑事スタイル。ちよつとしたヒーローショーに見えなくもない。

開始の合図と共に正面から拳をぶつけ合った時。パツと見は互角だったが、実は横島の方がダメージを受けていた。これにはかなり焦る横島。タイガーの実力を、完全に読み誤っていた。

「やるな、タイガー！強くなったじゃないか！」

「ワツシだって、成長しとるんジャー！」

タイガーの攻撃が、雨あられのように横島に繰り出される。それを、横島は紙一重でかわしきった。

「でも、スピードはまだまだな。」

「又ツ！？」

タイガーは、一瞬理解出来なかった。横島の身体が少し止まったかと思うと、次の瞬間タイガーの背中に強烈な蹴りがヒットしたのだ。

ドガアッ！

「が、がはっ…！」

思わずフラつくタイガー。これは…なんだ！？

この横島の攻撃を見ていた藤姫も、実はかなり驚いていた。これは…超加速だ。

元々は韋駄天族の技である超加速は、藤姫は勿論小竜姫も使いこなす特殊な技である。そしてそれを使いこなすようになるまで、かなりの修行を要するのだ。それを横島は使いこなした。前々から無茶苦茶だとは思っていたが、ここまでとは…

横島は、文珠を使いこなせないと判断するや否や、代わりに他の能力を伸ばすように努力していた。そこで開花させたのが超加速だった。元々異様にすばしっこい横島。前の世界の横島は開花前でも加速状態の小竜姫に追いついてセクハラをかましていたが、この世界では前世が竜神族、そして天竜童子の竜気によってパワーアップしている。実際に超加速を使う小竜姫と戦ってその技の存在は知っているし、超加速に至る下地は出来ていたようだ。

「一気に決めさせてもらう！」

横島はもう一度加速状態に入る。今度は後頭部を狙って蹴りを入れてやろう。そうすれば、頑丈なタイガーだってひとたまりも無いハズだ…。そう判断した横島は、緩やかに流れる世界の中をタイガーの背後に回るべく動き出し…

「ガアアアアッ！」

ズガアアアアアン！

タイガーの雄叫びに吹っ飛ばされた。

「な、何で！？お前、今何したんだ！？」

「声で攻撃したんじゃー。音なら、スピードは関係ないですケン。」

何という反則技。いや、超加速も立派な反則ではあるのだが。横島は焦る。これが封じられたら、自分に残された技は普通に攻撃するくらいしか無い。小竜姫を撃退した霊気の針の雨にしたって、あのタイガーの鎧を貫けるとは思えないのだ。

「しゃーねえ…こうなったら俺も全力で行くか。疲れるんだよな、アレ。」

そう言うと、横島は手にサイキックロッドを展開する。対するタイガーは、霊気の鎧を変化させた。それは、あの牙の長い第二形態サーベルタイガー・モードだ。

「なんつー猛獣注意！？…やったるうじゃねえか、バターになつても後悔すんなよ！」

「望む所じゃ横島サン！マーガリンより味にコクがあるんじゃー！」

…横島も何気に微妙なネタを振る。そして、タイガーはそれを知らなかつた。奇妙な言葉を交わしてから、二人はぶつかり合…わなかつた。

「な、なんじゃ？」

横島は、いきなり逃げ出したのだ。

これには、その場にいた人間皆ポカンとしていた。あれだけ煽っておいて、それは無いだろう。

遠くで、横島の声がする。

「範囲は指定してないだろ！さあタイガー、俺に追いつけるかな！？」

「む！ワツシは負けないんジャー！今から行きますケン、覚悟するんジャー、横島サン！」

神社の裏山へと走って行くタイガー。やがて、その裏山から不思議な音が聞こえてきた。

ブウンッ！ズガッ！

ズボッ！ ヒュンヒュンヒュン！

ドカッ！ ザッパーン！

コロコロコロコロ…ドカーンッ！

…これは、トラップだ。

藤姫は、今更ながらに自分のミスを嘆く。こんな戦いをするとは思わなかったのだ。しかし、いくら世界は違えど横島は横島だった。

「はあ…。二人を止めてくるよ。格闘を見るって言ったつもりだったんだけどねえ…」

力無くつぶやく藤姫。結局二人は一時間後、ボロボロになって藤

姫に担がれて帰って来た。タイガーは済まなさそうな表情をしていたが、横島はなんだか幸せそうな表情をしていた。何故かは、分からない。そこら辺は、後々美神の拷問によって明らかになるのだろう。

結局、手合わせは引き分けとなった。しかし、途中まではまともに戦っていたタイガーは自分の実力に自信を持った。あの横島サン相手に互角だった！これはタイガーにとって凄い事だった。

「タイガー。はつきり言っつて、今のお前とはガチでやり合いたくないよ。試験、ちゃんと手加減してやれよ？」

疲れきった横島が言っつと、その言葉に戸惑いながらタイガーも頷いた。確かに圧倒的な強さで優勝した横島と普通に戦えた自分は、かなり強くなっている。これは、下手をすると対戦相手に大怪我をさせかねない。今までそんな気遣いなんてした事がなかったタイガーは、なにやら複雑な顔をしていた。

そんなタイガーを、エミとゆかりは頼もしそうに眺めていた。終わり方は締まらなかったが、タイガーの強さは本物であり、また力ツコ良かったのだ。

「ちよつと、その気になってきたか？」

「ま、まあ、否定はしないワケ……。」

タイガーは知らない。自分を見つめるエミの目に、今までにない感情が宿り始めているという事に。そして、エミも知らない。その気持ちの本物になった時…暗がりで生きていた頃に夢見た幸せが現実になるという事を…。

さて、その頃社務所の和樹は何をしていたかと言つと。

「ほらほらー、和樹さん、今度はこっちですよー」

「うは、分かっているも止められにゃい！楽し過ぎるにゃー！」

「コンコン」

イツナと一緒に、ユリ子の手にした猫じゃらしにじゃれついて遊んでいた。



## 第四十七話 二度目のGS試験のはなし

六道専修大学キャンパスには、たくさんを受験生が集結していた。バスから降り立った和樹は、その人の多さにウンザリとする。これは、父親たちを連れて来なくて正解だったかもしれない…和樹はそう思いながら、キャンパスに入った。皆とは違う入り口から向かった先は、試験会場を運営するGS協会のスタッフの部屋だ。

今回、和樹はタイガーの応援ではなく、GSとして協会に雇われている。会場の結界要員としてだ。

前回の試験では、結界要員のGSが軒並み入院してしまうという事態に陥った。その原因を作ったのは和樹と横島であり、二人の無茶な戦いによって消耗したスタッフの代わりに、今回和樹がピンチヒッターとして呼ばれたのだ。

まあ、罪悪感もあるし金も良かったから、和樹は仕方なく引き受けた。それに、タイガーの心配もあった。タイガーは、声に霊波を乗せる広範囲の攻撃をする。もし暴走したら、観客に被害が出るかもしれない…。そこら辺も気になって、和樹は仕事を引き受けたのだ。

「では、芦原君には霊波テスト会場と二次試験の全般を見てもらうけど、いいかな。」

スタッフを取りまとめるリーダーが聞いてくる。和樹は「構わない」とだけ言った。基本的に他のGSや六道関係者には冷たい和樹周りの人間が話しかけても、愛想を良くする事はなかった。なかったが…

「あら、芦原君じゃない。今回もお手伝いに来てくれたの？」

この人にはそんな『あっち行けオーラ』は通用しない。美神美智恵だ。

「ヤワな結界師しか居ないから代わりに来てくれと言われましてね。」

「手厳しいわね。まあ、実際その通りなんだけれど。」

にこやかに言う。美智恵相手にはイヤミも通じないのだ。和樹は向こうのペースに持つていかれないように警戒心を強めていた。

「ところで、今回はタイガー君とピート君が出るでしょう。優勝争いはこの二人で決まりだと思っただけど、ちょっと気になる子が居てね。見てもらえる？」

そう言っつて資料を見せる美智恵。そこには顔写真と、簡単な経歴が乗っていたのだが…

『春桐・ジーク・フリード(24)』

「……………」

そのまんまだ。

そのまんま、ジークだった。

「オカルトGメンに配属されるに当たって、資格を所得させるって聞いたんだけど…魔族よね、この子。」

「危険は無いと思いますよ。生真面目が服を着て歩いてるような奴で

すから。」

その返事に、美智恵は複雑な表情をする。以前抱いた疑問が、今また沸き起こってきていた。

「貴方：何故魔族の事に詳しいの？変身出来る事と言い…実は魔族でした、何て言わないわよね。」

美智恵は、魔族に狙われた過去を持つ。魔族アレルギーは半端じゃないのだ。そして、和樹も美智恵に裏切られ、社会からはじき出された過去を持つ。こちらも拒絶したい気持ちにあふれていた。

「だったら、どうだと言うんですかね。」

あくまで、表面上はにこやかに。しかし、殺気は尋常ではなかった。美智恵は気づかないが、和樹は今、不可視の分身を美智恵の周りを囲むように展開している。返答次第では人払いの結界を作動させ、この世から抹消する…実際はしなくても、それくらいはしてしまいいそうな殺気を美智恵にぶつけていた。

…これには、さすがの美智恵も恐怖する。気丈に振る舞うものの、足が震えていた。そこに、声をかける人物が一人。

「和樹はん、そこまでにしてくれるか。」

「鬼道…」

鬼道政樹だった。妙神山で顔を合わせて以来だ。和樹は直ぐに分身を消して、殺気を消す。解放された美智恵は少しフラついていた。

「美智恵はん、少し和樹はんと話しがありますら、彼を借りていき

ます。」

「え、ええ…」

「ほな行こか、和樹はん。試験まで時間あるし、茶あでも奢るわ。」

そうやって喫茶店のある方を指差す鬼道。少し戸惑いながらも和樹は頷いた。…なんだか遅くなったなあ、と思いながら。

キャンパス内の喫茶店について、少し濃いめのコーヒーを飲みながら、二人は久しぶりの再開を喜んでいた。

「まさか和樹はんが結界要員で来るとは思わんかった。小竜姫様にいじめられとる印象が強かったから、いつの間にか弱いと勘違いしてたわ。」

「思い出させるなよ！あれ、軽いトラウマになったんだぞ？」

小竜姫のフラストレーションを解消するための手合わせ…それは靈気の攻撃が無効化されるフィールドで行われた。純粹に剣技だけで戦うしかない場所で、和樹は一方的に可愛がられてしまったのだ。ボロボロになって、何故か全身にキスマークを作った和樹を、鬼道は何度も目撃している。

「しかし、さっきのはアカンで。あんまり殺伐としてたら、他のスタッフまで怖がって、力を発揮出来んようになる。ここのスタッフ

は特に六道女学院上がりが多いから、繊細やねん。」

「悪かったよ。…でも、美智恵さんだけはダメなんだよなあ。苦手意識っていうか、何て言うか…」

そんな言葉を漏らす和樹を見ながら、鬼道は感慨深げに言った。

「しかし…僕の知ってる高島殿と君の前世が別人とはなあ…。あの色欲狂いも、道を間違えなければこうなっとったんかな。」

鬼道は、小竜姫から和樹の正体を聞いている。だからこそ、その違いに驚いていたのだ。

「前世は前世、今は今だよ。まあエロいのは一緒だけどな、多分。表に出てないだけ。」

苦笑いする和樹。実際、可愛い子には目が行くし、毎朝藤姫に抱きついて幸せに浸っていたりするのだ。たまに藤姫が来ないと、露骨に寂しそうにする。エロい、というより甘えん坊なのかもしれない。

「ところで、鬼道も結界要員か？呪符使えば何でも出来そうだけど。」

「ああ、僕は筆記試験の監督と二次試験の結界要員や。今回は和樹はんや横島はんみたいなのが化けモンおらんから、安心しとる。」

そう言って笑う鬼道。和樹はタイガーの事を告げようとしたが、その時スピーカーからアナウンスが響いてきた。

『後30分で受け付けを終了します。受験される方は受け付けを済ませて会場へと向かって下さい。』

「ほな、そろそろ行こか。和樹はん、頑張りや。」

「あ、ああ。お前もな。」

席を立ち、去って行く鬼道。タイガーの事は…まあいいか。和樹はそうつぶやいて、残っていたコーヒを飲み干した。

## 【ピート】

試験会場でタイガー君と再会した時：失礼な話ですが、僕は彼の事が分かりませんでした。確かに外見は彼なのですが、その表情はオドオドしていた以前の姿からは想像もつかない程落ち着いていて…替え玉かと疑ったくらいです。

「タイガー君、今回は緊張してないんだね。」

「緊張はしとりますケン。ただ、それで気後れする事はなくなりましたんジャー。」

凄く変わりようだと思えます。妙神山でも手合わせを怖がっていた彼の発言とは思えません。唐巢神父にも聞きましたが、やはりこ

の数週間で彼は成長したんでしょう。少し…羨ましいです。

僕は、あれからずっと神父の助手として現場で働いています。その間、道具の使い方や現場での戦い方を学んできました。神父が一人で仕事をする時は、愛子さんにパソコンを習っています。僕はまだ成長期を迎えてないらしく、今使える能力を磨けと言ったのは天童さんですが、具体的にどうして行くのかは愛子さんと相談して決めました。社会に潜伏する霊能犯罪者たちを探し出す為には、情報収集は欠かせません。他にも、今の社会で生きるならパソコンは不可欠ですから。

そう、僕はやはりオカルトGメンに入りたい。最近のオカルトGメンの活躍を知って、その想いを新たにしました。

和樹さんの懸念も分かるのですが、それなら尚更、僕みたいな存在が入らなければならないと思うのです。組織の体質を内部から変えるのも、一つの方法だと思いますから。特に今は、妖怪たちに理解ある人たちが沢山所属していると聞きます。その流れを後押しできたら、とも思っています。

まあ、実務的な面ばかり伸ばして実践向きの訓練をしていなかったのは痛いですが、その分頭が回るようになりました。タイガー君、もし戦えるなら…僕は容赦しないからね。そんな風に思いながらタイガー君と話していると…

『受け付けを開始します。受験生は受験票を持って受け付け所に向かって下さい。』

アナウンスが入りました。タイガー君と僕は、一度顔を見合わせると笑いあいます。

「頑張りましょう。今度こそ、資格を取りましょうね。」

「勿論ジャー！」

力強く言葉を交わして、僕たちは受け付けへと歩き出しました。

…しかし。

何故でしょうか、さっきから奇妙な視線を感じますね。女性の視線とは、ちよっと違うような…。気のせいでしょうか？

【ピート視点終了】

一次試験は、例によって筆記と霊波テスト。和樹は霊波測定の部屋の監視員ブースに入ると受験生たちの顔ぶれを見る。

この日…初めて和樹は一般受験生を客観的に見たのだが…。あまりの貧弱さに頭を抱えた。

「なんだコレ…。こんなレベルでGS目指すつもりかよ。前回の試験と全然違うじゃないか。」



それに答えたのは、長年試験を担当してきた初老の男だった。

「前回は異常だったただだよ。加えるなら、君が資格をとった時だって、君と芦優太郎君は飛び抜けていた。」

そう、和樹の周りが異常なだけなのだ。今更ながらにそれに気づく和樹。ユリ子だって、死神と同化しなくても例年の試験なら優勝している実力者なのだ。

男に諭され、複雑な顔をする和樹。仕方なく、席に座って受験生たちの姿を眺めていた。

『では、始め!』

一斉に、皆が霊波を放出する。中にはただ力んでる者、霊波の強い人に重なるようにしてズルをする者がいるが、試験官たちはすぐにそれを見抜いて行く。和樹は会場に結界を張りながら眺めていた。

「おい、65番は霊波高いぞ。ステルス能力に特化してるから見えないだけだ。」

和樹の言葉にハツとする試験官たち。確かに目に見えないだけで、測定値は高い数値を出していた。

『65番、合格!』

それを聞いて、ホツとする女性。今回の試験は変わった才能があるなあ、と和樹は感心していた。他にも、霊波というより妖力を発する人間や魔力を発する人間など、様々だ。もしかしたら、今までの試験官たちが拾えて無かっただけかもしれない。

そして…会場にタイガーがあらわれた。

「タイガー。見せてもらうぞ、お前の実力。」

和樹がタイガーを見据えると、タイガーもこちらに気づいて…笑った。そして、試験官の合図と共に…

ゴオオオオオオオ！

凄まじい霊波を放出する！

…これは、ゆかりとエミの指示だった。本当に相手を傷つけたくないなら実力を隠すな、と。対戦相手に棄権する選択が出来るように、前もって自分の実力を見せつけろと言い聞かせていた。

「ひゃ、125番、合格！もう霊波を抑えたまえ！！」

慌てる試験官たち。霊波計は300を振り切っており、測定不能となっていた。

「へー…。かなり抑え気味だったのに300超えるのか。なら、霊装まとつたら700行くな。」

ニコニコして言う言葉に試験官たちも青ざめる。前回の横島が250で大騒ぎだったのだ。今回は抑え気味で300。もし彼が横島や雪之丞のように霊波合戦を繰り広げたら…

「大丈夫、俺の結界なら8万程度まで抑えられるから。」

事も無げに言う和樹。もう、ついていけない…試験官たちは、今の会話を忘れる事にした。今は、自分に出来る事に集中しよう…

その後も試験は続き、合格した者たちは皆ホツとした表情で会場を後にする。何故か、「私は社交ダンス界の日本代表なのですよ!」と不思議な事を言つて不合格に異議を唱える者もいたが、さすがに和樹もそれには赤面してうつむくだけだった。勘違いさせてゴメン、と心の中で謝る。そうした勘違いしている人間は、ゆうに80人を越えていた。

合格者たちの霊波は、平均すると80程度。合格ラインは75だった。ピートは130、ジークは180を越えており、充分注目に値するレベルだったのだが…タイガーが派手過ぎて、霞んでしまつていた。

「まあ、予想通りか。ただ…なんか気になるんだよなあ。あの娘…」

一人だけ…不思議な雰囲気を身に纏つた人物がいた。

前髪で目元を隠した、長髪の女性。会場の隅で、妖気と霊気の入り混じつた波動を放ち、合格ラインギリギリで試験をクリアしていた。どこかで会つたような気がする…

不思議な既視感を覚えながら、和樹は二次試験の会場へと移動する。途中、見かけたら声をかけてみるか…。そんな事を、考えていた。

現在、キャンパスの食堂には不思議な光景が広がっている。金髪

の爽やかな外見の青年と、浅黒い肌に銀髪が映える凛々しい青年が二人掛けのテーブルで向かい合っていた。それは、非現実的なまでに美しい光景。受験生の多く…特に女性たちは思わず足を止めて見とれていた。

「オカルトGメン、ですか。確かに興味はありますし、希望してはいますが…」

「良かった、全く興味無いと言われるのを覚悟していましたから。そう言っていたただけでも有り難いですよ。」

ピート同様、丁寧な口調で答えるのは、ジーク。春桐・ジーク・フリードだった。

「僕は…お察しの通り魔族です。魔界の軍隊に所属していましたが、内乱で崩壊してからは此方に避難して来ました。今回、オカルトGメンにスカウトされて所属する事になったのですが、GS資格を取らないと正規の職員になれないと言われて試験に参加したんです。」

「それは…大変でしたね。」ピートも何て言っていないか分からない。魔界の内乱？物騒な話題だ。

「しかし、何故僕に声をかけたのですか？僕が半魔だからでしょうか。」

「はい、それもあります。しかしそれ以上に、人の社会で溶け込んでいると聞いていたので興味があつたんです。僕はこちらに来て日も浅いですから、正直言って心細いんですよ。同じ魔の血族にあるピートさんなら、話し易いのでは、と思いました。」

その言葉に、少し警戒していたピートは安堵した。この人は、危険な人ではない。誠実そうな物腰は嘘では無さそうだった。変に飾

らない率直な物言いも、好感が持てる。

「僕は、ただ普通に高校に通って神父のお手伝いをしているだけですけどね。周りの人に助けてもらってますから…きっと、環境に恵まれたんだと思います。」

「…そうして、助けてもらえるのも、ピートさんの人柄のおかげだと思います。」

ジークが誉めると、ピートも照れて頭をかく。こんなに誉めてどうしようと言うのか。

「ところで…ピートさんは、芦原和樹さんという人物を知っていますか？」

「え？…ええ、神父の知り合いで、僕も最近友達になりました。彼が、どうしたんですか？」

一瞬言いにくそうな表情をするジーク。しかし、意を決したように目を見開き言った。

「姉の話では、彼も半魔だといえます。多民族にも理解があるようですね。僕は、彼にもオカルトGメンに入って欲しいんです。」

それは…無理だろう。

彼は、最近でこそ人当たりは良くなって来たらしいが、基本的に人間に対して冷たい。身内以外には中々心を開かないし、第一オカルトGメンを警戒している。

「それは難しいですね。…そう言えば、ジークさんは魔族である事にこだわってますが…オカルトGメンは、魔族をスカウトしているのですか？」

話していて違和感を感じていた。魔族である必要は、無いと思うのだが…。

「それは…今のオカルトGメンは、魔族の方が大半を占めているからです。神族、人間には魔族を攻撃対象としか見てない人ばかりでリベラルな考えを持てる人を選別していたら、自然と魔族と妖怪ばかりになっていたそうです。」

これはこれで、問題があるかもしれない。面接ではじかれる人間も問題だが、魔族ばかりで固まると妙な警戒をされかねないだろう。

「一度、和樹さんに相談してみます。多分快い返事は貰えないでしょうけど、そうした要望があると知れば彼も考えるでしょうから。」

「あ…ありがとうございます！すみません、何だか伝言を頼むような事になってしまっ…」

深々と頭を下げるジーク。少し慌てるピート。周囲の女性はそこにあらぬ妄想をかきたてるが、その中で、一人だけ違う視線を向ける者がいた。

「……彼が、行くわけない。あの人は…ルシオラさんしか見てないもの。」

前髪に隠れた瞳は、少し濡れていた。白いワンピースの胸元に、小さく何かが滲む。少女は俯いて呟くと、静かにその場を離れて行った。

その頃。天矢神社に一本の電話がかかってきた。たまたま社務所の受け付けのパソコンでソリティアを遊んでいた公平は、ワンコーで電話に出る。電話をかけてきたのは、阿部マリア。キーヤンと呼ばれている神界の最高指導者の依り代となっている女だ。

「芦原先生、突然お電話してしまい、すみません！そちらに、日陰ちゃん行っていませんか！」

「日陰ちゃん？…いや、来てないが、どうかしたのか？」

雪乃下日陰。日本語学校の生徒で、ワケありの少女だ。

「それが…神様ったら勝手に後見人になってあの子をGS試験に送り込んだんです！試験前に、芦原先生の所に挨拶に行くかなと思ったんですが…」

確かに彼女は自分に懐いていたが…和樹がいるなら来るワケないだろう、と公平は思う。しかし、彼女自身は日陰ちゃんの正体を知らないから責めるのは間違いだ。公平はすぐに阿部に指示を出した。

「これから会場に行って確かめるよ。君も、出来たら会場に向かってくれ。試験を受けるなら受けさせてあげて、負けたらすぐに連れ帰るぞ。あの子に外は、まだ早すぎる。」

「分かりました。すみません、御迷惑をおかけして…」

「いや、構わない。あの子の事は、僕も気になっていたから。もしかしたら、今回の件があの子にとって良い刺激になるかもしれない

し…見つけても、あまり怒ってやらないでちゃんと見守ってあげようね。」

「はい。」

電話を切る。途中から隣で聞いていたユリ子が、車のキーを持って来ていた。

「お出かけですか？」

「ああ。僕の帰りは、多分遅くなる。祈祷の予約があったら、藤姫さんに回してくれ。」

「分かりました、気をつけて行ってらして下さい。」

ユリ子に留守番を頼むと、公平は急いで社務所を出る。頼むぞ、和樹。今は彼女に話しかけないでくれ。下手に刺激して、辛い想いをさせたら心が壊れてしまう！公平は車に乗り込むと、勢い良くアクセルを踏み込んだ。



## 第四十八話 妖怪少女のはなし

一次試験も終わり、今は昼食の時間。和樹は受験生たちに混じって大食堂で食事をとっていた。本来なら弁当か何かを買って、どこかで一人で食べていたかったのだが、何故か今日はそれを忘れていた。人ゴミは嫌いだったが、仕方ない。

「まあ、いい値段するだけあって美味しいからいいけどな。」

和樹は和風定食を頼んで食べていた。焼き魚と煮物に味噌汁、漬物：ありがちな内容だが、その一つ一つが美味しい。食べてるうちに機嫌は良くなっていった。

「ん？」

ふと気づくと、すぐ近くにある食券販売機付近でオロオロとしている女性がいる。あの、前髪で目を隠した少女だ。どうしたんだろ？

和樹は一旦食事を止めて、席を立った。少女のもとまで行って、声をかける。

「なあ、どうしたんだ？ 買い方、分からないか？」

「え……あっ！」

少女は、和樹の顔を見て驚いた表情をした。何だか：震えてないか？

「あの、ごめん！ 怖がらせるつもりは無かったんだ。ただ、困って

そうだったから気になって…」

和樹も、少女のリアクションに戸惑う。これ以上怖がらせるのは不味いと思い、その場を離れようとした。まったく、普段しない事をするもんじゃいな…とうつぶきながら席に戻ろうとすると…

きゅっ…

シャツの裾を、掴まれた。

「あ、あの、あの私…」 極度に緊張しているのか、身体は震えていた。きゅと、コミュニケーションを取るのが苦手なんだろう。それでも、声をかけてくれた。本当に困ってるんだろうし、もしかしたらこちらに気を使ってるのかもしれない。

「どうしたの？何か手伝える？」

なるべく優しい声で、和樹は話しかけた。少女は、顔を真っ赤にしている。話にくい事なのだろうか…

「あの、ここ来る時タクシー使っちゃって…お昼買おうとしたら、足りなくて…」

なるほど。確かに、ここは高い。普通の食堂の二倍から三倍の値段だからな…。和樹は納得して言った。

「OK、ならここは奢るよ。」

「え、そんな、悪いです！」

「いいの。昼休みは時間も限られてるし、二次試験は実戦だぞ？ち

ちゃんと食べとけて。」

こういう、遠慮の塊のような人には多少強引に親切を押し付けるのが、和樹のやり方だったりする。単に短気というのものもあるのだが。

「…ありがとうございます…。」

消えそうな声で、少女は礼を言った。

少女は少食らしく、月見うどん一杯だけを頼んだ。食券を買う所から注文するまでを和樹が全て行ったが、少女はその姿をぼんやりと見つめていた。その目は、どこか懐かしいものを見ているようだった。

少女は、和樹の席の向かいに座ってうどんを食べる。和樹も余計な事は聞かず、適度な距離感をとって一緒の時間を過ごした。そこに…何故か、しっくりくるものを感じていた。それは少女も同じように、時折箸を止めて和樹と見つめ合い…

ニコツと笑いあった。

少女が食事を終わると、和樹も一緒に食器を返しに行った。そして、食堂に出て別れる際…

「あの、お金なんですが…」

「いいよ。その分、試験で頑張ってくれれば。俺の奢ったうどんで、合格したんだって友達に自慢させてくれ。」

妙な事を言う和樹。冗談めかして言うにも、やはりボキャブラリが貧困なせいか発言がおかしい。聞きようによってはプレッシャーを感じるような言葉だったが、少女は優しく笑った。

「はい、分かりました。よく考えれば、これで貸し借り無しですからね。」

「へ…?」

ペこり、とお辞儀して、少女は去ってゆく。和樹は最後の言葉に困惑した。貸し借り無し?何のことだ?聞きたくて前に踏みだそうとした時…

ガシッ!

誰かに肩を掴まれた。

「か〜ず〜き〜…!!」

「お、親父!?!何でこんな所に!」

公平だった。全身汗だく、鬼のような形相をしている。

「まったく、話しかけるどころか一緒に飯食うとか、予想の斜め上を行きやがって…。」

「はあ?」

何の事が分からず困惑する和樹を、公平は強引に引つ張って行く。行き先は、試験会場だ。和樹は激戦が予想される二回戦以降の結果要員。それまでは会場監視員の為、まだここに居ても大丈夫だ。だから公平の話に付き合う時間はあるのだが…

「なあ親父、ここ、観客席だろ。俺、仕事頼まれてるからなるべく下に降りていたいんだけど。」

「ダメだ、まずはここで話がある。」

一般観客に紛れて、公平と和樹は客席の椅子に座る。…なんだか今日の公平は怖い。和樹は、段々心細くなってきた。

「な、なあ、親父。俺、何かまずい事やったか？あの子、もしかして俺と会っちゃダメだったのか？」

「ん？まあ…ワケありでな。いきなり強引な真似して悪いと思ったが、事情が事情なんだ。まあ、今から説明するが…」

公平は周囲を一度見渡してから、小さな声で言った。

「あの子、うちの塾の子だよ。こないだ連れて行つたろ。」

「え、あの日本語学校の？なら別に…ああ、人じゃないのか。」  
そう言えば、妖力を使っていたな。なら、周囲を警戒するのは分かるが…何故自分と会わせたくないのか。そこまで考えて、和樹も気づく。あの子の発言…。もし以前に会っていて、自分の事を知っているとしたら。それは前の世界の関係者にならないか。

「あの子、もしかして前の世界から来た子か？俺の事、嫌ってたり

するのか？」

「うーん…嫌ってたら話は簡単だったんだけどな。逆だから始末に悪い。会って話したなら分かると思うが、他人と話す事も苦手な子だ。学校の外にも出れなかったのに、お前と話すなんて無茶なんだが…」

俺が一体あの子に何したんだよ、と和樹は困った表情をする。記憶を辿るも、あんな外見の子は知らなかった。

「顔は違ってから分かったら。けど、すぐにお前にも分かるさ。あの子の保護者に聞いたら、大切にしていたものが持ち出されていたって言うからな。」

そこまで言っつて、公平は和樹を見た。その目は、いつになく厳しい。

「いいか。お前には彼女に謝る権利は無い。向こうもそれを望んでいない。だから、今はせめて見守ってやるだけにしろ。過去を持ち出して、悪戯に傷つけるのはよせよ。あの子がここに居るといふ事は…前を向いて歩き出したって事なんだからな。」

いや、だから俺が何を…

責めるような公平の目に怯みながら、和樹は口を開こうとする。

その時…視界の端に、先ほどの少女の姿が見えた。白いワンピース姿だったのが、今は着替えたのか別の服に変わっている。あれは…

あれは、俺が贈った服だ。

和樹には、彼女の正体が分かった。あの服は…自分が彼女に贈っ

た服。まだ幽霊だった頃の彼女に、幽霊でも着れる服をプレゼントしたいと遙々織り姫の所に行って作ってもらった服だった。

「あの子はな。前の世界で死んだ後：妖怪に変化したんだ。影女って知ってるか？一人者の男の家に現れる妖怪って事になってるが、彼女は違う。一人の男に縛られて、ただ想い続けるだけの妖怪になっってしまったんだ。」

「そ…んな…。なんで、そんな事…」

「好きだったんだろうさ。輪廻を拒絶して、人をやめてでもその気持ち消したく無かったんだろうな。けど、それは彼女の選択だし、人生だ。お前は別の女を選んだ。今更彼女に同情したりするなよ。」

公平の言葉に、和樹は黙り込んでしまう。そんなの、無理だ。だって彼女は…確かに大切な人だったのだ。自分のせいで、あんな最期を遂げてしまったのではないか。そんな風に、ずっと後悔してきたのだ。

和樹は目に涙を溜めながら、少女の姿を見つめ続けるのだった。

昼食を終えたゆかりと小笠原エミは、タイガーと別れて食堂を後にしていた。二人で、先ほどのタイガーの事を思い出して笑っていた。

「あれだけ食べたなら、試合に集中出来ないワケ。貧乏性は治ってないワケね。」

「まあ大丈夫だろう。あれの倍食べてるのを見た事がある。……おや？」

廊下を歩きながら話していると、前から一人の少女が歩いてきた。高校生になるかならないかといった外見で、前髪で目元を隠している。エミとゆかりは、すぐにその少女が妖怪だと分かった。

「ちよつとあんた、この先は選手専用のフロアよ。一般観客は立ち入り禁止なワケ。」

「それに妖怪で一人なのは危ないだろう。私たちと一緒に来るか？」  
二人に声をかけられ…またもやビックリする。何故、こつも前の世界での知り合いと遭遇するのか。

「あの、私、選手…ですから…。」

そう言つて、一次試験突破の証明となるひも付きのネームプレートをさせる。コレを首から下げれば、二次試験会場に入れるのだ。

「え…あんた選手なワケ！？全然そうは見えなかつたワケ！…悪かつたわ。」

「凄いな。妖怪でGSを目指すのか。仕事の出来る女だな。」

…なんと言つていいのか困る。少しオドオドしていると、ゆかりは楽しそうに言つた。



「どつやら、お前は幸運期に入ったようだ。試験は上手く行くだろう。きつと、この幸運期は長いぞ。座敷童子のお墨付きだ。」

「え…?」

「だから、そう幸薄そうな顔をするな。お前には、きつと笑顔の方が似合う。」

ゆかりはそう言って、少女のもとを去る。エミも、それに続いた。少女は少しポカンとしていたが…なんだか、嬉しくなっていた。幸運期。よく分からないけれど、朝、今日の運勢を見て一喜一憂してしまう自分にとって、その言葉はとても素敵に聞こえる。それも、彼女は座敷童子だと言う。なら、本当に幸運期に入ったのかもしれない。

…ちよつと、勇気を出して…着てみようかな。

少女は、大好きな人から贈られた服の入った紙袋を抱きしめながら、そつつぶやいた。

二次試験の会場は、奇妙な熱気に包まれていた。前回のハチャメチャな試験を目の当たりにした連中のせいなのか、はたまた一次試験で派手にやらかしたタイガーのせいなのかは分からない。ただ、その熱気は受験生たちへプレッシャーとなつて襲いかかつてきてい

た。

そんな中、タイガーは至って平常心でいた。というか、満腹で眠らなっていた。ここの食堂のメニューはみんな美味しいのだ。

「今度はこだわり親子丼を食べてみたいノー。」

呑気に言うタイガー。そんなタイガーに、畏怖の視線を送る周囲の受験生。対戦したら、殺される。でも、棄権したら観客からのブーイング。四面楚歌であった。

…そして、タイガー以外の皆が緊張の面持ちで控える中…二次試験はスタートした。

『第一回戦第一試合、タイガー寅吉 対 蛮玄人 試合開始!』

よりもよって、最初の試合がタイガーの試合だった。結界を張るのは鬼道。和樹以外には、彼しか務まらないだろう。

「10パーセントだ!10パーセントでお前を倒してやる!」

前回陰念に負けた男。既にハツタリは通じないのだが、馬鹿の1つ覚えを繰り返す。そこへ、タイガーは声をかけた。

「じゃあ、ワツシは全力でいきますケン。」

タイガーが、変身する。

全身を金色の霊気がまとい、その姿を虎に…いや、それを飛び越えて、凶悪なまでに鋭い牙を持つサーベルタイガー・モードに変化

した。

ゴオオオオオオツ！

会場の空気が、どよめく。鬼道はなんとか観客に被害がでないようにしていたが、もし結界が破られたら…空気の振動だけで、会場全ての窓ガラスは割れてしまった事だろう。

…蛮玄人は、失神していた。

『やめ！勝者、タイガー寅吉選手！…うわ、くさっ！』

ついでに、失禁していた。

変身を解いて、タイガーは観客席にいるエミとゆかりに手を振った。見ると、そのそばには横島や美神、魔鈴と愛子の姿があった。タイガーとピートの応援団である。そんなに沢山来てくれると思っていなかったタイガーは、少し感激していた。

そして、次の試合。

タイガーと入れ違いにコートに入って来たのは、あの前髪の少女。雪乃下日陰だった。

観客席の外れから見守っている和樹は、気が気ではなかった。あの子が…あの子が本当におキ又ちゃんなら、攻撃方法が無いじゃないか！ネクロマンサーの笛は美神事務所に返し、破魔札も持っていない。霊的格闘なんてした事ないハズだ。

「お、親父、無茶だ！止めさせよう！」

「落ち着け和樹！あの子が勇気を出して踏み出したんだ、見守つてやれ！お前が今やるべき事は応援か、治療用の文珠を作つてやる事だろう。」

「わ、分かった！」

ポロポロポロポロポロポロポロポロ…

「作り過ぎだー！」

「頑張れおキ又ちゃん！」

暴走する和樹、必死で文珠をかき集める公平。すぐに公平のバッグはパンパンになってしまった。

『第二試合、雪乃下日陰 対 マッスル伊藤 試合開始！』

「ふはーっ！漲るボディにひれ伏すのだああっ！」

…なんだ、この馬鹿は。

会場の客が白ける。しかし、和樹は心配で仕方がない。

「クソっ、あんな筋肉馬鹿が相手なんて…あれセクハラで失格に出  
来ねえかな！」

「落ち着け和樹！上半身だけ裸じゃ立件は無理だ！」

「ブラつけたら変態って事でしょっぴけるだろ！？」

錯乱する和樹。しかし、次の瞬間和樹はおろか客席の人間が皆固  
まった。

「えい、お願いします！」

そう言って日陰が取り出したのは、一本の包丁。登録した霊能ア  
イテムである。その包丁が、日陰の声に反応してしゃべりだした。

『ふむ、これは中々斬り甲斐のある相手である！』

それは…前の世界でおキヌが使っていた包丁。元々は妖刀の、シ  
メサバ丸だった。おキヌが妖怪となった事で、妖怪同士通じあう事  
が出来るようになっていたのだ。日陰の呼びかけに目覚めたシメサ  
バ丸は、久しぶりの戦いに興奮していた。

「え、あの、そんなに傷つけちゃ…ダメですから…」

『ランランランランラン！』

日陰の手に握られたシメサバ丸が、もの凄い勢いで筋肉馬鹿に襲  
いかかる！

「わー！審判、犯罪だろこれー!?」

『靈能アイテムだ。問題ない。』

『フッフッフッフーン!』

「へーん！止まって下さはーい！」

コートの中をドタバタと走り回る二人。結局、筋肉馬鹿の場外で試合は終了した。

「……………」

「……………」

しばらく固まる和樹と公平。これは…褒めていい戦いだろうか。

「しかしまあ、部屋でこもって自傷行為に走るより健康的ではあるな。」

「和樹、それは例えがおかし過ぎる。」

公平が冷静に突っ込む。どうしても平常心に戻れない和樹を見て、日陰よりもよっぽど危ないと思っていた。

「じゃあ、俺行くわ。」

ガシッ!

「どこ行く気だ。」

「いや、仕事！もうすぐ交代で、そこから決勝まで俺が結果要員なんだって！」

「本当だな？あの子に変な事しないな？」

「当たり前だろ！人を変質者みたいに言うなよ！」

そう言つと、公平も仕方なく和樹を放す。信用出来ないが、まあ和樹が彼女を不用意に傷つける事はないだろう。今の態度を見たら、ちゃんと大切に扱ってあげるハズだ。

公平は、足早に去って行く和樹を見ながら笑っていた。そこに、少し離れた席にいた女性が声をかけてくる。茶髪のロングヘアをなびかせた女性、阿部マリアだった。

「芦原先生、どういふつもりですか？」

「行くな、と言った方が燃え上がるだろ？アイツの事だ、止まらな  
いよ。そして、ちゃんとあの子も幸せにしてやれるさ。今度こそ。」

「まったく…：そうやってからかっただけか？と怒られますよ？」

「大丈夫、日頃から怒られ慣れてるからな。」

笑い合う二人。試合会場に降りて日陰の背中を追いかける和樹の姿を、楽しそうに眺めていた。

和樹は走る。

心臓が、バクバクと音をたてる。勿論これは、疲れからではない。会えないと思っていた人と会える、その事に胸が高鳴っていたのだ。

「おキ又ちゃん！」

和樹が叫ぶ。人通りの無い通路を一人歩いていた日陰は、ビクツと固まった。

「ハア、ハア……。あの、俺……。」

追いついたはいいが、何と云っていいか分からない和樹。どうして俺はこう大事な時に上手く言えないんだ！ 気ばかりが焦った。

「私……」

日陰が、口を開く。

「私、おキ又なんて名前じゃありません。日陰って名前があります。」

それは拒絶の言葉。  
声は、震えていた。

「でも、俺……。」

「……あなたは、芦原和樹さん。そうですね。」



そう。

今は、もう横島とおキヌではない。和樹の胸に、裂けるような痛みが走る。事務所を勝手に去った自分を、許してくれるワケがないのだ。最後まで自分を引き止めようとした彼女の気持ちを無視してしまった自分に…彼女に謝る権利なんてない。公平の言った通りだった。

「でも…。」

「え？」

「でも…、和樹さんと、日陰、なら…。また、一緒に、居られますか…？また、あなたの隣に、居ても…笑って、くれますか？」

和樹に背を向けたまま、日陰は尋ねる。一生分の勇気を、振り絞っていた。この世界に渡ってから…何度も夢に見たシチュエーション。夢では結局言えなかった言葉を、日陰は涙をこらえながら口にした。

「日陰さん…。うん、一緒に居て欲しい。俺、もう君をおいてかないから。だから、ずっと…一緒に居て欲しい。」

和樹も、足りないボキャブラリーの中から必死に言葉を探して言った。それはまるで安っぽいラブソングの歌詞のようだったが…

振り向いた日陰は、笑ってくれた。

顔立ちは違うけど…その表情や雰囲気は、紛れもなく和樹の知っているおキヌのもの。耐えきれず零れた涙でくしゃくしゃになりながらも、ちゃんと和樹の方を見て、笑顔を見せてくれたのだ。

「はい！よろしく願いします！」

それはまるで、プロポーズの返事のように。和樹と日陰は、互いに涙を流しながら、力強く抱きしめ合った。

## 第四十九話 モノノケの気持ちのはなし

試合会場にやってきた和樹は、鬼道と交代で結界要員に入った。ここから決勝まで、ぶっ通しで結界を張り続けるのだ。それも、四つのコート全てを一人で。普通の霊能者からしたら無茶というより自殺行為である。しかし和樹は涼しい顔をして巨大な結界を張り巡らせた。

「試合より、こっちの方が驚くワケ。」

「和樹君、凄いよう…」

小笠原エミと美神ひのめが驚きの声を上げる中、横島は少し面白くなさそうな顔をする。

「分かってたけど、こうも差を見せつけられるとなー。アイツ、前の試験じゃだいぶ手を抜いてたんだな。」

あの戦い。横島もバカなノリに付き合ってたが、確かに本気を出していたのだ。結果、和樹に勝利して優勝に至った。でも…和樹を本気にさせられなかった。目の前の光景に、それを悟らされた。あの時喜んだ自分は…馬鹿みたいじゃないか。

「横島さん、和樹さんは本気でしたよ。制約された能力で、最大限のパフォーマンスをしてみました。」

そう声をかけるのは魔鈴。前回のあの戦いを見ていたが、和樹の必死な表情は良く覚えていた。

「横島君、あの後和樹君の泣き顔見たでしょ？あれは本気で泣いてたわ。私も、ヒヤクメ様のパソコンで見てたけど本気で悔しがってるようにしか見えなかったもの。」

愛子も同調するように言った。ヒヤクメの話では、和樹は靈的な出力を抑えて戦っていたらしい。それは、周りの人間や対戦相手を傷つけない為だ。その上で、和樹は優勝を狙っていたらしい。

横島は、その愛子の発言にハツとする。

「パソコン？動画ツスか？」

「ええ…メールに添付して送るとか言ってたけれど…」

「ぜひ俺にもそのデータを！あのパンチラは忘れられ…」

パソコンッ！

美神のバグがヒットした。

「浮気は合体事故で外道なんだよ…」

「ひいいいい、今後トモヨロシクうう！？」

何をやってるんだ、この二人は。エミが呆れていると、隣に座っていたゆかりが会場を指差した。

「あれは、ピートという男だな。試合が始まるぞ。」

一回戦を難なくクリアしたピートの二試合目。これに勝てば資格所得である。少し緊張した面持ちのピートに、愛子は席を立って声

をかけた。

「ピート君、頑張ってるー！」

その声に、手を振って答えるピート。なんだか、それは青春のページのように見えた。しかし、それを見た観客たちは一様にヒートアップする！

「うおおお、あのリア充殺す！」

「会場に彼女つれてくるとかふざけやがって！」

「何であんな女が彼みたい男ゲットできんのよー！」

「ムキーツ！あのケツは私のよー！」

大ブーイングの嵐。愛子も驚いて縮こまる。さすがに、見せつけてしまったのはマズかったか…と、反省していた。

そんな中…ピートの対戦相手もかなりエキサイト気味であった。

「女…女連れとか…美形とか… teme だけは許せねえ！」

男は、妬みに染まった目でピートを睨みつける。大柄な力バみたいな容姿をした男は、次に結界を張っていた和樹の方を見た。

「この男の後は、お前だ！うちの兄貴の仇、取らせてもらうー！」

…ん？和樹は不思議な顔をする。誰だ、こいつ。兄貴？そこまで考えた所で、審判の声が響きわたった。

『二回戦第一試合、ピエトロ・ド・ブラドー 対 金堂中也 試合開始!』

…ああ。あの妖魔ハンター志望の男の関係者か。和樹もしらける。ピートと目を合わせると、小さく頷いた。

再起不能にしまえ。

ピートも力強く頷くと、男を睨みつける。開始の合図と共に走り出した男を迎えうった。

「おらぁっ!」

男の拳が空を切る。ピートは相手の動きを完全に見切っていた。いくら訓練していなかったとは言え前回試験から1ヶ月弱。身体はしっかり動くし、なにも遊んでいたワケではない。現場を経験し、悪霊とも戦ってきた。そんなピートが、こんな小物の攻撃を受けるワケが無いのだ。

「うおお、当たれ、当たれ!」

靈気を漲らせた拳が虚空に向かって振るわれる。ピートは攻撃をかわす度に小さくジャブを相手の顎に当てていた。男の身体の動きは段々と鈍くなってきて、今ではもうフラついてすらいた。

「ち、チクシヨウ…こんな優男が、なんで…」

「そろそろ終わらせますね。」

そう言った途端、ピートの右腕が霧状となり、男の顔の周りにま

とわりついた。

「ぶあつ、なんだこりゃあ！う…ゲホッ、ゲホッ！」

「さようなら。」

ガアアアアンツ！

突如起こる爆発。男の顔が、光を放って爆発したのだ。いや、顔は無事なようだが…

ドサツ…

白目を剥いて倒れた。

『勝者、ピエトロ・ド・ブラドー選手！』

「ふう…なんだかあっけなく資格とれちゃいましたね。」

元に戻した右腕を撫でながら、ピートはスッキリした表情で言った。ふと横を見ると、和樹がニコニコ笑って親指を立てている。同じようにサムズアップを返して、ピートはコートを出て行った。

「今まで見てきた中で、一番えげつない攻撃なワケ。あの子、どうしちゃったワケ？」

エミは鳥肌を立たせながら愛子に聞く。あれは…危険過ぎる。霧状にした身体を吸い込ませ、体内で靈気を爆発させる…呼吸器系は勿論、最悪脳障害をも引き起こす技。こんな試験で使う技ではない。

「和樹さんに教わった技です。それを彼が改良したんですけど…靈気の爆発は最小限にしてるから大丈夫ですよ。彼も極力相手を傷つけないようにしたいって言ってたから。」

…しかし、どう見ても意識不明の重体っぽい。…あれ？

「あいつ、前の大会で和樹を襲ったヤツの弟か何かッスね。苗字一緒だし。また、何か変な事言ったんじゃないスか？」

横島が言う。横島も、見た瞬間にどこかで見たと考えた。名前を聞いて、ああアイツの…と気づいたのだ。近くに和樹もいるし、また一悶着あったんだろう、と。

「何はともあれ、ピートさんはGS資格所得しましたね。良かったですね、愛子さん。」

「はい、ありがとうございます…ああ！」

愛子の目が見開かれる。コートを後にするピートの背後で、あの男が立ち上がった。そして、その背中に向かって走り出したのだ。和樹も気づいたが、他のコートの結界を張ったままなので動けなかった。ピートに向かって叫ぶが、間に合わない！

ガシッ

「そこまでや。アンタまで、豚箱入りたいんか？」



振り向いたピートの寸前まで迫っていた男の頭を鷲掴みにして止めたのは、鬼道だった。

「鬼道、君…」

「ここはええから、早く彼女さんの所に行つてやり。コイツはこっちで処理しとくから。」

鬼道が念を込めると、男はビクツと身体を痙攣させて気を失う。その光景に驚きつつも、ピートは鬼道に礼を言つてコートを出て行った。

（せめてもの罪滅ぼしに…なつたらええな。）

去つて行くピートの背中を見送りながら、鬼道は心の中でそうつぶやいた。

ピートの試合後の騒動が静まった頃。美神たちから離れた観客席では、公平と阿部、そして日陰が話をしていた。

「じゃあ、試合は棄権でいいのね？」

「…はい。元々、和樹さんに自分を知ってもらいたくて神様にお願

いした事ですから。」

日陰は満足そうに頷いた。彼女は、この世界に来てからは対人恐怖症に苦しんでいて、学校から出られなかった。少しずつりハビリして出られるようになったのは、あの横島に会いたいという想いがあったからだ。それを見ていた最高指導者が、今回の試験に和樹がスタッフとして参加すると知って日陰に試験を受けさせたのだった。

「その選択は正しいよ。日陰ちゃんの実力じゃあこれ以上勝ち進めないからね。それに、もし日陰ちゃんが傷つけられたら和樹が黙っちゃいないだろう。日陰ちゃんの事となると最悪アイツ、暴れかねんからな。」

その言葉に顔を真っ赤にする日陰。スカートの生地を摘んで、もじもじしていた。そんな可愛らしい仕草をしていた日陰に、阿部は優しく声をかける。

「それで、アナタはどうしたい？和樹君と一緒に暮らしたい？芦原先生の家なら、安心して暮らせると思うけど。」

「…でも、学校の皆は寂しがらんじゃ…」

日陰にも、友達はある。気弱で怖がりだが、その優しい性格は皆から好かれていた。同じように外を怖がる妖怪や子供の魔族たちは日陰と一緒にいる事を好んでいたのだ。

「でもな、日陰ちゃん。君が幸せになるチャンスを自分たちが潰してしまったと知ったら、あの子たちも辛いと思うぞ。いつか出て行かなきゃならないんだから、君は君の幸せを追った方がいいんじゃないかな。あの子たちも、君の背中を見て自分も…って思うかもし

れないし。」

公平の言葉に、日陰は考え込む。確かに、何時までもあそこに居たら何処にも行けなくなってしまうだろう。私が外に出たら…あの子たちも踏み出せるだろうか。

「それにな、日陰ちゃん。」

少し、照れながら公平が続ける。

「君が来てくれたら…和樹が喜ぶ。僕としても、アイツが笑顔でいてくれると嬉しいし、勿論君の事もずっと心配だったから来てくれると嬉しいよ。」

「先生…。」

もう、迷う必要は無いだろう。日陰は公平の言葉に頷いた。

「宜しくお願いします。」

「うん。良かった。こちらも、宜しくお願いしますよ。」

日陰は、公平の誘いを受ける事に決めた。やはり、ずっと想い続けてきた人と一緒にいたい。もう置いていかないと伝えてくれた、和樹さんと…。

「はい、じゃあ日陰ちゃん一旦学校戻って荷物まとめようか。善は急げって言うし、ね。」

「え、え、ええ!？」

「芦原先生、この子の部屋用意してもらえますか？」

「ああ、分かった。すぐに神社に連絡して用意してもらおうよ。」

怒涛の勢いで話が進んで行く。日陰は困惑したまま阿部に手を引かれ、会場を出て行くのだった。そして、残った公平は携帯電話のアドレスから神社の番号を選んで通話ボタンを押す。ワンコールで出た藤姫に、明るい声で、こう告げた。

『今日から横つちの女が一人増えよるから、部屋一つ用意したってや。』

藤姫の絶句と共に公平も驚愕する。背後にはサタン。何勝手にひとの口使って滅茶苦茶言ってやがる！そんな公平を無視して、サタンは続けた。

『向こうの世界のおキヌちゃんやから、強敵やで。さっきもかなりアプローチしとったし、うかうかしとると負けてまうぞ？』

わーーーーっ！

涙目の公平。受話器の向こうから藤姫の「上等だよ！」という言葉葉と共に聞こえたガチャンという音が…まるでギロチンの音のように聞こえた。

「何しやがるサタン！ウチの平和を乱す気か！？」

『何言うてん、和樹が積極的でないなら女の方から仕掛けん何も変わらんやろ？そろそろ恋愛してもバチ当たらんと思うがなあ。』

「わざわざアンタがけしかける事は無いだろう！うおお、日陰ちゃん、スマン！どうか生き残ってくれえええ！！！」

血の涙を流して祈る公平の後ろで、サタンは笑いこぼしていた。公平は知らない。これが、サタンと藤姫の仕掛けたドッキリだと言う事を…。

会場のBコートには、試合開始を待つタイガーの姿がある。その姿は堂々としており、コートのそばにいる和樹はそんなタイガーの成長に感動していた。

(やっぱりコイツ、内面的に強くなれば化けるんだな。もしかしたら、横島より怖い相手かもしれない…)

前の世界でも、その片鱗は見せていた。クリスマスケーキに閉じ込められた時、足を挫いた女の子を担いで走る姿はかなり印象的だった。何かを守ろうとする時、タイガーは強くなる。この世界では、それが顕著に表れていた。

タイガーは、相手が来るまでの時間を利用して身体をほぐしていた。元々かなり大きな身体だが、その腕や足がブンブンと振り回される光景はなかなか迫力がある。それを和樹はニコニコしながら見ていると…

『二回戦第八試合、邪害喪憐恨選手の棄権により、タイガー選手の不戦勝とする!』

ずっこけた。

それはタイガーを初めとした会場全ての人間も同様だった。そして、客席からはブーイングの嵐。今の所、会場をわかせたのはタイガーの変身だけだったからだ。どうも、前回のような華々しい戦いを期待している人間が多い。

…タイガーは、こうして何の苦労も無くすんなり資格を取ってしまった。前回の死闘は何だったのだろう。そんな風に釈然としないままコートを後にすると…ふと、頭上から自分に声がかけられた。

「タイガー、やったな！合格だ！」

「おめでとう、タイガー！これで給料アップしてあげられるワケ！」

ゆかりと、エミだった。

…こんな資格の取り方で、喜んでもらえるなんて…。タイガーは嬉しくて飛び跳ねて手を振った。

「やったんジャー、エミちゃん、ゆかりちゃん！ワッシもこれで、GSの仲間入りジャー！」

ドスン、ドスンと凄い音を鳴らしながら喜ぶタイガー。彼は気づいていない、自分が凄い高さまでジャンプしているという事に。感極まって三メートル近く飛び跳ねるタイガーの姿を見ながら、他の受験生たちは青ざめるのだった。ずば抜けた身体能力、靈波、変身までする…こんな化け物に、勝てるワケないじゃないか、と。それは、遠くから見ていた褐色の青年も同様だった。

（姉上、聞いてませんよ！何故あんなとんでも無い人のいる試験に僕を送り込んだんですか…。本気出さないと、殺されかねませんよ

コレじゃあ！)

今はここに居ない姉に恨み事を言うジーク。念のために登録しておいた神剣バルムンクに手をやりながら、不安そうにしていた。最悪、これを使う羽目になるかもしれない。トーナメント表を見ると、ピートと当たる前にタイガーと当たってしまう。吸血鬼と戦ってみたかったジークは、渋い顔でタイガーの背中を眺めていた。

### 【鬼道政樹】

ホンマに、今回は和樹はんに来てもらって助かった。全てのコートに一人で結界張るとか、僕でも道具つかわな無理やもんな。ただ…結界張つとる間動けないのは辛いな。いや、それが普通なんやけど。

さっきは危なかった。苗字見て何かやらかしそうやと思っとったらビンゴやからな。あれは和樹はんに止められんわ。やっぱりトラブルに対処出来る人間を他にも雇っておくべきか…

そんな事考えながら、キャンパスのラウンジに来ると…。ああ、お邪魔か。ピート君と愛子はんがおった。なら食堂に行こうかと思つて方向転換した僕に、何故かピート君は声をかけてくる。

「やあ鬼道君、さっきはありがとう！」

なんでや、ピート君！ラブラブしとつたらええのに！僕が愛子はん苦手なん知つとるやる！？けどそんなんお構いなしに手え振るか  
ら返事せざるを得んし…。鬼や、ピート君。

「ああ、気にせんでええよ。あれが僕の仕事やし。君には悪い事したから、あれくらい当然や。」

そこまで言うくと、ピート君は肘で愛子はんをつついた。え、何？

「あの、鬼道さん。…前は、言い過ぎました。あれから、ずっと後悔してて…ちゃんと謝らないと、と思つてたんです。」

…え、なんで？愛子はんの怒りはもつともやと思っけど…。そう言う  
と、愛子はんは首を振った。

「ピート君が許してるのに、私がいつまでも怒ってるのはおかしい  
もの。それに、さっきもちゃんと助けてくれた。鬼道さんの気持ち  
は、ちゃんと伝わったから…。」

「彼女の謝罪を、受け入れてもらえないかな。僕としても、もうこ  
の事で気を病む君たちを見たくないし…ちゃんと、友達になりたい  
んだ。」

なんつー男前な…。ピート君、そら客から妬まれるよ。完璧やも  
ん、君。

「分かった。愛子はん、ありがとう。愛子はんが許してくれるなら、  
僕も許すよ。」

「うん、ありがとう、鬼道さん。」



良かった…もう、この事で気に病む事は無いんやな。なら…この子の事も聞いてもらおうかな。

「二人に話したい事があるんやけどええかな？」

僕は、そう言って影から夜叉丸を呼び出す。流石に二人は緊張しとったけど、すぐに頷いてくれた。

また怒られるかもしれんけど…ちゃんと話とかんとな。なんで、夜叉丸が暴走したのか、を。

【鬼道政樹視点終了】

ラウンジの四人掛けのテーブルには、ピートと愛子、鬼道と夜叉丸が向かいあって座っている。鬼道の話に耳を傾ける二人は、時々困ったような表情を浮かべていた。夜叉丸は、ただ上目使いで二人を見ている。

話を聞き終えた二人は、疲れた様子だったものの、スッキリとした表情をしていた。

「だから、暴走していたんですか。」

「同じ女性として、その気持ちはよく分かるわ。でも…今は大切に

してもらえてるのね？」

『ピイ。』

愛子が夜叉丸に話しかけると、夜叉丸は頬を染めながら頷いた。毎晩、ちゃんと刀に戻った自分の手入れをして貰っている。最高に幸せだ。

「それなら、いいの。鬼道さん、私も九十九神の妖怪だから夜叉丸さんの事が理解できます。私たちモノは、愛されてモノノケになります。人になるのは、人が好きだから。これからも、彼女の事を大切にしてくださいね。」

「はい。僕も、今回の件で勉強になりました。夜叉丸は最高の相棒やから大切にさせていただきます。」

目を潤ませる夜叉丸の頭を撫でながら、鬼道は言った。そして、少し表情を引き締めてピートに向き直す。

「ピート君、君もGSとして現場に出とるなら知つとると思うけど、以前の夜叉丸みたいに理解されないまま危険視されとる九十九神つて多いやろ？もし今後、そう言う九十九神と出会って対処に困つたら、僕とこに知らせて欲しいんやけど、ええかな。」

「え？それは構わないけど、どうして？」

「僕は、九十九神を人の姿にする術を使えるようになった。もし自力で想いを伝えられない九十九神がおつたら、僕が手助けしてやれるかもしれん。ただ倒すだけなんは、可哀想やろ？僕は、なるべく話し合いで解決したいんや。」

その言葉には、ピートは勿論愛子も夜叉丸も感動していた。人と妖魔との共存という、ピートが目指す世界とリンクする考えだし、愛子にとってもそれは理想だった。夜叉丸は鬼道の言葉に初代の姿を重ねている。発言が、まるで同じだったからだ。

「分かった、その時は君に知らせるよ。」

そう言って、ピートと鬼道は固い握手を交わした。もし…この光景を和樹が見ていたらどれだけ喜んだ事だろう。この世界は、和樹の夢見た世界に向かって確実に梶を切り始めていた。

## 第五十話 ジークの本性のはなし

結界要員として会場に張り付いている和樹は、試合の合間に休憩をとる事が出来ない。すべての試合が同じタイミングで終わる事などまずないからだ。よって、和樹の休憩はほんの数回。その間は鬼道と美智恵、数人の結界スタッフに任せる事となる。まあ、今回は無茶な真似をする者が居ないので難しい事ではなかった。

この日、二回目の休憩を取っている和樹は、落胆していた。その原因は、日陰。棄権は和樹が勧めたが、会場から居なくなっていると知ってガツカリしていたのだ。

(休憩中に話が出来ると思ってたのに……)

トイレの洗面台で手を洗いながらため息をつく。すると、目の前の鏡に奇妙な影が映った。

『ハ―イ、横うち。』

「ぶはっ!?!? な、なんて登場の仕方しやる!」  
くわえていたハンカチを吹いてしまった。

『いや、日陰が居なくなっただけで寂しそっやから、慰めに来たんやないか。優しいやろ?』

「親父ん所か魔界に帰れ。トイレでサタンとかどんな絵づらだよ。」  
どうしてもキツく当たってしまう和樹。今は、とても機嫌が悪い。

『まあまあ、そう言わんといてや。日陰の事やけどな。神社に住む事になったから。』

「…え？」

『今日中に移り住むらしいで。藤姫なんかはそれ知って喜んどるわ。家事出来るのが増える言うて。』

和樹の顔が、輝き出す。やった！一緒に住める！いつの間にか居なくなつててガツカリしていた矢先に、とんでもなく嬉しいニユース。和樹は…喜んだ。サタンを鏡から引きずり出して。

『わ、わ、なにすんねん！』

「よっしやあああつ！これが踊れずにいられるかー！」

手を取り合いダンスを繰り広げる。トイレで。サタンと。

『やめえや、横うち！これほどアホな絵づらないやろ！』

「ひゃっほほーい！」

トイレに人が入って来なかったのは幸いだつた。魔界の最高指導者がトイレで踊ってるなんて、見る人が見たら発狂しかねない。結局休憩時間が終わるまで和樹はサタンと踊り続けた。

休憩を終えて会場に戻ると、和樹は美智恵たちに礼を言って結界要員に復帰した。その中で、鬼道と夜叉丸だけはコートに残っている。

「ん？どうしたんだ、鬼道。もう戻っていいぞ？」

「いや…それなんやけどな。僕らもトラブル対応出来るように残っとくわ。危ない奴がおるから。」

『ピイ、ピイ！』

夜叉丸が指差す方向を見ると、血だまりのできたコートが。そこに立っているのは…ジークだった。

「あの兄ちゃん、どうもおかしいわ。やり過ぎにしても程がある。あれも、さっき僕が間に入って止めたから死なんかあったけど…」

視線を移すと、少し離れた所で治療スタッフが必死に応急のヒーリングをかけている。やられた方は裂傷があるのだらう、まず傷を塞いでいるらしい。

「分かった。結界張ってる間は動けないしな。お前と夜叉丸なら安心して任せられる。」

『ピイー』

信頼されて嬉しいのか、夜叉丸は元気良く敬礼した。それを見て笑みを浮かべる鬼道。しかしすぐに気を引き締め和樹に言った。

「あの兄ちゃんが本気出すとしたら、間違い無くタイガー君や。そんな時は、頼んだで。」

「ああ。任せとけ。」

和樹はしつかりと頷いた。しかし…ジークはどうしたのだろう。帽子を被った時に軍人モードになるのは知っていたが、今は被っていない。普段は温厚な性格だったハズなのに…。この世界では、違ふのだろうか。色々考えるが、分からない。そう言えば、前の世界ではあんまり話さなかったなあ…。和樹は、ジークの事をもっと知っておくべきだったと後悔していた。まあ…借りてきたA Vに奴の顔がドアップで出てきた時から敵認定してただけだ。

コートに鬼道と夜叉丸が散る。和樹は会場の中央に立って結界を展開した。今は、仕事に集中しよう。ジークがどれほど強くても、きっとタイガーにはかなわない。アイツなら鼻っ柱へし折ってやれるだろう。和樹は、対戦相手を待ってボンヤリしているタイガーを見ながらそう思っていた。

会場とキャンパスの休憩所をつなぐ廊下では、ピートがジークに詰め寄っていた。先ほどの試合、余りにも残虐で酷い戦いだっただらだ。

「何故、あそこまで傷つける必要があったのですか！彼はもう戦意

を喪失していた！やり過ぎですよ！」

「…そ、そうでしたか？こちらを睨みつけて立ち上がるうとしていたように見えたのですが…。」

ジークは困惑したような表情をしている。何故怒られるのか分からない、といった感じた。

「それに、ルールには違反していないはずですし…。ピート君も、初戦で危険な攻撃をしていたでしょう？まあ、威力は抑えていたみたいですが…。」

「それは…。」

否定できない。あの男が、妖魔ハンター志望の男と同類と分かった時。恋人を殺される所を想像してカツとなってしまうた。

「ピート君…君が何故、人間にそこまで気を使うのか分かりません。彼らは、今まで魔族というだけで迫害して来たではないですか。僕ら魔族がそれを思い出してついカツとなったとしても、ルールを破っていないければ良いのではないですか？」

ピートは耳を疑った。何故、そんな結論に達するのか。この人は、人間に対する恨みを抱いているのか？なら何故人間界のオカルトGメンに…。

「そう言う考えを持っているなら、きつとオカルトGメンに入っても人と敵対してしまいますよ。何より、今の発言は社会の平和を望む者の言葉とは思えません。」

「そう…ですか。残念です、君とは分かり合えると思っていたのですが。」

そう言うと、ジークはピートに背を向けた。もう、この話は終わ



りだとも言うかのように。後ろでピートが何か言っていたが、気にしない。そのまま、通路を歩いていった。

…その口元には、笑みが浮かんでいた。

(温いな、ピート君。けど、これで君を倒すのに何の気兼ねもする必要は無くなった。君の考えでは何も出来ないという事を教えてあげるよ。)

カツカツと廊下に固い音を響かせながら、ジークはその場を後にするのだった。

会場では、その後何のトラブルも起きずに試合が行われていった。タイガーの対戦相手は相変わらず棄権続き。これはこれで珍しい現象なので、会場のブーイングもだんだんと笑いに変わってきていた。これもまた、選手たちにとってはキツい。

一方、普通にブーイングを受けていたピートは、まるで前回のユリ子を思わせる速攻で無駄無く勝ち上がった。それは彼を知っている者の多くが驚く姿。友達である横島は特に驚いていた。

「アイツ、何か悪いもんでも食ったんスか？早くトイレに駆け込みたくて速攻で片付けてんスかね。」

「横島君と一緒にしないで。彼は毎日一生懸命戦い方を考え抜いて

きたんだから。」

横島の感想に愛子が怒る。それを周りがなだめる…というやりとりが客席で行われていた頃。会場のVIPルームでは唐巢と冥菜がモニターを見ながら話をしていた。

「ピート君、戦い方が上手くなったのね。」

「ええ、シンプルで迷いが無い。判断が的確で早くなりましたね。」

唐巢はピートの努力を知っている。海でタイガーと出会った時の事を話した時から、ピートは毎日悩んでいた。自分だけ置いて行かれるような気持ちになっていたのかもしれない。仕事でも私生活でも、自分を高める為の努力を怠らなかつた。愛子に相談して、戦い方を研究していたのも知っている。

「しかし、冥菜さんの所の鬼道君も見違えました。まるで別人ですね。」

「それは、唐巢君が妙神山を紹介してくれたからよ。」

本音を言えば余計な事をしてくれた、という思いもあるだろう。

しかし今の鬼道は以前にもまして働くようになり、娘の相手もしてくれていた。逆らう所か六道の為に必死に頑張る鬼道を見て、冥菜の心に不安はなくなっていた。これも…唐巢のおかげかもしれない。

「いえいえ、私は何もしていませんよ。彼らはまだまだ若い。少し目を離していると、どんどん成長していくものですよ。」

「…そうね。うちの冥子も成長してくれると良いんだけど。」

「……………」

それは…。言葉に詰まる。

微妙な空気が訪れた。しかし二人とも、ピートが実年齢700を越えている事を完全に忘れていているらしい。彼は爆発的な成長をしないかわりに、長い年月にも摩耗しない精神力と類い希な向上心を持つ。この活躍は当然の結果だった。

「それにしても、今回は腑抜けが多いワケ。タイガー、まだマトモに戦った相手居ないワケ。」

「さつきも不戦勝だったな。私のせいで運が良くなるとかいう問題ではないぞ、これは。」

観客席でエミとゆかりがつまらなさそうにしている。エミは野菜スナックを、ゆかりはコアラのオーケストラをパクパク食べていた。

「でも仕方ないよ。タイガー君の変身、怖いもん。」

「そうっすね。猛獣注意ッスからね。俺も同じ立場なら棄権するかもしれないなあ。」

こちらは美神と横島。二人でマシユマロをモグモグ食べていた。

「というか……………」

愛子がプルプル震える。

「次はそのタイガー君の準決勝なんだから、もうちょっと緊張感もつたらどうなんですか！」

「あ、愛子さん落ち着いて！」

愛子の雷が落ちて魔鈴が抑える。愛子は、ピートの必死な姿を見ているだけに今回の試験に真剣だ。引きかえ、エミとゆかりはタイガーが資格をとつたらそれで満足。美神は仕事じゃないからリラックスしてるし、横島に至ってはタイガーとピートの決勝までは見る価値無しと思っていた。温度差が激しいのだ。

「次の相手は、あの剣を振り回してる危ない人なんですよ？少しは心配したらどうなんですか……」

愛子が本当に心配そうに言う。それに答えたのは……横島だった。

「あの場所には和樹が居るし大丈夫でしょ。第一、あの春桐って奴も致命傷になるような怪我はさせてないし。実力も大した事ないしタイガーに比べたら小物ツスよ。ただ……」

少し真面目な顔をする。

「魔族の本性出して来たら、分かんないツスけどね。」

「……魔族！？」

驚いたのはエミ、美神、魔鈴だった。魔族？何を根拠に……。それに何故、横島にそれが分かるというのか。

「横島君、なんで魔族だって思うの？」

「え？いやだつて、こないだ美智恵さんが気をつけろつて言つてたし、オカルトGメンの魔族の女の人で春桐つて人がいたじゃないですか。ほら、前にセイレーンの件で事務所に来たムチムチの…」

「ああ！そうだ、良く覚えてたね！えらいなあ、横島君！…ムチムチ？」

海での騒動の件で事務所に訪ねて来たオカルトGメンの女性。横島が飛びついた瞬間銃をぶつ放した。その銃弾をとつさに霊気装甲を施した手で掴み取った横島を見て、春桐は横島を強者と認めて正体を明かしていた。…ちなみに抱きつかれただけでキレたのは妊娠していたからだ。理由を聞いた横島は土下座して謝った。

「同じ苗字だし、トドメ刺すときに使つてた剣の雰囲気が、妙神山で戦つた小竜姫様の持つてた黒い剣に似てるんすよ。でも、アレをちゃんと使おうと思つたら魔族にならないといけないし、魔族になつて無茶やつたら和樹が止めるでしょ。ほら、何にも心配する事無いッすよ。」

聞いていた皆は呆気にとられていた。特にエミは妙神山で横島が何をやったのかは聞いていない。いや、聞いたが美神の説明では分からなかった。小竜姫様と戦つた…次元が違い過ぎる。

美神は、普段のおちゃらけた雰囲気の全く無い横島に驚いていた。それは愛子や魔鈴も同様だ。ただ、ゆかりだけは感心するだけだった。ゆかりは、横島が何者かよく知らない。キツネと一緒に海に落ちた変な男というイメージしかなかった。

「横島と言つたな。もし、奴が魔族になつたとして、和樹がまた身動きとれなかつたらどうするのだ？」

「え？んー、タイガーが負けると思わないけど…」

少し考えてから、横島は真剣な目をする。

「その時は、俺が始末しますよ。こんな所で殺しを楽しみ始めるようなら、ここで仕留めた方がいいですよ。」

愛子は思い出した。ヒヤクメが記録した動画の中で、一番驚いたのが、横島と九能市氷雅の試合だった。この試合の動画は派手さは無かったものの、横島の冷徹な一面をとらえていた。今の横島は、その時と一緒だ。

…きつと、彼は彼なりに真剣に見ているのだろう。愛子はそう思っ  
て、それ以上は何も言わなかった。

それまで白けていた会場が、俄かに沸き立つ。やっと、タイガーの戦う姿が見られるのだ。コートで準備運動をするタイガーの前に現れた男に、会場から拍手が送られる。

「これから真剣勝負だというのに、変な雰囲気ですね。そう思いませんか、タイガーさん。」

ジークはあくまでにこやかに言う。しかしその瞳には明確な殺気。ジークは決勝でピートを叩き潰す為に、どんな手を使ってでも勝つつもりであった。そう、どんな手を使ってでも…。

「…先に言うておきますケン。ワツシは、あんさんの事好かんです

ケン。なれ合うつもりは無いんジャー。」

「それは残念。まあ僕としても、あなたのような『人間』となれ合うつもりは無いんですけどね。」

涼しげな表情が邪悪に染まっている。ジークは、タイガーをまるで虫を見るかのような目で見つめた。腰の剣を鞘から抜くと、中断に構える。タイガーも、静かに両腕を前に出して大きく開いた。

『準決勝第一試合、タイガー寅吉 対 春桐・ジーク・フリード  
試合開始！』

会場が歓声にわく。

剣を振りかぶるジーク、霊装をまとい拳を振るうタイガー。両者の身体が、コートの中でぶつかり合い…

ガキイイインッ！！

凄まじい量の霊気の花火を散らした。

「や、やはり化け物か！刃が通らないなんて……っ！」

「うぬぬぬ、そんなモン、効かんのジャー！」

振り下ろされた魔剣、バラムンク。それは魔力の通されていない、ただの霊気を宿した剣。本領発揮していない状態でもかなりの力を持つのだが、タイガーの装甲は傷つけられなかった。

一旦、距離をおく為バックステップするジーク。そこに、タイガ  
ーの雄叫びが炸裂する。

『ガアアアアア！』

ズガアアアアンツ！

思わず上体が仰け反る。ジークは、その余りの威力と隙の無さに  
焦る。

（た、たかが人間にここまでのがが！？）

ジークは、人間を侮っていた。霊気出力が高くても、基本的な身  
体のスペックは魔族の方が上だ、と。人間など集団にならないと何  
も出来ない、と思っていたのだ。

（都合が悪くなると悪魔と呼び、我らを貶めようとした人間なんか  
に…負けはしない！）

ジークは、身体に魔力を通し始める。表向きは人間の外見だが、  
発せられる霊気には魔力が混じり始めた。

…それを、少し離れた所から見ている和樹と観客席の横島が見逃す  
ハズが無い。和樹は懐の文珠に『滅』の文字を、横島はサイキック  
ソーサーに『消』の文字を入れる。二人合わせて『消滅』。妙な所  
で息が合っている。この世から消すつもりだろうか。

ジークの動きは、目に見えて良くなっていた。剣での攻撃だけで



はなく、蹴りや霊気弾を織り交ぜ、多彩な攻めでタイガーを翻弄する。

タイガーはその攻撃を巧みにはじいて見せるが、徐々に押されてきていた。

「ぐううう…。これは…」

「手も足も出ないようですね！降参すれば、命まではとりませんよ！」

明らかに楽しみ始めたジーク。その目に狂気が宿っていた。タイガーは繰り出される攻撃をただひたすら耐え続ける。ジークは益々魔力を高めていった。

ガスッ！ガスッ！バキィッ！

「ぐ、ぐうおお…！」

攻撃がスピードと威力を増して行く。霊気装甲の上からも、タイガーの肉体にダメージを与え始めた。このままでは、危険だ。

しかし、それを見ていた和樹と横島の目は冷静だ。いや、少し驚いているかもしれない。タイガーの身体に、小さな渦が急速に回転し始めているのを感じていたのだ。そして…

「タイガー、頑張れー！！！」

「そんな奴に負けるんじゃないワケー！」

ゆかりとエミの声援が聞こえた。途端に、タイガーの身体が黄金に輝き出す！

『ガアアアアアアッ!!』

ドガアアアアンツ!

「うわあああっ!?!」

それまで攻め立てていたジークの身体が吹っ飛んだ。余りの勢いに場外になりそうな所を、何とか踏みとどまる。そして、タイガーの方を見て…驚愕した。

そこには、初戦で見たサーベル・タイガーモードに良く似ているが…全身を覆う霊波が見えない。これは、完全に物質化している!

目の前には、黄金の毛並みを持つ最強の獣の姿があった。獣は、その鋭い眼光をジークに向けて言い放つ。

「これからは、ワツシの番ですケン。覚悟してつかあさい。」

右腕が怖ろしいまでの霊気をまとい、振り上げられる。そこから、全身のチャクラを回して練られた霊気の塊が放たれた。

「こ、これはマズい!」

すんでの所で避けるジーク。霊気塊はそのまま突き進み、四つのコートの中で結界を張り続ける和樹の元へ…

「おいおい…!」

ズガアアアアンツ！

直撃した。

…かに思えたが、身体は全くの無傷。その和樹は目の前に見慣れたものを見て、笑みを浮かべた。

「全くあいつも心配性だな、これくらい平気なのに。まあ、あとで礼くらいは言っておこうか。」

『消』の文字の書かれたサイキックソーサーが砕け散るのを見ながら、和樹はつぶやいた。

## 第五十一話 エミと野獣のはなし

タイガーの霊気の塊が和樹の眼前ではじけた時。目の前でサイキックソーサーが砕けるのを見ながら、和樹は不思議に思っていた。

(何でアイツのソーサーがここまで届いたんだ？俺の結界を貫く威力なんてなかったのに…)

しかし、次の瞬間その理由が分かった。すぐそばに来た鬼道が、教えてくれたのだ。

「あの横島つて人も無茶しよるな。あんな結界にぶつけられたら結界が弱まってまうわ。」

手には、結界破りの札。天竜が持っている札と同じ物で、自作したらしい。つまり、さっきの横島の投げたソーサーを見て、一瞬で意図と方向を察知してソーサーの進行方向の結界だけを破ったようだ。

「器用だな、鬼道。その札、天竜に見せてもらって覚えたのか。」

「せや。ついでにいろんな札見せてもろた。…ところで、タイガー君大丈夫なかな。あれ、人に戻れるんか？」

「暴走してるワケじゃないから大丈夫だろ。今ん所はな。」

「今ん所って…。」

不安そうにコートを見る鬼道。虎となった男は、今まさに褐色の

青年に殴りかかるうとしていた。

ブウンツとうなりを上げて振るわれるフック。ジークは必死にそれを避ける。剣で受けると身体ごと吹き飛ばされ場外になってしまふのだ。一発もらつとアウト、というギリギリの戦いを強いられていた。

(バルムンクを解放すれば…いや、流石にそれをやったら姉上に殺される。どうやって乗り切るべきか…)

魔族に戻れば一気に力を上げる事が出来るが、それは禁止されている。が、一瞬なら大丈夫ではないか。勝つ為には手段を選んでいられない。

「ハアーツ！」

ジークの手が、輝き出す。巨大な靈気弾をタイガーに向けて、発射した。

ズガアアアアン！

「ぬうつううつ！」

少し怯むも、直ぐに体勢を立て直す。これくらいの靈気では傷などつかないのだ。

威力は無く、見てくれだけの霊気弾：タイガーはそう判断して、一気に間合いを詰める。しかし、それはジークの思うつぼだった。はじけた霊気はもやとなり周囲に立ち込める。不自然なくらいに視界を遮っていた。

「一瞬だけ、本気を出します。」  
そう、それは本当に一瞬。

タイガーの正面に立っていたジークの肌の色が薄紫に変わると、瞳が金色に光り、タイガーの動きを止めた。魔眼だ。

「……………っ!？」

タイガーは、身体を震わせる。ジークはほくそ笑み、その姿を人間に戻す。これは、精神を直接攻撃する魔眼。今、タイガーに植え付けたのは恐怖だ。想像しうる、最悪なシチュエーションでの恐怖。今それを、タイガーは体験している。

タイガーは…ジークの術中に嵌ってしまったらしい。幻術をかける事はあっても、かけられた事はなかったのだ。それも、自分とは違う方法での術。対処しようがなかった。

「さて…後はどう料理してあげましょうか。」

余裕の表情を浮かべるジーク。人間相手に苦戦したのが悔しかったのか、切り刻む気満々に剣を構えて近づいて行く。そんなジークの耳に、固まって震えるタイガーのつぶやきが聞こえてきた。

「…なんで、殺したんジャー…。」

「は？何を言っているんですか？」

「何故、ゆかりちゃんを…エミちゃんを殺したんジャー…」

ああ、なるほど。身内か誰かを殺された幻を見ているのか。ジークはニヤリと笑って言い放つ。心を、壊してしまえ。

「目障りだったんです。理由なんて、それで充分でしょう。」

次の瞬間、タイガーが爆発した。

『ゴアアアアアアアアッ！』

それは、叫び声だろうか。まるで、戦闘機の爆音にも似た音を立てて、タイガーはまた姿を変える。それは…真っ黒な虎だった。金色に輝いていた毛並みが、真っ黒になっている。その表面の虎縞も、赤い禍々しい色のラインとなっていた。

タイガーは、暴走した。

極限まで霊装を高めた状態での暴走。それは…魔装術の暴走と同じ原理だ。未熟な人間が魔装術をコントロール出来なくて暴走するように、全身のチャクラを回して初めて可能にするタイガーの霊装術の第三形態は、そのコントロールを失うと容易く暴走してしまうのだ。

暴走したタイガーは、目の前の敵を倒す為だけに生きる殺戮マシンとなっていた。ジークの肩を素早く掴むと…

バキバキバキ…

「ギヤアアアアッ！」

一瞬で砕いた。そのまま、腹部に拳を入れる。

ドムッ…！

「ゲハッ……………ッ！」

大量の血を吐き出す。ジークは、それだけで意識を失った。タイガーはジークを場外へと放り投げると、地面に転がっていたバルムンクを拾い…

「こんなもんが…こんナモンがゆカリしゃんとエミしゃンヲ…」

倒れるジークへと向かって振りかぶった。

「何してる！審判、試合を止める！」  
和樹が審判に向かって叫んだ。

『はっ…！？ し、勝者タイガー寅吉選手！タイガー選手、もう攻撃を止めなさい！』

我に返った審判は、タイガーを遠巻きに見ながら声をかける。身を呈して止めるのは怖くて無理らしい。

「チッ、んな事遠くから言っても意味ねえだろ！鬼道、行くぞ！」

「ああ、分かった！」



結界を消して、和樹と鬼道がタイガーに向かって走り出した。タイガーは…あの剣を投げてジークを殺すつもりだ。これはマズい！試合後に攻撃して怪我を負わせたら失格となってしまう。

…しかし、遅かった。

タイガーは、バルムンクを投げてしまった。

凄まじい勢いでバルムンクはジーク目掛けて飛んでゆく。距離は五十メートルくらい。もはや間に合わない…誰もがそう思った時。ジークの前に一人の影が飛び込んで来た。

「夜叉丸！？無茶や、戻れ！」

鬼道が悲鳴に似た声を上げた。和樹と鬼道がタイガーに向かって走り出した時、夜叉丸だけはジークの方へと走っていたのだ。夜叉丸は全身全霊を込めて持っていた刀を構える。はじいて方向をそらすだけでも良いのだ。それで、この男は助かる。しかし…

自分は、ダメかもしれない。

相手は、伝説に謳われるような魔剣。自分は、ただの刀の九十九神。勝負にもならないだろう。けど、逃げるわけにはいかないのだ。ご主人様に任された仕事なのだ、遂行してみせる！

夜叉丸は、飛んでくるバルムンクに向かって持って持っていた刀を振るう。霊気の塊が放たれ、バルムンクに直撃した。バルムンクは…勢いを殺さずそのまま夜叉丸へと迫る。

「夜叉丸ーっ！」

「くっ、間に合え！」

和樹が双文珠を投げつける。入れた文字は『粉碎』。バルムンクが夜叉丸に届く前に命中すれば、助かるはずだ。しかし先にバルムンクが夜叉丸に届いてしまったら…夜叉丸ごと砕け散ってしまうだろう。咄嗟の事で、和樹も動揺してしまっていた。

そんな中。一人の冷静な男によって夜叉丸は救われる。

靈気を放出していた夜叉丸は、不意に、何かが身体にぶつかるのを感じた。それは、六角形の靈気の板。そこに書かれた『強』の文字が、身体に染み込んで行くと…

『ピイツ…！？』

途端に、身体から放出される靈気の勢いが増す。身体に流れる靈気自体も、かなり濃く強くなっていた。

夜叉丸の靈気は、バルムンクを空中で一瞬停止させる。そして、それは一瞬で充分だった。

『粉碎』の双文珠がバルムンクに着弾し…

バライイイイン……

砕け散った。

夜叉丸は、その場にへたり込む。助かった…。しかし、最後のアレは何だったのか。不思議に思いながら、夜叉丸は先ほどの靈気の板が飛んできた方向を見上げた。そこには、同じようにホツとしたような横島の姿があった。

「よ…横島さん…？」

皆が言葉を失う中、魔鈴が横島に話しかける。しかし横島は険しい顔で口元に人差し指をあてた。しゃべるな、と言う合図だ。

横島は、ただ耳を澄ませているが…観客の声がうるさくて中々聞き取れない。タイガーは一体、さっきから何を言っているのだろうか。

「エミさん。タイガーの声、聞き取れますか？」

「え…？いや、無理なワケ。こんなに客が居ると…」

横島はうっとおしそくに周囲を見渡す。タイガーの暴走に動揺した人たちのざわめきが、本当に邪魔に思えた。

「横島。私たちをコートに下ろす事は可能か？タイガーの近くで言葉聞いてみたい。」

「そんな、危ないよう！タイガー君、今暴走してるのに…！」

ゆかりの提案を、美神が慌てて止める。見ると、タイガーは未だに幻術にかかっているのか暴れ続けていた。和樹と鬼道がそれを必

死に止めている。確かに、これは危険だ。

しかし横島はゆかり達のそばに行つて言った。

「少し、我慢してくださいね。」

エミとゆかりを両脇に抱える。ゆかりは平然としてるが、エミは困惑していた。

「あ、あんた一体どういふつもりなワケ!？」

「今からコートに下ります。エミさん達の言葉なら、タイガーも聞くと思うし。ちょっと、タイガーを叱つてやつてくれないか。」

いつものセクハラ少年ではない、真面目な顔。エミは少し気圧されながら頷いた。

横島は、二人を抱えて二階客席の柵に足をかける。その足にサイキックソーサーを展開し、『飛』と文字を入れた。その途端、横島の身体が宙に浮く。

「所長は待つて下さい。すぐ戻りますから。」

「う…うん…。」

戸惑う美神。横島は返事を聞くと、タイガーの待つコートへと飛んで行った。

コートでは、和樹と鬼道がタイガーを取り押さえている。とにかくタイガーに意識を取り戻してもらって、霊装を解かせなくてはならない。が、文珠などで強引に意識を取り戻させるのは危険がともなう。心象を反映させる霊装術はかなりデリケートな技なのだ。

和樹は前の世界で、これと似た状態になった人間を知っている。陰念と勘九郎だ。陰念は暴走した後に倒され、半年近く化け物の状態になっていた。勘九郎は完全に物質化させたが心を魔に魅入られてしまい、人に戻れなくなっていた。

どうすれば、タイガーを元に戻せるのか…。そう思ってタイガーを取り押さえていると、タイガーの口から言葉が漏れているのに気づいた。

「ゆかりちゃん…エミちゃん…守れなくて申し訳ないんジャー…」

先ほどより動きは鈍くなっているの、なんとか聞き取れた。なるほど、二人を失った幻覚を見せられているのか。なら、あの二人の姿を見せれば…

その時、絶妙なタイミングで横島が現れた。両脇に、エミとゆかりを抱えて。

「和樹、今手伝う！」

「悪い、横島！二人の声を聞かせてやってくれ！二人が殺された幻覚見せられてんだ、コイツ！」

なる程、暴走するわけだ。なんかブツブツ言ってたと思ったら、二人の名前をつぶやいていたのか。横島はすぐに二人を離す。エミとゆかりは急いでタイガーの前に駆け寄った。

「タイガー、目を覚ますワケ！私たちならここに居るワケ！」

「タイガー！大丈夫だぞ、私たちは生きている！」

必死で呼びかける二人。しかしタイガーの目には二人の姿は映っていない。いや、映っているのかもしれないが、認識されていないのだ。本当の二人は死んでいて、今目の前にいる二人を幻と勘違いしていた。

「ゆかりしゃんの為に資格を取ろうとしたのに…エミしゃんの為にここまで来たのに…」

黒い虎の目から、大粒の涙がこぼれ落ちる。動きが止まり、ただ嗚咽し始める。エミは何度もタイガーを叱りつけるが、一向に元に戻らなかった。…こうなったら、仕方がない。ゆかりはエミの耳元で何やら囁いた。

「…はあ！？ば、馬鹿言ってる場合じゃないワケ！」

「至って大真面目だ。幻よりも現実の方が良いものだと思わせればいい。だいたい、この間見た映画でもそれで解決していたぞ。」

「あ、あれはおとぎ話なワケ！そんなので解決するなんて…」

出来るかもしれない。タイガーはエミにベタ惚れだ。やる価値は

ある。

「わ、分かったワケ！これで戻らなかつたら袋叩きにするワケ！」

顔を真っ赤にして、エミが言う。そばで聴いていた和樹と鬼道、横島も大体何をするか分かった。和樹は紳士的に顔をそらし、鬼道は駆けつけた夜叉丸に目を塞がれている。唯一、ガン見しようとしていた横島は…

「うりゃっ」

ブスッ…

「痛ーっ!？」

ゆかりに目を突かれた。

七転八倒する横島を後目に、エミは泣き続けるタイガーのすぐ前に立つ。両手をタイガーの頬に添えると、顔を近づけた。

「よく見るワケ。あんたの大切な人は、ちゃんと生きてるワケ。」

そう言って…エミは、その唇をタイガーの口元に押し当てる。会場の客達もいきなりの展開に驚き固まった。そして…

さらに驚く事になる。

タイガーの真っ黒だった毛並みが金色にもどり、さらに霊装術も解けて人の姿に戻ったのだ。タイガーは…顔を真っ赤にして呆然としていた。

「エ…エミじゃん…？死んでないんですかいノー？ゆかりちゃんも…」

「勝手に殺さないで欲しいワケ。ま、公衆の面前でこんな事して死にたいくらい恥ずかしいけど。」

エミはタイガーをしっかり抱きしめた。

「あんたより先に死ぬなんて有り得ないワケ。そうでしょ？あんたは、私をずっと守り続けるんだから。」

そう言っつて、もう一度キスをする。今度はちゃんと、唇を合わせた。もはや沸騰寸前のタイガーは、エミの熱烈なキスを受けて…

気絶した。

「…救護班、呼ばか。鼻血出とるし。えらい勢いで。」

「なんつーか…。まあ名場面ちや名場面だよな。映画なら。」

鬼道と和樹が呆れながらつぶやく。しかし観客席は大盛り上がりだった。明らかに某大作アニメ映画のクライマックスシーンそっくりな二人だったのだ。いっそ幻術使つて踊らせようかと思っただらいた。

ちなみに横島は…

「ムガア！見えない！聞こえない！何故だあああつ！」



「やかましい！今いい所なのだ、お前の情欲の視線で二人を穢すな！」

うつ伏せで倒れた後頭部の上に、ゆかりが座ってブロックしていた。太腿で横島の耳も塞いでいる。確かにこれなら身動きとれないだろう。だが…

（こ、これはこれでいい感じ！…いや、でも相手は子供だし！だけどスベスベの太腿が気持ちいい！ロリやない、ロリやないのに…！目覚めそうな予感！！）

横島が危ない方向に覚醒しようとしていた。そうとは知らないゆかりは、フンフン鼻を鳴らす横島を無視してエミを見つめていた。顔中血まみれでタンカに乗せられ運ばれてゆくタイガー。それを見つめるエミは、見たことの無い優しい表情をしていた。

「上手くいけば、今日にも同居し始めるな。ふふふ、座敷童子ではなくオフィス童子となる日も近いぞ。」

良くわからない事を言いながら、ゆかりはほくそ笑むのだった。

## 第五十二話 辿り着いた秘密のはなし

映画のようなワンシーンに会場が騒然となっている頃。観客席でただ一人だけ、困惑した表情をしている人物がいた。美神ひのめだ。横島の変貌に戸惑いを隠せないでいる。

「横島君…どうしちゃったんだろう。何で、今日はあんなに怒ってるのかな…。」

思えば、横島の様子は妙神山での修行で怒った時から変わってきた。それはGS試験の決勝で顕著になったが、その後暫くは元のおちゃらけた横島に戻ってきていた。夏休みでは一緒に楽しく仕事をしてきたのだが…。

つい最近の事だ。

横島は、不思議な事を口にするようになった。

「所長…。所長にお姉さんって、居ないツスよね。」

「ふえ？うん、居ないよ。一人っ子なの。お姉ちゃんとか、欲しかったよう。」

事務所での、何気ない会話。しかし、あの時の横島はなんだか変だった。そして、その後も…

「嫌な夢見たんスよね。俺が、沢山の人に追われてるんスよ。」

「俺、GSになるの二度目じゃないんだろうか…。」

「和樹……。アイツを見てるとなんか引つかかるんだよなあ……。」

そう言っただけ物思いにふける事があった。勿論日頃仕事をしっかりしているから文句などなかったが、何だか遠い目をする横島を見てみると、言いようのない寂しさを美神は感じた。

だから、今の横島は何だか怖い。放っておくと、勝手にどこかへ行ってしまいそうな雰囲気なのだ。しばらくして客席に横島たちが帰って来たが、美神は笑顔で迎える事が出来なかった。

「いやー、タイガーもまだ不安定ツスね。チャクラ安定させる事が出来るまで、アレは封印した方がいいツスよ。」

「あんたみたいな化け物と一緒にしないで欲しいワケ。変身なんてしなくても、GSの仕事ならタイガーは充分トップクラスの成績収められるワケ。」

「言ったツスね？見てて下さい、うちの所長だつてデカイ仕事ガンガンこなして行くくらいになりますから！ね、所長！……所長？」

横島の問いかけにも、ぼんやりとして反応出来ない美神。目の前に手のひらをヒラヒラとされて、初めて横島に気づく。

「えっ！あ、なあに、横島君？」

「……いや、これから頑張らしましょうね、と言っただんすけど……。」

「う、うん！頑張るよお！とりあえずこのまま、ギリギリ黒字を維持し続けるの！」

「いや、もっと目標上げましょって！で、事ある毎に俺の給料上げようとするの止めて下さい！それを無くせばもっとプラスになるんだから！」

「でも、横島君に喜んでもらいたいんだもん……。」

いつもの、他愛も無い会話に戻る。美神は、あえて横島に何も聞かなかつた。聞くと、何処かへ行ってしまいそうな気がしたからだ。聞かなければ……関係は変わらない。遠くへ行く事も無いんじゃないか。そう、思っていたのだ。

ゆかりの太腿の話で盛り上がる横島にわら人形を見せて脅しながら、美神はこのままの関係が続く事を願っていた。

医務室にて。ジークは医療スタッフたちをはねのけると、血だらけのまま医務室を出る。引き止めようとするスタッフたちを魔眼で引き返らせ、一人、ジークは廊下を歩いていた。魔力を全身に通して血を止めると、フラつきながらも姿勢を正す。その背後には、神通棍を構えた美智恵の姿があった。

「見たわよ。今の魔力といい、アナタは魔族ね。」

「……だったら、どうだと言っんですか。今、僕をこの場で殺すんですか？罪無き命を切り刻んで来たその神通棍で。」

ジークは前もって美神美智恵を調べていた。任務遂行最優先、大を取って小を切り捨てるやり方で、多くの人間を助けて来たが…多くの罪無き魔族や妖怪を切り捨てて来た人物だ。魔族からは、危険視されてきた人物。それが、美神美智恵である。

「アナタが…いや、アナタたちがオカルトGメンを乗っ取って何を企んでいるのか教えてくれたら、殺さずに済ませてあげるわ。」

「フン…。どうせ何を言っても信じず殺すつもりでしょう。結局人間は魔族を殺す対象としか見ていないのだから。」

ジークの人間不信は根強い。そして、美智恵の魔族不信も同様に根強いのだ。水と油、混ざり合う事は無い。

一触即発、そんな緊張感が漂う中。その場に現れた第三者によって、その空気は破壊された。

「そこまです。こんな場所で争い事は止めて下さい。」

それは、ピートだった。

ピートはジークと美智恵の間に割って入ると、携帯電話を取り出す。アドレスを和樹の名前に合わせて言った。

「それ以上がみ合うなら、彼に止めてもらいます。お二人がやり合うより酷い事になると思いますよ。」

にこやかに言うピート、青ざめる二人。美智恵は和樹の滅茶苦茶さは良く知っているし、ジークもメフィストのファイルや前々回の和樹VS芦優太郎を見ている。タイガーにこてんぱんにされた自分が、人類最強レベルに勝てるワケがない。

「…何故、魔族の彼を庇うのかしら。やっぱり、貴方も彼と同じ穴のむじなのかしら。」

美智恵が睨みつける。ピートの素性を知っている彼女は、唐巢の保護下にいる彼でさえ信用していないのだ。

「いえ、単純な話ですよ。彼は正規の手続きを踏んでここにいる。魔族だろうが人間だろうが妖怪だろうがハーフだろうが…GS協会が受験資格を認めたのなら彼は一般の受験生です。彼を攻撃するのはおかしいでしょう。第一、Gメンを退いた貴女に彼を逮捕したり尋問する権限はないハズですよ。」

ピートは、あくまで冷静だ。美智恵の挑発には乗らない。これは決して冷静さを失わない彼らしい所であった。美智恵は苛立ちを隠せない様子だったが、ピートの涼しげな笑顔に次第に毒気を抜かれて行く。神通棍をしまつと、ため息をついた。

「分かったわ。今回はこれで退きます。けど、魔族が我が物顔で人間界をうろつかない事ね。ここはあくまで人間の世界なのだから。ルールを守らず好き勝手するなら、そのうち報いを受けさせてあげるわ。」

それは、どちらに言った言葉なのだろうか。ピートとジークの両名はその言葉に少し苛立ちを抱いたが、今はただ我慢して美智恵が去って行くのを眺めていた。そして…

「ピートさん。何故、僕を助けたんですか。貴方とは袂を分かったハズなのに。」

ジークは疑問を投げかける。あんな言い合いをした相手を助けるなんて、理解できなかった。このピートという男は、一体何を考えられているのか。

「何故も何も……。怪我人が絡まれてたら普通助けるでしょう。こんな場面で、主義主張を言い合う人がどうかしてるんです。」

そう言うと、ピートはジークに肩を貸す。しっかりと支えると、そのまま医務室へと歩き出した。

「え、いや、僕は医務室へは行きません！」

「怪我人は黙っていて下さい。魔力を通した所で怪我自体は全然癒えてないじゃないですか。」

グイッと肩を掴む。

「ギヤアアアツ!？」

泣き叫ぶジークを、ガツチリとホールドしてピートは医務室へと連行して行くのだった。

タイガーの試合と騒動が終わり、約20分の休憩を挟んでピートの準決勝が始まった。とは言っても、先ほどの戦いが嘘のように簡

単に決着がついてしまい、観客席はブーイングの嵐である。このブーイングは、ピートではなく対戦相手に対してのものだ。あまりに呆気なく負けてしまうから、ピートの敗北する姿が見たい男連中から容赦のない罵声を浴びていた。

そんな試合を、唐巢は静かにVIPルームで見つめていた。その表情は、穏やかだった。

「凄いわね」。ピート君なら、タイガー君にも勝てそうよ。」

冥菜は言うが、唐巢は困った顔で首を横に振った。

「いえ、それは無理でしょう。彼は、肝心の打撃力とスタミナで圧倒的にタイガー君に劣る。こうした霊的格闘では彼の方が圧倒的に不利です。ただ…現場で最も活躍するのはピート君でしょうね。彼の判断力は並みでは無い。」

唐巢は、若手の霊能者の中では和樹の次にピートを評価していた。それは、除霊の現場に立ち会って評価した結果だ。唐巢は和樹が死神を退けユリ子の母を救った姿を見て、まず和樹の洞察力と実力を高く評価していた。次にタイガー。海での一件でその成長に驚いていたが、まだ自分だけで判断するには知識に乏しい面が見受けられた。そして、横島。彼の活躍は美神伝えに聞いてはいるが、前回試験で集音マイクの拾った彼のセリフを聞く限り、直情径行にあるのは否めない。九能市氷雅に対する脅しやユリ子に対する言葉は、決して誉められる物ではないと唐巢は感じていた。

しかし、ピートは違う。

格闘技術は拙い所があるが、彼の冷静な判断力と正確な動き、揺



るがない精神力はGSとして生きていくにはこれ以上無い資質である。魔の力を持ちながら、神の加護を受けられる面も素晴らしい。霧に変化したり、コウモリのような超音波攻撃まで出来る器用さもポイントは高い。

そして、何より人当たりの良さ。実際に現場に連れて行った時、怖がる依頼者のメンタルケアをしてくれたのは本当に助かったのだ。にこやかな笑顔と紳士的な振る舞いが依頼者たちを安心させ、信頼をも得る事となった。この点では、和樹よりも評価は高い。

唐巢は、ピートをずっと見ていただけに勝ち目が無い事を良く知っていた。が、今回の敗北で彼の評価を下げる事は無いだろう。彼は決勝にまで駒を進めた。それだけで賞賛に値するのだから。

ピートの準決勝がさつさと終わってしまった事もあって、和樹は決勝までの間ゆっくりと休む事が出来ていた。決勝は丁度30分後。会場も一旦休憩に入る人間でガヤガヤと騒がしくなっていた。

「トイレも行ったし、しばらく暇だなあ……」

ふわぁ、と欠伸をする和樹。さすがにタイガーの暴走にはビビったが、それ以外では大したトラブルは無かった。次の決勝はタイガーとピートだから、暴走する事は無いだろう。なら、もう安全なハ

ズだ。

「なんか、気い抜いてんな。大丈夫か？」

そこに声をかけてきたのは、横島だった。いつの間にか、横島はまたコートの上に降り立っていた。

「お前：一応、ここは客の入れない場所だからさ。早めに出てった方がいいぞ？」

少しこちらを責めるような口調で言う横島に、ムツとする和樹。先ほどの失態は反省している。これ以上言われるのは気分が悪かった。しかし、横島は続けて言った。

「何うかれてんのか知らねーけどさ。次はミスるなよな。」

「ああ？」

さすがにカチンと来た。

そんな言い方あるか、と。

しかしその横島の顔を見て和樹は冷静になる。…なんだ、コイツの顔は。どこかで見たような雰囲気だと思ったら、以前の俺じゃないか。何故コイツがここまで俺の感覚に近づいてるのは分らないが、原因の一つは恐らくアレだ。

「横島、俺のやった水晶文珠で何やった？」

ここで、初めて横島の顔に動揺が走る。クールな仮面が取れて慌て始めた。

「ななな、なんの事だよ。水晶文珠？家に置いて来たけどな。」

「なる程…女体化した俺が際どいポーズをとったとしても本当の事は言えないと。」

「水晶文珠に『模倣』って入れました。」

一発で白状した。

「お、おま…何て事しやがる！」

一気につかみかかる和樹。襟首を締め上げられ横島は顔を真っ赤にした。

「わ、悪かった！悪かったから助けて！」

「この野郎、どこまで知った！何でんな事しやがった！」

ガクンガクンと揺さぶる和樹。横島は目を回しながら言った。

「じ、自分で中々文珠出来ないから水晶文珠を見ながら練習して作ってたんだよ！けど上手く行かないから『模倣』って入れてお前の真似してみたんだ！そしたら…」

横島の顔が少し真剣になった。

…最悪だ。

一番、バレて欲しくない男にバレてしまった。

自分にも、『模倣』の威力は分かる。かつて、アシユタロス相手

に使った事があるからだ。頭の中を読み…知識をある程度得る事が出来る。

横島は、和樹の頭の中を覗いてしまったのだ。

「それから…何度かお前をイメージして模倣した。曖昧な知識しか見れなかったけどさ、知っちまったんだ。お前が…向こうから来たって事…」

和樹は、その場にへたり込む。なんて事だ。頭の中に思い浮かべた人物から知識を得るとかムチャクチャもいい所だ。

「悪いとは思ったよ。けどさ、気になるだろ。たまたま見たのが、俺が死ぬ所だったり…俺が、所長に似た女の人にこき使われてる場面だったら。それからは、一々水晶文珠を使わなくても夢で見るようになった。」

ああ、そうだろう。知識としては、全て頭の中に入っているのだ。夢という形で記憶の整理をしているんだから、これからも見るだろうさ。和樹はうなだれた。横島は、済まなさそうに和樹を伺う。

「で、横島は俺をどう思った？」

静かに、和樹が問いかける。怒りすら沸かない。ただ、脱力していた。

「どっつって…悔しいに決まってるだろ。」

……ん？

「お前が俺なら、何でこんなに差がついてんだよって思うだろ、普通。」

……はあ？

「言っちゃ悪いけど、お前って逃げてばっかしたじゃねーか。努力したんだろうけどさ、今のお前の強さと繋がんねーもん。」

それを言われると言い返せない。逃げながら戦ってきたような気がする。和樹は複雑そうな顔で横島の言葉を聞いていた。そして、少し考えてから口を開く。

「横島。一つ言っておくが、俺とお前は違う存在だからな。俺の記憶を読んだからって、引きずられんなよ。」

「う…まあそうかもしれないけど…。」  
実は、和樹の『模倣』には結構お世話になっていた。和樹の真似をすると、冷静に考える事が出来るのだ。態度もクールになって、ちよつとカツコいいかなと思っていたのだが。

「いいから、やめろ。なんか気持ち悪いから。それにな、そんな事しなくてもお前は充分強いから。俺は俺だけの力で強いんじゃない。一人の力ならお前と同じかそれ以下かもしれないし。」

これは、少し言い過ぎかもしれない。が、ルシオラと小竜姫の魂と同化しているから神魔級の力を扱えるというのは事実だった。横島はまだ夢を少ししか見てないので、和樹の事が理解出来ないでいる。

「それと…気になったんだけどな。お前、俺が自分のもう一つの可

能性と知ったんだよな？」

「え？ああ、何となくだけどな。」

「何で自分の女体化工口ポーズを見たがるんだテメーは！俺はそこまで堕ちてねーぞ！」

「なっ…！」

横島も今気づいた。そうだ、確かにそうなる！何故今まで気づかなかったのか！…しかし、今は弁明をしなければならぬ。このままでは変態だと思われる！

「え…ええやんか自分のチチなんやし！お前のチチは俺のチチじゃー！」

変態がエスカレートした。

「聞いた事ねーよそんな理屈！ナルシストってレベルじゃねーぞお前！」

先ほどまでのシリアスムードが一変してギャーギャー騒ぎ出す。和樹にしたって前の世界でユニコーン捕獲作戦の際に女体化した自分に見とれてたりするのだが、その事は忘れてしまっているらしい。二人は休憩時間が終わり、戻ってきた鬼道が止めるまで口喧嘩を続けるのだった。

そして、それを見つめる男が一人。…いや、二人が。

『やっとこの横つちが和樹の正体にたどり着いたか…時間かかりすぎやけど、ご褒美あげところか。』

「後で和樹に怒られても知らんぞ…。」

サタンの言葉に少しウンザリしながらも、公平は客席に一人寂しく座る美神に近づいた。

「やあ、所長さん。今、少しいいかな。」

「あ、芦原さん。はい、大丈夫です。」

横島が和樹の所へ行つてしまい気落ちしていたが、それを隠して美神は公平と向き合った。公平はそんな美神に袋を差し出す。

「うちの和樹が世話になつてるからね。ほんの気持ちだよ。前横島君が破魔札の仕入れに来た時は余り安くしてあげられなかったから、その埋め合わせみたいなものだと思つて欲しい。」

何だろう、と袋を覗き込んだ美神は、絶句して固まった。

袋には、夥しい数の文珠。これは、和樹が興奮して作りまくったあの文珠だった。

価格にしたら小さな国の国家予算並みだ。これは…手にするのが恐ろしいくらいの贈り物。心臓をバクバク言わせて、美神は公平を見る。呑気に笑っていた。

「あ、あの、その、これは幾ら何でも…」

「転売しなければ何に使つても構わないから。これからも、うちの息子を宜しく願います。」

頭を下げてから去って行く公平。美神はその背中を見送りながら、コートで和樹と口喧嘩している横島に心の中で助けを求めている。

（どうしよう、こんなの持ってたら狙われちゃうよう！横島君、はやく戻って来て！怖いよう！）

これが令子なら有頂天になっていただろう。美神家の人間とは思えない気弱な目をしながら、美神は横島を見つめていた。



## 第五十三話 完全燃焼のはなし

タイガーは、基本的に優しくのんびりした性格をしている。だから、エミヤゆかりが無事だと分かったらジークに対して怒りを抱く事はもう無い。寧ろ、重傷を負わせた事を申し訳なく思っているくらいだ。今も、ピートに無理矢理連れられては来たジークを目の前にして、済まなさそうな顔をしていた。

「すみません、この人の治療をお願いします。粉碎骨折と内蔵をかなり傷つけているみたいですから」

ピートが声をかけると、ナース姿の冥子が反応した。ジークの姿を見つけて、少し怒った素振りをする。

「あゝ、どこ行ってたの〜！探したんだから〜」

十二神将のシュウトラを出して、パタパタと駆け寄ってくる。ジークはウンザリした顔で視線をそらすと、ピートに恨み事を言った。

「覚えておいて下さい。この屈辱は、いつかお返しします」

「え？ いえ、さつき僕、貴方を助けましたよね。これで貸し借りゼロにしましょう」

さらりと言うピート。ジークはからかわれたと思っていきり立つが、すぐに冥子の放った十二神将によって無力化された。

「ぎにゃあああああっ!?!」

「さ、タイガー君行きましょう。鼻血、止まりましたよね？」

「は、はあ。止まった事は止まったんじゃが…」

あの人は放って置いていいんじゃろうか。タイガーは不安そうにジークを見る。

「ま、待ちなさい！ 話は終わっ…」

「ダ〜メ〜なの〜！」

ボオオオオツ！

火だるまになるジーク。明らかに怪我は悪化して行ってるのだが、ピートはニコニコ笑いながら手を振ると、タイガーを連れて医務室を出て行った。

廊下を歩きながら、ピートはタイガーに話しかける。

「お疲れ様です。体調は大丈夫ですか？ 次の決勝戦は僕とタイガー君ですからちょっと気になってたんです」

決勝戦。その響きに、タイガーは不思議な顔をする。

「体調は問題ないですケン。ただ…前回、さつさと負けたワッシが決勝戦に出るとか、何だか冗談みたいなんじゃー…」

「ですよ。僕も前の試験では資格が取れなかったから、何だかピンと来ないんですよ。けど嬉しいです。同じ妙神山で修行した仲間と、こうして決勝で戦えるんですから。良く考えると、妙神山のメンバー全員が決勝戦経験者になるんですね」

言いながら気づいた。前は、横島とユリ子。今回は自分たち。皆、あの時妙神山で修行した仲間だ。さすが妙神山というか、それだけ飛び抜けた面子が揃っていたというか…おそらく両方なのだろう。言われてタイガーもハツとする。そして、なんだかおかしくなつて二人は笑いあつた。

「今度は、ちゃんと手合わせしてもらいますよ」

「望む所ジャー、ピートサン！」

軽く拳をぶつけあって、二人は試合会場へと入っていった。

休憩時間も終わり、会場に客が戻つて来た。和樹は鬼道になだめられて仕方なく横島の襟首から手を離す。ムスツとした顔で横島に言った。

「俺の事、秘密だからな。絶対、誰にも言つなよ」

「ス…スカートたくし上げてくれたら考えなくも無い！」

文珠に『不能』と入れる。横島は泣きながら顔をブンブンと横に振った。やれやれ、と鬼道も呆れ返る。緊張感無いやつらやな、と。

「横島、なら一つだけ後でプレゼントをやるよ。鬼道、ちよつといいか」

鬼道を呼び寄せ、ゴニヨゴニヨと耳打ちをする。聞き終えた鬼道は、かなり嫌な顔をした。

「アンさんの代わりは誰が勤めんねん！ 僕一人じゃいくら何でも抑えきれんで！」

「ウチの親父に頼めば全然不可能じゃない。親父にもこころで表舞台に上がってもらわないとな」

頭の中がハテナマークでいっぱいな横島。一体何なんだプレゼントって。和樹から貰って嬉しいのなんて文珠か破魔札か女体化パンチくらいしか思いあたらないぞ。そんな事を考えていると、会場が俄かに騒がしくなる。

タイガーとピートが、会場に入って来たのだ。

「横島、とりあえず今は客席に戻れ。で、出来たら身体をほぐしておけよ」

「え？ ああ…よく分かんねえけど、分かったよ。じゃあ、お前も頑張つてな」

困惑しながら観客席に飛んで行く横島。それを見送る和樹に、鬼道が恨みがましい声をかけた。

「和樹はん…。余計な仕事増やさんといてや。いくら僕が今回の六道側の総責任者かて、これは無茶やで…」

「悪いな。けど、俺一人でだいぶギャラを抑えられただろ？ これくらい安いもんだと思って協力してくれよ」

適わんわ、コイツには。鬼道の脳裏に、かつてその凄まじい実力で都の暴れん坊…というか暴れ種馬となっていた高島の姿が重なった。やっぱりコイツはあの高島の生まれ変わりなんじゃないか、と思いはじめていた。

その一方で、和樹は不思議な解放感を感じていた。横島にバレたけど、関係は何も変わらない。むしろ、前よりも気楽に話しが出来た。それはやはり、別人と言ってもこの世界の横島に隠し事しないで接する事が出来るというのは気分が良かった。もう、何の遠慮も要らない。気兼ねなく罵倒したり馬鹿をやって行けるだろう。

そう考えると、なんだかやけに嬉しかった。

日陰の事で浮かれていた時とは違った、不思議な高揚感を感じながら、和樹は今日最後の結界をコートに張り巡らした。

『決勝戦 タイガー寅吉 対 ピエトロ・ド・ブラドー』

会場に、審判の声が響くと観客席からは凄まじい歓声が沸き起こ

る。前回に比べて、今回はかなり地味な試合ばかりだった。そんな中で、素人にも分かりやすい圧倒的な実力で勝ち上がってきた二人の試合である。期待は否が応にも膨らむというものだ。

「手加減は無しですよ、タイガー君。」

「勿論ジャー、ピートサン！」

両者から放たれる闘気は凄まじい。審判もそれを肌にピリピリと感じながら、腕を振り上げ高らかと宣言した。

『…試合開始!!』

「ウオオオオオツ!!」

「はあああああつ!!」

ズガアアアアッ!

二人の霊波が、コート中央でぶつかり合った。霊気のはじけ、コートを照らす。和樹は結界にかかる負荷に、少し驚いた。

（あれ、何でこんなに強いんだ？ これ、芦優太郎の神通棍並の威力ないか？）

少し焦る。確かに、結界要員に一般のGS使ったら死にかけるだろう。自分が結界張って良かった、と冷や汗を流す。

ピートとタイガーは、しばらく霊波を撃ち合っていた。タイガーは、基本的に肉弾戦を得意とする。霊波を撃つのに慣れていない。上手くピートに乗せられて、不得意な攻撃をさせられていた。対するピートも、タイガーのようなスタミナなんて無いのだが涼しい顔でタイガーの霊波をはじき飛ばしている。

先に動き出したのは、やはりタイガーだ。一向に接近出来ない事に焦り、少し強引でも前に出ようと走り出した。霊装の第一段階に姿を変える。

「ウオオオ！ 食らうんジャー！」

霊気を漲らせた拳を、猛スピードでピートに振るう。しかしピートは、直撃する寸前で身体を霧に変えた。

スカッ…

拳がすり抜ける。ピートは一瞬でタイガーの後ろに回り込むと半分霧の状態の身体で技を繰り出した。

「ダンピール・フラッシュ！」

ガアアアアッ！

「ぐおっ…！？」

背中に霊波の直撃を受ける。これは、効いた！ タイガーはすぐに跳躍してピートから距離を取る。迂闊に近づいたら、危険過ぎる

のだ。

ピートは、続け様に先ほどの技を連発した。ダンピール・フラッシュはカメラのフラッシュのように、一瞬で相手に到達する靈波攻撃だ。魔に属する技であり、普通の人間相手なら一発食らっただけで死んでしまう威力を持つ。それを、タイガーは全身で受け止めていた。そして…

ピートの攻撃が、止まる。さすがにバテ始めたのだ。その一瞬の隙を突いて、タイガーは体内で練り上げていた靈気を声に乗せた。

『ガアアアアツ！』

ドガアアアアツ！

「ぐあああつ！？」

クリーンヒットするタイガーの雄叫び。いくら霧になっていようが、この攻撃なら通じる。このまま、相手の攻撃の切れ間を狙って雄叫び攻撃を繰り返していれば自分の勝ちではないか。タイガーは勝利を確信しようとして…考えなおした。

なんだ、あれは。

ピートの姿が、ない。いや、あるのだが、それがピートだと思えないのだ。何故なら、そこには…

無数のコウモリが飛んでいた。

「「「「キキーツ！」「」「」



「な、なんジャー!?」

綺麗に円状に空中で陣をひくコウモリ達。一齐に、口を開けて超音波を発した。普通の間人には効かない攻撃だが、霊装をまとい獣の力を発揮しているタイガーには効いてしまった。

「ぐ…ぐう…っ!? 耳が、耳が聞こえん！」

それだけではない。感覚がおかしくなった事で体内の霊気に乱れが生じ、霊装が解ける。タイガーは人の姿に戻ってしまった。

ピートは、タイガーと戦う事を見越して、何十パターンも戦い方を考えていたのだ。そして、それが実を結んだ瞬間だった。

「まだまだ行きますよ！」

ピートは、またもダンピール・フラッシュの連発に入る。タイガーは必死でそれをはじくが、中々霊気を練れない為、腕になんとか霊気を宿して応戦するのが精一杯だ。

負ける…このままでは、負ける…。タイガーは絶望しかけた。ピートの攻撃は、余りにも的確にタイガーの弱点をついていた。だから、タイガーは何をしても通用しないと思いついてしまったのだ。

しかし、その時タイガーは聞こえないハズの声を聞いた。ゆかりが、エミが、確かにタイガーの名前を呼んでいた。タイガーは二人の顔を思い浮かべると、気力を振り絞る。上手くコントロール出来ないかもしれない。けど、勝手に無理だと決めつけて負けては悔いが残り過ぎる！

「ガアアアアツ！」

タイガーはもう一度、霊装を展開する。諦めてたまるか、とピートを睨みつけた。

その瞬間、勝負は決まってしまったと、見ていた数人のGSには分かった。和樹も勿論その一人だ。

(ピート…何故そこまでして…)

ピートはとつくに限界を超えていたのだ。涼しい顔をして自分の霊的スタミナの無さを隠し、何とかタイガーを降参させるか場外に押し出すしか、彼に勝ち目はなかったのだ。

ピートは前回から霊的な成長はしていない。一方、タイガーは余りにも爆発的に成長を遂げてしまった。この実力差を、ピートは何とか知恵を絞って埋めようとしたのだが…

タイガーは、諦めなかった。

『ガアアアアツ!!』

ズガアアアアツ!

ピートが、霧のまま雄叫びを受け吹き飛ばされる。人の姿に戻り、コートの外に飛ばされそうになったものの、何とか踏ん張った。

「今度は、コッチから行くケンノー！」

タイガーにしても結構ダメージを食らっていたのだが、こちらは

異様にスタミナがある。まだまだ動いていた。

タイガーはピートが放つ霊波を霊装で弾き飛ばしながら距離を詰める。そして、自分の間合いに持ち込んだ瞬間に強烈な右フックをピートのわき腹に叩き込んだ。

ドムッ！

「……………ガハッ！」

身体が、勢い良く吹っ飛ばされる。しかもう一度霧になってタイガーの後ろに回り込んだ。が、そこに振り向きざまの雄叫びが炸裂する。

『グオオオオッ！』

ズガアアンッ！

コート中央まで飛ばされるが、ピートは諦めずに立ち上がる。口元の血を拭いながら気力を振り絞った。

その後も、一方的だった。

タイガーの攻撃はことごとくピートに直撃し、その度に場外へと飛ばされそうになった。が、ピートは霧となったりアクロバティックな動きでコート内に留まる。タイガーも流石に疲労感を感じ始めていた。

「くっ…、何故ジャー！ 何故そこまでしてコートに残るんジャー！」

「…あ、…あなたに勝つ為、です…！」

ピートの目は死んでいない。あれだけ攻撃を受け、顔を腫らして血反吐を吐いても、ピートは諦めていなかった。フラつきながらもファイティングポーズを取り続けるピートに、タイガーは恐怖心すら抱き始めていた。もはや、これ以上時間をかけてはいられない。タイガーはピートを持ち上げ、場外へと直接放り投げるしかない判断した。

「これで終わりますケン！」

ガシツとピートを掴む。すると、ピートもタイガーの腕を掴む。いや、掴むというよりぶら下がるように全身で絡みついた。これは…関節技だ！柔道で言う所の飛び関節に近い。完全に腕をキメた状態で、全身に靈気を回す。

「ぐあああつ！？」

タイガーが絶叫した。どこにこんな力が残っていたのか、という靈気がタイガーの腕をへし折ろうと爆発的に増大して行く。ピートは意識が朦朧とする中、最後の力を振り絞ってタイガーを攻撃した。そして、そこまでがピートの覚えていた全てだった。

タイガーは、第二段回であるサーベルタイガー・モードになり、絡みついたピートをそのまま場外に叩きつけたのだ。腕は折れたが、ピートを場外で破る事には成功した。

『場外！ 勝者、タイガー寅吉選手！』

会場に、割れんばかりの拍手と歓声が響き渡る。これまでに無く、凄まじい意地のぶつかり合いの見た試合だった。初めはブーイングの対象だったピートにも惜しめない拍手が贈られた。

そんな中、愛子と魔鈴、エミとゆかりたちは急いで医務室へと向かっていった。客席には横島と美神だけが残っている。タイガーもピートも重傷だ。心配になるのも無理はない。

客席の美神は、少し暗い顔で横島に聞いた。

「何で、あそこまで傷つけあえるの？ あんなの、やり過ぎだよ。」

美神にはタイガーとピートの死闘が怖くて仕方なかった。かつて美神は：GS試験中に念動発火能力を暴走させて対戦相手を殺しかけた過去を持つ。あの時を思い出すと、今でも震えてしまう時があるくらいだ。一歩間違えれば死、という戦いを繰り返した二人が理解出来ず、怖かった。

「んー、やっぱり意地かなあ。男だったら、燃えますからね。正直言って羨ましいツスよ、俺はこんなに完全燃焼した事無いツスもん。」

前回のユリ子との決勝戦は、ハッキリ言って不完全燃焼だった。

和樹との試合は全力を出していたが、あれを戦いと呼んでいいのは分からない。雪之丞戦もまるで負ける気がしなかった。横島は、今のところ小竜姫としか死闘を繰り広げた事が無いのだ。

「横島君、ちよつと怖いよう。死んだりしたら、嫌なんだからね？」

「え？ … ああ、大丈夫ツス！ 俺、そんな危ない事しませんから！ 所長（の乳）残してどっか行くなんて有り得ないツスよ！」

「… なんかすつごい引つかかったけど、ありがとう、横島君。あんな危険な事、してほしくないんだからね」

少し、決勝戦の二人に感化されていたらしい。横島は頭を冷やした。何のために強くなったんだ、所長の為だろうか？ だったらその所長を悲しませるような事は出来ない。冷静になれ、冷静に…。そんな風に自分に言い聞かせながらコートに目をやる。タイガーとピートは治療の為に医務室へ行っている。怪我が治り次第表彰式だから、まだまだ時間がかかるだろう。一般人の客はどんどん帰って行っている。

そんな会場のコートの上に、ポツンと一人、和樹が佇んでいる。あれ？

和樹は、横島の方を見上げている。何だか楽しそうに、ニコニコしていた。何だろうか？

「所長、和樹が何かこつち見てますよ」

「本当だー。手を振ってあげたら？ 寂しいんだよ、きつと」

横島と美神が、和樹に向かって手を振る。和樹は変わらずに笑顔だ。…何かがおかしい。これは、何か企んでいる？

「所長、何か嫌な予感がする。俺、アイツが何企んでるのか聞いて来るッス」

「あ、横島君!？」

胸騒ぎがする。あの笑顔は、明らかにヤバい。獲物を捕らえるような目。そしてその獲物は俺だろう、と横島は直感していた。

そして、その直感は正しかった。

横島が和樹の待つコートに降り立ったと同時に、会場にアナウンスが流れ始める。

『只今より、エキシビジョン・マッチを執り行います。横島忠夫さん、芦原和樹さん、コートの中央にまでお進み下さい』

…は？

コートの横島と客席の美神は、同時に固まった。





## 第五十四話 魚のはなし

西条のマンションでは、女たちによる宴会が繰り広げられていた。最初は、ジークの資格所得おめでとうパーティー。タイガーに負けた所で憤る春桐をなだめる残念会に変わり、凄まじい決勝戦に驚き、ピートがオカルトGメン志望だという情報を得るとお祭り騒ぎとなった。

「半分魔族なんですよ？ だったら、子供つくりやすいじゃない」

「男の魔族で人型って貴重だよー。子孫残せるのって少ないし。この子イケメンだし、まだの子には朗報だね」

「でも彼女いたじゃん。そこら辺の倫理観、うるさそうよ？ 所属見たら教会だった」

「墮としちゃえばいいじゃない。それこそ、私たちの得意技なんだから」

好き勝手言い放題の女たち。西条は、ノンアルコールのビールの空き缶を片付けながら、悲しそうにつぶやく。

「一応、僕という夫がいる前で…」

そのつぶやきを聞いていた春桐は、すぐに西条のネクタイを掴むと強引に引き寄せ、唇を奪った。

「んっ…んむっ!？ な、何を!？」

「安心しなさい、お前ほど良質な種馬は中々居ない。手放す訳はないでしょう？」「ここに居る皆で、あと五十人は作るから。覚悟しておきなさい」

「！…！？」

クラツ…とフラつく西条。死ぬ。それは、死ぬ。魔界で起きた内戦の影響で多くの男の魔族が死んでいるのだが、まさか減った分自分に作らせるんじゃないだろうな。西条は冷や汗をかきながら後ずさった。

そんな騒がしい部屋の中で、呆然としている人物が一人いる。メフィストだ。メフィストはただ、モニターに映る人物を眺めていた。周りの女たちはまた鬼道でも眺めているんだろうと思っ放つておいたが、どうも違うらしい。惚けているというより、驚きで固まっているような感じだ。さすがに春桐が異常に気づいて声をかける。

「メフィスト？ どうしたの、一体」

「…あ、あ…あれ、見て」

震える指先でモニターの隅を指差すメフィスト。そこには、今まさに結界を張ろうとする芦原公平の姿があった。いや、その姿に重なるように佇む影が見えた。それは…

「……ゲツ！？」

その場にいた全員が固まる。まさか。そんな訳ないだろう。しかし、うつすらと浮かび上がるその姿には見覚えがありすぎる！ 騒いでいた女たちも、今はメフィスト同様顔面蒼白だ。

「ね……。これ、マズくない？」

「分霊でしょう、流石に。けど、ただの人間とパス繋いでる時点で大事件だよな」

「これ、他の魔族とかにバレたら大変じゃない？ 人間界で戦争になるかも……」

「嫌よ、やっと平穏な生活を送れると思ってたのに！」

怯えるのも無理は無かった。よりにもよってサタン。魔界の最高指導者が人間界で遊んでいたら大問題である。この場にいる者たちは皆、今目の前で起きている事を口外しないと誓っていた。そして、出来る事なら忘れたいと思っていた。

GS試験の会場には、約三分の一程の客が残っていた。彼らのほとんどは一般人ではない。助手探しの現役GSや警察、霊能グッズを扱う業界関係者ばかりだ。彼らは毎回表彰式まで付き合っ、その後には勧誘を行ったりしている。今回のエキシビジョン・マッチを見られたのは思わぬ幸運であろう。

「まあ、見てる方は幸運なんやろっけど」

「担ぎ出される我々にとっては罰ゲームみたいなもんだけどな」

鬼道と公平はウンザリした顔でつぶやいた。ここには、二人の他にも美智恵がいる。皆、これから始まる戦いの為の結界要員だった。

「でも、意外ですね。今の神社業界でまともな霊能者がいるとは知りませんでしたわ」

美智恵の言葉は、全部が全部イヤミではない。実際、明治以降に制度化された神社業界では霊能者ではなく、一部の特別な家系とそれに従う人間を重用してきた。生粋の霊能者で業界に従わない者はことごとく締め出され、怪しい拝み屋に身を落としていたのだ。単立の神社で働いているとは言え、神社業界の正式な資格を持った人間で霊能者というのは、極めて珍しい。

「まあ、多少苦勞してきましたから」

公平の言葉は、完全にイヤミだ。簡単に倒れる六道上がり結界要員をどうにかしろ、苦勞知らずのお嬢さんたちではなくまともなGSを雇え、というメッセージなのだろう。美智恵も敏感に察知して、少し顔をしかめる。

「では、あなたに結界を任せても大丈夫ですね。私などは、必要ないでしょうから」

「ははは、ギャラが出ない仕事はしたくないんですけどね。息子の頼みですから、頑張りましょう」

聞いていた鬼道は、冷や汗をかいていた。

（ほんまに大丈夫なんか、このオッサン！ まるで霊気を感じんのかやけど！）

美智恵との言い合いからして危険な雰囲気であり、鬼道には公平が単なるトラブルメイカーに見えて仕方がなかった。

しかし、その認識も次の瞬間改めざるを得なくなつた。

和樹と横島が何やら言葉を交わして準備が整つたと思われた時。公平は二人の立つコートに向かつて腕を突き出し、結界を展開する。その結界は、周囲に負荷を与えないものの、凶悪なまでに密度の濃い靈力で編み込まれていた。

「これは…!？」

「なんつー靈力や。さすが和樹はんの親父さんやな。これならほんまに僕らいらんかもしらん」

驚く二人。特に美智恵の驚きは大きかった。ここまで凄まじい靈力を感じた事なんて、今まで無かった。自分はGS界でも最強と呼ばれて久しいが、こんな身近な場所に自分以上の靈力を持った人間がいたとは…。それも、軽視していた神社業界に…。ガラガラと、何かが崩れて行くような錯覚を覚えていた。

「まあ、見ていて下さい。私の結界は、神族でも破れませんから」

ニヤリと笑つて、公平はコートに立つ和樹を見た。さあ、存分にやれ。本気を出したお前の力を、この世界の横島に見せつけてやれ。そう目で伝えると、和樹も笑つて頷いた。

医務室には、専用のモニターが設置されている。本来は、試験で事故が起きた場合に前もって患者が運ばれて来る前に治療の準備に移れるようにあるのだが、今回は完全に見物用のモニターとなっていた。

「横島サン、目が本気ですノー」

「ええ、妙神山以来じゃないですか、あんなに鋭い目をするのは…」

医務室のタイガーとピートは、もう回復してベッドに腰掛けながらモニターを見ていた。試合終了後、鬼道が和樹からもらっていた文珠でタイガーとピートを回復していたので、ほとんど傷は残らなかったのだ。今は駆けつけたエミたちと、モニターをのんびり眺めていた。

「私は分からないのだが…」

ベッドの上でピョンピョン跳ねていたゆかりが、タイガーの背中に乗って聞いた。

「あの和樹という男はどれくらい強いのだ？ 海で見た時はまともに戦ってる所を見てないからよく分からないのだ。皆の口振りから、だいぶ強そうだとは思うのだが…」

この言葉には、皆が返答に困った。思い返すと、和樹が本気を出した所など誰一人として見た事ないのだ。怒った横島を止めたり、小竜姫に命令している姿を見ているから強いのだろうな、という事は分かるのだが…。横島と美神しか、和樹が間近で戦っているのを見ていなかったりする。

「私は、一度だけ和樹君に睨まれた事があるわ」

答えたのは、愛子だった。

「まだ私が保護されてなかった頃、和樹君が私を退治しに来た事があったの。結果的には助けくれたんだけど、あの時の重圧は…恐ろしかったわ。少なくとも、唐巢神父より怖かった」

思い出して身震いする愛子の肩を、ピートが抱きしめる。あの場にはピートもいた。確かに、あの時の和樹はピートでさえ震え上がるくらいの殺気を放っていたのだ。

「ひのめの話だと、竜神族の藤姫って神様と一緒に戦ってたみたいね。指示は和樹が出してたらしいから、藤姫と同じかそれ以上なワケ。で、横島の話ではその藤姫と小竜姫は同じくらいの強さって言うってたから…」

「武神と同じか、それ以上という事ですか」

魔鈴の言葉に、和樹の凄さを再確認する一同。前回のGS試験での悪ふざけばかりが頭に残っているからイメージが湧かないが、ひよっとしたらこの戦いは生きているうちに見られるかどうか分からない程の凄い戦いになるのではないか。段々と、期待に胸が膨らんで来る。

そこに、隣のベッドから声をかけて来る者がいた。

「…和樹さんは、人類最強の存在らしいですよ」

「…！ あなたは…誰ですか？」

「ジークです！ 春桐・ジーク・フリート！ あなたが医務室に運んだんでしょ、ピート君！」

いや、分からなくても仕方ないだろう。冥子の十二神将たちに群がられて身動きとれないジークは、何だか不思議過ぎる生き物になっていた。

「また、逃げる気？　どんどん怪我が大きくなっちゃわ〜」

「この化け物を引っ込めれば済む話でしょう！　…とりあえず、和樹さんは魔界でも注目されている存在ですよ。少なくとも、彼だけは敵に回すなという指令が出ています。人間相手に本気など、出せないと思いますよ」

そして、モニターを見つめてつぶやいた。

「是が非でも、魔族の陣営に迎え入れたい。私たちの理想を叶えるには、彼の力が必要です。…って、皆さんどうしたんですか？　何故そんなに遠くへ？」

気づくと、ピート達は医務室の入り口付近まで移動していた。かなり強張った表情で、ジークの後ろを指差していた。ジークが不思議そうな顔で振り向くと…

「ぐすつ…化け物って、化け物って言ったあ……うう…」

涙を溜める冥子の姿があった。これは…何だかヤバい気がする！

「いや、あの、それは…」

「ふええええ〜んっ！…！」



ドガアアアアアアアンツ！

「シギヤアアアアツ！」

「ギユワアアアアツ！」

「ガアアアアアアツ！」

阿鼻叫喚。ジークは薄れ行く意識の中で、口は災いの元はこの事かと思いながらある言葉をつぶやいていた。それは…

(姉さん、やっぱり僕、魔界に帰りたい…)

涙を流しながら、滅多に漏らさない弱音を吐いて、ジークはそつと目蓋を閉じるのだった。

コートの上では、横島と和樹が向かいあっていた。何といたまし討ちのようなセツティング。横島もさすがに頭にきていたが、和樹に言われて考えを改める。

「本気で戦ってやる。最初は、霊力だけでな」

「霊力だけ？ ああ、あのねーちゃんの姿は魔力を使ってたんだっけ」

「ああ。で、お前の実力次第では魔力も神気も使って戦ってやる。」

俺に全力出させてみな」

その言葉に、横島の闘争心に火がついた。目を鋭くさせると、和樹を睨みつけて言った。

「後悔すんなよ？ 俺もお前なんだぜ。」

「ああ。楽しませてくれるんだろ？」

横島の言葉を聞きながら、和樹は確信していた。やはり、この横島は俺じゃない。俺なら、逃げる為に必死になっているハズだ。コイツの魂は、根っこが真面目過ぎるようだな…。和樹は、あのアルマジロの竜神族の姿を思い出してため息をついた。横島として生まれて、真面目さを發揮しても辛いだけじゃないかと。

しかし、横島は横島だった。

和樹が物思いに耽っている一方で、横島は考えていた。

（魔力であんなに可愛くなるなら、神気通したらどんな可愛いねーちゃんになるんだ！？ 今度はムチムチの美女か？ これは…やりがいがありすぎる！）

悶々と煩惱が駆け巡り、身体の中に生み出される霊力は今まさに最高潮に達していた。

「じゃあ、そろそろ始まるだろうし位置についてくれ」

「ああ。絶対本気にさせてやるからな」

不適に笑う横島が位置につくと、コートの外にいた公平が結界を張り巡らせる。淡い紫の不思議な結界が展開されると、会場にざわめきが起きた。視線を送ってきた公平に頷き返すと、和樹も位置につき右手に霊波刀を作り出す。

急遽呼び出された審判は、戸惑いながらも高らかに宣言した。

『エキシビジョン・マッチ、芦原和樹 対 横島忠夫 試合開始!』

「どっせーい!」

合図と共に、横島がサイキックソーサーを投げつける。和樹は少し面食らったが、それを簡単にかわして見せた。

かわした時に和樹は見た。ソーサーに、『弱』という文字が刻まれているのを。

「なるほどな。俺が油断して受けても思ってたか?」

「いや、今みたいに喋ってくれると思ってたぜ」

横島が言うと、先ほど投げたソーサーがブーメランのように戻ってきて、和樹を背後から襲う! さらに横島は正面からソーサーを投げつけ挟みうちにした!

「当たらなきゃ意味ないけどな」

猛スピードにも関わらず、それすら和樹は難なくかわす。二つの

ソーサーは空中でぶつかり合うと…

「……え？」

魚になって、ポトリと落ちた。これは…なんだ？

「チツ、ダメかあ。さっさと決めたかったんだけどな」

魚は、すぐに霊気へと戻って空中に霧散した。これは…もしかして。

「イワシ、か？」

「ああ。『弱』のソーサーと『魚』をぶつけて『鯛』。魚にしてしまえば俺の勝ちかなって。どっちか当たれば俺にも勝ち目が出てくるだろ」

心底ゾツとした。

和樹は一度、『猫』を食らって大変な目にあつた。これは…シャレにならない！

「てめえ、ちよつと痛い目にあいたいらしいな」

「い、いやちよつ…」

あまりの形相に怯む横島。これは…この和樹は、怖い！ 思わず逃げ腰で後ずさる横島。和樹は、霊波刀を極限まで物質化してみせる。

「良く見ておけ。これが俺の武器、ハンズ・オブ・グローリーだ！」

ハンス・オブ・グローリー。栄光の手。元はただの霊気の手甲であり、ここから霊波刀へと進化を遂げた。が、和樹が行っているのはさらにその先を行っている。恐ろしく密度の高い霊気で構成された物質化した霊波刀。それは手甲と一体化していた。つまり、手甲の部分から刀身が突き出した手甲なのだ。そしてこれの恐ろしい所は…

「な、なんだ！？ 伸びて来やがる！」

ビュンビュンと試し斬りする和樹から逃げ惑う横島は気づいた。振り下ろされる度、刀身の長さが変わるのだ。つまり、伸縮自在。何気にホーミング・モードのように刀身が追いかけて曲がり、避ける横島の服を切り裂いていた。

「オラ、その程度か横島！ 打ち返して来い！」

「無茶言つなー！ 触れたら一発アウトやないかー！」

横島も挑発には乗らない。和樹の手にした物の恐ろしさは見ただけで分かるのだ。とにかく今は逃げる事を最優先せねば。横島はスピードアップをはかるため、霊装をまとった。

ズオオオオオオツ！

「来たな、ヨコシマン！ 地球はお前には渡さない！」

「やめろよ、その呼び方！ というか俺が悪の幹部かよ！？」

突っ込みながら、サイキッククロッドを手にする横島。和樹のグロ

ーリーに対抗しようとするが…

ズバツ！

「防げねえ！？」

「当たり前だ、そんな収束不足のロッドで防がれてたまるか！ ちなみにその鎧だつて簡単に切り裂けるぞ！」

「ひいいいつ！？」

逃げる宇宙刑事。地球の平和はどうしたのだろうか。逃げながら、なんと足の裏からソーサーを和樹へと放つ。

「く、来るな来るな来るなーっ！」

『鰻』『鯖』『鱸』『鰐』

ズガンツ ドガンツ ボガンツ ゴバアンツ！

「あぶねーな、さり気なく変な漢字入れてんじゃねー！ 一体俺を何に変えたいんだ！？」

横島の、この文珠ソーサーは効果にロックがかかる為油断は出来ない。故に、どうしても警戒しながら攻撃をする事になる。スピードは落ちてしまっていた。そして、そのおかげで横島は体勢を立て直す事が出来た。

横島の周囲に、無数のサイキックソーサーが現れる。その全てに『防』の文字が入っており、かなりの霊力を消耗した。

「ど、どーだ。これなら簡単には破られねえだろ！」

「…馬鹿か、お前」

呆れながら、和樹は『爆』文珠を投げる。文珠はソーサーに着弾すると爆発し…

爆風が和樹に襲いかかる！

「何っ！？ 文字を変えたな！？」

慌てて避ける和樹。横島はソーサーの文字を一瞬で『反』に変えたのだ。そんなに器用な事が出来るなら普通に文珠作れるだろうに、と和樹は不思議に思った。そして、そんな和樹に、爆風を突き抜けて一枚のソーサーが襲いかかる！

「なっ！？」

ズガアアアアンツ！

着弾した。

ヤバい、何がどうなった！？

和樹は、反射的に振るつた右腕を見る。すると、ハンズ・オブ・グロリーは解かれ、そこには鮪が握られていた。

「な、なんじゃこらーっ！？ お前、なんでさっきから魚偏にこだわってんだよ！」

「し、仕方ねーだろ！ この後所長と寿司屋に行くって決めてたんだから！ 腹減ってたんだよ！」

「良い待遇されてんじゃねえか、てめえ！ 俺なんか時給255円

だっただぞ！？ よし、分かった。今からお前をこの鮪でぶつ倒してやる！ 神気バージョンでな！」

これは嫉妬だ。違う違うと頭で理解していながら、横島が美神と仲良くしているのを見ると腹が立ってきて仕方がない。全身に神気を身に纏い、姿を変えた。魔力にしなかつたのは、蛍子の姿を既に別人として使っていたからだ。

「おおお…こらまた別嬪さんな…って、小竜姫様！？」

驚愕する横島。目の前には、髪が黒くて少し長い以外は小竜姫に瓜二つな和樹の姿があつた。手に鮪を持って。

「お久しぶりです、横島さん。武神に鮪を持たせた事、後悔させてあげましょう。…って、何泣いてるんですか？」

「うう…、何で、何で小竜姫様なんや…。今度こそ、今度こそムチムのねーちゃんかと思つたのに…」

「ふーん、そういうこと言いますか」

小竜姫の意識が強く出た。やはり小さな胸を茶化した横島に対して、怒っている。鮪は神気によつて限界まで強化されていた。

和樹は、不適な笑みを浮かべながら何やら呪文のようなものを唱えた。すると、公平の張っていた結界の内側に新たな結界が現れる。途端に、横島の霊装が解けてしまった。

「な、なんで！？ 今、何やつたんスか！？」

「霊気を使えないようにしました。今この場で使えるのは神の力の



みです。横島さん、何とかして神気を出してみてください。」

「んな無茶なーっ！」

この結界は妙神山で小竜姫が和樹に対して以前仕掛けた結界と同種である。霊気を使ったトリッキーな戦いではまともに戦えないので、この結界で剣しか使えないようにしたのだ。純粹に剣だけならポコポコに出来る。和樹は小竜姫に色んな方法で折檻される事となった。

「くっ、サイキックソーサーも小さいやつしかでねー！」

必死にソーサーを展開するが、これでは武器にならない。それでも展開できるだけ凄いのだ。和樹は目を疑った。これは天竜の竜気か、魂の影響だろうか。そして、そのソーサーに書かれた文字を見ると…

『神』

…安直だ。安直すぎる。

そんなもので神気を出せると思ったのだろうか。和樹は横島と同じように、神気で作ったサイキックソーサーに文字を入れて、そのソーサーに投げつけた。

ズガアアアンツ！

「うわっ、なにすん……じゃー!？」

魚偏+神=鯽。ハタハタである。

横島は手にハタハタを持っていた。

「さあ、行きますよ！ 大人しく鮪を食らいなさい！」

「せめて刺身にしてください丸々はイヤアアアア！？」

和樹が鮪を振り回す！

その攻撃はたしかに小竜姫のものと瓜二つ。以前戦った横島は、その太刀筋を覚えていた。何とか紙一重で避ける。しかし、どうしてもかわせない攻撃が来た！

「チツ、頼む！」

横島は、迫り来る鮪の前にハタハタを振るい…

ギイインッ！

「ええっ！？」

和樹の鮪をはじいた。小さな、ハタハタで。

「そうか、小竜姫様の神気を取り込んだからこんな小さくても強いわけだ！ ん？ だったら、あれも出来るかな？」

横島の顔が、奇妙に輝き出した。ヤバい！ あれは、何かをやらかす顔だ！ 和樹は鮪を振りかぶり、横島に接近した。すると…

ズガアアアアンッ！

「うわああああっ！？」

和樹を、巨大な雷が襲う。何故！？ 魚を手に行っているだけで、横島にはまだ神気で雷を起こす事など出来ないのに！

ダメージを受けながらも、和樹は何か体勢を立て直す。横島を見ると、相変わらず手にはハタハタ。ん…、ハタハタ？

「横島さん、自分のソーサーの分の漢字、変えましたね？」

「あ、分かります？ ハタハタって、魚偏に雷って書いたりするんすよ。試しに変えてみたら、口から雷出ました。」

無茶苦茶にも程がある。確かに横島の文珠ソーサーはロックがかかるから、発動したら時間が経過しないと姿を変えられないが…。

「これで俺にも攻撃出来る！ 行くッスよ、小竜姫様！」

「くっ、負けません！ 鮪を甘く見ないで下さい！」

一体何と戦っているのか。

そこからは、不思議な戦いが繰り広げられた。迫り来る和樹の鮪を何とかハタハタではじき、距離をとってから雷で攻撃。小竜姫の意識に引きずられて和樹も戦い方が馬鹿正直になったために、横島も動きが読みやすくなっていた。奇妙な戦いは、中々白熱してきていた。

「やりますね、横島さん！」

「まだまだッスよ、小竜姫様！」

魚と魚がぶつかり合う。魚界の王たる鮪に、ハタハタは果敢に立ち向かっていた。もしこの場に漁業に身を置いている人間がいたら感動の涙を流していた事だろう。しかしここはGS試験会場。客席は笑い戸惑いの声に包まれていた。

「ふっ…しかしそろそろ終わりです！」

そう、不完全な横島のソーサーで作られたハタハタは、もう現界出来ずにぼやけ始めていた。慌てる横島。しかしハタハタは無情にも霞のように消えてしまった。

「わ、わ、マズい！」

「食らいなさい！ 大トロアタック！」

ドガアアアアッ！

鮪が、横島を完全にとらえた。誰もが、横島のダウンを確信したが…横島は、倒れずにそこ立っている。

「ぐ…っ、でもやっぱり無理があるか…」

横島は『堅』のソーサーで身体を補強して鮪の一撃に耐えていた。が、その衝撃を完全に殺す事は出来なかった。フラつきながらも、横島は小竜姫の方を向く。まだまだ、まだやれる！

和樹は、何故かにこやかな顔をしていた。

「お疲れ様でした、横島さん」

和樹はサイキックソーサーを投げつける。そこに書かれた文字は、やはり魚。横島の『堅』と混じり合い…

ズガアアアアンツ！

「うわああああっ!？」

横島は鯉になっていた。正確には、まるで鯉の着ぐるみを着ているかのように人の顔が鯉のアゴから出ている状態だ。手足は出ていない為、横島はコートの上でビチビチ跳ね回るしかない。

「イヤー！こんなのイヤアアア！」

「審判、まだ続けた方がいいか？」

元の姿に戻った和樹が問いかけると、審判は慌てて宣言をした。

『勝負あり！ 勝者、芦原和樹！』

爆笑と拍手が、会場に響き渡る。泣きながら跳ね回る横島を見ながら、和樹はガッツポーズをしてみせた。

猫にされた恨みと、前回のセクハラの恨みは晴らしてやったぞ、と…。



## 第五十五話 宴の終わりと悪戯のはなし

試験会場では、現在表彰式が執り行われている。優勝者は勿論タイガー。マスコミのカメラは皆タイガーの画を撮っていたが、それよりも準優勝者のピートを映したがっていたのは仕方のない事だろう。優勝したのに報われないのはタイガーらしいが、変な注目のされ方をしていないのは座敷童子であるゆかりの幸運のおかげかもしれない。

だが、優勝者のスピーチの際に、タイガーはGS業界に少なからぬ衝撃を与える事となった。一般人には分からないが、GS業界の人間なら誰もが知っているタブーに触れたのだ。

「ワツシが優勝出来たのは、妙神山の天竜サンたちや小笠原事務所のエミしゃんやゆかりしゃん、そしてGS犬のマーロウと春樹サンのおかげですケン。皆にまず感謝するんジャー」

この言葉は、純粹に思った事をそのまま言っただけだった。が、会場の端でそれを聞いた途端鬼道は頭を抱える。隣の和樹と公平は不思議な顔をした。

「鬼道、どうした？ 今の、何か変だったか？」

「いや…変というか、六道的にはマズいやるな。GS犬マーロウと言えば、あのオバハンが引き抜こうとしたり、とにかく所属する吉村事務所にかなりの嫌がらせをしといたらしいから。六道派閥に引き込まうとして失敗した所としてGS業界じゃ有名な話や。一般マスコミもこれから調べるやろうから…まあ、色々書かれるやろうなあ…」

フンツ、と公平は鼻を鳴らした。いい気味だ、と。元々GS業界自体が気に入らなかつた公平。そのトップが痛い目にあうのは痛快ですらあつた。

「悔いた所で今更よ。あの人はそのやり方でやって来たんだもの、変わらないわ。変えて行くのは、鬼道君。あなたの仕事よ」

美智恵の言葉に、ガツクリとうなだれる鬼道。実力を認められた途端に厄介な問題を引き受けなければならなくなる。恨み事を言っていただけの頃の方が、楽だったかも知れない。

「…ところで、和樹君。あなたの使つてたのは文珠よね？GSの登録書に書かれてなかつた能力だから驚いたわ」

しまった、と和樹は一瞬思ったが、すぐに平然とした表情で答えた。

「ええ、俺だけの能力じゃないんで。俺が神族の依り代になっていくつてのは知つてますよね。文珠は、その神族が身体に宿つてないと使えないんです。」

「神族：小竜姫様よね？」

和樹は頷いた。

そして、鬼道に向かって目で合図をする。鬼道もその意図を察して言った。

「文珠に関してはあまり追求すると神界を敵に回すからやめといった方がええわ。まあ、六道の方でも情報統制かけとくけど、美智恵は



んも気いつけといた方がええよ」

「分かってるわよ。ウチの娘の彼氏も近い能力持ってるし、他人事じゃないから。ただ、確認したかっただけよ。文珠なんて、一生に一度見れるかどうか分からないもの」

それを聞いていた公平が、すまなさそうに和樹に言った。

「悪い、和樹。お前が作りまくった文珠、ひのめさんにあげちゃった」

「はい？」

素っ頓狂な声を出す和樹。ひのめにあげた？

「いや、この間神社に来た時あんまり不憫だったからさ。破魔札値切る横島君ももう見たくないんでな。すまん、独断であげてしまった」

「それは…まあ、あの人なら変な使い方しないだろうけど」  
言いながら、美智恵を見る。

「聞いてた通り、娘さんがたくさん持つてるから後で見せてもらって下さい。」

美智恵は喜ぶ所か青ざめた。文珠。最高のレアアイテム。そんな物を持つてたら娘が狙われかねない！

「まあ、そう言う事や。娘さんの事考えたらあんまり口外は……って、おらん！どこ行った!？」

和樹が、指を指す。鬼道がその方向を見ると、美智恵が客席に向

かって猛ダツシュして行く姿があった。

表彰式は、何の問題も無く執り行われた。優勝者であるタイガーは勿論Cランクからのキャリアスタートを許された上に、金一封を貰った。この所、どんどん金銭的に満たされて行ってるのは、やはりゆかりのおかげだろう。ピートは普通にEからのスタートだが、その多彩な攻撃で審査員を魅了し、審査員特別賞を受賞した。審査員が女性だったのは、関係ないだろう、多分…。

そして、表彰式が終わって皆がバラけ始めると。和樹のもとに、美神が駆け寄って来た。

「和樹くん！ これから、皆でお寿司屋さんに行くんだけど和樹君もどう？ エミさんがおごってくれるんだって！」

見ると、エミやゆかり、タイガーという小笠原事務所の面々と美智恵の姿が。ピート達の姿が見えないが、美神の話では彼らは魔鈴の店で打ち上げをやるという。美神たちは先に寿司屋を予約してしまっていたから、一緒になれなかったらしい。

「いや、俺んちでも新しい入居者の歓迎会するから無理だなあ。ごめんなさい、美神さん」

これは、断るだろう。

今の和樹は、思いつきり帰りたいモードである。おキ又…いや、日陰が待っているのだ。早くこの場から去りたい気持ちで一杯だった。

「そつかあ、それじゃあ無理だね。残念だけど、仕方ないか」

「悪いですね、せっかく誘ってくれたのに」

そう言って話を終わらせようとした時。和樹の視界に奇妙な光景が飛び込んできた。タイガーの肩に、何かが乗せられている。あれは…魚？

「…って、横島じゃないか。まだ治らないのか？」

「やかましい！ お前ん中の小竜姫様の撃ってきた最後のソーサーが強烈過ぎてまだ治んねーんだよ！」

どうやら、未だ『鯉』は解けないらしい。横島の文珠ソーサーの効果は謎に包まれている。二人で重ね掛けしたら、一人で解けないらしい。

「で、お前はその格好で寿司屋に行く気か？ 魚食えんのかよ」

「いや、無理！ 魚食うなんておかしいだろ。普通にプラנקトンとか食おうぜ」

普通ではない。どれだけ魚なんだ。というかプラנקトンで打ち上げて。

「駄目だよ、横島君！ 皆で一緒にマグロ食べるんだよ！ イクラ

とか沢山食べるもん！」

「酷い！ ああマグロ陛下、この罪深き人々を許したまえ！…つーか子供喰うとかヤメて！ 未来ある若者たちの夢を摘まないで！」

「タイガー、とりあえず寿司屋まで運ぶワケ。鯉ならタタキにしてもらえるワケ。」

「分かりましたんジャー。横島サン、許してつかあさい。せめて新鮮なウチにいただきますケン」

「イイヤアアアアッ!？」

なんなんだ、この会話は。しかし、自分も昔はこんなノリだったんだろうなあ、と和樹は横島を見ながら思った。そして、軽く自己嫌悪した。あの頃の俺って、格好悪かったんだな…。

「じゃあね、和樹君！」

手を振って、去って行く美神たち。格好悪いけど…楽しそうだ。その光景にどこか懐かしさや切なさを覚えながら、和樹は美神たちを見送った。

さて、そろそろ帰るか。

和樹は公平の姿を探す。公平は、会場の非常口付近で煙草を吸っていた。

「お待たせ、親父」

「ああ、早かったな。もういいのか？」

吸いかけのPeaceを携帯灰皿の中で潰す。最近、強めの種類の煙草に変えたらしい。ストレスがたまっているのだろうか。

「俺の仕事は終わったし、もう帰れるよ。…なんでそんなソワソワしてるんだよ。キツイ煙草も吸ってるし、変だぞ？」

「ああ。それがなあ……」

渋々説明する公平。実は、日陰は既に神社に来ているが、藤姫と険悪な仲になっていているらしい。和樹の女が増えた、とサタンが伝えたのが原因だとか…

「今、サタンはどこよ」

「どこか行きやがった。けど、確実に見てるだろうな」

何て事だ。藤姫が怒っているなんて…。和樹は頭を抱えた。藤姫は、今や家族の中でも中心的な存在になりつつある。家事全般を担当してくれて、公平の仕事も手伝ってくれている。そして何より、和樹の支えになってくれていた。その藤姫と日陰が喧嘩してしまったら…どうすればいいのだろう。

「親父、とりあえずすぐに戻ろう。ここで時間を潰しても状況が良くなるワケじゃない」

「そ…そうだな。早く帰らないとな」

こうなったら、覚悟を決めるしかない。和樹と公平は苦み走った顔をしながら、駐車場へと急いだ。早く、早く帰らなければ。頼むから喧嘩はやめてくれ！ 和樹たちは祈るような気持ちで、車に乗

り込んだ。

少し時間は遡って。

阿部マリアに連れられて、日陰は天矢神社へと来ていた。妖怪である為、荷物などは殆どない。今まで世話になっていた日本語学習塾の皆に別れを告げた後、日陰はそのまま小さなバッグに荷物を入れて、この神社へとやってきた。

「私、嫌われないかな…」

「大丈夫よ。藤姫さんは事情を知ってるし、既に妖怪を保護してるらしいから」

不安げな日陰に声をかけてから、阿部は社務所の呼び鈴を押した。

ピンポーン

「はい！」

元気な声が聞こえて来た。その瞬間、日陰の身体がビクッと震える。気配からすると、人間だ。怖い。

トタトタトタトタ…と駆けてくる音に次いで、ガラガラッと音を立てて社務所の戸が開く。出てきたのは…

(…私!?)

ユリ子だった。

「すみません、阿部マリアと申します。公平さんに伝えてもらっていたと思いますが…」

「あ、ハイ！ 伺ってます！ 私、こちらに下宿してる吉村ユリ子って言います。どうぞ、上がって下さい！」

ユリ子？ どこかで聞いた名前だ。以前の自分とそっくりな外見…。

日陰は思い出した。前の世界で出会った、病気の女の子。死神を説得して…というか半分騙して、何とか命を救った。あの子が、こちの世界ではこんな所にいるなんて…。と、日陰は驚いていた。しかし、次の瞬間それ以上の衝撃が。

「ああ、早かったね。部屋はちゃんと用意してあるよ」

！？

驚愕の表情を浮かべる日陰。そこには、かつて敵として立ちはだかったメドーサの姿があったのだ。髪の毛は艶やかなストレートヘア、服装も派手ではなく落ち着いた物だったが、声とプロポーシオン、気配は記憶にあるメドーサの物と一致していた。

「日陰、だったね。私は、全部事情を知ってるから大丈夫だよ。あなたの知ってるメドーサとは違う存在だけど、記憶だけは和樹から貰ってるからね」

そう言うってから、日陰を優しく抱き寄せた。

「苦労してきたんだね。ここはもう安全な場所だから、安心して生活しておくれ。何かあっても、私達が守ってあげるから」

思わぬ優しい言葉に、戸惑う日陰。あんなに怖かったメドーサが、こんなに暖かい人になるなんて。これも、横島…和樹さんの力なのかな、と日陰は思った。あの人の周りには、いつもたくさんの人が集まって暖かい日だまりのような場所が出来る。またその一部になれるのかと思うと、少し泣けた。

その後ろの柱の影からは、イツナが覗き込んでいた。顔を半分だけ出して、様子を伺っている。

「イツナ、あんたもおいで。同じ妖怪だから、安心していいよ」

「コン…」

恐る恐る出てくるイツナ。日陰は、優しく声をかけた。

「大丈夫ですよ。私は、怖くないですから」

日陰の足下までやってくるイツナ。日陰が頭を撫でると、気持ち良さそうに目を閉じる。その目の端に光る物があったような気がしたが、日陰はそのまま優しく撫で続けた。

「警戒心が強いイツナがすんなり懐くななんて、やっぱり心が穏やかな証拠だね。あんたなら、ここでも上手くやっていけるよ」

藤姫は笑った。最初こそ固かったイツナも、今はもう慣れたのかリラックスしている。日陰も、同じ妖怪同士で気楽なのか、緊張感が解けて来ていた。



「あの、私は今日からこちらにお世話になるんですよね。自己紹介がまだでした。雪乃下日陰と申します、宜しく願います」

「ああ、私は藤姫。メドーサだったけど、和樹に神族に戻して貰ったのさ。この神社の神様もやってる。」

「私は吉村ユリ子です。和樹さんと同じ学校に通ってて、こちらの神社に住み込みで働いています」

そして、足下のイヅナが日陰を見上げた。

「コンコンコンコンコン」

いや、分からないだろう。しかし日陰はクスツと笑うと、「宜しく願いますね、イヅナさん」と声をかけた。

…良かった。これなら大丈夫だろう。不安だったのは連れてきた阿部も同じだった。けど今の皆を見ていたら、そんな心配など無用だったと分かる。日陰はきつと、うまくやって行くだろう。

その後、これから住む部屋へと案内された日陰は部屋に備えつけられた家具や空調設備の説明を受けた。どうも藤姫は『雪乃下』という苗字から雪女と勘違いしているらしく、クラーはガンガン使っただけで構わないと言っていたが、日陰は変種とはいえ影女である。影の中に入ればそれで済むと言っただが、藤姫たちはそれを良しとしなかった。

「女の子なんだから、ちゃんとした布団で寝な」

「日陰ちゃんは遠慮なんてしないで下さい！ 和樹さんだって、日陰ちゃんにちゃんとした生活を送って欲しいと思ってるハズです！」

「コン！ コンコン！」

いや、実は影に紛れた方が和樹の部屋に忍び込めるから良いのだが。日陰は心の中でガツカリしながらも、表情には出さなかった。結局、予定通り日陰には空調付きの八畳の和室をあてがわれる事となった。

他にも、神社に居るときは藤姫と一緒に家事をしてもらう事や、掃除の当番などを決めた。藤姫は和樹の知識から、日陰が家事全般を得意とする事を知っている。勿論初めから沢山任せするような事はしないが、行く行くは和樹と日陰、藤姫のローテーションで回せるようにしたかったのだ。ユリ子は…残念ながら、料理に関してはかなり遅れをとっていた。手伝えるのは食器を洗う事くらいである。日陰は新戦力として期待されていた。

そうした説明を一通り終えて。

保護者である阿部は、日陰を藤姫に預けて神社を後にした。別れの際、日陰に連絡先を書いた紙を渡して。

「何かあったら、すぐ電話しなさい。力になれる事なら、何でもするから」

「ありがとうございます、マリアさん」

藤姫たちに頭を下げてから、阿部は車に乗り込んだ。軽自動車らしい軽いエンジン音を立てて、阿部の運転する車はゆっくりと神社の境内から走り去ってゆく。その姿を、日陰は消えるまで見送った。

「…さて。ちょっといいかい、日陰」

「え？ …何でしょう」

少しニヤニヤしている藤姫。ちょっと怖かった。

「これから和樹たちが帰ってくるからね。ちょっと、一芝居つってもらうよ」

急に上機嫌になる藤姫に、苦笑いするユリ子。何も分からない日陰はただ戸惑うばかりだ。

二人にうながされるままに、日陰は社務所の中へと戻って行った。

日も落ちた7時半。

予定よりも少し遅れて和樹たちは神社に戻ってきた。二人は急いで車を降りると、社務所へと入る。

「ただいま！ 今戻ったけど日陰ちゃん来てるか！」

公平が叫ぶ。『来てるか』というより『生きてるか』と聞きたい所だ。和樹も不安そうな顔で玄関を上がる。すると、居間の方から血相を変えて藤姫が現れた。

「和樹：あんだ、やってくれたね！」

「ふ…藤姫！？」

遅かったか。藤姫の言ってる事は分からないが、怒ってる事は確かだ。原因は…和樹を浮気者と思った事だろうか。サタンの説明なら、そう捉えるのも仕方ないかもしれない。和樹の背中に、嫌な汗が流れる。

次に現れたのは、ユリ子だ。こちらは、暗い顔をしていた。

「和樹さん…。軽蔑しました」

「ちよつ、一体何したってんだよ！」

「しらばっくれしないで下さい！ もう、生まれる寸前なんですよ！」

生まれる？

生まれ…えええ！？

「お、親父！ どういう事だ！？ 日陰さん、そういう相手いたのかよ！？」

「そ、そんなワケないだろ！ ただでさえ、お前に縛られた影女だつてのに！」

パニックになる二人。ユリ子と藤姫は、そんな二人を強引に居間まで連れてくる。そこには確かに、お腹を大きくした日陰の姿があった。布団に横たわっている。

日陰は、力なく微笑んだ。

「和樹、さん…ごめんなさい。私、もう駄目みたいです…」

「な、何言ってるんだ！ やっと会えたのに！ 誰の子でも構わない、しっかり生んで、二人で育てよう！」

二人の中で、どういうストーリーが出来ているのかは分からない。何やらニュアンスが違うような気がした、その瞬間…

日陰のワンピースのお腹の部分がせり出し、動き出した！

「うわああああ、エイリアン!?!」

バタバタバタバタ！

膨らみが、暴れ出す！苦悶の表情を浮かべる日陰。そのワンピースが、裂け始めた。

ビリ… ビリビリ…

「わああ、やめろ！ やめろおおお！」

涙目でオロオロする和樹。どうしていいか分からず、日陰のお腹を押さえつけようとした次の瞬間、とうとうワンピースが裂けて中から何かが飛び出した！

ビリビリビリビリビリ！

「ぎゃあああああああっ!?!」

黒い影が飛び出して…

「コーーコーン！」

シュタツ…と和樹の前に着地した。イツナだ。…イツナ？

時が止まる。和樹と公平は、目を点にして固まっていた。イツナも、すっかりポーズを決めて着地してみせたものの、二人がノーリアクションなので困った。仕方ないので、少し踊ってみる。

「コン〜、コココン〜コン〜」

ユラユラと揺れてみせると、やっと和樹が動き出した。

「あの…これ、何……？」

後ろで笑いを堪えていた藤姫が、答える。

「和樹の子供じゃないのかい？」

「俺の子供…？」

頭が上手く回っていない。和樹はイツナを抱きかかえながら、とりあえず鼻をつまんだ。

「ム……ブハア！？」

「あんだ、とりあえずで子供を窒息死させるのかい！？」

駄目だ、完全に壊れている。藤姫は仕方なくネタばらしをした。

「サタンがドッキリ仕掛けるから協力しろって言って来たんだよ。で、日陰とユリ子と私で考えたのさ」

「最後のイツナさんが食い破って出てくる所は、私のアイデアですよ。ビックリしました？」

ユリ子がニコニコしながら言う。

「ごめんなさい、そんなに驚くなんて思わなくて…」

日陰はすまなさそうに言った。それを見て、公平はホツとため息をつく。サタンの悪戯には腹がたつが、日陰が皆と仲良くなっているのは良かった。和樹も、そう思っているだろう…そう思って和樹の顔を覗き込んだ公平は、またも固まる。

「うう…ぐすつ…うう…」

和樹は、泣き出した。

「ちょっと、和樹、どうしたんだい!？」

「ど、どうしたも、こうしたもあるかよう…俺、本気で怖くて…うう…」

これはヤバイ！ 焦りだした皆は、慌てて和樹のご機嫌取りを始める。藤姫は和樹の頭を撫で、ユリ子はコーラ味の飴を探しに行った。イツナは踊り、公平は歌う。何が何だか分からない騒ぎになって、日陰は困惑するが…

和樹の言葉を思い出して、少し嬉しかった。

誰の子でも構わない、生んで育てよう。

そんな言葉がとっさに出る和樹は凄いと、日陰は思った。本当に、自分の事を大切にしてくれていないと、出てこない言葉なのだ。和樹には悪い事をしたが、日陰は胸が暖かくなるのを感じていた。

和樹が泣き止むまで、日陰は和樹の手を優しく握っていた。

それを、神社の遥か上空で見ている者がいた。

『なあ、このリアクション予想しとったか？』

『当然でしょう。情に流されやすい横島さんとルシオラさんの魂が活性化している中でこれは嫌がらせ以外の何物でもありません』

『うーん、しばらく様子見やなあ。けど、これで役者は揃ったし後はコスモプロセッサー起動させたらシマイや。ワイらも、そろそろ本業に戻るやるな』

『それ、なんですかどね…』

困ったように、切り出す。

『彼女が、ここを見つけ出しました。近々、転移して来るでしょう』

サタンは驚いた。まさか自力で世界を渡るとは思っていなかった



のだ。が、この世界には芦優太郎がいる。和樹も成長した。適わぬ相手ではないだろう。

『いつか、来るとは思ってたけどな。まあ、何とかなるやる。何せアイツらはアシユタロスすら退けたGSやからな』

そう言って、サタンたちは神社を眺める。どさくさに紛れて日陰に抱きつく和樹、それにキツイ突っ込みを入れる藤姫とユリ子、転がるイツナ。大騒ぎする皆を見ながら、二柱の神は確信していた。きつと、この連中なら何とかしてしまっだろう、と…

## 第五十六話 日陰の新生活と祭のはなし

朝。太陽がまだ昇らないうちに、日陰は目を覚ます。全く新しい環境では眠れないかと心配していたが、昨日はくたくたに疲れていたので意外とすんなり眠れていた。

その後、和樹はとにかく子供のように泣いたり甘えたりと、普段と全然違った姿を見せた。事情を知っている藤姫はともかく、日陰が和樹の知り合いの妖怪だとしか聞かされていないユリ子は驚いた。嫉妬してもいた。が、日陰の優しい雰囲気や幸せそうな和樹の顔を見るとそんな気持ちも失せてしまう。きつと、二人の間には特別なものがあるのだろう。自分には、それが無い。ただそれだけの事だ。憧れが憧れのまま終わる事なんて良くある話じゃないか、とユリ子は割り切るうとしていた。

和樹のエスカレーターする甘え行為を霊気弾の連射で抑えると、ユリ子たちは日陰の歓迎会を開いた。奇しくも、横島たちと同じ寿司屋に頼んだ出前である。和樹が決勝で横島を魚にした話で盛り上がりながら、皆、楽しく食事をとった。そして、日陰はその日早めに寝かせてもらう事となった。初めて戦ったり、慣れない人ごみに疲れていたからだ。

…そして、今である。

日陰は布団から出ると鏡で髪の毛を整えた。今まで前髪で目を隠していたが、これからは隠さないで行こう。大丈夫、ここには自分を傷つける者なんか居ないのだから。日陰は鏡の中の自分に笑いかけてみる。あの頃とは全く違うけど、同じ雰囲気を持った女性が同じように笑い返した。

準備はOK。日陰は、そろりと部屋を抜け出した。行き先は…勿論和樹の部屋である。日陰は、影に隠れて姿を消す能力を持っている。誰にも気づかれずに、和樹の部屋に忍び込む事が出来る。

日陰は、部屋を出るとすぐに影に隠れる。床には影だけが残る形だが、まだ日の出ていない今なら暗くて気づく者はいないハズだ。ススス…と和樹の部屋へと向かっていると…。

ジャー…

トイレの水を流す音が聞こえた。扉が開いて、誰かが出てくる。トトト…と音が近づいて来た。

(えっと…見つからないよね?)

暗いから、分からないハズだ。日陰はひっそりと息を殺して音の主をやり過ぎそうとする。ふと、やってきた者を見ると、そこには…

イツナがいた。

(え…?? キツネさんなのに、トイレ使えるの…? タマモさんと同じなのかしら)

何にせよ、静かにしていれば気づかないはずだ。そう思っていると、イツナは知らずに近づいてきて…

「コン?」

何かを察知した。

ヤバい。日陰は思い出す。藤姫は何と言っていたか。確か警戒心が強いとか…

「コ…コン？」

イツナは、日陰の潜む床をポンポン叩く。鼻をクンクンしたり、首を傾げて見つめたりした。そして、縦に伸び上がったと思うと…

ドスッ！

両前足で床を突いた。

「あふっ！？」

思わず出てしまう声。さすがにイツナも分かった。この影は日陰の物である、と。

「コン コン ココン」

「ひゃっ、あはは、止めて下さいイツナさん！？」

喜んで影の上を跳ねまくるイツナ。日陰はたまらず影から飛び出した。そして、慌てて自分の部屋に戻る。

「ごめんなさい、忍び込むのはやめますからー！」

「コンコン」

バタバタと駆けて行く二人。それを、呆れたような顔で見送る一人の女性が。

「まったく、何をやってるんだか…」

そうつぶやくと、藤姫はいつものように和樹の部屋へと入って行くのだった。

8月ももう終わり。 和樹は今、何気にピンチに立たされていた。

「うおおおお、終わらねー！ 簡単だけど、量が多すぎる！」

「だから毎日コツコツやりましょって言うてたのに！」

居間のテーブルの上に夏休みの宿題を広げて、和樹は必死に問題を解いていた。隣で怒っているのはユリ子。ユリ子はコツコツ派であり、和樹は後回しにして苦しむ派だ。

「しかし、横島が既に終わらせてるとか信じられねーよな…アイツ、いつの間に真面目になったんだよ」

「夏休みの始めにピートさんと一気に終わらせたらしいですよ。結構、しっかりしてるんですね、横島さんって」

違う。和樹は横島の考えが読めた。和樹を模倣していたのは文珠の為じゃなくてこれを解く為だったのだ。でなきゃ、何度も模倣な

んてしないだろう。和樹の知識を流用して宿題を終わらせていたのだ。あくまで予想だが、自分だったらそうするだろう。だから、当たっている自信はあった。

「チクシヨー、あの野郎覚えていやがれ…」

そんな恨み言をいながら猛スピードで宿題を解いていると、居間と襖一枚隔てた台所から日陰がやってきた。手にはお盆があり、その上には大きな皿にたくさんのスイカが。

「少し休憩にしませんか？ 公平さんが、たくさん貰ったから食べてくれて…」

「あー、そう言えば今年は穫れすぎたとかでたくさん貰ったなあ。ありがとう、日陰さん」

和樹が言うと、日陰は嬉しそうに笑った。その表情は、確かにあのおキ又ちゃんのものであった。思わず涙ぐむ和樹。ユリ子は単純にスイカが好きなので喜んでいた。

「ところで、日陰さんってマイ包丁使ってますよね。それ、もしかして霊刀ですか？」

テーブルの上を片付けながら、ユリ子が聞く。先ほど日陰が台所で包丁を使う所を見ていたのだが、奇妙な力を感じたのだ。

「えーと、これは…」

日陰も困ったような顔をする。和樹が助け舟を出した。

「以前、妖刀を退治したんだけどさ。折れた刃を使って包丁作った

んだよ。で、日陰さんにあげたんだ」

正確には、前の世界で美神令子との仕事で退治した妖刀シメサバ丸。その刀身を、勿体ないからと包丁に作り直した物だった。それを使って、おキ又ちゃんの頃に料理をしていたのだ。日陰にとつては馴染み深い物である。

「女性に家事道具贈るとか、意味分かってやってます？」

「え？ …えーと、分かんない」

だろうな、とユリ子は苦笑いする。和樹の事が、最近良く分かって来ていた。彼は天然なのだ。意図せずに女性に優しくして、その気にさせてしまう。そんなのはた迷惑な面が和樹にはあるのだ。

「シメサバ丸さんは、あまり力が無いので普段は眠ってるんです。だから、危なくないですよ」

日陰はそう言うが、GS試験を見ていた和樹は素直に頷けなかった。歌いながら相手を追い回すシメサバ丸は、どう見たって危険だったのだ。これは、ちゃんと封印するか人格を強化するなりして安定させないといけないだろう。鬼道あたりなら相談に乗ってくれるだろうか…

そんな事を考えながらスイカを食べていると、今になって藤姫やイツナ、公平の不在に気づいた。

「ところで親父は？ 藤姫たちも居ないみたいだけど…」

「ああ、それなら自治会の人達と打ち合わせですよ。今年のお祭り

は藤姫さんが居るからちゃんとしたいんですって」

ユリ子がスイカを食べながら言う。隣の日陰は先割れスプーンで種を丁寧にとっていた。

和樹は悩む。日陰は対人恐怖症だ。ユリ子に対して警戒心を抱かないのは前の世界で助けた経験があるから、平気なのだ。本当に知らない人が来る祭りは辛いのではないか。少なくとも、役員たちへの挨拶とかは止めておいた方がいいだろう。

「日陰さん、言うの忘れてたけど月末の2日間は祭りがあるんだ。たくさん人が来るから、社務所の中から出ない方がいいかもしれない」

「あつ…そうですね。まだ、ちょっと怖いです。」

少し暗い顔をする日陰。無理もない。おキヌであった頃、無理やりGS業界に連れ戻されてからは知らない人間の言いなりとなって働かせられ、命を落とした。『知らない人』に対する恐怖心は半端ではない。

しかし、日陰は自分を変えたいと思っていた。誰とも話したくないと妖怪になったばかりの頃は思っていたが、このままではダメだと思い立ち和樹に会いに行った。セッティングしてくれたのは、世界の最高指導者の乗り移った阿部や、公平たちだった。いろんな人に支えられて、今の幸せがある。以前の自分には戻りたくなかった。

「でも、私も皆さんのお手伝いがしたいです。出来れば、私も参加したいんですけど…」

「え…いいのか、日陰さん。」



意外な返事に戸惑う和樹。だがユリ子は喜んでいた。

「大丈夫ですよ。私もここに来て1ヶ月ですけど、近所の人は皆優しいですから。日陰さんもすぐ馴染むと思います」

ユリ子だつて祭りの手伝いなんて初めてだ。不安はあつたが、日陰が一緒なら安心する。少なくとも、同じようにコミュニケーションが苦手でも分からない同士。話は合うだろう。やけに嬉しそうにユリ子を見て、和樹も仕方なく許可した。

「辛くなつたらすぐ言ってな。吉村さんも、初めては不安だろうから無理しないで」

「はい、分かってます」

答えながら、ユリ子は少し顔を赤くした。昨日妄想した和樹のセリフと微妙に重なっていたからだ。頭の中のイメージ映像を振り払って、ユリ子はスイカにかぶりついた。

公平たちが帰ってきたのは、夕方だった。少し疲れた顔をしている公平。藤姫の話によると、今回の祭りは参道だけでなく商店街の方も一部で出店を企画しており、想像以上に規模が大きくなるらしい。

「親父、ちよつとマズくないか？ それだけ賑やかになると警備員とか雇わないと危険だろ」

「ああ、その手配を今回の氏子会議で頼んで来たんだ。自治会長が氏子役員兼任してくれて助かったよ」

人がたくさん来るとなると、それなりにトラブルが発生する。神社境内に悪意は入り込まなくても、商店街は別だ。それに、悪意などなくても事故は起こる。何の対策もとってないと、警察にも怒られるのだ。実際に過去、違法駐車の前が出来た時など公平の所に警察が来てかなり怒っていた。

「今回は商店街の人たちが規模を大きくしたいと言ってるからな。止めようがない。まあ、腹くくって頑張るしかないさ」

公平は伸びをしながら言った。背中がパキパキと音を立てる。

「なんだか私が出来たせいで大変な事になったね…」

「藤姫が気に病む事じゃないよ。それだけ皆に好かれてるって事だから、喜んでいいんだ」

和樹の言葉に、少し照れる藤姫。日陰はそれを見ながら、変わってないなと思った。優しい。そして、暖かいのだ。

藤姫が照れ隠しに和樹をからかい、顔を赤くして動揺する和樹、それを笑うユリ子。そんな光景を見ながら、日陰はまぶしいものを見るように目を細めていた。

夕食を終えて日陰と和樹が台所で洗い物をしている時。日陰は何とも無しに和樹に尋ねてみた。

「この世界の私とは、会いましたか？」

「え？ ああ、会ったよ。なんか死津喪比女が早めに目覚めちゃったからすぐ倒した。こっちのおキ又ちゃんはもう人間になってるよ」

それを聞いて、日陰は安心した。きつと、放っておくような事はないとは思っていた。けれど、まさかもう人間になっていたとは…

「やっぱり気になる？」

「はい、自分と同じ経験をした人ですから。ただ、幽霊のままだったら会えないんです。今の私は幽霊と妖怪の中間のような存在で、もし霊体の私と会ったら融合してしまいかねないので…」

それは確かに会えない。日陰の性格上、誰かの人格を塗りつぶすなど絶対出来ないだろう。

「じゃあ、いつか遊びに行こうか。江戸時代の話とか、懐かしい話がたくさん出来ると思うし」

「はい！」

日陰は嬉しそうに返事をした。

和樹は、孤児院時代に日陰のような気弱な子に特に好かれていた。何故なら、相手の話を聞いて、今のように前向きな提案をしてみせるからだ。今度、こういう事をしてみよう。そんな風に提案すると相手はちゃんと話を聞いてくれると安心するし、前向きに何かをしようとも思えてくる。和樹は意図せず、日陰のようなタイプの子にそうした会話の仕方をしていた。そして、それは日陰にとって大きなプラスに働いていた。今なら、もっと勇気を出して言いたい事を言えるのでは、と。

「和樹さん……。もし良かったら、二人きりの時はおキ又ちゃんと呼んで下さい。私も、和樹さんの事を横島さんって呼びたいです。あんな事言ったのに勝手だとは思うんですけど……」

恐る恐る、お願いする日陰。和樹は、少し涙ぐんで微笑んだ。

「分かったよ、おキ又ちゃん。二人だけの、秘密だ。」

「はい、横島さん……」

寄り添って、唇を重ねる。二人はほんの少しの間、前の世界の二人に戻って抱きしめあっていた。

そんな二人を、イツナは襖の隙間から覗いていた。満足そうに頷くと、そっと襖を閉める。居間を出て、玄関の下にあるイツナ用の出入り口から外に出ると、神社の本殿へと向かった。

近々、祭りがあるという事で、参道脇には木の杭が打たれている。そこには提灯が取り付けられるらしく、綺麗に等間隔に並べて設置されていた。イツナはその杭を眺めながら、音も立てずに歩いて行く。

歩きながら、今、自分は幸せだと感じていた。その幸せには終わりが来るのだけど、それは決して悲しい事ではない。自分には見る事も許されなかった幸せな夢。それを、見る事が出来たのだ。和樹が、笑顔だった。日陰も、笑顔だった。こんな幸せな事が、他にあるだろうか。

いや、最後にもう一つ。

和樹の大好きな人が、帰って来たら。きっと、この夢は最高に幸せな夢になるに違いない。イツナはそう確信していた。

参道を歩いて、本殿へとやってくる。イツナはその真ん前に座ると、前足をもふもふと叩いた。柏手のつもりなのだ。かしわでそして、目を閉じて何かを祈る。しばらくして頭をぺこりと下げると、遠くから良く知った声が聞こえてきた。

「おーい、イツナー！ どこ行っただー？」

「イツナさーん、お風呂入りますよー！」

和樹と日陰の声だ。その後で、藤姫とユリ子、公平の声も聞こえて来た。こんな自分の為に心配してくれるなんて、と少し涙ぐむ。イツナはこれ以上心配させないように、大きな声で鳴いてみせた。

「コーンー！」

夢の終わりは近いけれど。

神様が許してくれるなら、もう少しだけここに居てもいいかな。

イツナはそう思ってから、和樹たちのもとへと駆けていった。

8月30日。

天矢神社の例祭日である。前日の宵宮から祭りはスタートしていたが、今年はとにかく人が多かった。境内も割と広いのだが、出店が異様に多く、遊びに来る連中の数も半端ではない。基本的に氏子である商店街の組合と自治会長主導でやっている為混雑もうまく捌けているが、ロクに連携のとれない神主が宮司だったら悲惨な事になっただろう。

こうした祭りは出店ばかりに目が行ってしまいが、神主もちゃんとして仕事をしている。宵宮祭、本宮祭の二回の祭典と、お渡りの儀である。お渡りとは、神社で祭られている神様を御神体に降ろし、御神輿に移ってもらって地域を練り歩くものだ。しかしながら、神様である藤姫が「商店街なら普段からいくらかでも歩いてるからねえ」と断ったため、この神社では執り行わない事となった。つまり、公平が行うのは普通の祭典だけだ。

しかし。

祭神が目の前にいる祭ほど、滑稽なものはない。

祭式におけるセオリーは藤姫にとって何の意味を持たない為、まずお供え物で駄目出しが出た。

「生の米なんか食うわけないだろう？　せめて炊いておくれよ」

「日本酒は苦手なんだ、ワインは無いのかい？　ああ、なら魚より肉がいいねえ。第一、塩って何なんだい。塩舐めて日本酒飲めって事？」

「いくら何でも昆布の干物は無いだろう？　これこのままバリバリ食べる奴は神というより悪魔だよ」

台無しである。

学校で習った祭式作法を全て否定された公平は、ガツクリうなだれながら出前を頼んだ。鯖味噌定食だ。魚という所に、ささやかな抵抗が見てとれる。

そして、その後に祝詞奏上である。勿論ここにも駄目出しが出た。

「掛けまくも畏き天矢藤比女神の大前をおろがみまつりて…」

「何言ってるんだい？」

またガツクリうなだれる公平。

「俺、神主！　君、神様！　普通に仕事させて！」

「だって、言ってる言葉が分からないなら意味無いだろう？」

正論だ。悲しいまでに正論だ。仕方なく、公平は掻い摘んで言った。

「今年も神様のおかげで平和でした。農作物も豊作で、商売も繁盛しました」

「ふーん、良かったじゃないか」

「またこれからも、宜しくお願いします」

「まかせときな！」

なんだ、これは。

これは、何なんだ。

プルプルと震える公平。そして、ついに爆発した。

「やってられるか、コンニャロー！ これのどこが祭典だー！」

「ど、どうしたんだい！？」

うがーっ、と暴れ出す公平、驚く藤姫。それを外から眺めていた和樹は笑い転げていた。

「か、和樹！ どうにかしておくれよ、公平が壊れたよ！」

「仕方ねえなあ、じゃあ次は神楽舞の奉納だろ？ 踊ってやるよ」

和樹が、姿を変える。これは…蛍子バージョンだ。



そばにいた日陰は、その姿に驚く。本当に、ルシオラそっくりなのだ。少しだけ胸がチクリとしたが、今ではもう割り切っている。それどころか、懐かしい人に会えたような嬉しさがこみ上げてきていた。ほんの少しの間だけれど、話もしたし、楽しかったのだ。

イツナを抱いていたユリ子は、少し興奮気味だ。イツナも瞳をキラキラさせながら前足をもふもふ叩く。和樹は魔力で服装をあの特徴的なドレスに変えると、ツカツカと本殿に上った。…ヒールを履いたまま。

タタツ　タツタツタ！

「ヘイツ！」

どこからともなくラテンの音楽が流れる。和樹は情熱的にステップを踏み、拝殿内を縦横無尽に踊り出した。

「や、やめろ！　いくら何でも場違い過ぎる！」

「じゃあ神主も踊っちまえよ」

「な、何言って…わわああーっ!？」

止めに入る公平の手を強引に取って、和樹は踊る。もはや何をやっているのか分からない祭典は、藤姫やユリ子たち、果ては参拝客たちまでも爆笑させながら、その後30分以上も続いた。

そんな馬鹿騒ぎの中、日陰はたくさんさんの笑い声に包まれながら、自分も笑顔になっているのに気付く。

また、人がたくさんいる中で笑えるようになっていた。あれだけ、他人が怖くて震えるしかできなかったのに。こんな人ごみ、耐えられなかったのに。

これも、和樹さんの…横島さんの魔法なのかな。日陰はそうつぶやきながら、楽しそうに踊る和樹と公平を眺めるのだった。

## 第五十七話 黒き雲を纏う者のはなし

遙か向こうの空に、雷の鳴る音が聞こえた。寝台に横たわっていたメフィストは、全身の汗を拭きながらゆっくりと起き上がる。身体の中から何かがこっそりと抜け落ちたような感覚。出産って、もしかしたらこういう感じなのかも、と思っていた。

「よう頑張ったのう。成功じゃよ」

ドクター・カオスはマスクを外して労いの言葉をかける。メフィストは疲れきっていたが、その言葉を聞くと強気に振る舞った。

「こんなの、何でもないわ。私はメフィストなのよ？」

今ではトップではないが、魔界で一時期でも最大勢力を率いていた自負がある。メフィストは得意気に言うと、フラつく身体で寝台から降りる。そして、近くにいる芦優太郎に声をかけた。

「さあ親父殿。それさえあれば終わりなんですよ？ とつとと魔界に行ってきなさいよ」

「そう邪険にしなくても良いだろう。言われなくても行ってくるさ」

芦優太郎は三角形の不可思議な物体を手に、呆れたように言った。これを分離してなお生意気な態度をとれるとは、我が娘ながら大したものだ、と関心もしている。

三角形の物体は、エネルギー結晶体という。

アシユタロスの生み出した最高のエネルギー体であり、コスモプロセツサーの鍵となるパーツだ。ミニチュアの結晶体での実験には成功しているが、本格的な起動は今回が初めて。メフィストの体内の結晶体を使つて、いよいよ計画を実行に移す時が来たのだ。今はその結晶体を取り出した所。一度馴染んで適応した結晶体を分離するのは骨が折れたが、メフィストの頑張りでなんとか成功した。

「これで、私はもう好きなように生きていいのね？」

「ああ、勿論だ。鬼道君の所に行つてもいいし、好きにするがいい」

満面の笑みを浮かべるメフィスト。やれやれ、そんなに私のもとに居るのが嫌いか。この世界のメフィストは直接的な娘ではないが、芦はなんだか悲しかった。そこに、秘書の一人が入つて来る。

「アシユ様、魔界へのゲートが開きましたあ」

背が少し高めの、美しい銀髪の魔族の女性、イシユタルであつた。まだ生まれて間もない為に世間知らずな彼女は、サタンの管理する教育機関を卒業して事務所に入った。アシユタロスの魔力と細胞によつて生み出された娘の一人である。純粹無垢な分、メフィストよりも可愛く思える。

「分かつた、今から向かうよ。メフィスト、悪いが私たちはしばらく留守にする。君は事務所で寝ていたまえ」

「フン、留守番つてわけね。まあいいわ、私も疲れてるし。あんたは好きなだけ可愛い娘と魔界旅行でもしてきなさいよ」

白けながら、手を振る。芦はため息をつきながら、部屋を出て行

った。カオスも、魔法道具を片付けながら部屋を出る。その際、メフィストに振り返って注意した。

「なるべく、これからしばらく魔力を使わぬ事じゃ。身体の中の霊的バランスが狂いまくっておるからの。三日は寝ておいた方が良いじゃろう。…食事とか、大丈夫か？」

「リリスは残るんでしょ？ なら大丈夫よ。あの子が用事でいなくても、お金はあるから最悪出前を頼むわ」

まあ、それなら安心か。カオスは納得したように頷くと、そのまま部屋を出て行った。

…誰も居ない部屋で、メフィストはやつと気を抜いて床にへたり込む。正直に言えば、立っているのも辛かった。今まであつて当然だったパワーが、根こそぎ出て行ったのだ。今のメフィストは下級魔族程度の力しかない。

「情けないわね、メフィストともあろう者が…。さつさとシャワー浴びて着替えて寝ようつと」

そう言つて、立ち上がり部屋を出る。芦優太郎事務所の、誰も居ない廊下を歩きながら、メフィストはふと窓の外を見て…

固まった。

窓の外は、いつの間にか雨。大粒の雨粒が窓を叩きつける中、その窓の向こうに一人の女が立っていたのだ。ここは二階。つまり女は浮いている。

ザアアアア、という雨の音に混じって、その女のものと思われる声が聞こえてきた。

「ああ…。私の令子…。探したのよ…」

「…ヒッ！？」

思わず声を上げる。女は窓をすり抜けて、目の前までやってきていた。ヤバい。悪霊かもしれない。今の疲れきった自分には、低級霊の相手もしんどいと言うのに。

女は、全身が雨に濡れていた。外見はスーツに身を包んだ仕事の出来る女性、という感じだが、その表情は狂気に支配されたような異様な表情をしていた。今まで様々な人間を見てきたメフィストだったが、ここまで無条件に恐怖を抱かせる表情は見た事がない。

「な、何者よアナタ！」

「…令子？ 私よ、ママよ。何を言っているの？」

「誰よ、令子って！ 私にママなんていな…ヒッ！？」

メフィストは目を見開いて恐怖する。女の顔が、まるで般若のような形相でこちらを睨みつけているのだ。身体が、蛇に睨まれたカエルのように固まり動けなくなる。

「あなた…令子じゃないわね？ どこ？ 令子はどこなのよ！？」

バチバチツ…と、何かがはぜる音がした。女はメフィストの亜麻色の髪を掴んで顔を近づけると、ヒステリックにわめき立てた。

「令子は！ 私の娘はどこなのよ！ 答えなさい、偽物！ 令子はどこー!?」

ガン、ガン、とメフィストの頭を壁に叩きつける。抵抗を試みるも、その異常な力になすすべがない。頭部から出血をしたメフィストは、そのまま気を失ってしまった。

「…知らない、ようね…。ただの、人違い…か……」

倒れて動かなくなったメフィストを、冷たい目で見ながら女はため息をついた。そして、空を覆う雨雲を見上げる。虚ろな表情で手を上げると、雨雲から一筋の光の柱が。

ズガアアアアアアンツ！

それは、雷だった。雷は事務所の窓を突き破り、女の身体に直撃する。女はまるで消し飛んだかのように一瞬でその場から姿を消した。

残ったのは、メフィストのみ。頭から血を流して倒れているメフィストは、秘書のリリスが駆けつけるまで、破壊された窓から吹き込む雨に身体をさらし続けた。

9月。夏休みも終わり、とうとう二学期に突入した。朝に藤姫に起こされ皆で朝食をとって、和樹とユリ子は一緒に学校へ行く。社務所の受付には日陰とイツナがついて、藤姫は買物や掃除をしていた。公平は神主としての仕事が増えてきており、平日は地鎮祭などで外に出ている事が多い。皆、それぞれの日常に戻っていた。

新学期に入り、和樹とユリ子、横島は以前のようにただの学生に戻った。しかし、周囲の人間の態度は夏休み前と全く違う。GS試験が一般のマスコミで報じられた関係で、三人は有名になっていた。

二条高校は進学校である。互いの競争意識が異様に高い人間の集まりであり、テスト結果の順位に一喜一憂して、時にはノイローゼになる人間も出るという学校だ。資格の中でも特別所得の難しいGS資格を取った人間が、注目されない訳がない。

和樹は元々周囲の人間に冷たいので変な絡まれ方はしない。ユリ子も、一部の友達以外とは話をしない上に和樹と一緒にいる事が多いので、妙なちよっかいは出されない。が、この男は違う。

「うわははは！ 最近仕事も増えて来たし、受験しないでこのまま就職するからな！ 彼女も出来て、本当に最高よ！」

男子生徒に囲まれ自慢する横島。馬鹿だ。受験しない宣言をしたから、周りは好意的に受け取るものの、彼女持ちという所で皆は微妙な視線を横島に向けていた。

GSはまだまだ怪しい仕事というイメージが強い。だから、そんなリスキーな仕事をしようとする横島を馬鹿にする生徒もいた。が、そうした人間は結局の所自分には無い才能を持つ横島に嫉妬してい



ただけだった。客観的に見れば横島は成功者であり、将来的には社会の勝ち組になる可能性は高い。つまり、どういふ事が起こるかと言つと…

「横島君、一緒にお昼食べない？」

「横島君、次の数学の宿題見せてあげようか？」

「私、帰り横島君と同じ方向なんだけど、一緒に帰らない？」

狙われるわけだ。

横島は思った。きっと、今がモテ期というやつなんだ。こんな幸せ、今まであつただろうか…。血の涙を流しながら、横島は感動していた。

そして、それを見ていた和樹は思った。

まあ手え出して美神さんに刺されるといひさ、と。

さて、そんな周囲の変化はあれど基本的に三人は何も変わらなかつた。横島は誰とでも話すし友達も多いので和樹にべつたりしているわけではない。ユリ子にも友達はあるし、和樹と一緒にいる時でも、皆の前ではそんなに馴れ馴れしくはしない。和樹も学校では文庫本を読んでる事が多いので特別誰かと話したいとは思わなかつた。ここら辺は、本当に夏休み前と一緒だ。

その日も、昼休みに和樹は一人屋上の給水塔の上で藤姫の作って

くれた弁当を食べていた。今は本ではなく携帯ラジオを聞いている。夏祭りの時に、くじ引きで当たった物だった。

『南の海上に発生した台風は次第に勢力を強め、明後日には八丈島を暴風圏に…』

「台風かあ…。本殿の周りの木は若いから大丈夫だけど社務所脇の杉とかヤバいかなー…」

9月は台風の季節。今までは大した被害を受けていなかったが、今年はかなり大型の台風が発生したらしい。全国的にも都会を中心にゲリラ豪雨が発生しているというし、ちゃんと対策を練っておいた方が良さそうだ。

そんな事を考えていると、一陣の風が和樹のそばを吹きぬけた。その風は、ひんやりとした湿り気を帯びていたように和樹には感じられた。

「こりゃ、一雨あるかな」

和樹は空を見上げてつぶやくと、弁当を片付けて校舎の中へと入って行った。

空には、確かにうつすらと灰色の雲が覆い始めていた。

商店街の一角で、美神ひのめは久しぶりに買い物を楽しんでいた。最近、少しずつではあるが仕事が増え始めていて金銭的に楽になっていたのだ。和樹から文珠をたくさんもらって、精霊石を買わなくて済んでいるというのも大きい。もつとも、母である美智恵が用意した特注の金庫で保管して、使えるのは月3つまで。毎日個数をチェックして業務日報に書くこと、と言われていた。文珠に依存した戦いは出来ない為、破魔札などを相変わらず使ってはいる。それでも出費はかなり抑えられていた。

また、従業員である横島の知名度が業界でうなぎ登り状態であるのもプラスに働いていた。優秀な従業員を育て上げた事務所としてGS協会からの信頼も得る事が出来て、以前より多く仕事を紹介してもらえるようになったのだ。かなり、生活は楽になっている。

今日は、まず服と靴を見て回った。値段よりもデザインで選べるようになってからは、商店街の片隅にある小さなブティックに寄る事が多くなっている。そこで何着か買ってから、そのまま喫茶店に行こうとすると、手前の道に見知った顔を見かけた。

「あ、ママー！」

それは、美神美智恵の姿だった。少し疲れているのか、顔色が悪い。普段と違って少しピシッとしたスーツを着ているから、多分講師の仕事をした後なんだろうな、と美神は判断した。

「令子?...いえ、違うわね。あなたは？」

「え?」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「あなた…誰？」

「え？…え？ ママ、どうしたの？ ひのめだよ？」

「ひの…め…？」

困惑の表情を浮かべる美智恵。泣きそうな目をしていて。こんな母親の姿は、見た事がない。

「ひのめ…お姉ちゃんは、どこにいるの？ ママ、ずっと探してるのよ」

「お姉、ちゃん…」

美神の顔が、曇る。

自分には、生まれるはずだった姉がいたらしい。これは、幼い頃に父から教えてもらった事だ。我が子を産む事が出来なかった美智恵は精神的に落ち込み、しばらく仕事に復帰出来なかったという。もしかしたら、今の美智恵は精神的に参ってるのではないか。美神はそう思って、優しく声をかけた。

「ママ、お姉ちゃんは天国で元気にしてるよ。きっと、いつも私たちの事見てくれてるよ」

「え…？ 天国？」

「うん。前、死神さんに聞いたんだ。生まれる前に死んじゃった子は、天国に行くんだって。で、またすぐに生まれかわるの」

美智恵の顔が強張る。令子が、死んだ？ 生まれる前に？ 何故、この世界に令子が居ないの？ 何故、あの子の代わりにひのめが居るの？

ああ、そうか。

この子が、令子の居場所を奪ったんだ。

だから、この世界に生まれられないんだ。

なら、この子が居なくなれば令子に会える…？

「マ…ママ？ どうしたの、怖いよ？」

目の前の母親の変化に戸惑う美神。先ほどまでは、普通だったのに。今では憎しみの表情を浮かべてこちらを睨みつけているのだ。美神は、身の危険を感じた。が、信じたくない。母親に殺意を抱かれてるなんて、信じたくない！

「どきな！」

そこに、誰かの鋭い声が響いた。飛び込んで来た人影は炎を纏った刀を美智恵に振るう。美智恵は素早く避けると空中に舞った。

「あ、あなたはメドーサ！？ 生きていたの！？」

「藤姫様！？」

藤姫は今の一言で全てを察した。自分をメドーサと呼ぶこの美智

恵は、前の世界の美智恵だろう。この世界の美智恵はメドーサと藤姫が同一存在だと言う事を知らないのだ。

「ひのめ、コイツは偽物だよ！ あんたは本物の母親に連絡しな！」

「え、偽物！？ そっか、そうだよね！ うん、分かったよ藤姫様！」

明るい顔に戻り、美神は駆け出した。ポケットから携帯電話を取り出して、母親に電話をかける。遠ざかる美神を横目で確認してから、藤姫は美智恵に声をかけた。

「今更何のようだい？ あんたの娘は死んだ。この世界に美神令子はいないよ」

言いながら、藤姫は防護と人払いの结界を張った。ここは商店街、一戦交えるには場所が悪すぎる。何とかして場所を変えたいが…

「確かに令子は死んだわ。けど、世界を渡ったのは確認してるの。間違いない、あの子はこの世界に来ている！ 今はまだ居場所が無いだけで、あの子はこの世界で生まれるのよ」

完全に目がおかしかった。

それ以上に、藤姫には美智恵の姿に違和感を覚える。人特有の霊気や波動を感じない。まるで幽霊のようでもある。これは…なんだ？

「あんた、生きてないね？ 霊体でも無い…。何者だい？」

「ふふふ…少なくとも、薄汚い魔族では無いわ」

そう言うと、美智恵は片手を上げる。藤姫は構えた。得体の知れ

ない相手だ、油断は出来ない。藤姫は霊刀赤月を構えると、美智恵の攻撃に備えた。

しかし、それは無駄だった。

ピカッ……と、何かが光ったような気がした。そしてその瞬間、世界が真っ白な光に包まれたのだ。

ズガアアアアアッ！

それは、凄まじい衝撃。藤姫は一瞬で数十メートル吹き飛ばされた。

「あら、直撃しなかったわね。中々やるじゃない」

「グッ………今のは、雷かい……」

ブレスレットに仕込んだ水晶文珠の『防壁』によって、何とかガードする事が出来た。消費した霊力は三分の二に上る為、次は防ぎきれないだろう。

「私は令子の死後、自ら落雷に撃たれて死んだのよ。わざと耐性を呪符で無くして、ね。そうしたら、不思議な事に雷を放った雨雲と同化したの。正確には、雲の中の電気とね」

ニヤリと笑う美智恵。藤姫も記憶の中の美智恵の情報を思い出した。確か、雷の力を利用して時間を跳躍するなど人間離れた能力を持つ人間界でも要注意人物とされていた存在だったハズだ。そして今の話が本当なら……美智恵は自然界の電気エネルギーと結びついている。きっと、その力で世界を渡ったのだろう。これは、かなり

危険だ。

「私は、神族にも匹敵する力を得た。もう、誰にも令子を傷つけさせないわ。あの子の幸せを阻む者は、私が排除する！」

来る！

藤姫はすぐさま超加速に入る。が、次の瞬間藤姫の身体を落雷が貫いた。

ガアアアアッ！

「キヤアアアッ!?!」

文珠でも防ぎきれない衝撃。藤姫は力無く地面に倒れ込んだ。

「馬鹿ね。光の速度を超加速程度でかわせると思ったのかしら」

勝ち誇った笑みを浮かべる。そして、自分の強さを再確認した。小竜姫様でさえ苦戦したメドーサに、こんなに簡単に勝てた。自然界のエネルギーの、なんと強大な事か。これなら、世界を敵に回しても負けないだろう。横島なんて必要ない、私が令子を守るのだ。美智恵は興奮気味にそう決意すると、眼下に倒れる藤姫を見た。

「さようなら、メドーサ。こっちで何をしていたのかは知らないけど、犯罪者が人並みの幸せを手に入れようだなんて思わない事ね」

ズガアアアアアッ！

問答無用で、雷を放つ。

巨大な雷は藤姫に直撃すると、その身体を僅かな炭の塊に変えて



しまった。

「さあ、次はひのめよ。待ってなさい、ひのめ。ママがお仕置きしてあげるわ」

狂気の手を浮かべ、美智恵はその場から飛び去って行った。最後に藤姫だったものを一瞥して…

「怖い女だねえ、あれが母親の言うセリフかい」

その声は、近くの喫茶店から聞こえて来た。

喫茶店の窓側の席。藤姫は優雅にコーヒーを飲んでいた。実は先ほどの藤姫は水晶文珠で作った分身である。本体は最初から喫茶店にいた。和樹の分身と違って劣化する為に手も足も出なかったが、これで相手の正体が分かった。

「まあ、水晶文珠二つも駄目にしちゃったけどねえ。核に使った水晶すら炭にするって、デタラメにも程があるよ…」

和樹に謝らないとな、と思いながら、藤姫はコーヒーを飲み干した。さあ、次はひのめのヘルプに向かおう。藤姫は手元に残った最後の水晶双文珠に『探索』と入れると美神の気配を探し始めた。

美神ひのめは走っていた。

元来、運動は苦手だった。妙神山での修行で体力はついたものの、普段から走っている訳ではないのですぐにバテ始める。不味いことに今日は珍しくヒールを履いていた。

「うっうっ、雲が追いかけて来るよう…。もしかしくなくても、ママの偽物だよね…」

文珠に『速』と入れている自分の走りに、執拗について来る黒い雲。ゴロゴロと音を立てていた。怖い。

美神はいつの間にか、人気の無い工業地帯に足を踏み入っていた。辺りには灰色の建物が立ち並び、煙突からは白い煙が立ち上っている。道は細くなり、入り組んできた。…まずい。

美神の移動スピードが落ちる。雲は、もう頭上に迫ってきていた。そして…

ザッ

美神の目の前に、美智恵が立ちはだかる。身体からバチバチと放電しながら、狂気的笑みを浮かべて。

「元気のいい子ね。こんなに遠くまで逃げるとは思わなかったわ」

「…い、いや…助けて…」

ガクガクと膝を奮わせる。怖い。ここにいるという事は、藤姫様は死んじやったのだらうか。そう考えると、恐怖で動けなくなっていた。

「大丈夫。アナタも一応私の娘だから、せめて苦しまないように殺してあげるわ」

ヒツ…っと声をあげる。

駄目だ、殺される。

こんなの嫌だ、まだ横島君と結婚してないのに…

美智恵の腕が、振り上げられる。美神は思わず目をつぶった。

ズガアアアアッ！

凄まじい音と光で、頭が真っ白になる。ああ、死んじやったんだ。美神は横島にゴメンねと心の中で謝った。

（きつと、私の死を知ったら悲しむだろうな。いっぱい泣いちゃうかな。立ち直れなかったらどうしよう…）

（けど、横島君なら大丈夫だよ。きつと、また元気になって生きていけるよ。新しい所で、新しい生活をして、新しい彼女さんと…）

（嫌だ。）

(そんなの、嫌だよ…)

(横島君が他の人の所に行っちゃうのは、嫌だよ…)

「なら、せめて自分の足で立ちなさいな」

(え?)

(今の声は…?)

路上にへたり込んでいた美神が恐る恐る目を開けると…

「ママ!」

「全く、いざという時に身体が動かないなんて、まだまだ半人前ね」

そこには、自分のよく知る母の姿が。この世界の美神美智恵が立っていた。

## 第五十八話 和樹の告白のはなし

バチバチ、と周囲に電気のはじけるような音が響く中、二人の美智恵が対峙している。異世界の美智恵…ミチエは、驚愕の表情で美智恵を見つめていた。

「この子は私の娘であってアナタの娘じゃないわ。勝手な真似しないでもらいたいわね」

子を守る母は強い。

美智恵は娘に放たれた雷撃をその身に受けて、その全てを自らの靈力に変換してみせた。この世界の美智恵も、雷を利用できる体質を備えているのだ。

「くっ…生意気な！ アナタが令子を産んでいれば全てが上手く行ったものを…！」

ミチエは鬼のような形相で吐き捨てるように言う。これは、最低の言葉だ。美智恵は苦み走った顔をするが、挑発には乗らず自制する。感情を乱してはならない。もし本当にこの女が自分なら…まずは心理戦を仕掛けて来るはずだからだ。

チャキツ…と、神通棍を構える美智恵。少なくとも、雷撃の効かない自分に対して向こうは肉弾戦でしか戦えない。とにかくひのめさえ守りきれれば良いのだ。

「ふ…ふふふふ…私にそんな神通棍で勝てると思ってるの？ あのメドーサでさえ傷一つつけられずに散ったというのに」

「へえ…メドーサ？ 最近聞かない名前だけど、それがどうかしたかしら」

美智恵はメドーサが藤姫だとは知らない。ひのめが、後ろから声をかけた。

「藤姫様の事だよ！ 魔族から、神族に生まれ変わったの！」

「嘘おつしゃい、藤姫さんからアナタの位置を電話で教えてもらったからここまで来れたのよ？ 死んでなんかいないわ」

おや？ 美神は首を傾げた。  
なら、今藤姫様は何処に？

しかし次の瞬間その答えが。ミチエの遙か頭上から、炎を身に纏った藤姫が急降下してきた！

ザシュッ！

「ウアアアアツ！？」

ミチエが炎に包まれる。霊刀赤月の斬撃を受けたのだ。意表を突く攻撃に、ミチエは混乱した。

「な、何故！？ 確かに殺したのに！ 炭になったはずよ！？」

「そこがおかしいだろう？ 神魔は霊基崩壊起こして消えるのが普通なんだ。炭になったのは文珠の核になった水晶だよ」

ニヤリと笑う藤姫。ミチエはヒステリックにわめき立てながら、

雷撃を連発する。

「死ね、死ね、死んでしまえ！ 薄汚い魔族があ！」

しかしそれを、全て美智恵が受け止める。殊雷撃に対しては、美智恵は最強の盾である。ミチエは悔しそくに歯ぎしりをして美智恵を睨みつけた。

「何故、魔族なんかに味方するの！ あなたに信念は無いの！？」

「娘を救ってくれた人を裏切るわけないでしょう。神族だろうが魔族だろうが、娘の味方は私の味方よ」

なんとという娘至上主義。根本は二人とも同じなのだ。

「藤姫さん、私が盾になります。物理的な攻撃はアナタに任せていいかしら」

「ああ、任せておくれ。あの女の戦い方は分身を使って調べてあるからね」

前列に美智恵、後列に藤姫。この布陣でミチエを迎えつつもりだった。が、相手はミチエである。この布陣で来られては面倒だと判断するや否や、すぐさま空中へと飛び上がった。

「今日の所は退いてあげるわ。けど用心する事ね。今は雨の多い時期よ。それに、台風も来る。圧倒的に私に有利な条件が揃っているからアナタ達に勝ち目は無いわ」

そして、美智恵を睨みつける。

「私は令子をこの世界に呼び出してみせる。アナタやひのめを殺し

て、本当の歴史に戻してあげるわ」

ピカッ！

空がまばゆい光を放つ。

ズガアアンツ

黒い雲から一筋の稲妻が走ると、ミチエの身体に直撃してその姿を掻き消した。雲は、そのまま猛スピードで空の彼方へと消えて行く。藤姫たちは緊張した面もちのままそれを見送った。

「美智恵…あんた、一人で戦う気じゃないだろうね」

ミチエの姿が消えてから、藤姫が美智恵に尋ねる。

「よく分からないけど、あれは間違い無く私でしょう。なら、これは美神家の問題…」

「馬鹿言っくんじゃ無いよ」

鋭い声で美智恵を一喝する。美智恵は少し目を見開いて驚いた。

「あんたも、ひのめも。知らない仲じゃないんだ。特にひのめには和樹たちも世話になってる。勝手にムチャヤして傷つけられたら堪えないよ」

そして、一呼吸置いてから付け加える。

「それにさっき、私を助けてくれたじゃないか。恩は返すよ、全力で」

「藤姫さん…」



思わず美智恵は涙ぐむ。今まで、誰かに頼るなんて殆どして来なかった美智恵。藤姫の言葉が、胸に響いていた。

「ママ、皆に相談しようよ。きっと、力になってくれるよ」

「…そうね。藤姫さん、協力してもらえるかしら。出来れば、和樹君たちにも話したいんだけど…」

藤姫は笑った。

「勿論だよ。当たり前じゃないか」

六道家の広い会議室に、そうそうたるメンバーが揃っている。美神除霊事務所、小笠原除霊事務所、唐巢事務所、六道除霊事務所、そして天矢神社の面々である。

「…以上が、私たちの遭遇した霊障です。相手は恐らく異世界の私、美神美智恵だと思われます」

説明を受けた皆は、あまりのトンデモ話に啞然としていた。異世

界。いくらなんでも信じられない。

しかし、それをすんなり受け止める者もいた。横島と和樹、そして公平と日陰である。

「なあ和樹。これってもしかして隊長ってヤツか？」

「ああ、参ったな。まさかあの人まで渡るとは思わなかった」

敵としては最悪の部類に入る。狡猾で、目的の為なら味方も切り捨てる。凄まじい行動力でどんな劣勢もひっくり返してしまう。おまけに、雷と同化した。これからは台風の時期。何とも用意周到だ。

「隊長？ 和樹はん、この美智恵はんの偽物、知つとるんか？」

耳ざとい鬼道が、尋ねる。

事情が事情だ。仕方ない。和樹は皆に、この世界の仕組みを説明する事にした。かなり危険だし、もしかしたら今回の騒動の原因として非難されるかもしれない。が、それならそれで構わない。もしそうになったら、自分が責任を持って隊長を止めてみせよう。和樹はそう決心した。

「まず、先に皆に謝りたい。今回の騒動の原因の一端は、間違い無く俺にあります。すみません」

和樹の言葉に、皆がざわついた。公平は辛そうに顔をしかめる。日陰も同様だ。横島は、ただ黙って見つめていた。和樹は、深呼吸してから話し出す。それは、誰もが衝撃を受ける言葉から始まった。

「今から説明するのは異世界で起きた話です。俺は、元々その世界の住人でした。そこでの俺は…横島忠夫という名前でした」

和樹の話は、およそ二時間に及ぶ長い長い物語となった。掻い摘んでそれなのだ。聞き終わる頃には皆一様に疲れきっていた。しばらくは、誰も口を開こうとしなかった。

「だから…今回の事は、俺が責任をとります。俺が美神さんを殺さなければこんな事にはならなかった」

言いながら、和樹は全てが終わった、そんな気がした。自分は、人を殺めた。その報いを、今受けているのだ。これまで一緒に楽しくやってきた仲間たちも、さすがに今まで通りとは行かないだろう。

しかし、和樹の予想は裏切られた。

「いや、原因がどうか言う話じゃないだろ？ 今このメンツで、隊長をどうにかしようって言う話なんだから」

横島が言う。続いて、タイガーも口を開いた。

「難しい事は分かりますケン、上手く言えないんジャが、和樹サシンが一度死んだらもう報いは受けとるんジャー。昔の事はともかく、今どう戦うか考えた方が良くと思っんじゃがノー」

キョトンとする和樹。

「確かに和樹さんは大変な目にあつたのでしよう。もしかしたらその行為によつて今回の騒動が引き起こされたのかもしれない。けど、だからと言ってあなたが一人で戦う理由にはなりませんよ」

ピートまで、そんな事を言う。和樹は理解出来なかった。何故、そんな事が言えるんだ！ 思わず和樹は声を荒げる。

「おかしいだろ！ だって、俺のせいで隊長がおかしくなつて、この世界に攻めてきてるんだから！ 俺が責任とるのは普通だろ！？」

しかし、誰もその言葉を肯定する者は居なかった。

「あのね、和樹君。和樹君はこの世界に来てから何も悪い事してないよ。けど、その隊長さんて人は私を殺そうとしたり、悪い事したの」

「異世界の事情なんてどうでもいいワケ。大切なのは今この世界でバカな真似してる女をどう仕留めるか、なんだから」

美神とエミの言葉も、似たような物だ。和樹はもう、呆気にとられるしかない。それを見ていた美智恵が、和樹に近づいて来た。

「和樹君…ごめんなさいね」

「美智恵…さん？」

何故謝られるのか、分からない。

「向こうでも、こちらでも。私達親子はあなたに負担をかけてたのね」

「い…いえ、あなたが気に病む事はないですよ。向こうとこつちじや違う世界なんだし、あの隊長と美智恵さんは別人なんだから」

「ありがとう、和樹君。でもそういう事なら、あなたもそうよ。向こうではあなたは横島君だったかもしれないけど、私達にとっては今のあなたは和樹君よ。全くの別人だし、あなたにこの事で気に病んで欲しく無いわ」

ああ、違うんだ美智恵さん！ 前の世界の横島と俺は同じ存在で…

和樹は説明しようとするが、皆はもうその事に興味無いようだった。電気を使うならゴムで防げないか、などとアホな会話に移っている。和樹はガツクリとうなだれた。

勿論、皆は和樹の言いたい事は分かっている。自責の念にかられて、断罪されたがっている事も。しかし、わざとかみ合わない返答をして和樹に自虐的な事を言わせないようにしていた。

和樹に、自分を責めて欲しくはない。嫌われる事を覚悟して辛い過去を話してくれた和樹だからこそ、皆は和樹がこれ以上辛くならないように気遣っていたのだ。まあもつとも、和樹と横島がどうにも同一存在と思えないというのもある。世界を渡ったというより、単に生まれ変わったただけだろう、と。

納得行かなくてうなる和樹。そんな和樹の足元に、いつの間にかイヅナが寄り添っていた。

「コンッ」

「ん？ どうした、イヅナ」

和樹が抱き上げると、イツナは和樹の頭を撫で始めた。ああ、慰めてくれてんのか。イツナは優しいなあ、と思っていると、和樹はイツナの瞳が潤んでいるのに気づいた。

何、泣いてるんだ？

不思議に思ったが、何故だか聞く事が出来なかった。

「おい和樹、遊んでないで話し合いに参加しろよ」

「ちょ、遊んでなんかいねえって！」

横島に言われて和樹は我に返る。ああ、そうだった。今は作戦会議中じゃないか。和樹は名残惜しいがイツナを日陰に渡すと、会議の輪の中に入って行った。

この会議において、まず注目されるのはミチエの目的である。彼女は、前の世界の美神令子がこちらの世界で転生すると確信しているようだった。が、実際は転生などしておらず、美神令子のポジションには美神ひのめが居たのだ。

「令子は、初めに考えてた名前よ。産んで上げられなかったけどね。もし世界を渡って来てるなら会ってみたかったけどね」

美智恵は少し優しい表情をして言った。それを見て、ひのめも姉の姿を想像する。一体、どんな人だったのかな、と。酷い事をしていたと言っただけだが、和樹の口調は責めるようなものではなかった。きつと、本当は仲違いなんてしたくなかったのだろう。そんな気がしていた。

「美神さん…いや、令子さんが死んだのは俺が確認しています。だから、こちらには転生という形で渡ったはずなんですが、未だに見つかっていません。だから令子さんを見つけて引き合わせるというのは考えない方が良いでしょう」

皆が和樹の言葉に頷いた。居るかどうかも分からない存在に振り回されるよりは、実力で排除した方がやりやすいだろう。

「…となると、隊長が攻めて来た時に撃退するのが一番いいでしょう。攻めて来るのは、台風が上陸する時。早くて明後日、遅くても台風の直撃する明後日には激突すると思います」

携帯ラジオでは明後日には八丈島を暴風圏内に入れると言っていた。935hPaでやや速めに移動しているらしい。

「和樹はん、その前にゲリラ豪雨もふえとるから安心でけへんよ。今回もゲリラ豪雨の雨雲使いよつたらしいから」

鬼道の言う通りだ。今回の襲撃は、隣街に豪雨を降らせた雨雲の一部を利用していたらしい。ちょうどあの時間帯に降っていたのだ。

「確かにな。傾向としては午後三時以降にゲリラ豪雨が降りやすいようだから、その時間帯に注意するのが一番だよな。もし遭遇したら、倒そうとはしないで逃げる事。で、すぐに俺か美智恵さんに連

絡して欲しい」

そう言いながら、和樹は鬼道の周りを見る。六道事務所に入ったと言われていた雪之丞たちの姿は見えなかった。

「鬼道、雪之丞たちは？」

「ん？ ああ、アイツらなら研修行つとるわ。六女の連中について、海行つとるハズやで」

何とも呑気な。しかし、これは逆に良かったのかもしれない。雪之丞みたいな奴が遭遇したら、すぐに喧嘩売って返り討ちだ。

「とりあえず、妙な雲に気をつけると言っておいてくれ。皆も、台風直撃の時に集まってもらうまでは各自ゲリラ豪雨に注意する事。当日の戦闘に関しては、実際に戦った藤姫と美智恵さんを中心にこれから決めよう」

和樹の提案に従って、皆は具体的な戦い方について議論を始めた。辺りはすっかり暗くなり、鬼道の指示でフミを中心とした使用人たちは夕食の準備を初めている。今夜は、長い夜になりそうだ。皆、一様にそう感じていた。

そんな中、公平だけは皆から少し距離をとり、携帯電話をかけていた。声は、サタンのものだった。

『ああ、ハ又マンちゃんスマンなあ突然。ちと明日から小竜姫のパトロール強化してもらえんやろか。…ん？ ああ、もう攻めて来よつた。それも神族クラスの力つけてな。そう言う事やから、何かあったらすぐに駆けつけられるようにしといてな』



手短に伝えてから、次に電話をする先をアドレスから探す。とにかく、使える人脈を全て使って和樹をサポートしてやる。公平とサタンは、必死に仲間たちと連絡を取り合っていた。

結局、和樹たちが神社に帰ったのは夜の10時過ぎだった。

あれから決まったのは、美智恵を先頭にして後ろを藤姫と和樹が並ぶ布陣を基本として、他のメンバーは遠くから攻撃をするという事くらいである。他は、台風が来るまでは天気予報をしつかりチェックしよう、という呑気な提案がなされただけ。どうにもこの世界の連中は楽天的過ぎないか、と和樹は不安でいっぱいだった。

風呂に入り、明日の準備を済ませると時計の針は11時を回っていた。ちゃんと寝ておかないとな、と布団に入ると、中に何やらフワフワしたモノが。

「イツナさんですねー？」

「コーン。」

いつの間にかイツナが入っていた。最近はユリ子の布団で寝ていたが、今日はこちらで寝たいらしい。勿論大歓迎だ。和樹はイツナを抱き寄せると、腕枕をしてあげた。イツナは気持ち良さそうに頭を乗せる。

しばらくイツナの頭を撫でていた和樹は、イツナとは違う微かな気配を感じた。それは、イツナの居る場所とは逆の右肩付近に感じられる。やれやれ、そう言う能力があるとは聞いていたが俺に対して使わなくていいのに、と和樹は苦笑いする。

「おキ又ちゃんだろ」

「ひゃうっ!?!」

影の中から、日陰の声がした。観念したのか、恐る恐る姿をあらわす。淡いピンクのパジャマを着ており、一緒に寝る気満々だった。

「ごめんなさい、イツナさんが羨ましくて…」

「いいよ、堂々と入って来て。一緒に寝たいなら言ってくれればOKするの」

和樹はそう言って布団をめくる。日陰は、少し照れながら布団に潜り込んだ。抱き寄せられると、嬉しそうに和樹の胸に頬擦りをする。

「甘えん坊だな、おキ又ちゃんは」

「はい、ずっとこうしたかったんです」

前の世界では、こうして甘える事など出来なかった。幽霊の頃は多少素直になれていたのに、人間になってからは何故か積極的になれずにいたのだ。妖怪になって、またこうして素直になれている。日陰は目を閉じて、和樹の温もりに浸っていた。

どれくらい、そうしていただろうか。

イズナが寝息をたてはじめた頃、日陰は和樹に尋ねてみた。

「あの…何でユリ子さんがイズナさんと一緒に寝なかつたか分かり  
ますか？」

「え？…ああ、一人になりたかつたからかな。俺の正体知って、  
驚いてたもんな。ずっと黙り込んでたし」

日陰は、少しため息をつく。

「半分だけ、正解です。横島さんって、やっぱり女心分かつてない  
ですよね」

「うえ！？ ちょっと、なんでそうなるんだよ。女心？」

「ユリ子さんがショック受けてたのは、和樹さんが横島さんだつた  
事じゃないですよ。きつと、神社に住んでる人で、自分だけ知らさ  
れてなかつたから寂しかつたんだと思います」

「あ…」

全く気づかなかつた。

確かに、和樹の正体を公平と藤姫、日陰は知っている。別に和樹  
から教えたわけではないが、ユリ子からしてみれば同じだろう。自  
分だけ知らなかつた、と。

「それに、ユリ子さんだけですよね。この神社の中で、横島さんが  
名前で呼んであげてないのって。吉村さんって、少し距離を置いて  
ます。そう言うの、ユリ子さんには凄く辛いですよ…」

和樹は困惑する。なんだかその言い方じゃ、ユリ子が和樹に…

「ユリ子さん、横島さんの事…和樹さんの事、好きですよ。私には分かるんです。だって、あの頃の私と同じ目をしてるんですもの」

あの頃。

横島の隣にルシオラが寄り添うようになった頃だ。横島の幸せを願いながらも、諦めきれない想いを持って余っていた。自分を騙して笑顔でいようとしても、すぐに恋慕の情を向けてしまう。あの頃の自分に、ユリ子はそっくりだった。

「多分、今一人で泣いてると思います。泣いて、心の整理をつけてると思います」

「じゃ、じゃあ行かないと!」

布団を出ようとした和樹の腕を、日陰がしっかりと掴んで止めた。

「行ってどうするんですか? 横島さんは、ユリ子さんの事の気持ちに伝えてあげられるんですか?」

そう言われて、和樹も気づいた。確かに、ユリ子の事は気になるけど…それは恋愛感情ではない。一番好きなのはルシオラであり、小竜姫や藤姫、日陰に対するような気持ちも抱いていなかった。けど…

「泣いて欲しくないんだよ。我が儘だって分かっているんだけどさ…」

それこそ泣きそうな顔で言う和樹。日陰は優しく抱きしめた。

「はい、我が儘ですね。でも、ユリ子さんの気持ちにちゃんと応えてあげられるなら構わないと思いますよ。私は…横島さんを一人じめするつもりは無いですから」

ん？

「藤姫さんも『神界や魔界じゃ一夫多妻は当たり前』って言ってましたし」

あれ。なんか話がおかしくなっていないか。

「横島さんがユリ子さんの事を大切に出来るなら…声をかけてもいいと思います。私も、ユリ子さんが好きですから一緒に横島さんの恋人になりたいかなって…」

わー！わー！？

おキ又ちゃんが壊れた！　こんな事言う娘じゃなかったのに！　ハーレムなんて言った日には『不潔』なんて言葉と共に氷点下の冷たい視線を送って来たというのに！

「どうしちゃったんだ、おキ又ちゃん…。俺、そんな事言われたら手当たり次第にそこら辺の女の子に声かけちゃうぞ？」

「いいですよ？　きっと横島さんの事だから、本当に良い人じゃないとお付き合いしないですから。そういう人となら、私も仲良くになれる自信はありますし」

強い。何を言っても揺るがない。妖怪になって人の倫理に縛られなくなつた途端、おキ又ちゃんは大分自由な価値観を持つようになったようだ。和樹は若干退いた。

「参ったな…。その…正直に言うと、吉村さんの事は好きにならな  
いようにしてた。あの子はこの世界の普通の人だから、俺の事情に  
巻き込みたくなかったんだよ。それに、おキ又ちゃんと似すぎてる  
から…重ねて見てしまっただよ、どうしても」

「…気にはなってたんですよね？」

和樹は頷いた。

「一緒に過ごし始めてから、真っ直ぐな所や頑張り屋な所に惹かれ  
ていったよ。態度には表さないようにしてたけど、気づいてたら目  
で追ってた。…節操無いよな、俺」

「ふふふ。ちよつと前にスイカ食べた時に、横目でユリ子さんの胸  
元見てましたよね」

「そうそう、まさかノーブラとは思わな…ハッ!？」

日陰がしてゆったりという顔で和樹を見ていた。どんなに気の無  
いフリしても、男である以上気になって見てしまう。そんな様子  
を、日陰は見逃していなかった。

「和樹さん、その気持ちをちゃんと伝えてみたらどうですか？ そ  
して、ユリ子さんが許してくれるなら、皆で横島さんの彼女になり  
たいです。あ、こういうのハーレムって言うんでしたっけ？」

なんとというインモラルな事を。しかし、和樹もユリ子に対してち  
やんと話をするべきだとは感じていた。別に付き合うとかではなく、  
自分の正体の事や今まで距離を置いてきた理由の事を。

「分かったよ、おキヌちゃん。明日、話をしてみる。フラれる可能性の方が高いと思うけどね」

「フラれたら、たくさん慰めてあげますよ。横島さんの好きな方向で…」

ブハッと鼻血が出る。

慌てて飛び起きてティッシュを鼻につめる和樹。日陰は楽しそうに笑っていた。そして寝ぼけ眼で和樹を見上げたイツナは…

「コン!？」

鼻から長いティッシュを垂れさせた和樹を見て混乱するのだった。

## 第五十九話 嵐の前の静けさのはなし

ミチ工襲撃のあった翌日の事。和樹は昼休みの屋上でユリ子が来るのを待っていた。机の中に手紙を入れる、という古風なやり方で屋上に来て欲しいと伝えていた。

「今にして思えば、メールの方が確実にゃないか…。机の中で潰されてたらどうしよう…」

そんな乱暴に机に教科書を入れたりはしないだろう。しかし心配症な和樹は落ち着かないでいた。あれから一度もまともに話せないでいるからだ。朝、軽く挨拶をした時以外は食事をとる時でさえユリ子は黙り込んでいた。いつもなら、和樹を藤姫と二人でからかったりしているのに。藤姫もユリ子の気持ちを察して何も言えないでいた。

昼休みが10分ほど過ぎた頃、屋上のドアがゆっくりとひらいた。入ってきたのは勿論ユリ子だ。その姿を見かけた途端、和樹は給水塔の上から飛び降りる。

「吉村さん、来てくれてありがとう!」

「きゃああつ!?!」

目の前にいきなり人が降って来たら、そりゃ驚くというものだ。尻餅をついたユリ子を、和樹は慌てて抱き起こす。

「ご、ごめん! 驚かそうとか思ってたわけじゃないんだ! ただ、その…来てくれたのが嬉しくて…」



しどろもどろになる和樹。本当に、こういう時の和樹は格好悪い。しかし、ユリ子はそんな姿を見て微笑んだ。

「もう、和樹さんがそんなんだから、色々考えて来た事が全部飛んでっっちゃいましたよ」

和樹に手をひかれて立ち上がると、ユリ子はそう言って笑う。それは、和樹が一番見たかった表情だった。和樹も、色々会話のシミユレーションを行ってきたが全部飛んでいた。おかげで、いつもの自分の言葉で話す事が出来る。

「ごめんね、今まで俺の正体を黙っていて。俺、向こうの世界の厄介事に吉村さんを巻き込みたくなかったんだ」

「はい。…昨日、落ち着いて考えてみたんです。きつと、和樹さんならそう考えるだろうなって思いました。ただ、ちよつと寂しかっただけです」

本当に、日陰の言うとおりだった。ユリ子は和樹の正体ではなく、自分だけ打ち明けられなかった事を気にしていた。なら、やはり恋愛感情を抱いているというのも本当なのだろうか…

「あ、あの…聞いてもいいかな…」

「え？ 何をですか？」

さあ、どうする。今まで、真剣に相手の気持ちを聞いた事なんて無かった和樹。ルシオラには言い寄られた。小竜姫や藤姫には迫られた。日陰からだって、結局はアプローチされている。基本的に受

け身なのだ。ここは男らしく、ズバツとユリ子の気持ちを知ろう！  
和樹は勇気を振り絞って…

「き…昨日、日陰ちゃんから聞いたんだけど…」

結局へたれた。日陰を使ってしまった。どうしようもない。

「もしかしたら、吉村さんは俺の事好きなのかもしれないって。その事もあって、余計に傷ついてるのかもって…」

「…それ、本当に日陰さんが？」

ヤバい、怒ったか…。和樹は今更自分の失敗に気づく。もし本当なら、自分と仲がいい日陰の名前出したらまた傷つけてしまうだろうに。恐る恐るユリ子の顔を覗き込むと…

ユリ子は、何かを諦めたような表情をしていた。

「最近入って来た日陰さんにもバレてるようじゃ、他の人にもバレバレなんでしょうね…」

え？ バレてる？

「言っちゃいますけど…そうですね。私、ずっと和樹さんの事が気になってました。きつと、死神さんとお母さんの事があったあの時から、ずっと」

ええーっ！ 本当に!？

「最初は憧れだけだったんですけど…一緒に修行したり、一緒の家

に住むことになったりして、だんだん気持ち膨らんで来てました。日陰さんと仲良くする和樹さんを見て、諦めてたんですけどね」

吹っ切れたユリ子の口から、スラスラと和樹への想いが語られる。和樹よりもよっぽど男らしいかもしれない。和樹は顔を真っ赤にしながらそれを聞いていた。

「あの…好きでいてくれてありがとう。俺、クラスメートに好かれるって事無かったから、凄い嬉しい…」

これは、今よりも鈍感だった以前の事。やはりあの頃だって好かれていたのには違いは無いのだが、和樹は全く知らないでいた。

「きつと気づかないだけで、好かれてたと思いますよ」

「いやいや、それは無いって。バレンタインのチョコだって、くれたのは男だったし…」

和樹にとっては苦い思い出。その思い出にしたって、実際にチョコをあげたのは愛子だったのだが。

「…和樹さん。和樹さんは、私の事どう思ってますか？ 私の事、気にかけてもらえますか？」

「そ、そりゃ勿論だよ！ その、吉村さんは優しいし真面目に頑張ってるし、そばに居てくれると嬉しいし…。俺、昨日言った通り恋人を亡くしてる。なのに小竜姫や藤姫、日陰ちゃんとも仲良くなったりして節操ないよね。そんな俺に言われても嬉しくないと思うけど…俺も吉村さん…いや、ユリ子さんの事好きだよ」

言ってしまった。

別にハーレム願望があるわけではない。というか、そもそも最初は単に謝るだけだったのに。

日陰は言っていた。ユリ子の気持ちに伝えてあげられるなら、声をかけてもいいと。しかし、もしユリ子が自分とだけ付き合ってくれと言ってきたら…どうすればいいのだろう。やはり、言うべきではなかったか…と思っていると。

「良かった…私も、藤姫さんみたいに和樹さんのハーレムに入れるんですね！」

は？

…今、なんて言った？

「藤姫さんに、相談した事があるんです。和樹さんの事好きになっただけけど、どうしようって。神魔は一夫多妻で和樹さんも半分以上人間じゃないから、いいんじゃないかって言っていました」

ここにもインモラルな人が。というか藤姫何吹き込んでんだ！

「私、どの道男の人は苦手で誰とも付き合わないで生きて行くつもりだったから…和樹さんが貰ってくれたら嬉しいです」

もはや、何も言えない。

和樹の混乱は極地に達していた。頭の中はグルグルまわり、次第にヒートアップして…

「きゅっ…」

バタン。

倒れた。

「えっ、ちょっと、和樹さん!? 和樹さん!」

慌てて抱きかかえるユリ子。和樹は意識を失った状態で幸せそうに鼻血を流していた。そこに、無情にも昼休み終了のチャイムが鳴る。

キーンコーンコーンコーン…

「ああ、もう、和樹さん! 起きて下さいっばー!」

…結局、和樹は保健室に直行する事となった。ユリ子は五時間目の授業に遅れて、何気に狙っていた皆勤賞がダメになってしまった。しかし、そんなに気落ちはしていなかった。和樹に好きと言ってもらえたのだ。皆勤賞など、その出来事の前には霞んでしまう。

授業に遅れたのに幸せそうにしていたユリ子は、その授業の先生に目の敵にされ、何度も当てられてしまうのだった。

所変わって、とある海辺の旅館の一室では雪之丞と勘九郎がリラックした様子で話をしていた。二人とも、身体中に包帯やガーゼを貼り付けている。まるで野戦病院から抜け出してきたかのように傷だらけだった。

「雪之丞、アンタ一人で無理しすぎなのよ。ちゃんと周りをうまく使いなさい」

「使えって言っても皆弱っちくて怖くて前に出せなかつたんだよ！いいじゃねえか、怪我したのが俺らだけで済んで」

「それじゃ合宿の意味が無いのよ」

二人が話しているのは、昨日行われた戦闘の事だ。六道女学院は、霊能科の学生に合宿をさせるのを伝統としている。夏休みの前7月下旬と、明けの9月頭に大規模な合宿を行い、その際に海の妖怪たちと集団戦闘を行わせるのだが、9月の合宿のアドバイザーとして雪之丞と勘九郎は呼ばれていた。ここでの戦闘に参加して六女の生徒を率いる事が、二人の新入社員研修の変わりとなるらしい。

「まあ、アンタの場合女の子と仲良くしてると色々マズいもんねえ」

「う、うるせえな！　そういうんじゃないっけえ！」

そんな会話をしていると、部屋の戸がコンコンとノックされる。勘九郎が「どうぞ」と言うと、戸を開けて入ってきたのは小鳩と、福神の貧だった。

「お邪魔します、雪之丞さん、勘九郎さん。包帯を取り替えに来ました」

『いやー、売れた売れた！ ほらお二人サン、あんたらの分もちゃんと確保して来たで！』

いそいそと包帯を替える準備に入る小鳩と、紙袋を二人に手渡す貧。小鳩のプロデュースしたハンバーガーのセットである。六道の合宿に雪之丞の付き添いでついて行く事を許された小鳩は、六道の昼食スタッフとして働いていた。今は昼、旅館では昼食が出ないの貧が二人の分を用意していたのだ。

「ありがとう、貧ちゃん。このハンバーガー、不思議と飽きないのよねえ…」

『そらそうや。材料からして採算とれへんくらいええもん使ってる上に、小鳩が味付け考えとるからな！』

「くどくなりすぎないように気をつけました。お肉も臭みを丁寧に抜いてますから、食べやすいと思います」

今回の合宿は朝夕の二食は旅館が出すものの、昼に関しては各自が好きに食べるようになっていた。霊能科は他の学科と違い根っからのお嬢様の比率が少なく、一般の家庭の出の生徒が多い。こういう、高級過ぎない食べ物の人気は高かった。小鳩バーガーは合宿中に連日売り切れとなり、六道のスタッフ達は真剣に学食に導入するか検討し始めるくらいだった。

「小鳩も、無理すんなよ。働くのも世話してくれんのも止めねえけど、それで身体壊されたら堪んねえからな」

「はい、ちゃんとお休みももらってるから大丈夫ですよ」

雪之丞と小鳩の会話は、平和そのものである。勘九郎は、最近まで戦う事しか考えてなかった雪之丞の変化に驚き、感動していた。

と、その時。

旅館の窓が、ザツという音を立てる。雨だ。

「やあねえ、結構強いじゃない。せつかく角部屋なのに景色が楽しめないわ」

「仕方ねえだろ、今は雨が多い季節なんだからよ」

横殴りの雨に打たれ、窓が細かく震えていた。灰色の空、暗い色の海。それは少し不吉な雰囲気をたたえているようにも見える。皆は、荒れ始めた外の景色を眺めて言葉を失っていた。

「…そう言えば、雪之丞。昨日の夜に来たメール見た？」

沈黙を破ったのは、勘九郎だ。

「メール？ いや、見てねえ」

「鬼道君からのメールよ。『美神美智恵の偽者がうろついているから注意するように』ですって。こんな雨の日に、出没するそうよ」

それを聞いた雪之丞は、何とも不思議そうな顔をした。

「雨の日に出るとか…聞いた感じ、出来の悪い怪談話だな。美智恵って六道と美神事務所のアドバイザーやってる女だろ？ それの偽



者って何なんだよ」

「さあ？ 業界じゃ未だに世界最高のGSって有名だし、名前語って一儲けしようって小悪党じゃないかしら」

二人はまるで本気にしていない。そんなみみっちい事をするような奴なんて弱いに決まってるだろう、と笑いあっていた。貧も、そんな二人に同意する。

「第一、ワイの加護とミトラとかいう神の契約に守られとるアンさんが、危ない目にあうワケないからな！ どんと構えとつたらええ！」

「お前に言われた途端不安になつてきたんだが…」

「なんやとー！」

馬鹿なやりとりが始まって、場の雰囲気はいつものような脳天気なものとなっていた。ムキになる貧と、からかう雪之丞。そこに、傷口に消毒液を塗りつけて雪之丞にお仕置きする小鳩。勘九郎は呆れながらも優しい目でそれを眺めていた。

そんな和やかな4人を、遠くから眺める者が一人。酷い雨の中、空中に浮いていた女性は冷たい目で旅館の一室を眺めながらつぶやいていた。

「この世界じゃ、雪之丞君は横島君の味方ってわけじゃないのね。下手に加勢されると面倒だから今のうち始末しようとも思ったけど、放っておいても大丈夫そうだわ」

貧の言葉は当たっていた。

ミチ工は、倒す価値無しとして雪之丞たちを放っておく事にしたのだ。ただ、その代わりに矛先を向けられた人物が。

「そう言えば…横島君もこの世界にいるハズよね。自分自身に取り憑いてるのか、そろそろ確認しないと…」

今まで、警戒して中々確認出来なかった事。さすがに神族魔族関係なく殺し続けた魔人に何の策も無しに近づくのは恐ろしかった。が、台風上陸までの時間はそれほど長くはない。何とか早めに情報を集めなければ…

ミチ工は空を見上げると、右腕を高く掲げる。ピカツと空が光ると同時に、大きな衝撃音を立ててその場から掻き消え去った。

商店街を、奇妙な二人連れが歩いている。正確に言えば一人と一匹。地味な格好で目立たないようにしている日陰と、その頭の上でフワフワとした尻尾を揺らすイツナだ。今日は藤姫と公平が外で仕事をしている為、昼食は外食にする予定だった。

「魔鈴さんのお店って、この近くですよね。今日はそこで食べましょうか」

「コンー！」

目立たないようにしているが、思いっきり目立っている。道行く人の視線に少しビクつきながら、日陰は通りを歩いていた。

前の世界とこの世界とでは、店や建物が微妙に違う所がある。日陰は以前の世界と同じ所を見つけては懐かしい気持ちに浸っていた。あのお店はお野菜をたくさんおまけしてくれた。親切にお金の使い方を見せてくれた人、コロツケをくれたおばあちゃん…。

「あのパン屋さんは、横島さんがパンの耳を貰いに行ってたパン屋さんなんですよ」

「コンコン。」

日陰の解説に興味深く頷くイツナ。どうやら繁盛しているようで、サラリーマンやOLがたくさん買いに来ていた。

「帰りに、おやつ用に買って行きましようか。イツナさんは、パン食べられますか?」

「コン!」

パンどころかピザやケーキもバクバク食べる。最近では公平の晩酌に付き合ってブランデーすら口に行っているのだ。その後、酔っ払って踊りながら和樹やユリ子の部屋に突入して、寝ている二人を驚かせるのがお決まりとなっていた。

上機嫌に尻尾をふるイツナ。うなじをフワフワとくすぐられ日陰もニコニコとして歩いて行く。そこに、声をかけてくる人があらわれた。

「あら、あなたは和樹君の所の…」

振り返る日陰。そして、その姿を見て驚いた。

美神美智恵。

本物だろうか？

思わず空を見上げる日陰。空には雨雲らしきものは一つもなかった。

「イヤね、私は本物よ？ 警戒しなくても平気です」

「あ、すみません！ 昨日の話を思い出して、戸惑ってしまいました」

イズナの目はしっかりと美智恵に向けられていたが、すぐに安心したように身体の力を抜いた。この美智恵は、この世界の美智恵だ。

「もしお昼がまだなら、一緒に食べない？ そのキツネさんと食べに入るとしたら、めぐみさんの所でしょう」

「はい、魔鈴さんのお店です。ご一緒していただけなら嬉しいです、今日は公平先生も藤姫さんも居なくて少し心細かったので…」

日陰は、美智恵に対してそれほど悪い感情を持ってはいない。前の世界の美智恵のした事も、時間を置いて落ち着いて考えてみれば仕方ない面もあった。横島に対して、実は様々な形で罪を償おうと動いていたのを日陰は知っている。結局横島は帰っては来なかったが、その事を一番悔いていたのは美智恵だったのではないかと、日

陰は考えていた。だからこそ、この世界の美智恵を不用意に警戒し  
たくはなかったのだ。

日陰とイツナは、美智恵と共にレストラン魔鈴へと向かった。

レストラン魔鈴はこの近辺ではかなり人気のある店だ。日陰たち  
が店を訪れた時も混雑していたが、幸い席が空いたので待つこと無  
く店に入る事が出来た。

「日陰さんは、何を食いたいかしら。今日は、私をご馳走するわ」

「え…そんな、悪いですよ！」

慌てる日陰。それをなだめながら、美智恵はメニューを日陰に渡  
す。

「いいのよ、あなたはまだ子供なんだから。ここは大人に甘えてお  
きなさい」

日陰は妖怪である。年齢と外見は必ずしも一致しないのだが、美  
智恵は日陰の雰囲気からまだ生まれて間もない妖怪だと察していた。  
そうでなくても、こんな少女にお金を出させるのは気がひける。美  
智恵は強引にでも奢るつもりでいた。

「イツナちゃんも、好きなもの食べていいんだからね…って、どう  
したの、その椅子？」

イツナは、赤ちゃん用の椅子に座っていた。魔法の筭のウェイターが用意した物だ。以前和樹と一緒に来た時と同じ椅子。筭たちは一度訪れた客を忘れない。イツナの事を覚えていた筭たちは、言われる前にイツナ用の椅子を用意していた。

「VIP待遇ね、イツナちゃん」

「コンコンコン…」

少し得意気なイツナ。フフン、と鼻で笑うような素振りをするも、美智恵の開いたメニューのハンバーグが目に入るとジュールリと口の端から唾液が流れた。仕方ないなあ、と日陰がナプキンで口元を拭う。

「じゃあ、注目を頼みましょうか。私は和風スパゲティのセットにしようかしら」

「えっと、私は日替わりランチにします。イツナさんはハンバーグ定食にしますか？」

「コン！」

嬉しそうに鳴くイツナに、周りの客たちも幸せそうな顔をしていました。

注目を取りに来たのは筭ではなく、猫又の美衣であった。大人の女性なのだが、可愛らしい服装をしている。メイド服ほど狙ったデ

ザインではないが、所々にフリルをあしらった明るいイメージの服装だった。

「あら美衣さん珍しいじゃない。今日は厨房じゃないの？」

「お久しぶりです、美智恵さん。ええ、今日は箒さんたちがたくさん厨房に居るので、私はレジとホールなんです」

実はこの二人、結構仲が良かったりする。

きつかけは、美智恵の誕生日を祝うパーティーを開いた時。和樹から評判を聞いていた美神ひのめが、この店を借りてパーティーを開いたのが始まりだった。

自分の彼女が目の前にいると言うのに美衣に飛びつこうとした横島を殴ったり、食べられない物をそつと母の皿に移そうとした娘をしかったり…パーティーのハズがマナー教室になりかけた時に、なだめに入ったのが美衣だった。

美衣に興味を抱いた美智恵は、そのパーティーの間美衣といろんな話を話した。生い立ちや考え方、子育ての事。特に、互いに母親であるという事で話は弾み、いつの間にか仲良しになっていた。

「ケイ君は元気？」

「はい、小学校にも通い始めました。妖怪に理解のある学校で、たくさん友達も出来たみたいです」

軽く近況を話す二人。注文を伝え終えた後、美智恵はポカンと立っていた日陰の方へと向き直した。

「ごめんなさい、ちょっとお話してしまっただわ。あの人はお友達なのよ」

「いえ、気にしないでください。ただ、意外だったもので…」

「意外？」

美智恵も不思議そうな顔をする。今の何が意外なのだろう。

「和樹さんから聞いてたんですが、美智恵さんはオカルトGメンに所属していたじゃないですか。厳しい人だと聞いていましたし、オカルトGメンと聞くとやはり妖怪嫌いの人が多いイメージがあったので…」

ああ、そう言う事か。美智恵は納得した。和樹の言う厳しい人というのは恐らく彼の世界の私だろう。オカルトGメンに所属していた頃に和樹とあった事はなかった。

「…少なくとも、私の居た頃のオカルトGメンの部下には種族で相手を判断するような事はさせなかったわ。私情を排して行動するかから冷たいと言われてたけどね」

善悪ではなく、法律に準じているか否かで、妖怪だろうが人だろうが同様に捕まえてきた。魔族に対してはつらい目にあった過去があるだけに特別な感情を抱いていたが、仕事には持ち込まなかったつもりだ。

「美衣さんや日陰さんみたいな人なら、普通に接するわよ。私が厳しいのは、ルールを守らない人だけ。もっとも、今は引退して甘く



なってるから結構見逃しちゃうけどね」

テーブル上に備えつけてあるガムシロップをくわえたイツナを、横目で見ながら微笑む美智恵。日陰は慌ててイツナの口からシロップをはずす。仕方なくフタを取ってあげると、イツナは喜んでペロペロと舐め始めた。

この世界の美神美智恵は、今の所安全だ、と日陰は感じた。前の世界の美智恵だって、安全な時期はあった。そうでなくなった理由は、やはり娘の存在である。令子の危機になりふり構わなくなる所だけが、危険だった。そして、娘が大切なのはこの世界の美智恵も同じ。もし美神ひのめが殺されたら…そう考えると恐ろしくなる。今回の戦いは、本当に勝たなければならぬ。勝ってミチ工を退けないと…本当に恐ろしい事になると日陰は思った。

その後、やって来た料理を食べながら談笑する二人だったが、日陰は明日には襲撃してくるかもしれないミチ工を思うと心から楽しめる心境ではなかった。そして、そうした気持ちを抱いていると分かる事がある。

美智恵も、実は不安なのだ。

娘は現在ミチ工のゲリラ的な襲撃から身を守る為に妙神山に保護身を寄せている。戦いとなった時に参戦しなければならぬ美智恵はこの街を離れられない。きっと、不安や寂しさをまぎわらせる為に自分と一緒に昼食を取りたかつたのだらう。その表情には、ほんの少し焦燥の色が混じっていた。

だったら、自分が和ませてあげないと。

日陰は、しばらくミチエの事を忘れて他愛も無い話を楽しそうに話す。美智恵も、それを本当に楽しそうに聞くのだった。

## 第六十話 横島VSミチエのはなし

レストラン魔鈴でゆっくりと食事をとった後、日陰たちはしばらく商店街を一緒に回ってウィンドウショッピングを楽しんだ。イズナは美智恵に赤ちゃん用の涎掛けを買ってもらったりしていた。流石に最初はイツナも固まっていたが、鏡に映った自分の姿を見てまんざらでも無いのかコンコンと上機嫌で鳴いていた。

別れる際…美智恵は、日陰に尋ねた。

「あの…もしかして、日陰さんは和樹君の…向こうの横島君の知り合いかしら？」

ドキツとする日陰。何故、分かったのだろうか。どうリアクションとって良いか戸惑ったが、戸惑う時点で肯定したも同然である。日陰は観念して頷いた。

「はい、確かに私は向こうから来ました。その事を知ってるのは和樹さんと公平さん、藤姫さんくらいです」

「そう…言い辛い事聞いてゴメンナサイね。あの和樹君の告白の時に、日陰さんが辛そうな表情をしたのが印象的だったから」

やはり美智恵は美智恵だ。普通なら見てないような所まで見ている。あの衝撃的な告白の際にも、周囲を観察出来るというのは少し怖いかもれない。日陰は驚いていた。

「それで…向こうの娘の事なんだけど。令子は…令子はどんな娘だったのかしら」

それは、もしかしたら聞いてはいけない事なのかもしれない。しかし、美智恵は聞かずにはいられなかった。もし、令子が生まれていたら…どんな娘だったのだろう、と。

日陰は少し考えてから、笑顔で言った。

「強くて、綺麗で、寂しがりやで…最後は悲しい別れ方をしましたが、沢山の楽しい思い出をくれた素敵な人です。私、今でも美神さんの事大好きですから」

日陰は…おキ又は美神令子を恨んではない。勿論、横島の事も。ただ、何も出来なかった自分の無力さが無念なだけだった。

美智恵は、涙を流していた。

和樹の口から聞いた結末は余りに酷く、和樹が令子をフオーするよつな事を言っていたのが不思議なくらいだった。誰からも嫌われていそつな印象を受けたのだが、日陰は大好きだと言つ。それが何だか、救われたよつな気にさせてくれていた。

「ありがとう、日陰さん。令子もきつと、今の言葉を聞いたら喜ぶわ」

「キューン…」

イツナも、抱っこしてくれている日陰の胸元にすりよつていた。感動しているよつだ。

その後、少し話をしてから三人は別れた。帰りしなに見た美智恵の顔は、何だかスッキリとしていたよつに日陰には見えていた。きつと、令子がただ嫌われていただけではないと知つたからだろう。やはり、異世界とはいえ自分の娘の事は気になるよつだった。

日陰も、今日話をする事が出来て、良かったと思っていた。實際口にして初めて確認出来る事がある。それは、悲劇で終わった関係だけど、やはり自分には美神令子を嫌う事が出来ないという事だった。そしてその事が、日陰の気持ちに穏やかにしていた。誰かを憎まなくていい。それだけで、不思議と気持ちが楽になる。

イツナを抱っこした日陰は、少し軽くなった心と足取りで神社へと戻って行った。

その頃。

妙神山の一室では美神ひのめがコロコロと転がっていた。

「うーん、退屈だよ……。横島君もママも居ないし、ゲームは全然勝てないし……」

『ふむ。落ちゲーでワシに挑む事自体が無謀じゃよ。小竜姫が帰って来たら、マリモカートでもやるといい』

「小竜姫様はムキになるから怖いんだよ……」

老師の部屋で、だらけていた。

あれから妙神山に匿われているひのめ。仕事も出来ず、暇なのだ。小竜姫は地上のパトロールで居ないし、天竜に至っては竜神王に呼びだされて留守にしている。タマモは家事をするようになって今は洗濯や掃除に忙しい。暇していると言えば…

ポリポリ…

「ん？ 何見てるのね〜？」

ヒヤクメだ。思いつきりスナック菓子を食べながらノートパソコンを開いている。

「ねーヒヤクメ様遊ぼうよう」

「な…、一応これでも仕事中的なねー！」

とてもそうには見えないのだが、ヒヤクメは仕事だと言い張っている。手元に置いた平皿には、野菜を乾燥加工したスナック菓子があつた。ヒヤクメに一枚もらつて食べてみると、口の中いっぱいにタマネギの香りが。余りに野菜過ぎてひのめは顔をしかめた。

「ヒヤクメ様、これご飯だよ。夕飯まだだよ？」

「味覚が子供過ぎるのね〜…。まあ私は大人な女だから、このお菓子の良さが分かるのね〜」

得意気になるヒヤクメ。大人なら間食は控えるべきなのだが。特に仕事中は。

ヒヤクメがタマネギを、ひのめが甘いカボチャを食べながらモニターを見ていると、不意に画面が切り替わった。それまでは東京の上空から街を見下ろす形で映像が送られて来ていたが、今はとある

道路をアップにしている。その道路は和樹たちが通う学校から少し離れた場所を走る道路で、交通量は比較的少ないし学生はあまり立ち寄らない場所なのだが…

一人の学生が、その道をおるいていた。それは、ひのめの良く知る学生…横島忠夫である。となりには妙齡の女性が寄り添っていた。

「よ、よ、横島君!?! うううう浮気きききはいけないんだよよよよよ」

「落ち着くのねー! これは、これはヤバいのね、老師!」

『ムッ!? こやつ、こんなに早く仕掛けて来おったか! ヒャクメよ、すぐに小竜姫に連絡じゃ!』

「ハッ!」

にわかに慌ただしくなる部屋。ひのめはやっと、モニターに映っている光景が理解出来た。そして…青ざめる。

「横島君…逃げて……」

カタカタと震えながら、ひのめは祈るように声を振り絞った。

【横島忠夫】

うわははははは！

GSはええのう、学校じゃ女子にモテモテ、取材に来るねーちゃんも可愛いし、何よりスター扱いしてくれる！もうね、モテ期どころの騒ぎじゃ御座いませんよ。モテ時代ですよ。モテジエネレーションですよ。意味なんてありません。

いやまあ何つーか騒いでる場合じゃないのは分かるんだけどさ、みんな辛気くさいんだって。俺だって彼女が狙われて不安だけど、俺まで暗くなんのはおかしいだろ。和樹もせつかくGSやってんだからいい気分味わつたらいいのに。アイツ、本当に俺なんか。

そんな風に思っではいたけど、流星に所長が妙神山に一人にいると思うと心配になってくるワケで。今日は早退させてもらいました。行き先は勿論和樹んちですよ。ゲート使わずに妙神山なんか行けねえって。で、早速神社に向けて歩き出したら…

「あら、横島君じゃない。学校は？」

このアダルトなスイートボイスは！ その爆発寸前のダイナマイトボイスは！ 間違いない、これは麗しの…

「お義母さーんっ！」

ムニユツ！

超絶エアバッグここにあり。最高な弾力が俺を包む。凄いわコレ、普及したら自動車事故の死者無くなんじゃねえか？…そんな事考えたら思いつきりほっぺたつねられた。



「よ・こ・し・ま・く〜ん？」

「ひひゃい、ほふえんふあふあいく〜!？」

流石に痛い。けど、いつもと比べたらまだマシな方だ。いつもは肘うちから背負い投げ、酷いときには倒れた所に二ードロップだから。スカートの際は結構モロに見えるから楽しみでもあるんだが…

美智恵さんなんだか機嫌がいい？ 突っ込みが弱いぞ。

「まったく、あなたは何処でも変わんないわね…」

ああ、呆れてんのか。今更ですって、そんなの。どこに行こうとリビドーの赴くままに走りつづける横島忠夫、横島忠夫をどうぞ宜しくお願いします！

「それ選挙演説つばいけど、街頭で言ったら逮捕されちゃうわよ？」

ですよねー。所属はおっぱい党とかになりそうだし。しかし今日はどうしたんスか？ 学校の方まで来るなんて珍しいツスね。

「そう？ ふふふ、ちょっと娘の前じゃ言い辛い事だからね…」

え…なんだろう。もしか、お小言ツスか！ これ以上娘に近づくなとか！ そりゃないツスよお義母さん！

「違つわよ、馬鹿ねえ。…ほら、私も随分ご無沙汰だし…横島君なら、満足させてくれるんじゃないかって、思つて来たのよ…」

えっ……………うええええええ!？

いや、マジツスか！？…って、うわ、そんな手えとって胸に押し付けて…気持ちいいけどマズいツスよ！ 一応、ここ通学路だし！

「じゃあ、少し離れた所にいい場所があるからそこでしましょう。大丈夫、娘には内緒にしてあげるから…」

うおおお…何という美味しいシチュエーション！ 所長、これは浮気じゃないツス！ 健全な親子のスキンシップツスよ！

「あら、健全な方がいいの？」

いや、時代は不健全でしょう。退廃的なもたまには良いツスよね。

「ガツガツしすぎよ。でも安心したわ、あなたがあなたのみままで。向こうのあなたにも抱かれてみたかったけどね」

向こう？

「何でもないわ。ほら、行きましょう」

了解っス！ いやー、こんな形で大人の階段上るとは思わなかったな。でも初心者はやっぱりリードしてもらった方がいいよね。ウブな所長相手に四苦八苦するのも楽しいかも知らんが男としてはやっぱりアダルトな指導に憧れるのですよ。

まあ…

それが人間相手ならな。

隊長に連れられて人気の無い道に差し掛かってから、俺はやんわ

りと腕を組んでいた隊長から離れる。和樹、悪いな。俺は俺でこの女に頭きてんだよ。俺の女に手を出して、俺の友人を苦しませるコイツにな。

不思議そうな隊長と向き合って、俺は言った。

「さて、隊長。俺に何の用なんだ？」

【横島視点終了】

ミチエの顔が驚愕に彩られる。横島の発言はそれほどまでに衝撃的だった。

「あなた、あの横島君なの!？」

「どの横島ならお気に召していただけらんすかね」

横島の目には先ほどまでのおちゃらけた雰囲気は一切無い。ただ冷たく鋭い目でミチエを睨みつけている。ミチエはその表情から、自分の考えが正しい事を悟った。

「…いつから気づいていたの？ 人間の時とまったく同じ身体にしたつもりなんだけど」

「初めからだよ。少しふざけて付き合ってただけさ」

これは嘘だ。最初に飛びついた時の胸の感触で、こちらの美智恵よりバストのサイズが大きい事に気づいて違和感を覚え、誘惑してきた時に確信した。浮気に厳しい美智恵が一線を踏み越えようとするハズがない、と。

「さすがね…。けど、一体どういうつもりかしら。あなた、令子の事は見捨てた癖にひのめの所にいるなんて…。そんなに令子の事が嫌い？」

横島は、和樹の記憶を多少見ている。断片的だが、美神令子の所を出た理由なら容易に推測出来た。

「あれ以上大切なものを踏みにじられたくなかった。心や仲間、大切な思い出を」

「それで令子から何もかも奪ったと言うの？」

「奪ってなんか無いっすよ。美神さんは、もともと何も持とうとしなかった。あの人が手にしたかったのは金だけだ」

横島の言葉にミチエは憤る。この男は何も分かっていない。どれだけ娘が好意を抱いていたか…。どれだけ娘が孤独に苦しんでいたのか…

「令子はこの世界で生まれてくる。あなたは令子の障害にしかならないみたいね」

「悪さするなら、立ちほだかるたろうな。そうでなけりゃ、無視す

るさ。けど、あんたウチの所長殺す気なんだろう？ なら敵だ。どの道戦う事になるんだろうな」

わざと挑発的な言葉を選ぶ横島。垣間見た記憶のミチエは軽蔑すべき人間にしか見えなかつたのだ。何より、恋人の敵だ。ここで仕留めるしかないと思っていた。

「後悔しても知らないわよ？ せつかく世界を渡ったのに、こんな所で死にたいの？」

「あんたこそ、元居た世界に帰れよ余所者。他の世界に迷惑かけるんじゃないねえ」

交渉は決裂した。ミチエは、あわよくばこの世界の横島を引き込んで仲間割れを狙っていたが、どうやら前の世界の横島だと判断するや否や頭を切り替えた。

殺そう。

今の自分ならば、出来るハズだ。なんせ、自然界のエネルギーを味方につけている。近くの街でゲリラ豪雨も発生しているし、今ならエネルギー補充も簡単に行える。

魔人になろうとも、勝てるハズだ。

「そう。なら、死になさい」

ミチエはそう言うと、片手を空へと掲げる。上空の雨雲が、ゴロゴロと大きな音を立てた。

ピカッ！

ズガアアアアンツ！

それは一瞬の出来事。雨雲から発せられた稲妻は横島の身体を…  
…貫く寸前で空中ではじけた。

「なっ…！？」

啞然とするミチエ。

空中には、横島の投げた文珠ソーサーが。そこには、『鉄』という文字が刻まれていた。

「文珠…じゃないわね？ また奇妙な事を…」

「これでも日々精進してるんでね」

カツコつけているが、内心ビクビクしていた。うまくいくとは思っていたが、ぶつけ本番はやはり心臓に悪い。今回はうまくタイミングを合わせられたが次は難しいだろう。こうなったら、攻勢に出て相手のペースを崩すしかない。

「次はこっちから行くぞ！」

横島は霊装術で宇宙刑事バージョンになると、その状態で超加速に入った。面食らっているミチエに急接近すると、文珠ソーサーを拳に展開してミチエに叩きつける。

ドガアッ！

「ガツ…!？」

物凄いスピードで叩き込まれた拳。たまらず後方に吹っ飛んだミチエは、自分の身体の異変に気づいて狼狽した。

「こ、これは…身体の動きが鈍くなってる!？」

ソーサーに入れた文字は『鈍』。稲妻のスピードは無理でも、ミチエ自身のスピードを殺せば攻撃のタイミングは掴めるしこちらの攻撃も当たりやすくなる。これは横島が昨日の会議の時に思いついた攻略法だった。

「クツ…：魔人にならずにこんな方法を選ぶなんて舐められたものね」

「強がり言ってる暇あるんスか？」

横島はまたもや超加速に入る。相手は策士の美神美智恵である。考える暇を与えてはいけない。

横島は『爆』の文珠ソーサーを連発する。そのことごとくがミチエに命中し、大きな爆発を引き起こした。

「ぬっつっつっ！ この程度の攻撃で…」

「まだまだまだまだあ！」

いくら文珠よりコストが低いからといって、これだけ連発すれば消耗はする。横島は立っているのも辛いほど消耗していた。そして…

横島の攻撃がやんだ時。

周囲の砂塵が風に吹き飛ばされると、そこには誰も居なかった。

「け…消し飛んじまったか？」

そう言いながら、ミチエの居た後を見つめる横島。あれだけの攻撃を受けて無傷というわけは無いだろう。もしかしたら、本当に消し飛んだのかもしれない。そんな風に思っていると、不意に殺気を感じた。

反射的に、文珠ソーサーを展開する。とっさに出た文字は、『鉄』。奇襲には雷だろうと思ったからだ。それは、確かに当たっていた。しかし…

投げるのが、遅れた。

ズガアアアアアンツ！

振りかぶった横島の右腕に、稲妻が直撃する。全身に衝撃を受けた横島は、一度大きく痙攣した後その場に倒れ込んだ。…意識を完全に失いながら。

「フ…フフフフ…。殺ったわ、いくら横島君でもこの稲妻には耐えられないハズ…」

その声はミチエのもの。いつの間にか後ろに回り込んでいたミチエの発した稲妻が、横島を直撃したのだ。もつとも、心臓を狙ったハズが腕に行ってしまったが。

倒れた横島に近づくとミチエ。横島は白眼を剥き、息もしていなかった。



「令子…やったわよ。あなたの仇は討ったわ。…いや、まだね。この首を落として、持って帰らないと。生まれて来た令子に見せてあげなきゃ…」

狂気の手を浮かべるミチエ。手には、どこから取り出したのか一振りの刀が握られていた。横島の首筋に当てると、一気に…

ズバツ！

「キヤアアアアアッ!？」

ミチエの腕が斬りとばされた。刀は、カランカランと音を立てて地面に投げ出される。

「横島さん、しっかりして下さい！」

助けに入った人物が、横島にかけよる。そして二人を守るように立ちほだかるもう一人の人物。

「何で一人で立ち向かいやがったんだ！ クソツ！ 隊長、よくもやってくれやがったな！」

それは、小竜姫と和樹だった。

ヒヤクメからの連絡を受けた小竜姫は、すぐさま横島の救出に向かっていた。和樹と合流したのは偶然である。和樹は携帯ラジオの情報で近所にゲリラ豪雨が発生したと知って確認に来ただけだ。小竜姫からの説明を聞いている時に横島のソーサーの爆発音を聞いて、急いで駆けつけたのだが…遅かった。

小竜姫は横島の状態を見て絶句する。右腕は完全に炭化していた。他にも身体の表面が焦げたり、水膨れのようになっている所もある。何より、息をしていない。早急にヒーリングを施す必要があった。

「和樹さん、私は横島さんのヒーリングに当たります！ 和樹さんは彼女を食い止めて下さい！」

「分かった！」

和樹は全身に魔力を通す。このミチエ相手に力を出し惜しみしてはならない。中級神族並の力を持った美神美智恵は、恐らく世界最凶の存在だからだ。和樹は魔人へと姿を変える。それは、かつて小竜姫と神社で戦った時の第一段階の姿だ。

それを見たミチエは、困惑していた。

ルシオラ。

何故、彼女がここに？

彼女が世界を渡れるワケが無い。何故なら、魂の殆どは横島と同化し、本体であるホタルも令子に破壊されたからだ。つまり、ここにいるのは横島と同化した魂…

「まさか…あなたが、横島君！？」

「ああ。」  
「無沙汰してましたね、隊長」

ミチエは目の前が真っ暗になったような感覚をおぼえた。

確かにあの横島の言葉には違和感を覚えていた。ミチエの事を余所者と言ったり、事務所を出た時の理由にしたって、何か不自然な言い方だったけど、まさか、演技だったとは。これで、また計画は水泡に帰した。ミチエは、生まれてきた令子にこの世界の横島を与えるつもりだった。前の世界で結ばれなかった二人を、こちらで一緒にさせようとしたのだ。しかし、この世界の横島は殺してしまった。小竜姫がヒーリングをしているが、無理だろう。

「まさかあなたが横島君だったとはね…。あの子を影武者に使ったの？ 結構酷い事するわね」

「なんだと…？」

「あの子、ずっとアナタの振りしてたのよ。まんまと騙されたわ。知らないのなら、あの子が勝手にアナタを庇ったのかもしれないわね」

俺の振りをした…？ 何故、そんな事を…。庇ったって、何の事だ？

和樹も困惑するが、今は目の前の事に集中する。少しでも油断をすると何をされるか分からない。

和樹とミチエのにらみ合いが続く。どちらが緊張しているかと言えば、ミチエだろう。いくら強くなったとは言え、あの魔人化して戦う横島の姿を思い出すと今でも背筋が凍るのだ。台風と同化した状態でないと勝てないと判断していた。

どれくらいそうしていただろう。

先に口を開いたのは和樹だった。

「互いに、万全な状態じゃないんだ、今日はやり合うのを止めにしてないか」

休戦の提案。それは和樹が言い出さなかったらミチエが言っていただろう。ミチエは力不足、和樹は怪我人をかかえている状態だ。

「戦うのは、明後日の台風上陸の時でいいだろ。それまでは、関係ない人間に手を出さないでくれ」

「…いいけど、条件があるわ」  
勿論、これを利用しない手はない。ミチエはニヤリと笑って和樹に言った。

「明後日、鎌倉の由比ヶ浜を戦いの場として指定させてもらうわ。そして、そこにひのめを連れて来なさい。戦うのはアナター一人。その条件が飲めないなら受けられないわ」

やはりそう来るか…。和樹は苦々しい顔をする。妙神山は神界に一番近い所にある。無理に攻め入ろうとすれば、撃退されるのは眼に見えている。だから、そこからひのめを引きずり出そうとしているのだ。ひのめを殺せば令子が生まれると思っ込んでいるミチエなら、必ず言い出すと思っていた。

「…分かった。戦うのは俺一人だ。だから、今回は退いてくれ」

「ふふふ。分かったわ、約束は必ず守りなさいね」

ミチエは満足そうに微笑むと、空へと舞った。そして、雨雲から発せられた稲妻に身体を貫かれる。

ピカッ！　ズガアアッ！

眩い光と激しい音と共に、ミチエはその場から消え去っていった。

「小竜姫、横島はどうなってる！」

ミチエの退却を確認してから、和樹はすぐさま小竜姫の方へと向いた。ヒーリングをかけられている横島の顔には、赤みが戻ってきていた。

「私の竜気と相性が良かったのか、持ち直しました。ですが……」  
深刻そうな顔をする小竜姫。見ると、炭にされた横島の右腕は元の形に復元されていた。が、どうも細部が違うように見える。

「小竜姫、これは……？」

「…腕は、横島さん自身が再生したんです。竜神族の魂の力で……」  
その腕は、確かに人間のものとは比べると逞しく靈気に満ち溢れていた。神魔特有の靈的受肉体。人間としての腕は永遠に失われたのだ。

「横島さんは、これから魂の記憶を取り戻して行くでしょう。ただの人として生きて行くのは、もう無理なのかもしれません」

小竜姫の目には、涙。

結局、横島を守り通す事は出来なかった。神族…特に竜神族に見

つかるのも時間の問題だろう。遅かれ早かれ、横島は神界の揉め事に巻き込まれる事になる。

「仕方ないさ。今は、一命をとりとめた事の方が重要だ。小竜姫、よくやったな。お前のおかげで横島は救われた」

和樹がそう言うと、元気がないながらも小竜姫は頷いた。そう、今は命を救う事を優先すべきだ。頭を切り替えて、小竜姫は和樹と一緒に横島を担ぐ。妙神山へ行けば、もっと本格的な治療が出来るのだ。

二人は目を合わせて頷くと、空を飛んで、神社にあるゲートへと向かうのだった。

## 第六十一話 決戦前夜のはなし

妙神山に運ばれた横島が目を覚ましたのは、あれから実に五時間後の事だった。小竜姫によるヒーリングと和樹の文珠のおかげで怪我自体は回復していたが、急激に活性化を始めた竜の魂が身体を蝕み始めたのだ。このままでは人間でなくなってしまう。小竜姫と和樹、そして神界から戻って来た天竜による封印で、横島は何とか無事に人間の身体を保つ事が出来た。

妙神山の、とある一室で横島は目を覚ます。まず始めに飛び込んできたのは美神ひのめの泣き顔であり、次に畳の匂い。ああ、自分の部屋じゃないんだなとボンヤリ思っていると、襖が開いて和樹が入って来た。

「気分はどうだ？」

そう言う和樹に、横島はハッキリしない頭で答える。

「まだ眠い…。…何で所長泣いてんすか？ 俺、どうしたんかな」

泣いているひのめの頭を撫でようと、布団から手を出す。見るとその腕はやけに引き締まっていた。霊視すれば、その表面が細かなウロコで覆われているのが分かるだろう。それは…竜の手だ。

「和樹、これ…」

「俺の魔人化と似たようなもんだ。お前は前世で竜神だったらしくてな。なんか魂に引つ張られてそんな腕になってんだってさ」

魂に引つ張られる？ 横島は不思議そうに自分の腕を見ていたが、我に返るとその手でひのめの頭を撫でた。こうして撫でられるなら何だっていい。確か…雷の直撃を受けたはずだ。本来なら腕は無くなっている。こうして撫でる事など出来なかったのだ。

涙で顔をグシャグシャにして泣き続けるひのめを、横島は優しく撫で続けた。それを見た和樹は、小さくため息をついた。本当は叱り飛ばしてやりたかったが、そんな雰囲気じゃないのだ。仕方なく、和樹は口調を和らげて言った。

「横島…。お前、何であんな無茶したんだ？ お前が傷ついて悲しむ人は沢山いるんだから、もっと自分を大切にしなきゃダメだろ」

「和樹…」

言われた横島は、複雑な顔をした。

「お前に任せつきりじゃ嫌だったんだよ。好きな人は自分で守りたかったし…それに、お前だって向こうで散々な目に遭ってきただろ？ これ以上、お前に背負わせるのはどうかと思った」

そこまで言って、横島は不意に言葉に詰まった。目に涙が溜まってくる。

「…それに、俺だって強くなったはずだったんだけど…。お前に追いつきたくて必死だったのに、結局負けちゃった。なんか…情けねえよ。また、お前に頼る事になる…。悪い、和樹」

横島は、それまでひのめを撫でていた手で自分の顔を隠す。泣き顔を和樹に見られたくないのだ。和樹は察して、部屋を出る。その際、横島に振り返って言った。



「お前はよくやったよ。後は俺が何とかする。心配すんな、隊長は絶対俺が止めてみせるさ」

「…ああ」

静かに襖を閉める。

その向こうで横島の嗚咽が聞こえたが、和樹はそのまま部屋を後にした。今は、そっとしといてやろう。何も出来なくて情けない気持ちになるのは、自分も散々経験した。

部屋を離れ、普段は食事に使っている居間に行くと、そこには天竜と小竜姫、老師がいた。横島を心配してユリ子や藤姫たちも来ていたが、今はゲートで神社の方へ帰っているらしい。

『和樹か。ちょうどお主にも話そうとしておったんじゃ、まあ座れ』

老師に促されるまま、和樹は小竜姫の隣に座った。小竜姫は、何だか疲れきった表情をしている。

話は、天竜から伝えられた。

今回のミチエ…美神美智恵の世界移行は神界でも問題視されており、ヒヤクメの報告で竜神王にも伝えられている。そこではあの横島とミチエの戦いもリアルタイムで伝えられていたのだが…

「横島の腕を見られたか」

「うむ。神界…竜神族の間では、仲間の発見に大騒ぎだ。横島は余の臣下だから手を出すなどとは言っているが、まあややこしい事になってきている」

ウンザリとする和樹。神界のゴタゴタに巻き込まれるのは勘弁してほしい。特に、この世界の横島が巻き込まれるのはかつての自分を思い出して辛かった。

『和樹よ、それだけではない。お主の魔人化した姿も知れ渡ってしまつた。これがデタント反対派の連中にも知れ渡つてな。竜神の新しい仲間を奪われる、と訳の分からん事を言い出す奴も出る始末じや。ワシと天竜は、これから神界へ出向いて事態の収束をつけに行かねばならん。その間、小竜姫にここを任せる事になる』

そこまで言われて、和樹も何が言いたいのか分かつた。

「横島がまともに動けるようになるまで、藤姫にも妙神山に居てもらおう。タマモと藤姫、小竜姫なら護衛としては最強だろ。大丈夫、隊長との戦いはタイムマン勝負だから助けはいらないよ」

今回の戦いに神界側からの助けは無い。和樹自身が危険視される上に横島を守る為に小竜姫たちも妙神山を離れられない。その事を、老師たちは伝えたかつたのだ。

『すまんのう。今回もお主を孤立させる事になつてしまつ』

「大丈夫ツスよ。今回は、ちゃんと皆と相談したりしてるから。心理的には、全然孤立してる気分はしないし」

和樹は笑つて答えた。

以前は、こうして語り合う機会すら持てずに戦いに突入してしまつた。今回はちゃんと連絡を取り合っている。和樹を取り巻く環境は、全く違つていた。

『ふむ…出来るだけ早めに帰ってこれるようにはするが、油断はするでないぞ。自然の力は、神格化されるくらいに強大じゃ』

「はい。そこに隊長の知恵が加わったら油断なんて出来ません」

そう言つと、老師は頷いて席を立つた。天竜も一緒だ。

『小竜姫、ワシらはこれから神界へと向かう。留守は頼んだぞ』

「ハッ！ 畏まりました！」

敬礼をする小竜姫。その姿を見ながら、和樹は少し考えていた。こうして堅苦しい敬礼する小竜姫は、やはりこの世界の小竜姫だ。向こうの小竜姫は、和樹と恋仲となつてからは丁寧ではあるが無駄な力の抜けた軽やかな動作をとっていた。強さとしても、この小竜姫よりも強かった。

もう、心は完全に落ち着いたようだし…全て、渡しても大丈夫かもしれない。

「小竜姫…少しいいか？」

老師と天竜が部屋を後にして二人きりとなつてから、和樹は小竜姫と向かい合った。その真面目な表情に、小竜姫も気を引き締める。一体、何を言うのだろうか、と。そして息を飲んで和樹の言葉を待っている、和樹はおもむろに小竜姫に顔を近づけて…

「んっ…!？」

キスをした。

嬉しい。嬉しいけど、一体何故、今？ 困惑する小竜姫だが、次の瞬間、和樹から強烈な竜気が流し込まれる！

「んんーっ！？」

これは…私！？ 小竜姫は竜気を全身に感じて身体を震わせた。膨れ上がる、もう一人の自分の意識。しかし、完全に適応している小竜姫は人格を飲み込まれる事無く一体化した。

ゆっくりと、唇を離す。

和樹が小竜姫の顔を覗き込むと…小竜姫は、涙を流していた。

「何故…何故ですか！？ あなたの中に私が居るから…一緒に戦えると思っていたから、妙神山に留まる事が我慢出来るのに！ 私は、もう必要ないんですか！？」

小竜姫にしてみれば、突き放されたような気がしたのだ。和樹は少し困った顔をした。

「馬鹿だな、俺が小竜姫を捨てる訳ないだろ？ お前は俺の大切な人なんだから」

「だったら…だったら何故、今…」

「お前には、横島を守ってもらわなきゃならないし。それに、俺もそろそろ本来の俺に戻らないといけないかなって」

「え……？」

言われて気づいた。

和樹の外見は以前と同じだが、身に纏う雰囲気が違う。男らしく、その優しくも力強い眼差しは…

「横島、さん…」

そう、世界中を駆け回り傷ついた妖魔を助け、どんな絶望的な状況でも戦い続けたあの横島のものだった。小竜姫の霊基を譲り渡した事で、眠っていたかつての横島の意識が表に出てきたのだ。

「今までありがとう…なんて言う別れの言葉みたいだな。…これからは、ちゃんと恋人として宜しくな」

「は…はい！ 頑張ります！」

何を頑張るのか怪しいところだが、和樹は小竜姫の頭を撫でて微笑んだ。小竜姫も、目を閉じて気持ちよさそうにして…

顔を赤らめた。

和樹と共にあった自分の記憶を覗き見たのだ。

「なんか…少しアブノーマルな性癖増えてませんか？」

「ああっ、恥ずかしい秘密を見られたー！？」

何とも締まらない二人。結構本気で涙目な和樹を見ながら、小竜姫は笑った。笑って、和樹に耳打ちをする。

「無事に帰って来たら…今度、そっちでも試してみましようか」

「ぶはっ!？」

鼻血を吹き出して、和樹は倒れるのだった。

和樹が神社に戻る頃には夜もすっかり暮れていた。空は所々雲で覆われていたが、とても台風が来るようには見えない穏やかな夜だった。ゲートを通って台所に出た和樹は、居間で待っていた公平や藤姫たちに報告する。そこには美智恵の姿もあった。

「横島は持ち直したよ。今、美神さんに介抱してもらってる」

ホツとしたような美智恵。しかしすぐに険しい表情に戻る。

「和樹君。明後日はひのめをあなたに預けるけど…勝算はあるのかしら」

「…相手はあなたと同一存在、しかも神族並の力を持っている。まともにやりあったら俺でも厳しいですよ」

和樹は正直に言った。

「美神さんを立ち会わせるというのも、賢いやり方です。俺がフルパワーでやりあったらその場にいる人間は皆消し飛んでしまう。人質兼リミッターという訳です。だから、俺は一段階までしか魔人化出来ない。安易に勝てるとは言えません」

その言葉に失望する者はいない。むしろ、冷静に相手を分析出来るだけ凄いとすら思っていた。特に実際対峙した美智恵は相手の底知れない強さに内心恐怖すらしていたのだ。ゲリラ豪雨の雨雲であれだけの力を持っていた。台風ならばどれだけの力を発揮するのだというのだろう。

「砂浜を選んだのも、前もって魔方陣を描かせない為でしょうね。雷撃対策をしようにも出来ないようになってるわ」

美智恵がもし和樹の立場なら…雷撃を防ぐ為の準備をしている所だが、それもできない。遮蔽物も無い。これは、かなり向こうに有利な条件が揃っている。益々勝算が無いように思えてきていた。

そこに、ユリ子が声をかける。

「私なら、遠距離での狙撃が可能ですよ。助けになれませんか？」

しかし和樹は首を横に振った。

「銃弾に靈気を使おうが本物を使おうが、隊長には通じないよ。ユリ子さんには、神社でイツナと日陰さんを守ってもらいたい。藤姫と俺が居ない神社では、ユリさんが最後の砦なんだ」

そう言われては、従うしかないだろう。ユリ子は悲しそうな顔をして黙り込んだ。

「大丈夫、俺は負けないよ。こう見えて、神族魔族の群れを一人で相手どって勝った事もあるんだ。無事に戻って来るって約束するか、ユリ子さんにはご馳走を用意して待っていて貰おうかな」

少し意地悪そうな顔で言うと、ユリ子も拗ねたような顔をしてから笑った。未だに料理が上達しないのだ。隣にいる日陰が「私がお教えますよ、見返してやりましょう」と言うと、それまで暗かった皆の顔にも笑顔が浮かぶ。

それを、公平は静かに見守っていた。

サタンには、和樹の体験を映像で見せられて大体どんな経験をしてきたか知っている。その映像にあった横島忠夫の表情に、今の和樹は酷似していた。

これまでの女性的な愛らしさは成りを潜め、ここにいるのは鍛え抜かれた兵士のような精悍さを持った一人の男だった。それを見て、公平は察する。和樹は…もう、以前の和樹ではない。

気楽に、この世界で生きさせてやりたかった。出来る事なら、荒事に関わらずに過ごさせてやりたかった。しかし…うまくは行かない。今や遅しく成長した息子を見ながら、公平は複雑な表情をするのだった。

次の日。

和樹は何事も無かったかのように学校へ登校した。

ユリ子などは、次の日に大きな戦いが控えているのだからと休む



事を勧めたが、和樹は首を縦に振らなかった。

「一々休むのも馬鹿らしいよ。変に意識してたら、勝てるもんも勝てなくなる。大丈夫、俺を信じろって」

そう言って、和樹は笑った。

これは、ただの強がりではない。きっと、ちゃんと根拠があつて言っているのだろう。自信に満ちた声と表情に、ユリ子はそう思った。

学校での和樹は、本当にいつも通りだった。横島が怪我で休みだったので、本当にのんびり一人で本を読んだりウォークマンやラジカを聴いていた。昼休みには雨が降って来たので給水塔には上らなかつたが、教室で昼寝をしていた。その姿を見ながら、ユリ子は和樹の精神力の凄さを実感する。自分なら、遺書を書いて泣いてるかもしれない。

和樹は本当にマイペースを崩さず、授業を受け続けた。そして…最後のホームルームの時間。担任教師から明日の休校が告げられる。台風が直撃する為だ。休みだからと言って外に遊びに行くなよ、と担任が言つと、何人かの生徒から失笑がもれる。この学校にそんな馬鹿がいるものか、と誰かが笑った。ここは、そういう学校なのだ。

ま、俺は人妻とデートだけだな。和樹は苦笑いすると、終了の号令と同時に教室を出た。

その日の夜…

和樹は、神社に励ましにやってきた鬼道やピートたちと賑やかな食事をとった後、一人神社の本殿の前に佇み夜空を眺めていた。

空は益々雲が増えてきていたが、雨などは降らず、時折雲の切れ間から顔を出す月は綺麗な満月であった。

明日。

前の世界のミチエと戦う。

それは和樹にとって、もしかしたら過去との決別となるかもしれない。今、自分はなんの為に戦おうとしているのか。それは、この世界を守る為だ。

俺は、この世界で生きて行く。この世界の皆を、守ってみせる。  
…そう、決意を新たにしていた。

その時。

和樹がふと視線を参道に移すと、社務所の方から小さい影がこちらにやってきた。

月明かりに照らされ姿を表したのは、イツナだった。

「あれ、どうした？ 心配になって見にきたか？」

「コン…」

見上げるその眼差しには、不安そうな感情が見てとれる。足元にやってきたイツナを和樹は抱き上げると、優しくその頭を撫でてあげた。

「心配性だなあ、イツナ。俺なら大丈夫だよ。まあ、明日はお土産買って来てやるから、楽しみにしてろよな」

和樹は軽口を叩いてみせる。が、イツナはただジッと和樹を見つめるだけだ。和樹も、そのイツナの瞳に吸い込まれそうになる。心の奥まで見通されたような気持ちになった和樹は、仕方なく作り笑顔を解いた。

「お前は…本当に不思議だよな。思えば初めてこの世界で目覚めた時…一番最初に友達になれたのはお前だったんだよな」

イツナは、少し嬉しそうに小さく頷いた。そう、和樹が家族以外で心を許したのはイツナが最初だった。それ以降、家族として一緒に過ごしてきた。思えばあれば、半年ほど前の話なのだ。なんだかもっと前からイツナの事を知ってるような…一緒に過ごしていたような錯覚を覚えていた。

「お前だから言うけど…本音は不安だよ。俺が蒔いた種だって思いはやっぱりあるし。隊長にとっての美神さんは、俺にとってのルシオラなんだよな。もし俺がルシオラをもう一度蘇らせる手段を見つけたら…なりふり構わず手に入れようとするだろ。周りの迷惑も…今なら省みる事が出来るけど、あの頃の俺なら無理だ。そして、隊長はあの頃から時計が止まってしまっている」

和樹は言いながら、空をもう一度見上げる。月は雲に隠れて、今は見えない。ただ、切れ間から光が漏れるだけだった。

「勿論、負けるつもりは無いけどさ。やりにくいつてのはあるよ。ムカついた事もあるけど、尊敬する所だつてあった。俺をGSとして認めてくれたのは、人間ではあの人か初めてかもしれないしな」

それは、今だから振り返つて抱ける感想だ。事務所を辞めたばかりの頃はまだ許せなかった。GS資格を所得しなおす時に、裏で手助けしてくれていたと知つた時…初めて、冷静に見る事が出来るようになったのだ。

「俺は勝つ。勝つて、お前のいるこの世界を守るよ」

和樹は、イツナに力強く告げた。それは、まるで自分に言い聞かせるようでもある。イツナは一言「コン！」と鳴くと、嬉しそうに和樹の頬に顔をすり寄せた。

その時、夜空を覆う雲が途切れた。

周囲を、月明かりが照らす。

そして和樹がその光景に目を奪われた時…不意に風に乗って、誰かの囁く声が聞こえた。それは、確かに記憶にある彼女の声。

(頑張つて、横島ケン)

!?

「み…美神さん？」

驚いて、周りを見渡す和樹。月はまた雲に隠れ、声も聞こえない。気のせい…だったのだろうか。

「イツナ、今の聞こえたか？」

「コン…？」

不思議そうな顔をするイツナ。どうやら、聞こえなかったらしい。和樹はしばらく呆然としていたが、社務所の方から藤姫の呼ぶ声が聞こえて我に返る。

「和樹ー、そろそろ風呂に入んなー！」

「おー、分かったー！」

まあ、いいや。和樹は気を取り直して、藤姫に答えた。この世界のどこかに、もしあの人転生していたとしたら…見守ってくれているのかもしれない。あの声がただの空耳じゃなかったらいいのにな…。和樹はそう思いながら、イツナに声をかけた。

「よし、久しぶりに一緒に入るか！」

「コン！」

元気良く答えるイツナを抱えて、和樹は社務所へと駆けて行くのだった。

## 第六十二話 動き出す三界のはなし

魔界のとある研究所の前には、幾千もの魔族が倒れている。皆、身体中に大怪我をしながらも死んではない。死ねないのだ。ただ一人の男の手によつて、魔族の戦士達は完全に無力化されていた。

(あの装置が無ければ…)

忌々しそうに、誰かが呟く。見上げる空には、巨大なブロッコリーのような形をした謎の機械がそびえ立っていた。

魔族の大軍は、たった一人の人間に半殺しの目にあつた。そしてその状態で回復すら許さず動きを封じたのはあのブロッコリーだ。せめてあの装置さえなかつたら、回復して体制を立て直せたものゝ。後方で同じように動けずにいる司令官は悔しそうに歯ぎしりをしていた。

そこに、件の人間：芦優太郎が近づいてきた。口元に、冷酷な笑みを浮かべて。

「堕ちたものだな、アスモデウス。不穏分子がいると聞いてはいたが、まさかお前のような男がこんな茶番に手を貸しているとは思わなかつた」

「グツ…貴様こそな、アシユタロス！ 人間なぞに成り下がり、拳げ句デタントに手を貸すとは見下げ果てた奴だ！」

気丈に言い返すものの、もはや死に体のアスモデウスに反撃する力は残されていない。その身体には片腕と片足が無く、頭部にあつた角は斬りとばされ何処かへ行ってしまつていた。

「お前は向こうのアスモデウスのようだが、どうやって此方に来た。ミチエに何を仕込んだのだ」

「ふ…ふはははは！ 貴様は何も知らないのか！」

芦優太郎の言葉に、愉快そうに笑った。

「我らは以前からあの女の能力に注目していた。お前は殺そうとしていたようだが、我々は利用する事を前提に動いていたのよ」

アスモデウスは、得意気に語った。

横島独立の後、娘に対して盲目的になるミチエの性格を利用しようとまず美神令子に近づいた。人間の姿で令子に近づいたアスモデウスと部下は、言葉巧みに令子をそそのかし闇の道へと誘う。そして、令子を旗印に反デタント的な考えを持つ人間を集め横島と戦わせた。

横島によつて、令子を始め幾千もの神魔族や人が殺された後。アスモデウスたちの予想通り異世界へと渡った横島たちを追う為、アスモデウスはミチエに令子の最期を映したビデオを見せる。勿論、実際よりも陰惨な形で加工した映像だ。元より激怒を司る悪魔であるアスモデウスに、ミチエを狂わせるのは容易かった。が、ミチエのとつた行動は意外なものだった。

仇を討つために異世界へ行こうとするのではなく。

自殺を選んでしまったのだ。

娘の居ない世界で生きていく意味などない。横島を取り戻せなか

ったのは自分の落ち度：そう思ったミチエは、アスモデウスたちの制止を振り切つて雷に撃たれ死んでしまった。

このままでは、計画が全て水泡に帰す。アスモデウスはミチエの魂を無理やりつなぎ止め、雷に同化させてしまった。その魂を『激怒』で汚染して…

かくして、ミチエは植え付けられた『激怒』に支配され、異世界へのゲートを開く片棒を担がされる事となった。新しい世界で、今度こそ横島を殺しハルマゲドンを引き起こそうと合作したアスモデウス。しかし、彼にとって大きな誤算があつた。それは…

「貴様がいた事だ、アシユタロス！ まさか魔界でまたコスモプロセッサを作っているとは思わなかつたぞ！」

アスモデウスは憎々しげに芦を睨みつける。芦は、やれやれとため息をついた。

「つまりは貴様らのおかげで面倒な事になっている、と。この私の手を煩わせたのだ、それ相応の覚悟は出来ているだろうな」

芦の目が、邪悪に染まる。アスモデウスは、そのあまりの恐ろしさに息を呑んだ。かつて魔界を恐怖で支配した男、アシユタロス。人間になろうと、その威圧感は変わらない。

「私の新しく造ったコスモプロセッサは更に改良を加えていてな。異世界から呼び寄せただけでは無いのだよ」

ニヤリと口元を歪めた。

「こちらで起きた事象で他の平行世界を塗りつぶす事も出来るのだ。つまり、ここで貴様を殺してコスモプロセッサを作動させるとど



うなると思っ?」

他の平行世界を塗りつぶす?

ここで死んだ事で他の世界を…

「…っ!? まさか、そんな!」

「ハハハハハ! 貴様の霊基を崩壊させた後に存在そのものを別世界に飛ばしてくれるわ! そして、貴様が居ないという事実で平行世界を塗りつぶし、貴様の存在そのものを消し去ってみせよう! さあ恐怖しろアスモデウス、我が娘と友を弄んだ罪は重いぞ!」

芦の手には禍々しい魔力と霊気で編まれた霊波刀が。その切っ先をアスモデウスの鼻先に向けると、芦は目を見開いた。

「や…やめるアシュタロス! 我々は同じ魔族ではないか!」

「貴様と一緒にするな、虫酸が走る。せめて最期くらいは潔く散れ」

芦の霊波刀が、真一文字に振り抜かれた。アスモデウスは、身動き一つとれない。

ズバツ…

ゴトツ…

喚き立てていた物体は呆気なく地面に転がった。静まる周囲。配下の魔族たちは、あまりの実力差に固まるしかなかった。

「やっ…」

芦はつまらなさそうにアスモデウスの頭を踏み潰すと、コスモプロセッサの根元に佇む娘に声をかける。

「イシユタル、装置を作動させてくれ。今はこのアスモデウスの消去だけでいい」

「はあい、アシユ様」

舌足らずな口調で、銀髪の女性が答える。操作盤をいじってから、「うんしょ、うんしょ」と重いレバーをひく。

ブウウウウンツッ！

コスモプロセッサが起動すると同時に、アスモデウスの身体が霊基崩壊をおこし始めた。配下達は青ざめる。

自分たちも、同じ目にあうのではないか…そんな目で芦を見ると、芦は笑顔でこう言った。

「私の部下になるといふなら、命は助けてやろう。どうするかね？」

返事は決まっている。

魔界の過激派魔族の一大勢力が崩壊し、芦優太郎の私兵となった瞬間であった。

平伏す魔族たちを満足そうに見つめる芦。次に、空を見上げて呟いた。

「カオス、マリア。そっちは任せたぞ」

朝。

天矢神社の境内には、鬼道や美智恵を始めとした和樹の仲間たちが集まっていた。社務所から出てくるのは、和樹。そして、ゲートをくぐって現れた横島と、イツナを抱えたひのめだった。

「和樹：所長を頼んだぞ」

横島の言葉に、力強く頷く和樹。ひのめはイツナを日陰に預けると、和樹の隣に並ぶ。そして、美智恵に向かって笑顔を浮かべた。

「じゃあ行ってくるね、ママ。向いづのママに、文句言ってきてやるんだから」

「ひのめ…」

こらえていた涙が、こぼれ落ちる。美智恵はひのめを強く抱きしめた。

「頑張るのよ、ひのめ。ちゃんと帰って来ないと、許さないんだから」

「ママ…」

ひのめに声をかけるのは美智恵だけではない。親友の六道冥子や

小笠原エミだつて、心配でならなかった。

「ひのめちゃん、頑張つてね〜」

「和樹、ひのめに何かあつたらブチ殺：いや、呪い殺すワケ！」

何とも恐ろしい。和樹は苦笑いして頷いた。

和樹には、タイガーやピート、そして鬼道が声をかける。皆、和樹の勝利を信じてはいたが、一緒に戦えない事を悔やんでいた。

「和樹はん。ボクは今回、オカルトGメンと一緒に現場に一般人が入らないように警備に当たる事になつとる。遠くから応援しとるから、一人で戦うワケやないからな」

「ワツシらも、事務所から出向しますケン。Gメンさんと一緒にですジャー」

「唐巢神父はGメンの方に行つてます。あなたは一人じゃない。それを忘れないで下さい」

皆の言葉に、目頭が熱くなる和樹。全く同じ言葉を、前の世界でも聞いた事があつた。あの頃は一人で何でも背負おうとしていたから、素直な気持ちで受け取れなかつたが…。今は、とても嬉しかった。

「ありがとう。心強いよ」

そう返す和樹。

本当に、心強かつた。

しばらくして公平が車を鳥居付近につけると、和樹はひのめと共に車に乗り込んだ。窓から皆に「行ってくる」と声をかける。ひのめも笑顔で手を振った。

車がゆっくりと動き始める。和樹とひのめは、皆が見えなくなるまで手を降り続けた。

その、同時刻。

鎌倉の海岸は交通規制がかけられていた。海は荒れに荒れ、風は人が立っていられないほど吹きすさんでいる。一台のテレビ中継の車とその模様を伝えようとしていたが、オカルトGメンの車が横付けしてそれを止めていた。

「何故ですか！ 報道の自由を侵害するつもりですか！」

「いえ、単純に危険だから止めているんですよ。車両通行止めの標識はご覧になったでしょう？」

「それにしたって警備が嚴重過ぎるじゃないですか！ 一体ここで何が行われるんですか！」

食い下がるマスコミに辟易としているのは西条。その隣の亜麻色

の髪の女性が、つまらなさそうに言った。

「いいんじゃない？ 自己責任で行かせてあげれば。そこで死のうと助けないって事で」

その言葉に、ニヤリと笑うレポーターの女性。車のアクセルを踏むと、勢い良く発進してカーブにさしかかり…

キキーツ！ …ガンツ！

曲がり切れずスリップしてガードレールに叩きつけられた。

「ああもう、余計な仕事を増やしてくれるな！ 我らは一応公僕なんだ、あんな人間でも助けなければならぬ！」

「えー…」

西条の言葉に不満顔にしているのは、メフィスト。オカルトGメソンの新しい副指揮官である。

ミチエの襲撃を受けた後、メフィストはリリースに付き添われ西条の元へと身を寄せる。保護者である芦優太郎が不在の為だ。そして、オカルトGメンにも顔を出した時、今回のミチエ襲撃の真相を知った。六道から出された由比ヶ浜周辺の警備の依頼書を見たのが切欠だった。

あのムカつく雷ババアが来る。メフィストの目には復讐の炎が宿った。無理やりオカルトGメンのメンバーに加わり、今回の作戦に同行する事にしたのだ。加えて、六道の事務所も作戦に参加する事になっている。鬼道と接点を持つチャンスだった。

(鬼道君、私の事分かるかなあ…。気づいてくれるかなあ…)

ソワソワしながら、メフィストは現場の警備を続けていた。

「いや、君も車の移動手伝ってくれたまえ!」

…西条の事を無視して。

公平の運転する車の中では、緊張した面持ちのひのめと公平が和樹の顔色を伺っていた。あまりにも、いつも通り。怖くないのだからか。

「ねえ和樹君、どうやって勝つつもりなの?」

「え? それは相手の出方次第ですよ。俺もあの隊長と戦うのは初めてだから、何とも言えないッスね」

サラッと言う和樹。

実際、今更焦っても仕方ない事ではある。和樹はどんな劣勢でもひっくり返して来た男だ。冷静さを保つ事が出来れば、どんな相手にも勝てると思っていた。

「大丈夫、勝ちますよ。それしか考えてないし。美神さんは文珠持って来てますか?」

コクン、と頷くひのめ。以前貰った文珠は、全てバッグに入れてある。美智恵に持たされたのだ。

「なら、それに『防』とか『護』とか入れて自分を守る事が出来ますよね。俺が戦い始めたら、それで身を守って下さい」

ひのめを守りながらでは、やはりキツイ。逆に言えば、ひのめが自分を守る事が出来たなら勝機は出来る。和樹は、大量の文珠をひのめに渡した公平に感謝していた。

ミチエが一筋縄で来ないのは分かりきっている。安易に対策を立てて、柔軟な判断が出来なくなるのが今の和樹の一番恐れている事だ。ミチエは策を講じるエキスパート、こちらの思考が硬直化した時…勝敗は決してしまう。和樹は臨機応変に行くしかないと考えていた。

「親父。分かっているとと思うけど、俺達を降ろした後、神社の方頼む…サタンは居るの？」

「いや、サタンは魔界に芦君のサポートに行ってる。でも大丈夫、結界を張るくらいは俺一人でも出来るし、何かあればゲートを使って皆をつれて妙神山に逃げるさ」

公平は冷静だ。無理に戦わずに逃げる事を選択出来る。和樹も公平の答えに満足そうに頷いた。

「ありがとう。親父に任せれば神社も安全だな」

「ああ、任せとけ。俺は自分の出来る事しかやれんが、その分やれ



る事は全てやるつもりだ」

この公平の言葉を和樹は普通に聞いていたが、公平が裏でどんな事をしていたのかは見当もついでいなかった。その事を和樹が知るのには、随分後の事になる。

車の中でしたら、和樹は公平と談笑を続けた。これは、ひのめを落ち着かせる為でもある。堂々とした態度で普段と変わらず話をする和樹に、ひのめもいつの間にか不安な気持ちがなくなっていた。

由比ヶ浜に着くまで、和樹たちはこれから戦うとは思えないくらいリラックスして、楽しそうに話をするのだった。

その頃、神界のとある宮殿では。

竜神族による会議が行われていた。出席しているのは竜神王を始め名だたる大物ばかり。そんな中、天竜は一人必死な形相で声を上げていた。

「何故、本人の意志を確認しないで話を進めるのだ！ 横島は人間だ！ 人間には人間の生き方がある！」

竜神たちは、横島を竜神族に迎え入れる準備をしていた。早ければ、近日中にも神界に連れて行くつもりだったのだ。これを知った

天竜は怒り、声を荒げた。しかし、そんな天竜の怒りも他の竜神族には理解されない。

「何故、下等な人間のままでいさせるのだ。竜神に戻った方が良いに決まっている」

「そもそも、横島本人の意見を聞いたのか。きっと喜んで竜神になりたいと言っただろう」

「天竜の言い方では、まるで我らが悪いような言い方ではないか。竜神族の方針に、竜神王の息子が異を唱えるのは問題ではないか」

神族は、人間を軽視している。天竜は、それを痛感していた。

『天竜よ』

そこに、一際威厳のある声が響く。父である竜神王だ。

『今のお前は私人ではない。会議で発言する以上、次期竜神王候補の一人としての発言として皆は捉える。自分の言葉がどういう意味を持つのか考えた上で発言すべきだ』

震える拳を握りしめる天竜。父は思慮分別のある立派な竜神王であると思っていた。が、それは違っていたようだ。天竜は父に失望していた。

「人間として生きている横島を、竜神族の都合で振り回すのが正しい事だと。そうお考えですか」

天竜がそう言うと、竜神族たちの間から非難の声があがる。その多くが、竜神王に対して失礼だという言葉だったが、中には若造が偉そうに、という発言内容と関係ないものもある。天竜は、竜神族

の衰退の原因はこうした連中のせいではないかと思っていた。

そんな、荒れ始めた会議を、斉天大聖はただ黙って眺めていた。

思っていた以上に、竜神族は横島を欲している。それは近年、強者があらわれないという事が理由なのだろうが、それにしても強引だ。何か、別の意図があるのではないか。例えば、この中に反デタント派の竜神がいたとして、武術に長けた小竜姫がデタント派に組んでいる事に対抗して、横島を拉致して洗脳し反デタント派に組み込もうとしているのだとしたら。そんな、本来ならありえない妄想をしてしまうくらい、この会議に出席している連中は強硬派が多かった。まさか本当に、ここにいる連中の意見が竜神族の総意なのだろうか。

『斉天大聖よ、お主はどう考える』

物思いに更けていた老師に声をかける竜神王。竜神王はかつて老師と戦い、引き分けている。ライバルであり、親友。だからこそ、他種族でありながらこうして助言を求めているのだ。

『ふむ、ワシとしては、横島一人、竜神族一人でここまで大騒ぎするのが不思議でならんがのう。人間界には他にもはぐれ竜神がおる。何故、横島にこだわるのかが分からんのだよ』

老師の言葉に、気まずい顔で黙り込む竜神族たち。そう、ただ竜神族を増やしたいだけなら他にもはぐれ竜神はたくさんいる。その中には、戻りたいと思っている者もいるのだから、そちらを優先的に引き込めばいいだけなのだ。藤姫のように、実力も知識も豊富な竜神族もいる。

老師には、竜神族の連中が「いいなりになる新しい戦力」を欲しがっているようにしか見えなかった。

『竜神王よ。三界がそれぞれのルールを尊重して認め合うのがデータの基本理念じゃ。しかし、どうもここには人間界のルールを軽視しとるような意見がはびこっておる。竜神族はデータの…神族全体の方針よりも自分たちの都合を優先するつもりなのかのう』

つまり、神族である事をやめるのか、と聞いている。竜神族は奇妙に肥大したプライドを持っている為、神族の中でも評判は悪い。竜神王の努力で今の地位があるのだが、それもこの調子ではじきに落ちぶれる。今のうちに態度を改めると言っているのだが、竜神族たちは敵意に満ちた目を向けるばかりだ。

『斉天大聖、竜神族は一人でも多くの同胞を必要としているだけで、他意は無い。それだけは、誤解せんでくれ』

「ならば、何故他の者に声をかけないのだ！」

思わず口を出したのは天竜だ。黙って聞いていれば、なんと好き勝手に言うことか。

「反省して投降してきたイームとヤームには、まともな扱いをせず差別し独房に隔離し続けているではないか！ 一人でも多くと言うならば、彼らをちゃんと竜神族の社会に復帰させてやるべきだ！」

『天竜よ、口を慎め！』

竜神王が一括するも、天竜は止まらない。これまで溜まってきた、竜神族の不条理さに対する鬱憤が噴き出してきていた。

「それに、横島は余の臣下だ！ 余は臣下に手を出されて黙っているほどお人好しでも腰抜けでもない！ 父上…いや、竜神王よ！ もし横島の意志を無視して話を進めるのであれば、余が貴様を討つ！」

天竜が啖呵を切ると、皆は騒然となった。一族の王に対して、これほどまでに無礼な態度に出るとは、誰も思っていなかったのだ。第一、勝てるワケが無い。斉天大聖と引き分けたというのは、即ち神界最強レベルである事を意味するのだ。最近大人になったばかりの天竜に勝ち目があるハズがなかった。

そして、それは竜神王も同じように考えていた。身の程知らずにも程がある。一度叩きのめして、一族からしばらく追放して反省させた方が良くもしれない。そう思って、天竜を睨みつけた。

『そこまで言うならば天竜よ、私と剣を交えようではないか。もしお前が勝てば、横島には手を出さん。しかし私が勝ったら、お前を竜神族から追放する』

ただでさえ騒然となっていた会議の場は、今や大変な騒ぎとなっている。ただの親子喧嘩では済まされない、竜神族の結束に関わる大事件になりかねない展開なのだ。流石にこれはマズいと止めに入る者や、オロオロとする者がいた。そんな中…一部の竜神族はほくそ笑んでいる。

分断工作。思いの他、上手く行った。結果は明らかに竜神王の勝ち、天竜は追放されるだろう。そうすれば、竜神王候補は他の者になる。自分たちの派閥からの候補者が選ばれれば…神界の勢力図を書き換えるチャンスが巡ってくるハズだ。

今の竜神王は穩健派だ。戦う意志が無い。竜神族としてのプライドも足りない。自分たちの推している鷹派の候補が竜神王になれば、それも変わるだろう。魔族相手に戦功を上げ、神界でももっと高い地位を得る事が出来る。文珠の使える横島は、その時の貴重な戦力となるはずだ。

だからこそ、神界に迎え入れる必要がある。完全に神族化させ、永遠の生を与えねば、戦力として使えない。人間の寿命のままでは、すぐに死んでしまつて使い物にならないからだ。

ほくそ笑む連中たちの思惑通り、天竜は怒りに顔を赤くしている。腰に下げた剣を抜くと、竜神王に突きつけた。

「いいだろう！ 余は正しき竜神族、それを証明してみせる！」

天竜対竜神王…

今、竜神族の歴史の中で最大の戦いが幕を開けようとしていた。

## 第六十三話 和樹VSミチエのはなし

和樹が由比ヶ浜についたのは、出発から一時間程たった頃だった。海は荒れ狂い、吹く風は雨を真横にねじ曲げている。車から降りた和樹とひのめは、レインコートに身を包んでいた。傘など、さしてはいられないのだ。

「和樹、向こうの美智恵さんにガツンとかましてやれ！」

「おう！ 任せとけ！」

元氣よくガッツポーズをとる和樹。ひのめは頼もしそうにそれを見ていた。

公平の運転する車がその場から去って行くと、和樹はひのめの手を引いて浜辺へ降りる階段までやってくる。波はその階段の近くまで到達している為、ひのめはここまでだ。和樹は手を放すと、ひのめに水晶文珠を一つ手渡した。そこには、『暖』と入れている。

「体温が奪われると大変ですから。『遮』で風を遮断してもいいんですが、それだと美神さんが文珠持っているのバレて警戒されちゃうから。とりあえず、今はこれで我慢して下さい」

「うん、充分だよ。和樹君、ありがとう。私は何もしてあげられないけど、足を引っ張らないように頑張るからね！」

それだけで充分ありがたい。和樹は笑顔で「いつてきます」と言うつと、嵐の海へと飛んで行った。

下は荒れ狂う波、横殴りの雨に加えて上空は真つ黒な雲で覆われ、所々稲光で点滅を繰り返している。視界は悪く、海と空の境さえ今は曖昧だ。四方八方を水で囲まれたような、そんな感覚をおぼえる。思っていた以上に、周囲の環境は自分に不利だった。

しかし、こんなシチュエーションは散々経験して来たじゃないか。和樹は動じていなかった。竜の因子を大部分小竜姫に渡してしまつた和樹は、確かに単純なパワーで以前と比べて多少レベルダウンしている。が、この身体を乗りこなす意識は以前の横島だった頃のものに戻っているのだ。戦いの中に身を置いていた頃の感覚を取り戻した和樹は、戦うだけならかなり強くなっていた。特に、こんな逆境での戦いにおいて。

「来たな…」

和樹の顔が引き締まる。

前方の沖合に、水柱が立つのが見えた。幾つもの稲妻が空と海の間を走る。その稲妻は次第に空中で一カ所に集まり、その中心部には見慣れた人影があらわれた。

美神美智恵。

かつて和樹が尊敬し、信頼し、嫌悪し、憎悪した存在。勿論その感情は幾つものすれ違いや思い込みから生まれた物もあったが…。和樹の人生において、余りに大きな存在感を放っていたのは美神令子であり、その母美神美智恵であった。



『ふふふふ…よく逃げ出さなかったわね。あなたの事だから、正面から来ないかと思っていたわ』

その声には、以前にはなかった異様な迫力があつた。台風の強大なエネルギーを手にしたミチ工は、確かに神族でもかなり上位にランクされるであろう存在となっていたのだ。

「…俺にとって隊長は特別な存在ですからね。止めるのなら、俺が止めたい。奇襲作戦とか練ってるうちに他の誰かにこの役目を奪われたくないんでね」

『あら、止められると思ってるの？ だとしたら、頭の中身は成長していないのね。その慢心が、妖魔の里の崩壊を招いたというのに』

ミチ工の挑発にも、和樹は動じない。戦う前に心理戦を仕掛けるのはミチ工の常套手段なのだ。和樹は静かに、ミチ工を真っ直ぐ見つめた。

「隊長。俺は美神さんを殺した。どんな理由であれ、それは許されない事だ。俺は美神さんが復活するなら、その手助けが出来るなら喜んで協力したいと思う」

『へえ…命乞いかしら？』

「いいや。これは本心だよ。けどな、この世界に迷惑をかけて…ひのめさんを殺して復活させようとか考えているなら協力は出来ない…俺はこの世界の皆を守る。アンタにこれ以上皆を傷つけさせない！」

和樹の身体が、紫色に染まる。ルシオラのような女性体ではない、純粋な魔人化。黒い鱗のような鎧に身を包み、鋭い爪を生やしている。右手には、黒く光る刀。ハンズオブグローリーの究極の形である。その刀を構えて、和樹はミチエと対峙した。

『ふ…ふふふ…その姿、何度夢に見た事か。何度、夢の中で殺した事か…』

ミチエは狂気の…狂喜の笑みを浮かべる。

『令子、今あなたの仇をとってあげるわ。そして、その後は…』

視線を横にずらす。和樹の後方、数百メートル先に佇むひのめを見た。

『あなたの復活を邪魔する馬鹿娘を殺してあげるわ』

ミチエの身体が、強烈な光を放った。戦闘体勢に入ったのだ。視線を和樹に戻すと、鋭い声で言い放った。

『さあ、行くわよ！あの頃は何も出来なかったけど…今こそアナタを倒して令子の仇をうつ！』

「悪いが強くなったのは俺も一緒だ！ひのめさんや仲間の為にも、アンタはここで止めてみせる！」

和樹も叫ぶ。

二人が同時に動いた次の瞬間…

ズガアアアアアアアアッ！

空に、稲妻と靈気の大爆発がおこった。

その頃、天矢神社では落ち着きなく歩きまわるユリ子と、それを心配そうに見つめる日陰の姿があった。公平はまだ戻っていない。イツナも普段と違って塞ぎ込んでいるのか、居間のテーブルの下で丸まったきり出てこようとしなかった。

言いようのない、不安。

今こうしている間にも、和樹が傷ついているのだとしたら。自分は、強くなったハズのに…和樹のそばで戦う事も出来ない。そんな苛立ちが、ユリ子を支配していた。そんなユリ子に、日陰は優しく声をかける。

「ユリ子さん。和樹さんの為に、料理の練習しましょうか」

「え…料理？」

いきなり何を言い出すんだ、この子は。ユリ子は驚くが、確かに何もしいよりはいい。それが和樹の為に繋がるなら、プラスにはなってもマイナスにはならないだろう。

二人は、台所で料理をする事にした。イツナも、何となく台所でカチャカチャ音がしていると気になるのか、テーブルから出て台所へと向かう。台所の冷蔵庫の上に飛び乗ると、そこから二人を観察し始めた。その目はまだ眠いのかぼんやりとしている。

「ふふふ。イツナさんも見てますから、いい所を見せてあげましょう」

「う…緊張する…」

少し固くなったユリ子。しかしそれから日陰が親切に教え始めると、ユリ子も頭を切り替えて料理に集中し始めた。集中力に関しては、ユリ子は和樹の周りの人間の中でもダントツだ。日陰から包丁の持ち方から野菜の切り方、魚の捌き方などを教えてもらう表情は先ほどまでのユリ子とは全く違っていた。

…しかし。

心の奥底では、無理をしていたのだろう。

不意に包丁を止めたユリ子の瞳から、ポロポロと涙がこぼれ落ちた。

「ユリ子、さん…」

「ごめん、日陰さん…私、やっぱり辛くて…」

ユリ子は、日陰に抱きついた。抱きついて、わんわんと泣き始めた。日陰は、ユリ子よりも背が低いので胸をかしてあげる事は出来なかったが…優しく背中を撫でて、慰めていた。

「大丈夫ですよ。和樹さんなら、ちゃんと帰って来ます」

「うう…、でも、私何も出来なくて…応援する事も出来なくて…」

涙で顔をくしゃくしゃにするユリ子。それを、冷蔵庫の上から見  
ていたイツナはつまらなさそうに言う。

「あのさ。そんなに心配なら見に行けばいいじゃない」

えっ！？ イツナが喋った！？

泣いていたユリ子と、それを慰めていた日陰は驚愕の表情を浮か  
べる。ユリ子は、単純にイツナが喋った事に驚いていた。が、日陰  
は違う。イツナの声…それは、とても聞き覚えがある声だった。見  
ると、イツナの尻尾は一本ではない。いつの間にか、九本に増えて  
いた。これは…

「タマモさん？」

キツネは冷蔵庫から飛び降りる。そして、その姿をタマモに変え  
た。

「さすが、元幽霊で今妖怪のおキ又ちゃんね。声一発で分かっちゃ  
うんだ」

おキ又ちゃん？ ユリ子は突然出てきた名前に不思議な顔をする  
が、タマモは構わずユリ子を睨みつけると少し怒ったような口調で  
言った。

「アンタね、こんな所でウジウジ泣いて何か解決になるの!? 日陰に気を遣わせて泣いたり喚いたり…和樹の事が心配で気が気でないのは日陰も一緒なのに!」

言われて気づく。そうだ、和樹を好きで心配しているのは日陰も一緒なのだ。むしろ、今まで一緒にいて自分より怖がりな所があるのを知っている。不安な気持ちは日陰の方が強いハズだ。

「大体、妙神山で修行して多少力をつけてるなら他の連中みたいに周辺警備とかに参加すればいいじゃない」

「それは…でも、和樹さんに神社を守れって」

「馬鹿ね。神社じゃなくて、日陰と公平でしょ。大丈夫、二人なら私が守るわよ。こう見えて、大妖九尾の狐だからね」

にっこり笑うタマモ。ユリ子の顔に、精気が戻ってくる。もし、何も出来なくても…頑張れと声をかける事が出来るなら。その姿を見る事が出来るのなら、行きたい。

「タマモさん、本当にいいんですか?」

「いいに決まってるでしょ? 好きだからって、何でも言う事聞いてたら馬鹿を見るわよ」

その言葉に、ユリ子は決心した。行こう! 日陰に「ごめんなさい」と謝ると、ユリ子は部屋へと走って行った。

台所に残されるタマモと日陰。日陰は、先ほどから気になっていた事を尋ねた。

「あの…イツナさんは？ 朝からタマモさんだったなら…イツナさんはどこに？」

「え？…ああ、アイツ…今頃、走ってるわ」

走ってる…？

「アイツ…誰にも内緒で、和樹の所に駆けつける気なのよ。今朝、妙神山に来て私に身代わり頼んできたわ。自分は、絶対行かなきゃならないって。和樹なら許さないだろうからね。車も電車も使わず、走って鎌倉まで行くつもりなのよ」

無茶だ。

イツナという妖怪がどんな妖怪なのかは、日陰には分からない。が、そんな長距離を走る事の出来る妖怪には見えなかった。そして、それは恐らく正しい。同じ妖怪の事だから、なんとなく分かるのだ。「せめて人間に戻れたら、電車とか利用出来るんだけどね。アイツ、それが出来ない制約を受けてるから。でも、何とかするでしょ。いくらでも裏技使いそうなもの」

「ど、どうしてそんな事が言えるんですか！？ タマモさんは…タマモさんはイツナさんがどんな妖怪か知っているんですか！？」

一度和樹に聞いた時、和樹ですらイツナがどんな妖怪でどんな能力を持っているか分からないと言っていたのだ。同じ狐ならタマモが知っていてもおかしくはないが…

「まあ…多分これが最後になるかもしれないから、おキ又ちゃんには言っておいた方がいいかもね。アイツ、アンタのよく知ってる女よ。ずっと隠してたみたいだけど…私や藤姫は、気づいていたわ。勿論、公平もね」

そう言うってから、タマモはイツナの正体を口にする。その名前を聞いた時…その理由と、制約の内容を聞いた時…

日陰は、膝から崩れ落ちた。

そして、その瞳を涙で潤ませる。まさか、こんなに近くにいたなんて…

「アイツ、さ。ずっと言えなくて辛かったのよ。和樹本人に正体を知られればこの世界から消えてしまうからね。だから、ずっと耐えていたんだけど…もう、限界みたい。二人を止めるって、泣きながら私に訴えたわ。私には…止められなかった」

その辛さは、一体どれほどのものだったのだろう。

いつも明るく可愛く、皆を和ませていたイツナ。その心の奥底には、計り知れない孤独と罪悪感、後悔が渦巻いていたのだ。

日陰はここには居ないイツナの事を想い、ただ涙を流すしかなかった。



そして、同時刻。暴風雨の中、ある国道を南下する一匹の狐の姿があった。泥まみれの身体で、必死に走る狐。そのスピードは、普通の狐の何倍も速いが…体力的にも限界なのか、徐々にそのスピードはゆるやかにになって来ていた。

ここに来るまで、何台かのトラックを乗り継いできた。荷台に飛び乗り、人間だった頃の知識を頼りに、横浜へ向かう道路を逸れたら他の車に飛び移る、という方法でここまでやってきたのだ。しかし、この道はどうも交通量が少ない。台風だから仕方ないのだが、イツナは自分の足で走るしかなくなっていた。

（駄目…こんな所でへばってる場合じゃない！）

イツナは必死に、スピードを上げる。体力はかなり減っていたが、ここは気合いで乗り切るしかないのだ。もう、自分には残された時間は少ない。元々消えてしまう存在なのだ、力を使い果たしても構わない。和樹の所にたどり着けるなら…それで、戦いを止める事が出来るなら…本望じゃないか、と考えていた。

イツナは歯を食いしばり、猛スピードで国道を駆け抜ける。雨風を身体に受けながら、ただひたすら前を向いて走り続けた。

由比ヶ浜の海上では、ミチエが絶句している。戦いが始まった瞬間に雷撃を放ったのだが、まるで嘘のようにかき消されたのだ。一体、どうなっているのか。啞然として和樹を見ると、ミチエはさらに驚愕する事になった。

そこには、10人の和樹がいた。

「言ったでしょ。俺も強くなっただけ」

『な…何なの？ 分身の術でも身につけたの？』

「いえ、文珠で増えただけです。ただ、本当に同レベルの力を持つ分身は、10人までが今の所限界みたいですが」

何という出鱈目。

神魔を殺し尽くそうとした魔人が、同じ強さで10人。以前の自分なら絶望していただろう。しかし…今の自分ならば、勝てる。魔人ならば…相手が魔族ならば、勝てるのだ。その為に、今まで必死に作戦を練ってきた。

『いいわ。少しは楽しめそうじゃない』

ニヤリと笑うと、ミチエは両手を上げる。上空の雲が光り、和樹たちに向かって恐ろしい勢いで雷が放たれた。

ガアアアアアアンツ！

それは、本当に雷と言っているのだろうか。言うなれば、巨木……いや、滝と言っているのかもしれない。幅が約二十メートルはあるうかと言う雷の滝が和樹たちに放たれたのだ。これは、並みの神魔なら跡形も無く消し飛んでるのではないか。ミチエは、流石に無傷ではないだろうと踏んでいた。

…しかし。

和樹たちは無傷でそこにいた。

『な、なんで！？』

「そりゃ、皆で協力したからさ」

「タイミングさえ合えば、大抵の攻撃は避けられる」

「これがあるからな」

そう言って、和樹たちは手にした文珠を見せる。そこには『曲』や『護』、『耐』といった文字が。あの雷撃はねじ『曲』げられ、海に落ちたのだ。その衝撃を『耐』え、離れたひのめの守『護』も忘れない。連携プレーで雷を防ぎきっていた。

今の攻撃は、かなり強力な必殺技だった。が、こうまで完全に防がれると呆れて笑うしかない。しかしミチエは、今の防ぎ方で和樹の弱点を見抜いていた。

あまりにも、タイミング良く防いでいた。しかし和樹の言葉から、タイミングを合わせないと…そして文珠を使わないと防ぐのが難しい事も推測出来る。また、この連携の良さはいくら同じ存在とは言

えとっさに出来る事ではない。

(自立型ではなく、制御してるのね。なら、複数の雷で同時攻撃を繰り返していけばタイミングを狂わせるのはわけないわ)

ミチ工は邪悪な笑みを浮かべる。その姿に、和樹たちも気を引き締めた。やはり隊長。この程度で動じるわけではない。早速、こっちの弱点を見抜いたようだ。

和樹たちは、攻勢に出る事にした。まず単騎で攻め、それを二人が遠距離からのサイキックソーサーで援護する。その後ろで六人が六芒星を象った陣形を組み、強烈な靈波砲や防護結界を展開するという戦い方だ。ミチ工は和樹の攻撃をかわしながら何とか雷撃を撃とうとするが、狙いを定めて放つ事が出来ない。放った所で、結界でねじ曲げられるのだ。そして…

少し離れた所で全体を見渡している和樹が、ミチ工の動きを読んで分身たちに指示を送る。時には自ら靈気弾を放ち、ミチ工を翻弄した。

『ちょこまか煩い羽虫ね！ そんな攻撃効かないわよ！』

「その割に嫌がってるけどな！ 悪いがこのまま終わらせるぞ！」

単騎で刀を振るう和樹は思った。ミチ工はかなり強い。この人数で押して、持ちこたえているのだ。反撃までしてくる。中級神族どころか、上級クラスの力を持っているらしい。長引けばこちらが不利になるのは明白だ。だからこそ、なんとか早めに蹴りをつけないといけない。

「行くぞオラアアアア！」

和樹が叫ぶ。すると、それまで後方で援護していた和樹たち全員が、刀を手にミチエに飛びかかった！ 全員が全員、渾身の力を振り絞って刀に靈氣を乗せてミチエを切り裂く。

ズバツ！ グサツ！

ザツ！ ザシュツ！

和樹の攻撃は的確だ。ミチエは何とか全力で避けようとするも、次から次へと降り注ぐ和樹の剣撃になすすべがない。

『ぐつ、はやく、はやく結界を…っ！』

「何を企んでんのか知らないが、やらせねえ！」

腕や足を斬りとばされ、もはや身体を維持しているのがやっとの状態のミチエ。そんなミチエにとどめを刺そうと和樹が刀を振りかぶった時…

和樹は身体の異変に気づいた。

「ぐあっ…な、なんだコレ…！？」

何かのしかかってくるような重圧、そして、身体全体がギリギリと締め付けられて行く。分身たちは、何故か次々と消えてしまった。これは…！？

『ハア、ハア、なんとか間に合ったみたいね…』

「な、何しやがった!？」

和樹は言いながらも、大体見当がついていた。結界。自分の中の魔族因子が、強烈な負荷に悲鳴をあげている。

「結界よ。あなたの様な化け物相手に何の策も無しに戦いを挑むわけないでしょう? この台風は私の依り代であり、また魔方陣みたいなものなの。アナタみたいに分身を作って、その端々に散りばめて結界を張ったのよ。結構キツイでしょう? 魔族の身体で、この退魔結界は」

「ぐっ…、随分ベラベラと話してくれるな」

「ええ。知られた所で、アナタには何も出来ないでしょ? この台風は巨大よ。今から私の分身を探し出して叩くなんて、その身体では無理でしょう」

そこまで言つて、ミチエは高らかに笑いはじめた。  
「アハハハ、ざまあないわね横島君! あなたがルシオラなんかを選ぶからそんな目に遭うのよ! アナタの中のルシオラが、結局アナタの足を引っ張っている! 令子を選ばなかった報いを、今受けていると思いなさい!！」

和樹の目が、怒りに燃える。分かっている、この挑発は自分から冷静さを奪おうとしているという事を。しかし、それでも和樹は憤りを抑えられなかった。

ルシオラのおかげで、今の自分はある。ルシオラの言葉を支えに、立ち直りここまでやってこれたのだ。彼女を侮辱するのは、許せなかった。

「てめえ…!!」

『おお、怖い怖い。でも、ひのめの存在を忘れないで？ 今、それ以上力を出せば私はワザと結界を解くわよ。そしたら、この一帯は消し飛ぶでしょう。ひのめも例外ではないわ』

「くっ…！ 畜生…」

ミチエは、楽しくて仕方がない。ここまで綺麗に狙い通りに行くとは思ってなかったのだ。もう勝利は決まったも同然。今までの恨みつらみを、叩きつける時が来た。

『アナタには、私と同じ苦しみを味わって貰うわ。大切な人を、なすべなく殺されるといふ苦しみを…。しばらくそこで、大人しくしていなさい』

ミチエはそう言うと、身体を発光させる。猛スピードで陸へと飛んでいくと、道路に立つひのめの近くに降り立った。

「クソッ、ふざけるな！ 勝負が決まるまで手を出さない約束だっただろう！」

『決まったような物でしょ？ 悔しかったら止めてみせなさいな。…さあ、ひのめ。覚悟は出来てるかしら』

ミチエは、ひのめを見て微笑んだ。それは母のものではなく、ハンターとしての顔。ミチエにとってひのめはただの獲物でしかない。

ひのめは、怯まずに睨みつけた。こんなの、ママじゃない。だか

ら、何を言われても平気だ。

「覚悟なんて、しないもん。逃げ切ってみせるんだから！」

『うふふ…その歳で鬼ごっこも無いでしょ。大人しく殺されなさい』

ミチエが、右腕を高く上げる。来る！ ひのめは素早くバッグを広げると、中にあった文珠をすべてぶちまけた！

文珠に、『分』『身』と入れて。

『なっ、何！？ これは…』

そりゃ驚くだろう。

辺り一面、ひのめだらけなんだから。そして、それだけではない。

「……逃げ切ってみせるんだからね！」「……」

数十人というひのめが、蜘蛛の子を散らすかのように一斉に逃げ出したのだ。

『チツ…、やってくれるわね！ コラひのめ、待ちなさい！』

今更母親づらしても意味は無い。ひのめたちは「にゅふふふふー！」と言いながら走り去って行く。ミチエは素早く全てのひのめを補足すると、その動きを分析した。そして…

『馬鹿ね。一人だけ動きが速いわ。全部同じスピードじゃないと意味無いわよ』



すぐに本物を見つけ出した。ミチエは本物のひのめに狙いを定めると雷撃を放つ体勢に入る。他のひのめには興味も示さない。

だから、気づかなかった。

いつの間にか、分身のひのめたちが、近くに走り寄って来ていた事に。

「「「「ママーっ！」「」「」」

『えっ、何何、何なのよ！？』

片腕を上げ硬直状態に入った途端に、飛びついてくるひのめたち。訳も分からず動揺していると、ひのめたちは一斉に光りだした！

ピカッ！

『は？』

ドガアアアアアアアアンツ！

大爆発。

小さなクレーターが出来る程の威力の爆発を起こした。これは、ひのめがもらった全ての文珠の爆発である。分身に霊力を使って消耗していたとは言え、凄まじい威力。ミチエは…

『あの馬鹿娘がああああっ！』

身体の殆どを消し飛ばされ、現界もままならない状態となってい

た。これでは、ひのめを追うなんて無理だ。

『一旦、雲の中に戻って復元しないと……』

悔しそつにつぶやくと、ミチエはその場から姿を消すのだった。

その頃、必死で逃げていたひのめはと言つと。

「文珠一個10億円近いんだっけ……じゃあ、単純計算して……アハハハ、2000億円の逃避行だ……ひのめ爆弾コスト高すぎ」

せつかくもらった文珠を使い果たして、ちょっとブルーになっていた。

## 第六十四話 海上の戦いのはなし

東京の上空を、一人の女性が猛スピードで滑空している。雨ざらしとなっている身体は寒そうなボンデー姿、しかし寒いどころか羞恥で身体は熱くなっていた。

「死神さん、これどうにかなりませんか！ これだけ高い所を飛んでたら誰にも見られないとは思いますが…」

「し、仕方あるまい！ これは私一人で調整出来るものではないのだ！」

最近ではユリ子を指導するでもなく、偶に本業の仕事を除く以外は怠惰な毎日を送っていた死神。死神の東京出張所で上方落語のCDを聞いていた所、いきなりユリ子に呼び出されて慌てていた。久しぶりに変身したいと言われた時も、緊急の事とは知らず「そういう趣味は止した方がいい」と言われて怒られていた。

「しかし私が居ない間にそんな事になっていたとは…。ユリ子よ、あの横島を倒す程の相手だ。まともに戦おうとは思わない方がいい」

「分かってます。ただ、神社でジツとしてるのはイヤなんです！それに、イツナさんの事も…」

「現場に向かう、か…。よほど和樹を慕っているのだろうか」

死神には、イツナの正体など分からない。ただ、一目見た時から奇妙だと思っていた。妖怪であれば、種類にもよるが肉体と魂は基本的に分離は不可能だ。神族や魔族のように、魂と肉体はイコール

で結ばれる存在。しかしイヅナは魂と肉体が別々だった。まるで、他の妖怪に取り憑いているかのような、そんな感じを受けたのだ。

『イヅナという妖怪がどんな妖怪かは分からぬが、戦闘向きではないのは確かだろう。現場にいるオカルトGメンたちと合流して、捜索してもらおうが一番現実的だな』

「はい…。どうしちゃったんだろう、イヅナさん…。日陰さんも、心配してるのに…」

ユリ子はそうつぶやきながら、靈気の出力を増してスピードを上げた。早く現場について、イヅナを見つけないと。戦いに勝っても、イヅナが怪我をしては和樹も悲しむだろう。ユリ子は全身から靈力を放出しながら、乱気流をぶち破り空を駆けて行った。

由比ヶ浜から少し離れた高台に、大きなトラックやジープが駐車している。その車を風よけに、パイプの骨組みとシートを使って簡易の本部が設置されていた。そこにはオカルトGメンの精鋭と、出向してきたGSたち、逃げてきたひのめ、そしてヒヤクメの姿があった。

「まだか、ヒヤクメ君！ 和樹も何時までも保たないぞ！」

「分かってるのねー！ 今、必死で探してるのねー！」

西条の催促に、苛立ちながら答えるヒヤクメ。必死に心眼を使ってミチエの分身を探すが、猛烈な嵐に心眼が邪魔をされる。台風風にミチエの霊気が混じっているので、探索し辛いのだ。せめて、台風の勢力が弱まれば違ってくるのだが…

ヒヤクメの開いたノートパソコンのモニターには、和樹の姿が映っている。和樹は身体を苦しそうに丸めながら、空から降り注ぐ雷を必死に文珠で防いでいた。ミチエは身体の修復の為に台風の中心部に引きこもっているが、台風の絶大なエネルギーを使って修復以外にも分身の制御、そして和樹への攻撃を執拗に繰り返していた。

集まっているGSたちは、皆悲壮感を漂わせてモニターに見入っている。その時、西条の携帯電話の着信音が鳴った。

「こちらオカルトGメン本部西条、どうした…って、は！？ ドクターカオス！？」

その声に、何人かの人間が反応する。ドクターカオス。生きた伝説とも呼ばれる人物が、何故？

「え、いやヒヤクメ君なら今居ますが…。はい、はい、分かりました！」

そう言うてから、西条はヒヤクメに電話を渡す。

「君に急用らしい」

「私に…？」

少し眉をひそめながら電話を受け取ったヒヤクメは、スピーカーから流れてくるバカデカい声に一瞬怯みながらも、その内容に目を見開いた。

「分身を見つけた!？」

荒れ狂う海上を、一台のクルーザーが疾走する。その舵を操作するのは人造人間にして魔科学の結晶、マリア。そして甲板に出て仁王立ちをする老人こそ、稀代の錬金術師や西洋の魔王などの異名で知られるドクターカオスである。カオスは新開発したサーチスコープを装着して、海上のある一点を見つめていた。

「このドクターカオス、どれだけ靈気の嵐でカムフラージュされようとターゲットを逃す事などあり得んわ! マリア、速度をあげい  
!」

「イエス、ドクターカオス」

クルーザーはスピードを上げて突き進む。時折波がカオスの顔にかかり、カオスは若干むせた。

「ゲホツ、ゲホツ!...よし、次はセイレーン! 結界をはれい!」

「待ってました、ダーリン」

カオスの声に反応したのは、なんとセイレーンである。クルーザーの一室に控えていたセイレーンは、手元の操作盤をいじるとスピ

「カーから大音量で音楽を流し始める。そして、その美しい歌声を嵐の海へと響きわたらせた。」

『大好きなあ、あなたにー！ ラブラブラブタイプーン！』

「なんじゃその歌はーっ!？」

何気にスピーカーカーが近くにあつて、鼓膜から血を流しながら抗議するカオス。しかし、セイレーンはいたつて真面目である。

『あなたを想つて歌うからあ、いつもの倍のパワーがでるのー!』

確かに凄まじい結界が展開されている。セイレーンの特殊能力、歌唱結界。歌つてる間は、結界内のみ、同じ歌以外の攻撃を無効化してしまうのだ。最強の結界を展開しながら進む先は、ミチエの分身。カオスは顔中海水と雨でびしょ濡れにし、耳から血を流し、ついでに鼻水を流しながらも堂々と船の先に立って叫んだ。

「さあ覚悟せい、異世界の魔女よ！ ワシが魔王、ドクターカオスじゃあああつ!」

雄々しく、力強く…

BGMがラブソングでなければ、確にかっこよかったかもしれない。

芦優太郎と共に魔界に同行していたカオスは、公平サタンの呼び出しに

応じて人間界へと先に戻っていた。そして、敵として現れた美神美智恵の襲撃に備えてセイレーンの住む海の家に滞在していたのだ。台風の進路からいって、この鎌倉の海を通過するのは目に見えていた。和樹の戦いの有無に関わらず、この地でカオスはミチエを止めるつもりでいたのだ。

しかし、台風の上陸直前でおかしな事になった。和樹との一騎打ちが約束され、現場には美神ひのめまで来る。予定が狂いまくったカオスは、仕方なく経緯を見守る事にした。その間、カオスは周囲の搜索をマリアに指示していた。海上の幾つかの地点で、奇妙な靈気を察知したからだ。カオスはカオスで、陸上のオカルトGメンの通信を傍受して地上の動きを確認していた。

マリアがミチエの一部と思われる靈体を確認し、和樹とミチエの一騎打ちの約束が反故となった事を傍受した通信で知ると、カオスは自ら戦いに打って出る事にした。先ほどヒヤクメによこした連絡はミチエの分身を見つけたのでこちらで始末する、という内容だった。一体でも始末出来れば和樹の受けている靈圧は弱まるし、靈気の風も勢いが落ちるのだ。その状態なら、ヒヤクメも心眼をフルに活用出来るようになるかと踏んでいた。

『凜々しいあなたの横顔にい、届け私の投げキッスー』

「だから恥ずかしい歌詞をどうにかせんかい！」

「あ、すみマセン・手元・狂いました」

ザッパーンッ！

「ゲーホッ、ゲホッ!？」



何とも緊張感の無い三人である。クルーザーは勢いをそのままに、ミチエの分身へと迫っていた。その距離があと三百メートルという所まで近づくと、ミチエの分身はやっとカオスたちの存在に気づいた。

「あれは…何？」

そりゃ分からないだろう。

大音量で変な歌を流したクルーザー、その上にはびしょ濡れになって耳から血を流した老人が立っているのだ。正気の沙汰とは思えない。しばらく唾然とするミチエの分身。しかし次の瞬間、驚愕の表情を浮かべた。

「ドクターカオス！？」

「うわははは！ いかにもワシはドクターカオス！ 魔女よ、神妙にお縄を頂戴するのじゃあああつ！」

時代劇の見過ぎだ。

カオスは懐から何やら取り出すと、ミチエの分身に向かって投げつけた。距離にして数十メートル先。ミチエは難なくそれを稲妻で撃ち落とし…

ピカッ！

ズガアアアアアンツ！

『きゃあああああつ!?!』

分身は身体の三分の一を吹き飛ばされる。何が起きたのか分からず、混乱していた。

「ふっふっふ! どうじゃ、ワシ特性の浸食爆弾は! アストラル体に対して最大の力を発揮する爆弾じゃが、中々効くじやろう! 霊基崩壊を起こす毒素入りじゃから、もう本体にも戻れんぞ!」

『グ…ウアアア…ドクター、カオ…ス…! 何故、ここ、に…!』

クルーザーは速度を落とし、結界に分身を入れない距離で止まった。分身にはまだ結界の存在を知られていない。その絡繰りに気づく事はないかもしれない、とマリアは考えた。

「追撃を、ドクター・カオス。私が・攻撃に・でましようか」

「いや、銃弾やロケットパンチは効かんじやろう。大丈夫、ワシの魔法具で仕留められるわい」

『舐めないで、欲しい…わね…』

分身は、怒りに満ちた表情でカオスを睨みつける。身体は徐々に崩壊してきているが、無理矢理周囲の風から霊力を奪って身体を維持している。風の勢いが、若干弱まってきた。

「行くぞ魔女よ、爆弾なら山ほどあるからのう!」

『ふん、次こそ撃ち落としてみせるわ!』

分身には、本体のような分析能力は無いらしい。何故、先ほどの爆発でカオスがダメージを受けなかったのか…何故、自分ばかりがダメージを受けたのか本当に分からないようだった。

カオスの爆弾はことごとく二人の間で爆発し、分身だけがダメージを食らい続けた。

ドガアアアンツ！

ボガアアアンツ！

ズガアアアンツ！

『ぐあああつ！ な、何故！？ 何故私ばかり！？』

「日頃の行いの違いじゃろうよ」

分身は、いくら何でもこれはおかしいと気づく。ドクターカオスはまるで無傷、自分はもう腕や足を維持するだけで精一杯なのだ。この違いは何が原因なのか…

そう思った、その時。

スピーカーから、「はぶっ…！？」という奇妙な声が聞こえた。

「ど、どうしたんじゃセイレーン！」

『うー、舌嚙んじゃった…。ラップに挑戦してみたけどうまく行かなかったわ…』

「馬鹿もん、早く歌わんか！ 結界が切れてしもつとるじゃる！…ハッ!?」

ニタア、と分身が笑う。

そうか、セイレーンの結界…。

前の世界で、令子と食事をした時に笑い話で出たのを覚えている。歌以外通用しない奇妙な結界を張る妖怪。こんな使い方があったとは…。しかし、それも終わった。結界の解けた今なら、もう簡単に殺せる！

『サヨナラ、ドクターカオス！ 潔く散りなさい!』

「う、うわああああっ!!」

片手を上げる分身、慌てるカオス。走り寄るマリアも間に合わない、最悪な状況。セイレーンも船室から出ようとするが、もう完全に出遅れていた。

そんな中。

爆音やら雷やら音楽やらで、誰にも気づかれる事なく。一台の水バイクが猛スピードで突っ込んで来ていた。

荒れ狂う波の上を器用に跳ねながら分身に接近すると、一際大きな波を使って大ジャンプをする。空中を舞い、分身とカオスの間に割り込むと、片腕を分身の眼前に突き出して笑った。

「くたばれ、雷ババア」

ズガアアアアアンツ！！

それは、白い閃光。

避ける事も出来ずに、分身は頭部を吹き飛ばされた。それまでかろうじて身体を維持していた霊気は、行き場を失って空中を霧散していった。

ザッパーンツ！

水上バイクが水しぶきを上げて、着水する。その運転している女性を目にしたカオスは、驚きの声を上げた。

「メ、メフィスト！？ お主か、今のは！」

「ボケジジイ、危なかったじゃない！ まあさっさと冥土に行ってもそれはそれで面白かったかもね」

亜麻色の髪をなびかせた、ウェットスーツの女性。メフィストがそこにいた。

「メフィスト、今のは何じゃ！？ エネルギー結晶体を失ったお主に出来る芸当じゃあるまい！」

「へ？…ああ、それならまた貰ったわよ？」

メフィストは、しれっとした顔で言う。混乱しっぱなしのカオス

を見て、ニヤリと笑った。

「あんたたちが、試作品で作った方の結晶体よ。リリースに言って、譲ってもらったの。あの雷ババアに仕返しするには、パワー不足だったからね」

何という事だろう。

確かに試作品は実験にしか使わず、用が済んだら遊ばせていたが……まさかそれをまた取り込むとは。製作者でさえ忘れていた存在をよくも覚えていたものだ。というか、リリースは金庫を勝手に開けたのか。カオスは複雑な顔をした。しかし、結果的にはこれで良かったのだろう。

「すまんのう、メフィスト。助かった」

「やめてよ、礼なんて。あのババアをぶちのめすのが目的だったんだから」

そう言つと、メフィストは水上バイクを岸に向けるとカオスたちに叫んだ。

「さあ、風も弱まったし他の分身もぶちのめしに行くわよ！ 私達に喧嘩売るって事がどれだけ恐ろしい事か思い知らせてやるわ！」

威勢良く声をあげるメフィストは、やはり魔界の一大勢力を率いていただけある。それほど、声に力があつた。カオスたちは互いに顔を見合わせて笑いあう。一斉に「おう！」というと、激走を始める水上バイクに追いつくと、クルーザーを発進させた。

「発見！ 見つけたのねー！！」

作戦本部のテントで、ヒヤクメが叫ぶ。鎌倉付近の地図を壁に照らし出すと、指示棒を出して該当箇所を叩いた。

「分身は残り三体！ ここと、ここと、ここなのねー！」

その場所を見た西条たちは焦りの表情を浮かべる。遠い。一つは逗子の鮫島付近だから何とかなるが、もう一カ所は大磯の浜辺。かなり離れているのだ。そして最後は大船。大船観音付近という事は、町中での戦闘になるかもしれない。

「西条はん、大磯には僕が行くわ」

まず言い出したのは鬼道だった。

「あそこ、今はウチの事務所の新人が研修しとるから彼らと連携とって戦うわ」

「新人！？ …いや、危なくないか！？」

西条の言葉に、鬼道は頷く。

「そら危ないよ。けど、その新人でGS試験上位の雪之丞と勘九郎やからな。簡単には死なん奴らやから、大丈夫や」

こんな形で巻き込むのは本意だが、仕方がない。今は一刻の猶予も無いのだ。鬼道はすぐに携帯電話で雪之丞たちと連絡を取り始め

た。

次に申し出たのは小笠原エミだった。逗子の方の鮫島を希望した。「あそこは私も何度か行って土地勘あるし、タイガーも最近までいた場所だから」

「ワツシも慣れた土地ですケン、戦うには一番適しとるんジャー」

それなら大丈夫か。西条はエミたちに任せる事にした。勿論、Gメンの精鋭もメンバーにつける。いくらタイガーが強いとはいえ、相手はあのミチエの分身。これでも不安なくらいだが、残った唐巢神父たちには大船に向かってもらう予定なので仕方なかった。

そして、最後に唐巢神父。大船に向かうようにお願いしようとした時、背後でヒヤクメが悲鳴にも似た声をあげた。

「な、なんでもう戦ってるのねー!?!」

「ど、どうしたんだヒヤクメ君!」

慌てて駆け寄る西条。本部に残っている人間は皆ヒヤクメのノートパソコンのモニターに集まり、その映像を見て…

絶句した。

荒れ狂う空、稲光が点滅している。そんな中戦う二人の影。一人はミチエの分身であり、もう一人は…

吉村ユリ子であった。



天矢神社には現在、日陰とタマモがいる。二人は互いに今までの経緯を報告しあいながら、和樹たちの帰りを待ち続けていた。そこに、公平が帰ってくる。二人はすぐにユリ子が神社を出た事を告げる。案の定、公平は慌てた。

「な、な、何でだ！？　ユリ子ちゃんはまともに戦えないだろう！」

「仕方ないでしょ、あのままじゃ壊れちゃうくらい思いつめてたんだから！　なんか死神まで憑いてるみたいだから簡単には死なないでしょ」

「簡単にはつて、君なあ！」

その言い方は余りに無責任じゃないかと憤ると、日陰が慌てて止めに入った。

「ごめんなさい、私も止めなかったんです！　タマモさんだけが悪いんじゃないんです！」

涙を流しながらも、必死でタマモを庇う日陰。彼女を見守ってきた公平は、こう来られると引き下がるしかない。公平は日陰にとことん甘いのだ。

「しかしな…今回はかりは相手が悪すぎる…。戦いに巻き込まれたら、かなり危険だぞ」

「分かってるわよ。だから、さつき知り合いに電話しといたわ。神社から鎌倉に向かってきわどい格好した女が飛んで行くからって。放っておくと、和樹取られちゃうよって」

「なに？」

公平は戸惑う。タマモの知り合いは少ない。気軽に連絡出来て、和樹が好きな人物といえば…

「ば、馬鹿！ あの子にそう言うジョークは洒落にならん！」

そう言う公平に、タマモはため息をついて言った。

「あのね。アイツはもう精神的にも安定してるから大丈夫よ。今回の件、巻き込みたくないから黙ってたんだらうけど、逆効果だからね。アイツ、今回の件で仲間外れにされて凄く怒ってたから。一回くらい噛みつかれるかもしれないけど自業自得だからね」

ああ、なんてこった。

前の世界で殺伐とした生活を送ってきた彼女だから、今回の件に巻き込みたくなかったのだが。まあ、確かに自分は過保護過ぎるかもしれないな、と公平は反省していた。しかし、これならユリ子に関しては安心だろう。途中で合流してくれたら、やられる確率は低くなるはずだ。

公平はそう思いながらも、未だ不安を隠せないでいた。



## 第六十五話 駆けつける者たちのはなし

ユリ子は、もしかしたら自分はとても運が悪いのではないかと思っていた。早く鎌倉へ向かわなきゃ、と必死に飛んでいたら、誰かの背中に追突してしまったのだ。両手を上げて何やら熱心に呪文らしきものを口にしていたその人物は苛立ちながら振り向いて、そして驚きの声を上げた。

『おキ又ちゃん！？』

「美智恵さん！？」

しばらく固まる二人。有り得ない遭遇。互いに混乱し：先に正気に戻ったのはユリ子だった。美智恵がこんな場所に居るはずがない。第一、あの人は飛べないじゃないか。この人は、あの異世界のミチエだ！

「死神さん、防護結界を！」

『分かってる！』

飛び退きながら、ユリ子は死神に指示を出す。身体を、金色の神気が覆った。

『あなた：おキ又ちゃんじゃないの？』

ミチエの分身は未だに理解していない。こつちの世界のおキ又ちゃんの事はまだ確認していないが、空を飛んでいるという事は幽霊？ しかし身に纏う霊気には神気が混じっているし、やけに露出の

激しい服を着ているのも変だ。

ただ、分かる事が二つある。

手にした鎌はかなり危険な武器だという事と、その鎌をこちらに向けている時点で敵だという事だ。

『全く、この世界は偽物だらけなようね。特にあなたはおキヌちゃんに似ても似つかない。ただの娼婦じゃない、それじゃ』

「し、死神さん、あんな事言ってますがっ！」

『気にするな、年増に何を言われても鼻で笑い飛ばせ』

死神が結構酷い事を言った。

『殺す…殺すわ！ 若いからっていい気にならない事ね！』

どうやらこの分身は頭が悪いようだ。いや、この分身に限らず、ミチエの分身は一樣に劣化している。それはエネルギーの殆どを本体が使っている事が関係しているようだ。

怒り狂った分身は、結界を張る事も忘れ攻撃を仕掛けてきた。身体を光らせると、雲から稲妻を呼び寄せる。

『死になさい！』

腕を振り上げ、ユリ子に向かって無数の稲妻を放った。一つ一つは細いが、数はかなりのものだ。ユリ子本来の力では、太刀打ち不可能な攻撃だった。

『ユリ子、しばらく身体を借りるぞ』

「えっ!？」

一瞬、ユリ子の身体からガクツと力が抜ける。その次の瞬間、先ほどとはまるで違った力強い眼差しとなったユリ子は鎌を分身に向けて叫んだ。

「死骨結界餓紗髑髏乃檻!!」

ガチツ…

ガチツ、ガチツ…

ガチツ、ガチツ、ガチツ、ガチツ、ガチツ、ガチツ、ガチツ、ガチツ、ガチツ、ガチツ、ガチツ!

奇妙な音を立て、周囲を骨が覆って行く。それは、巨大な髑髏の群れ。無数の髑髏たちが、稲妻を食らい、雨風に混じる霊気を食らい、その何も映さない伽藍の眼を分身へと向けた。

『な、な、何よこれは!？』

「私に会ってしまったのは運が無かったな、死霊よ」

ユリ子の口から、死神の声が。完全に身体を支配していた。

「貴様が死者の魂である事は一目瞭然だ。そして私は死神、貴様のような死霊の魂を刈るエキスパートよ。確かに貴様は強いが、本質が死霊であるなら私の攻撃を防ぐ事は出来ない」

そして、ニヤリと笑った。

「さあ覚悟しろ。煉獄が貴様を待っているぞ」

『ウ…ウアアアアアッ！』

分身が、狂ったように稲妻を連発する。しかし、そのすべてが立ちふさがった髑髏に食われてしまった。

『ウ…ウア…』

愕然とする分身。勝てない。相性が悪すぎる。どうやったらこの相手に勝てるのか…

その時、分身は気づいた。

確かに、自分の攻撃は通じないかもしれない。しかし、これが自分以外の物による攻撃なら。風を操り、木や看板か何かをぶつければ、周りを囲っている連中をどうにか出来ないだろうか。見た所、髑髏たちは檻となる為に物質化しているようだ。これなら、何とかならないか…

そして、分身は見つけた。嵐の中、風に飛ばされた一枚の大きな看板。分身は力を振り絞って風を操り、それを髑髏の群れへと向かわせた。

「終わりだ。食らいつくせ！」

髑髏たちが、一斉に分身に襲いかかる。恐怖に固まる分身、しかしその目は諦めていない。

(早く!早く!)

髑髏の口が迫ってきた、その瞬間。

バキバキバキッ!

「何!?!」

一枚の看板が、髑髏の群れに飛び込んできた。乱れる陣形、その隙を分身が見逃すはずがない。

『ウワアアアアッ!』

「しまった!」

全力で、崩れた所に突っ込む分身。髑髏たちの攻撃をかいくぐり、檻から脱出してみせた。

『い、一旦退かないと! カもだいぶ食われたわ!』

「逃がさん!」

嵐の中を、分身が飛び去る。それを逃すまいと、ユリ子も猛スピードでそれを追撃した。

嵐の空に、ドッグファイトが繰り広げられる。逃げる分身は靈気



に限界が来ているのか、中々スピードが出ない。しかし追撃するユリ子も、それまでかなりの霊気を放出していたせいかさピードが落ちてきていた。あの髑髏たちが食らった霊気は冥府に直接送られる為、自分の力にする事は出来ないのだ。むしろ、召喚にかなり霊気を使ってしまっていた。さらに…

ガガガガガガガガッ！

持っている鎌から発射される霊気弾が、ユリ子の霊気を消耗させる。数発ほど命中したが、決定打にはなっていなかった。

「くっ…、時間の限界か！ ユリ子、退くぞ！」

『待って、もう少しで倒せ…』

そこまで言った所で、タイムリミットが来た。ユリ子の身体は死神の加護を失う。地上役五十メートルという高さで飛行能力を失ったユリ子は、そのまま落下を始めた。

「えっ、えっ、嘘！？ このっ…！」

残り少ない霊気を放出して、落下地点を調整する。せめて木の上なら！ 空中で四苦八苦していると、目の端に何やら白い影が飛び込んで来た。何だ？

ガシッ！

ユリ子の落下が、止まる。どうやら、誰かに身体を抱えられているようだ。ユリ子が見上げると、そこには。

どこかで見たとような女性がいた。なんだかジト目で、ユリ子を見

ている。

「弱いでゴザルな。弱々でゴザル」

その口調には、思いきり聞き覚えがあった。が、何だか印象が違  
う。こんなに大人な体型だったのだろうか？

「あの…シロさん、ですよね？」

恐る恐る聞くユリ子。しかし女性は首を横に振った。

「今の拙者はシロであってシロでござらん。まあ見てるでゴザルよ、  
すぐに終わらせるでゴザル」

そう言って、ユリ子を地上に下ろす。去り際、意地悪そうな顔を  
してユリ子に…

「しかし、その格好どうにかしないと捕まるでゴザルよ。警察沙汰  
までフォローは出来ないでゴザル」

「え…あ、キャアアアアアッ!？」

何故か未だに死神コスチュームのユリ子にそう言葉を残して、空  
へと飛びさって行った。

犬塚シロは怒っていた。

仲間外れは嫌だし、和樹のピンチに傍に居られないのはもっと嫌だ。過保護に扱われるのも、もう沢山だった。

何のために強くなったのか。それは、和樹：横島忠夫の傍に居る為だったのだ。それなのに、公平は黙ってるし和樹だって声をかけてくれなかった。それどころか、タマモ情報によるとあのランジェリー姿から目を逸らすくせに、あの試験の時のユリ子のボンテージ姿は爛々とした目で見ていたらしい。

もう、怒っていいはずだ。

そう、これは和樹に抗議に行くのだ。そろそろ自分にも優しくしろ、と。だから…

だから、無事でいてくれないと困る。

ちゃんと元気な姿を見せてくれないと、怒るに怒れない。だからこそ、早く駆けつけて敵を叩き潰さなければならぬ。

その為に、シロは血の契約を交わした。人狼の里の皆に協力してもらい、里に伝わる巨大な魔方陣を描き、月の女神アルテミスを召喚して契約を結んだのだ。前の世界で既に一度女神と融合して、その巨大な力に耐えられなかったシロ。しかし今回はすんなりとその身に女神を宿す事が出来ていた。シロは、かなり成長しているのだ。

シロは現在、横島を悩殺したセクシーボディとなっている。これなら和樹も振り向いて…いや、どんな敵にも負けないとシロは確信していた。そして、今回の敵、ユリ子…ではなくミチエの分身を見つけた。満身創痍のミチエ。シロは美神美智恵の怖さを良く知

っている為油断などするハズもなかった。

必死に空を飛び、台風の中心部へと向かう分身。それを、シロは恐ろしいスピードで猛追する。

「ま・つ・で・ゴ・ザ・ル・よー!!」

『なっ…、何なのよ!?!』

後方を振り返り絶句する分身。何とか逃げ切れたと思ったら、新手が現れたのだ。

周辺の雲から靈気の補給は期待出来ない。先ほどの髑髏たちが、殆ど食い尽くしてしまったのだ。もはやこの付近の雲はただの雨雲になってしまっている。これは…非常に不味い。

『けどこの子は死神じゃないから、雷撃が効くハズ!』

苦し紛れに稲妻を放つ。しかし、シロは腰の刀を抜くと…

ズバアアアアンツ!

稲妻を弾いてみせた。全くの無傷。有り得ない。

『ど、どっとなってるの!?!』

「知る必要は無いでゴザル」

シロは相手を睨みつけたまま急接近する。手に持った刀に靈気を漲らせた。その刀を見た時…分身は、絶望の表情を浮かべる。

『や、八房…まさか、アナタ!?!』

「久しぶりでゴザル、ミチ工殿。ついでに、サヨナラ。先生を苦しめた事、地獄の底で後悔してるがいいでゴザル」

刀に注ぎ込まれた靈気が膨らむ。それはもう刀と言うより巨大な壁。あんまりな光景に、言葉を失う。

「たあああああぁあつ！」

シロが巨大な靈気の塊と化した八房を振るう。光が分身を包み込み、その中で何度か分身の身体が跳ねたかと思うと…

ドガアアアアアアンツ！！

大爆発を引き起こした。

それは、凄まじい規模の爆発。周囲の雨雲を消し飛ばす程の威力をもっていた。分身は跡形も無く消え去り、靈基の残り香すら残さなかった。町の遙か上空で戦っていたから良かったものの、もし町中で戦っていたら…ゾツとする威力だ。

「フン、八房を使うまでも無かったでゴザルな。ここまで弱いという事は、あれは本人では無いのでござろうか…」

八房を鞘にしまってから、シロはつまらなさそうに呟く。そして、自分の飛んで来た方向へと振り返りニヤリと笑った。

「ま、とりあえずユリ子殿を拾って行かねば。後でタマ王がうるさいでゴザルからな。そして…出来れば恩を売ってユリ子殿にあのエロエロなファッションセンスを伝授してもらおうでゴザルよ」

今回の事を交渉材料に、和樹を悩殺する術を手に入れるつもりだった。今の自分ならば…もしかしたら、もしかするかもしれない！

期待に胸を膨らませるシロ。しかし尻尾を振って興奮する所は未だに幼さが残っていた。

由比ヶ浜から離れた大磯のとあるホテルでは、雪之丞たちが昼食をとっていた。六道女学院の生徒は、合宿を終えて帰っている。雪之丞たちは、何故か居残りをさせられていた。

「何だかぬるい合宿だったぜ。7月の合宿は小間波海岸だったか？あつちじゃ化け物だらけで楽しいらしいぜ」

「あんだ、こつちですら危なかったじゃないの」

雪之丞の言葉に突っ込みを入れながら、勘九郎は相変わらずハンバーガーを口にする。大食漢の二人の為に、小鳩はかなりの数のハンバーガーを作っていた。

二人が話しているのは、六女の合宿の事である。7月は海開きに向けての悪霊や妖怪退治で、六道の伝統行事的色合いが強い。9月の今回の合宿は、海難事故で亡くなった霊たちを成仏させる為の戦いという感じで、意味合いが違っていた。規模はこちらの方が小さいのだ。ただ、年によっては凶悪な妖怪が現れるので油断は出来ないのだが。

今回は、放浪岬という妖怪が出た。海で亡くなった人の変化で、夥しい数の怨霊を引き連れて攻めて来たが、雪之丞と勘九郎ですべて退治してみせたのだ。

「でも、格好良かったですよ、お二人とも」

小鳩がそう言うと、雪之丞は照れて頭を掻いた。

「そ、そうか？ まあ、そう言ってもらえっと嬉しいけどな」

「雪之丞、鼻の下伸びてるわよ」

勘九郎の指摘も耳に入らないようだ。雪之丞は上機嫌で、次のハンバーガーに手を伸ばす。その時、小鳩は不思議な顔をした。

あんな包装紙、使ったかしら？

見ると、雪之丞のそばには貧がいて、何やらハンバーガーをすり替えていた。え、何で？ 小鳩がそう聞こうとした時：事件は起きた。

ハンバーガーを大きな口で頬張った雪之丞が、奇声をあげたのだ。

「うおほあああああつ!?!」

それは、獣のような声。若干疑問系だったのが、また気味が悪い。

「び、貧ちゃん何を食べさせたの!?!」

『いや、ワイも小鳩の真似してハンバーガー作ってみたから試しに食べさせてみたんやけど…!』

「なあに、このハンバーガー…って、臭っ!」

勘九郎は思わず鼻を押さえた。雪之丞の手にしたハンバーガーの中には、アンコまみれになったシメサバが。毒々しいソースまみれとなっていた。

『福神特製シメサババーガーや。他、適当にうまそうなもんぶち込んだんやけど…あれ、ユツキーどないしたん。白目剥いとる』

「きゃああああつ! 幽体離脱してる!? 雪之丞さん、戻って来て下さーい!」

「……………」

勘九郎は思った。

強靱な胃袋を持つ雪之丞を食中りさせるシメサババーガーは、一級品の暗殺道具になりはしないか、と。



空中を、ふわふわと飛ぶ。

雪之丞は、不思議な多幸福感に包まれていた。このまま、どこまでも高く昇って…

「いや、ギャグで死ぬなんてねえから」

意識をとり戻した。貧め、なんて物食べさせやがる！しかしどうやって戻ったものか。そんな事を考えていたら、後頭部に何やら柔らかいものが当たった。

むにゅん

『あんっ』

なんだ？ 雪之丞が振り返ると、そこには…

美神美智恵がいた。

「あ、あんた！？」

『雪之丞君！？』

なんとという出会い。

雪之丞は、ホテルの上空で結界を張るミチエの分身にぶつかってしまったのだ。その、巨大な胸に。

「で、デカい！ ママに似ている！」

『アナタのママに一度会ってみたいわね…』

しらけながらも、分身は焦っていた。何故、ここに雪之丞が。それも、死んでるし。

しかし、次の瞬間雪之丞は猛スピードで地上へと引き戻されて行った。啞然とする分身。雪之丞は…

「いや、あの、もう少し見ていたかった！」

アホな事を言いながらホテルの中に吸い込まれて行った。

『…一体、何なの？』

ワケが分からない。分身はただ困惑の表情を浮かべて雪之丞の消えたホテルを見下ろしていた。

身体に戻った雪之丞は、泣きついてくる小鳩と貧にまず戸惑い、どさくさに紛れて人工呼吸をかまそうとしてきた勘九郎を殴った所で平常心に戻った。

「おい、勘九郎！ 出やがった、美神美智恵の偽者だ！…って、何寝てやがる！」

「あ、あなたが殴り飛ばしたんじゃない…。偽者？ ああ、雨の日に出るってアレ？」

そういえばそんな話もあったなあと勘九郎は殴られた顎をさすりながら立ち上がった。

「で、どこ？」

「空だ！」

雪之丞は得意気に言った。そして、勘九郎に叩かれた。

「アホー！ 私達飛べないでしょー！ どうやって戦うのよー！」

「き、気合いで何とかなるだろ？」

「ならないわよ、どこの少年漫画の話よそれは！」

ちなみにサンデーも立派な少年漫画誌である。

そんな言い争いをしながらも、勘九郎は仕方なく雪之丞についてホテルを出る。小鳩と貧にはホテルの外に出るなと言ってから、外に出て上空を見上げた。

真つ黒な雲、吹きすさぶ風と雨の中、バチバチと放電するミチエの分身が、浮かんでいる。勘九郎は忌々しくそれを見上げると、どうすれば撃退出来るか考えた。霊気弾は届くだろうか。霊光舞踏術を使いたいが、こつまで風が強いと狙いが狂うかもしれない…。

「いくら何でも、高すぎるわね。あれじゃよく見えないわ。…雪之丞、あんたは見える？」

「ああ、黒だ」

「黒…？ 雨雲なんて見なくていいのよ」

「いや、パンツ」

ビシャアアアアアッ！

空から雷が。小さいものだったが、雪之丞に直撃した。

「バカ！ 誰が下着見ろって言ったのよ！」

「仕方ねーだろ、目に入ったんだから！ って、良く見たら向こうもこっちに気づいてるじゃねーか！」

ビシャアアアアッ！

ビシャアアアアッ！

小さな雷が、雪之丞たちに降り注ぐ。魔装術を展開した雪之丞と、靈気の球を作った勘九郎は何とか雷を避けて逃げ回る。何とも滑稽だった。

『このっ、このっ！ とんだエロガキだわね！』

分身は、逃げ惑う雪之丞たちに稲妻を放つ。その威力は弱く、狙いも中々定まらない。

『何故！？ 雲の中の靈気が少なくなつて来てる！？』

分身は焦っていた。先ほどから、結界がどんどん弱くなっているのだ。そして、雲の靈気もまるで無くなってきた。

その理由の一つは、先ほどの死神の放った髑髏たち。思いのほか大量の靈気を食らっていたようだ。そして、もう一つは…ミチ工本体の復元と和樹への攻撃で、台風内のエネルギーがかなり少なくなってきた。それは天候にも影響してきており、段々と雨風は弱まってきた。

「勘九郎、これじゃ埒が開かねえ！俺がはじくから、お前は靈気弾で攻撃しろ！」

「分かったわ！」

雪之丞は、迫り来る稲妻を受ける為に、必死で魔装術を強化する。強化しながら、今日はやけに魔装術がパワフルだと感じていた。というも…

ズガアアンツ！

「…あんま、ダメージねえな。雷って、当たったら死ぬだろ普通…」

本来なら、死んでしまうくらいの威力の筈なのに、魔装術の鎧で簡単にはじいてしまう。とはいえ、やはり多少は痺れてくるので受け続けるのは危険だ。

「勘九郎、早く！」

「分かってるわよ！…それっ！」

狙いを定めて、靈気弾を発射する勘九郎。その大きさはかなり巨大だった。先日の悪霊戦ではこの巨大な靈気弾でかなりの数を始末していた。が、どうやら分身には効かないらしい。

『フンッ！』

バシッ！

簡単に弾き返された。

「あらら。ごめんなさい雪之丞、無理だわアレじゃ」

「か、簡単に諦めんじゃねえ！ 根性みせろ！」

「とは言ってもねえ…」

規格外の強さなのだ。あの靈気弾は、下手すれば大きなビルを崩壊させるくらいの威力がある。だからこそ、こうした周囲に何も無い場所でしか使えない技だった。それをフルパワーで繰り出してこれである。もうどうしようもない。

「チッ…俺にもデカイ靈気弾を撃てたら…」

悔しそうに齒噛みする雪之丞。接近戦メインに鍛えて来た為、靈気弾の扱いは苦手だった。しかし…何だか、今日はうまくいきそうな気がする。何故かは知らないが、やたらと力が漲っているのだ。

ゴオオオオオッ！

試しに、右腕に靈気を集中させる。すると、強烈なエネルギーが渦を巻いた。すぐ後ろにいた勘九郎は、その勢いにひっくり返りそうになった。

「雪之丞、それは!？」

「分かんねえ! けど、これなら遠くまで飛ばせそうだ!」

今日はきつと調子がいいのだろう。難しい事を考えるのはやめて、雪之丞は空に向かって右腕を突き上げた。奇妙な言葉を叫びながら…

「海老ラ・ストリーム!」

「そのネタまだ使うの!？」

グオオオツ! エネルギーの塊が、空へと放たれる。雪之丞は気づいていないが、そのエネルギー弾は靈力だけでなく魔力をも内包していた。それは凄まじいスピードで分身に迫ると…

ドガアアアアツ!

『きゃあああああつ!』

足に直撃した。

『ぐぬぬぬぬ…何であの子がこんな力を…』

焦りの表情を浮かべて見下ろす分身。ホテルの前の砂浜では、雪之丞と勘九郎が笑っていた。腹立たしさを感じながら、雷撃の準備に入ろうとすると、視界の端に奇妙な影を捕らえる。海の上を、白い水しぶきが線となってこちらに走って来ていた。

『…何?』

視線を移して良く見ると…

『…っ!? あの子は、偽者! どうしてここに!?!?』

水上バイクに乗って海面を疾走するメフィストの姿があった。



## 第六十六話 死霊の風のはなし

由比ヶ浜の沖に、雷鳴が轟く。稲光は周囲を白く照らし、幾千もの光の槍を走らせる。それを、和樹は必死に防ぎ続けていた。

『何故！？ 何故そんな身体で耐えられるの！？』

空の向こうから、ミチエの声が聞こえて来た。その声は沈着冷静が売りの美神美智恵の物とは思えないくらい動揺している。

和樹は、血を吐き出しながらニヤリと笑ってみせた。

「俺の中のルシオラが言うんだよ。諦めるなつて、な…」

これまで、凄まじい数の雷撃を受けて来た。その全てが、10000マイル以上の霊的エネルギーを内包していたのだ。防ぎきる事のできる者など、神界魔界でも最上級クラスの化け物たちくらいである。幾ら和樹が規格外の強さを持っているとは言え、とうに限界を迎えていてもおかしくはない。

しかし、和樹は倒れなかった。

ここで倒れたら…皆の命が危なくなる。それに、ルシオラの魂を守る為にも、死ぬわけにはいかない。もう一度、あの笑顔を見るまでは倒れるわけにはいかないのだ。

和樹はひたすら耐えた。必ず、勝機は巡ってくる。ここで耐え抜けば、業を煮やして本体が出てくるだろう。その時こそ、チャンスだと思っていた。どういうわけか、先ほどから身体を締め付ける結

界が弱まってきた。雨風の勢いも弱くなってきた。雷撃を防ぐのも楽になってきた。

それは勿論、分身が倒されていたからだ。その分身を弱体化させていたのは、和樹が雷撃を受け続けて台風のエネルギ―を減らしていたから。皆がそれぞれ頑張っていたからこそ、ミチエの作戦を破綻させる事が出来ていたのだ。

『チツ…じゃあ、そろそろ本気で始末してあげるわ。まだ不完全な身体でやりたくはなかったけど…』

ミチエが動く。

本人が言うように、本来身体が修復しきっていない今使える技ではないのだが、早くしないとエネルギー切れで勝つチャンスを逸してしまうかもしれない。

雲の中のミチエは、その不完全な身体で台風内の霊的エネルギーと同化する。薄れ、拡散しようとする意識を必死で繋ぎ止めて、台風全体をコントロールしようとしていた。そして…

空を覆う雲が、その動きを止める。

…風が、やんだ。

雨も、降り止む。

和樹は、その異常な光景に戸惑っていた。これは…一体何が起きている!?

しかしその答えも、次の瞬間驚愕と共に判明する事となる。空を見上げた和樹は、言葉を失った。

空一面を覆う雲の真ん中に、浮き出た巨大なシルエツト。

台風と完全同化したミチエの顔がそこにあつた。

大磯の浜辺に、海老が跳ねる。勿論それは本当の海老ではなく、魔装術を使った雪之丞。ミチエの分身の攻撃を器用によけて、時折反撃を試みていた。しかし、最初は上手く当たったものの中々追撃がうまくいかない。どうしたものかと考えていた。

「雪之丞、そこよ！ もつと強引に責めるの！」

「オメーが言うと一々妖しく聞こえるな!？」

勘九郎はもつぱら応援オンリー。自分の攻撃が効かないとわかると切り替えが早い。先ほどからずっと物陰に隠れていた。

そんな風にしばらく雪之丞が攻め倦ねていると、何やら海の間から凄い水しぶきを上げて突っ込んでくる水上バイクが。どうも、何かを叫んでいた。

「ゆ、雪之丞！ 誰か来るわ！」

「今忙しいって言うておいてくれ！」

「バカ、お客さんじゃないのよー！」

水上バイクは、真っ直ぐ雪之丞に向かって突っ込んでくる。そして、波に乗って凄い勢いでジャンプすると…

「こんの、バカ弟子がああああつ！」

バキイイツ！

「おっば…！？」

雪之丞に直撃した。雪之丞は、奇妙な言葉を漏らして卒倒する。端から見ていた勘九郎は、その闖入者を見て目を丸くした。

「メ、メフィスト様！？」

「お久しぶり、バカ弟子共。あんたらちゃんと鍛えてる？　こんな相手に何手間取ってんのよ！」

それは、メフィストだった。

雪之丞、勘九郎にとっては忘れられない人物。自分たちを飛躍的に強化してくれた師匠である。

「さーて、ちゃっっちゃとこのババアも仕留めるわよ。ほら、雪之丞、立ちなさいー！」

「マ…ママ…、ママが花畑の向こうに…」

「起きないとそのママがチェーンソー持って追いかけてくるわよ」

「か、家庭内暴力反対ー！」

雪之丞は覚醒した。というか、どんな起こし方だ。勘九郎は呆れる。

「あ…メフィスト！ 俺は…」

「いいから聞きなさい！ 今あんたは私の近くに居るから魔装術の力を100%引き出せるの。あの雷ババア相手なら丁度いいわ。うまい事力を引き出して、モノにしてみせなさい！」

「あ？ 何を言って…」

最後まで言わせない。メフィストは雪之丞の襟首を掴むと、体内のエネルギー結晶体を発動させ強烈な靈気を生み出す。雪之丞の身に靈気を流し込むと、空へ向けて思い切りブン投げた。

「逝ってこい大靈界ーっ！」

「ママ、今会いに逝きますーっ！？」

凄まじいスピードで、雪之丞は空を舞う。身体から膨大な靈気の炎を巻き上げながら上昇する姿は、打ち上げられたミサイルにも似ていた。

空に浮かぶミチエの分身は、あまりの意味不明な展開にしばらく呆然としていたが、雪之丞が突っ込んでくると我に返る。そうだが、今は戦っているのだ。忘れてはいけない。

『バカね、自分から突っ込んでくるなんて…撃ち落とされたいのかしら？』

分身は、即座に攻撃に移る。右腕を突き出し、雷撃の体勢に入った。

「うおおおお、熱い！ 止まんねえー！」

雪之丞は身体が利かず焦る。このままでは格好的ではないか！ いくらなんでも至近距離で食らったらヤバい！ そう思っ  
て何とかジタバタもがくも、勢いが止まらない。

空を飛ぶ能力があつたら。

こんなやつに怯える事はないのに…

雪之丞がそう考えた時、不思議な現象が起こる。それは、かつてGS試験の時に見た光景に似ていた。

バサッ！

『な、何！？』

雪之丞の背中に、コウモリのような羽根が生えた。

「な、なんじゃコラ!? 陰念の奴とおんなじか?」

雪之丞は自分の背中に生えた翼を見て戸惑い、固まる。

分身も、突然の出来事に固まっている。

しかし、両者が固まるうとも慣性の法則は働き続けていた。つまり、どういふ事かと言つと。

むにゅん

『あんっ!…っで、また?』

「う…うおおおおっ! ママに会えた!？」

こうなるわけだ。しかし、今回は勢いがつきすぎていた。雪之丞の顔面アタックは、靈気で編まれた分身の服を破いてしまった。ブラウスのボタンは弾け飛び、そのはちきれんばかりの豊満なバストが露出した時。雪之丞は壊れた。

「ーっ!？」

『はっ?』

雪之丞が咆哮を上げた。

途端に、鼻血が噴き出した。

『ぶっ、ぶあっ!?! 何よこれ、止めなさい雪之丞君!』

「――(泣笑)！」

『ああもっ、どうなってるのよ!?!』

顔、胸元、とにかく血まみれになった分身。これはもう戦いなどではない。ただのセクハラだ。自分は横島と戦っているのか、とウンザリとする。

『仕方ないわね、私が止めてあげるわよ！ 息の根と一緒にね!』

分身の目に、殺気が宿る。

しかし、それが雪之丞の目を覚ました。山奥で野生を研ぎ澄ませていた雪之丞は、殊殺気に対しては敏感に反応する。分身の殺気に反応した雪之丞は、すぐに空中で身を翻すと分身の背後に瞬間的に回り込み…

「オラア！」

ドガアアッ！

『きゃああっ!』

分身の背中を蹴り飛ばした。

「危なかったぜ…お前、ママの振りをして惑わせるつもりだったんだろっが、そうはいかねえ！」



『どこまで馬鹿なのアナタは！？…まあいいわ、もう容赦しないから覚悟なさい！』

どうにも締まらないが、分身は無理矢理気を引き締めた。明らかに、先ほどまでと動きが違う。油断は出来ない。

「行くぜ！」

雪之丞は分身に突っ込んだ。翼を使うのは初めてだったが、身体が勝手に反応して、思った方向に飛ぶ事が出来た。

「オラオラオラオラオラアッ！」

ガガガガガガガガガッ！

『ぐっ、ぐううううっ！？』

慣れない接近戦に、苦しむ分身。今まで、こんなに近くで攻撃された事がなかったのだ。まさかこの私に肉弾戦を挑んでくるなんて…。かなり、混乱していた。

…そして、それを地上で眺めている人が二人。

「ちょ、ちよつとメフィスト様？ 一体何をしてるんですか？」

「んー？ ちよつとねー」

メフィストは今、どこから取り出したのか巨大なボウガンを手にかけていた。その矢の先を、分身に向けて構える。

「メフィスト様、待って！ 雪之丞に当たっちゃうかもしれないでしょ！？」

「大丈夫よ、私が近くにいるからあの海老も固くなってるでしょ」

「貫いちゃうわよ、あんたの馬鹿力じゃー！」

焦って敬語を忘れる勘九郎。メフィストは意地悪な笑みを浮かべてボウガンの引き金を引いた。

「あ、しまったー」

「きゃああああああ！？」

バシユンツ！

巨大なボウガンの矢が、空に向かって放たれた！そして…

バスツ！

『ガツ……………！？』

分身の肩に突き刺さる。ボウガンの矢は、一瞬まぶしく光ったと思うと、大爆発を引き起こした。

ドガアアアアアンツ！

「おわあああつ！？」

爆風は雪之丞まで巻き込み、一面に真つ赤な炎を撒き散らした。

「雪之丞ー！？」

「いやー、厄珍も良いのくれたじゃない。今の、私の靈波砲並の威力よ？ 奮発したわねー」

実はメフィストの持っていたボウガンは厄珍堂の商品だったりする。営業停止処分を取り消す裏工作をする代わりに、賄賂として受け取った物だった。オカルトGメンに入ったメフィストは、持ち前の悪知恵で自分のやりたいようにやっていた。

空中の分身は…

身体の三分の一を失っていた。

『ア…アアアア！ あの偽物があああつ！』

「あちゃー、仕留めそこなったかー。ま、いいわ。私が殺すから」

メフィストはニヤリと笑って、空へと舞う。殺すなら…やはり自分の手で。一人殺したくらいで気が晴れるものか、分身がまだ居るならまた殺してやる…そう思って、飛び立つと。

分身は、意外な行動に出る。

『もう、私は保たない…。だったら、せめてアンタたちを道連れにして戦力を削ってやるわ！』

「は？」

嘘でしょ？

今時、自爆なんて魔族でもやらないわよ？

そんな事をつぶやくメフィストを余所に、分身は狂気の笑みを浮かべて身体中の靈気を暴走させる。マズい。いくら靈気が弱くなっているとはいえ、稲妻を操る化け物の自爆。この一帯が消し飛んでもおかしくはない。雪之丞は…吹っ飛ばされて、近くのホテルの屋上に倒れている。確実に、使い物にならない。

「あ、あはは！ 自爆はちょっと流行らないかなー、なんて思うんだけど！ もうちょっと今風なりアクションとってみない!？」

『フンツ…、流行って巡るのよ、知らなかった？』

「自爆が流行とかいつの時代よー！」  
勘九郎が律儀に突っ込んだ。その時…

空を、無数の鳳凰が舞う。

鳳凰たちは、分身を囲むようにぐるぐると巡回した。

『じつこれは…何!?!』

分身は呆気にとられていた。次から次へと、ワケが分からない事が起きすぎる。何なんだ、この火の鳥は！ 混乱しながら当たりを見渡す。四方八方を、完全に包囲されていた。

そして、鳳凰たちは分身目掛けて襲いかかる。ゆうに二十を超え、る巨大な鳳凰たちは、分身に逃げる時間など与えずに一気に突っ込んだ。

ドガアアアアンツ！

ズガアアアアンツ！

ボガアアアアンツ！

『ギヤアアアアアアアツ！』

それまでの女性らしい悲鳴とは違う、獣じみた叫び声。自爆に回すハズの靈気を、思わず防御にまわす。何とか凌ぎきった分身は、頭と胴体の一部を残すのみという悲惨な状態となっていた。

もはや、何も出来ない。

分身は、最後に忌々しくメフィストを睨みつけて…

靈基崩壊を起こし、光の粒となって消えて行った。

砂浜では、メフィストと勘九郎が混乱してキョロキョロと辺りを見渡している。一体、今のは誰が？ そんな事をつぶやきながら、鳳凰を呼び出した人を探していた。

それを、少し離れた所から双眼鏡を使って見ている者が。

「…相変わらず、無茶しよるなメフィスト。危なつかしくて見られんわ。勘九郎たちも…チグハグやなあ、戦い方が。研修、あまり意味無かつたんかなあ…」

「ピイツ！ ピピ、ピイ？」

「ん？ ああ、今はまだ会わへんよ。この騒動が終わってからやな声かけんのは…」

双眼鏡を助手席の夜叉丸に渡すと、鬼道は乗っていた愛車のアクセルを踏む。急発進したディアプロは、弱まった風の中、雲の切れ間から差し込む光を受けながら国道一号線を東へと走り去って行った。

さて、その頃ドクターカオス達は何をしていたかと言つと。

『胸がドキドキ、キュンキュン、ハリケーン！』

「ラブラブ、アナタを・釘付け・です」

「歌つとらんで、運転せんかい、馬鹿者ー！」

結界を維持するという名目で、マリアとセイレーンの合唱が始まっていた。運転は、仕方なくカオスが行っている。となると、もう展開は決まっているだろう。

「うぬぬ、ここは…どこじゃ？」

迷っていた。

セイレーンの歌は、船乗りを誘い迷わせるといふ。GPS機能を持つマリアだからこそ迷わずに運転出来ていたのだが、カオスに代わった事で迷子になっていた。

「マ、マリア！ はよう戻らんかい！」

「『今夜は、あなたに・おまかせ』」

「やかましいわー！」

ドクターカオスの叫び声が、荒海に響き渡った。

同時刻。

逗子市の外れにある吉村春樹の家では、マールウが窓から空を見上げていた。

おかしい。こんな空は初めてだ。何より、異様な靈気が辺りに立ち込めている。落雷も激し過ぎるし、これはとんでもない事が起きてはいまいか。

『春樹：気づいてるか？ コイツは、ただの台風じゃねえ…かなりヤバい靈障を引き起こしかねえぞ』

「うん…おかしいよね。早く通り過ぎてくれるといいけど…」

テレビで台風情報を見ながら、春樹が言う。その言葉に、マールウは苛立ちの声をあげた。

『オメエはGSじゃねえのか！ 今まさに靈障を引き起こそうって存在がいるかもしれねえのに何怠けた事言ってるやがる！』

「で、でも台風なんだよ！ 今外に出るのは危ないよ！」

春樹は、どうにも乗り気でないようだ。確かに、空の雰囲気が変わるだからと言って不用意に外に出るのは止めた方がいい。春樹の感覚は、至極真つ当だった。しかし、それはあくまで一般人の感覚だ。GSの感覚としては、おかしい。

『チツ…しょうがねえな』

マールウは、窓から目を離すと立ち上がり、玄関へと向かう。後



る足で立って伸び上がり、鍵をくわえて外すとガラガラと戸を開けた。

「ちょっとマーロウ！ どこ行くんだよ！」

慌てる春樹に、マーロウはニヤリと口の端を曲げて言った。

『ちょっと、様子を見てくる』

「わ、わ、変なフラグ立てちゃ駄目だよ！ ボクも行くから！」

慌ててレインコートを取りに行く春樹。マーロウはゲラゲラと笑ってから、玄関を出て空を見上げた。

風が、弱まってきている。先ほどまでの靈気も、幾分少なくなってきた。きている気もする。しかし、言いようの無い不安が胸を支配していた。

『冬彦…こりゃあまるであの日の再来だな…』

マーロウはかつての相棒を想いそう呟くと、バタバタと駆けてくる春樹へと振り返る。安心しな、オメガのガキは俺が守るさ。俺は、同じミスは繰り返さねえからな。…そんな事を考えていた。

自宅を出ると、マーロウ達は海岸沿いの道を北へと歩く。人は誰も歩いておらず、ただ吹きすさぶ風と潮の香りが周囲を支配していた。

「なんだか…臭いが違うね。空も、変だ。なんかピンク色が混じって、気持ち悪いよ」

春樹は空を見上げて言う。確かに、空の色は黒い雲だけでなく、切れ間から毒々しい朝焼けをもっと明るくしたような色が混じっていた。そして、そこに異様な靈気を感じていた。

『ああ…昔も、こんな事があったよ。死霊の風って言ってな、この風が吹くと墓場から死者が復活するってやつだ。この先の霊園で、実際にあった』

「ちょっとマーロウ、恐がらせないでよ」

またお得意の怪談話か、と春樹は苦笑いする。が、マーロウは至って真剣だった。

『お前がまだ小さかった頃の話さ。冬彦と受け持った最後の仕事でなあ…』

「え、お父さんが？」

吉村冬彦。優秀なGSであり、動物と意志の疎通の出来る能力でブリーダーやペットのメンタルケアをしていた。動物たちと協力して靈能犯罪を解決するその姿から『ハマのムツゴロウ』などと言われて有名だった。

『ああ。俺にとっちゃ思い出すのも辛い話だから今まで話さなかったけどな……』

マーロウは、語り出した。この、逗子で起きた最悪の霊障を。

9月という時期は、台風の子節であると同時にこの付近では霊障の頻発する季節でもある。それは海難事故で亡くなった人の魂が、台風などに引きずられて上陸する事があるからだ。今でこそ六道が合宿などで始末しているから大きな霊障は起きていないが、昔は違った。地元の霊能者が、協力して迎えうっていたのだ。吉村冬彦も、その迎撃メンバーの一人として活躍していた。

しかし、その時の台風はまるで規模が違った。余りに巨大、そして引き連れた悪霊も膨大だった。オカルトGメンの前身である霊能警察の人間を動員して、何とか悪霊を退治する事は出来たが：先ほど言っていた死霊の風と言われるものが吹き、近隣にある霊園に眠る霊を悪霊化して目覚めさせたのだ。

死霊の風。それは、台風に宿る霊気。その年は、たまたま海で亡くなった人が多かった。そしてたまたま、台風も巨大だった。色んな偶然が合わさって、そんな不可思議な現象を引き起こしてしまったのだ。

冬彦たちは、必死に走り回り亡者たちを成仏させて行った。マーロウや他の動物たちが場所を特定して、人間が戦う。そんな連携プレーで、文字通りゴーストタウンと化した町を救ったのだ。しかし、犠牲も大きかった。動物たちの多くは命を落したり霊能力を失い再起不能となった。そして：冬彦を始めとした多くのGSも帰らぬ

人となった。

『俺はアイツを守れなかった。最後に見たアイツは、どこかのガキの身代わりになって身体を引き裂かれてたよ。最後の最後まで、アイツはお人好しだったぜ』

「そんな事が…」

春樹の知らなかった、父の最期。それは衝撃的だったが、同時に納得出来るものだった。道理で誰も詳しく話したがらないハズだ。父が町を救ったという話はどこかで聞いたし、毎年父の命日に沢山の人が献花してくれるのは知っていた。が、人見知りをする春樹はその理由を中々聞き出せずにいた。

マーロウの話は、それからも続いた。冬彦は町の英雄として、仲間たちと共に名誉市民となった。しかしマーロウは多くの仲間を失い、生きる気力が湧かなくなっていった。そんなマーロウの生きる支えとなったのが、冬彦の「息子を頼む」という最期の言葉。そして、父と同じ能力を持つ春樹だった。

『そういった事があってな。あの事件は、俺にとってあまりに大きな出来事だった。だからよ…俺は、あの時と同じ風の吹いているこの状況を放っておく事は出来ねえ』

「うん、分かったよ。ボクも、もう止めない」

そう言葉を交わした時。

二人は、件の霊園にたどり着いた。

台風で人気のない霊園。その奥にある墓に、吉村冬彦は眠ってい

る。二人は、真っ直ぐにそこを目指して歩いていた。

そして…

墓の前に佇む、一人の女性を見つける。墓前に手を合わせ、祈りを捧げるその女性の姿に、マールウは見覚えがあった。

『…もしかして、美神の嬢ちゃんか？』

『あなたは…マールウ？』

それは、美神美智恵…ミチエの分身であった。

## 第六十七話 馬鹿な男のはなし

『まさか、ここでアナタに会うとは思わなかったわ。…これも、縁なのかしらね』

ミチエの分身は、少し疲れたような表情をしていた。顔色は悪く、今にも倒れそうだ。そんな分身を見ながら、マーロウも複雑な顔をする。

『まあな。俺も、驚いたぜ。お前さん、冬彦とは折り合いが悪かったと思っただがな』

『まさか。オバサマの手前、あまり付き合いが無かっただけで信頼していた人だったわ』

二人は懐かしそうに話す。しかし、その内容は微妙に違っていた。マーロウとミチエは、同じ世界の住人ではない。マーロウの見えるミチエと、ミチエの見えるマーロウは違うのだ。今の所、話は通じているが…それは薄氷を踏むかのようなバランスの上に成り立っていた。

『冬彦さんには…色々お世話になったわ。…葬儀に出席出来なかったのが残念だった。こうして、命日の少し前に花をあげにくるくらいしか出来ないのが心苦しいの』

『構わねえさ。オメエさんにも事情つてのがあるだろうからな』

二人は、しみじみと語り合う。しかし、後ろで聞いていた春樹は顔を青くして怯えていた。マーロウは、何故平気なのだ、と。目の

前の女性からは、とてつもなく禍々しい靈気が漂ってきている。それは、曲がりなりにもGSである春樹には敏感に感じられていた。…とてつもなく、怖いのだ。

そんな春樹をよそに、思い出話に花を咲かせる二人。このまま、平和にハイさよならと行かないかと春樹は祈っていたが…

やはり、そうはいかないようだった。

しばらくしてマーロウは、ミチエに対して尋ねる。

『オメエさん…なんで死んじまってんだ』

先にバランスを崩したのはマーロウだった。

『…やっぱり気づいていたのね』

少し俯いてから…顔を上げたミチエの目には、死の影が宿っていた。周囲に、黒い影が広がる。その恐ろしく濃い死の気配に、春樹は思わず吐き気を覚えた。

『私には、ここでやらなきゃならない事があるの。悪いけどマーロウ、今日だけ見逃してくれないかしら』

『何をするかにもよるが…それは出来ねえ相談だな。俺も、老いぼれとは言えGSでなあ。オメエさんみてえな奴を放っておくなんて出来ねえのよ』

なにを言ってるんだ、マーロウは。春樹は、必死に吐き気を堪えながら思った。この女性は、自分たちの適う相手ではない。力の差がありすぎるのだ。春樹は、膝をガクガクと震わせていた。それをチラリと見たマーロウは、ミチエに声をかけた。

『ただ…悪いんだが、春樹だけは見逃してやってくれねえか。身勝手な言い分だとは思うが、これも冬彦との約束でな。どうか、頼む』

「マーロウ!? 何言ってるんだ、逃げるなら一緒に…!」

ミチエに頭を下げるマーロウに、春樹は泣きそうな顔で叫ぶ。それを、ミチエは静かに見つめていた。そして…

『分かったわ。アナタと冬彦さんの名前に免じて、見逃してあげる。春樹君、と言ったわね。私の気が変わらないうちに、サッサと行きなさい』

マーロウの頼みを受け入れた。

「マ、マーロウ…」

『言っただろう、早く行かねえか!』

「で、でも!」

『でももだってもねえ! オメエは足手まといなんだ、サッサと家に帰って引っ込んでろ!』

「う…う…うわああああっ!」

春樹は、そう叫んでミチエとマーロウに背を向ける。涙を流しながら、その場から走り去っていった。その姿を、マーロウはただ見送る。その、衰えてぼんやりとしか見えなくなってきた眼に、春樹の背中を焼き付けていた。



（ありがとうよ、春樹。オメエと過ごしたこの十年…割と悪くはなかつたぜ）

去りゆく姿を見送りながら、マーロウはつぶやく。そして、一つ小さくため息をつくともちエへと振り返った。

『待たせたな。春樹を逃がしてくれた事、感謝するぜ』

『…もういいの？ 割とアッサリしてるのね』

『ああ。…別れてるのはな、サラッとでいいのさ。それが、一番綺麗に心に残るもんだ』

そう言つて、マーロウはもちエと距離をとつて対峙する。もちエは、少し悲しい顔をして言った。

『出来れば、アナタを殺したくはないわ。あの子と静かに余生を過ごしてもいいんじゃないかしら』

『けどオメエさん、この霊園を使って何かする気だろう。俺の予想じゃ…そうだな、ここらの墓をぶち壊して、祟りと呼ぶか。その怨念を使うか吸収するか…どちらにせよ、使役するにゃあ力不足だろう。なら、自身の強化しかねえわな』

マーロウがそう言うと、ミチエの分身はニヤリと笑う。やはり、マーロウはマーロウだ。いくら衰えたと言っても知恵は回る。今後どんな形で敵に回るか、分からない。脅威となりうる存在は、今のうちに潰しておく必要があった。

『残念ね、本当に。それだけ頭が回るなら、力の差なんてすぐに分かるでしょうに。負けるのが目に見えてるのに戦うなんて、理解出来ないわ』

『ふん、そうだろうなあ。俺だって馬鹿だとは思っさ。けどな…』

マーロウは、そのキラついた眼差しをミチエに向けて言った。

『それが、男って奴なんだろうよ』

マーロウが、走り出す。分身も、手に神通棍の形をした靈気の塊を出して迎撃体勢に入った。両者の間の距離は、瞬く間にゼロになり…

ズガアアアアンツ！

雷鳴と共に。

誰のものとは知れぬ鮮血が飛び散った。

オカルトGメンの護送車両には、小笠原工三と唐巢神父、タイガーとピートが乗っている。ヒヤクメのパソコンのモニターでシロが分身を撃退したのを確認したので、唐巢たちも逗子へと向かう事に決めたのだった。運転するのは、Gメンの精鋭。かなりのスピードで、国道を突っ走っていた。

「こっちには、春樹サンの家があるんジャー。夏休みは、お世話になりましたケン」

「という事は、君は自転車で逗子まで来たのかね。…凄まじい体力だ」

話を聞いて驚いてるのは唐巢神父。隣の工三も、既に聞いていたとは言えこうして実際現地に来てみるとその凄さが分かる。タイガーは本当に化け物じみた体力を持っていた。

「でも、いい出会いをしたんですね。今のタイガー君は、妙神山にいた頃とは全くの別人ですよ。出会いが人を変えるって、本当にあるんですね」

ピートは、少し羨ましそうに言った。そのピートにしたって、愛子との出会いで凄く前向きな性格になっているのだが、本人は気づいていないようだ。

そんな話をしていると。

不意に、運転席の女性が声をあげる。

「前方に民間人を発見。停車します」

車はゆっくりとスピードを落とし、その民間人の前で停車する。

何事かと思つてタイガー達が前方を見ると、そこにはタイガーの見知った顔があつた。

「春樹サン！ すみません、この人はワツシの知り合いなんジャー  
！」

「春樹：ああ、マーロウの飼主か！」

唐巢たちもタイガーから聞いているので驚いていた。何故、こんな状況で外に出ているのか。タイガーは慌てて車から降りると、息を切らせている春樹の前に出た。

「ど、どうしたんジャー、春樹サン！？」

「タ、タイガー……。良かった、強い靈気を感じたから、ひよつと  
と思つたんだ……」

ゲホゲホと咽せながら、春樹は声を出す。息を整えてから、タイ  
ガーに向かって叫んだ。

「タイガー、頼む！ マーロウを助けて！ アイツ、なんかよく分  
からない女の靈と戦つてるんだ！」

「わ、わんこ先生が…女の靈？」

タイガーは困惑するが、助手席にいたGメンの女性が特製見鬼くんを使うと顔色を変える。

「ターゲット、近くにいます！ 恐らく、彼の言う霊は美神美智恵で間違いないでしょう！」

皆の顔色が変わった。

無茶だ。いくらなんでも、勝ち目がない。

「春樹サン、乗ってつかあさい。マーロウのもとへ、案内してもらいたいんジャー」

「わ、分かったよ！ マーロウは、この先の霊園にいるよ！」

素早く地図で確認する女性たち。場所を特定すると、思いっきりアクセルを踏み込んで走り出した。

ミチエの分身は、ただ死んだような光を失った瞳で、横たわる犬を見ている。先ほどまで果敢に飛び跳ね、攻撃してきたマーロウは、今や微かに息をするだけ。そんなマーロウに、ミチエは静かに語りかけた。

『ねえ…あなたには、沢山お世話になったわ。娘の事や、仕事の事…。だから、このまま死なせるには惜しいのよ』

『…な…んの、事だか…わかんねえ…な……』

マーロウが何とかそう言うと、ミチエは俯きながら頷いた。

『そうでしょうね。それは、別の世界の話だから。けどね、アナタはどちらの世界でも変わらない。変わらずに、こちらでも私を助けてくれていたみたいだわ』

ミチエは、勝ち誇っていいハズなのに。何故か、すがりつくような目でマーロウに言った。

『お願い、マーロウ！ 私に協力して！ 娘には、…私には、アナタが必要なの！ アナタのような味方が、私たちには必要なのよ！』

それは、心からの願いだった。娘をこちらの世界に生み出す事が出来たなら…敵ばかりの現状を変えなければいけない。マーロウのような味方が必要だと思った。それは表向き娘の為だが…もしかしたら、ミチエ本人が必要だと求めていたのかもしれない。

マーロウは、顔を上げてミチエを見上げる。そして、悲しくなった。

(なんて目えしやがる…)

(オメエさんは、一体何故そんな捨てられた子供みてえな目で俺を見るんだ)

それは、哀れな姿だった。こんな姿、美神の女にや似合わねえ…

と、マーロウは思った。あの日見た、自信に満ち溢れ輝いていた美神美智恵はどこに行ったのだろうか。

『嬢…ちゃん。もう、成仏…しちまえ。…俺も一緒に…逝って、やるさ…』

マーロウは立ち上がった。胸や足からは、血が流れている。口からも大量の血を吐いていたが、そんな状態でも戦おうと闘志を失わない瞳でミチエを見る。

ミチエは、急速に心が冷めて行くのを感じた。

やはり、私たちは誰にも頼らず生きて行くしかないのか。そんなに、世界は私たちが憎いのか。それならば、私たちも世界を憎もう。世界を敵に回して、破壊し、支配し、娘の為の樂園を作ってみせる…

『マーロウ…せめて、これ以上苦しめないように一瞬で殺してあげるわ』

『へっ…、やって、みせな…』

心の中で、泣きながら。ミチエの分身は雷の神通棍を構える。マーロウも最後の咆哮を放つ為に息を吸い込んだ。そして…

『『オンツッ!』』

ズガアアアアアンツ!

マーロウの咆哮に重なる形で、後方から巨大な霊波が放たれた。霊波は極悪なまでの密度の壁となり、分身に直撃する。分身は、有

り得ない強烈な攻撃に反撃すら出来ずに吹っ飛ばされた。

『は、はははは…、こりゃあ、強烈だ…』

力なく笑うと、マーロウは安心したようにその場にへたり込んだ。これだけ巨大な霊波の雄叫びを出来る人物はこの世で一人しか居ない。マーロウは、振り返る事なくつぶやいた。

『やるじゃねえか、タイガー…。今は、いい「鳴き」、だったぜ…』

「ありがとうございますジャー、わんこ先生。ここからは、ワツシらが戦いますケン」

現れたのは、タイガー。金色に光るサーベルタイガーだった。その後ろには、春樹もいる。

「マーロウ…ごめん、ボクあのまま逃げるのがいやだったんだ」

『ああ…オメエは、よっぼど…馬鹿らしい、な…』

駆け寄る春樹。共についてくるのはGメンの女性たちだ。マーロウの身体を診ると、すぐさまヒーリングを施した。

ミチエの分身は、戸惑いを隠せない。

何故、ここまでタイガーが強くなっているのだろう。かつてアシユタロス戦ではまともに戦力としてカウント出来なかったタイガー



が…少なくとも300マイル以上の霊波攻撃をするなんて。そして、それ以上に…

何故、こんなにこちらに戦力が集中するのか。

他の分身の方が派手に立ち回るように仕向けてあるハズなのに、ここにはタイガー、ピート、唐巢、エミとGメンの女が二人。他の分身たちは何をやっているんだ、やられたのか!? ミチエの分身はかなり焦っていた。分身は知らない。自分が、最後の一人だという事を。

「タイガー、これから霊体撃滅波を放つから、時間稼ぎ頼むワケ! 神父、ピート、雷撃に関しては任せるワケ!」

「わかりましたんジャー!」

「はい、任せて下さい!」

「分かった、エミ君も気をつけたまえ!」

エミの号令と共に三人が動き出す。Gメンの二人は、片方が治療、もう片方が結界をはりマーロウを守っていた。

それを見て、ミチエは今更気づく。

自分は、確かに自然界のエネルギーと結びついたものの、死霊である事には変わらない。ある一定以下の霊波は弾けるものの、聖なる力を扱う神父やピートの攻撃は威力の如何を問わず効いてしまうのだ。それは、死霊に対して絶大な効果を誇る霊体撃滅波も同様である。

つまり、この組み合わせは最悪だった。死霊であるが故に、GSらしいGSには弱いのだ。台風に宿り、神族クラスの力を得たという事ばかりに気を取られ、こうした基本的な事を失念していた。

『けど…、雷撃には弱いはず!』

ミチエは必死に雷撃を放つ。もはや、周囲からの補給は全くできないくらい風の中の霊気がなくなっているが、無理やり放った。が…

「甘い!」

唐巢神父が精霊石で雷を防ぐ。同時に二つ使っていた。

『し、神父!? そんなに大盤振る舞いしてたら借金だらけになるわよ!』

「悪いが異世界のミチエ君、その気遣いは無用だ! 何故なら、この間万馬券が当たったからな!」

『はあああ!?!』

神父が壊れてる! 競馬とかやる人じゃなかったのに! ミチエの中で、何かがガラガラと音を立てて崩れて行った。

「こちらからも行きますよ! ダンピール・フラッシュ!」

ドガアアンツ!

『くっ、今度はピート君!?!』

気を抜いた隙に攻撃を仕掛けてきたのはピート。その攻撃も、大した威力は無いが霊的防壁を突き抜けてきた。相性が悪すぎる。

『うつとおしいわね、死になさい!』

今度は、雷撃ではなく雷の神通棍で攻撃する。しかしこれも、思わぬ方法で回避される。

「キキーツ!」

『な、コウモリ!? こんな事まで出来るの!?!』

ピートは無数のコウモリに化けていた。こんな能力、見たことない。ミチエの混乱は極地に達しようとしていた。

そこに。

タイガーが、行動を起こす。

戸惑い、動きが止まったミチエを、背後から羽交い締めにした。

『なつ、タイガー君!? 直接触れるだなんて、死にたいの!?!』

「悪いが、しばらく動かないでもらいたいんジャー」

そんな事言われて、従う奴はいない。ミチエはすぐさま雷撃でタイガーを攻撃する。身体中の霊気を使って、タイガーの身体に電気を流し続けた。

『このおおおおっ！』

「がああああああっ…！」

タイガーが、叫ぶ。

しかし、最高まで高めた霊装術はミチエの雷撃に耐えていた。威力が弱まっているとはいえ、凄まじい防御力だ。その間、唐巢やピートはミチエの身体に霊波を打ち込み攻撃する。ミチエは次々に霊波のクリーンヒットを食らい満身創痍となっていた。

『はな…せ…！ は、な…』

「嫌なんじゃあああっ！ 死んでも離さんのじゃあああっ！」

タイガーにしても、攻撃のとはっちりを食らってダメージはデカいのだが、持ち前の打たれ強さと我慢強さで耐えていた。

そこに。

真打ち登場である。

「神父、ピート！ どくわけ！」

その声に、二人は素早く脇に飛び退いた。見ると、地面に描かれた魔方阵の上で踊る小笠原エミが。全身に凄まじい霊気を帯びていた。

「タイガー、あんたはそのまま！」

「分かっとなるんジャー！」

そのやりとりに、ミチエは驚く。

『は、離しなさいタイガー君！ アナタまで巻き込まれるわよ！』

「嫌なんジャー！ ワッシは、エミしゃんの言う事が一番じゃけんノー！」

駄目だ。話が通じない。ミチエは、あんまりな展開に絶望する。こんな、こんな馬鹿らしい最期を遂げないといけないのか！

「霊・体・撃滅波——！」

グオオオオオオオッ！

エミの両手から、恐ろしいまでの霊波が放たれる。その威力は、前の世界のエミと比べると雲泥の差であった。この世界のエミは、前の世界でいう美神令子の位置にいる。つまり、トップGSとして高難易度の仕事を沢山こなして来ているのだ。場数と基礎霊力は、こちらの方が上であった。

『そんな、そんな！ こんな、雑魚に……』

ドガアアアアアアンツ！

大爆発を引き起こした。

周囲の墓は、唐巢とピートの結界で無事であったが、肝心のタイガーは大丈夫だろうか。結界を張ってる二人は勿論、春樹やマーロウ、Gメンの二人も緊張の面もちで事の成り行きを見守っていた。

次第に、もやが晴れて行く。

そこには、霊装を解いて元の姿に戻ったタイガー一人だけが、堂々と立っていた。

「タイガー！」

誰よりも先に声を上げたのは、エミだった。タイガーの打たれ強さを信じて、フルパワーで撃った霊波。いつもの作戦とは言え、やはり、申し訳なくも思っていた。

「タイガー、大丈夫なワケ？ かなり電撃食らってたけど…」

「ワツシなら、心配いらんのですジャー。なんかビリビリするのが、マッサージみたいで気持ち良かったくらいですケン」

「コイツは…。周囲の人間たちは、呆れるばかりだ。むしろ、どうやったらタイガーが致命傷を受けるのか知りたいくらいだった。」

「まったく…。アンタって、本当に最高よ。でも、一つだけ減点」

「えっ、エミしゃん、それは…?」

不安そうな顔をするタイガー。エミは、少し顔を赤らめる。誰にも聞こえないように、小さな声で言った。

「死んでも絶対離さない、なんて…私以外の女に言ったら駄目なワケ。ちゃんと、後で私にも言っただけ欲しいワケ」

恥ずかしそうに、上目使いで言うエミ。タイガーは…

「うおおおお！ エミちゃん、一生ついて行くんジャー！」

大興奮で、雄叫びを上げた。

そんなタイガーを、春樹は眩しそうな目で眺めていた。タイガーは、本当に強い。その強さが、羨ましかった。

「タイガー君…その強さの百分の一でも僕にあつたら…マールウを置いて行かなくても良かったんだろうな…」

そんな事をつぶやいていると、そのマールウが近づいて来る。怪我はもう治療してもらったらしく、いつもの調子で話しかけてきた。

『しけた面してるじゃねえか。また下らねえ事考えてるんだろ』

そう言っただけだと、春樹はただシユンとするだけだった。

「うん…。下らないんだ、本当に。力の無いボクは、どうしようも無いよ」

ああ、こりや重症だ。マールウは苦笑いを浮かべる。仕方なく、春樹の隣に座った。

『確かにオメエは弱い。こりや事実だ。けどな、オメエがタイガー達を連れて来なければ俺は殺されていた。分かるな？』

「でも…結局助けたのはタイガー達でしょ…」

『ああ。だが、連れて来たのはオメエだ。いいか、どちらが欠けても俺は助からなかった。オメエはオメエに出来る事をやった。そのお陰で、俺は救われた。ありがとうよ、春樹。またこうして話が出るとは思わなかったぜ』

その言葉を聞いた時。

春樹の瞳から涙がポロポロとこぼれ落ちた。

そうか、ボクはちゃんと役に立っていたんだ。そう思うと、何だか涙が止まらなくなった。

『仕方ねえなあ…』

そう言いながらも、どこか安心したような顔をするマーロウ。春樹に、無理に強くなって欲しいとは思わない。春樹には春樹の良さがあるのだ。

『そうだな、もしオメエに助言をしたら、だ。ちょっと向こうを見てみる』

マーロウが、アゴをクイツと振って、タイガー達の居る方向へと促す。春樹を見ると、そこには興奮したタイガーが人前でエミにキスを迫り、顔を真っ赤にしたエミにアツパーカットを食らっていた。

『ま、オメエもアイツみたいにもっともつと馬鹿になるこつた。ウジウジ悩むよりかは、よっぽど生産的だぜ』

ゲラゲラと笑いながら、そう言うマーロウ。その言葉に、春樹は生真面目に頷いた。

「分かったよマーロウーじゃあ、んーっ！」



『ん?...って、オイ、何しやがる!?!』

なんと、春樹が恥ずかしそうに目をつぶって口を突き出している!

「タイガー君みたくなればいいんだよね!」

『馬鹿、違う! いや、馬鹿になれとは言ったがそっちの方向はよせ!』

ギヤーギヤーと暴れるマーロウと春樹。Gメンの女性たちが笑いながら見守る中、二人はいつもの二人に戻ってドタバタ騒ぎを繰り広げるのだった。

## 第六十八話 天竜の決断のはなし

地上でミチエの分身が和樹の仲間たちと戦いを繰り広げていた頃。神界ではそれ以上に大規模な霊気のぶつかり合いが繰り広げられていた。

天空を幾つもの巨大な爆炎が埋め尽くす。その殆どが、たった一人の竜神によって引き起こされていた。

その竜神とは天竜。そしてその炎と爆発に晒されているのは天竜の父であり竜神族の長、竜神王だった。空を見上げる竜神たちは口々に驚嘆の声を漏らす。血筋とはいえよくぞここまで成長したものだ、と。一方的に負けるという大方の予想を覆し、天竜は恐ろしいまでの力で竜神王を圧倒していた。

『天竜よ、いつの間にもここまで腕を上げた!?!』

「父上が惰眠を貪っている間だ！ 進歩の無い竜などトカゲにも劣るという事を知れ！」

『こ、小癩な...っ!』

流石に竜神王の顔にも焦りの色が見え隠れしていた。ゆうに、二時間以上。絶え間なく爆発を引き起こす天竜の攻撃は、止むどころか益々激しさを増していた。

それを満足そうに見つめるのは斉天大聖老師である。

妙神山に天竜が滞在している時。その大部分の時間を二人でゲームをして過ごしていた。ただ、それだけでは身体がなまるので老師は体操と称し天竜と手合わせをしていた。

天竜は靈気の出力だけなら和樹に匹敵するほどの能力を持っている。それだけのポテンシャルを誇る竜神族のサラブレッドが、老師のマンツーマンの修行を受け続けたらどうなるか。想像に難く無いだろう。

老師が戯れに作った分身の腕を斬り飛ばした。ちよつと試しに分身の大軍をけしかけたら覚醒した。ドツペルゲンガーと戦わせたら、強引な力押しで勝ってみせた。ドツペルゲンガーでは再現できないくらいの強さを身に着けたのだ。そして、つい3日程前。

老師は左腕を撫でながら微笑む。

天竜は本気になった老師に深手を負わせるまでに至ったのだ。思わずキレて天竜を瀕死の状態まで追い込んでしまったくらい、老師は追い詰められた。これは和樹ですら到達していないレベルである。

天竜は恐らく竜神族最強の戦士である。老師はそう見ていた。竜神王には…勝ち目はないだろう。

『せ、斉天大聖！ 貴様、天竜を鍛えてくれとは言ったがここまでせよとは言っておらんぞ！』

『言っていないなら構わんじやろう。お主はワシと引き分けたんじや

る？なら、問題あるまいよ』

笑う老師。竜神王はその言い方に違和感を覚えた。何故他人事なのだろう。引き分けたのは事実のハズだ。

天竜の攻撃は雨霰のように降り注ぐ。考え事をする間も無く、竜神王は持っている大剣を振り回した。

ガンツ、ギンツ、ギインツ！

天竜の攻撃は的確で重い。痺れる腕で、必死に剣を弾いた。それを見た天竜は素朴な疑問を口にする。

「父上。本当に老師と引き分けたのか？ あまりにも歯応えが無さ過ぎるぞ。武神なら武神らしく、もっとまともに打ち合ってみせろ！！」

『グツ…！ いい気になるなよ天竜！ 無礼な振る舞い、身を持って悔やむがいい！』

反撃に出る竜神王。しかし、その攻撃も大振りとなり簡単に天竜にかわされてしまう。

「嘘なら嘘と言ってしまえ。恥の上塗りはそれこそ一族の恥だ」

『い、言わせておけば！ 斉天大聖、お主も何を笑っておる！引き分けた事、忘れたのか！』

斉天大聖は笑いが止まらなかった。周囲の竜神族たちは、段々と不安そうな表情を浮かべ始めた。もしかして。いや、まさか。あの

竜神王が嘘なんてつくはずがない。しかし…

そんな困惑の空気が漂う中。老師は何とか笑いを収めて口を開いた。

『竜神王よ。実はお主がワシと戦ったと言っておるのは丁度ワシが不老不死を手に入れて有頂天となつとる時期でのう。たくさん悪さをしたもんじゃ』

『ああ、私が討伐を命じられたのはお主の悪行を止める為だ』

答える竜神王。天竜は仕方なく攻撃の手を止める。自分も興味あったからだ。

老師は続けた。

『あの頃ワシは優秀な仲間にも不老不死を得てもらいたいと思って、閻魔の台帳を改竄したんじゃがのう。その時の仲間が何人か、竜神族と戦っておる』

『ちよつと待て、まさか…』

そんな。そんな事が、あるものか。竜神王は顔を青ざめさせた。

それは他の竜神族も同様だ。これまでの自分たちのプライドが…竜神族が最強であるという神話が…

『ふむ。末弟の要要か配下の山猿じゃろうな。あの頃のワシは竜神とは戦ってはおらん。その前なら何度かやりあったが、お主ではないのう』

神話が崩れた。

これはもはや竜神王だけの問題ではない。竜神族全体の問題である。斉天大聖と同格の力を持つと言われていたからこそ、神族で今の地位を築けたのだ。それが…虚偽だと知られたら。その場にいた竜神族たちは皆一様に固まっている。

そこに老師はまたも爆弾を投下する。

『しかしながら、天竜は実際にワシと戦っておる。そして、ワシの分身を斬り飛ばし、このワシの腕をも斬り裂いた事があるのじゃ。竜神王はともかく、天竜に関しては武神と言っても恥ずかしくない実力があるとワシが保証しよう』

この言葉が何を意味するか。それは簡単だ。

竜神王の座を天竜に明け渡すのならば。竜神族は今の地位を保ち続ける事が可能である、という事だ。最強では無くなるが、斉天大聖のお墨付きがあるのだ。他の神族からの受けも良くなるだろう。が、このまま竜神王についていたらどうなるか。

天竜が全て暴露して、竜神族の地位は失墜する。

選択肢は一つしかなかった。

『さあ竜神王よ。どうするのじゃ。ここで天竜を倒して最強を名乗るのもいいが、天竜はワシの可愛い弟子じゃ。その時はワシが黙っておらんが…まあ、ワシと本当に引き分ける実力があるのなら、それもいいかもしれん』

『グッ…』

死刑宣告だ。竜神王はガツクリとうなだれた。もはや竜神族の存続を考えた時に選べる選択肢など一つしかない。

『天竜よ…』

うなだれながら天竜に声をかける。天竜は忌々しげに竜神王を睨みつけると言い放った。

「余は竜神王になぞならん。言ったであろう、余は臣下である横島の事を案じているだけだ。あやつに手を出さなければそれでいい」そして周囲を見渡し言った。

「貴様らのような輩を代表する気も起きん。余は竜神ではなく、ただ一人の神族として生きていく。横島に手を出されない限りは今回の件は口外しないから安心しろ」

天竜はそう言って、刀を懐の鞘に戻した。…苛立ちを、抑えながら。

「重ねて言う。横島には手を出すな。手を出したならば…その時が、竜神族最後の時となると心得よ」

最後にそう言い残すと、天竜は斉天大聖と共に神界を後にする。ゲートを使って転移し、二人の気配が完全に消えると。

残された竜神族たちは大混乱に陥るのだった。もはや竜神王の失脚になど興味は無い。次の竜神王候補に天竜に返り咲いて貰わないと、竜神族に未来は無いのだ。デタント反対派の竜神族たちも今の天竜の強さを見たら、もう計画を推し進めてゆく事など出来なくなっていた。

妙神山に戻った天竜たちは、まず小竜姫と藤姫の姿に驚いていた。

完全武装。竜神の鎧に身を包んだ二人は、藤姫は霊刀赤月、小竜姫は十握剣を手にしていた。

「殿下、敵襲はいつですか！ 私たちはいつでも戦う準備は出来ています！」

「そうだよ。横島を狙って馬鹿共が来るんだろう？ 安心しな、横島なら簀巻きにして宝物庫の中に突っ込んでおいたから大丈夫だよ」

天竜が固まった。

「よ、横島ー！ 今、助けに行くぞー！」

慌ててダツシユする天竜。小竜姫と藤姫は、何が何だか分からずに顔を見合わせる。ため息をついた老師が二人に説明を終える頃、横島はやっと自由の身となる事が出来た。



横島が自由の身となり、小竜姫と藤姫の謝罪が一通り済むと。天竜は今回の経緯を横島たちに説明した。横島は自分の知らない所でもんでも無い事が起きていた事に驚いていたが、小竜姫たちは天竜のとつた行動に驚いていた。

「で、殿下！ 殿下は竜神族を抜けるのですか！？」

「私が言うのもなんだけど、いいのかい？ 同族に後ろ指を刺されるのは、それなりに辛いもんだよ」

藤姫の言葉には実感がこもっていた。しかし、天竜はスッキリした顔をしている。全て覚悟の上での決断だった。

「余は井の中の蛙でしか無かったからな。いくら強くなったとは言え、外の世界を知らずに引きこもっていても、あの老人共のようになっってしまうかね。それに…」

少し照れながら言った。

「同族なら、お前たちが居るだろう。横島は元同族らしいがな」

そう言うと小竜姫と藤姫は少し嬉しそうな顔をした。確かに竜神族ならここに三人もいる。充分だろう。

「俺が、竜神族ねえ…」

横島は右腕を眺めながらつぶやいた。もう完全に自分の腕としてコントロール出来ていた。

「横島。お前はちゃんと人間としての生を全うしてくれ。竜神族で

あつた事に、引きずられなくていい」

「ああ、それは分かってるよ。俺だって人間やめて所長と一緒に歳をとれなくなるのは嫌だからな」

もし竜神族になつたらとんでも無く長生きになるらしい。それは勘弁してもらいたかった。

「けど…俺が腕を再生したみたいに、竜神の力を使い続けたらどうなるんだ？ やっぱり人間じゃなくなるのか？」

そう。気になっていたのはその事だった。もう右腕は変質してしまっている。もはや手遅れなのではないか。…それに答えたのは小竜姫だった。

「確かに今回のような事があれば横島さんは人間ではなくなります。今も霊的に不安定な状態ですからこの状況で力を使えば危険ですね。しばらく霊能力自体を使わないようにした方がいいかもしれません。ただ、今の所はまだ大丈夫ですからこのまま療養を続けましょう」

横島は露骨にガツクリする。霊能力自体使わない方が良く…それは、GSとして仕事が出来なくなるといふ事になる。そして、今で言うなら和樹の力になれないと言ふ事だ。

「やっぱりそうか…。クソっ、和樹は今戦ってるつてのに何にも出来ねえのかよ！ 所長だって、無事なのか分からないし…」

焦る横島。妙神山で療養しなければいけない現状が、歯痒くて仕方がない。

そんな横島を見ていた老師は、横島を含む4人に向かって言った。『この妙神山修行場にはワシが残る。お主らは和樹の所へ行け。天

竜の下山もワシが許可しよう』

「ろ、老師！ それは誠か!?!」

天竜が驚きの声を上げた。

「老師、私もいいんですか!?!」

「…しかし横島はここを離れていいのかい？ ここが靈的に安定してるから、療養に使っていたんだらう?」

喜ぶ小竜姫と違って藤姫は横島の心配をしていた。この妙神山は靈的な安定もそうだが、空気自体に靈力が満ちている。それが横島の不安定な魂を支えていたのだ。

『それならば宝物庫の竜鱗冠を持って行けばいいじゃろ。あれをはめていけば靈的な干渉を防ぐ事が出来るし、靈気を使わずに済む』  
竜鱗冠は本来懲罰用の道具である。老師の緊箍児のような形のその冠は、靈的能力を封じ込める効果を持つ。今の横島には助けになる道具だ。

『横島に一つ、くれてやろう。上にバンダナでも巻いて隠せば、日常生活でも目立たんじゃろ』

「え、いいんすか？ 俺、それつけたら所長の所へ行っても…」

振り向くと小竜姫たちは頷いた。途端に明るい顔をする横島。やった、所長の所へ行ける！ 天竜たちと一緒になら、所長を守る事もできる。そして…和樹を応援するくらいはできるだらう。ここで悶々としているのはもう嫌だった。

「では、行くぞ横島。余が担いで行つてやろう、光栄に思え」

「えっ、いや、どつちかつて言つと藤姫様とか小竜姫様に抱きついて行きたいんすけど…」

そう言つて縋るような視線を送ると、二人は首をふる。

「この身体は和樹さんのものですから」

「悪いけど無理だね。触れられただけで妊娠しちまいそつだよ」

どんな化け物だ。

横島は「不公平だー!」「差別だー!」と泣いて地団駄を踏んだが、聞き入れられない。それを見た天竜はため息をついて横島に言った。

「余だつて和樹が羨ましいのだ、我慢しろ! モテない男同士仲良く行こうではないか」

「いーやーだー! チチー!」

暴れる横島を小脇に抱えると、天竜は老師に頭を下げてからゲートを開く。藤姫たちが先にゲートをくぐつた後、誰にも聞こえない小さな声でボソツとつぶやいた。

「はあ…小竜姫はやはり和樹が好きか…。分かつておつたが、キツいな…」

天竜は目の端に涙を滲ませると、それを乱暴に拭つてゲートに飛び込んで行つた。

残された老師は…

『心も、大人になってきとるのう…何事も経験じゃよ天竜』

微笑みながら煙管を口にくわえるのだった。

その日、日本の気象庁の人達は余りに奇妙な現象を目の当たりにして声を失ったと言う。凶悪なまでに巨大で勢力の強かった台風。それが本州上陸と共に急速に勢力を弱めて、ただの低気圧になってしまったのだ。このような現象を見た事の無かった人たちは、ただ混乱するばかりだった。

それは台風と一体化していたミチエも同様だった。

それまでその強大な力で和樹を一方的に叩きのめして来た。巨大な雲の塊で拳を作り、それで和樹を殴りつけた。羽虫のように逃げ惑う所に雷撃を放ち、何度も叫び声をあげさせた。しかし…

分身たちの張っていた退魔結界が、消えてしまった。それだけではない。靈気の供給をしていた台風からどんどん靈気が無くなっていったのだ。今や台風はただの低気圧となり、ミチエの身体となっていた雲も小さくなってきていた。

『まさか…全部やられたの!? あれだけの力を使って作り上げた

分身たちが！？」

信じられない、という声をあげる雲の塊。その言葉に和樹は今何が起きているのかに気づいた。

（みんな…。戦ってくれていたのか…）

和樹の目に涙が滲む。

一人じゃない…

戦う前に皆が言ってくれた言葉。心の支えになってはいたが、まさか本当に一緒に戦ってくれていたとは。

胸が、震えた。

満身創痍の身体に、力が漲ってくる。

そして和樹は脳裏に懐かしい声を聴いたような気がした。

（さあ顔を上げて。皆があなたを応援してる。元気な所、見せてあげなきゃ）

ああ、そうだな。

期待に込めなきゃ、俺らしくないよな。

和樹の周りを、光が舞う。それは無数の蛍。数え切れない攻撃に晒され続けた身体をいたわるように、光が包み込んだ。そして…

光の中から一人の魔人があらわれる。

それは、かつて神魔の大軍を退けた最強の戦士。

魔人横島忠夫の姿であった。

## 第六十九話 最後の激突のはなし

急な勾配を上りきり一息つこうとしたイズナは、後方から走ってきたダンプカーに轢かれそうになり、慌てて身をひるがえす。飛び出した先の道路脇はコンクリートの斜面となっており、イズナはそのまま身体を打ちつけながら転がり落ちた。

イズナは血塗れになりながらも、何とか斜面を蹴って草むらに落下する。それでも強烈な衝撃を受けたが、アスファルトに叩きつけられるよりはずっといい。何とか立ち上がると、朦朧とした意識の中空へと鼻を突き出した。

風に潮の匂いが混じっている。海は近い。もうすぐ、会える。ならばここで倒れている暇なんてない。

イズナは走り出した。

四肢は悲鳴をあげ、激痛が意識を奪おうとする。しかしイズナは耐えた。和樹の顔を思い浮かべ、日陰の顔を思い浮かべ…ルシオラや、タマモ、シロ、そして…。

止まってなどは、居られなかった。これ以上和樹を苦しめたくない。そして母を…美神美智恵を、苦しめたくはなかった。自分が名乗り出れば終わるのだ。和樹と別れるのは辛いけど、もう充分夢を見た。幸せだった。次は…あの子が幸せになる番。もう自分に望むものは何も無い。あるとすれば、この世界で和樹たちが幸せになる事だけ。

終わらせる、この戦いを…



イツナは歯を食いしばって道沿いの石階段を上りきると、元の道に復帰し、また海へと向かって走り出した。

ミチエは魂が震えるのを感じた。目の前には、娘を殺した男の姿が。魔人の最終形態となった和樹：横島忠夫がいる。怒り、憎悪。そうした負の感情が沸き起こってくるのを感じていた。

『そう…その姿をとるの。でもいいのかしら、陸は近いわよ？ 一般人が巻き添えを食らったらただじゃ済まないわ』

「ああ、それなら大丈夫。何のためにあんたの攻撃を食らってたと思っただ？ どの程度の力まで出しても大丈夫かは見極めてるよ」

ミチエは強烈な力を行使しつつも、微妙に力を調整しながら陸への影響を与えないようにしていた。それに気づいた和樹は、どのポイントでどれだけ力を使っているか観察していたのだ。

「ここなら1500マイルまで出せる。それだけ扱えれば問題ないだろ」

『…いけ好かないわね。その得意気な表情、凍りつかせてあげるわ』

あの道化師が冷静な顔をしているのが、無性に気に入らない。そ

う感じたミチ工は雲の身体を崩し始めた。もうこんな大きな身体は非効率なのだ。雲を分解しつくすと、中から元々のミチ工の姿があらわれる。

ミチ工は素早く移動すると和樹と陸の間で止まった。

『なら、陸を背に戦わせて貰うわ。これなら霊波みたいな広範囲の攻撃は出来ないでしょ』

この男は甘い。いざとなれば、こうした方法だつて取れるのだ。状況は変わらずこちらに有利なハズ…ミチ工はそう考えていた。しかしその時…

陸からスピーカーを使って大きな声が響いてきた。

『あー、てすてす！ これはマイク入ってるのか？』

後ろで小さく、入ってるのね〜！…という声が。誰だ？

『コホン！ 余は天竜だ、和樹とミカミミチ工よ、よく聞け！』

天竜！？

これにはミチ工だけでなく和樹も固まる。何故ここに天竜が？ 困惑する二人を無視して、天竜は続けた。

『今からこの一帯の陸地は全て余が結界で覆う！ どれだけ強い力を使おうと、陸地には影響しないから存分に戦え！』

え…？ 全部？

『ちなみにここには小竜姫と藤姫も居る。鬼道もいるから結界を張るメンツとしては最強のメンバーが揃っている、安心しろ！』

困惑する二人。いや、そんなまさか。そう思っているとにわかに関心の世界が輝き出した！

ゴゴゴゴゴゴゴゴ...

地なりのような音が響き渡る。同時に、光の壁が陸地の前にあらわれた。それはまるで万里の長城のように、どこまでも陸地に沿って続いていく。

「は、ははははは...天竜、お前どんだけ成長したんだよ...」

もう笑うしかない。和樹はミチエに向かって話しかけた。

「いい加減諦めた方がいいんじゃないか？ 俺に勝っても、後に控えてるのがアレじゃ勝ち目は無いだろ」

『...構わないわ、そんなの』

ミチエは、表情を崩さない。ただ淡々と言葉を口にする。

『私は娘の仇をうつ。私にはそれしか無いの。アナタを殺したら、逃げてまたチャンスを待てばいいしね』

やはりミチエは変わらない。和樹は腹を括った。やるしかない。ここで決着をつけるしか、もう道は無かった。

和樹は力を解放する。

ミチエも残されたエネルギーを全て使って攻撃体勢に入る。

「行くぞ隊長。ここで、全てを終わらせる」

『望む所よ。終わるのは、アナタの命なんだから』

両者が言葉を交わした次の瞬間。

巨大な爆発音と共に、衝撃波が大気を震わせた。

ドガアアアアアアアンツ！！！！

それは今までとは全く違うスケールの爆発。和樹の霊波砲がフルパワーで放たれたのだ。その威力は暴走アシュタロスの波動砲に近い威力。ミチエには、正面からぶつかり合う力はなかった。すぐに無理だと判断、全力で雷撃を放ち、方向をそらして光の壁にぶつかる。天竜の結界が無ければ確かに陸地は消し飛んでいた。

『な、なんて威力なの！？』

「喋ってる暇なんかねえぞ！！」

和樹はミチエの前に瞬間移動すると一気に肉弾戦で畳み掛ける。ミチエは超加速並のスピードで何とか捌こうとするが…

ガガガガガガガガガッ！

まるでマシンガンのように繰り出される和樹の拳に手も足も出ない。霊圧に押されたミチエは防ぎきれずに後方へと吹っ飛ばされた。

『きゃあああつ！』

重い。重すぎる。例えるなら1トントラックが間髪入れずに何十台も突っ込んでくるようなもの。最初の雷撃に力をかなり使ったミチエに、防ぎきれるわけがなかった。

『殺す…どれだけ力の差があるうとも、アナタだけは絶対に殺してみせる！』

それでも諦めないのが、ミチエがミチエたる所以なのだろう。その執念だけは、誰にも負けていなかった。相手が巨大なら、こちらは圧縮した点で攻撃して活路を見出すしかない…そう考えたミチエは、エネルギーを限界まで圧縮した雷撃を放つ事にした。点で突破して致命傷を負わせてやる、と。

『ウオオオオオッ！』

ミチエの右手に、異常な濃度の霊気が集まる。それは小さな光の粒になってから奇妙な回転を始めると、和樹に向かって猛スピードで撃ち出された。

しかし。

『拡』『散』

シユワアアアアン…

『なっ…！？』

文珠によつて、拡散されてしまった。

「悪いけど…収束は俺の得意技で、弱点だつてよく知ってるんだよ」

『うう…、この化け物が…！』

勝てない。いくら何でも、実力に差がありすぎる。ただでさえ規格外の強さを持っている上に、文珠まで使うのだ。反則にも程がある。

しかし…娘の為には、諦める事など出来なかった。せめて和樹だけでも殺さなければ。いや、その後にはひのめだ。まだ消えるわけにはいかない！

『まだよ！』

ミチ工は拡散した靈気を一瞬で集め直す。その速さに和樹は一瞬目を見開いて驚いたが、すぐさま文珠を手に迎撃体勢に入る。ミチ工は先ほどのような収束した雷撃を連発した。

ズガアアアアンツ！

ドガアアアアンツ！

今度は拡散されずに和樹にクリーンヒットした。これなら効いただろう…そう思っていると、もやの晴れたそこには無傷の和樹。先

ほどの収束した雷撃の球は和樹の張った結界に食い止められていた。そして。

『消』『滅』

今度は再利用されないように消されてしまった。

ミチエの心は…音を立てて折れてしまった。これでは勝ち目が無いではないか。もう諦める他は…

そんな事を考えた、その瞬間。

ミチエの身体に異変が起き始めた。

『殺す…殺す、ころす、コロすコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス！』

突然身体が言うことを聞かなくなり、全身の靈気を暴走させる。なりふり構ってはいられない、とばかりに身体を構成する靈気さえ総動員して、ミチエは雷撃を放つ準備に入る。和樹はその姿を見て戸惑った。

「それじゃ消えてしまっただろう！ あんた、美神さんを復活させて一緒に暮らすんじゃないのかよ！」

『コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス…』

駄目だ。もはや思考も壊れている。これでは…もう隊長なんかじゃない。ただの妄念に縛られた爆弾だ。和樹は最強の策士の変わり果てた姿に複雑な気持ちになった。

隊長…何で、そうなってしまったんだ。全て俺のせいなのか。

和樹は辛い表情を浮かべながら右腕にハンズオブグロリーを展開する。極限まで強化した白銀の刀を構えると、最後の攻撃に備えた。

この攻撃で、全てが終わる。

全神経を集中して、和樹は目の前のミチ工を見据えた。

オカルトGメン作戦本部のテントの中には、各地で戦いを終えたGSたちが戻ってきていた。もはや風もやみ、風よけに置いてあった車は移動している。ユリ子やシロのような異常な視力の持ち主以外は、皆ヒヤクメのパソコンのモニターで戦いを見守っていた。

「これが…和樹の本気なのか…」

横島は半ば呆然としながらつぶやいた。タイガーやピートも同様の反応をしている。あまりのスケールの違いに、本当に一緒に試験を受けた仲間なのかと思ってしまった。あれは本当に手加減していたんだ…。横島はそれを実感していた。



「横島君…横島君はあそこまで強くならなくてもいいんだよ。うまく言えないけど、きつとあれは沢山悲しい思いをした強さだと思っの…」

傍らにいたひのめが、横島を見上げながら言った。それはGSとしての勘なのかは分からない。ただ、事情を知ってる天竜たちはその言葉に頷いていた。

「横島よ、気に病む事は無い。人として生きるならお主は充分強いぞ」

天竜の言葉を聞いた横島は、力無く首を振った。

「いや、そうじゃないんすよ。アイツ…アイツだって、普通に生きてきたかったハズなんだ。アイツは俺の可能性の一つだから…きつと根っこは同じなんだ。なのに、何でこうなっちゃったのかわかって。何でこんなに強くならなきゃいけなかったのかわかって…そう思ったんすよ」

そして悲しそうな瞳でモニターを見つめた。

「アイツどこに行っちゃうんだらうな…。戻って来れるんかな…」

その言葉に、天竜たちも考えさせられていた。

海岸沿いに停めてあるクルーザーの上では、ユリ子とシロがデッキに腰を掛けて海上で戦う和樹たちを見つめていた。カオスは酔って船室で寝込んでいる。マリアとセイレーンはその看病をしていた。

「シロさん…戦わないんですか？ シロさんなら、強いから参加できると思ってますが…」

「いや、無理でゴザルよ…。そもそも、最初の爆発ですら拙者の身体では耐えきれないでゴザル」

シロは、間近で戦いを見て…自身の未熟さを痛感していた。あの時全力で戦う横島を見ていたハズなのに、あの爆発の威力すらよく分かっていなかったのだ。自分を参加させない理由…それは過保護だとかいうのではなく、単純に弱かったからだ。それすら自分は気づかなかつたのか。シロは泣きたい気持ちになっっていた。

和樹はシロを守りたかつた。まだ弱いシロは、守る対象だったのだ。和樹を責める権利なんて、自分には無い。シロは悲しくて涙を流した。

そんなシロに寄り添うように、ユリ子はシロの隣に座っている。優しく背中を撫でて、静かに話しかけた。

「シロさん。和樹さんはいつも一人で戦っていたんですか？」

「…いや、普段は拙者と二人で戦ってたでゴザルよ。ただ…本当に危険な時は、一人で行ってたでゴザル」

「じゃあシロさんは相棒で…守りたい人でもあつたワケですよね。それって、凄いなと思います。きつととても大事にされていたんだと思いますよ」

ユリ子はそう言って少し悲しい笑みを浮かべた。

「私は和樹さんの隣に立った事が無いんです。ただ、守られるばかりですから」

「ユリ子殿…」

「でも私はそれでいいんだと開き直りました。私は和樹さんと一緒に戦えないけど…お帰りなさいって、言ってあげられますから。シロさんも、シロさんに来れる事を和樹さんにしてあげればいいんだと思いますよ」

その言葉にシロはハツとする。そうだ、戦う事ばかりに気を取られていたが…重要なのはそうじゃないだろう。どんな事でもいいから、役に立ちたい。初めの頃、当たり前のように抱いていたその気持を忘れていた。

「そうで…ゴザルな。すまない、ユリ子殿。拙者は大事な事を思い出したでゴザルよ」

「いいんですよ、礼なんて。同じ、和樹さんを好きな仲間じゃないですか」

ニツコリと笑いあう二人。自分たちに来れる事を。だったら、この戦いが終わったら、いつものように飛びついて顔を舐めてあげよう…それで、いつもの和樹に戻してやるのだ。「人前はイヤアア」と言わせて皆が大笑いするような…そんな日常に戻してあげるのが、自分に来れる一番の役割かもしれない。シロはそう考えながら、海上で戦う和樹を見つめていた。

坂道を疾走する狐が、光の壁にぶつかると。強力な防護結界。それは海岸沿い一帯全てを覆っているらしい。イツナは力無く壁を引っ掻くが、そんな事では当然ビクともしなかった。

この壁の向こうに和樹クンがいる。そして…ママがいる。どうにかして突破しなければ。イツナは悩み…気づいた。ああ、自分にはコレがあった。

それは首から下げた御守り袋。和樹がくれた水晶文珠だった。大切にしていた、宝物。和樹と自分を繋ぐ絆だと、どんなピンチになっても使わずにとって置いた物だった。

霊力は使っていないので充分あるはずだ。結界は信じられないくらい強力だが…。この水晶文珠だけで破れるか分からないけれど、これに賭けるしかなかった。

「コン！」

水晶文珠に『破』の文字が浮かび上がる。イツナは祈りを込めて結界に投げつけた。すると…

パシユッ…

小さな穴が。本当に、小さな穴が開いた。イツナはそこに向かって一気に突っ込む！ 身体を変形させ、細長い紐のような状態で無理矢理穴の中を通り抜けた。

無論、元の身体に戻った途端激痛が身体を襲う。

「ギヤウウ…ギ、ギギ…」

本来なら出来ない事を無理矢理やってしまった代償はデカかったが、これで結界は突破した。

キツと、イツナは海の方こうを見る。膨大な靈気を纏った母と、刀を手にした和樹の姿があった。あと少し…間に合え、身体！ イツナは最後の力を振り絞って、海面を猛スピードで駆け出した。

時を同じくして。

結界を張っていた天竜たちは奇妙な感覚を覚えた。微妙な違和感が、天竜、藤姫、小竜姫、鬼道を同時に襲ったのだ。

「小竜姫、今のは何だ？」

「さあ…殿下は何もしてないですよね？」

「誰か集中力を切らしたのかい？」

不思議そうにする三人。ただ鬼道だけは敏感に察知していた。

「天竜はん、これ結界破りの札使われた時と感覚似とるわ。誰か、結界の向こうに出たんちゃうかな」

「何！？ ヒヤクメ、すぐに調べるのだ！」

「了解、なのねー！」

結界から出た…それは非常にマズい。フルパワーの和樹とミチエの戦いに巻き込まれたら、神族だって消し飛ばされかねないだろう。今から助けに出るのは不可能ではないか…。出来る事なら、気のせいであつて欲しかった。が、現実はいつても非情である。

ヒヤクメはモニターを見て顔面蒼白となる。それは一緒にモニターを見ていたGSたちも同様だ。よりにもよつて、和樹が一番大切にしていた存在が…イツナが海面を疾走していたのだ。

「イツナちゃん、駄目なのねー！ 戻つて、戻つてくるのねー！！」

「イ、イツナだと！？ ヒヤクメ、スピーカーだ、スピーカーを使え！ はやく和樹に知らせるんだ！」

天竜がその言葉を発したその時。

海がまばゆい光に包まれた。

ミチ工は自分でも今の自分が異常であると分かっていた。生き延びなければならぬと思った次の瞬間には、自爆に近い攻撃を選択してしまう。こんな破綻した考えを持つなんて、少なくとも生前には無かった。

そもそも、和樹を殺して何になるというのか。ひのめがいるから、令子が生まれぬという証拠でもあるのか。なんだかしつかり考えようとすると頭がぼんやりとして来て、代わりに言いようのない怒りが沸いてくるのだ。おかしい事をおかしいと思えない、そんな状態が長く続いていた。

しかし、それももう終わる。

私は確実に殺される。だが、もういいじゃないか。彼を追い詰めたのは私なのだから。それにもう疲れた。これで楽になれるなら…楽になりたい。令子、ごめんなさい…あなたの姿を消える前にもう一度見てみたかったわ…

ミチ工はそんな風に考えながら、両手を和樹に向ける。身体はもはやミチ工の意思を無視して動いていた。そして。

巨大な雷撃が、放たれた。







## 第七十話 美神令子のはなし

美神令子にとって、横島忠夫という人物はかけがえのない存在だった。それは二人を知る人間なら誰しもが気づいている事だったが、美神令子自身がそれに気づいたのは全てを失った後であった。

誰も居ない事務所で一人、部屋を眺めていて…なんだ、初めの頃に戻っただけじゃないかと強がり口にした時。

初めて横島が事務所を訪ねて来た時の事を思い出して、涙を流した。

あの日、横島がやって来てから全てが動き始めた。仲間が増え、楽しい思い出もたくさんできた。騒がしい日常が当たり前で、まるでジェットコースターのような毎日を皆で乗り切ってきた。しかし、今は誰もいない。それが、受け入れられなかった。

令子は最初、怒りにまかせて横島のいた名残を消そうとした。座っていた椅子、使っていたマグカップ等、全て処分してしまおうとひとまとめにして物置と化していた部屋に突っ込んでいた。が、結局それを捨てる事など出来なかった。

仕事に明け暮れ、疲れた身体を引きずる毎日を送る令子。辛い日々々に心が折れそうになった時は、あの物置部屋に置いてある椅子に腰かけて、思い出の中の横島に話しかけていた。

その時、いつもその手に握りしめていたのは文珠。横島の靈気の結晶である文珠を身につけていれば、彼の気配を感じる事が出来たのだ。仕事などでは、一切使わず…ただ、思い出の時間に浸る為だ

けに大切にとつていた。

今日は、こんな事があつたんだ。

横島クンなら、どうやってたかな。

あはは、馬鹿ね。だから、あんたは丁稚のままなのよ。

楽しかった日々を思い出しながら、令子は暗闇の中で涙を流す。それでも、横島を想う言葉を口にする事が出来なかった。

(大……嫌い、よ……アンタなんか……)

胸に文珠をきつく抱きしめるようにする令子。大粒の涙をポロポロとこぼし嗚咽する姿を、人工幽霊番号はただ静かに見守っていた。

横島忠夫独立騒動に端を発したGS業界の変動や美神除霊事務所  
の転落、神魔の政治的な動きは、後に反デタント派によるテロ行為  
や妖魔保護区の襲撃という最悪の結末に向かって突き進んで行った。  
令子はその騒動において反デタント派勢力に利用され、横島暴走の  
引き金となってしまうのだが、そこで利用されたのが横島への歪  
んだ恋心だった。

手に入らないなら、壊せばいい。こちらを覚えてないなら、忘れ

られない傷を刻みつけなければいい。気づいてもらえないなら、振り向かざるを得ないような騒ぎを起こしてやればいい。そんな結論に至ったのは、果たして自分だけの意思だったのだろうか…。令子は、深く考える事も出来ないまま、妖魔の里の襲撃に参加してしまう。

そこで見つけた、桐の小箱。

横島が大切にしていたルシオラの身体。小さなホタルの形をしたその魂の欠片を、令子はあるうことか横島の目の前で破壊してしまう。

憎悪に彩られた横島。怒りに我を忘れ、ただの悪鬼と化した。そして、真つ先に令子に走り寄ると、その腹を鋭い爪で切り裂いた。

何度も、何度も。

ただ憎しみを込めて切り裂いた。

その姿を見て、令子は微笑みを浮かべる。ああ、やっと私を見てくれた。今だけは、コイツは私しか見ていない。そんな歪んだ幸せに浸っていた令子は、横島の目を見て自分の間違いに気づいた。

違う。こんな目をして欲しかったんじゃない。こんな悲しい顔をして欲しかったんじゃない。何故、こうなってしまったのか。私はただ、横島クンに戻って来て欲しかっただけなのに…

薄れゆく意識の中。

令子は最後の最後で正気を取り戻していた。そして、自分の亡骸を抱きかかえる横島を見ながら届かない声を上げる。

(ごめんなさい、横島くん…。私はアナタを苦しめる事しか出来なかった…)

身体が光の粒になって行く。これが、死ぬという事なのだろうか。令子は、去って行く横島の後ろ姿に「さよなら」と告げると空へと上って行った。

令子が次に意識を取り戻したのは、見た事も無い不思議な空間だった。全てが歪んだ、渦巻きだらけの奇妙な部屋に、令子は仰向けに寝かされている。それを見下ろすのは、アシュタロス事変の際に姿を見せたあの最高指導者の神々だった。

『おはようさん、目え覚めたか?』

『私達の声が、聞き取れますか?』

何かなんだか分からない。令子は不思議そうな顔で神々を見上げたが、まずは質問に答えなければと頷いてみせた。

『よっしゃ、なら話を進めるか。えっとな、横つちがあの後どうなつたかまず見せるからな。失神せんとしっかり見といてな』

関西弁の方の神がそう言うと、令子の脳裏に凄まじい光景が広がる。横島忠夫最後の戦いの模様が、まるですぐそこで繰り広げられ

ているかの如く鮮明に映し出された。

「これは…」

『横島さんの最期です。暴走した後、彼は神魔の大軍を一人で相手にして、生命活動を停止してもなお戦い続けました。』

『その後は映像の通りや。横うちには、ちょっと違う世界に移行してもらってな。そこで、今度こそ幸せに暮らしてもらおうってん』

横島は、神々に支えられて世界から消え去った。その先は、ここよりも平和な世界だという。それを聞いた時、令子は心から横島の移行を喜んでいた。良かった、このまま人生が終わるだなんて、余りに可哀想だ。違う世界でも、そこで幸せになれるなら…それは、素晴らしい事だ。横島には、幸せになつて欲しかった。

「良かった…本当に…」

令子が涙を流すと、サタンは少し驚いたような顔をした。

『何言うてん、アンさんも行くんやで？』

え？

『そうですよ。アシユタロス事変の時はあなたにも救われました。あなたに対しても、神魔は大きな借りがある。あなたにも、もう一度やり直すチャンスを与えたいのです』

そんな、私なんかが…

令子は首を振った。それは、望んではいけない事。また生を受けても、きつと自分は彼に迷惑をかけてしまう。そんなのは、嫌だった。

「私なんかより、ルシオラを復活させてあげて。彼に必要なのは、あの子だから」

「ん？ あー、ルシオラのねーちゃんか。それな、やりたいけどアカンねん。横っちの魂と完全に融合しとるからな、分離はまだできん」

『器は用意してるんですけどね。中々都合良くはいかないものです』

最高指導者の言う器とは、『神の器』という物。魂の入れ物であり、横島はこの神の器を使って芦原和樹という人物となった。その魂に適した入れ物となる、神界の秘宝である。

『アンさん、そんなに転生すんのが嫌か？ あんな終わり方にはなつたけど、横っちとまたやり直すチャンスやぞ？』

「けど…きつと、また傷つけてしまうわ。私を見ただけで、辛い思い出を蘇らせてしまおうと思うし…」

どうしても渋る令子に、神は提案をする。

『ならば、こうするのはどうですか。神の器は、今の所ルシオさんの分離まで使いません。一応、九尾のキツネの欠片という設定で神社に保管されています。そこで、しばらくアナタに器の中に入れてもらいたいです』

その言葉に驚いたのは、令子だけではない。サタンも驚いていた。

『いや、アカンて。あれは横っちの相方として登録されとるルシオラのもんやから…美神のねーちゃんがああ器で横っちと話すと、器が拒絶しよるで！』

『そうでしょうね。ついでに言うと、ルシオラさん以外の魂が入ると負荷がかかります。これは器が悪霊に取り憑かれた時の為の機能なのですが、アナタでしたら一年保つのが限界でしょう。どうですか？ 一年、器を守り続けるというのは。他の悪霊が入らないように、アナタが中に入っている。その間、横島さんに正体を晒さないならば彼と接する事も出来ませう』

これは…

いいのだろうか。ルシオラの器を守る為ならば…横島と同じ世界に行っても、いいのだろうか。

迷う令子を、神は静かに見つめていた。サタンが『も、もうちょっと条件優しく出来んかなあ』と言ってみたりしたが、無視する。

しばらく悩み抜いた末に、令子は顔を上げて言った。

「それで、横島クンの為になるのなら。…少しでも罪を償えるのなら、構わないわ。私を…私を、神の器に入れて下さい！」

今まで相手が神だろうが悪魔だろうが、納得できなければ頭を下げた事なんて無い令子。しかし、この時ばかりは頭を下げた。

『良いでしょう。それではこれから一年間…あなたを神の器に入れます。ただ、この場合アナタは美神令子とは違う存在となりますから…前世の絆や、横島忠夫との縁もその世界では無くなりますよ。』



それでも良いのですかね?』

頷く令子。

それは、仕方がない。

自分には、本来見る事すら許されない世界なのだから。横島と同じ世界に存在出来るだけで幸せなのだ。

しかし、そんな決意を胸にしている令子を見ていた二人の神は、内心でほくそ笑んでいた。横島忠夫が、美神令子をそのまま消すワケがない。きつと、残ってくれと泣いて引き止めるだろう。横島の幸せを望むなら、残らざるを得ないハズだ。

神々は、横島の幸せだけでなく、令子の幸せをも願っていた。

令子の身体を、虹色の魔方陣から溢れ出る光が包み込む。その光の中で、令子はゆっくりと目蓋を閉じた。開かれるゲートはその光ごと令子を飲み込むと、横島たちの居る世界へと転移させていった。

### 【美神令子】

目を覚ますと、私は森の中に一人佇んでいた。すぐそばには大きな岩があつて、そこに霊的な繋がりを感じた。これは…私を縫い付けている封印か楔のような物なのだろう。ボンヤリとした頭で思い出しているところ…

ああ、これは殺生石だ。

神様が言っていた九尾の欠片というのはこの事だったのね。身体を見ると…それは、どこからどう見てもキツネの姿。私は、九尾の狐の一部になっていた。

そう言えば…私、タマモを殺してしまいそうになったっけ。これも、因果応報かな、なんて思ったりした。

私の役目は、この身体を一年間守り通す事。そして、その間横島クンに正体を知られないようにする事。でもこれなら、大丈夫だろう。ここは強力な人払いの結界が組まれているし、ここから出なければ横島クンに気づかれる事も無い。役目は、ちゃんと果たせるはず。

これは、償い。

私に出来る、唯一の償い。

この森の近くに横島クンは住んでいる。それだけで、私は幸せだった。だから、これからの一年。ここで横島クンの幸せを祈り続けよう。そう思った。

…でも。

遠くから見ただけなら、いいかな。

私は、一目で良いから横島クンの姿を見たいと思ってしまった。

本当に、私は弱い。岩のそばで過ごしていると、どうしても考ええる事は横島クンの事ばかりになる。あの林の向こうまで、散歩に来ていたら…。もしかしたら、今その木陰に居たりして…。そんな妄想を続けていたら、どうしても会いたくなってしまうた。

岩から離れるのは、ちょっと辛い。身体が強い力で引つ張られ続けるから、長くは離れられない。それでも、私は毎日少しずつ歩ける距離を伸ばして行った。

そして、ある日。

ついに近くの神社までたどり着いたその日に、横島クンと出会った。

境内で、掃き掃除をする横島クン。その姿は、あのルシオラと横島クンの面影を残していた。ああ、横島クンだ…。外見は変わったけれど、暖かい眼差しは間違いなく横島クンだ。私は、胸の震えが止まらなかった。

そんな私に気づいた横島クンは、私の方に視線を向ける。どうしよう…。見つかってしまった。戸惑っていると、横島クンは微笑んで「おはよう」と私に声をかけてくれた。

嬉しい。

凄く、嬉しかった。

私は、胸の震えを抑えて何とか声を出してみる。

「コン！」

いや、コンって。

キツネだからって、おかしくない？ でも、横島くんは嬉しそうに笑ってくれた。私はどうして良いか分からなくなってる…

逃げてしまった。

馬鹿か、私は…

でも、気づいたら走り出していたんだから仕方ない。その日は岩のそばに戻ると、横島くんとの事を思い出して嬉しくて恥ずかしくて、コロコロと転がって悶え続けた。

次の日も、その次の日も。

私は横島くんに会いに、神社へと通い続けた。横島くんはこの世界では和樹という名前を名乗っているみたいで、御近所さんから「和樹くん」と呼ばれていた。不思議なんだけれど、確かにこの外見には合っているような気がする。私も、この日から彼を和樹くんと呼ぶようになった。

和樹くんは、学生で夕方にならないと帰って来ない。私は、和樹くんの住んでる社務所という建物の屋根の下で、彼の帰りを待つようになった。

待っていれば、帰ってきてくれる。それが、ただ嬉しかった。雨が降った日なんかは、慌てた和樹くんがタオルで身体を拭いてくれる。気を遣わせて悪いとは思ったけれど、大切にしてもらえて嬉しかった。以前、おキヌちゃんが「幽霊だった頃はもつと素直になれ

たんですけど」って言っていたけど、あの言葉の意味がよく分かった。私も、美神令子ではなくキツネの妖怪になってみて…まるで子供のように、素直になれていた。そして、私は心の中で思ってしまったのだ。

…妖怪だったら、和樹クンは私を置いていかないかな、なんて…。

そんな、良くない事を考えてしまうくらい、私は幸せだった。そして、そんな私を和樹クンはもっと幸せにしよう。

私を、あの岩から切り離してしまった。そして一緒に行こうと言ってくれたのだ。私に、断る事は出来なかった。心の中で、ルシオラにごめんなさいと謝って…私は、和樹クンと一緒に暮らす事を選んでしまった。

イヅナというのが、私の新しい名前となった。それは、今の私にぴったりの名前だと思う。取り憑く妖怪、というなら今の私は神器に取り憑いているような物だから。そして不思議な事に、イヅナと呼ばれると、もう美神令子だった頃の金銭欲や攻撃的な気持ちが思い出せなくなっていた。

私は、まるで意識さえも生まれ変わったかのように新しい生を楽しんでいた。そしてそんな私を、和樹クンやそのお父さんの公平さんが暖かく見守ってくれる。まるでそれは、あの日暗い部屋で夢に見た世界そのもの。私が愛される、私の為の楽園のようだった。

和樹クンは、その後も信じられない事を次々とやってみせた。メドーサを、神族に戻して家族に迎えてしまった。死津喪比女を倒して、おキヌちゃんを人間に戻した。この世界の横島クンを鍛えて、

GS試験で優勝させてしまった。そして、いろんな出来事を通じて、たくさんの人たちが和樹クンの周りに集まっていた。

そんなたくさんのお出来事の中でも、私にとって忘れられない事がある。それは、前の世界のタマモとの再会。それまで自分の役目を忘れて幸せに浸っていた私を、彼女は叱り飛ばしたのだ。

「なんで、あんたがここにいるんだ！」

それは、浮ついていた私の心を貫く言葉だった。そう、私は罪人償う為にこの世界に来たのに、何を暖かい所でぬくぬくとしているんだ。タマモは、私の罪を思い出させてくれたのだ。

逆上するタマモに戸惑う和樹クン。藤姫が何とか説得してくれて、私はタマモと二人で話す事ができた。そして、私はそれまでの経緯を全て彼女に話す事が出来たのだ。

話を聞いたタマモは、やっぱり怒ってたけど…私がここに居るのを、許してくれた。

「勘違いしないでね。私自身は、あんたを許すつもりはない。けど…私も昔はあんたの事言えないくらい汚れていた。だから、あんたのやる事に口出しはしないわ。でもね…和樹は、凄く傷ついたのでこれ以上、あいつを傷つけないで」

私は、黙って頷いた。

私は和樹クンを傷つけない。そして、絶対にこの器を守りきってみせる。

それから、たくさんの出来事を和樹くんたちと一緒に体験して行った。海で歌ったり、お祭りで踊ったり…。でも、そんな中で私は、自身の身体の変化に気づかざるを得なくなっていた。

身体が、重い。

疲れるのが、早くなる。

それは、神様が忠告していたタイムリミットが近い事を意味していた。その事に、私以外で初めて気づいたのは、GS犬のマーロウだった。

海に遊びに行った時。偶々居合わせたタイガー君たちの一行に、かつて中学生の頃に私が世話になったマーロウが居た時は驚いて固まってしまったけど…向こうも、私を見て驚いていた。

『オメエ、人のニオイがするぜ。ワケありか…』

マーロウは、やはり凄かった。私の正体を、何となく見破っていた。見破って、私の事を理解した上で、こう言ったのだ。

『今見てる事、感じてる事。それを大切にするんだぜ。俺もお前も…そう長くはねえ。限りある生だからよ、大事に生きねえとな。』

この言葉は、その時の私には特別強く心に響いた。もうすぐ終わる命。だからこそ、大事に生きるという言葉の意味は大きい。残り

少ない命で、何か和樹クンに恩返し出来る事は無いだろうか…

その日から、私は自分に何が出来るのか考えるようになった。

そして、そんな私の心境の変化に呼応するかのよう…運命の9月がやってきた。ママ…美神美智恵の襲撃事件が起きると、私は平常心を保つ事が出来ないくらい取り乱すようになった。勿論、和樹クンや日陰…おキ又ちゃんには見せないようにしていた。二人は再会して、幸せなのだ。その幸せな気持ちに影を落としてはいけない。私は和樹クンとおキ又ちゃんの前では、努めて明るく振る舞うようにしていた。

けれど、やっぱり見てる人は見ている。

ある日、朝早くにトイレで嘔吐をしていると、藤姫にその姿を見られてしまった。

「コ…コン…」

慌てる私をよそに、藤姫はただ冷静に吐瀉物を掃除してくれた。

そして、私を抱きしめて…

「もう、いいんだよ。隠さないで、いいから。辛かったね、イツナ…」



そんな言葉を、かけてくれた。そう、藤姫は…とつくに、私の正体に気づいていたみたい。私は、その優しい言葉にただ泣くばかりだった。

「コン…、コン…！ キュウウン！」

「ああ、分かってるよ。言い出せない辛さは、よく分かるよ…」

泣きじゃくる私を、藤姫はいつまでも優しく慰めてくれた。

他にも、夜に眠れなくてボンヤリしていると、公平さんがお酒を持って来てくれた。何故か、私が前の世界で好きだったお酒ばかり。そのラインナップから、公平さんも多分私の正体を知っていたんだと思う。

酔って、大騒ぎをして。そんな馬鹿みたいな事をしてストレスを発散させてくれた公平さんには、凄く感謝している。やっぱり、和樹くんのお父さんなんだなと思った。馬鹿な振りして、ちゃんと見ていてくれる所は、そっくりだった。

そんな二人の優しさがあったから、私は決戦の前夜に決心する事が出来たんだと思う。ママとの対決を、止める。もう、和樹くんや皆を苦しませるのは嫌だ。ママの前に私が出て行けば…全ては終わるのだから。そして、ママの暴走を止める事が出来るのは私しかない。直感的に、そう思った。

翌日の朝、私はゲートを使って妙神山へと向かった。訪ねる相手は、勿論タマモだった。タマモに身代わりを頼んで、私は戦いの現場へと向かう。その計画を話した時…タマモは、不機嫌そうな顔で

私を見つめた。

「あんた、分かってない。正体を明かすという事は、和樹の元から消えるという事ですよ。なんで、そんな安易な方法をとるのよ。あんたを失った、あいつの顔を…想像出来る？」

それは…確かに苦しめると思う。和樹くんは、私を大切にしてくれてるし…。けど、元々私は後数ヶ月の命。残り少ない命だからこそ、私は大切に使用したい。私にしか出来ない事で、和樹くんの力になれるとしたら…私には、この戦いを止める事で恩返ししたいの！

私がそう訴えると、タマモは力無く頭を振った。

「分かったわよ。そんな、涙でぐしゃぐしゃになった顔で言われちゃ断れないじゃない」

良かった…

「けど、私はそんな結末なんか見たくないから。和樹の泣き顔なんて、見たくないからね。あんたの泣き顔だって、見たくないんだ。…もう、悲しいのはたくさんよ」

タマモ…

「早く行け、馬鹿。最後まで、あんたは自分勝手なんだ」

私に背を向けるタマモの声は、震えていた。ごめんね、タマモ。あなたの言う通り、私は自分勝手なんだ。

私は、最後にタマモへ「ありがとう」と伝えてから、ゲートをく

ぐった。「さよなら」「よりも」「ありがとう」「の方が相応しいような気がしたから。

それからの事は、よく覚えていない。

考える事すら難しくなっていた私は、ただ必死に海を目指した。弱った身体に鞭を打って、本来なら出せないスピードで走った。それが寿命を縮めているのを、削りとられて行く意識の中で感じていた。かつて体験した「死」が、すぐそこに迫ってきていた。

けれど、私は怖くなかった。

たくさん楽しい思い出が、私にはある。この世界で、本来ならば二度と得る事の出来なかった生を得て。見る事の出来ないハズの皆の笑顔を見る事が出来た。和樹が、笑顔だった。おキ又ちゃんが、笑顔だった。あの日、もう一度見たいと願った夢を見る事が出来た。思い残す事なんて、もう無い。

ただ、一つだけ残念な事があるとすれば。

ルシオラが戻ってくる、最高に幸せな世界を私が見る事は無い、という事。それは仕方のない事なのだけれど、少しだけ悲しかった。

そして…

私は海へとたどり着く。

結界を破り、海の向こうを見ると、和樹クンとママは互いに恐ろしい靈気を出して向かい合っていた。きっと、これが最後の攻撃になる。直感的にそう思った私は、最後の力を振り絞って駆け出した。

もう、誰かが傷つくのは見たくない。それが私のせいなら、なおさら。だから、止めないと。大丈夫、この靈核：神の器を返して美神令子に戻れば、ママの雷は防ぐ事が出来る。ママに、これ以上誰かを傷つけさせはしない。和樹クンを、これ以上傷つけさせはしない…

限界を超えて疾走する私は、神様がくれた力を解放する。それは、変化。神の器を神様に返して、元の姿に戻る能力。一度しか使えない、私の最後の力だ。

二人の間に飛び込んだ時。

和樹クンの顔を、私は見た。

その顔は、あの日の魔人の顔だったけれど…眼差しは、確かに私の知ってる優しい横島クンのものだった。

ありがとう。

そして、いじめんなさい。

光が世界を包む中、私は最後に、言えなかったあの言葉を口にした。

大好きよ、横島くん…

## 第七十一話 世界の改変のはなし

バチバチ…と、雷撃の欠片が辺りに音を立てる。和樹は、目の前の光景を理解出来ないでいた。ミチエとの一騎打ち、最後の瞬間に飛び込んできた一匹のキツネ。それがイツナだと分かった瞬間、凄まじい光と共に目の前が真っ白になった。そして、視力が回復した時。目の前に、自分の良く知る女性の姿があったのだ。

「ごめ…んなさ、い…ママ…和樹、くん…」

雷撃を受けて、力無くよろめいたのは…かつて共にたくさんの間を過ごした女性、美神令子だった。

「みか…み、さん…？」

和樹が戸惑いながら、つぶやく。が、令子が落下を始めるとすぐさま飛んで行って抱きかかえた。

「美神さん、美神さん！ 今、文珠で治療するから！」

我に返った和樹は、慌てて文珠を作り出す。「治」と入れた文珠を発動するも、令子の身体は少しずつ霊基崩壊を始めた。

「ち、ちくしょう！ なんて効かねえんだ！ 美神さん、死んじやだめだ！」

腕の中の令子に、必死で声をかける和樹。それを、ミチエは放心状態で見つめていた。

何故…こんな事に。

私が、令子を…殺してしまった…？

ミチエは、あの日…横島が令子を殺したのを知った時の事を思い出していた。あの、絶望。生きる意味を失い…私は、自殺をした。なのに、何故今またこうして生きているのだろう。何故、横島君をまた苦しめ…令子を殺してしまったんだろう。そんな疑問が心を支配した、その時。

パキイイイイイインツ！

ミチエの心を憎悪で染め上げていたアスモデウスの呪いの楔が、砕け散った。心を取り戻すミチエ。そして、やっと今の状況を理解する。

『れ、令子！　しっかりなさい！』

和樹のもとへ飛んでくるミチエ。和樹も、もう戦闘する気は無い。一緒に、令子に声をかけた。

「美神さん、お母さんも来てます！　死んじゃだめだ、諦めるな！」

和樹はありとあらゆる文字を試す。霊基を『固定』したり、『復元』したり、とにかく必死に文珠を発動させるが、効果は無い。ミチエも、自身に残された霊気を流しこもうとしたが、うまくいかなかった。

『令子、ああ…イヤよ…死なないで…』

「あきらめるな、隊長！ あんたが諦めちゃ駄目だ！」

和樹が、ミチエを励ます。その時、薄く目を開けた令子が、小さな声で話し出した。

「もう…いいから…。ママ、私も、ママの所、に…」

『何を言ってるの、令子！ 生きて、お願いだから生きてちょうだい！』

「そつだ、諦めるな！ 俺も…俺も、もう美神さんと別れるのは嫌だ！」

令子は、少し困ったような表情をしたが…微笑んで、言った。

「あり、が…とう。私なんか、に、そう言って、くれて…。それだけで…充、分…幸せ、よ…」

本当に、幸せだった。

イツナではなく、美神令子としてそう言ってもらえた。こんな幸せな事なんて、ないじゃないか…令子は、本当に嬉しそうな笑みを浮かべて、そつと目蓋を閉じた。

令子の身体が、少しずつ形を無くして行く。泣き叫ぶミチエ。和樹も、涙を流しながら必死に文珠を試す。ダメだ、ダメだ、ダメだ！ 諦めないでくれ！ 美神さんと一緒になれば…たくさん話したい事があつたんだ！ 和樹は、崩れて行く光の粒を、必死でかき集めた。

…その時。和樹たちの頭上に巨大な靈気の塊が現れる。



それは、神魔の最高指導者たち。二柱の神々だった。

『アカン、間に合わなかったか…』

『神の器が突然戻ってきたから何かと思ったら、こつこつ事でしたか…』

神々は、悔しそうにつぶやく。これから行う大仕事…それを妨害しようとした、異世界から渡航してきた反デタント派の残党を殲滅していた為に、こちらに来るのが遅れたのだった。

「お前ら…いや、今はもう何でもいい！ 頼む、美神さんを…美神さんを助けてくれ！ このままだと、死んじまう！」

和樹は、叫ぶ。コイツらなら、美神さんを助けられるだろう。そう期待を込めて言うと、返ってきたのは意外な言葉だった。

『いえ、それは出来ません。これは、彼女が我々と交わした契約です。この結末は彼女が望んだ事なのですよ』

「なっ…」

和樹は、困惑する。望んだ？

『横つち、落ち着いて聞いてや？ 美神のねーちゃんはな、ルシオラが復活した時の為の身体…神の器に、一年の約束で取り憑いとつたんよ』

『元々、彼女はこの世界に来たがらなかったのです。しかし、あなたに何か償える事はないかと神の器の守護を引き受けたのですよ』

神々は、美神がこの世界にやってきた経緯をかいつまんで話す。その内容に、和樹とミチエは驚きを隠せないでいた。

「じゃあ、美神さんは…」

『この世界に適応した身体が無いから、世界から弾かれとるわけや。何をしようと、無理なんやわ。…和樹、ほんまに美神令子を救いたいか？ アンさん苦しめた張本人と違うか？』

「救いたいに決まってるだろ！ 悪いのは美神さんだけじゃない、俺だって悪かった所もあったんだ！ 歩み寄れたハズなのに、その努力を放棄して…一方的に美神さんを悪役にしてしまった。俺は、もう美神さんを失うのは嫌なんだ！！」

それは、魂の叫び。

事務所を飛び出した時からずっと抱えていた気持ちだった。

『横島さん、一つだけ方法があります』

神は、口を開いた。

『神の器の、所有権を書き換えたなら。美神令子をこの世界につなぎ止める事が出来ます。しかし、本来のその持ち主であるルシオラは器を使えなくなるでしょう』

『キーヤん、それは…』

それは、和樹の過去を知っている人間が聞いたら激怒するである

う最悪の提案だ。世界とルシオラを天秤にかけさせ、苦しみながら世界を選ばせたあの選択。そんな思い出したくもない選択を、今度は神がさせるのだ。令子とルシオラ、どちらかを選べと。

しかし、和樹は迷わなかった。

「美神さんを、助けてくれ。ルシオラは、俺が何か方法を見つけて必ず復活させる。今は、美神さんを助けてくれ！」

和樹は、腕の中の令子をしっかりと抱えながら言った。もう、身体の輪郭がなくなってきた令子。ミチ工は、娘を助けてくれと言った和樹の姿を見て、涙を流す。

あんな残酷な選択を迫られて…迷う事なく令子を選んだ。ルシオラは自分がなんとかする、と言い放った。その力強い姿に、ただ見とれていた。本当に、強くなった。能力的にも、人間的にも…。

『本当に、いいのですか？ ルシオラさんの事は…』

「いいから早くしろ、ぶっ飛ばすぞ！」

和樹は怒りに燃えた目で神々を睨みつけた。

『ルシオラは俺の中にいる！ いつか、絶対復活させる！ けど、美神さんは今助けないと二度と会えないんだ！はやく、頼むから早くしてくれ！』

その言葉に、サタンは力強く頷いた。和樹の決意は本物だ。なら、美神令子も断れないだろう。サタンは隣の相棒に合図を送ると、空中に小さな霊気の塊のような物を出現させた。

少し、乳白色のバレーボール大の球体…神の器である。

『それでは、今よりこの器は美神令子のものとなります。さあ、美神令子。こちらへ来なさい』

途端に、和樹の腕の中で眠る令子の身体が光りを放つ。完全に光の粒となると、神々のもとへと飛んで行った。そして…神々の前で、意識を取り戻す。

『聞いたつたやろ。もう、いい加減観念したらどうや』

『やはり、彼にはあなたが必要なのです。彼の為に、この世界で生きて下さい。それが、あなたに出来る本当の償いだと私達は考えます』

「神…様……」

もう、逃げられない。本当の気持ちに、嘘はつけない。罪だとか、償いだとか、色々理由は作ってみただけ…結局、本当の気持ちは一つ。

「私、和樹クンと…横島クンと一緒に生きたい…」

そう。それが、本当の気持ち。ただ、一緒にいたい。それだけなのだ。

美神令子の告白を聞いたサタンは、すぐさま術式を展開する。虹色に光る魔方陣が空中にあらわれると、神の器が強烈な光を発して美神令子を包み込んだ。隣の神は、余波が周囲に影響を与えないように結界を張る。下手をしたら和樹ですら消し飛ばされかねない、恐ろしいエネルギーが渦巻いていた。そして…

凝縮したエネルギーは、虹色の卵と化す。ヒビが入り、パリパリと殻が割れると、中から一人の女性が現れた。

亜麻色の髪、美しい身体：キツネの耳と尻尾がついてはいるものの、その姿は間違いなく美神令子。和樹とミチエは、その姿を見て思わず涙を流す。それは先ほどまでの涙とは違う、喜びの涙だった。

「美神さん！」

『ああ、令子！ 良かった！』

二人は、すぐに令子のもとへと飛んで行く。令子は、少し恥ずかしそうに笑った。

「ごめん……やっぱり私、この世界で生きていきたいの。許して、くれるかな……」

「当たり前じゃないですか！ 俺、俺：また一緒になれたらって、ずっと……」

和樹も、もう言葉が出ない。それくらい、こみ上げてくるものがあったのだ。ミチエも、ただ令子を抱きしめて泣き続けた。

しばらく、そうしているよ。



和樹はとっさに防護結界を張る。一体何が？ そんな風に思っ  
て空を見ると、その切り裂かれた空に不思議な物体があらわれた。そ  
れは…

空飛ぶブロッコリー。

「『』は？」「」

『遅いやんアシュタロス。遅刻やで』

『ちょうど、こちらも役者が揃っているのでタイミングとしては悪  
くありませんけどね』

空に浮かぶのは、コスモプロセッサだった。それは、芦優太郎  
の最高傑作。空を飛ぶ要塞と化した、世界を改変する最終兵器であ  
る。

その、空中要塞の外壁の上に、芦優太郎は立っていた。

「久しぶりだな、和樹君。娘を救ってくれた事、礼を言おう！」

「あ、芦優太郎！？ 一体何やってんだよ！」

和樹からしたら、頭がおかしくなったんじゃないかという光景。  
スケールのデカイ天空の城ごっこでも始めたのかと思っていた。

「今から、世界の改変を行うのだよ。この世界ではなく、別世界の

な

別世界？ 和樹は首を傾げる。ミチエに抱えられた令子は、その言葉を聞いてピンときた。

「まさか、因果律を塗り替えるの！？ この世界を基盤にして…」

『それじゃあ、元の世界も！？』

美神親子は何か分かったらしい。和樹は…一人分ならず少し寂しかった。

「あのー、美神さん…」

「え？ ああ、アイツ、今こうして私達が生きてるって事実で、他の平行世界を塗り替える気なのよ。どんな経緯になると、結果的に皆生きていてハッピーエンドを迎えるようにするつもりなんだわ」

なんとというムチャクチャ。

なんとというご都合主義。

コスモプロセッサって、そんなに怖いものだったっけ。

和樹は、よくあのアシユタロスに勝てたものだと言えながらに不思議に思っていた。

「イシユタル、リストにあるメンバーを確認してくれ。コスモプロセッサの補足範囲内に全員入っているか？」

芦優太郎が、インカムで要塞内部にいるイシユタルに声をかける。





最後に和樹が見たのは、相変わらずいけ好かない笑みを浮かべた、芦優太郎のドヤ顔だった。

コスモプロセッサーは、世界を塗り替える。和樹たちのいる世界…宇宙の卵から放射された光は、瞬く間に他の世界を染め上げてゆく。

ある世界では、横島はクリスマス前に事務所から独立せず、令子たちと新しい事業として妖怪たちの保護に乗り出していた。

またある世界では横島と令子が結婚して、世界最強のGS夫婦として世界中を飛び回っていた。

そんな風に、全ての世界で横島と美神は物別れする事なく、共に手を取り合って生きていた。その関係は夫婦であったり友人であったりと様々であったが、仲違いしたり、決して他者に利用されたりするようなヤワなものではない、しっかりとした絆を築いていた。

そして…光が最後にたどり着いた先に。

あの、悲しい世界があった。

雲の中を、飛んでいた。

少しずつ、意識が戻ってくる。

自分の両脇を、あの二柱の神々が支えている。ここは…ああ、元の世界じゃないか。横島は、ため息をついた。

あれは、夢だったのか。なんとも都合のいい、優しい夢。覚めなければ良かったと、残念に思う。

しかし、何だか楽しかった。あんな世界に、生きてみたかったな。そんな事を考えていると、ふと、身体感覚が戻っているのに気づく。おかしい、戦闘に邪魔だから痛覚を始めとする感覚を切っていたはずなのに。そう思って自分の身体を見ると…

身体が、治っている。

人間に戻っているのだ。

「あれ、俺なんで元に戻ってんだ？」

不思議に思っただけでサタンに聞くと、サタンは何でもないようになんて答えた。

「は？ 横うち、なんも話聞いとらんなあ。いや、言ってなかったか？」

『どちらにせよ、コスモプロセッサの力ですよ。あっちの横島さんは無傷でしたから』

コスモプロセッサ？

あっち？

「な、なあ…。あれ、夢じゃなかったのか？ 俺が、和樹になって…」

横島が言つと、神々は笑った。

『アホか、あないしんどい夢があつてたまるか！』

『私達も大変だったんですからね。…まあ、そこらへんは語られませんでしたが』

夢じゃない？ なら、何で俺は…

そんな事を口にしよつとしたその時。雲が終わり、急に視界が開けた。そこには…あの、空飛ぶプロッコリーが。空中要塞コスモプロセッサ。その外壁部分は一部広々とした野原となつており、横島たちはそこに降り立った。

「ここは…？ あれ、ここって里じゃないか。真似して作ったのか？」

横島が言つてるのは、妖魔の里の事だ。妙神山跡地に作られた里に、良く似ていた。所々民家があり、そこには子供たちがいて、世話をするグーラーがいる。走り回って遊ぶケイ、見守る美衣がいて…

「嘘、だろ…?」

横島の姿を見つけて、駆け寄ってくる皆。おキ又ちゃんがいて、タマモがいて、シロがいる。ちょっと離れた所には、少し照れているのか横を向く美神令子が。エミや冥子たちと一緒に歩いて来た。そして、その奥には背の高い男が一人。魔族らしい紫の肌と、威圧感はどう考えてもあの男しかない。

「アシユタロス!？」

『久しぶりだな、横島君』

魔神、アシユタロスであった。

「お前、何で生きているんだよ！ また、何か企んでるのか！」

いきり立つ横島。それを見て、アシユタロスはジトつとした目でサタンたちを見た。

『また、話してないのかね。毎回警戒されるこっちの身にもなってほしいものだな』

『ま、まあええやん。怖がられるうちが、花やで』

『そうですよ。変に懐かれたら魔神の名折れでしょう』

なんか、フレンドリー。何を和気あいあいとしているんだ。そんな横島に、令子は声をかけた。

「私も初め見た時は思わず殴っちゃったけど、大丈夫よ。よくわかんないけど、私達をコスモプロセッサで再構築してくれたのはコイツだから」

「美神さん…。って、再構築？」

横島が聞くと、アシユタロスは頷いた。

『この世界だけは、どう因果律をいじっても君の死後からしか調整出来ないからな。仕方ないから、魂を輪廻の輪から引きずり出して再構築したと言うわけだ。因みに、私が生きている理由は君と一緒に向こうの世界の私が、自分が生きているという情報で世界を塗り替えたからだ』

なんだそりゃ。

無茶ぶりが酷くないか…

そんな風に思っていた次の瞬間、アシユタロスの後ろの方から歩いてくる一人の女性の姿が目に入った。

それは…夢の世界で、鏡の中にいた女性。横島は一瞬、まだ夢を見ているのかと勘違いした。

だって、彼女は…

和樹じゃないか？

だって、そうじゃなきゃおかしいだろう。何故、ここに…

『君と共に、渡って来た存在がもう一つある。それが、彼女だよ』

アシユタロスが、道を空ける。横島は、走り出した。嘘でもいい、夢でもいい、また話せて触れ合えるなら、何だって…！

「ルシオラ！」

「ヨコシマー！！！」

横島の姿を見たルシオラも、走り出す。二人は、周囲の人目も無視して駆け寄って、抱きしめあった。ルシオラの目には、大粒の涙が。横島はそれを指ですくってから…ルシオラと熱いキスを交わした。

その姿を、揶揄する者は誰も居ない。二人の想いは、その場にいる誰もが知っていた。令子も、おキヌも…普段なら面白くない顔をする所だったが、今はただ祝福していた。

そんな中…アシユタロスは、二柱の神々に絡まれていた。

『どづいうこつちゃ、アシユタロス。計画になかったやろ、あれは！  
どうやってルシオラのねーちゃん復活させた！』

『そうですね。そこら辺の方法を、是非お聞きしたいものです』

『わ、分かった、分かったからくつつくなうっとおしい！ 説明してやるから離れる！ 顔を近づけるな！』

アシユタロスはウンザリした顔で二柱の神々から離れる。そして、その絡繰りを説明した。

異世界でコスモプロセッサを発動した際、芦優太郎が行ったのは横島忠夫を初めとした連中の生存事実を固定化する事だった。しかし、そこでイレギュラーが発生する。

横島が、二人いるのだ。

その世界で横島と認識されているのは、横島忠夫。芦原和樹は、神の器に横島とルシオラの因子を乗せた存在である。小竜姫とメドーサの因子は本人たちに渡したから、そこには無かった。

その芦原和樹を生存しているとした場合、こちらの世界ではどうなるか。該当人物がない為、芦原和樹は神の器に戻るのだ。そして、因子は元の身体に戻る。横島の因子は横島の身体に戻って、異世界での記憶を引き継いだ。では、ルシオラの因子はどうなるか。彼女の身体は、この世界には無い。破壊されてしまったのだ。

そこで、前もって芦優太郎はルシオラの欠片を回収していた。異世界で復元してから、コスモプロセッサ発動の際にルシオラの身



体が復元されているという設定で世界を塗り替えたのだ。

ルシオラの因子は、復元された身体に戻る。そうする事によって横島の知っている、あのルシオラとして復活する事が出来たというワケだ。

『なるほどなあ…アンさん、ようそんな方法で成功させたなあ』

『私達に内緒という所が気に入りませんが、結果オーライという事で不問としましょう』

『分かった分かった、次からは相談しよう。ただ…私の計画はこれで終わりではないぞ？ むしろ、これからが、本番だと言える』

アシュタロスの言葉に、神々はキョトンとする。しかし、すぐにその言葉の意味が分かった。なるほどなあ、とまた感心する。

『受け取れ、和樹君！ これが、私からの礼だ！』

アシュタロスが、指を鳴らした。またもや、コスモプロセッサーが発動する。横島たちが見上げる中、巨大なブロッコリーは空に向けて強烈な光を放った。



## 第七十二話 嵐の後のはなし

コスモプロセスの発動と共に陸地へと転移させられた和樹たちは、駆けつけた鬼道たちによってGメン作戦本部へと連れていかれた。そこで見たものは、非常に力オスな光景だった。

唐巢神父が、壊れていた。モニターで神々の姿を見たせいだろう。神界のトップと魔界のトップが仲良く話していたのだ。「私は何も見ていない！」と言って、ピートやタイガーたちの制止を振り切って地面に頭を打ちつけていた。

天竜たちは、結界を張り続けたせいか疲れはてていた。唯一、小竜姫だけは和樹に手を振ってくれたが、それも弱々しい。ヒヤクメに至っては、神界へのレポート作成に追われてこちらに気づかなかった。

和樹たちを普通に迎えてくれたのは、シロとユリ子だった。

「おかえり、でゴザルよ先生」

「おかえりなさい、和樹さん、イツナさん。ミチエさんも、ご苦労様でした」

言葉をかけられたミチエは驚いた。敵だった自分にまで、労いの言葉を？

「ミチエさんが呪われてあんな事をしていたの、さつきカオスさんに聞かされたんです。アスモデウス、という悪魔に呪われてたって

…」

ユリ子が指さした先には、カオスがいた。テーブルの一角で、マリアとセイレーンと一緒にお菓子を食べている。呑気なものだ。

『アスモデウス…？　もしかして、明日藻さんの事かしら。あの人、魔族だったのね…』

いや、普通に気づけ。アシユタロスといい、魔族ってネーミングセンス無さ過ぎないか、と和樹と令子は思った。

そこに、この世界の美神美智恵と美神ひのめがやってくる。

「久しぶり、ね。随分派手にやってくれたじゃない」

「マ、ママダメだよ、怒っちゃ…」

ひのめが、美智恵をなだめようとする。が、美智恵に一喝されてシユンとなった。

「悪いけど和樹君、少し席を外してくれる？　ちょっと、美神家の人間だけで話したいの」

「え、ああ…分かった」

いそいそと、テントを出て行く和樹。その後を令子について行くうとするが…

ギョツ　「えっ？」

尻尾を掴まれた。つかんだのは…

「えへへ…お姉ちゃん」

ひのめだった。

「ええ、令子も美神家の人間よ。ここに居なさい」

「え、あの、私はイツナよ？ あ、和樹クン、ちょっと！ 助けて  
」！」

思わず助けを求める令子。和樹は、テントの入り口でこちらを振り返ると…

(ごめん、美神さん)

得意のゴメンねポーズをした。

「和樹クン……！？」

ひのめにすっかり抱きしめられながら、令子は半泣きで和樹の名前を呼ぶのだった。

シロとユリ子を連れてテントを出ると、そこには横島が立っていた。横島はテントから少し離れた所に停めてあるジープにもたれな

がら、空を仰いでいた。

「横島…お前、身体大丈夫なのか？」

確か、妙神山に居ないとマズいんじゃないか。そう思って聞くと、横島は頭に巻いたバンダナを指差した。少しずらすと、何やら輪っかがあらわれる。

「竜神化しないように、霊力を封じてんだ。なるべく霊力使っちゃって言われてさ」

そう言う横島は少し寂しそうだった。が、すぐに切り替えて明るい顔をした。

「それより、ありがとうな。所長の事、守ってくれて」

「いや…ひのめさんは、自力で逃げ切ったから俺は何もしてないよ」

和樹はひのめを失いかけた。あれは、完全に自分のミス。責められてもいい事だった。

「いや、お前のおかげだよ。過程より、結果だって。結局、お前のおかげで戦いは終わったし。だから、まあ、何とか…ありがとう」

「あ、ああ…そういう事なら…」

「コイツ、どうしちゃったんだ？ 和樹は、横島の殊勝な態度に戸惑う。面と向かってありがとうと言われると、照れるもんだ。」

「ところで、話は変わるんだけど…」

「ん？ なんだ？」

「あの、令子さんて人さ。記憶の中の、あの美神さんなんだよな」

「…まあ、そうだな」

確か俺の記憶見たんだよな、コイツ。なら、知ってるか。

「…なんで、……なんだ？」

「え？ なんて？」

横島は、大きく息を吸い込んだ。

「なんで、あんなにデレてるんだチクショー！ ムチムチ獣耳美女がベタ惚れとかこの恋愛ゲームだ、この恋愛ブルジョアがあああつ！…！」

「やかましい、知るかあああああつ！…！」

ダメだコイツ。

ユリ子とシロは白けた。

「くそー、朝はコンコンで夜もコンコンか！ アニマルスタイルでキツキツね、か！」

「よく分かんねーけど、下ネタなのは分かった！ よしお前殺す！ ブッチKILL！ 動くんじゃねえぞ！」

放っておいたら、とんでもない事に。シロとユリ子は、慌てて二

人を止めに入った。

テントの中では、ミチエと美智恵が向かい合っている。とは言っても険悪なムードは無く、ただミチエの話を聞いていただけ。美智恵は勿論、令子も…ひのめも、その話を聞いて涙を流していた。

『結局、心が未熟だったから…隙をつかれたのね。そのせいで、皆に迷惑をかけてしまった。ごめんなさい、本当に…』

「…私の一存では許すも何も出来ないけれど。気持ちにはよく分かるわ」

話を聞いて、やはりミチエは自分と同じ存在だと感じた。出来る事なら、助けてあげたい。が、ミチエは死霊。ただでさえ弱まっている。これからの事を考えると、気が重い。

『いいのよ、覚悟は出来てるから』

ミチエは、悩む美智恵の考えを読んで言った。

「でも…」

死霊は、時の経過によって理性を無くす。それは、どんなに霊的



に優秀な人間の霊でも一緒だ。そのまま消えるならいいが、成仏できなければ悪霊となる危険がある。本来ならば、退治するのが普通だ。

しかし美智恵は決断出来なかった。令子もひのめも、GSとしてミチエをどうして良いか悩んでいた。

そこへ。

一人の神族が声をかける。

大きな鎌を持った髑髏：死神だった。

『ミカミミチエ。もしお前さえ良ければ、私の仕事を手伝ってみな  
いか』

『え…？ 私が、死神の仕事を…？』

それは、とんでもない話。

死霊が、魂を刈る仕事を手伝うとは…

『聞いた事ないけど…私がそんな事して、いいのかしら』

『構わん。というのも、ついさつき仕事の依頼が不自然に増えてな。助手を雇おうかと思っていた所だった。エネルギーに関しては私が与えるから、手伝ってみないか』

不自然に増えて。その言葉は、最高指導者へのイヤミだ。死神にミチエを雇わせたい最高指導者が、強引に仕事を増やしたのだろう。死神は、さすがに今回の仕事の急増で最高指導者が関わっているのに気づいた。

『今回のお前の行動は、魔族に操られていたという事で不問にされている。他の神族には文句は言わせん。だから、そこら辺は気にしないでいい』

『…だったら、やってみようかしら』

ミチエは、死神の提案を受ける事にした。このまま消えてしまうのも覚悟していたが、それでは令子を悲しませてしまつかもしれない。ならば、死神について行った方が悲しませなくて済むだろう。

『令子、私は死神さんと一緒に行くわ。あなたは、あなたで頑張らない』

「うん。分かったわ、ママ」

令子は、笑顔で言った。せつかく会えたのに離れ離れになるのは寂しいけど、二度と会えなくなるわけではない。ならば、ここは笑顔でいた方がいいだろう…そう思っていた。

こうして、ミチエは退治される事なく、死神と共に世界中を回る事となった。死霊にして、死神。後々死神は、この選択を後悔する事になる。何故なら、ミチエは優秀すぎるのだ。結局仕事をとられてまた暇な日々を送る事となるなんて、この時の死神には想像もつかなかった。

台風が消えて暴風警報が解除され、交通規制も解かれると。由比ヶ浜に集まったGSたちは次々と自分たちの事務所に帰って行く。例外なのは六道事務所で、今回の霊障に対する警備は六道の依頼だった。その手前、鬼道はオカルトGメンが現場の警備を解除するまでその場に残っていた。

「鬼道君。そこまで我々につき合わなくていいんだぞ？」

「いや、一応依頼者やから最後まで居りますわ」

西条にそう答えると、鬼道はGメンの観察に戻る。オカルトGメンがどのような警備をするのか気になっていたのだ。

…それにしても。

本当に前世と変わらないな、と鬼道は思った。前世では西条は西郷という名で、自分の上司だったのだが、同じような口調、外見、仕草だったのだ。ただ一つ違つとすれば、今の方が幾分融通が効くという事だろうか。先ほどの言葉は、西郷ならば絶対言わないセリフだった。彼なら、規律を守る事を優先して「帰るな」と言っていただろう。

けど、とにかく雰囲気そのままで、こうして見ていると当時を思い出す。西郷の下で働いていた時…こき使われながらも、あれはあれで楽しかったかもしれないな、と思っていた。

オカルトGメンたちは、台風が撒き散らした霊気を浄化する作業をしている。鬼道も符術を駆使してその作業を手伝った。

浄化作業は、戦いの終わった頃から約四時間後の夕方17時に終了した。後からやってきた一般の警察たちと交代する形で、Gメンたちは帰路につく。そんな中、一人だけポツンと残ってこちらを見ている女性の姿に、鬼道は気づいた。

本当は、六道である程度地位を築いてから迎えに行こうと思っていたのだが。どうも向こうは我慢出来ないらしい。まあ五百年も待たせたから仕方ないか、と鬼道は苦笑いを浮かべた。

「ご苦労さん。大変やったな、お互い」

「え…あ、私に？」

鬼道は、自販機で買ってきた缶コーヒーをメフィストに差し出した。戸惑うメフィスト。声をかけられるとは思っていなかったからだ。緊張しながら受け取ると、蓋を開けて口をつける。あれ、何だか凄く甘い。コーヒーは苦いので苦手だったのだが…

「確か甘党やったろ？ あの時も、高価な南蛮菓子ばかり食べてたし」

！！

鬼道の言葉に、思わず缶コーヒーを落としそうになるメフィスト。ああ、そうだった。迷い込んだ鬼道の部屋で、カステラを食べ尽くしたっけ。都から出て、山中甘い物が食べれないと嘆く私に、わざわざ山桃やアケビをとってきてくれた。甘くない食べ物には、不思議な術をかけて味を変えてくれた。このコーヒーの味が違うのも…きつと、あの術を使っているのだ。

「誠司…様？」

「今は政樹やけどな。一応、あの時の事は覚えとるで。…待たせてスマンかった。こっちから見つけに行く約束やったのに、時間かけ過ぎたわ」

もう、我慢できなかった。メフィストは缶コーヒーを手放し、鬼道に飛びついた。「本当よ、いつまで待たせるのよ！」と、泣きながら抱きしめるメフィスト。鬼道は、結構力の強いメフィストのハグに焦りながらも優しく頭を撫でてあげる。

夕日に照らされた二人の影が完全に重なり合うまでには、そんなに時間はかからなかった。

その同時刻。

東京某所のマンションでは、どんちゃん騒ぎが起きていた。

「よっしゃー、メフィスト様ナイスー！」

「もうこのまま押し倒せー！」

「おーいジューズ足りないよー！ 新人君、はやくー」

「……はい、ただいま……」

モニターの中のメフィストたちに興奮する女たち。彼女たちこそきつかわれてるのは、ジーク・フリートである。西条の代わりに、女たちの世話役を任されていた。

ジークは今回の騒動をモニターで見ていたが、和樹やミチエの規格外の強さを目の当たりにして自分のレベルの低さを痛感し、落ち込んでいた。二人とも、元々はただの人間。それに対して、魔族の自分は……。人間を下に見ていたジークには、素直に受け入れられなかったのだ。

パコーン！ 「あ痛っ!？」

不意に、スリッパが頭に直撃した。

「は・や・く！ オレンジジュース持ってきて！ ポテチも足んない！」

「そーだよサボんな新人ー」

「はやくしないと、あんたを食べちゃうわよ？」

「お姉さんの目の前でね。あはははは！」

「た、ただいまお持ちします!!！」

脱兎のごとく台所へと逃げ出すジーク。いやもう、魔族より人間の方がいいかも……。涙を流しながら、ジークはお菓子とジュースを用意するのだった。

こうして、9月の騒動は終わりを告げた。大規模な靈障だったにも関わらず、死者を一人も出さなかった希有な事件。オカルトGメ

ンやヒヤクメたちの報告書も、その事件をどう報告して良いか戸惑ったのだろう。書面を見ると、苦心した形跡が見てとれる。

きつと、あの事件の意味は和樹たち当事者にしか分からないのだ。二つの世界を渡って繰り広げられた物語。それを理解出来る者は、二つの世界を渡り歩いた人だけだろう。

ただ、あの事件によって、それぞれの人生が大きく変わったのは確かだろうだった。

例えば、六道事務所である。

六道事務所の副所長であり、次期当主候補である鬼道政樹は、オカルトGメン所属のメフィストを事務所引き抜きGS業界だけでなく魔界の注目をも集める事となった。冥子、フミ、夜叉丸、メフィストという女性たちに迫られながらも、業界トップの事務所を指して忙しい毎日を送っている。新人社員の雪之丞や勘九郎も、鬼道の持つてくる大量の仕事を文句を言いながらもこなしていた。

次に、小笠原事務所。ここは、比較的変わらない。

元々業界ナンバーワンの実績を誇っていたが、タイガーの著しい成長と座敷童子のゆかりの強運によって他の追随を許さない業績をあげるようになった。最近では他のGSに遠慮して仕事量を減らしているらしいが、本当の理由は定かではない。ただ、エミたちは毎日幸せそうだ。

美神除霊事務所は、恐らく一番変化した事務所だろう。

横島が霊力を制限する事になった。それを知ったシロが、ひのめ

の事務所に所属したいと言い出したのだ。元々人狼の里を出て東京での活動場所を持ちたいと考えていたシロ。東京にいれば、和樹にもすぐに会いにいける。そう考えていた。事務所的にも、靈能道具を使わないシロは経済的にもかなりの助けとなる。横島は荷物持ち、シロは前衛、ひのめは後衛。そのスタイルは奇しくも前の世界の美神令子たちのスタイルに酷似していた。

そんな中、和樹たちは実はそれほど変化が無かったりする。

美神令子は、神社に戻ってから和樹に一つのお願いをした。それは、なるべくキツネの姿で居させて欲しいという事。令子にとって人の姿でいるのはまだ怖いのだ。人だった頃のノリで、また心無い言葉で周りを傷つけやしないか、と。キツネの姿なら、童心に戻って甘えられる、というのもあった。和樹は少し残念に思いながらもその願いを受け入れ、神社にはイヅナのいるいつもの光景が戻った。

令子がイヅナに戻りたかった理由。その本当の理由は、実は別の所にあつた。それは、ルシオラ。令子は、ルシオラが復活するまでなるべく人の姿をとらないようにしたかった。先に復活して和樹に甘えるのは、何だかフェアじゃないような気がしたのだ。ルシオラが戻ってきてからなら…甘えてもいいかな、と思っていた。

しかし、いくら令子がそう思っても…和樹は令子に優しくしたかった。

和樹は元々イヅナを溺愛していたが、それは益々ヒートアップした。一緒にお風呂に入ったり、一緒の布団で寝たり。それは今までもしていたが、毎日ではなかった。それが今や絶えず一緒にいるようになっていたのだ。



布団の中、和樹と日陰の間に入って、二人に絵本を読んでもらったり。朝、藤姫と一緒に寝ぼけた和樹に悪戯したり。和樹とユリ子を学校まで送ったり。公平の仕事の手伝いでは、和樹と一緒に祈祷所の受付をした。家族みんな一緒だけれど、和樹とイツナは特に一緒の時間が多かった。そうした変化は、怖がっていた令子の心にも良い影響を与えたらしい。

ある日、藤姫はイツナに言った。

「明日の朝は、あんただけで悪戯してみな。きつと、和樹は喜ぶよ」それは、一度やってみたけど出来なかった事。人の姿で甘えるのはまだ気後れしていたが…

次の日の朝。

イツナは勇気を出して令子に戻り、布団の中の和樹を恐る恐る抱きしめた。藤姫の、いつもの悪戯。和樹の頭を胸に抱いて、起きた時にびっくりさせるといふものだ。

和樹は、いつも藤姫にしている時のように、令子に抱きついた。が、少しすると、その胸に顔をうずめて…

涙を、流し始めた。

きつと嬉しかったのだらう。顔を上げないのは、藤姫と勘違いしていると思わせる為。しかし胸元に涙の湿り気を感じた令子は、和樹が気をつかってくれている事に気づいた。

優しく、頭を撫でる令子。

和樹が泣き止むまで、令子は和樹を抱きしめていた。

さて、それぞれがそれぞれの日常に戻って、新しいスタートをきっていた頃。北海道は洞爺湖町に居を構える芦優太郎事務所では不穏な動きを見せる者がいた。勿論、芦優太郎である。

芦優太郎は、受話器を片手に邪悪な笑みを浮かべていた。

「ああ、ターゲットは芦原和樹。住所はファックスで送った。引退した所引つ張り出すのは悪いとは思うが、君が適任だと思ったのでね。報酬は奮発するから、是非成功させてくれ」

受話器の向こうから承諾の返事がくると、芦は満足そうに頷く。窓の外を見ながら、心の中で呟いた。

(さて、和樹君。幸せになる覚悟は出来ているか?)



## 最終話 幸せの物語のはなし

夜空を、やたらと口の悪い老人が飛んでいる。老人の乗っているソリを引いているのは、同じく年老いたトナカイ。真つ赤な鼻が目を引く、不思議なトナカイだった。

『まったく、なんでワシがまた仕事せなあかねや！ いくらあのがきにギャフンと言わせる為やからって、こんな寒い日に外出すとか老人虐待や！』

( だったら仕事受けなきゃいいでしょうに。私だって引退して久しいのです、干し草と木の実だけじゃ納得しませんからね )

『分かつとる、がつつくなアホンダラ！ ドライフルーツ一年分でも買ったるから黙っとけ！』

( ふう…、そこに上等な発酵リンゴを追加して下さい。 )

何ともテンションに差のある二人。しかしこの二人は、長年クリスマスで活躍していたサンタとトナカイであった。この掛け合いも、現役時代から変わらないノリである。

『おう、若いのがチャラチャラ飛んどるやないか。いっちょ蹴散らしたらんかい！』

( あー、はいはい、分かりましたよ )

ため息混じりに返事をするトナカイ。前方を飛ぶ若手サンタたちに顔を向ける。そして…

(赤鼻ビーム！)

ズガアアアアアアアン！

「「「「わあああああつ！？」」「」」」

赤い鼻から、怪光線を発射する。サンタたちの群れに放たれた光線は、派手な音だけを立てて消え去った。

『ひひひひひ、そんなへつぴり腰でサンタがつとまるか！ よっしや、ジョニーよ、すっ飛ばせ！』

ジョニーと呼ばれたトナカイは、驚き戸惑う若いサンタとトナカイたちへと振り向くと、それまでの温厚な口振りからは考えられないワイルドな顔つきをする。

(よく見ておくんだな。これが赤い彗星、ジョニー・ザ・スターライトの走りだ！)

そう言葉を発した途端、ジョニーの身体を赤い光が覆った。凄まじい爆音を上げると、ジョニーはミサイルのように夜空を疾走する。若いサンタたちは、一瞬で星となった伝説のトナカイの走りを、呆然と見つめるしかない。そして…

「「「「うわ、くっさー！？」」「」」」

あまりの激臭に、鼻をつまんだ。

ジョニー・ザ・スターライト。またの名を、激臭の赤い彗星。体内のメタンガスを使って激走する、色んな意味で伝説級のトナカイであった。

あの騒動から、3ヶ月ほどたった12月のクリスマスイブ。和樹と令子、日陰は商店街で買い物を楽しんでいた。普段なら令子はイツナの姿でいるのだが、今日は特別である。キツネ耳と尻尾を隠した、あの美神令子の姿で和樹のそばに寄り添っていた。

「しかし嬉しいな」。こうして二人とまた一緒にクリスマスを迎えられて…俺、一生分の幸運使い果たしたんじゃないか？」

和樹がそう言うと、二人は嬉しそうな顔をする。けど、少し表情に陰があった。敏感に察した和樹が理由を尋ねると、言いくそくに日陰が口を開く。

「実は…以前横島さんが辞めるって言った日、ちょうどクリスマスに旅行に行こうって誘おうとしてた日だったんです。あの時の事を思い出してしまって…」

和樹は、固まった。そう言えば、あの日は今のような12月の寒い日だった。ああ、あの時の俺の馬鹿！ 和樹は自分の頭をポカポカ叩く。それを、令子が慌てて止めた。

「いいの、あれはもう！　こうして今一緒に過ごせるんだから、和樹くんは気にしないで。日陰も、もう気にするのはやめましょ。これから、たくさん良い思い出を作って行けばいいんだから」

「そ、そうですね！　和樹さん、ごめんなさい！」

そうは言っても……。和樹は困った顔をするが、すぐに良い事を思いついて表情を明るくする。

「だったら、次のクリスマスは皆で旅行に行こう！　いや、来月でもいい！　正月三が日を過ぎれば時間は出来るから、温泉とか行こう！」

そう言つと、二人は本当に嬉しそうに笑った。和樹は本当に優しい。だから、本当はこうしてそばにいただけで充分なのだ。

「和樹くん、温泉は混浴の方がいい？」

「貸しきりなら、色々出来ちゃうみたいですよ」

二人が照れ隠しにからかうと、和樹は鼻から赤い噴水を噴き上げるのだった。

商店街では、主に飾り付けの道具やチキンと言った定番の物、そして互いに贈りあうプレゼントを買った。ケーキは、公平が買って

くる予定だ。前の世界では考えられないくらい金銭的に恵まれている和樹は、家族みんなへのプレゼントを買った。

「凄いわね、和樹くん。普段無駄使いしないけど、かなり貯金してるでしょ」

「うん。文庫本くらいしか買う物ないから、自然とそうなるんだ…あ、美神さんお金足りてる？ちゃんとイツナ用の口座あるから、足りなかったら言ってよ？日陰ちゃんも、足りなくなったらすぐ言ってね」

何とも気遣いの人だ。

「和樹さん、私たちは妖怪ですから、そんなにお金は必要ないですよ」

「それに…私はまだ、お金とかが怖い。また、あの頃の金銭欲が戻ってこないか、心配になって…。だから、私たちの代わりに和樹くんが買い物をしてくれると助かるわ」

美神令子は、それが何よりも怖かった。病的なまでに金銭欲が強かったあの頃を思うと、ゾツとするのだ。イツナとなって金銭欲が無くなったからこそ、あの頃の異常性が分かっていた。しかし…

「お金があると、お揚げが買えるよ？」

「こん！？」

思わずキツネ耳と尻尾が生えた。

「…和樹くん」



「あはは、ゴメンゴメン。けど、気にしなくていいよ。そりや何億円も無駄使いされたら泣くけど、皆の為なら俺もバリバリ働いて稼ぎまくるからさ。俺、そのために生きてるんだ」

こうしたセリフが、どんな効果を持つか和樹は分かっていない。それから和樹は、神社に帰る道中にたくさん甘い言葉で二人をとろけさせた。シラフでこんな事が出来るのだから、和樹は危険な男なのかもしれない。

神社に戻ると、公平は既に戻って来ていた。藤姫も台所で夕飯の支度を始めており、テーブルの上には大きなケーキの箱が3つ。今日は妙神山組が来れないからこんなに必要だろうか。と和樹が不思議そうな顔をする。なんせこのケーキ、一つ20号を越えかねないサイズなのだ。

「親父：サイズ間違えただろ」

「いや、これでいいんだ。これだけ女性がいたら、こんなのもあつという間だよ」

嘘だろ、と思っていると、ケーキを見た令子たちは目を輝かせていた。：食べそうな気がする。なんか、本当にあつという間に食べそうな気がする。

そこに、メモ書きを持って困った顔をしたユリ子があらわれた。

「公平さん、お酒の種類が分かんないです…。皆、英語じゃない横文字で書かれていて…」

「え、ああ、そりゃ分かんないか！ すまん和樹、ちょっとワインセラーに行つてその紙にあるやつ持ってきてくれないか！」

仕方ねえなあ…

和樹はユリ子から紙を受け止ると、地下に作ったワインセラーへと向かう。ユリ子も、その後をついて来た。

居住スペースである自宅と社務所は隣接する形で繋がっているが、そこにまた繋がる形で齋館という建物がある。その地下に、公平はワインセラーを作っていた。元々は御神酒の保管場所だったが、藤姫の意向で日本酒の数が大幅に減り、代わりにワインを置くようになったのだ。

「ユリ子さんには分かんないよなー。だって、藤姫がたまに飲んで場所間違えて片付けたりしてるんだもの」

「あ、やっぱりそうだったんですか。なんか、棚の数字とリストが違っなくなって思ってたんです」

よく、夜中に藤姫や公平が忍び込んで晩酌をしていたりする。あまり夜中に騒ぐと和樹が怒るので、ここで隠れて飲む習慣がついてしまったらしい。最近ではイツナまで夜中に抜け出して参加しているというから、和樹は頭を抱えていた。

「時間帯を考えてくれたら、俺だって怒らないんだけどなあ……」

何だか怖がられてるみたいで寂しい。そんな気持ちでつぶやく和樹を、ユリ子はジッと見ていた。

「ん？ ユリ子さんどうした？」

「あ、いえ、その……」

ユリ子は少しためらったが、意を決して尋ねた。

「あの、ルシオラさんという方の事を聞いてもいいですか？ その、イツナさんや日陰さんは、和樹さんの大切な人としてか教えてくれなかったので気になってたんです」

「え……あー、そうか。あの戦いを見てたなら、気になるよな。まあ、簡単に言うとかさ」

和樹は少し遠い目をして、優しい表情をする。

「俺の、命なんだ。文字通りね。俺に自分の魂を与えて、眠ってしまっただから」

死ぬ、とか消える、という言葉は使いたくなかった。彼女は、眠っている。この胸の中で。

「……きつと、綺麗で優しい方なんでしょうね。和樹さんを虜にするくらい……」

「え？……いや、ユリ子さんは何度も会ってるよ」

「え？」

「いや、芦菫子。俺の女バージョン。あれが、ルシオラなんだ。性格も…結構引きずられてるから、本当にあのまんまなんだよ」

ええー！ー！ー！っ！？

ユリ子は、愕然とした。そんな…。自分にとって、もしかしたら初めての一目惚れだったかもしれない人が、ルシオラさんだったなんて！ ユリ子はクラクラとする。これは…何という事だ。

「和樹さん…」

ガシッと、肩を掴む。

「ルシオラさん、復活させましょうね！」

「え？ あ、うん。いや、なんでユリ子さんが？」

ユリ子の目が、燃えていた。メラメラと、激しく。和樹は何だか身の危険すら感じて後ずさりする。その時…

（ん…？ 結界が震えた？）

僅かに、神社の結界が震えた。そして、次の瞬間…

ドガアアアアアンツ！

「きゃあつ！？」

「大丈夫だ、この上で止まった！」

和樹たちの真上、齋館に何かが墜落した。結界の僅かな震え…悪意だとしたら、危ない！和樹は急いで階段を駆け上がり、地上へと出る。壊れた屋根、倒れた柱。同じように駆けつけた皆の前に、よく分からない光景が広がっていた。

赤ら顔で、如何にも飲んでますといった老人。そして、ウンザリした顔で横たわるトナカイ。それは、前の世界でも顔を合わせた事のある人物。

サンタクローヌだった。

『チクシヨー、なんでこんな所に結界なんぞ張りやがるんやボケカスアホンダラ…』

客間の布団に寝かされたサンタが、罵詈雑言を吐き散らかす。それを見ながら、和樹と令子、日陰は眉をひそめた。

「また、ツスカ」

「いやよ、流石に徹夜の配達は…」

「私も、幽霊じゃないので寒いのは辛いです…」

前の世界では事務所に突っ込んで来て怪我をしたサンタの代わりに、世界中を回ってプレゼントを配った。かなり辛かったのだ。…  
というか、あれ？

「あのさ、この神社の結界は悪意とか怒り、負の感情にしか反応しないんだけど。何か、良からぬ事考えてなかったか？」

『アホか！ んな事一々考えて空なんか飛べるかボケ！ さっさと仕事終えて家帰って芋食って屁えこいて寝る事くらいしか考えてないわアホンダラ！』

「……………」

これが家を破壊したやつ言葉か。和樹はいつそ、全身粉碎骨折させてやるうかと思っていた。すると…その隣で横になっていたトナカイが口を開く。

（すまない、それは私だ）

『な、なんやと！ ジョニー、なにさらしてんねや！ いてまっぞワレ…！』

（百貨店の看板のトナカイに欲情してしまった。全ては私の責任だ、すまない）

なんと…。潔いが、アホ過ぎる理由だった。

頭にはきたが、謝ったのなら許すしかない。和樹は文珠を作り出すと公平に渡した。

「今回は特例って事で文珠で直していいだろ？ 加減は、親父の方でやってくれ」

「ああ、分かった和樹。」

公平は、和樹に境内で無闇に文珠を使うなど言っていた。掃除などを文珠で行うのは、神明奉仕の道に反するという考えからだ。だが、今回は仕方がない。文珠を受け取る公平。その時、先ほどのやりとりを聞いたサンタの目が大きく見開かれた。

『か、和樹！ そう言えばそんな顔やった！ なら、お前が芦原和樹か！？』

「え？ ああ、そうだけど…」

『よっしゃ、何たる幸運！ あんな、ワシの目的はお前や！ お前に、渡さなアカン物があんねん！』

「俺に…？」

戸惑う和樹に、サンタはまくしたてる。何故、自分がここに来たのか。何故、この仕事を受ける気になったのかという事を…

昔、世界にサンタクロースは一人しか居なかった。世界中を相棒のトナカイと飛び回り、プレゼントを配る。その仕事に誇りを持っていたし、やりがいもあった。何十何百という夜を越えて、サンタは夜空を駆け抜けていた。

そんなサンタが仕事をやめようと思ったきっかけが、実は芦原和樹だった。勿論、高齢からくる体力の衰えもあったが、何より和樹の事がサンタにはシヨックだったのだ。

サンタの袋は、その子供の欲しいものが出てくるようになっていく。しかし、ある日孤児院の一室で眠っていた和樹にプレゼントをあげようとした時。袋の中からは何も出て来なかったのだ。

それは、今までその仕事をしてきて初めての事だった。ありえないのだ、そんな事は。形だけ格好つけていらない素振りを見せてみせても、超合金のロボットを見ると目を輝かせる。それが、当たり前の子供というもの。何も出ないというのは、ありえない。

サンタには、プライドがあった。なんとしても、プレゼントを出してやる。こんなガキは、認めない！ 本来ならプレゼントは抽選で配る所だが、サンタはそれから毎年孤児院へ行って和樹へのプレゼントを出そうと試みた。

しかし、出なかった。



どうやっても、出なかった。

幾らなんでもこれはおかしい。そう思ったサンタは、他の神族に頼んで和樹がどんな人物か調べてもらった。そして、その生活がダイジェストでまとめられた映像を見た時。サンタは大きなショックを受けたのだ。

芦原和樹は、出生に関する記録が無い子供だった。孤児院に預けられた時期もよく分からないという不可思議な存在だったが、ハッキリしているのはその孤児院では古株にあたる少年だという事であった。

彼は物静かで、皆の優しいお兄さんという役割を担っていた。少しのんびりしている以外は優等生と言って良い子で、大人からの信頼も厚い人物。そんな彼を良くあらわしているエピソードが、クリスマスの話だった。

クリスマスパーティーでは、彼は当然のように楽しむ側ではなく、楽しませる側として活躍する。大人たちと相談してプレゼントを考えたり。どんなケーキを買ってあげたら喜ぶか。どんな本を読んであげたら喜んでくれるか、といった事を、和樹は真剣に考えていた。そこに年相応の子供の顔は無かったのだ。

彼には何故か、自分の為に何かをするという気持ちが無かった。誰かの為には動くけれど、自分の為には動かない。そんな歪な心を、当時の和樹は抱いていた。また、彼は極端に物を欲しがらない。大人から何かをもらっても、すぐに他の子供にあげてしまう。

クリスマスにもらったプラモデルも、他の子供が興味を示したらすぐに与えてしまった。部屋には何も無く、いつもカラッポだった。それは、もしかしたら求める事を恐れていたのかもしれない。サンタは、きつとこの子は大切な物を奪われた事があるのではないか、と思った。

サンタはいつしか、和樹にプレゼントを出してやりたくなくなった。しかし…結局その袋からプレゼントが出る時はこなかった。

ある年、孤児院へとやってきたサンタは、和樹が居ない事に気づく。ああ、誰かが引き取ったのか。ならあの空虚な少年も変わるだろう。結局、ワシは少年に何もしてやれなかったな…。サンタは誰も居ない部屋のベッドを見つめながら、そう感じていた。

心に深い虚無感を抱えたサンタは、高齢もあって仕事を続けられなくなっていた。その事を知った神界の最高指導者は、彼の後任を育てる機関を設立する。サンタはそこで数年教鞭を振るつた後に、引退した。

雪深い山の中、クリスマスの時期に夜空を駆ける若者たちを眺めながら、サンタはあの日プレゼントを渡せなかった少年の事を思い出していた。あのガキは今、どうしてるだろうか。あの空を飛んでいる若造どもは、もしワシと同じような体験をしたらどうなるんだろうな…。そんな事を考えながら飲む酒は、決まって少し塩辛かった。

そんな隠居生活を始めて数年たった頃。一本の電話がサンタの家にかかって来た。かけてきた人物は、芦優太郎。神界の最高指導者に連絡先を聞いて、電話をかけてきたという。

「悪いが、宅配を頼みたい。君に適任の仕事だ」

その偉そうな声を聞いた時、サンタは怒鳴り散らしてやるうかと思つた。何者かは分からないが、若造が…と。しかし、次に受話器から聞こえてきた名前にサンタは固まる。

「配達先は、芦原和樹のいる天矢神社。時刻はクリスマススイブの夕方から夜にかけてが妥当だろうな。流石にクリスマス当日にぶつければ本来の主役であるキリストに悪い」

「ちょ、ちよつと待った！ 今、何て言つた！？ 芦原、芦原和樹言つたか！」

「ああ、ターゲットは芦原和樹。住所はファックスで送つた。引退した所引つ張り出すのは悪いとは思つが、君が適任だと思つたのでね。報酬は奮発するから、是非成功させてくれ」

電話は、一方的に切れた。あまりに乱暴、あまりに偉そうな態度。しかし、サンタは引き受ける以外の選択肢を持たなかつた。あのガキが今どんな風に育っているか…気になつたのだ。まだ自分の為に生きられないようないけない好きなガキのままなら、説教の一つでもしてやるう。そう思つて、サンタはかつて一緒に働いた相棒に連絡をとつた。そして…

『今に至る、ちゅうわけや』

サンタが話し終わると、周囲の目は自然と和樹に集中する。和樹は、何だか恥ずかしくなっていた。

「なんか…子供の頃の話されると、恥ずかしいな。俺、そんな子供だったか？ 全然実感わかないんだが…」

しかし、令子と日陰は心当たりがあった。今日、買い物に行った時に和樹が言った言葉。

そりゃ何億円も無駄使いされたら泣くけど、『皆の為』なら俺もバリバリ働いて稼ぎまくるからさ。俺、『そのために生きてるんだ』

皆の為。そのために生きてる。

まず皆の為に、という優先順位は変わっていない。そして、そういった言葉を体現できる和樹は、知らず知らず本音を隠してしまいか。令子は、イツナになった自分がそうだったから、なおさら強くそう思っていた。

「和樹クンらしいわ。ちっとも変わってない」

「そうですよ。和樹さんはもっと自分を大切にしています」

二人が言うと、藤姫やユリ子も賛成する。あれえ、おかしいな。和樹が首をひねると、サンタは笑い出した。

『ひやはははは、気付かぬはオノレだけ、ちゅうやつやな！ まあ、周りにこんだけ分かっとなる連中があるならええやろ。ほな、ワシはワシの仕事をさせてもらおうか』

楽しそうに布団から起き上がったサンタは、おもむろに袋の中をガサゴソと探る。残念ながらこれはサンタの袋と違って普通の袋だ。中には、芦優太郎から預かったものが入っている。

それは、なんでも芦原和樹を幸せにしてしまう物らしい。

あの無欲なガキが幸せになるような物がこの世にあるとは思えないが、サンタもその荷物に興味があった。それを見つけると、和樹に手渡す。

『芦優太郎から、芦原和樹へ。しっかりと渡したで』

それは。

小さな、桐の箱。

和樹の胸が、震えた。

「え…あの、これ…」

戸惑う和樹。

令子も、涙を浮かべた。いや、令子だけではない。その存在を知ってる日陰、藤姫、公平…伝え聞いただけのユリ子も、信じられないという表情をする。

『よく分からんけどな、箱を開けるとええ事が起こるらしいわ』

和樹が、震える手で蓋を開ける。桐の木蓋を開けると、中には、あのホタルが。ルシオラの霊基体である、ホタルが完全な状態でそこにあった。そして、その姿があらわれた途端…。

空が、世界が、輝き出す。

「な、なんだ!？」

「和樹クン、これ、コスモプロセッサーの光よ! 世界が改変されてる!」

それはあの悲しい世界から放たれた光だった。再び巡り会えた二人という結果を固定化させた、世界改変の光。その輝きは、優しい暖かさで和樹たちを包み込む。

そして。

和樹は、光の中で小さな羽音を聞いたような気がした。

その羽音はやがて懐かしい彼女の声に変わる。あの日、自分を励ましてくれた時と変わらない声で。和樹の名前を呼んだ。その声に振り向く和樹。

そこには、鏡の中でしか会えなかった人が立っていた。

「ルシオラ…！」 「ヨコシマ…！」

駆け寄る和樹。ルシオラは涙を浮かべ、和樹に抱きついた。それはまるで、あの悲しい世界で再会した二人。互いに抱きしめ合い、熱いキスを交わすのだった。

サンタが神社を後にしたのは、泣きじゃくる二人が何とか落ち着いていた頃だった。サンタは、「あの小生意気なガキが泣くのが見られて最高の気分や」とスッキリした顔で帰っていった。

「あのジジイ、今度来たら一発殴ってやる」

「怖い事言わないの。せつかくのクリスマスなんだから、和やかに行かなきゃ」

ルシオラが和樹をたしなめると、和樹は「そうだな」と表情を緩める。今の和樹は、ルシオラの言う事なら何でも聞いてしまいそうである。

ルシオラは、当然和樹の中にいた時の記憶を持っている。だから美神令子の事も日陰の事も、全て知っていた。

「ルシオラ……」

「いいのよ、美神さん。いや、今はイヅナかしら。私の事、ずっと思ってくれてありがとう」

既にボロボロ泣いた後で真っ赤に目を腫らした令子。そんな令子を、ルシオラは優しく抱きしめた。

そんな光景を眺めながら、公平は和樹の肩をつつく。不思議そうな顔をした和樹。公平は和樹に耳打ちをした。

和樹の顔が、俄かに輝き出す。なんだ、これも芦優太郎とグルだったのか。けど、演出としては最高かもしれない。和樹は喜んでルシオラを呼んだ。

「ルシオラ、俺たちクリスマスパーティーする予定だったんだ。向こうにケーキがあるから、行こう」

「え……ああ、それくらい知ってるわよ。さっきのキスで、あなたの私の記憶とも結びついたし」

ルシオラは知らない。それは公平の仕掛けを知る前の記憶だ。いから、と和樹に促されてルシオラは居間へと歩いて行く。令子た



ちも、それに続いた。

居間は既にクリスマスの飾り付けも終わっていて、とっくに食事の準備も済んでいた。酒まで用意してある。親父め、あれも芝居かと少し腹が立ったが、我慢する。

皆が席につくと、公平と和樹はケーキの入った箱に手をかける。ゆっくりと箱を開けると、3つのケーキには、チョコレートでそれぞれメッセージが書かれてあった。

『ルシオラさん』

『お誕生日』

『おめでとつー!』

「え…:?」

思わず目を疑う。

理解出来なくて、和樹を見る。和樹は笑って、ルシオラに言った。

「誕生日、おめでとつ。今日が、この世界でのルシオラの誕生日だ」  
「や」

和樹の言葉に、令子たちも続ける。

「おめでとつ、ルシオラ」

「おめでとつございます、ルシオラさん!」

「まったく、よくこんな事思いつくもんだよ…おめでとつ、ルシオラ」

「おめでとつございます愛してます!」

なんか変なセリフがあったけど、気にしない。

ルシオラは皆の拍手の中、「さっき散々泣いたのに〜！」とまた涙を流した。そして和樹が立てた、一本のロウソクに灯された火を、しゃくりあげながら何とか吹き消す。

それは、ルシオラの誕生日のしるしであると同時に。

和樹たちが紡いでゆく幸せの物語…その始まりを告げる息吹となった。

??? 予言者のはなし

ヨーロッパのとある国に、その男は幽閉されている。強固に靈的封印のなされた牢獄で、男はその病的な眼差しを暗闇へと向けていた。

もうすぐだ。

もうすぐ、解き放たれる。

カツツ…カツツ…、と石階段に乾いた靴音が鳴り響くと、男はニヤリと笑みを漏らした。靴音の主は牢の前で止まると、冷たい声で男に話しかける。

「失望したよ。貴様を信用した我々が愚かだった。貴様を殺す手段を見つけた時に、すぐさま殺すべきだったな」

男は、答えない。ただ、衰弱した様子で中空を見つめていた。

「もはや魔力も残っていない残りカスか…。貴様には、我々を欺いた罪で死んでもらう。残り少ない時間を、有益に過ごしたまえ。処刑は、明日だ」

ヒュー、ヒュー、と喉を鳴らす男。それを汚らしい物を見るかのように一瞥すると、靴音の主は去って行く。男は、それを確認すると落ちくぼんだ瞳をギラつかせた。

男の名は、ラプラス。

完全なる予言者と呼ばれた悪魔である。

ギリシャ神話において有名であるパンドラの箱。その中からはありとあらゆる災厄が飛び出したという。その中でも、一つだけ外に出るのを防げた物があった。

それが、前知魔ラプラス。全てを予見し、人々から希望を奪うとされた悪魔だった。この国の宗教的な権力者は苦心の末ラプラスを結界で縛り付ける事に成功し、予言によってその権威を維持する事が出来ていた。

しかし。

ラプラスの予言は、近年になり悉く外れる事となった。香港における大霊障も、日本における魔神の暴走も。その気配すら感じさせず、予言は外れ続けた。権威は失墜し、国益は損なわれる。権力者達はラプラスに力が無くなったと判断し、失政の責任を死刑という形で取らせようとしたのだ。

ラプラスは、ここには居ない誰かに語りかけた。

「これが、君の意思なのかね。ならば、踊らされるのも面白そうだ」

そう言うと、ラプラスは目蓋を閉じて微笑んだ。そのつぶやきは、誰にも聞かれる事なく。闇の中へと消えて行った。

翌日。

イタリアの田舎町に奇妙な風体の男が現れる。コートの際を立て、つばの広い帽子を深々と被った男は、公園のベンチで売店で買った新聞を広げた。

そこには、珍しい記事など何一つ無い。

世界最悪の前知魔が脱獄したなどとは、何処にも書いてはいなかった。なるほど、あの権力者たちはよほど自分たちの落ち度を隠したいらしい。秘密主義を貫き通してくればこちらも動きやすいので、そこは歓迎すべき所だった。

こうして、数百年ぶりの自由を謳歌しているのも、大きな歴史の中の一部なのだろうか。男はそんな事を考えながら、新聞を閉じる。遠くで、誰かが撃鉄を起こす音が聞こえた。

それから数年間、一部業界において前知魔ラプラスの失踪事件は大きな関心を向けられ続けたが、その行方を突き止められた者は一人として居なかった。目撃情報も何も無く、某国の狂言ではないかという者さえ現れる始末であった。

そんな騒ぎが静まり始めてきた頃。ある港町の飲み屋にコートの男が現れるようになった。

カラン、カラン、とドアベルを鳴らして男が現れると、マスターは苦笑いを浮かべる。

「よう飲んだくれ。今日はまたツケか？」

「残念ながら、ツケで頼むよ。お代はホラ話か歌で払ってもいいが」

男のホラ話は、この近所では面白いと評判だった。マスターは、周囲の客の顔を見る。皆、ホラ話を御所望のようだった。

「ホラ話で、頼む。とびきり、愉快的やつをな」

グラスになみなみと注がれたウイスキーをカウンターに置くマスター。男は満足そうな笑みを浮かべると、語り出した。

では、悪しき運命を切り裂いた一人の男の話をしようか。

その男の名は、横島忠夫。とある世界で魔族に恋をし、神に愛され、妖を守り、人に語り継がれた英雄の話だ。



??? 予言者のはなし（後書き）

GS和樹極楽大作戦！、最後までお付き合い頂いた方、ありがとうございます。乱筆乱文超展開に戸惑った方、申し訳ありません。私の実力では、これが精一杯でした。

本作は、横島忠夫の魂を癒やし、美神令子を救う事を目的として作られました。出だしと結末を先に考え、途中をかなりアドリブを交えて書いた感じですよ。

作品の性質上、どうしてもルシオラの出番が少なくなってしまいました。たが、それは続編を書く時に増やす予定です。GS和樹は本作で本編を終了しますが、アフターストーリーとして新しい話を書いて行きたいと思っています。美神令子、ルシオラという欠けていたピースが埋まりましたから、以前よりも色んな話が書けるんじゃないかと。本編で書けなかった話も、結構ありますからね。

とりあえず、GS和樹はこれで一旦お終いとなります。いつかまた、新章でお会いしましょう。それでは。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2981t/>

---

GS和樹極楽大作戦!!

2011年10月2日22時35分発行